THE KAIZO

改造

七月号

1924


文化の促進に
活動の武器に
第一番の……
プラトン萬年筆
一番書きよい
プラトン
萬年筆


眉目清秀
クラブタルカン
クラブゼリー
クラブ洗粉
カテイ石鹸
クラブ石鹸
紳士の
最新の科學
優秀の技術
歯の爲に一番よい
チユーブ入
クラブ煉歯磨
朝と食后に
品質優良のクラブ歯磨をお用ゐになれば歯は強く美しく歯痛を未發に防ぐことが出來ます
クラブ歯磨



改造 七月號 目次

加藤内閣と護憲三派の前途



改造 七月號 目次



新人に喜ばれる
ビール中のビール
サクラビール
清涼飲料
ミヨシノサイダー
ミヨシノレモン
帝國麥酒株式會社


新人に喜ばれる
ビール中のビール
サクラビール
清涼飲料
ミヨシノサイダー
ミヨシノレモン
帝國麥酒株式會社

經濟學博士 本庄榮治郎著

日本社會史

定價貳圓五拾錢 送料廿一錢 菊判上製

第拾七版

今までの日本の歷史は、それが總て戰爭の歷史であり、政治の歷史であり、そして忠臣傳であつた。そして日本の庶民社會の發達について說いた歷史は一つもない。これ單に現在までの歷史家が戰爭とか、偉人とか、政治、外交以外の頭腦のなかつた結果だ。カーライルは「歷史は英雄の傳記だ」といつたが、我國の歷史家も彼一流の間違つた考の持主であつた。

茲に於て社會問題の歷史を必要とする。我京大教授本庄博士は我國の上古の氏族制度の社會、半自由民、非自由の爭鬪、大化改新、奈良朝時代の奴隸制度的勞働組織、班田制度、平安朝の貴族制度、土地兼併の問題鎌倉時代の五階級の間に起れる土地問題、德政問題室町時代の土一揆、德川時代の封建制、九階級の軋轢、米價調節等を詳細に說述し、上古より現代までの社會組織、社會階級、社會問題を闡明し、分析し、批判した。

本書は我國の社會史として始めての著書だけに多大の期待をかけられている。我々は本書に依りて我國の歷史の缺陷が補正さるると共に、我々「庶民階級の歷史」の誕生されたことを喜ばずにはおられぬ。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

十一版

吉田絃二郎著

芭蕉

四六判上製

定價壹圓六拾錢

送料十七錢

俳聖芭蕉の晩年を流れた思想は何故もつと人間らしき生涯を送らなかつたかの悔恨の涙であつた。吉田氏はその風格にあこがれて彼が臨終の胸を掠めた淋しき人生観に筆を及ぼし、そしてその弟子「路通」を配して傾向的に二人のニヒリストを描く、芭蕉研究の盛なる今日、先づ第一に奬めたきは氏が感激にあふれた本書である。「芭蕉」篇以外氏の近作中の特に秀れたる數篇を附す。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

谷崎潤一郎作

戯曲 愛なき人々

（四六判 上製）

定價貳圓 書留送料拾七錢

卅五版

幽谷に白蘭を見る氣高かさ、天上の星と語る神祕さ、美はしさは此作者獨歩の境地であり、そして人間の底ひも知れぬ惡魔的愛慾を自由に解剖する氏の藝術力の絶大なるは古今比儔すべきものがない、我々の心の奥に潜む煩惱、憤怒、悲嘆を無造作に引きずり出して暗に漾ふ宿命の情緒に涙をそゝらし、對角、三角、四角の戀愛をも曇りなき名刀にてグン〳〵解決して行く冴えは讀者をして一種の恐れをさへ抱かしむ、明治大正は云ふも更なり、我國の古今を通じ、世界の各國を通じて氏の如く惡魔的精神に徹するものありや、谷崎氏を通じて不朽の藝術力を味へ、そして唯美的精神の琴線に觸れよ。本書は「愛すればこそ」の姉妹篇であります。

谷崎潤一郎著

愛すればこそ

（百版）

定價壹圓六十錢 送料十五錢

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

阿部次郎著

北郊雜記

◆定價壹圓九拾錢　菊半截◆
◆送料十五錢　天金美本◆

十五版

著者が折にふれ、感興に應じて執筆した水晶の如き透徹した氣品ある評論と隨筆だ。氏が論壇に於て第一人者なるが如くそのスッキリした文章を通して氏の人格主義乃至藝術觀、人生觀を知ることの出來る高雅な隨筆だ。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

野口源三郎著

オリンピアの旅

定價貳圓五拾錢　送料十九錢　四六判上製

新刊發賣

あらゆる事が競爭そのものとも云ふべき現代社會に於て、苟くも優勝者たらむとするものが其の心膽を練るに、近代的競技ほど好適のものはない、國際競技が年と共に盛になり、文明國民の凡てが各優秀な選手を之に送る事に熱中するも無理はない。實に現代の競技は單なる體育ではない、新しい紳士道――現代的武士道は之に依つて修業され、オリンピアは此の紳士道を發輝する場所である。

著者野口氏はオリンピック大會の出場選手であつて、日本出發より英米を經て歸還する迄の彼の旅行記が本書である。流麗達意の文、能く、接觸する風景、人物を活寫してある。新時代の青年紳士に此の一書をお薦めする。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

山本有三著

嬰兒殺し

定價貳圓
送料十七錢

第七版

天才戯曲家として一作を出すことに讀者の血を躍らし、そしてその核心をシカと把握して離さないのは山本氏の戯曲である。氏の人生へ對する愛着、舞臺に對する細緻の觀察は篇中の何人をも躍らし泣かさずにはおかない、此書に收められたる五篇の總てが、均しく東都で歡迎せられそして舞臺の上では幾萬の人を泣かしめた傑作のみであることは呶々するまでもない「嬰兒殺し」の含蓄多き殺人婦に對する熱情、「坂崎出羽守」「津村敎授」「生命の冠」に用ひられた忍從の辛さと困難にはいかなる男兒でも涙ならでは讀むことができない。（本書は山本有三戯曲集の改題せしものです。）

内容

- 津村敎授
- 嬰兒殺し
- 生命の冠
- 女親
- 坂崎出羽守

發行所 東京市芝區愛宕下町一ノ一 振替東京八四〇二一番 改造社

中澤臨川著

嵐の前

（改造社隨筆叢書第四編）

若き日に襲はれた烈しい病苦と痛はしい懊惱——ニイチエは、全く絕々なる心を抱いて、遁れるやうにエンガデンの園にさまよひ來た。彼はこゝで淋しい孤獨を抱き占めながら長閑な沈靜の月日を送つた、エンガデンの園は彼になつかしい一人の女性を與へた。夜の褥の上に戀に悶ゆるニイチエの姿は恰も小兒の樣であつた。併しこの熱烈な戀も遂に空しいものであつた。唯一の戀を失ひ、過去の行路に無上の哀傷を感じた彼は、あらゆる人間苦をなめ盡すことによつて遂に寂光を見出した「永遠輪廻」これが彼の人生觀であつた。彼は悲壯な驗者として新しい道にまつしぐらに進んだ。——こうした見かたで書かれた中澤君の小說——嵐の前——其はちやうどニイチエのそれの如く病苦の痛はしい懊惱から解放されぬ——血を吐くやうな絕望の記錄であつた。……

東京芝　改造社　振替東京八四〇二
定價壹圓廿錢　送料二十錢

近世名匠列傳

村松梢風著

定價貳圓參拾錢
送料十七錢
四六判上製

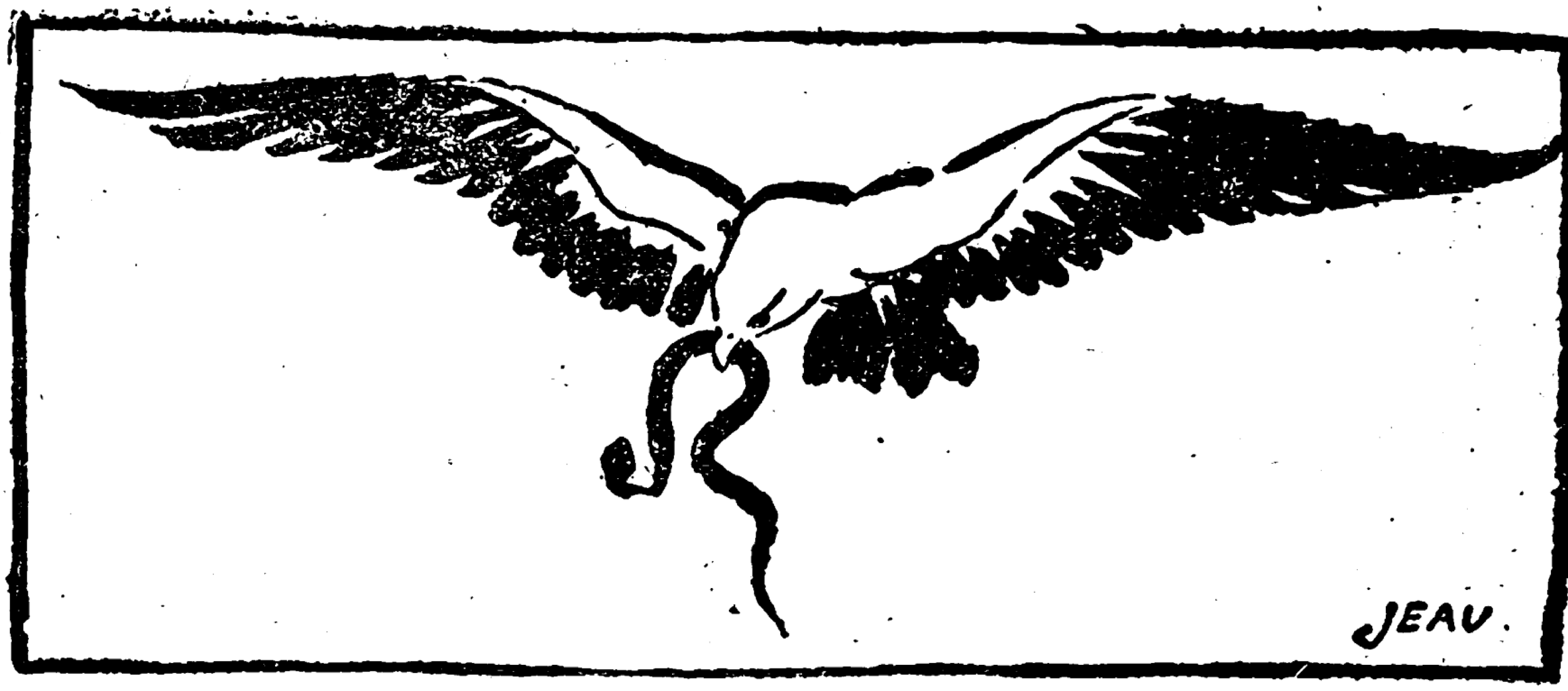
第五版

本書は明治年代の美術界各方面に活躍して最も傑出せる十名家の詳傳である。其の一部が中央公論に連載され讀書界に空前の好評を捲き起したることは世人の記憶に新たなるべし。今や著者は新たに追加補筆をなし合本して上梓することゝなれり。列傳中の人物は、柴田是眞、島村俊明、狩野芳崖、橋本雅邦、木内喜八、竹内久一、森寛齋、旭玉山、田崎草雲、海野勝珉の十大家、畫家あり、彫刻家あり、彫金家あり、細工人あり、之れ何れも當代美術界の粹を抜きたる名家にして、其の多くは未だ完全なる傳記を有せざる人々である。著者數年來爰に着眼し、殆んど寢食を忘れて材料蒐集に努力し爰に始めて本書は生れたのである。著者は物語作家として文壇及び社會に定評ある人、材料正確、興味豐かにして而も藝術的匂ひの高き筆致は、忽ち人を魅了し、天才藝術家の性格及び生涯を寫し得て遺憾が無い、世の美術研究家は論を俟たず、美術の愛好者たると否とを問はず、社會の各方面の人々に推奬すべき名著である。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二



（七月號）

加藤内閣存立の意義

我々は議會政治を否認するものではない。輿論のある所に飽くまで聽從するのが立憲政治の要諦だと信ずるから。此意味に於て所謂護憲内閣の成立は清浦内閣の存立意義に一歩を進めたものである。加之、その三派を曲なりにも代表したりと云ふ意味からしても、現在まで存立せし何れの内閣よりも、より多く民衆的、國民的、立憲的であると稱してよかろう。しかし一面から見れば加藤内閣ほど資本主義的色彩の鮮かな政府は前にもなかつた今は將にブルジョア全盛の時なのだ。

國民の大多數は又彼等の政策に共鳴すると云ふより永年野黨として苦節を持續せし點に同情し、そして高橋、犬養兩君が平大臣として後進たる加藤君の下に就いたことを賞讃措かない。我々はそうしたことより新内閣の政策、主張がどれだけ我全民衆に利福を與へ、そして其提唱する財行兩政整理がどれ程、國民的關渉を持つかを見んとするものだ。新藏相は國民の尊敬厚き人物なりとするも、其人は社會政策的財政策と、社會主義財政策との區別も判然しない人なりと稱さる。その人が時代の要求する整理の斷行が出來るか、そして整理の眼目たる軍閥の陣營に眞甲から斬込んで豫算に斧鉞を下し得るか。次に加藤君の女房役若槻君は、既に實施するばかりに進行したる普選案を、今回の臨時議會に提出する事なしと斷言したのは沙汰の限りだ。内閣の精鋭たる兩君にしてかくの如くであつて見れば、爾餘の加藤、高橋、犬養の如き頽然たる老人輩は云はずもがな。而して加藤君は近時世界に膨湃せる社會思想と、社會主義經濟學には一片の諒解もないと聞く。其人が——思想的に、現代世界經濟學に、既に落伍者たる其人が——社會主義國家、共産國家たる獨、露及英國等の政治家、財政家と胸襟を披き、親交の友邦として相提携して行けるかは大なる疑問だ。世人は加藤内閣が無條件樺太撤兵を宣言したるに見て日露親善は加藤内閣の專賣たるかの觀を懷くも、我々は加藤君の平常の言動、思想よりしかく無造作に信ずることが出來ない。そして加藤内閣によりて、我國際的經濟地位の回復さるべきを說くものもあるが、我々は此事も又左樣に輕々にうまく行かないであろうことを危惧する。

我々は加藤内閣が速に臨時議會に普選案を提出する事を要求 。そして行政、財政整理を徹底的に斷行することを併せて要求する。（整理さるる對象は軍備費首位にあり）日露國交回復を即刻斷行するやうに警告する。これも、あれも或は軍閥に氣兼ねし、上院、樞府に氣兼ねして躊躇決するなくんば世を擧げて三菱特權内閣と嗤笑するだらう。そして無産階級の感情は日に日に惡化して加藤内閣を正面の敵陣と見做すであろう。政友本黨は鳴らぬ陣太鼓を打叩きつつ農民のために金權黨と決戰すると云ふであろう。



社會主義は闇に面するか光に面するか

河上博士著『資本主義經濟學の史的發展』に關する一感想

櫛田民藏

一、唯物史觀と經濟學史との關係に關する一疑問
二、明示せられたる博士の立脚點
三、留保せられたる博士の立脚點及びアダム、スミス
四、博士の觀たるマルサス、リカルドと私の觀たるマルサス、リカルド
五、博士の觀たるジョン・ミルと私の觀たるジョン・ミル

（一）經濟學史と唯物史觀との關係に就いての一疑問

マルクスの唯物史觀の公式にはいろ〳〵な疑問があり得る。

一般に知られて居るやうに、公式の文句の中には、社會が一定の發達を遂げると、その社會の發達を促す動力であつた生産力と財産關係とが矛盾するやうになる。そこで時代は所謂社會革命の時代なるものに入る。經濟上の基礎の變動に伴ふて、法律上乃至政治上の所謂上層建築なるものが急激にか又は除々にか變革する。『かやうな變革を觀察する場合には、常に、かの物質的に自然科學的に忠實に確定せらるべき經濟的生産條件に於ける變革と人類がこの矛盾を意識するに至り、そしてそれを排擊せんとするところの、かの法律的、政治的、宗教的、藝術的又は哲學的、要するに觀念的な形態（ideologische Formen）とを區別しなければならない』云々とある。

こゝにマルクスは『觀念的な形態』として、法律的、政治的、宗教的、藝術的又は哲學的と云ふやうにその一々の意識の形態を列記して居るが、經濟的の意識形態は、その內に數へられてゐない。然るに、同じ公式の中には、『これ等の生産關係の總體は、法律的及び政治的の上建築が據つて立つところの、そして、一定の社會的意識の形態がそれに順應するところ、現實の土臺たる社會の經濟的構造を形成する』とあり、この『社會的意識の形態』の中には、經濟思想も、宗教や哲學や法律や政治やの諸思想と同じやうに含まるゝものと見なければならぬ。して見れば、公式の先き舉げた箇所に於て、マルクスは一々の意識形態を列記しながら、何の理由で經濟思想だけを數へないであらうか。かの『觀念

形態』と區別せらるべき『物質的に自然科學的に忠實に確定せらるべき生産條件の變革』に關するものは、一定の經濟事實を意味し、經濟思想そのものを意味しない。或は政治思想の中に經濟思想もこめられて居るかと云ふにそうとは思はれない。又無論忘れたわけではあるまい。

マルクスは、同じ公式の序言的な部分に於て、法律關係や國家形態やは、それ自身からも亦た『人類精神の一般的發達』（哲學上の概念と解して差支あるまい）からも解すべきでなく、むしろ『物質的生活關係』所謂『市民社會』に根據を求むべきであり、市民社會の解剖は、『經濟學』に求めなければならないと云つて居る。こゝに『經濟學』と云ふのは恐らくは廣い意味であり、經濟史質の研究である經濟史及びその史質の分析綜合から得らるべき諸種の經濟的範疇及び諸法則の科學的知識としての經濟學説を併せ含むものであらう。そしてこの經濟學説、即ち價値や價格や貨幣や資本や勞賃や利子や地代やの如き經濟的範疇及びそれ等の間に於ける經濟上の法則問題は、これ等の法則に基く一定の經濟政策と共に、經濟意識の形態を形成するものである。して見れば、今この史觀が、資本家社會の解剖は經濟學に求めなければならぬと云ふとき、それは、一定の經濟關係に於ける史質の研究ばかりでなく、その經濟關係の下に於ける一定の經濟的意識の形態としての經濟法則乃至經濟原理の研究、從つて資本家の經濟學ばかりでなく、無産者の立場よりするそれ等に對する批評をも意味することになる。して見れば一時代の經濟思想と云ふものは、資本家の立場からであると、無産者の立場からであるとに論なくこの史觀に於ては、他の觀念形態に比して、特殊な地位を占むるものと見なければならぬ。意識の形態から社會現象を理解することを否認する唯物史觀は、何故に、同じく意識の形態である經濟思想に對して獨り特殊な地位を與ふるものであろうか。」元來この史觀に於ては、一定の理由に依つて生産力の發展を社會發

展の究局の動因として注目するか、それと同時にその生產力の發展より之と密接に關係する經濟關係を通じて必然に發生する階級鬪爭の事實に注目する。所謂歷史は階級鬪爭の歷史であり、歷史の各時代に於けるそれ〴〵の意識の形態は、一定の階級意識の現はれとして說明せられる。然るに、今、經濟思想なるものは、階級意識の現はれとしての意識の諸形態の中に社會發展の究局の動因である生產力そのものと密接不離の關係にある經濟關係そのものを對象とするものであつて、かの階級意識は、この意識の一形態としての經濟思想に於て最も具體的であり、且つ最も容易に看視することが出來ると云へやう。價値や貨幣や資本や物價や勞賃や地代やの諸概念の中から、資本家時代の階級的意識を見出すことは、同じ時代に於ける神や道德的原理や哲學上の諸概念の中から、階級意識を見出すよりも一層的確であり、又それ等の高尙なる意識の形態の解剖に到達する必然の順序でもあらう。概して哲學や道德や國家や法律やの形態の基礎を經濟關係そのものに求めんとするこの史觀に於ては、この關係を對象とする意識の形態を明かにすることは、自然諸他の意識の形態を明かにする所以とも考へられ、一時代の經濟意識の釋明はその時代の生產關係そのもの丶釋明と相俟つて、その時代の全社會の理解の基本だと云へやう。これ經濟思想が經濟事實に次ぎ、他の觀念形態に對し、この史觀の上に特殊な地位を占むる所以であらうと思ふ。

　然るに今、かの經濟學說史又は經濟學史なるものは、この史觀の上に於て、經濟史實と共に、特殊な地位を占むるところの經濟意識形態の發展の歷史であるから、この史觀の立場からは極めて重要な問題となる。この史觀の創說者マルクスが、社會意識の各種の形態の中で、特に經濟學及び經濟學の批評に主力を注ぎ、又各種の社會現象の中で特に經濟事實の探究に力を傾倒したのは、そして、屢々經濟學者であるスミスやリカルドを以て、その時代の『偉大なる歷史家』と呼んで居るのは、恐らくこの故であり、或る意味で彼の學問的努力の大半は、從來の歷史と哲學と云ふものを經濟史

と經濟學に置き替ゆるにあつたと云つてもよい。併しその置き替へやうと云ふのは、結局之に依つて階級關係及階級鬪爭の事實が明かになり、國家社會及びその他の意識形態の變化が最も明かにせらるゝと信じたためでなければならぬ。それ故、この見地の下に於ては經濟史は、その職分として、生產關係並にそれより必然に發生する階級鬪爭の史實を明かにするものであると共に、經濟學史は、事實としての思想そのものゝ內容の探究以外、更に進んで論理的にも亦た歷史的にもそれが階級意識の表現としての發展を研究するものであると云ふやうなことになるであらう。從つて經濟の學史は通常云はるゝやうに、經濟史實と照應して始めて理解せらるべきものであるは勿論、常に、各時代の階級鬪爭の事實を前提して說明せらるゝか、又はそれ〳〵の學說に於ける主要な範疇や法則やの理論的分析から一定の階級鬪爭の反射としての階級意識の存在を見出すことに依つて、如何にそれ等の學說がその時代の階級意識の表はれであり又それの發展であるかを明かにすべきものゝやうに思ふ。

かく云へば、學問の神聖を侮辱したことのやうにきこゆるが、この史觀の立場に於ては、歷史の凡ての時代に通ずる學問と云ふやうなものは無いのであり、又歷史の一定の時代に於ては階級の利害に超然たる學問と云ふものは無いのであり、かの『人類の經濟學』など云ふものも無ければ、かの『精密科學としての經濟學』と云つたものは勿論問題にならないのである。あるものは、經濟學に就いて云へば、歷史の一定の一時代一定の社會に於ける階級意識の表現としての經濟學であり、經濟原論など云ふても、それは、高々一定の時代に於ける經濟史實の法則に過ぎないのである。そして一の時代の階級意識の表現としての經濟學は、其時代其社會の產みの母であり、之に必然先行する他の時代の他の社會の階級意識の批評として同じ社會に生れたものであり又同じやうに、その一定の社會からは、新たな階級の發生と共に、一定の支配的な經濟學に對する批評として新たな學問が生れるのであるから、經濟學の歷史は、對抗的規定に於け

る批評の連續に過ぎぬことになる。マルクスが、その著を名づけて、『資本別名經濟學批評』と云ひ、永久經濟學を信ずる資本家學者の如く經濟原論などと云はなかつたのは、その立脚地を明白にするものである。即ち、彼の經濟學は、資本家時代と云ふ歴史の特定な時代の經濟を研究するものであると云ふ意味に於て、その時代の最も主要な意識形態の範疇を採つて『資本』と云ひ、又彼の立場はこの社會に於て必然に發生する無産者階級の立場（全人類ではない）に立つが故に、支配者階級の意識形態としての從來の經濟學に對しては當然その批評になると云ふ意味で『經濟學批評』と云つたものと思はれる。

以上は、更に問題として考ふべき餘地が甚だ多いのであるが、とも角、唯物史觀の上に於て經濟學史と云ふものが經濟史と共に重要な地位を占むることは疑ないのである。

（二）明示せられたる博士の立脚點

上に述べたやうな意味に於て、我國近時の經濟學界が、スミスの記念研究と云ひ、古典經濟學說の出版と云ひ、其他各種の方面に於て、經濟學說の飜譯又は紹介に力を注ぐに至つた傾向のあることは、經濟事實の探究と相俟つて、社會生活の物質的の、眞實の歴史を明かにするものであつて、かの觀念的形態の思想の歴史を以て滿足する傾向に比しては、遙かに重要な意味を有つて居る。そして、この點に於て、就中我國の社會科學の進歩の上に一つの大きな貢献をなしつゝあるものは、かの河上博士の名著『資本主義經濟學の史的發展』である。

この書が出版せられてから約十ケ月を閲して居るが、新聞紙の短評以外には、批評らしき批評もなく、紹介らしき紹介もきかぬ。全篇六百二十五頁に渉る尨然たる大册であり、經濟學史專攻の博士が長年月に渉つた研究の成果であり、

恐らくは博士の主著として數ふべきものであらうから、之が批評は必ずしも容易ではない。併し歷史の唯物史觀を把持せんとするものに取りては、經濟學の歷史は經濟の歷史と共に、人間社會の現實の歷史であるから、經濟學を學ぶものと否とを問はず、注目すべき問題であり、之を無視することは出來ない。しかも、著者は、唯物史觀の把持者であり、又社會主義研究の權威であり、從つて、この著者に依つて、經濟學の歷史が如何やうに取扱はれて居るか云ふことは、永がく著者に學び、著者その人を知つて居る私一個人の興味ばかりでなく、この方面に志す人々が一般に注目すべき問題であらうとも考へられる。そして、一切の六づかしい問題を、恐く平易に取扱ふと云ふ點に於て、特殊の技能を有する著者の著述は、それが何程大冊であつても、要點を把捉せしむるために讀者に困難を感ぜしむるやうなことは少しもない。まして他の何人の著述よりも、著者の書に親んで來た私にとりては、著者の書を讀むことは、常に愉快な仕事の一つである。

博士の書を讀むものは、誰にも判かるやうに、必ず博士自身の立脚點なるものが明示されて居る。こゝに問題とする博士の經濟學史も亦たさうである。博士はこゝで資本主義の經濟學の歷史を取扱つて居るのであるから、博士は、その問題の對象たる資本主義經濟學と云ふのは、何であるかと云ふこと、即ち著者自身がそれを何と解しつゝあるかと云ふことを明かにする必要がある。博士のこの書を讀むものに取りて、博士のこの見解を知つて置くことは、全篇を理解するために甚だ必要な點である。この點に關し博士は云ふ。

「資本主義の經濟組織は、個人主義の經濟組織が特殊の發展を遂げた一つの歷史的形態であるが、その個人主義的組織の根本特徵は、社會がその成員の物質的生活に對して責任を負はず、それについては、各成員をして自から責に任ぜしむる點にある。だから、個人主義の社會組織の下ではその道德原理の上で當然利己主義が是認せられ、社會全體の繁榮

は、その成員が各々自己の利益を計ると云ふ前提の下に始めて成し遂げ得るものだとされるのである。(中略)このことは當然に資本主義經濟學の上に反射して、利己的活動是認の理論を生む。即ち各個人が經濟上に於て遺憾なく自己の利益を追求すれば、その事は期せずして社會全體の經濟的繁榮を齎らすに至るものであると云ふこと、そのことをば理論的に說明することが資本主義經濟學の主たる任務の一つなのである』(頁一三四――一三五)。

この文句は、この書の全篇を通じて必要に應じ到るところに繰り返されてあり、或る意味で著者はそのことの立證のために全篇を擧げて居ると云つても過言ではなく少なくとも、著者はこの思想の歷史的展開の事實を示すために主力を擧げて居るのである。それ故に、私は、著者がこの文句の中で、先づ如何なることを吾人に示すつもりであるかと云ふことを考へて見ると、第一には、個人主義の經濟組織と云ふのは、其の組織を形成する各個人の物質的生活を各個人の責任に一任することがその特徵だと云ふこと、第二は、資本主義の經濟組織は、この個人主義の經濟組織が特殊な發展を遂げた歷史的一形態だと云ふこと、第三は、かやうな個人主義乃至資本主義經濟組織の下では、必然に個人の利己心是認の道德が發生すると云ふこと、第四、この道德原理は、必ずや社會意識の一形態としての經濟學そのものに反射して利己心是認の道德を經濟現象說明の根本原理とし又はこれを前提とする經濟政策論を產むに至るものであると云ふことである。

第一の點はしばらくあと廻しにし、第二の點で博士は問題の資本主義的經濟組織なるものは、一定の點で之と共通の原理の下に立つところの個人主義經濟制度の特殊な進化の形態であると云ふのであるが、それは資本主義の社會は、資本主義以前に於ける個人主義制度と生產手段の私有と云ふ點に於て共通點を有するが、後者に於ては、各人の勞働が自己の勞働であつたに反し、前者に於ては、それが他人の勞働となり、少なくとも、社會の一定の人々が賃勞働者であると

云ふ事實を意味するものと解して差支あるまい。從つて博士は、この點に於て、歷史の一定の時代に比較的一般的なものと、其の特殊なものを一定の見地に於て明かに區別しつゝあるものであつて、博士は唯物史觀の方法論を把持して居る。第三の點に於て、博士は資本主義の經濟組織は必ずや利己心是認の道德原理を産むと云ふのであるが、これには少しく疑がある。と云ふのは、利己心是認の思想は、各人の勞働が自個の勞働であり、勞働が賃勞働でない社會に於ても産れる。事實上、此の思想は、利己心非認の思想が支配的であり、一部の勞働が君主や領主の奴隷的勞働であつた時代から必然にそれの反對として生れて居る。併し、博士の意は、それが單純な思想としてでなく、一定の哲學的又は道德的原理となるものは、個主義の經濟組織が一定の發達を遂げた後のことで、即ち勞働が賃勞働であるところの資本家支的配の時代に於てであると云ふ意味であらう。そして博士に從へば、この道德原理は、經濟組織の必然から發生するものだと云ふのであるから、又博士は資本家的經濟組織は、個人制度の特殊な發展形態として階級的支配を特色とすることを否認するものであるまいから、その所謂道德原理なるものが、假令それが階級關係に超然たる形に於て組立られてあつても、それが一定の階級道德であると云ふことを否認するものであるまいと思ふ。かく解する時、博士がこの點に就いて言ふところは、一定の經濟組織は、必ずや之に順應する一定の意識の形態を産むものであり、人間の意識が人間の存在を定むるものでなく、反對に人間の存在は、人間の意識を定むと云ふ唯物史觀の公式の特殊な適用を示したものと見ることが出來る。以上二つの點から考へて見ると、博士は、この書に於て、唯物史觀の見地を把持して經濟思想の發展を考察して居るものであると考へられる。

(三) 留保せられたる博士の立脚點及びアダム・スミス

ところが、第三の點に於て、博士は、資本主義經濟組織の下に於て必然に發生する利己是認の道德原理は、經濟學（原理と政策論とを併せ含むものと見る）に反射してそれの指道原理となると云ふのである。それ故に博士に從へば、資本主義の經濟學は、一つの道德原理の下に立つものであり、廣い意味に於ける道德論の一部であるかの如くである。さればこそ博士には、經濟學の發展については、經濟事實は、むしろ間接の背景であり、直接の問題としては、その時代の道德論、若しくは哲學論と云ふものが著しく重大な問題となつて來る。さればこそ博士は、この著に於て、資本主義經濟學の思想的背景として、ロックやヒユウムやベンタムやの道德論や哲學論を事こまかに述べなければならない。さればこそ、アダム・スミスの道德論の如きは、一層の注意を以て考へなければならない。しかも、博士の考ではその道德論や人生觀やは、一般の常識として市中の隨所にころがつて居るものでなく、何等かの奧義として天才の體得するものであらうから、學者、思想家が個中の秘密として子弟の間に、友人の間に要するに互に共鳴し合ふものゝ間にのみ相傳ふるものであらうから、それ等の互に共鳴し合ふ仲間の關係と云ふやうなものは、大切になつて來、又個々の思想家の資質德性乃至個人的經驗と云ふやうなことがやはり問題になるのであらう。さればこそ、スミスとヒユームとハチスンとの交情、乃至、スミスが失戀の人であつたと云ふこと、スミスの講義振りがどうであつたかと云ふこと、ミルの少年時代、ミルとテーラー婦人との關係など云ふことがずいぶん詳しく述べられてあり、スミスに就いては歩き方まで書かれて居る。さればこそ、この書は、經濟的自由主義の事實上の基礎に就いては、僅かに六頁を費やすことの代りに、學者その人の學傳乃至經濟思想の背景としての哲學乃至道德論に就いて、ロック以後スミスの經濟思想に至るまで百余頁、ベンダムの哲學論及び法律論に三十余頁、ミル當時の思想界及びミル個人の傳記に七十余頁、ミル時代の英國文壇に三十頁、其他各個の經濟學者の傳記に關する部分を併せて見ると、合計約三百頁、即ちこの著の大半がそれに費され

て居る。

併し、私が先きに指摘した博士の第二の主張に從へば、これ等の道德原理なるものは、哲學者に依つて又それを採り入れる經濟學者に依つて如何やうに說明されやうとも、結局は、その時代に於ける、封建階級に對する資本家階級の反對と云ふ意味に於てか、又は勞働者階級に對する資本家階級の支配と言ふ意味に於てか、とも角も、事實上その時代の經濟生活の必然より發生する階級道德の學理的形態に外ならない筈である。ところが、吾等は、この書から實に長い頁を通して哲學者の學傳を學ぶが、この點に關しては、どうしても明瞭に著者の意を知ることは出來ない。例へばかのロックやヒユームやスミスの學傳を述べられた後に、スミスに就いては博士はかう云つて居る。『大きな社會思想家の思想の根抵には、必ず人間性に關する一定の觀察が橫はつて居てそれがその人の思想の全色彩を支配する。（中略）スミスの捉へたる人間性は、各人が自己の利益を計らんとする性情である。彼は或る場合には、この性情を指して『自愛心』と謂ひ、或る場合にはこれを私利心と謂ひ、又或る場合には、自己の狀態を改善せんとする各個人の自然的努力とも謂つてゐる云々』（一三六—一三七頁）。

そして博士は、スミスの經濟學說を以てこの人間性に關する哲學の表れであるとし、スミスは、分業を以て人間自然の性情に基くものと見たと云ふこと、スミスは、交換を以て人間利己心の產物と見たと云ふこと、スミスは各資本家の利己心に從ふ一國資本の配分は、社會全體の利益と一致すると云ふ見解を採つたと云ふこと、スミスは社會の富が勞賃利子及び地代の形式に於て勞働者資本家及び地主の三階級の間に分配せらるゝこと（資本家的分配方法）を以て社會の常態と看做したと云ふこと、及びかゝる分配の方法は、完全な自由競爭の制度の下に於ては、最も公平を期し得べきものであると云ふ見解を採つたと云ふことをスミス自身の文句に依つて說明して居る。博士に從へば、スミスの學說に於

ては、個人の利己心と云ふものが本體であつて、生產及び分配の諸制度は、之が現象形態であり、本體の自由な活動は、現象形態としての生產及び分配の方面に於て、社會全體の利益と人類相互の完全な調和を保ちつゝあるものと見て居ると云ふのである。つまり、スミスの經濟學と云ふものは、一個の應用哲學と云ふやうなものである。けれどもスミスは、その經濟學の原理、即ち人間の性情は利己心的であると云ふことを何處から覺えて來たのか。博士のこの書の調子に從へば多分ハチスンから。ハチスンは何處からか。多分ヒユームから。ヒユームは何處からか。多分ロツクから。――名匠が其奧義を極内に弟子から弟子へと傳へるやうにして。併しそのロツクは何處からか。本書の第二節『經濟的自由主義の濫觴――ヂヨン・ロツク』と題する項の第一は英國に於ける自由主義の發端を述べてあるが、その終りには『之を要するに、英國に於ける經濟的自由主義は、一方に於ては、宗教上及び政治上に於ける自由の要求に伴ふて發生せしと同時に、他方に於ては、宗教問題政治問題とは直接の關係なく、全く獨占業者の專橫に對する反感に本づいて發生せしものである』（一〇頁）とあり、その次のヂヨン・ロツクと題する一項の冒頭には、『上略、かゝる思想に對して一定の理論的說明を加ふるものを生ずるに至りしは、自然の勢である。吾々は、玆に其一例として第十七世紀に於ける有名なる哲學者ヂヨン・ロツクを擧げることが出來やうと思ふ』とある。事の當否はとも角、ロツクから先きは特定な個人的敎師と云ふものが無くて、當時に於ける宗敎上の自由主義、經濟上の自由主義、要するに、當時に於ける國家敎權に對する輿論としての一般民衆の自由の要求と云ふことがロツクのお師匠になつて居る。

何故にロツクだけが一般民衆の輿論を師とし、あとのそれ〴〵の哲學者達は、それ〴〵の個人を師としなければならないか。博士の書に依つても、ヒユームやハチスンやスミスやは、立派な經驗的の哲學者で、『人間性』の正體をたしかめるために、哲學や神學の敎科書ばかりを勉强し、日々の新聞も見ずにくらした人のやうではない。特にスミスの學問

的活動の時代は、ロツクの時代よりは約五六十年も後であり、英吉利に於ては、經濟の發達と共に、所謂經濟的自由主義は輿論の問題でなくて、實行の域に進み、餘すところは、封建制度の殘骸に對する戰に過ぎなかつたとも見られる。この時代に於て、創見的な學者であるスミスが、人間性に關する問題を社會の實際からでなしに、哲學のドクトリンから學んで居る。そして、所謂『大きな思想家の思想の根底には、必ず人間性に關する一定の觀察が横はつて居る。それがその人の思想の全色彩を支配する。スミスの捉へた人間性は、各人が自己の利益を計らんとする云々』と云ふことになる。ロツクの思想は、事實當時の社會に於ける階級意識の産物であると見られるが、スミスにするとそれが其時代の階級關係に超然たる『人間性に關する一定の觀察』となつてしまう。

唯物史觀に於ては、經濟學は、資本家的生産關係の學理的法則の認識に過ぎない。そして、この學理的法則は、その社會の階級意識を決定するものは何であるか、從つて又階級意識の表はれとしての政策を決定するものは何であるかを明らかにするものである。そして、其階級意識や政策やを決定するものは、結局その時代に於ける生産力の發達及びそれより必然に發生する生産關係であつて、しかもその生産力は、生産關係の内にあつて常に變化せざるを得ざるものであるから、從つて、その生産關係の必然に基く階級意識やそれより發生する諸政策は、自づから變化せざるを得ないことになり、引いて法律關係や國家形態や其他高尙なる意識形態も亦其自づから變化せざるを得ないと云ふ結論に到達するのである。從つて、この見地に於ては、經濟の理論と政策とは別々のものでなく、理論の形態が一定の階級意識を示すと同時に、その理論に基くところの政策の目的は同じ階級意識に依つて定まり、その政策の手段も、現在の階級鬪爭そのものより外に無いのである。しかもその階級意識は、結局生産力及び生産關係の變化に係つて居るから、理論も政策も、政策の目的も手段もそれ等の變化と共に變化するのである。この故にこの見地からは一定不變の經濟理論や經濟

政策のあるべき筈はない。アダム・スミスに於ては、經濟の根本原理は、人間自然の性質に基く利己心であり、それが事實の認識としての理論の統一原理であり又政策の基調であつて、事實と政策とは別々のものでなく、所謂自然法で實在としての『自然』と政策としての『法』所謂實在と價値とは、結局同じものであるからこの點で唯物史觀に似ては居るが、その所謂『自然』である人間の利己心なるものは、スミスに於ては、永久的『自然』で、それに基く理論と政策とは永久的の『法』であるからこの點では兩者の見地根本的に背馳するのである。スミスの所謂利己心なるものは、現在の事實であつたのであり、空想でも何でも無いのであるが、唯物史觀の見地からは、それが人間固有の性質ではなく、一生産關係の歴史的必然の産物であり、それの變化と共に變化せられるものでなければならぬ。それ故にこの場合、私の博士から期待したところは、スミスが何と云はふと、スミスの一見應用哲學であるかの如き經濟論は、その時代に於ける階級意識の表現であり、同時にスミスが人間性の永久的必然と見た利己心なるものは、當時に於ける商品經濟の下に於て歴史的に必然な商人心理であつたと云ふことをスミス自身の學説の解剖から又當時の史實から如何に證明せらるかと云ふにあつたのである。しかし、博士はスミスに就いては何か別に考ふるところあるもの丶如く、この點に就ては、何か留保するところがある。しかし、博士の唯物史觀的見解は、次のマルサス及びリカルドには、甚だしく明瞭になつて居る。

(四) 博士の觀たるマルサス及びリカルドと私のかい間觀たるマルサス及びリカルド

博士に從へば、マルサス及びリカルドはスミスの直系、個人主義經濟學の繼承者であり、スミスの開拓したのは、

主として生產問題であつたが、マルサス及びリカルドのそれは分配問題であつた。何故に彼等を以てスミスの直系となすかと云ふに、先づマルサスの人口論を採つて見ると、それは『人口の增加は、必然的に生活資料によつて制限せられる。生活資料にして增加する時は人口は常に增加する。人口の優れたる力は困窮及び罪惡によつて抑制せられ、之に依つて現實の人口は生活資料と均等を保つ』(頁二四九)と云ふのである。これに依れば、(一)貧困は、人口法則の自然的原因に基き、其他の原因に基くものでないから、從つて、この法則が樹立せらるゝに依つて、社會制度は、貧困に對して無責任なことになる。(二)この法則に從へば、生活資料が增加すれば、人口は增加するのであり、そして其の人口の增加は貧困の原因であるのであるから、窮民のために、人爲的に生活資料を與ふることは、人口增加の原因であり、從つて又貧困の原因となる。從つて、國家社會の救貧策は、無用であるばかりか有害であり、唯一の方策は、貧民自身の人口の道德的抑制に一任し、社會は之に對して自由放任策を採るにある。(三)人口增加の制限としての各個人の道德的抑制は各個人が常に分配の不平等なる社會に於て、生活の事實上の不安を以ておびやかさるゝのでなければ行はれ難い。(四)人口の制限のために分配の不平等が常に必要とせらるゝ社會に於ては、單純な生存の事實が一個の權利として社會に對して何等かの要求をなすことを認めない。要するに、この法則は、第一の點に於ては、社會制度から貧困に對する責任を解除するものであり、第二の點に於ては、分配問題に對する自由放任策を主張するものであり、第三の點に於ては、分配の不平等なる制度、即ち資本家的私有財產制の自然的必要を固守するものであり、第四の點に於て生存權を否認するものである。

今、博士に從へば、この貧困が自然必然であると云ふことから引いて分配問題は個人の自制に一任して放任すべしと云ふ點に於て、又分配の不平等なる資本家的財產制度の自然的必要に基く發生を認むるの點に於て、マルサスはスミスの

繼承者であると云ふことである。

然らば次にリカルドは如何なる意味でスミスの繼承者であるかと云ふに、博士に從へば、それは彼の『經濟及び租稅の諸原理』に表はるゝ思想に求むることが出來る。かの有名な地代論はこの書に於て述べられて居るのであるが、それに依れば、先づ地代はどうして發生するかと云ふに、第一は沃土及び地位の利便に差異あること、第二は土地に收獲遞減の法則の行はるゝことである『土地は、本來無制限のものでないと同時に、其性質及び地位にそれ〴〵の差異あるが故に、人口の增加するに伴ふて。次第に稍々地味の劣りたる土地又は地位の不便なる土地が耕作せらるゝことゝなる、そこで始めて優等の土地の使用料としての地代の發生を見るに至るのであつて、其地代の額は、同一の勞費の下に生ずる優等地と劣等地との生產物の差額に依つて定まるものである』(三〇四頁)そして、同一物の生產費に差異ある時は、物の價格は、最大の生產費に依つて定めらるゝものであるから、人口の增加と共に社會の必要とする農產物の需要增加し、漸次に劣等地が耕やさるゝことになれば、農產物の價格は、現に耕作せらるゝ最劣等地に於ける最大生產費に依つて定めらるゝことゝなり、從つて優等地に於ける農產物の價格は、現にその土地に於て必要とする生產費以上の額に定まり、かくて穀價とその優等地の生產費との差額が優等地の地代として支拂はれる。それ故に、地代が支拂はるゝがために穀價が高いのでなく、穀價が高いために地代が支拂はれる。この意味で地代は穀價の一部を成すものでない云々

博士は進んでリカルドの勞賃論を述べて居る。その意をかいつまんで見ると、生產物の價格の內から地主に地代を支拂つた殘り(勿論最劣等地の經營者は地主に地代を拂ふことが出來ない)が、資本家と勞働者とに分配されるのであるが、今その勞働者の分前である勞賃は如何にして定まるかと云ふと、勞働は一個の商品であり、自然價格と市場價格とを有する。そして勞働の自然價格は、かの自由にその供給を增減し得べき一般貨物と同じく、その生產に要する勞働の

分量に依つて、詳しく云へば『勞働者がその人口數を増加することなく、又減少することなき範圍に於て、その生活を維持し、子孫を繁殖して行くに足るだけの價格である』。然るに勞働者の生活費の主要部分をしむる食料品は社會の進歩と共に次第に騰貴するものであるから、勞働の自然價格も從つて又一般に騰貴すべき筈である。然るに、勞働の市場價格、即ち現に勞働者に支拂はるゝ勞賃は、その時々の勞働の需要供給の關係に依つて定まるのであり、しかも、一方その需要を決定するものは資本の數量であり、他方その供給を決定するは勞働者の人口數である。從つて、勞賃を高むるためには、資本の増加か、人口の減少か二つの方法しか無いことになるが、人口は資本よりも一層速かに増加するから、たとひ、食物の價格の騰貴のために貨幣勞賃は多少騰貴することがあつても、その貨幣勞賃を以て購入する生産必要品の分量所謂實質勞賃は、下落する傾向を有するもので、この點に於て勞働の市場價格は、自然價格以下に決定せらるゝ傾向がある。云々。

最後に資本家の所得である利潤はどうであるかと云ふと、生産物の價格の中から地代を引去り、更に勞賃を引去つた殘額が利潤として資本家の所得となる。一定額が勞賃と利潤とに分けられるのであるから、利潤が多ければ勞賃が小さく、反對に勞賃が多ければ利潤が小さく、資本家と勞働者とは利害全く相反する關係にある云々。

かやうに、リカルドの學説を述べて來た博士は、之を批評して私の詞で云ふと大體次のやうに見て居る。リカルドに依ると、地代は、土地自然の性質に基き發生するものであり、地代があるから穀價が高いのでなく、穀價が高いから地代があるのであると云ふのであるから、この説は、地代のあることに依つて一般消費者は何等の不利益をも蒙つて居るものでないと云ふこと、從つて、地主は、社會上何等か不當な理由に依つて地代を得て居るものでないと云ふことを論證するものであつて、即ち、地主のために地代と云ふ不勞所得を辯護したものである。そして、生産物の全價格の内か

ら地代を差引いた殘額が資本家と勞働者とに分割せらるゝ場合に於て、勞賃の自然價格がその時々の勞働者生活の最小限度であり、而かも其市場價格は、常にその自然價格以下にあるの傾向を有すと云ふ論證は、同時に、經濟上自然法則の名に於て、資本家のために、資本家の所得としての利潤を辯護するものである。しかも、リカルドの說では勞賃のために利潤を犧牲とすることは、一方に資本の増加を妨げ、他方に勞働者の人口を増加せしむることになり、從つて勞働の需要を減少してその供給を増加することになり、結局勞賃の減少をもたらすに過ぎないことになり、唯一の勞賃値上げの方法は、勞働者自身の人口制限より外にないと云ふのであるから、これは、マルサスと同じやうに、貧困問題、リカルドに於ては特に勞働者の貧困問題に對して自由放任策を主張するものに外ならない。地主のために地代を辯護し資本家のために利潤を辯護することは、即ち資本家的私有財產制の是認であり、勞働者の貧困問題に對して自由放任策を採ることは、即ち分配問題に對する放任策であつて、この點に於て、マルサスと共にスミス學說の繼承者であると云ふのである。

博士の以上の所說はマルサス及びリカルドがスミスの繼承者であると云ふことを立證したものであるが、それと同時に、彼等が當時に於ける資本家階級の代辯者であつたと云ふことを說明したものである。即ち、スミスに於ては、哲學的原理であつたものが、こゝでは明かに資本家階級の階級意識の表はれとなつて居る。而かも、博士に於ては、マルサスもリカルドも一樣に勞働者階級に對する資本家側の辯護として取扱はれて居るが、資本家の時代は資本家と勞働者との對立の時代であると同時に、資本家間に於ける利害の反撥を忘るゝことは出來ない。此の點に於て博士の所論に慊き更にマルサス及びリカルドの立場をもう少し進んで考へて見たい。

スミスは、社會の各個人の利己的活動は、社會全體の利益と一致するものであると云ふことを經濟的事實の分析の

上から說明せんとした。併し、スミスの說明は事實當つて居なかつたことは、同じ社會制度の下に於て、スミス以降マルサス、リカルドの時代に入りて、失業人口の增加に伴ふ勞働者の貧困は、事實社會上の一大問題となつた。しかも佛蘭西革命の影響は、對岸の英吉利の人心を動搖せしめ、資本家的財產制度否認の問題がゴルトウヰンの共產主義の主張として表はれた。マルサスの人口論は、直接にも間接にもこの情勢の產物であることは、一般に知られたことであり、又博士の屢々說述せらるゝところである。この場合に於て、博士が吾人に提示せられた命題の中、一定の經濟組織は一定の道德原理を產み、その一定の道德原理は、經濟學に反射すると云ふことは、如何やうに考ふべきであるか。この場合に於ては、資本家經濟組織の中から二個の全く相反する道德原理が生れて居る。一つは、在來の利己是認の道德であり、他の一つはその否認の道德である。前者は、社會の支配者階級に依つて代表せられ、後者は、社會の被支配者階級に依つて代表せられる。もし、經濟學が何等かの道德原理を先行條件とするものとしたならば、マルサス及びリカルドのそれは前者即ち支配者階級の道德としての利己心是認の原理であり、所謂階級道德であることは云ふまでもない。この階級道德（財產神聖の道德）こそマルサス及びリカルドをして、殊にマルサスをして事實の分析、その因果關係の說明に當り意識的にか無意識的にか、法則の名に於て科學の名に於て、財產關係と無關係なる貧困の自然的必然論を唱へしむるに至つたのである。例へば、マルサスの人口論に於ては、性欲と食欲と云ふ極めて明白な事實が、又リカルドの地代論に於ては、土地自然の性質（土地の沃度及び便利の差異、乃至收獲低減の法則）と云ふものが前提せられて居り、何等の哲學的原理が前提せられて居るわけでないが、財產關係そのものゝ本質並にそれと貧困との關係に就いては、財產神聖と云ふ階級道德が無條件に前提せられて居る。この意味に於て、一定の經濟組織の上より必然に發生する一定の道德は、社會的意識の一形態としての經濟意識に、從つてそれの系統的知識である經濟學に一定の影響を有すと云

「ふことが出來るがこの場合に於ける道德なるものは、階級意識そのものであつて、階級關係より超然たる自律性の道德原理でないことは一見明白である。

しかもマルサスとリカルドとの經濟學說に就いて考へて見ると、無產者階級に對しては、貧困の必然性を說くことに於て、兩者は一致して居るが、有產者階級相互の利害關係に於ては、兩者は決して一致しては居ない。元來資本家的階級道德なるものは、私有財產と自由競爭の神聖論であるから、勞働者は勞働者として互に相爭ひ、資本家は資本家として互に相爭ふことが本質であり、只だ資本家が勞働者に對した時にのみ資本家同志の一致を見るのである。階級意識の表はれとしてのマルサス及びリカルドの學說は、この點に於ては、極めて適當に階級道德の本質を示すものであつて、マルサスが人口の法則より一般に貧困の必然性を、又リカルドーが之を前提する經濟法則より勞働者階級の貧困の必然性を說くの點に於ては、勞働者階級に對して互に相一致して居るが、その他の點で異なつて居る。例へばかのリカルドの地代論は、博士に從へば、地主のために不勞所得を辯護したものだと云ふことになつて居るが、反對な意味にも考へられる。

貧困が自然的原因に基くと云ふ場合に於て、マルサスの人口論は、資本家から貧困に對する責任を解除したものだと云ふことが出來るであらう。併し一定の剩餘が、土地自然の性質に基き發生すると云ふ場合に於ては、リカルドの地代論は、その剩餘の收得者である地主階級を辯護するものでなく、むしろ反對に、この地主階級が不勞所得者であることを明にしたものと云ふことが出來ぬであらうか。リカルドの地代論に從へば、地代は一般消費者の不利益に於て支拂はるゝものではないが、それは資本家の全生產物の內から支拂はるゝのであり、その殘額が資本家と勞働者との間に分割せらるゝのである。それ故に何等かの理由に依り、穀價の騰貴に係らず、土地の使用料として資本家が地主に支拂ふ地

代が騰貴しないならば、資本家の分前は、勞働者の分前にして一定な限り、それだけ增加するわけである。それ故に、地代は地主の勤勞に基くものでなく、土地自然の性質に基き發生する一種の不勞所得であると云ふことは、この不勞所得に對する課税の理由ともなり、間接に資本家の利益を辯護することになつても、地主を辯護する理由にはならぬと思はれる。事實、リカルドは、穀税廢止論者である。穀價の騰貴は　地代の騰貴であつて、地主の利益である。併し、穀價の騰貴は、勞働の自然價格の騰貴であつて、利潤の低下であり資本家の不利益である。この點に於てもリカルドは明かに地主階級の味方ではない。然るに、マルサスは、穀税の維持論者であり　同じ意味に於て、地主の味方である。マルサスが地主の味方であつたと云ふことは、地代に關するリカルドとの論爭、殊に彼の『經濟原論』に表はれる。彼は、その人口論に於て、自然法則として、食料の增加が人口の增加に伴はぬとなすものであるが、彼の『經濟學原論』は、その人口論に云ふところは、根本的に異なり、資本家社會に於ては、資本家階級全體としてその利潤に相當する剩餘の生產物がある。この剩餘の生產物は、不生產的階級であり常に買手の地位にある地主國家及び寺院に屬する階級が資本家より受取るところの地代及び租税を以て買取るので無ければ、資本家は全體としてその利潤を實現することが出來ず、從つて經濟社會に恐慌を免るゝことが出來ないと云ふのである。これは、資本家階級の利益の名に於て、地主其他特權階級の存在の必要を主張するものと云はなければならない。かやうに考へて見ると、マルサス及びリカルドの經濟學說は、同じく勞働者階級に對する資本側の階級意識の表象であつても、一方は　地主階級の代辯であるに反し、他方は、資本家階級の代辯である。とは、當時に於て、全勞働者階級に對する全資本家階級の攻勢を示すと同時に、資本家階級內部に於ける分裂攻爭の情勢に照應するものと考ふることが出來、又兩者の學史上に於ける地位はこの點に求むることが出來やうと思ふ。

（五）博士の觀たるジョン・ミルと私の觀たるジョン・ミル

マルサスとリカルドに於て一度現はれた博士の階級的批評の立場は、ベンタムからジョン・ミルになると、忽然として消える。經濟思想に作用する道德的原理を以て必ずしも一定の階級意識の現れと見ない傾向のある博士は、どこまでも、經濟思想と並立する道德的思想を探究しやうとする。

マルサス及びリカルドの學說に引き續き述べられて居るのは、主として彼等と同時代の功利主義の哲學者ベンタムの思想である。博士の意は、この一項を以て、資本家經濟組織の下に於て、哲學や道德や法律や政治や經濟やの社會意識の形態が、資本家經濟の完成と共に、如何に渾然統一せらるゝに至つたかを示さんとするものゝ如くであるが、經濟思想史の作者として、經濟學に於ける哲學的思想の背景に興味を有する著者は、『ベンタムは、資本主義經濟學に始めて哲學上倫理學上の基礎を與へたものであつて、個人主義經濟學の最後の完成者である（三八）と云ひ、ベンタムと、ジエームス・ミルとの個人的關係、ジエームス・ミルとリカルドとの個人的關係がやはり問題であり、哲學の方面に於ては、リカルドは、ジエームス・ミルの弟子であり、そのジエームス・ミルは、又ベンタムの忠實なる弟子であつたと云ふこと、それ故或時、ベンタムは、リカルドは自分の精神上の孫だと云つたと云ふやうなことが述べられてある。現にその時代の生活意識であり、階級哲學である功利主義の學說も哲學的思辨の形に於ては、よほど六づかしいものとなるらしく、宗教と同じく一個の私事として、少數の師弟の間にのみ一子相傳的に傳へられたやうに見える。リカルドが學者哲學者の經濟論に對し當時の一商人として、自己の實際的經驗を土臺に、經濟問題を分配の方面より把束することに依つて、生產關係の事實上の關係を、極めて客觀的に吾人に提示したことは、恰かも、無產階級の人々が、自

己自身の經驗に基き、思辨的な社會主義的思想に對抗するにも似て、甚だ興味深いことと思はれ、且つ彼の傳記が他の學者に比し何の光彩もなく、平々凡々、傳記好きの博士の書に於ても僅かに六頁に濟んで居るところに、むしろ面白味を覺ゆる私には、彼も亦た哲學に學んだのかと思ふともの足りない。

何はともあれ、博士に從へば、このベンタムの功利哲學は、チエームス・ミルを經て、其子ジョン・スチアート・ミルに及び、事實上子々孫々に傳はつて行く。ところが、このゼ・エス・ミルと云ふ人は、甚だ感傷的な人であつて、他人の妻君である人にラヴをし、その夫なる人が死ぬまで結婚をせずに獨身でくらして居り、後にその夫人と結婚する。この邊は個人主義哲學の實行家として立派な個人的無政府主義者である。幼少より父の膝下でいろ〱な學問をたゝきこまれ、長じて、東印度會社に職を求め三十餘年の長い間此處に奉公して居る。職を求めた當時の述懷を見ると、つまりプロ文士でやつて行くよりも會社の調査部などに居る方が生活も安全で勉强も出來ると云ふやうなことを云つて居るから、なか〱の常識家である。しかし又なか〱の理想家であつて、會社の調査部に居つて大にベンタムの哲學を勉强し尤もベンタムの哲學は、この會社の哲學見たやうなものであるから、今日會社の調査部で社會主義を勉强するほど辻つまの合ぬことはない)、一八二三年―一八二八年、前後六七年間は、功利主義哲學の宣傳運動に從事するが、やはり理想家に特有な性質から、右のテーラー夫人と戀愛關係に落ち、そこでつきものゝ神經衰弱にかゝり、人生萬事面白くなくなる。それは過度な勉强のせいもあろうが、主な原因はこのラヴ事件らしい。一年間ばかり幽鬱症にかゝりブラ〱するが、その間に、精神上に變化を起し、ベンタムの功利主義を疑ひ始め、だん〱サン・シモン一派の社會主義に共鳴し始める。一八三〇年の佛蘭西革命に、刺激せられて時事問題に筆を採り始める。この精神上の變化、ミルの所謂『心上の危機』なるものは、博士に從へば實際、テイラア夫人の影響が就中與つて力がある。一八四二年頃に於ては、『ミルは

一週間に二度食事をするためにテイラア夫人を訪ふことに決まつて居た』のだから、實際その間にこの夫人から思想上いろ〳〵な影響を受けたであらうが、テイラア夫人がミル婦人となつてからは一層のことであらう。

さて、それは『心上の危機』以後どんな思想上の變化を受けたか、これが博士の重要視する點である。その一つは、半ばベンタム主義に對する反逆であり、半ばカアライルの個人の自己犧牲說に對する共鳴であり、彼の功利主義の哲學はその本來の形より甚だしく變化されてしまつたことである。社會及び『人類の改造をば、非利己心なる仁愛の働きに俟たずして、利己的感情の啓發に』求めたベンタム主義は、『幸福(利己的感情の啓發)を人生の目的とすることなく、それ以外に存する何等かの目的を之に充つる』こと、そしてその目的は、『行爲者自身の幸福でなく、之に關係する凡ての人々の幸福』と云ふことになつたのである。もう一つは社會主義的思想の影響と云ふことであるが、これにはサン・シモンの學說以外、特に例のテイラア夫人の影響である。今それに就いて、博士はミルの自叙傳からこの部分に關するミルの意見を譯載して居る。それに依ると(一)ミルは現在の經濟組織は、永久的のものでなく、『一時的のものであると云ふこと、(二)遠き將來に於ては、凡ての人々が勞働に從事する階級の無い社會、地球上の原料が共有となり、社會の生產物の分配が平等に行はるゝ時代が來ると云つた風のことがある。この二つの點から博士は、ミルを以て社會改善の窮極の理想に關しては、ミル自身が所謂『吾々をば明かに社會主義者といふ一般的呼稱の下に偏入せしめたであらう』と云ふ詞を是認すべきものとなして居る。併し、同じ場所に於て、ミルは、(一)社會の變革には、資本家勞働者共に品性の變化が必要であり、心の改造が社會改造の前提であると云つた文句がある。この點に於て博士は、ミルを以て狹い意味での社會主義者ではなく、むしろ人道主義者だと云つて居る。(頁五一八—五一九)。全くそうである。右の譯文に依ると、ミルは實際かの人道の高き立場から人間を見おろして居る。(『民衆の無知及び特にその利己心と獸性とを恐れる』から根本

的にデモクラシーは主張出來ないと云ひ、『社會的變革を可能ならしめ、希望すべきものたらしむるには、それに相應した品性上の變化が、今日の勞働者階級を組織して居る無教養な、わい〳〵連と及び彼等の雇主の大多數との双方の上に起らねばならぬ』と云つて居る。かう云つたのが所謂人道主義者の特徴である。如何にもテイラア夫人の感化らしい。例の戀愛至上主義から、夫にスネて、或は巴里に、或はロンドンの田舍に月日を送り、しかも一週に二度づゝロンドンの田舍から出て來て愛人とめしを食ふことを樂みとすることが出來るやうな貴婦人の腦ずいからでなければ、かやうな思想は出て來ない。この思想に於ては、理想と現實と云ふものが著しく違つて居り、しかも、この思想の持主には、彼等の經驗の範圍内だけで現實に關する知識を有つて居る。それ故實際の問題としては、理想を實行しやうとはせず、高々その高き立場に於て資本家に對しては不德を戒め、勞働者に對してはその所謂『獸性』をたしなめると云ふに過ぎない。この點に於ては、かの何等の形に於て、同じ理想を民衆の生活に實行せんとした多くの所謂リカルデアン・ソシアリストに比しむしろ劣るであらう。否、ミルにして、もしこの方面に於てこの夫人の思想上の感化なく、終始ベンタム主義に徹底し、個人の利己的感情の啓發を以て社會改造の方針とするならば、勞働者の場合に於ては、その各個人の利己的感情の追求は、實際の問題としては、必ずや資本家に對する勞働者團結の必要を認むるに至るべく、この利害共同の團體的生活は、勞働者教育の實際的機關として、階級内部に於ける犧牲心、階級の外部に對する闘爭心、要するに階級意識を培養するに至ること、この階級意識の發達が社會改造の主たる條件であると云ふ認識に到達し得たかも知れない。ベンタム主義が忽然として階級關係に超然たる人道主義に變化するよりも、そのベンタム主義の徹底が、階級意識の培養の必要に導くことが、遙かに進歩的であつたろうと思ふ。

尤も、本來ベンタム主義者であり、本來デモクラツトであるミルは、この遙かに進歩した思想の要素を多く有つて居

た。彼が現在の經濟組織を以て永久的でないとする思想、從つて、經濟上に於て生產法則と分配の法則とを區別するの思想は、恐らくこの進步した思想に屬すと云ふことが出來るであらう。併しそれは、ベンタム主義の論理的必然としての矛盾の產物であり、又實際當時に於ける勞働運動の事實上の觀察に基くと云ふ意味に於てである。ミル自身が言明するテイラア夫人の感化としての人類窮極の理想なるものは、むしろそれ自身當時に於ける勞働運動の反射と見るべきではないか。事實『雇主及び被雇人と云ふ二個の遺傳的階級への人類の分割が永久に維持せられ得ると云ふことは豫想し難い』と云ふ考は『勞働に從事せる階級の力及び重要さが次第に增加すること、その人員が益々優勢になること』、そして、勞働者階級が勞賃のために勞働する狀態をば彼等の結局の狀態だとして永久これに滿足するであらうと云ふことが考へられなくなつた』と云ふ事實上の考察に基いて居る。(頁五三六)。經濟法則の二分は、この事實上の觀察に基くものと考へられる。當時勞働者擡頭の勢に注目するに至つた彼は、生產の法則から、分配の法則を切り離すのでなければ、事實を說明することが出來なくなつたのである。社會的秩序の必然の結果である分配の法則と生產の物理的法則とが別々なものだと云ふ中間的思想は、彼は、サン・シモンと妻とから得たと云ふが、その妻もサン・シモンも、さやうな思想の發明者であり得るわけはない。如何なる思想も人間の發明ではなく、社會生活の必然から生れるのである。ミルが經濟法則の永久性を疑ひ、分配の法則を人爲の法則となすの理由として、勞働者階級に於ける欲望の發達に重きを置いて居るやうであるが、この勞働者の欲望は、貴婦人の奢侈的欲望と同じやうに、又その他の哲學思想と同じやうに、結局特定な生產の關係から生れる。分配關係の依存するその社會的秩序も、生產力の一定の發達から必然に生れたもので人間が任意に作り上げたものではない。それ故に分配の法則は、當然生產の法則に依存し、生產の關係に變化がない以上、分配の關係だけを人爲的に變化することは不可能なことである。然るに、この生產の物的關係は、社會の發

達と共に常に變化せざるを得ないがゆゑに、必然にそれが勞働者の意識を變化し、從つて分配の諸關係を變化し、從つて生産の基本關係を變化するのである。勞働者の意識が哲學者の哲學の原理のやうに、それ自身の自律性に依つて分配の關係に變更を起すのではない。ミルが勞働者の欲望の發達に注目し、經濟法則の永久性を疑つたことは、スミスの利己心と同じくそれ自身空想のない思想であるが、その何が故に、勞働者の欲望が變化するかの理由に至つては、その何故に人間が利己的であるかの理由と同じく、極めて任意であつて、それは『人類進歩の一般的理論の一部であつて、經濟學よりもつと大きい且つもつと困難な研究題目』、即ち、結局は哲學の問題になると云ふのである。この點に關し社會主義の理論は全くその逆であつて、人間意識の形態は、國家及び法制の諸形態と同じくかの所謂『人類進歩の一般的理論』哲學者の哲學の諸問題）から說明すべきものでなくて、『市民社會』の物質的生活の解剖學としての經濟學に求むべしだと云ふのである。從つて、ミルのこの點に關する思想は、經濟法則の永久性を否認するの點に於て、一見社會主義者のそれに似ては居るが、その否認の理由に至つては、一定の社會主義思想とは、甚だしく異なつて居る。この點に於て、私のこの觀察は博士の所論と出入あるを免れない。

（六）人道史觀の唯物史觀

それはともかくベンタム主義の思想上の孫ジョン・ミルは、かやうにして傳來の思想的體系にひゞを入れてしまつたと云ふのが博士の所論である。これは、例のテイラア夫人やサン・シモンやの影響が大に與つて力がある。更にミル前後に於ける英國の一般思想界の大勢を看過してはならぬと云ふが又博士の意見である。博士は、思想の個人的相傳に重きを置いては居るが、その一般的背景を決して忘れては居ない。むしろ、その個人的思想として擧げらるゝものは、常にそ

の時代のその方面の思想的代表者と云ふ意味に於てである。この意味に於て、それは、資本主義より社會主義に渉る仲間の思想的代表として取扱はれて居る。併しミルもミル前後の思想もこれはマルサス及びリカルドの場合と異なり、經濟の必然より生ずる一定の階級意識の表はれとしては取扱はれなくなつて居る。

と云ふのは、この書の第五章の第一節には、リカルドよりミルに至る間の思想界の大勢を述べ、その中に社會的な運動として、穀稅廢止問題及びかの勞働者保護法としての十時間法の問題を述べて居る。が、それに依ると、『一八五〇年に於けるTen Hours Billの制定は、功利主義に本づく自由放任主義なるものゝ衰亡の端緒となりしと同時に、人道主義に本づく保護干涉主義の紀元となりしものである『玆に私が特に人道主義に本づく保護干涉主義と云ふのは、かの感情的社會主義を生みたると同じ人道主義的道念であつて、即ち其最初に於ては、勞働者自身の階級的自覺に本づく鬪爭の强制的產物に非らざることを明かにするにある云々』（四二八）とある。そして、この十時間法は、當時の保守黨の贊成に依つて成立したものであるが、博士に從へば、この場合に於て、この保守黨、この地主階級は、かの『感情的社會主義を生んだと同じ道念』に依つて行動したことになる。私はかやうな斷定に同意することは出來ない。第一何等かの『道念』と云ふものがその時々の社會關係を離れて獨立に存在するものであらうか。唯物史觀の把持者である博士の說として、特に之を疑ふ。第二は、マルサス、リカルドの場合に述べたやうに、資本家經濟の一定の發達の時代に於て、地主階級と產業資本家との利害關係は、決して一致しない。そして當時の英吉利に於て、この十時間法の問題は、かの穀法問題と同じやうに、地主資本家二階級間の問題として見ることが出來ぬであらうか。穀法の廢止問題に於て資本家のために大敗した地主階級は、十時間法に贊成することに依つて、勞働者階級を自己階級の味方としかくて政治上資本家の勢力に對抗せんとしたものと見ることが出來ぬであらうか。第三に事實の問題として當時の勞働者階級は、この自己

自身の問題を支配者階級恩惠に一任して袖手傍觀したであらうか。否、否、歴史の教ゆるところに依れば、この時に於て英吉利のチャーテスト運動はその頂上に達したものであり、資本家は、經濟界の恐慌に乘じて、十時間法請願の運動を分裂せんとしたのであるが、保守黨の贊成に依つて、失敗に歸したと云ふことである。貴族的な地主階級の中には、封建的な人道主義者も居たであらうし、その恩惠的保護主義から、この法案に贊成したものも居たであらう。併し、當時の保守黨として地主階級を代表する政黨の行動が、『感情的社會主義の生みの母である人道主義』と云ふものに依つて行動したとは考へられない。

尤も資本家經濟の發達と共に、後方におしのけられて貴族主義者が、くやしまぎれの反資本主義として現はれ、資本家を惡罵すると云ふことに依つて勞働者の味方たるが如き觀を呈することはある。それは、多くは、『人道』とか『道念』とか云ふ形で表はれる。私は、これを博士のこの書の最後の章に於けるカアライル及びラスキンに見るが、長くもなり、あまり感想もないから一々に就いては述べない。只だ一つ不思議なことは、マルクスとラスキンの經濟論とは、『人類全體』の立場に立つもので同じ立場にあると云ふことがある。その理由として、マルクスが『生産は消費に於て始めて本當の生産物となる』とか『消費は生産を生む』とか云つた論は、ラスキンが『如何なる高尚な物も高尚な人にとつてでなければ、富でなく』『絶對の消費は生産の目的であり極致であり云々』と云つたと同じ意味で共に人類全體の立場に立脚すと云ふことを述べて居る。併し博士自身も認められるやうに、マルクスはそれで只だ事實を云つてるだけであり、ラスキンのやうに『道念』と云つてるのではない。しかも、博士の引用したマルクスの文句に引續いて書いてあるところを見ると、消費と生産との相互の關係に於て、消費を決定するものは結局生産だと云ふことになつて居る。

私は今博士の書を讀んで來て、とう〲『人類全體』の思想と云ふものに逢着して居る。この『人類全體』と云ふこ

とは、私が實に永い間の博士の讀者の熱心な一人として博士の數多き書から示教を受けて居る。それに就いては、或る程度まで判かつてゐるつもりで居る。私の今博士から求めるのは、最早や一般的な『人類全體』でなくて特殊なものである。此間の大阪の瓦斯のストライキに職工の一團は、かう云つて叫んだ。『市民諸君は、俺達のストライキが公共の利益を害すると云つて居る。公共の事業が營利に依つて經營せられてゐる時に、公共の利益を楯に俺達の運動を妨ぐるものは、資本家の味方であつて俺達の敵である。俺達だけがかの所謂『公共の利益』のために餓死しなければならないのか』これは階級意識に目ざめ始めた無産者の聲である。社會が生活の利害を異にする階級に分裂し、一階級の支配の下に、經濟が營利的に營まるゝことを原則とする社會に於て、『公共の利益』とか、『社會全體の利益』とか、『人類の利益』とか一般的抽象的題目は、屢々一部支配者階級の利益を意味する。かゝる時代に於ては、如何なる人間も大體に於て、間接直接に資本家階級に屬するか、無産者階級に屬するか、又は、この兩者の中間に彷徨するかである。この中間の彷徨者（私もこの級に屬する）が多く『人類一般』又は『社會全體』の思想の持主とせられて居るが、事實その『人類一般』又は『社會全體』は抽象的な概念の外、何處にも存在して居ない。『人類』は何かの職業を持つた人類であり、その職業は、何かの地位や階級に分たれて居り、『社會』は經濟的には現に過渡期の共産社會が、資本家社會か、半ば封建的社會かであり、政治的には無産者の獨裁か資本家の獨裁か、又は君主の專制か、又はそれ等の聯合かである。一般に『人類全體』『社會全體』と云ふものは、何處を旅行して見ても無い。科學的社會主義の祖とも云はるゝマルクスが、現在の事實そのものに立脚しないで歷史と實際とを超越した哲學者の『概念』や『理想』を土臺にその學問をうち立てたものであらか。勿論、事實認識の方法と事實說明の方法とは異なり、事實說明の方法に於ては、歸納的に得た一般的結論を前提することに依り演繹的に個々の事實を說明する。實際吾人の學問から求むる興味は、一般的抽象的法則ではなくて、

個々の事實がそれに依つて如何に說明せらるゝかにあるであらうから。けれども、今或學者がさような說明の方法を採つたからとて、其學者が何等か一般的人類的立脚地にあるものと云ふことは出來ない。その學者の立脚地は、反對に如何なる方面から事實を認識したかと云ふことに求めなければならないと思ふ。そして、一定の階級社會に於ては、一定の階級の立場から偏頗に事實をつかむことが却つて全體の利益の何であるかを明かにすることになる。試みに例の瓦斯職工の叫びは、全く階級的立場に立つて居る。この階級的立場に於て、はじめて『公共の利益』と云ふ思辯の眞相の如何なるものか明かになつて居り、瓦斯事業が眞に全體の利益であるがためには如何に經營せらるべきであるか、又その一定の經營に到達するには、全體の關係に於てどうすればよいかと云ふ極めて大體の方向が定まるであらう。然るに、之と反對に、今日の階級社會に於て階級に超然たる一般的公共的立場に立つならば徒らに罷工を否認し事實屢々資本家階級の利益を辯護することになり、又それを辯護せざる場合に於ては、當該事業を結局階級以外に超然たるが如き（そして事實超然たらざる）一定の機關の經營に移すべしと云ふやうなことになる。これは一の營利的經營に代ゆるに、他の營利的經營、しかも官僚的封建的經營を以てすると云ふことに過ぎない。この封建的官僚主義は、『人類一般』の道德論者から理論上免れることは出來ない。瓦斯職工の叫びの代りにラスキンの語を引いて見る。『假りに巡洋艦の艦長が彼自身のを普通の水兵の地位に置くことを正しいと考へたか、或は、何かの都合でそうすることを餘儀なくされたとする。その都合に彼が彼の事を取扱ふであらうやうに、彼は常に彼の部下の人々の各々の者を取扱ふの義務を有する。同じやうにまた工場の主人が彼の子を云々』と云ふので、つまり工場主は、勞働者を自分の子のやうに取扱へと云ふので、『これが經濟學上のこの點に關し與へられ得るところの有効な眞實な、實際的な唯一の規律である』と云ふのである。ラスキンの巡洋艦の艦長の前には水兵はその子であり、ラスキンの資本家の前には勞働者はその子なのである。しかし、ラス

キンの艦長は常に艦長であり、ラスキンの資本家は、常に資本家である。そして、これ等の人々の說では、歷史は經濟の發達の必然に基く民衆の運動からではなくて實にかの『天才』又はかの『高貴なる人物』としてのその艦長又は資本家の意思の產物である。これらの天才や高貴な人物だけが、神の掟である宇宙の永久自然の法則を知つて居るのである。そして、これ等の人々は、この永久自然の神の法則に依つて凡ての『水兵』や『勞働者』を一樣に我が『子』として愛するのであるから、これ等の天才の前には、萬人平等であつて、何の差別も無いのである。それは實に仁慈なる封建君主の前には、凡ての個人は、ゼロの如く平等なのであり、歷史の實際である階級對立の關係と云ふやうなものは全くないのである。併し、この天才は、この一般的抽象的天才は、事實の問題としては何處かに現に生きて居なければならぬ。何處に生きて居るか。やはり人間の社會に生きて居る。人間の社會の何處に生きて居るか。元來天才なるものは、高貴なるが故に、又宇宙の法則を知つてるがゆゑに天才なのである。人間社會は、實に永い歷史を通して支配者階級と被支配者階級とに別れて居る。被支配者階級は、『無智』であり『獸性』であり又『わい〳〵連』であるがゆゑに、『高貴』でり『智識』である天才は、この階級の中に求むることは出來ない。して見れば、この天才の在家は、やはり支配者階級の中に求めなければならぬ。この支配者階級こそ、かの神秘なる仁愛なる宇宙の法則を學ぶがために特殊な教育機關を占有する特權階級なのであり、この特權階級の全體の意思を最も克く代表する資格を有するものが、かの『天才』であり、かの『艦長』であり、かの『資本家』である。即ち、ラスキンやカアライルの天才なるものは、只だ全く階級支配の下に於ける特權階級の最高の代表者なのであり、かの『天才』の選にもれたる多數の特權階級中の人々は、所謂、外樣、譜代の諸大名としてこの天才の仕事を助けて行くのである。そして、かの別種の人種の如くに殘されたる所謂『無知』なる無產者階級は、かの天才の前に於ては、たゞ一樣の單位に於て平等である　天才は彼等を一樣の

單位として、ゼロとして、『吾が子』の如くに愛し、その子達にかの神の掟を命ずる時は、しば〳〵『吾が子よ』吾が水兵よ』と云つて『吾が』と云ふポセシーヴプロナウンをつける。事實その『子』は親の所有であり、その『水兵』は艦長の所有であり、その『勞働者』は、資本家の所有であり、――『吾が馬よ』と云ふと同じである　併し資本家經濟の時代に於ては、勞働力は商品であるが、勞働者は資本家の所有ではないことになつて居る　尤も戰前獨逸皇帝は、屢屢『吾が國民よ』と呼ばはり國民の上に所有格をつけて居るが、それは人間が他の人間の所有であつた時代の遺傳であつて、資本家經濟時代の本質に添ふものでない。溫情主義の資本家が『吾が勞働者』などと云ふことは、同じく獨逸皇帝式であつて自家撞着も甚だしい。それ故に、かのラスキンやカアライルの思想は、十九世紀に生れては居るが、本質上、資本家以前の封建思想に屬すべきものであつて、彼等が資本家經濟の全世紀に於て、かやうな思想を大聲叱呼するのは、一個の反動思想としての外、意味を有たないであらう。

（七）この書に表はれたる思想の辨證法的發展
社會主義は『光に面するか闇に面する』か

然るにこの反動思想は、博士に從へば、功利主義經濟學の否定として生れると同時に、同じく功利主義經濟の否定である社會主義の母であり、殊にマルクス主義と共通するところがあると云ふのである。

博士のこの書の特徴の一つとして擧ぐべきことは、經濟思想の發展かデアレクテックに取扱はれて居ることである。マンダウヰルや、ロツクや、ヒユームやアダム・スミスは、功利主義的經濟思想の肯定であり、この肯定は、ベンタムに至つて完成し、ヂヨン・ミルに至つてその否定が始まり、ラスキン及びカアライルの思想に於て、その否定が漸次進

行をつゝけることになつて居る。この思想は例へば、早苗は、種子としての籾の否定であり、早苗の成長して稲となり花咲き實のるのは、籾の否定としての早苗の否定であつて、即ち否定の否定としての肯定である。蠶の孵化は、繭の否定であり、蠶の成長して、新たに繭を作ること、は先きの繭の否定としての蠶それ自身の否定であり、即ち否定の否定としての自己肯定であると云ふ類である。博士の著に於ては、思想のかやうな發展の形式は、思想それ自身の自己發展なるかの如く、しかし思想は人間の腦ずい無しには、存在出來ないが故に特定の天才の腦ずいに宿らしめ、そしてそれ等のもろもろの天才が一子相傳の方法に於て相續繼承すると云ふことになつて居る。實際面白い併し、私の奇異に感ずることは、ラスキンやカアライルが功利主義經濟學の否定としての自己肯定の理由である。蠶の存在のためには、それの先行條件として繭が無ければならぬ、ラスキンやカアライルの存在のためには、功利主義の經濟學が無ければならぬ。それは私にも判かる。けれども 蠶は繭を破つて出て來るのである。その繭を破る前には、どうしても繭の中に居たものでなければならぬ。それは繭から必然に出て來たものでなければならぬ。この意味でカアライルとラスキンが功利主義經濟學の否定として自己存在の理由を主張するためには、功利主義經濟學の中から必然に出て來たのでなければならぬ。ところが、博士の玆に紹介せらるゝところで見ても、この兩人はたゞの一度でも功利主義の經濟に住んだ形跡は無い。むしろ、その特徴は資本家以前の經濟形態の中に住んで居り、時候がよいので、遠方から出かけて來たやうに見える。他所から來て繭を外部から破らうとするものは、たとへ同じ破るにしても、物の發展の過程と必然に存在する否定の形態には數へられない。資本家經濟の發展の中から必然に生れる無產者の思想と、曾つて資本家のために遙かに後方におしのけられて居たものが、無產者の擡頭に、時分はよしと物かげからぬつと出て來たものゝ思想とを一つにするわけには行くまい。早苗の成長して稲となり、花咲き實るのは、否定の否定としての早稲の自己肯定であるが、この早稲の自己肯

定としての籾は、同じ籾でも最初の種子としての籾。そのものへの復歸ではない。籾の成長して新たに繭となるのは、否定の否定としての自己肯定ではあるが、この繭は、その籾を生んだ最初のその同じ繭ではない。マルクスが『生産手段の集中と勞働の社會化は、それの資本家的外包と兩立せざる點に到達する。外包ははぢき出されなければならない』、『共同の生産手段を以て働き、且つ個人的勞働を意識的に社會的勞働力として支出するところの自由なる人類の組合』が結局之に代る、『組合の生産物は社會的生産物であり、その生産物の一部は生産手段として役立つ、それは社會的に殘される。併し他の部分は生活資料として組合員から消費せられる。從つてこれは分配せられなければならない』と云つたやうな社會主義社會に於ける消費財の分配は、資本家經濟の下で否定せられた個人的私有の回復ではあるが、それは、生産手段共有の新たなる生産方法の下に於ける個人の消費財の私有であつて、中世の小企業及び個人的私有財産への復歸ではない。同じやうにエンゲルスが『古代の哲學は自然性の唯物主義であつた。然るにその唯物主義は、その儘では思想と物質との關係を說明することが出來ず、之を明かにするための必然の理由から精神主義が生れ、精神と肉體とを分離し、それから靈魂不滅の主張を産み、遂に一元的唯心主義となつた。然るに哲學の研究が漸次發達するに從ひ理想主義としての一元的唯心主義は、到底維持することが出來なくなり、近代の物質論が之に代つた』と云ふ場合に於て、この物質主義は、古代の物質論への單純な復歸でなく、『二千年來發達した哲學及び自然科學の全思想と、それの二千年來の歷史を基礎とする』と云ふ意味だと云ふことである。——かやうな意味に於て、社會主義者マルクスやエンゲルスは、資本家的思想とこそ密接な關係があるが、ラスキンやカアライルとは何の關係もないやうに思はれる。

博士は、この書を終るにのぞみ、自分はこの本の初にかの蜂物語の著者マンダウヰルを取扱ひ、人間性の暗黑面、人間性の惡が、社會繁榮の源であると云ふ思想を紹介して置いたが、今ラスキンに接して見ると、マンダウヰルと

とは逆に人間性の光ある方面、美はしい人間性を取入れて居る。いづれにしても、自分は、資本主義經濟學の史的發展を述べて來て、出發點と逆な地點に到達して居る。これは行きつくところに行きついたのだ。『大膽に帷を揭げよ、光に面せ』、自分は『重ねてラスキンの此の句を揭げ、之を以て將來公にすることあるべき本書の姉妹篇に引き續くの句とな す云々』と云はれて居る。私のこの感想錄も、も早や行きつくところに行きついて居るが、こゝに博士が『重ねて揭げられた』ところのラスキンの光あれ、光に面せと云ふ文句に對して、社會主義者マルクスの次の語を想起せざるを得ない。マルクスは云ふ。

『彼等(經濟學者)は、結局その善い方面にうち克つものは、その惡い方面であると云ふことを見逃して居る。かの運動を卷き起し、戰鬪を促することに依つて、歷史を作つて行くものは、實にこの惡しき側面である。(中略)封建制度の美點を形成する一切のものに憧憬して、この美はしき繪面に陰影を投ずる一切のもの(中略)を変除しやうとしたならば、その結果は果してどうなつたであらうか。恐らくは戰を喚起する一切の要素は撲滅せられたであらうし、資本家の發展は、其生の中に窒息せしめられたであらうし、そして歷史を捧引にするやうな背理な問題が提起されたであらう』(哲學の貧困の一節)

『哲學者は理想を、詩人は詩を、僧侶は說教を、教授は講義案を生產する。又犯罪人は犯罪を生產する。今この後の生產業を社會の全體と相關的に考察して見ると、吾人は吾人の偏見から脫却することが出來るであらう。先づ犯罪人は、犯罪を生產するばかりでなく、亦た刑法の講釋をする教授を作り、且つそれに必要欠くべからざる講義案を生產せしめる。その講議案に於て共同じ教授は彼の講義を商品として一般市場に投げ出す。(中略)。犯罪人は、警察や刑務や警官や判官や刑吏や陪審官や其他を生產する。そして、それ等のものは、皆勞働の社會的分業の範疇を作り、人類精神のいろいろな能力を發達せしめ、新らしい欲望と共の欲望滿足の新らしい方法とを作る(中略)。犯罪人は、半ば道德的、半ば悲劇的な印象を生產し、かくて一定の勤勞の提供に依つて、觀衆の道德的及び審美的感情を動かす。彼は、實に刑法の教授や刑法法典や刑法の立法者を生產するばかりでなく、亦た藝術を作り、文學を作り、小說を作り、且つ悲劇の創作

を生産する。(中略)。アの時から罪の樹は同時に知慧の樹ではなかつたらうか。マンダウヰルは、其の蜜蜂物語に於て、既に英吉利の凡ての職業の生産能力を說明したが、その論旨は、大體上述の論據に近い。曰く、我等がこの世界に於て惡と名づけるところのものは、――それが道德的であらうが自然的であらうが――吾等をして、社會上の創造者たらしむるところの大原則であり、それは動かすべからざる基礎であり、生活そのものであり、且つ例外なく、凡ての營業及び職業の支柱である。我等は、こゝに凡ての藝術及び科學の眞の源泉を求めなければならぬ。惡がなくなれば社會は必ず墮落し、そして全く腑ぬけのやうになるであらうと』。マングウヰルだけがかの資本家社會のフヒリスター的な辯護者に比し無限に大膽であり正直である。』(剩餘價値學說史の一節)

『唯物論の社會主義的傾向に向つて特筆すべきは、ロックの古い弟子罪惡の辯護者マングウヰルである。彼は罪惡が今日の社會に於て欠くべからざるものであり、又有用であることを說明する。それは、決して今日の社會の辯護ではなかつたのである』(神聖家族の一節)。

社會主義は闇に生れるが故にのみ光を産むのであつて、光に面するが故に光を産むのではない。むしろそのより多く闇に面するに依つてより多く光に面することが出來るであらう。

博士のこの書は、その附錄として『個人主義及び社會主義』と題する約四十頁に渉る論文がつけ加はつて居る。これは、私が先きに博士の立脚點として指摘したものゝ中、そして私が留保して置いた第一の點『個人主義の經濟組織の特徵は、その社會を組織する各個人の物質的生活を各個人の責任に一任するといふ點にある』と云ふことから必然に發生する個人主義經濟の特徵を明かにし、引いてそのことのために、社會主義組織の特色に論及したものであり、本書の要點を知り又著者の思想の全體を窺ふに最も便利なものであるが、これに對しては、もはや餘白なく、他の機會に讓られねばならぬ。

博士少しく病んで紀州の海岸にある。不幸にしてこの一感想文が博士の眼にとまることがあつても、どうか私の蕪雜な詞をとがめられないことを祈る。(六月七日)



經濟心の倫理的性質

長谷川如是閑

一 集團心理とその經濟心

社會現象を正しく理解する爲めには、その本質的のものと、後に起つた事情の爲めに、變態的に發展したものとを區別することが肝要である。社會の機構は常に機會的に進展するものであつて、そこに何等かの原因が發生すれば、全體の構造を頹廢に導くやうな傾向に進むことを免れない。而かも、人間の意識は、その生活の傾向に則して發展するものであるから、この場合に、その變體的の現象を、本質的のものと意識するのが普通である。少くともその變態的の狀

態が崩れ出すまでは、その本質的の傾向を意識することが困難である。今こゝに所謂經濟現象に關しさういふ事情が働いてゐる一例を述べて見ようと思ふ。

經濟現象を働き出す人間的心意を假りに經濟心と名づけるならば、今日の考へ方では、經濟心は利己的心意であるといふことに一致してゐる。即ちそれは個人的であり、主我的であり、排他的であり、腕力的である所の心意である社會生活に於いて、特に經濟生活と云ふものが際立つて利己的性質を持つといふことは、一般に信じられてゐるのであつて、それは全く、宗教生活、道德生活といふやうな所謂高級の生活と比較して、最も低級の生活であり、人間は、經濟生活から離れば離れるほどその生活が向上したと考へられ、人間的生活の理想は、經濟生活を超越することであるとさへ思惟されることもあるのである。

然し經濟生活とは果してさういふ性質の生活なのであらうか。經濟的生活が果してそれ程沒道德な生活であるならば、人間社會全體は全く道德的法則の外にあるものと言はねばならぬ。何となれば、社會生活は、之を一面から見れば全然經濟生活から成り立つてゐると見ねばならぬものであるからである。

何故に社會生活を基礎付けてゐる生活が、そんな風に道德的意識を超越した生活であると信じらるゝに至つたかと言へば、それは即ち、本質的に社會的性質を持つた經濟生活が、後に起つた事情に依つて、組織的に、變態的の發達を遂げたからである。此の變態的の性質を經濟生活そのものに本質的のものであると見る爲めに、さういふ生活に伴ふ經濟心は、反社會的性質を持つものとなつたのである。言ひ換へれば經濟心を根底付けてゐる利己心は、經濟現象の變態的發達の產物であつて、本來經濟生活そのものに伴ふ心意ではないのである。

經濟心の利己的性質は、最少の犧牲に於いて、最大の効果を得やうとする意慾にあると言はれる。而して通常此の意慾は純個人的心意であると考へられる。即ち純個人的に經濟的であらうとする心意は利己的であるが故に、經濟現象の基礎は利己心であるといふのである。

ところが元來最少の犧牲に於いて最大の効果を得やうとする意慾は、生活の本質的傾向であつて、此の意慾を組織的に、科學的に發動せしむる所から人間の社會的發達が遂げられたのである。生活の經濟は畢竟、最も抵抗の少い方向を取つて、生存に對する最大の効果を收むる方法である。之は敢て心理的の傾向たるに止まらない。總ての自然現象は其の方則の下に發展する。二點間の最短距離は直線であるといふ意識は、即ち運動が、最も少い抵抗に逢つた場合を想像したのであるが、實際の運動が直線であることが出來ないで旋條的であるのは、最もその法則に近い運動を取つてゐる譯けである。經濟現象は畢竟人間が生存の資料を得るに當つて、此の法則に從ふ過程なのである。生物の生活が簡單であればある程、此の經濟法則も單純であるが、生活が進化するに從つて、次第に複雜な經濟的行動を取るに至つて、此の法則は益々複雜となる。單純な生物の生活に於いては、生活の資料を得る爲めの行動は、謂ゆる經濟心を必要としない程單純である。從つて不經濟的である。何等の經濟的意識なしに、只だ無法に歩き廻るとか泳ぎ廻るとかして殆ど偶然性に依頼して生活の資料を求めるのが單純な生物の方法である。故に彼等の生活には經濟學はない。けれども、彼等といへども、さう云ふ勞力の濫費の多い生活の間に、極めて簡單ではあるが、經驗に依つて經濟的行動を取てゐるのである。すべての生物の生活の法則は、何等かの意味で多少經濟的でないものはない。例へば蜂が吸收した蜜を浪費せない爲めに複雜な蜂窩を作り上げると云ふやうなことはその甚だ發達した一例であるが、さういふ方法は有ゆる動物が多少とも取つてゐることである。生活の資料を集める行動並に、それを貯藏する行動に於いて、多くの生物は經濟的行動

の最も簡單なるものを、行動してゐるのである。

此の單純な經濟的行動は、謂ゆる經濟現象の根本的性質に合致するものである點で重要なものである。即ち經濟的行動は、物質的生存行動の組織的殘習であると云ふことが出來る。それが殘習といふやうな心的性質を持つ前は、一つの自然法則として、生物の生活の間に、生存行動の自然淘汰として現れる。即ち、最も經濟的に行動したものが保存される。例へば動物が或る距離を行くのに跳躍してその時間と空間とを出來る丈け短縮させやうとするのは、此の行動の自然淘汰の結果である。全く必要の無い場合にも全力を擧げて走るのは、時間と空間の經濟が彼等の生存を保證する行動に外ならないからである。それは人間が二つの地點を結び付けるのに出來るだけ早い交通機關に依らうとする傾向を有つのと同じである。それが殘習的に發達した時に即ち經濟心となり、經濟的意慾を生み出すのである。

然らば斯樣な意慾は元來個人的のものであるかどうかと云ふに、進步した人間の意識では、如何にもさう云ふ意慾は、自己と云ふ個體の爲めに社會的關係を無視して、謂ゆる主我的の目的を持つて發動してゐるやうであるが、然し最も主我的な意識を有つ場合でさへ、經濟行動が純個人的である場合はない。生活の上で、一切の關係を無視したならば經濟行爲は決して成り立たない。殊に經濟行動の本質から言へば、それは、社會的生活を營む生物の行動が全く關係的のものであるところに起因するのである。彼等の經濟行動は、集團の生活の關係に於いてのみ發動するといへる。蟻や蜂の經濟行爲が單獨では成立しないと同じ事情は、凡て集團生活の經濟行動に存在する。或る集團的生物が生存の資料を蒐集又は貯藏しやうとするに當つては、全集團的關係の下に於いてゞなければ決して成立つものでは無い。人間の社會に於いても狩獵でも、牧畜でも耕作でも又それ等の生產物を享樂する場合に於いても、それらの行動に關する一切の經濟的心意は互々の互助的關係に於いてのみ成立するのである。極めて簡單な例を考へて見ても、貯藏を最も經濟的に試み

やうとすれば、互々の剩餘と不足とが、互々に融通されなければならないのである。凡ての生物の經濟生活には必ずさう云ふ相互關係が成り立つてゐる。「貯藏」は「生産」に先立つ第一次的の經濟行動の一つであるが、凡ての生物はその貯藏に於いて集團的であり、協同的である。決して今日の人間社會のそれのやうに各自が排他的に獨自のものを貯藏するといふことはない。經濟行爲は本質的には、決してそんな風の個人的の行動ではないのである。人間社會に於いても個人的貯藏の絶對的のものは、之を「死藏」と稱して非經濟行爲と認められてゐる。經濟行動は總て集團的生存の行動であつて、決して個人的生存の行動ではない。寧ろ個人的行動の犧牲に於いて集團の生活を發展せしむるのが經濟行動の本質である。

故に經濟心は之を集團的生存の心意であるといはねばならぬ。すべて經濟的なるものは集團的なるものであるが故に、經濟心は、一つの集團的心理作用であらねばならぬ。

二　經濟の本質と變質

然るに近代の經濟思想に依れば、經濟的叙智は、純個人的利害に立脚すると信ぜらるゝ。此考へに依れば經濟心の動機は、個人的生存の意慾である。唯斯樣な個人的利害の競合の結果そこに意志の客觀的關係が發生して、個人的心意と必ずしも一致しない社會的經濟現象が發生するのであると云ふのが現在の經濟思想である。即ち個人的利害の生存競爭が社會的効果を持つと云ふのである。

然しながらもし個人的利害を經濟心の基礎とするならば、生物の集團生活の動機を矢張り個人的利害の根抵の上に置かねばならぬ。然も、集團の生活が個人的利害から出立したものではないことはいふまでもない。個人があつた時

には、そこに既に集團があつたので、人間の群生活に於ても集團の生活と個的生活とが、別々に意識さるゝに至つたのは極めて後のことであつて、群生活が充分に意識されるに至つても、個的生活の意識は容易に發生しなかつたのである。それは即ち、群生活が個體を本位とする意識の下に發展したものでないことの證據である。群生活が個的生活を基調とすると云ふことは、極めて近代的の所謂個人意識を持つて、社會現象を意識する一つの方法に過ぎない。即ちそれは一種の近代的意識に外ならないのである。

個人的利害が經濟心を基礎付けると云ふ思想は要するに、後に起つた事情を以つてそれに先在する事柄を解釋するものである。經濟的心意は後に至つて個人的利害を基調とする意慾の作用となつたが、之は初めに言つた通り、社會組織の變態的發達が、それに相當する意識の特別の典型を造り出したのであつて、經濟現象そのものに必然の事情ではない。經濟心をその本質に引き戻して考察するならば、それは集團的物質生存の叡智であつて、それ自體個人的特徴から離れたものである。

生存の叡智として經濟心を觀察するならば、それは畢竟生產行動に伴ふ心意に外ならない。前にも言つた通り、動物が生存の資料を蒐集する行動は極めて不經濟的である。尤も、動物の蒐集行動に於いても、可なり經濟的に發達したものもあるが、人間の生活に於いて單なる蒐集以外に生產の行動が發達したのは即ち、經濟心が特殊の發展を遂げたことを意味する。生產行動は、蒐集行動の不經濟的性質を排除する生存法なのである。蒐集の生活は、時間と勞力の莫大な浪費を以てしても、その得る所は極めて貧弱であり、又生存資料を得る方法としては、餘りに自然の爲めに限定されてゐる。之に反して生存の行動は、自然の生產過程に對して經濟的方法を加へるものであつて、それ自體、僅少の犠牲を以つて莫大の効果を收むる生存方法である。例へば一人若しくは二人の人間が數十頭數百頭の家畜を飼つて、その生產

力の結果を收むることが出來る。生産行動はそれ自體一種の經濟行動であらねばならぬ。從つてそれに伴ふ心意こそ經濟心なのである。それを言ひ換へれば、生産行動の組織的發達に伴ふ心意が、經濟心である。

生産行動は動物的蒐集の行動に比して、有ゆる點で經濟的であるが、然もその行動は、集團生活の組織的發達を持つて初めて完成さるゝものである。經濟行動が完成される爲めには、個人的利害の絕對性は排除される。もし個人的利害の絕對性が成立てば、そこでは決して經濟行動は構成されない。經濟學の考へる所に依れば、經濟現象は、生存の資料を個人生活の目的の爲めに得やうとする意慾から出立するといふのであるが、生産行動は決してさう云ふ個人的意慾からは發展し得ない。生存の資料を得やうとする意慾が、現代の人々に取つては全く個人的意慾であるかも知れないが——現代の人々に取つても全然さうであるとは思はれないが——社會的生存の本質から言へばそれは集團の生存を保障する衝動である。米を蒔くと云ふことは、現代人の意識に依れば、その米の收穫を個人的所有に歸着せしむる爲めの意慾であると考へらるゝが、然しさう云ふ心的傾向が即ち變態的なのであつて、本來は、米を蒔くといふ行動は、決して個人的行動であつたのではなく、集團生活の裡に發生した、集團的生存行動の本能なのである。從つてその米の收穫は、個的所有とは沒交渉な集團的收穫であつたのも當然である。今日でも生産階級の生産行動は何等個的所有と交渉なく、集團生活の資料を働き出す行動として行はれてゐる。生産者は生産物を個的所有とする意識なく——實際亦個的所有とすることは可能でない——生産行動に從つてゐる。即ちそれは、生産行動を集團の生存に關係する集團的生存本能の衝動として行動する本能に依存してゐるのである。それは丁度名匠が優秀な藝術品を作り出す衝動と似てゐる。名匠はその社會的本能を以つて、集團の感情を支配するやうな藝術品を作り出すことそのことを彼の行動の目的としてゐるのであつて、その意慾は、その製作物の個人的所有とは何等關係がないのである。名匠の製作能力は、社會的生存の一つ

の能力であつて、それ自體を働かせることに、その行動の意義があるのであつて、その製作物の個人的所有を動機とするものではない。凡ての生産行動は丁度それと同じであつて、集團の生存を保障する行動そのものゝ衝動的發展である。その行動が最も少い犧牲を以つて最も大きい効果を收めると云ふ法則に從つて發展する場合にそれが經濟的行動となるのである。名匠が一寸刀を振つたゞけで、優等な彫刻物が出來るのは、見方によれば生産行動の上に經濟的能力が働いてゐるのであると見ることも出來る。

斯くの如く、經濟心は畢竟、生産行動の叡智に外ならないとすれば、その衝動的發動は本質的には個人的利害を超越したものである筈である。寧ろそれは個的利害の犧牲から出立する。それは慾望から出立するのではなく、その反對に慾望の制約から出立するのである。

生産行動が單に欲望それ自體の現れであると云ふことは、到底想像されない、凡そ欲望に出立する行動はすべて消費行動である。消費も亦一つの行動であつて、簡單な動物的消費から進んで人間的消費行動に至れば極めて複雜な生活となつて現るゝのであるが、然し消費行動は、如何に文化的に粉飾されても、その出立點は個人的慾望である。反之、生産行動は必ずその慾望の制約から始まる。而してこの慾望の制約の始まる時から經濟行動が始まる。經濟心は最大の効果を收めやうとする意慾であるよりは寧ろ、その意慾を達する叡智である。而して此の方法は先づ、慾望の制約から始まるのである。一切の經濟的行動は、勞働行爲の經濟から出立するのであつて、勞力の自然法則に從ふことである。さう云ふ法則を必要とする行動と、その法則とを引き離して考へることは出來ない。經濟心は生産的行動に於て、その行動と引き離すことの出來ない關係に於いて結び付いてゐる心意に外ならない。

經濟行動の最も簡單なものは「貯藏」であるが、貯藏は生存の資料の剩餘を保存する行動であつて、あながち慾望の

制約から出立したものではないが、前に云つた如く、貯藏の本來の性質が集團的であることから考へれば、集團生活の間に於いて貯藏を完全にする爲めには、その貯藏物を浪費する意慾を集團的に制約しなければならない。或る群の生存の資料を貯藏するといふ行動が、集團的に成立する爲めには、集團の各員の個々の慾望は集團の約束の下に制約されねばならぬ。經濟心は、集團がある生存の資料を慾望する心の働きではなく、その慾望を調節する集團心理の作用である。かやうな本來の經濟心は、變態的に發達した社會組織の下に於ける經濟心とは極端の對照をなすところの心理である。變態的組織の下に於ける「貯藏」は、個的所有の蓄積であつて、制慾は個的所有と云ふ病的心理を動機として行はるゝに過ぎない。從つてその制慾は、何等社會的生存の心的制約ではない。

貯藏に次いで單純な經濟行爲として原始的「交換」が起る。交換は經濟心の可なり複雜な現れである。動物には偶然の交換はあるが、意識的交換はない。即ち一方の不足を他方の剩餘が補ひ、他方の不足を一方の剩餘が補ふといふ作用を意識的に企圖することは、動物には有り得ない。甲が厭きて捨てたものを乙が拾ひ、乙が厭きて捨てたものを甲が拾ふと云ふ偶然の交換があるだけである。人間に於いても、經濟心が、交換といふ作用を働きだしたのは餘程後のことである。原始時代に於いては、意識的交換は稀であつた。その時代は唯だ贈與があつて交換がなかつた。經濟學者の言ふ通り交換は贈與の進化である。此の事は、經濟心の本質を見極めやうとする場合に、輕々しく見過してはならない事實である。何故に贈與だけがあつて交換が無かつたかと云ふことは、慥かに經濟心の社會的性質を證明してゐるのである。

交換の最初の形は相互の贈與であつた。一方が生存の資料の剩餘を贈與すれば、他方が又生存の資料の剩餘を一方に

贈與するのである。之は經濟心の最も簡單な發動であるが、然し、最もよくその社會的性質を發露してゐるのである。然も、さう云ふ交換は多く敵對關係の部落の間に平和の保障として行はれたのである。元來部落と部落とが、接觸して戰爭を惹き起すのは必ず經濟的動機を潜在せしめてゐたのである。從つて戰爭には必ず財物と婦女との掠奪が伴つたのである。然るにさう云ふ動物的衝動が、より經濟的の心意に支配された場合に、掠奪に換へるに相互の贈與が起つたのである。經濟心はそこに戰爭心に變つて有力な支配を始めたのである。

此の相互の贈與に於て働く經濟心は、發達した社會の變態的交換現象とは全く違つた、社會的心意である。發達した社會の交換現象はそれに依つて、集團の生活が經濟的に保障されるものであるに係はらず心意の現象としては、寧ろ掠奪的關係に近いのである。交換者は互に最も少く與へて、最も多く得やうとするが、その動機は全く個人的利害であつて、個的所有の衝動である。最も少く與へて最も多く得やうとする意慾は、即ち經濟心であるが、その性質は、そこでは最早社會的から個人的に變化してゐるのである。從つて交換行爲が、相互の生活を保障し合つてゐるに係はらず、それを働き出す心意は反社會的である。之は全く變態的社會組織の爲めに生じた心的變質狀態であつて、經濟心の本來はさう云ふ性質のものではなかつたのである。

贈與は經濟心の本質的作用である。これも意識的に動物の間に行はれてはゐないが、集團の生活は贈與なしには決して成立たない。貯藏も亦一種の相互の贈與である。即ち貯藏に於て、生産の効果を多く齎らしたものは、少く齎らしたものに贈與してゐるのである。斯樣な關係は今日も家族の生活に殘留してゐる。總て經濟的行動が起る場合は社會的であると言つたが、それは集團の生存を最も經濟的に維持する心意だからである。贈與は即ち一つの集團内に於いては、生

存の資料は共同的であることの意識である。生存の資料が個的所有である場合には、交換は起るが決して贈與は起らない。贈與は、生存の集團的保障であつて、他の生物にかても集團的生存の爲めの意識的贈與は行はれてゐる。故に人間に於ては相互の贈與はあつても、それを「交換」と意識することはなかつたのである。最も簡單な交換即ち物々交換でさへも、同一集團內にては有り得なかつたのである。原始的生活に於いては、一集團の中にあつて、剩餘を提供する場合には、決して代償物を求めなかつたのである。今日の經濟學はさう云ふ行動を經濟行動とは認めないで、非經濟的と稱する。ところが、本質的にはさう云ふ行動こそ集團の生活に必然なる經濟行動なのである。それは最少の犧牲を以つて最大の効果を擧げる一つの作用なのである。剩餘を持つものは、それを捨て去り、不足してゐるものは自から資料を更に作らねばならぬことは非經濟的である。そこから贈與が起るのであつて、これに伴ふ心意は、即ち最も簡單ではあるが本質的な經濟心である。今日は缺乏と剩餘とがさう云ふ關係に於いて、互に補充することをしないで、剩餘を持つものは、缺乏してゐるものに對し、それを供給するに當つて、少しでも多くの代替物を得やうとする。その心意を經濟學は、所謂經濟心としてゐるのであるが、左樣な經濟心は剩餘を持つものが社會的立場に立たずに、社會と對立する關係に立つと云ふ變態的組織の結果である。

交換の心理はそれ故に贈與の心理の發達したものであると云ふが、發達した經濟組織の下に於ける交換は慥かに變態的である。原始部落が、物々交換を行ふに當つて、決して後のやうな交換の形式を採らずに、互に剩餘を放棄する形式を取つたと云ふのは、即ち部落相互の間が敵對關係にあつても、互々は名々の剩餘を持つて相手方を脅かすやうな心意——今日の交換經濟の心理——を持つことは出來なかつたのである。即ち互々に剩餘を放棄して何等相手方から求むることの無い形式を取つたのである。反之、今日の交換に於いては、剩餘を持つものは、それを不足してゐるものに對し

て出來るだけその缺乏に因る脅威を大ならしめることに依つて最も大きい代償を得やうとする。此の本質的のそれと、變態的のそれとの二つの交換狀態を比較して見ると、前者は敵對關係の間柄に於いてさへも、互の贈與の意識の上に立ち、後者は決して贈與の心意を持つものでなく、その剩餘を持つて相手方の不足に對し出來るだけ有利の地位に立たうとするのであるから、前者の道德的性質に對し後者の反道德的性質は極めて顯著なのである。

從つて今日の交換心理は、經濟學が示してゐる通り、最もよくその個人的本能の方面から說明することが出來るのである。如何にして交換が起るか、と云ふやうなことも、全く個人の個的本能から說明されてゐる。然も、經濟現象は、前述の如く、そのやうな個的現象ではなく、集團の生活の衝動なのであるから、本質的の交換の心理が個人的衝動から說明される譯はない。今日の經濟學は、今日の交換の心理を說明することは出來るが、何故に原始社會に於て、交換はなく、贈與のみがあつたかを說明することは全く不可能である。交換は元來贈與の變態であるとすれば、贈與の心理を說明することの出來ないものが、交換の心理を說明し得る譯は無い。交換の社會的性質は何處までも、相互の贈與がそれを說明してゐるのである。その贈與の現象は今日の經濟史に於いては、非經濟行爲として全然說明の出來ない行動とされてゐる。それは即ち、今日の謂ゆる經濟現象なるものは、生存行動そのものゝ經濟ではなく、變態的經濟組織のそれだからである。本質的に社會的な心意を以てしては、今日の經濟心意は說明されないと云ふのは、經濟現象が變態的の發達を遂げた爲めに、經濟心意も又變質した爲めである。

三　經濟心の變質

經濟心は斯くの如く社會的意識に立脚する集團生活の心理である。然るに發達した社會に於いて、經濟心が個人的利

害を基礎とする利己心として意識さるゝに至つたのは如何なる事情に依つたのであらうか。集團の生活に於いておのづから集團的に發動する衝動が、次第に個人的性質を帶びるに至つたに就いては、其處に何等かさう云ふ反社會的變化を引き起さしめた事情が無ければならない。すべて或る心理が正態から變態に働くに就いては、其處に生活の組織に於いてそれを便誘する作用があるのである。そこで何が經濟心をさう云ふ反社會的發動として働くやうに導いたかといふ事情を考へねばならぬ。

或る生活行動が、集團の生活を保障する行動として衝動的に働いてゐた場合に、人間を――おのづからさういふ行動を取つてゐた場合に――人間をその行動から回避せしむるに至るには、必ずその集團の生活の有機的關係に何かの變化が生じたに相違ないのである。圓滿な有機的關係の下に於いては、その全體の有機的關係を働き出す各人の行動は本質的に衝動的に集團的なのである。然るに個人の心意がさう云ふ集團生活の衝動を離れることゝなつたとすれば、それは必ずさう云ふ衝動を働かした有機關係が何處かで害なはれた結果であらねばならぬ。例へば自然の親子の間には、互の生活を一つの集團的心意に纏めて、親も子も、衝動的に互々の生活を保障し合ふのであつて、互の行動の衝動的性質を妨げる何ものもないのである。ところがそこに繼母だの繼父とか云ふものがその關係に入り込んで來ると全體の有機關係が害はれて、本能的に集團的であつた親子の行動は、その衝動的本質を失つて、兩者の行動が動もすると敵對的となる。本來家族群を構成してゐた社會的心意が、さういふ敵對關係の下に於いては、結局反家族的傾向を取つて進むことゝなる。經濟心も亦集團の有機的關係が害はれない限り決して個人的利害を以つて、集團の利害に對抗するといふやうな心意では有り得ない。さう云ふ反社會的傾向を取るに至つたのは、集團の有機的關係の機構に變化が起つたからである。

かやうな變化は、集團の組織的自然の有機關係を保持してゐる間は決して起り得ない。そこにその有機的關係に一定

の變化が起つて初めて、經濟心が集團の生存と敵對關係にあるところの意識となる。

經濟心は本來生產行動の意識であるから、經濟的意慾が、生產行動と離るべからざる關係にある間は、それは決して反社會的とはなり得ない。生產行動に於いて經濟心が働けば、集團の生活を有効にするのみであつて、それと敵對的の性質を帶びることは絕對に無い。經濟心が反社會的で有り得る爲めには、經濟的意慾が單純な物質的欲望として働く場合に限る。言ひ換へれば、經濟心が、生產行動を離れて働く場合には、必ず反社會的となる。が、元來生產行動の法則である經濟心が、如何にして生產行動を離れて働くやうになるのであらうか。それは全く組織の變化に依存する現象である。社會の組織が、生產の集團的組織を基底として組み立てられてゐる場合には、生產行動は始めに言つたやうに、必らず共同生存を保障する集團的行動である。隨つてそこに經濟心が働けば、贈與又は簡單の物々交換――贈與の心理に立脚する――が發生する。經濟心はその場合全く社會的である。然るに社會の組織がこの生產生活の基礎を離るゝとさういふ社會に於ける生活の衝動は、生產の衝動とは全く別な他の本能の作用に待たねばならぬ。

社會はその基礎を生產に依らないとすれば、蒐集に依る外はない。蒐集が生產に依つて社會生活の基調をなすに及んで、そこに生產に關聯する心理が、蒐集に關聯する心理に取つて代はられる。社會を支配してゐた生產の經濟心は、そこでは蒐集の經濟心に取つて代はられる。

社會生活の知識的變化が右のやうな傾向に沿ふて進めば、其處に生活の意識に一大變化が起らねばならぬ。元來一集團の內に於いて、生產の生活者が、蒐集の生活者と對立すると云ふ社會關係が發生すれば、その集團の生活者の心理は、單純に生產生活の心理に支配された集團のそれとは決して同一のものであり得ない。單純に生產の心理が支配する場合には、一集團の全生活の關係の裡に何等敵對的の關係は存在しない。屢言つた如く、全集團が生產し、生產が全集團

の生存を保障するのである。然るに一集團の中に、一方に生産群の階級があり、他方に蒐集群の階級があることになると、その二つを對立せしめてゐる全社會群の心理は、決して統一されないで、二つの別々な對立的な心理を生ずる。さういふ生活組織に於ては、蒐集群の生活は生産群の生活に依頼して、全く生産のない生活を營み、生産群の生活は、蒐集群の生活の犧牲としての生活であるといふ關係に置かれるから、兩者の生活意識が一致しやう筈がない。生産本位の社會群に於ては決してさういふ對立はなかつた。生産の爲の犧牲とその生産の効果とは、同時に同一群の負擔であり享樂であつた。之に反して對立關係の社會群に於いては、生産の犧牲的行動は、單に、犧牲として終了し、決して生産効果の享樂を伴はない。而して他の一方の非生産的な蒐集群の方は、生産の効果の享樂だけあつて、生産の犧牲が全くない。斯様な片輪な生活群が二つ集て、一つの社會群を構成してゐるのであるから、さういふ社會に、全般に生産群として纒まつてゐる社會に於けるやうな生活の意識がそのまゝに働き得る譯けはない。而之生産群としての社會意識は、此の後に起つた事情による變態的組織の下に在る社會に於いては却つて反社會的のそれとして意識されるのである、例へば、生産群としての社會に於いて極めて社會的であつた共有といふやうな意識は、今日の社會に於いては、危險思想として排斥されてゐるのである。隨つて本來社會的であつた經濟心は、さう云ふ社會に於いては勢ひ變質的心意とならざるを得ない。

四　經濟心の變質する過程

經濟心が變質する過程は、即ち生産群と蒐集群との對立關係の生活の過程であるが、斯様な對立關係の生活が生ずるに就いては、內的並に外的の事情がある。內的には、群生活の中に生産を廻避する階級の發生することであり、外的に

は征服の關係である。如何なる社會群も生産群としての統一體たることを失つて對立關係の群生活となるのは、必ず此の二の事情に依つてゐるのである。

一つの群生活の中に、生産を回避する集團が發生することは、原始的生活に於いて歴史的に認めらるゝ現象である。それは色々の形態を取るが、概して言へば長老政治の發生である。長老政治は必ず迷信的起因を持つものであつて、宗團的階級制度の發生と關聯してゐる。元來生産群としての社會に於いて、生産行動から離れてゐるものは、たゞ神の一族と、それを代表する人間の一團とであつた。此の一團は生産の神秘的動機を操つてゐるものであつて、直接生産行動を取らず、生産に對する支配權を持つてゐるものである。而も生産の神秘的動機を握ると云ふ事情の爲めに、一切の生産要具は此の神秘的集團に所屬すると同時に、一切の生産の果實も亦、此の神秘的集團に所屬すると想定されたのである。斯樣な意識は無論迷信ではあるが然し、本來、生産は集團的行動であり、生産の果實は集團に歸屬すると云ふ意識が、迷信的にかやうな神秘的表現を取つたに外ならないのである。それは生産に關する一切を社會的關係に歸屬せしめ個人的歸屬を認めない所の社會的意識である。所が神秘階級は、此の一般的信仰と、それに基づく組織の進化とに依つて、生産を廻避して、生産の果實だけを收得すると云ふ、所謂蒐集群の生産を基調とする階級として發展したのである。

而も斯樣な信仰が、その組織と共に圓滿に作用してゐた間は、さういふ社會に於てはまだ後に見るやうな、蒐集群と生産群との敵對關係は無かつたのである。ところが、その組織が發達して、生活廻避の群が、その階級的構造指定を發達せしめ、全社會群をその生活廻避の組織の下に置き、生産群としての社會を蒐集群としての社會に變化させるに及んで、社會意識はつひに變質的に發達したのである。即ち生産群の意識が全社會を支配せずに、蒐集群の意識が全社會を支配、

するに至つて生産群は自已の生活を犠性として蒐集群の生活を完成せしむる道具となつたのである。それは即ち奴隷制度である。

こゝに至つて、社會的本體を爲してゐた生産群は社會的隷屬の地位にある奴隷群と變つたのである。隨つて生産群として統一されてゐた社會の意識が、一方に於いては蒐集群に於いて變質し、他方に於いてはこの奴隷群に於いて變質したのである。悉しく言へば、蒐集群に於いては、生活の理想は生産を回避して生産の果實を收得することであるから、その集團生活の法則は、生産の心理を極端に離れて、純消費の心理に向ふのである。隨つて「生産すること」に伴ふ生活能力並に生活心理は、全然此の階級に於いて缺けてゐるのである。そこで、生産行動に伴ふ經濟心はその階級に於いては、經濟心から生産の要素を捨象した心的態度となる。此の階級に於いては、生活の經濟とは、生産の果實を個的所有に歸屬せしむる、物理的法則を云ふのである。今日の經濟學が、個的所有の物理學であるのは即ちその結果である。それと同時に此の群に對立する生産群に於いても、生産行動に伴ふ心意は、その群が生産行動で生きるものである限り、有力に保存されてゐるに係はらず、その生産行動そのものが、生産群として統一された社會に於けるやうに、全團の有機關係の衝動的發動であるといふ性質を失つて、對立する蒐集群の爲めに强制された奴隷的行動と變化した爲めに、生産行動の心理も亦、强制された行動に伴ふ奴隷的心理に接近して來るのである。强制された行動に伴ふ心理は、本能的の自然狀態とは異つて、出來る丈けその行動を回避しやうとする傾向を持つ。奴隷勞働がこれである。奴隷勞働は、生産行動の心意を、殆ど全く失つて機械的强制の下に働く、機械的行動である。尤も蒐集群の下に於ける生産群の行動は、全然さう云ふ奴隷勞働に墮する譯けではなく、多くの對立的社會群に於ける生産群は依然として、生産群としての社會本能を保存してゐるが、然しやゝもすれば蒐集群の敎化に依つて、蒐集群のそれと同じやうな、生産回避の心

理に墮するのである。

右の樣な關係は、あながち原始的にのみ有り得るのではなく、發達した社會に於いても新たな「長老」は色々の機會に於て發生する。生産の信仰的中心であつた長老が、生産を回避する階級的構造を形造つたやうに、生産の信仰的中心ではなく、管理的中心としての長老も次第に生産を回避する階級となる。近代の資本家階級が即ちそれである。蒐集の生活を一層大規模に發展せしむる爲めに、單にその果實を收得する貴族階級の態度から一歩を近めて、生産の機構の中に於いて、蒐集の生活を發展せしめるのが、資本家階級の生活である。それは矢張り進歩した長老の生活である。

次に右と同じやうな關係は外的事情に依つて發生する。即ち謂ゆる征服國家の生活組織がそれである。それは生産群の社會が蒐集群の社會と接觸した場合にも起り得るし、亦、生産群同士の接觸の間にも起り得るが、歷史的事實としては、概ね蒐集群が生産群を征服してゐるのである。此の場合には極端な奴隸制度が發達し、大規模の蒐集生活が成立するのであつて、前に述べたやうな意識の變質化が極端に起るのである。古代國家に於ける蒐集群と生産群との對立關係は、殆ど牛馬と人間との關係の如くに、生産群の意識を全然社會意識から排除し、生産群を全く單純の機械と化して了ふのである。即ち心意のない生活群として了ふのである。隨つてさう云ふ社會群に於いては、生産行動に伴ふ生活意識は、社會的には全く失はれて、一方には生産掠奪の意識が存在し、他方には單純に生産行動を苦痛とする牛馬的意識のみが存在する。で始めに述べたやうな、社會群の有機的關係に於いて生産行動を社會的の意味で衝動的に働き出すやうな行動も意識も存在しないのである。

經濟心は斯くの如くにして、その社會的本來の性質から離れて、全く變質的心意と墮落するのである。

五　變賣的經濟心の不經濟

右に述べた樣な、組織の變化が起つた社會に於いては謂ゆる經濟現象とは、蒐集群の生活組織の經濟であつて、生產群の生活組織の經濟ではない。その結果それは次に述べるやうな變態的現象となるのである。

經濟心は生產群の生活組織に於ては群の生存を保障する意識として働くこと既に述べた通りであるが、蒐集群の生活組織に於いては、さう云ふ本質は全く失はれて、經濟心はたゞ蒐集生活の利害を基礎とする心意として作用する。蒐集の生活に於いては、生活の叡智は全く生產の叡智から離れる。既に述べた如く、生產群の社會に於いては、生活の叡智は生產の叡智であり、經濟心は生產行動の經濟であるが、之に反して蒐集群の生活に於いては、個人的所有の叡智が經濟心である。（蒐集群の生活に於いて個人的所有の制度が支配するに至る事情は、爰に詳說する遑はないが、要するに、元來生產群の社會に於いては、個的所有の發生する事情は存在しない。唯だ前に述べた樣に生產を支配する神秘的生活者即ち、神々に於いてのみ個人的所有は有り得たのである。土地でも生產物でも神の個人的所有であつた。前述の如くさう云ふ意識は元來所有が個人に歸屬せずして社會に歸屬すると云ふ意識の反映であるが、その心的生活を代表する人間の階級が發生するに及んで、神の個人的所有はその階級の個人的所有に變化したのである。故に絕對的の個人的所有は右の階級即ち、蒐集生活者の階級にのみ有り得たのである。つい近代に至るまで、個人的所有の絕對と云ふとは、生產階級の間には全く認められてゐなかつたのである。即ち個人的所有は蒐集生活の階級の所產であり、その階級に於いてのみ絕對的事實であつたのである。）如何にして生產物を個人的所有に歸着せしむべきかと云ふことが、蒐集生活の叡智である。それは即ち今日の經濟學が認めてゐる通り、全く個人的心理である。凡そ斯樣な個人的心理は決して、生產

群の集團に於いて起り得るものではない。全集團がその生存を有機的關係に於いて結び付けてゐる場合には、各員は全集團の生存を保障する行動を衝動的に働き出すのであつて、彼等の行動の動機は集團の共同生存である。隨つてそこには決して個的所有を動機とすると云ふ衝動は起り得ない。かう云ふことは一寸考へると空想のやうであるが、現在の家族群の生活は即ちさう云ふ集團的本能を全く失つてはゐない組織なのである。全社會が一つの生產群として有機的に統一されてゐる場合に於いては、その群の個人心理は即ち、集團の共同生存の心理であることに不思議はない。

然るに社會的生活が集團的共同生存の生產行動を離れたとすると、その群の生活は、全く生產の果實を收得する外に方法はない。而して此の收得の心理は神以來個人的所有だつたのである。生產行動の心理が唯だ此の個人的所有の心理を妨げるのみであるが、一つの集團が全然生產行動を離れて了へば、その群の心理が個人的所有を妨ぐる事情はない。例へば土地に關する心理について言つても、その土地を耕作するに就いては、必ず群的協同の意識に依らねばならぬ。——それが即ち經濟心である——耕作の方法に於いても協同的であり、其の他の生產要具の使用に就いても、甲の發見は乙の利用する所となり、甲の耕作地を流るる水は乙の耕作地に灌漑する。而してその生產物の共同の利用が互の生活關係として起らねばならぬ。——そこに贈與の現象が起る——兎に角社會的に成立してゐる生產行動が純個人的生活から生れるとは考へられない。反之蒐集行動に於いては右と正反對に、土地に就いていふならば、或る土地を個的所有とする所から出立する。一定の集團生活の生存の資料を得る爲めに缺く可からざる土地を、その共同の要具から個人的所有に變化せしめ，その共同の使用を禁止し，その使用に對して代償を求めるのが、蒐集生活である。蒐集生活に於ける經濟心とは畢竟さう云ふ個人的所有の生活の叡智である。凡て複雜なる經濟現象の根柢は恐く、斯樣な單純な個的所有の經濟から成り立つてゐる。さればそれは人々のいふ通り慥かに利己心の發動である。

蒐集生活の經濟心はそれ故に、嚴格に言へば決して最少の犧牲で最大の効果を生み出す作用ではない。既に言つた如く最少の犧牲で最大の効果を收むると云ふ作用は、之を生存の過程の上から言へば、生産行動に於いてのみ有り得るとである。効果とは、生存を保障する物質的効果を言ふのであるが、それは決して社會を犧牲として個的生存を保障するものの意味ではない。さう云ふ心理は經濟心ではない。それは社會的生存の意味に於いて經濟的効果を持つものであらねばならぬ。社會的生存に取つて不經濟であり、個的生存に取つて經濟であると云ふものは、經濟心ではなく、反社會的破壞的心理である。随つて生産群の社會に於いては決してさう言ふ心理は發生しない。然るに蒐集群の經濟は即ち、此の反社會的意識に立脚する。その經濟に於いては決して最少の犧牲で最大の効果を收めることを必要としない。古代帝國の大消費經濟は即ち、蒐集群の經濟心の反社會的性質を極端に發揮したものである。即ちそれは最少の犧牲で最大の効果を生み出さうとする意慾ではなく、最大の犧牲で最大の効果を求めるのである。古代國家の生産濫費は即ち、莫大の勞力と物資とを犧牲として、全く非經濟的にその効果を收むる組織だつたのである。斯様な極端な例は後の蒐集群の生活に於いては見るとの出來ない位いのものであるが、然し此の特徴は一貫して蒐集群の經濟に附随してゐるのである。

近代の經濟は此の古代的不經濟を矯正する上に於いて、充分の科學的知識を利用したものであるが、然しその經濟心は決して最大の効果を生み出すに犧牲の最少であることを必要としてないのであつて、最大の効果を求める爲めには、最大の犧牲を惜まないといふ點に於て依然として古代經濟の特徴を失はないのである。生産の科學的組織は充分に發達し、それか爲めに、生産過程に於ける經濟的機構は、完全したのであるが、然も此の機構を運用する組織を社會的生存の經濟の上から見れば、決して最少の犧牲を以つて最大の効果を收めやうとしてるのではなく、それと反對に、如何な

る犠牲を拂つても最大の効果を收めやうとしてゐるのである。資本主義經濟の組織は矢張り古代經濟の組織と同じく最大の犠牲を生産群に拂はしめて、最大の効果を蒐集群に收めやうとする組織であつて、之を全社會群の生存の組織として見れば、全く不經濟的である。

斯様な不經濟的組織の生活に於いて、蒐集群の生活に作用する叡智が即ち、變質的經濟心なのである。此の群の生存行爲は、その群に特別な生活の根底に立つて始めて成立するものなのであつて、之を全社會群の生存行爲として成立せしむることは不可能なのである。隨つて蒐集群の經濟は決して全社會群の經濟としては成立たない。一つの集團の中に於いて唯だ蒐集群の生活に於いてのみ作用する所の心意なのである。一方の生産群に於いては、絕對にさう云ふ心意と相容れない生活の經濟的心意を以つて行動してゐるのである。而して社會群の生活を本質的に支持するものは、蒐集群の生活のそれではなく生産群の意識なのである。さればそこに何かの事情から蒐集群の生活意識が全然人間から失はれ、蒐集群の經濟心が全く社會に働かなくなつても、その社會群の生存の上には少しも影響しないのである。反之、若し生産群の生活意識が全然社會から失はれ、生産群の經濟が人間の生活に全く働かなくなれば、社會は一日も生存を續けることは出來ない。それを以つて見ても、本質的經濟心と變質的經濟心とが、社會的に如何にその性質を異にするかを知ることが出來やう。

六　現代的傾向

經濟心を上述の如く社會的生存の叡智として觀察すると、蒐集生活の經濟心は、全く蒐集生活と云ふ特別な生活が社會的に成立した結果の意識であつて、その心意は斯様な階級的組織が、そのまゝ進行することを條件として存在する意識

である。ところが既に言つた如く、蒐集生活の組織は、その純然たる形に於いては既に過去に於いて最頂點に達したのであつて、今日の蒐集生活の階級は生產の管理といふ、稍々單純な蒐集生活を離れた所に僅かにその生存理由を認めてゐるのである。無論純然たる蒐集生活が尙ほ殘留してゐると共に新な蒐集生活の階級が發生したのであるが、而も、蒐集生活が生產の機構を遠ざかれば遠ざかる程その生活が困難となつて行くことは拒まれない社會的事實である。貴族は地主に地步を讓り、地主は次第に資本家に地步を讓ると云ふ傾向は即ち、單純な古代的蒐集生活が次第に困難に陷入ることを暗示するものである。かやうな傾向が更に進轉しつゝあるのが、即ち現代的進化である。生活階級が次第に社會的地步を占むるに至り、生活の機構が古代のそれのやうに全く生產階級を牛馬のやうに除外した組織の上に成り立つことは絕對不可能となつた。それは即ち組織の進化が蒐集群の生活組織の絕頂から次第に生產群の組織の方へと下り坂になつてくるのを示すものである。

斯樣な進化が社會的意識の上に如何いふ變化を及ぼすかと云ふに、それは各の方面に極めて複雜な現れを見るであらうが、殊に蒐集群の經濟現象が、次第に生產群の經濟現象に近づきつゝあることも亦その顯著な一例である。例へば絕對的個人所有に立脚する蒐集生活が今日では、その所有を個人的から集團的に逆轉せしめつゝある。信仰の上では依然として個的所有の神聖が保たれてゐるが、事實に於いては、その個的所有を集團的に轉化せしめ、而して何人にも歸屬しない組織の下に於いて、生產が行はれると云ふのが一般的傾向であり又、その組織を出來るだけ個人的利害から引離さうとする傾向に進みつゝある。此の事だけでは決して個的所有の崩壞とはならないが、從つて蒐集群の生活の崩壞ではないか、然しその傾向に於いては蒐集群的特徵の減退である。

又貨幣經濟は個人的所有をその絕頂に持ち上げた組織であるが、近代の經濟はこの貨幣經濟から離れて、謂ゆる信用

經濟に進んでゐる。此の信用經濟は根本的には互々の生産能力の信用であるといへる。甲が乙を經濟的に信用すると云ふのは、乙の生産力が、甲の生存を保障する能力を持つことの信用である。即ち、甲と乙とか生活の有機的關係に於いて結び付けられてゐることの承認である。故に信用經濟は實は、古代部落の贈與の經濟の本質と一脈の共通點を持つてゐるのである。古代の贈與は、甲が乙の生存を或る場合に無償で保障するのであるが、然し此の無償は必ず、乙が或る場合に甲の生存を無償で保障することのあるのを無意識に豫想するものであつて、生存の互助關係が、兩者の間に成り立つてゐる場合の當然の行爲である。信用經濟は即ち同じ互助關係を豫想するものであつて、それが一歩進めば互の贈與となる譯である。

斯樣な進化が行はれつゝあるに當つて、それに伴ふ社會的意識は抑々如何なるものであらねばならぬか、即蒐集生活の意識か又或ひは生産生活の意識かといふに、言ふまでもなくそれは後者の生活意識であらねばならぬ。生産生活の叡智は如何なる意識の變化が起つても、必ずそれに依つて生活を恢復する人間的意識である。凡そ或る社會的變革が組織を崩壞せしめる場合に、次の組織を根底付ける可く働き出すものは即ち、生産群の意識である。文化崩壞の歴史を見れば分る通り、文化は蒐集生活の發達に伴ひ、その崩壞と共に崩壞する。そして所謂歴史回歸說の唱へるやうに再び原始的の生活意識が復活する。それは先きに崩れた文化そのものよりは野蠻であるが、その野蠻性は生産群の意識に依つて根底付けられてゐると云ふ點で鞏固な生活上の根柢を有つものであつて、時代を建設する基礎となるのである。而して此の生産群の意識は必ず一貫して蒐集群に虐げられてゐる生産群の中に保存されるのである。

此の生産群に於ける生活の意識は即ち本質的の經濟心である。此の經濟心は常に生産行動と密接し決してそれを離れない所にその社會的性質を持つてゐるのである。而して此の社會的性質に依つて蒐集群の生活の頽敗に基く組織の崩壞に當つて、次の生活を建設する人間的心意として作用するのである。

日本の特殊性と歴史の必然性

青野季吉

一

思想界は混亂してゐるとか、晨にベルグソンを迎へ、夕にはアインスタインに應接する日本の思想界は、泰西の波に搖られて、行くところを知らぬとか云つた皮肉や非難は、屢々我々の耳にするところである。そう云ふ場合に常に持出されるのは、日本人の模倣的と云ふ言葉である。日本の思想界が爾く晨夕を知らぬ漂浪の生活を生きてゐるのは、その模倣性によるものだといふのである。しかしよく考へて見ると、一種のジャーナリズムに基く流行の如きものを、一つの思想の流れだとするやうな認識からすれば、確かに日本の思想界は、根の無い浮草の如きものとも言ふことが出來る。しかし今日の如きジャーナリズムの過度に旺盛な時代に於て、その犧牲として誇張された思想的の現象を以つて、思想の一つの流れとするのは、余りに皮相なる認識と云ふ可きである。事實今日の如きジャーナリズムの下では、何が擴大され如何なる現象が挑發的に報ぜられるか、まるで見當がつかないのである。そう云ふ報道によつて思想の流れが、晨夕を知らぬと云ふが如き推斷を下すことは、輕卒といふよりは寧ろ愚なりと云はなければならない。

思想とか思想界とか云ふことを、そう云ふ表面に浮遊した現象と執らないで、國民生活に則した思想的傾向として見ることが何よりも肝要である。思想とか思想界とか云ふことを、その意味に解して觀察すると、思想界の混亂などと云ふことは、そう容易にあり得るものではない。國民生活に則した思想的傾向といふものは、國民生活の中に起つた變化のそれに應ずるものがない以上は、容易に變化し得るものではない。その代りまた一旦その變化を必要として、何等かの傾向を發展し來れば、それは容易に後へ引戻し得るものでもないし、單なる模倣性を以

つて忽ちにして他に乘り變へると云ふが如きことは、あり得るものではない。かういふ事實は局部々々の限られた範圍に觀點をおかないで、長い時代と廣い範圍に亘つての、國民生活に於ける思想の變化乃至發展の跡を見れば、誰の眼にも容易に分るところである。

國家とか或る集團とか云つた場合で無くして、比較的そう云ふ單なる模倣性や謂ゆる盲動の誘惑に乘ぜられ易い個人の場合でも、やはり同じである。何等か新奇なる思想を紹介したり唱導したりすることは、必らずしも面倒なことではない。然らばそうした個人がその思想の指示する生活にまで、從前の生活を革新するかと云ふに、それは決して容易なる業ではない。例へば我國の知識階級の一部に、ニヒリズムに近い思想の衣を着けてゐるものがある。それならばその人の生活が、例へばかの十九世紀末のロシアのインテリゲンチヤに見たやうな、虚無的生活であるかと云ふに必らずしもそうで無い。生活の事實から見ると、極めて傳統的な反ニヒリスチツクな、せいぜいがリベラルの生活を生活してゐると云ふ實例は、屢々我々の目撃するところである。ところでかゝる場合、その個人の思想はニヒリズムであるかリベラリズムであるかと云ふ問題を呈出したとする。その個人が口にニヒリズムを唱へて居ると云ふ單なる事實を以つて、それはニヒリズムであるとは云へまいと思ふ。それよりも寧ろ生活がその形態をとつてゐるところのリベラリズムこそその個人の本統の思想と云ふ可きである。それがそうだと云ふ證據は、その個人が生活に則した何等かの行動を執る場合にはニヒリスチツクなる思想的動機よりは、リベラルの生活背景によつて方向を決するのでも分る。その個人の口にするところを以て觀れば、いかにも凡てと辻褄が會はない場合が多い。しかしその生活を動かしてゐる思想を執つて觀れば、その個人だけが飛び離れた思想を持つてゐると言ふが如きことは、滅多にあり得るもので無い。

國民生活を基盤として考へた思想なり思想界なりも同樣である。晨夕を知らぬ如き輕業的飛躍的な思想は、それがいかほど大袈裟に傳つたにしたところが、いまだ以つて國民生活の思想的傾向とすることは出來ない。我々が思想なり思想界なりを問題とする場合には、常にこの準備が必要である。それで無いとすれば、やはり俗眼俗情の人々と共に、思想界は混亂してゐる國民生活危ふしなどと云ふ空虚な言辭を弄せねばならぬ結果となる。その場合混亂してゐるのは國民生活に非らずして、實はその如きことを口する低識淺情の徒輩である。

そこで思想なり思想界なりをさう云ふ風に解すれば、今日の

日本の思想界は、混亂を極めて居るなどとは、如何にしても言ふことは出來ない。混亂を極めてゐるどころの騒ぎではなく、漸次にはつきりとして行つてゐるのである。、否極めて明白なる軌道を執つて進んでゐるのである。そしてそれは浮游でも模倣でも無く、當然の原因の結果として、當然の成行を觀て居るのである。言葉を換へて言へば、國民生活に於ける異質性が、今日ほど明白なる思想的表現を執り來りつゝある時代は、まだ嘗て無いと云つてよいのである。而もそれは決して突飛なものでも、新奇なものでも無く、極めて當りまへのもの、當りまへのものゝ發展型である。

然らば今日の日本の思想界は、いかなる型に於てハツキリしてゐるか。今日の日本の思想界の分野は、かなり明白なる分界線を持つて、國家主義的思想、自由主義的思想、社會主義的思想の、それぞれの方面へ分化しつゝあることは、誰の眼にも容易に窺るところである。而もその分化が、刻々に明白になつて行つてゐることもまた、深き觀察を用ひずして解することが出來る。いまその三つの思想が同時に併立して、相交錯し相鬪つてゐると云ふ事實を以つて、思想界が混亂してゐると言ふならば、いつの時代か思想界が統一した時代であつたらう。

私はいまだ日本の思想界が國家主義、自由主義、社會主義の三つの流れを刻々に明白にしてゐると云つたが、それは何も今日に限つたことで無く、その三つの思想の流れは早い時代から流れ來たつたものであつて、それは特に思想などと名付く可きで無く、一つの傾向とも云ふ可きものであつて、思想と云ふからには、更に一段と特殊性を帶びたものでなければならぬと主張する人があるかも知れない。しかし前段で私が說いた意味に於ける國民生活に則した思想と云ふ場合には、一個の思想的傾向と云つた點にまで達したものを指すのである。そう云ふ生活に則した思想的傾向こそ眞の國民生活の思想だと云ふのである。その意味に於て、雜多なる色彩と特殊性とを持つた思想上の現はれを、右の三つの傾向として取扱つてよい理由がある。左樣な雜多なる色調と特殊性とは、それを國民生活に於ける思想といふ視點からすれば、國家主義、自由主義、社會主義の三つの大きな流れの中に、十分に溶し込むことが出來るのである。そしてまた、それを十分にその三つの流れに溶し込むことが出來ると云ふ意味に於て、その三つの思想的の流れは、その分野を明白にし、國民生活に於けるそれぞれの基礎を固めて行つてゐるのである。この事實は、いかに今日の思想界の分野が鮮明となりつゝあるかを物語るもので無くて何であらう。

勿論、この三つの思想的の流れは、何も近い過去に於て、新

らたに發生したものではない。否、その萠芽は既に明治維新に於いて殖えつけられ、その後の日本の資本主義の發展の途上に於いて、漸次にデヴエロープしたものである。その意味に於て明治維新から今日までの日本の思想界は、もろもろの外貌を以つてしての、實はこの三つの思想傾向の發展過程だと云つてよいのである。たゞ今日の特色は、この發展が一定階段に達して、三つの思想が鮮明の度を加へ、政治的に表現されるまでに社會的の基礎を具へて來たといふ一點である。國民生活に於けるそれぞれの思想的分野が明別されて來て、それが政治的な運動を形成しやうとする線に來たといふ一點である。然らばその三つの思想の流れが、鮮明になつて來た原因、それの當然に基礎す可き經濟的原因は何であるか。その說明は後段へ保留しておくが、こゝで必要なる限りを述べておけば、それは日本の資本主義の發展の結果として、階級分裂がいよ〳〵明白となつたといふことである。資本家階級と無產階級との二大陣營の階級分裂が漸く明白となりつゝあるばかりでなく、支配階級內部に於ける社會層の分裂が明白となつて來たがためである。しかも二大陣營の對立と云ふ劃歷史的な分化に到る一つの經路として支配階級內部の社會層の分裂が、資本主義の崩壞期に於ける一つの現象として現はれ來つてゐると言ふのが、現在の日本であつて、それが分けても自由主義的思想をして、他の二者に指抗して有力ならしめる一原因である。

少し側道になるかも知れないが、支配階級內部の分裂といふ事實は、マルクスの二大陣營論と矛盾しはせぬかとの疑問を起す人があるかも知れない。それは決して矛盾するものでない。マルクスの二大陣營說は、資本の集中、中、小ブルジョアのプロレタリア化を根底とするものであつて、發展はその線を忠實に追つてゐることは嚴たる事實である。しかしながら、中、小ブルジョアは何等の抵抗をも試みないで、自然法則に從ふが如き從順さを以つて、その無產者化に服從するものではない。否、それと反對に、極力それに抵抗しやうとする。一方また國家は、中、小ブルジョアをも含めての支配階級全體の階級的保存のために、それらの社會層の無產者化を防止しやうとして、諸種の手段を講ずる。例へば日本の國家が農村問題解決の一策として「創定」したところの、自作農案などがそのいい例である。更にまた都市商工家と、地主との對抗の如きがそれである。つまり資本主義の崩潰期に入つての新らたな現象としては、全階級的利益の保有といふ方面と、同一階級內の各層の各自の利益の保有と云ふ方面とが、同時に力强く現はれて來る。而して前者を負擔するものは國家であり、後者を負擔するもの

は云ふまでもなく、それぞれの階である。現在の日本がこの階段にあることは、最近の新らしい政治的現象が有力に說明してゐるところである。この現象は、マルクスの二大陣營論と矛盾するものではなく、經濟の自然的進化に及ぼす國家の强制力の程度を說明するものであり、且つ日本の如き、同じ資本主義經濟とは言ひながら、その内部にもろもろの異質的經濟を含んでゐる國家に於て、事態がいかに進行するかを說明するものである。

これからの基礎を以つて、旣に述べた三つの思想の流れが、最近の日本の社會に於て、愈々鮮明さを加へつゝあるのである。

二

そこで今日の日本に於ける右の思想的分野の明別に至る過程を考へ、今後に於ける發展を識るためには、明治、大正へかけての思想界の推移と、そのよつて來るところの基礎的條件とを一瞥しなければならぬ。

明治維新の革命については諸々の解釋が下されてゐる。しかしそれが一個の社會革命であつたことは爭はれない。しかしその社會革命は、維新の後に續く相當に長い時代の中に完成されたものであつて、維新の過程及びその直後はまだその一歩たるに過ぎぬもので、まだ新らたなる經濟的基礎が据えられてゐなかつた。たゞ封建的組織が頽廢して、新らたなる組織を必要とするといふ點のみが强く感ぜられたのみであつて、資本主義組織を、それも如何なる形態に於て取容るゝかといふが如き問題はまだ强く感ぜられて來なかつたのである。その結果、思想界の表面に浮動したものには種々雜多なものがあつた。一方に極端なる保守主義、復古主義それも神武建國の昔にまで大逆轉した復古主義があるかと思へば、他方には虚無思想、無政府主義の如きものまでが輸入されるに到つた。而してまたその中間には資本主義的自由主義の思想が忠實に唱導されてもゐた。さう云ふ有樣であつて、一度に諸の思想の苗が、他の畑から拔き移しにされやうとした。而しそれらのもろもろの思想は、決して國民生活の中に入ることが出來なかつた。まるで泡の如く消え去つてしまつた。國民生活の必要は、長い封建制度の頽廢の後を承けて、統一國家を形成することであり、産業的發達を促進し、生産力を增すことであつた。

維新直後の、形式だけを取容れたデモクラシーが、如何に無意味であつたか、如何に根據のないものであつたかは、「萬機公論に決す」といふ形式を實際に移した場合に生じた混亂を想起

すればよい。當時或る外國人は「明治政府以前の江戸時代には、諸大名は德川家に對して舊來の關係からして頗る恭虔の態度で我儘を言はなかつた。明治以後になつて新政府の形を見ると、諸大名の我儘加減といふ者は、德川時代より甚だしい」と云つたとのことであるが、その當時の形式的デモクラシーは、つまり三百の諸侯の我儘を解放し「四民」の破壞欲を滿足せしめたに過ぎなかつたのである。即ち、新社會を形成する確固たる經濟的關係から生じた生活に即した思想でなくて、破壞と解放との喜びの中に溶け込んだ根のない諸の輸入思想の跳梁といふのが當時の有様であつた。

然し維新革命の結果を負擔して、生產力を增大して國民生活を安定せる基礎におくためには、そう云ふ空のデモクラシーの混亂を續けさせておくわけには行かぬ。そこで帝國主義的資本主義の徹底的の輸入が必要となり、それにつれて國家主義、官僚主義は、空虛のデモクラシーを追ひ拂ひ、乃至は抑壓してしまはなければならなかつた。當時歐洲を視察して歸つた政府當路者が、歸來國家主義思想、官僚主義思想を唱導し、空虛のデモクラシーに依る混亂を防止せんとしたのは、寧ろ當然の處置と云はなければならぬ。それによつてのみ統一國家を形成せんとする必要は充され、國家の保護の下に工業資本を成長させ、生產力を增大せしめんとする必要に滿され得るものだつたからである。維新の直後、自由主義的の資本主義が輸入されたならば、その後の日本の發展は、大いに變つたものであつたらうと言ふが如き臆測は、よく我々の耳にするところであるが、自由主義的資本主義を輸入するか、帝國主義的資本主義を輸入するかは、個人の意志と偶然とによつて定まつた事象ではなくして、當時の歐洲資本主義の既に入つてゐた初期帝國主義の環境に於て、且つ內部的の統一國家形成の必要と、全く準備なき所に工業資本を急激に發育させる必要とが決定した事柄である。日本の資本主義が、自由主義的の階段を踏まないで、乃至はそれを發育させないで帝國主義的階段を執つたことは、維新革命の性質上當然のことであり、長い鎖國といふ人爲的な政策を執つてゐた特殊國の引受く可き當然の運命だつたのである。國家主義思想、官僚主義思想は、かくして國民生活の必要と抱合した思想となり、後來牢として拔く可からざる根柢を植付ける萌芽をそこに顯はしたのである。

その國家主義思想、官僚主義思想に對抗して熱烈なる主張と行動とを歷史にとゞめた自由民權の運動、云ひ換へると新らたに擡頭せる自由主義的思想が、國家主義及び官僚主義に對する反感、專制政治、官僚政治に對する不滿、官僚的地位を獲得し

得なかつた不平の結晶によつて、相當白熱せるものであつたことは云ふを俟たず、それがまた日本の國民生活の上に自由主義的の微かな傳統を創つたことは云ふを俟たないが、それが結局するところ、國家主義及び官僚主義のために打ち負かされ、政治的に多少の自由主義的要素を貧しい遺産として死滅したのは、決して故なきことではない。その自由主義は國民生活の帝國主義的資本主義の基礎を、自由主義資本主義の基礎に移し變へやうとする運動でもなければ、自由主義的資本主義を以つて有利とする何等かの經濟的意義のある階級運動でなかつたからである。言ひ換へると自由民權の運動は、それに應ずる確固たる經濟的基礎がなく、國民生活の經濟的基礎は、刻々に帝國主義的資本主義を發展させ、特に西南戰爭を以つて第一の試練を經た軍國主義の色彩が漸次濃厚となつてゐるのである。その意味に於いて、自由民權の運動は當然の運命をたどつたものであり、國家主義思想は愈々支配力を持つて來たのである。

漸次加重して來た國際主義思想に、最後の仕上を施したものは、云ふまでもなく日清、日露の二つの戰爭であつた。日清、日露の兩戰爭が、日本の資本主義をして如何なる點まで引上げたかは、今更ら說明するまでも無いことである。例へば今日本の重要産業の一たる紡織業がその發展の基礎を据えたのは日清戰爭直後であつて、日露戰爭中から戰後に亘つてはその事業計畫者が續出し、計畫資本は三十八年の貳千五百萬圓から年々遞增して行つた。それを大正九年の計畫資本四億五千八百萬圓に比すると僅かな額には相違ないが、かくまでの驚く可き發展の基礎は、實に日露戰爭による活躍より起因するものである。更に例を資本主義發展の一指標とも云ふ可き海運業にとれば、明治十八年に創立された日本郵船會社が、內外二十二線の航路を開いて、一躍して世界大汽船會社の列に入つたのは日清戰爭の後である。日清戰爭の前の二十六年末汽船總噸數十七萬七千噸が、三十六年末には六十五萬七千噸といふ巨大なる數に登つたのを見ても一般は推知し得られる。更に日露戰爭の後には三大汽船會社が競つて大船巨舶を建造し、噸數に於て約八割の增加を見たのである。これは一二の例にすぎず、その他鑛山業、電氣業、機械工業、製鐵業等に觀ても同樣である。之を要するに日清、日露、兩戰爭は、日本の資本主義をして確固たる基礎の上に置いたものであるが、その資本主義は、維新以來育成されて來た國家保護の下にある資本主義、帝國主義の階段に於ける資本主義であつた。而もその上兩戰爭は、日本の軍國主義的基礎を固めたことは言ふを俟たない。國家主義思想、官僚主義思想がこゝに全く拔く可からざる根幹を育てあげたのである。特

に夫が戰爭の際に於て完備せる教育機關を通じて、組織的に行れたことは、大いに注意しなければならぬ。

いま私は日清、日露の兩戰爭として同一の取扱を爲して來たが、日清と日露とを見れば、そこにまた自ら異るものがあり、思想界に於ける事實も大分異つてゐる。日清戰爭によつて強く支持された國家主義思想には、少しの抵抗もなく、思ふ存分にに國民生活に侵潤して行つた。しかしながら日露戰爭に於てはそうではなかつた。社會主義思想をも含めての自由主義思想が、日露戰爭の後に於て、漸くにして擡頭して來たことは、這般の消長を物語るものである。この事實は既に日本の社會の或る層が、階級的に目醒めつゝあることを證するものであり、國家的勢力に對する社會的勢力の爭鬪が、漸くにして顯はれ來らんとすることを證するものである。云ひ換へると國家主義思想に對して「社會」主義思想が擡頭し來る原因がそこに置かれたのである。國家の全的支配の下から、それに包攝され切らぬ社會の成長があつたのである。日本に於ける自由主義思想は、こゝに新らに、多かれ尠かれ、階級的基礎を以つて發現されたのである。今私は、日露戰爭後に於て日本の思想界の一分野を支配した自然主義運動を指して言つてゐるのである。

三

日本の國家主義的思想は、日露戰爭を以つて仕上げを施されたことは前述の通りであるが、それと共にまた自然主義なる一種の自由主義思想が起つて、日本の國民生活の或部分に、かなりの支配力を及ぼした。或部分とは即ち知識階級である。私は自然主義運動を以つて、單に文藝上の運動と觀ることは、餘りに狹い觀方であり、あの運動があれほどまでに廣汎なる侵潤を見せた事實に對する說明としては、不十分だと常々考へてゐる。自然主義運動は、知識階級の目醒めを表象した運動、知識階級の階級的獨立の最初の力強い宣言であつたと解さなければならぬものであつて、そう解して始めて十分に說明し盡すことが出來ると思つてゐる。

當時の代表的な自然主義文藝の作品として推稱されたものの中に、戰場に於ける一兵卒の心理を描いたものがあつた。その一兵卒は心身共に疲れた戰場の夜に、愛國心とか國家とか云つたものより離れて、人間としての自分を發見し、國家とか社會とかに則した感情でなく、人間としての赤裸々な感情で、戰爭といふ恐ろしい現實を考へた。この作品に現はれた思想、そしてまた知識階級の間に多大の同感を呼んだその思想は何であつ

たか？　それは國家の外に人間があると考へる思想である。人間は國家人であるより前に、まず人間であらねばならぬといふ思想である。それは一作品を例にとつたに過ぎぬが、當時、凡てに優つて先づ人間、凡てを棄てゝ先づ赤裸々な現實、といふ思想が、いかに力強く働きかけたかは、我々の記憶に新らしいところである。自然主義は即ち批評主義である。そしてそれはまた自由主義思想の一面の強い顯はれであることは言ふを俟たない。

然しながら自然主義運動は、知識階級の自覺めとして、思想運動として終始したものであつて、そこには強い經濟的基礎と言つたものを求めることは出來ぬ。その意味に於いてこの運動もまた、國家主義思想、官僚主義思想を向ふにして政治的に表現されるといふが如き結果を見ずして、批判精神の貧しい遺産を殘して死滅しなければならなかつた。たゞこの運動によつて目醒めた知識階級が、その後の日本の社會的發展において演じた大いなる役割を考へる時、その運動が日本の自由主義思想に與へた刺戟の大なりしことを思はざるを得ないのである。そして漸次自由主義的思想の擡頭を見、階級的分裂を内部に包藏しながら、日本國民生活は依然として國家主義、官僚主義の把握するところとなつていつたのである。

かくて明治時代はすぎて大正時代に入つたが自由主義的思想の發現は、極めて微弱なるものであり、國家主義、官僚主義が依然として政治的にも經濟的にも、日本の思想の中心を爲して押し進んだ。そこへ來たものが世界戰爭であつた。而してこの世界的大事實は日本の思想界にも、劃時代的の影響を齎らしたものであつた。

世界戰爭は歐洲の世界に於ては、帝國主義的資本主義競爭の最後の大破綻であつた。この一大事實を期として歐洲各國の約半世紀に亘る帝國主義的資本主義の競爭は、最後の決濟を成し、或物は歷史の前頁を閉ぢて新らたなる歷史の頁を繰り展げ、或物は再び資本主義的基礎に立ちて、國家を統一再興せんとして、徒づらに崩潰の變轉極りない過程をたどるに過ぎ無い結果となつた。かくして建設と崩潰、革新と反動とが入り亂れて、その一角に於ては大戰前に比して、一段と戰爭の脅威を加へてゐると言ふのが、大戰後から今日に及ぶ歐洲の現狀である。ところで日本は世界大戰によつて何を得たか。

世界大戰を利としてその內部の經濟的基礎を固めたものに、日本と米國とがある。その意味に於て、日本と米國との帝國主義的資本主義は、世界大戰によつて一段と強さを加へたと云つてもよいであらう。しかし今日の世界經濟の環境中によつて、

歐洲の資本主義的基礎の崩潰と無關係に、日本及び米國の資本主義が些の動搖なく、獨り順調を保つことは出來得ることでない。更にまた米國の資本主義と日本の資本主義とが、この機會に從來の對峙關係を一層激烈ならしめ、米國の資本主義は、支那に於て刻々に優勢なる地步を占めてゐることは、認めざらんとするも能はざる所である。一方にそれがあり他方世界大戰に於いて過度に膨脹せる日本の資本經濟は、その後の不景氣によつて、根底から動搖せざるを得なかつた。かゝる資本主義的發展の停止と動搖とは、正しく資本主義經濟の崩潰を指示するものである。かの軍備制限會議の如きは、帝國主義的資本主義の崩潰を表象するものである。かくて資本主義は、今や崩潰の道をたどり、その崩潰期の現象として種々なる事象の顯はれ來てゐるのが眼前の日本である。

最早日本の帝國主義資本主義は、障害なき常勝の道を步むことは出來なくなつて來た。それが政治生活に表はれたものは、官僚的政治を持續することの困難といふことである。それが國民生活の上に表はれたものは、國家主義思想の動搖であり、帝國主義及び官僚主義に對する批判的位置を擁して擡頭せる自由主義思想であり、更に勞働階級の成熟と相俟つて漸次その根底を張りゝてある社會主義思想である。これらの思想は、その起源を國家主義と同ふなるほど古きものであるには相違ないが、日本の國家の經濟的基礎が、帝國主義的資本主義を以つて、塗り込められてゐた時代には、そしてまた階級的の分化、成熟がない間は、いまだ國家主義と對峙するに足るほどの勢力を持つことは出來なかつたが、資本主義が崩潰期に入つて、階級間の分化成熟が一定の階段に達すると、自から確固たる地位を占めざるを得ないものである。

日本の國民生活のそれぞれの分野に根を張る思想、そして今日、三つの大いなる思想的分野となつて鮮明の度を加へて來てゐるものゝ、歷史的背景の輪廓はこれまで說明した通りである。その輪廓によつても極めて明白に次のことが解る。即ち、今日まで日本の國民生活には、國民的大運動をしての自由主義時代がなく、隨つて自由主義的思想の基礎が、歐洲に比して極めて薄弱だといふこと是である。自由主義資本主義が封建的制度を倒して、一定時期の間國民生活を支配した國に於ては、自由主義思想はかなり國民生活の思想的基礎をなし、資本主義の本質が發展して、その最後の階段たる帝國主義の時代に入つても、その自由的基礎は容易に失はれるものではない。國民がその血を以つて獲取せる自由は、容易に失はれるものではないからである。勿論、帝國主義的階段に入つた資本主義は、更に勞働

階級に對する抑壓と搾取の度を高めて來り、警察國家、軍隊國家、憲兵國家等の新らたな武裝國家の特性を發揮して來るには相違ないが、一度社會的基調となつた自由主義思想は、そのために全く失はれるものではない。そのよい例がイギリスである。自由黨は今日では最早政黨たるの思想的特殊性はない。自由主義は英國社會の基礎的思想となつてゐて、保守黨と雖も、自由主義的思想の基調の上に立つて、政治的に大資本家を代表してゐるに過ぎぬと言はれてゐるが、面白い觀察であると思ふ。そう云ふ國家に於ける無產階級解放運動の動向は、また自から別である。今日英國の勞働黨內閣は、名こそ勞働黨內閣でるあが、實は「自由」勞働黨であると、コンミユニストから排擊されて居り、それはまたよく事實を摘發したものであるが、その「自由」勞働黨たるところが我々にとつて、一つの大いなるテストとして興味あるところであり、勞働黨の强味あるところである。それはしかしながらイギリスのことであつて、日本のことではない。やゝもすると淺薄な現想主義に捉はれた人々のやうに、イギリスと日本とをごつちやにじへ考てることは大いに愼まねばならぬ。

日本は前段に說いた如く、資本主義の初發から帝國主義的となり、自由主義の十分なる發展を致す可き、大なる國民的運動もなく、それを齎らす可き經濟的基礎もなかつた。たゞ今日まで極めて徐々に、自由主義思想が、國民生活に浸潤して行つたのは、人間としての目醒めや、歐洲思潮や世界的波動を受けた結果として、消極的にそれが育成されたと云ふに過ぎなかつた。それだけ消極的であつて、隨つてその止めた地步も、極めて僅かなるのである。法制の形式や政治の表面にはかなりの自由主義が取容れられてゐるのは相違ないが、その實質に於いては國家至上の思想と、それを根抵づける封建的情念とが綿々として續いて今日に及んでゐるのである。而して今日、自由的思想が漸くにして國民生活中に入つたとしても、まだ〳〵その基調となるまでには到つてゐないのである。近い過去に於けるデモクラシーの運動が、相當に宣傳的効果を擧げながら、實際に於ては大した實果を納めずして、止んだのを觀てもその消息は理解し得るし、普通選擧が國民の要求であると言はれながらも、支配階級からそれを奪取するために、國民的大運動を捲き起すに到らないと云ふ事實も、その事情を語るものである。

それらの歷史的事實に徵し、且つ帝國主義的階級に達した資本主義が、自由主義的資本主義に逆轉することなしと云ふ鐵則から割出して來て、日本に自由主義の大いに發達する可能を信ぜざる人も可成りに多い。誠にその通りである。しかし歷史は

また自由主義が徐々に諸の機縁をつたつて、帝國主義的思想の傍に多かれ少かれ發達してゐることを實證してゐる。そこで今後どの程度に自由主義が日本の社會に根を下す可能があるか。自由主義的思想が、國民生活の基調となる可能があるかゞ問題である。私は嘗に今日ほど思想界に、國家主義、自由主義、社會主義の分野のはつきりしつゝある時代は無いと云つた。しかしその量的比例に於ては後の二者はお話にならぬほどである。政治的に見てもその事は容易に首肯される。たゞ今日ハツキリして來たその分野が、どれだけの速度を以つて、どれだけの程度にまで、互に侵蝕して行き、國家主義的基調が他へ移し換へられるであらうかゞ問題である。

四

最初の部分に於ても概説しておいた如く、今日の日本の社會は、二大階級の分化對峙といふことがその特徴であるばかりでなく、支配階級内に於ける層分化がまた一面に特長でもある。この事實を鮮明に物語るものは最近の政治的現象である。巨大なる政友會の分裂は、單なる政治職業家の集散離合と解すべきでないのは勿論である。實業同志會の活動、更に地主の利益を代表せんとする謂所農民黨の樹立提唱などが、又その事業を語るものである。今日までの諸の政黨は、その代表する階級的利益が明白でなく、たゞ漠然と資本主義經濟の積極と消極とを代表したに過ぎなかつたものであつたが、またその限りに於て、全體として資本家階級を代表したものに過ぎなかつたけれども、今日では資本家階級内の各層が、各獨自の力を以つて獨自の利益を代表しなければならぬ必要に迫られた。その意味に於ては、資本家階級、支配階級内の鬪爭は一層甚だしきを加ふと言つて差支でないが、しかしそれらの各自を足場をした抗爭は、結局するところ、それが資本家階級たり、支配階級たることを保有せんがための抗爭であつて、全體としての資本主義支配を危ふくするが如きことのあり得るものでない。そこには一定の限度があるのである。されば一定の階級に達して、他方に資本主義經濟に代ふるに社會主義經濟を以つてせんとする勞働者黨、勞働者政治の勢力が増大するにつれて、それら支配階級内の層鬪爭は一團となつて、全體としての資本主義經濟、私有財産制度を維持せんがために、最後の努力を惜しむものではない。政界には資本主義黨と、勞働黨即ち社會主義黨との、二つの黨派あるのみと言へる英國の首相マクドナルトの言葉は、如何なる意味に於ても事實なる所以である。

然しながら支配階級内に於ける層分裂とそれが齎らす鬪爭と

の結果は、政治的に如何なる形勢を展開し來るか。それの結果は、自由主義の、或程度の確立である。例へばかの普通選擧に見ても分る。清浦内閣といふが如き所謂封建的貴族内閣が、普通選擧の實施を宣明するが如きは曩に前政友會の原敬が、普通選擧に對して決定的の態度を示さなかつた事實に合せ考ふる時、一種奇異なる現象と云つて差支へない。しかしそれは奇異でも何でもないのである。封建的貴族勢力を代表し、官僚主義を代表する清浦内閣が普通選擧を實施せんとするは、他の支配階級内の勢力と對抗して、民衆の支持を得んがためであつて、その結果が偶々、自由主義的基礎の幾分を齎らすに過ぎない。たゞ彼等は民衆に强要せられて、普通選擧を實施せざるを得くなつたと云ふ事實、即ちそれ無しには民衆の支持を期待し難いといふ事實を隱蔽して、「善政主義」といふが如き、官僚固有の補導主義を振りかざすに過ぎぬのである。

そう云ふわけで支配階級内部の抗爭は、無意識的乃至有意識的に、彼等の欲すると欲せざるとに關らず、自由主義的の基礎を政治の上に移し來り國民生活の基調をして自由主義思想を以つて彩らしめるが、それは今も云へるが如く支配階級内の或る群が、他の群と對抗して優越の地位を占めんとすれば常に、民衆を味方としなければならぬといふ事情によつて助成されるのである。その意味に於て民衆の意志は、制限選擧の下では直接に政治に反映しはしないが、間接には支配階級の政治に一定の動向を與ふることが出來るのである。その限りに於て、いかなる時代と雖も民衆の意味が政治に反映しない時代はなかつたのである。しかし政治は、一個のメカンズムであつて、政治機關の實際運用が資本家階級の代理人によつて掌握されて居る間は、その民衆の意志の反映も一定の制限を課せられてゐるのである。

日本の國民生活の上に、今後自由主義の基礎が殖え付けられるとすれば、如上の原因はその大いなるものゝ一つでなければならぬ。更にその上、そこに有力な役目を演ずるものは、所謂知識階級の覺醒である。政治機關なり、行政機關なりを支配するものは、保守的官僚及び大ブルジョアジーであるにしても、それを運轉し、行政するものは、刻々に增加する知識階級である。そこで官僚及び大ブルジョアーの政治的、經濟的支配は、尠くとも一度は知識階級の實務員の手を通らなければならぬ。そこにそれらの支配が、幾分の變質を來すは云ふを俟たない。それは主として役人階級のことであるが、この一事は推して、資本主義組織の全機構に適用することが出來る。更にまた知識階級が、曩に、自然主義運動によつて、一個の人間として覺醒した後、更に階級として覺醒して來、大資本家階級及び官僚よ

り獨立して、一個の集團的政治勢力を形成せんとする勢は、今日に於いて必らずしも認められぬと言ふことはない。この一つの階級運動は、今後の日本の自由主義發達の上に、相當大いなる役目を演ずると見ても大いして間違ひでないであらう。日本の知識階級は無力である。氣久地がないとはよく耳にする所であるが、そしてまた今日まで何等目ざしまい活動を示さず、若くして既に老いたるの觀さへ與へないではないが、それは明治以來の日本の政治的運動が、一度として知識階級の白熱せる要求によつて動いたものがなく、その意味に於て知識階級の活力が育達しなかつたためである。然しながら今後も同樣であるとは決して云ひ得らるるものでない。

特に資本主義崩壞期に於て、階級の分裂が激しくなり、各群各階級が各々その群利益階級利益を主張す可く、その勢力の政治的表現を求むる時、中、小ブルジョアジーの利益を背景として演ぜられる運動と、それが中堅を爲す知識階級の活躍とは、到底これを無視することを許されない。而してそれは自由主義的基礎を、日本の社會に移し植える上に相當の効果を齎らすものである。

第三に勞働階級の政治的勢力の結成である。勞働階級の階級的主張及び政治的綱領は、社會主義的である。その限りに於てその勢力の結成は、日本の國民生活の上に社會主義思想の一本の赤絲を織込むことゝなるが、その勢力の徐々の結成は、支配階級をして自由主義的政策を執らざるを得ざしむるものである。支配階級が勞働階級を籠絡し得る最後の、而して最も有力なる武器はデモクラシーであると言はれてゐる。勞働階級がそれによつて籠絡されるや否やは別問題として、それは勞働階級の結成勢力に對する支配階級の妥協であり、一歩退却であることとは明白である。その結果は、自由主義的基礎の採用となつて現はれる。而してそれは勞働階級に對する陷穽であると同時に、その陷穽に陷らざる勞働階級に對しては、それだけの勝利と云はなければならぬ。

エンゲルスは一八九五年に書いて曰く、「……普通選擧の利用と共に、全く新らたなプロレタリヤの鬪爭方法が現はれて、瞬く間に完成した。ブルジョアジーの權力組織である諸々の國家機關は、更に、勞働階級に、この同一の國家機關と戰ふ幾多の機會を與へることが分かつた。吾々は、各州議會や、市町村會や、營業裁判所の選擧に參加した。一言で云へば吾々は、あらゆる陣地でブルジョアと戰ひ、大勢のプロレタリヤが諸々の陣地を占領して發言權を獲得した。かゝる形勢を見て、ブルジョアジーと政府とは、勞働者黨の非法的行動よりも合法的行動

を、暴動の成功よりも選擧の成功を一層怖れるやうになつたのである。」と。これは普通選擧を有効に使用した場合のことである。ブルジョアジーが民衆の支持を得んとして、讓歩した地點即ち自由主義的政策が、無産階級の解放運動にとつて、有利に展開せる場合である。日本の勞働者黨が今後、この有利なる展開を爲し得るや否やは別問題としても、今日に觀る無産階級の勢力結成が、支配階級をして自由主義的政策を執るの止むなきに到らしめるは、極めて明らかである。

その事實はそれだけまた國家主義的思想の崩潰を示すものであり、社會主義的思想の成長の可能を語るものである。しかしそれは事が順調に進行した場合であり、大局から見る時、歴史の進行はその踏む可き道しか踏まぬものではあるが、一方にその自由主義的思想、社會主義的思想が成長するに連れて、諸の反動的氣分は國家主義的形態をとつて發現されるのである。しかしこの場合注意す可きは、その意味の國家主義は、幾分保守的要素を捨てゝ、多分に自由主義的思想を取容れたものなること、是である。古き國家主義的思想、官僚主義的思想に對する反抗の意味さへそこに含まれて、一個の新らたなる國家主義の形態を執り來れるものである。この種の現象は、今後續々として起り來るのであらうが、それがまたそれだけの自由主義的基礎の輸入を意味するものなることを忘れてはならぬ。

我々は資本主義的基礎が動搖して、まさにその崩潰期に入り、帝國主義及びその別名たる軍國主義的資本主義が、その維持が困難となつた場合の階段に於て起る諸の、政治的、經濟的現象が、いよいよ益々國家主義、自由主義、社會主義の三つの大いなる思想の流れを對立させて來ることを、信じて差支へないと思ふ。而して今や日本は、現實に、その階段の一歩を踏出してゐるのである。

五

これまで說いて來た通り日本には自由主義的資本主義の時代がなく、自由主義の基礎は極めて薄弱であり、今後と雖も國民的運動としての自由主義運動の起る經濟的基礎はない。且つ一度帝國主義的形態を執つた日本の資本主義は、再び自由主義的形態に引戻され得るものでない。その意味に於ては今後の自由主義の發達には多くの期待をおく譯には行かないが、然し私は上來述べ來たつた諸の原因によつて、可なりの點まで自由主義的基礎の確立を見、自由主義的思想の侵潤を覩得ると信じてゐる。故に解放運動の執る可き道に關しても、その點を十分に考慮に入れなければならぬと信じてゐる。

日本の『特殊性』なるものが屢々人々の考慮に上つてゐる。日本には封建的勢力を墓穴に埋めつくしたブルジョア革命がなく、封建的勢力の殘溜とブルジョアジーとが結び付いて、早くより帝國主義的資本主義の形態を執つて來た。隨つて自由主義の基礎がない。されば日本に於ける社會主義運動は、二重の文化史的使命を果さなければならぬ運命におかれてゐる。それが特殊性たる所以である。漠然とかう考へて來ると、日本に於ては果して如何なる經路を踏んで、社會の改造が爲されるであらうか。前途實に晦澁たるものがあると云はねばならぬ。

河上博士は曩に英國勞働黨内閣の成立を見るや、平和的革命の可能を說き、言葉を强めて「順風でも逆風でも、社會は生きんがために、必然の針路に向つて進まねばならぬ。逆風さかまきしロシアの社會は、この必然の航路に進むため、帆を卷くことを餘儀なくされたが、今イギリスの社會は、順風に帆を張つて、その同じ必然の航路を徐々に平安に進行せんとしつゝある。思ふに我が日本の社會は、順逆縱横、果して何れの道を選ばんとするか?」と自問してゐる。蓋し英國勞働黨内閣の成立の報を手した者の大部分は、漠然ながら博士と感を同ふしたと思ふ。日本はロシアではないと共に、日本はイギリスではない。日本の特殊性は、日本だけのものであつて日本の選ばんとする道は、多かれ尠なかれそれに制約されなければならぬ。博士の言はれる如く、順逆いづれにもせよ、社會は生きんがために、必然の針路に向つて進まねばならぬ。天女の臥したる如き日本島の社會と雖も、その必然の針路に向つて進まねばならぬことは、ロシア、イギリスその他の一切の社會と同樣である。たゞ、日本の社會は何れの道を執つて進むであらうか？それが我々の前におかれた謎である。私がこの蕪雜なる一文に於て企てたところも、その謎を解かんとするに外ならぬ。而も本統に謎を解き得る者は、歷史の進行である。我々は歷史の進行の中にのみ、その謎を解く糸口を發見することが出來る。

私は近代日本の社會が思想的に如何なる道を歩いたかを眺めた。そしてそこに長い長い國家主義の支配を見た。それはまた「必然の針路」に向つての步みを抑止し、それに逆らはんとするものに外ならぬ。太平洋と日本海に兩舷をぬらす日本の社會なる一艘の船は、最初から逆風に見舞はれ、難路をとつて進んだ。然し逆風の止む時はなかる可きも、順風おもむろに來り助けんとする徴候は、微かながらに認められた。逆風を受けて難路によつてのみ「必然の針路」に到着せざるを得ぬかの如く見えた船は、順風の徴候によつて航路を轉ずるのまた希望なきに非らざるを知つた。そして今やその一大轉向の決意を準備しつ

つあるかに見える。しかしこの船はイギリス人の乘れる船の如き、順風に帆を張つて飽まで平和の航路を續くることの出來ぬは明白である。いつ逆風がもり返して來ないとも限らぬ。逆風に向つて用意を忘らずして、順風を力の限り利用して、進むより外にない。その航行やまた難しである。

今日の日本の社會に鮮明に分野を領しつゝある國家主義、自由主義、社會主義の三つの大いなる思想の流れは、今後ますますその鮮明の度を加へ、それは一個の政治的勢力となつて表現されるに違ひない。勞働階級の政黨をも含めて、諸の新らたなる政黨の發生の徴候は、さうした近き將來を暗示するものである。而して或る短かい期間は、イギリスの社會に於て見たるが如き對立を實現するに異ひない。しかしながらその期間に於ける社會主義思想の大いなる飛躍は、國家主義的反動思想をして、最後の決心を固めさすに異ひない。その時、イギリスの社會ほどに自由主義思想が、長き歴史を通じておかれなかつた日本の社會では、そのためにマクドナルドの所謂資本主義黨と社會主義黨との最後の決戰が、イギリスに於けるが如き形態を執り得ないこともまた、容易に推察することが出來る。

かうして微かながらに我々は、日本の社會が執つて進むであらう道を知る。我々は、日本の勞働階級がその最後の決戰の時に於ける準備を、順風の流れ來る間に十分に整えんことを希望し、そうあるであらうことを信ずるものである。而して日本の社會の將來が、懸つて勞働階級のその準備によつて決せられることは、改めて說くを要しない。(二四・六・五)

「女性改造」七月號の偉觀

女性改造は時代の趨勢を指導すべく今回「哲學講座」「文藝講座」を新設しそして永井博士に乞ふて婦人生理講座を復舊しました。此三欄は我國婦人を學術的に基礎づけ、輕佻なるジャーナリズムより救出して必ず我が婦人界に好い影響を與ふることと思るます。そして新に「文明批評」欄を設けて斯界の第一流野口米次郎氏が擔任することとなりました。「世界婦人欄」は世界婦人の新趨勢を斯界の權威者に毎號執筆を依頼しました。本誌の新計畫が如何に時代に適切の者であるかは總べての識者の容認する所です。本誌は東洋に於ける唯一の高級雜誌として現代の婦人雜誌界の惡弊より勇敢に脫退します。そして超然として眞の意義ある女性の伴侶として高步前進します。

女性改造七月號目次

（定價七十錢 送料二錢）

改革

れつつある女性改造七月

庭の隅の小さな花……吉田絃二郎

斷絃……川上漸

或る平凡な場面……高濱虛子

蟹の穴を覗く……賀川豐彥

人魚とペリカン……佐藤惣之助

前世界の一節……横山又次郎

晝間の月……木村莊八

諏訪湖の主……田中阿歌麿

貸家をゆめむ……室生犀星

土……荻原井泉水

蟬……西村直次

若き母親に與ふ……土居格

月と魚……上司小劍

雷紋雲花三黑燕小傳……山村耕花

人間以外

(哲學講座)婦人と哲學……紀平正美

寧ろ性を禮拜せよ(河田嗣郎氏に)……平塚明子

樂聖シューベルト……馬場郎次

與謝野晶子論

常に若い……土岐善麿

與謝野晶子夫人……新居格

太陽と薔薇……茅野雅子

(文藝講座)小說作法研究……森田草平

(世界婦人欄)

二つの近刊書に就いて……千葉龜雄

最近の米國婦人界……市川房枝

世界の流行に序す……大橋房子

偉沛に於けるタゴール翁……橋本基

米國國民性の側面觀……池田龍藏

全國女子教員大會を傍聽して……平林初之輔

威・廿年の研究に成る

制度の

ます。此不適切な内容を、重義はキット今の彼に適切な文句に改作して讀んで呉れるでせう。

『離婚制度の研究』內容

離緣狀と緣切寺　一、離緣狀の標本　二、『送り』　三、なぜ離緣狀を三行半と書くか　四、いつから三行半に書いたか　五、離緣狀の必要　六、ユダヤの離緣狀　七、離緣狀は出婚免狀　八、無因離婚　九、追出し離婚　一〇、緣切寺―東慶寺と滿德寺　一一、東慶寺緣切の實例一―內濟離緣　一二、實例の二―出頭並に延期願　一三、實例の三―子の養育に關する協定　一四、實例の四―聟養子離緣　一五、東慶寺緣切の離緣狀　一六、實例の五―離婚請求の理由　一七、實例の六―病身を理由とする離緣狀　一八、實例の七―不受理　一九、實例の八及び九―和諧　二〇、實例の十―出役―違背證文―寺法離緣　二一、在寺中の心得―實例の十一―脫走　二二、實例の十二―入寺證文―往生願―寺法離緣狀　二三、地域と時代―實例の十三―明治の實例

緣切寺の川柳　緣切寺滿德寺　一、德川滿德寺　二、驅入女取計方　三、第一實例―年季明け後の寺法拒否　四、第二第三實例―代官所との衝突　五、第四第五第六實例―町奉行との權限爭　六、第七實例―實親養親夫の三角關係　七、第八第九實例―寺社奉行の援助　八、第十實例―內濟離緣　九、東慶寺緣切との比較

クリスト敎の婚姻非解消主義　クリスト敎の婚姻非解消主義　一、ユダヤの離婚法　二、クリストの敎義　三、婚姻非解消主義の確立　四、婚姻非解消主義の衰頽　第一、婚姻非解消主義衰頽の內部的原因　第二、婚姻非解消主義衰頽の外部的原因　第三、婚姻非解消主義の現狀

イギリス離婚法略史　一、イギリス離婚法の過去　二、イギリス離婚法の現在

フランス革命と離婚法　一、『フランス的變化』の好適例　二、フランス舊法時代の離婚禁止主義　三、婚姻世俗化の傾向　四、『離婚復興運動』　五、フランス哲學者の離婚論　六、單行論文　七、新聞紙上の評論　八、一七九一年の革命憲法　九、一七九二年九月二十日の離婚法制定　一〇、一七九二年九月二十日の法律正文　一一、一七九二年離婚法の要領　一二、恐怖時代の離婚法　一三、離婚の流行　一四、自由離婚主義に對する反動　一五、ナポレオン法典の離婚法　一六、一八一六年の離婚制度廢止　一七、一八八四年の離婚制度復活

離婚制度の權

離婚

法學博士 穗積重遠著

哀切斷腸の序文

私は大學卒業前から離婚問題に興味をもつて居りました。そして一生の仕事として『比較離婚制度論』とでも云ふ樣な本を書いて見たいと云ふのが私の大願です。そこで今まで書いた論文も、其爲めの材料を書附けて置く積りだつたので、それぞれ其當時の自分として相當な力を注いだものではありますけれども、而して大體比較離婚制度論の全局面に亘つては居ますけれども、一つ一つとしても、又全體としても、まだまだ極めて不完全不充分なものです。今こゝで大願成就とすることは餘りに早過ぎます。恥しくもあります。惜しくもあります。それで私は躊躇して居ました。

所が思ひもかけぬ事件が私に起りました。大正十二年一月十一日明けて五つの長男重義が病死しました。私に取つては實に大打擊であります。併しそれが大打擊であつただけそれだけ、これで挫折してはならぬと私は奮起しました。奮起して私は此際我子の記念に何か一仕事したいと考へました。否、一仕事せずには居られないのです。併し學問上の仕事は、一時の感情で成し遂げられるものではありませんし、又成し遂ぐべきものでもありますまい。私はやはり今まで通りに私の大願に向つて遲々たる一歩一歩を進めませう。唯だ此際改造社兼ての勸誘を幸に、今までの論文を一冊にすることを許して貰ひませう。それを我子の爲の記念出版と云ふことにして、重義の靈に供へたいのであります。三歳半の幼兒に離婚論文集――隨分不適切な供へ物です。併し彼は喜んで享けて呉れるでせう。まだ字の讀めぬ彼に取つては、內容の適否は問題ではありません。所謂『門前の小僧』で――本を讀む眞似をすることが大好きでした。彼自身に手當り次第の書物を開いて、仔細らしく小首をかしげながら、彼自身に適ゝな內容に改作しつゝ聲高に讀むのでした。彼の生前には彼は『おとう樣の御用の御本』にさはることを禁じられて居ました。禁じられれば禁じられるだけ彼はどんなにか父の書架にならんで居る大きな本がいじりたかつたでせう。父は今、昨日まで叱つた瓜を手向け』ます。さうして

號の偉觀を見よ

◎小說募集

◇毎月小說を募集します◇選者は斯界の第一流島崎藤村氏です◇四百字廿五枚以內とします◇應募者は婦人に限ります◇應募原稿は返戻しません



自由獲得社會より資本的營利社會へ（其二）

——『社會運動と政治運動』に接す——

福田德三

（一）

佛蘭西大革命は、一の大きな原則を確立した。其れは他事ではない、法律上に於ける各人の絕對的平等是である。ナポレオンの偉大なる權力を以てしても、如何ともすること能はざるほどに、確定的に打建てられた此原則は、封建制度

崩壞の后を承けた時代に於ける政治及び社會の一切の活動の根本原則となつたのである。大革命後打建てらるべき社會は、此原則を無視することは全く不可能となつた。併し乍ら、法律上の平等てふ原則は、其本質に於て徹頭徹尾消極的なものであつて、如何なる意味に於いても積極的なものではない。其れは（第一）何人にも他人に勝る特殊の權利を認めざること、（第二）各人を共同生活の獨立なる原子として認めることの二つの條件から成立つもので、而して、其れから生ずる權利なるものは、此の認承の下に於いて各人を他人の侵害に對して防衛し且つ維持することを、其の任務とするものに外ならないのである。換言すれば、此の原則は、各個人間に法律上何等の差別を認めずと云ふ根本事に歸着するのである。此一事に於いて、大革命後の社會は、其以前の時代と截然區別せらる可きである。大革命以前の社會は、其の一切の制度に於いて、其凡ての秩序に於いて、差別的權利を根底としたものである。社會を形づくるものは、此等の差別權であつた。大革命は、此の差別權を一掃した。併し乍ら、差別權の一掃せられた後の時代を目して、個人主義社會となすこと、ルイ・ブランなどの如くするのは、此の新しい時代の眞相を誤り傳ふるものである。何となれば、法律上の平等とは、各個人が他の個人に對し、平等なる獨立を有つことの謂に外ならない。從つて、其れは一の積極的なる社會組織の原則たることを得ないもので、寧ろ消極的に、社會の組織以外に於ける各個人を獨立者と見ると云ふことに歸着するのである。其れは一切の特權の否定である。從つて又た上下的關係を包含しないものである。然るに上下的關係なくしては、社會は組み立て得られないのであるから（此點に就ては、拙著『社會政策と階級鬪爭』參考を乞ふ）、此原則は、積極的なる社會組織の原則となり得ないのである。併し乍ら、社會は一日も存せずして已み能はざるものである。大革命前の社會は、法律上の差別を認むるによつて、社會の上下的關係を支持し、其の存立に基調を與へて居た。今大革命によつて、此の基調は破壞せられた。從つて玆に、何等かの新しい要素が起り來つて、此の缺陷を充たし、新

社會に其の根基たるものを與ふることが必要となる。法律平等の原則は、此任に應ずることは出來ないものである。其の新しい要素なるものは、法律平等の原則に反することは無論許されない。否、此原則を十分に承認し、其の消極的地盤の上に立つて、新に、積極的の任務を盡すものでなければならない。其れは果して何物であつたか。答へて曰く、其れは、法律上の平等權に抵觸することなくして、而して事實上の不平等、實際生活の上に於ける上下關係を支持する所の或ものである。其或ものとは『所有』即ち之れである。

（二）

法律上の平等の原則が確立すると共に、所有の歴史は、一の新しい紀元に入り込むのである。如何にして然るか。答、不平等の基調の上に立つ所の法律關係が社會の統制者である限りに於ては、所有は單に經濟上の欲望充足の手段としての意義を有するに止る。之に反して、法律上の平等の原則が確認せられ、從つて、法律關係は最早單獨には、社會統制の根本力たる資格を持たざるに至るときは、之に代つて、社會統制の根本力たる任務を荷ふものは、『所有』たるに至るからである。社會統制の根本力は、差別性の支持者でなければならず、而して、所有は、此意味にての差別性の支持者として、今や唯一の有資格者である。玆に於いてか、所有は、舊時代に於ける其の面目を一新し、偉大なる重要を獲得するに至つたのである。佛蘭西大革命は、此の意味に於いて、『所有』の革命をも演じたものと云はざるを得ないのである。所有が、單に、經濟上に於いての各人の欲望充足の手段たるに止まらないで、其所有者に一定の社會上の地位を與ふる根基となる爲めには、其れは、純然たる個人私有權の範圍を脫出して、一の普遍性を帶びることを要する。各個人は、其の經濟生活の範圍内に於いて、他の幾多の個人と他人の手に在る所有とを、自己經濟の圏内に取り込まなけれ

ばならない。而して、彼は自己の財產を單なる個人的所有として保持するに止まらないで、之に流通經濟場裡に於ける普遍妥當性を附與するのでなければならない。然らざれば、彼は、社會に於いて、一定の地位を確保するに由ないのである。然らば、此く流通的普遍性を個人所有に附與するものは、何であるか。答、其れは、個人的に營まれて居た財獲得を變じて『企業』となすこと之である。然るに、企業は一人を以て成るものではない。幾多の人を集めて初めて成立するものである。而して、此く多くの人々が共同の一目的たる企業の組成を實現し得る爲めには、其處に一の組織が出來て、夫々に異なれる職分を各人に分業的に按排配當することを要する。就中、必ず無ければならぬものは、企業の主宰者と其實行者即ち勞働者の二者であつて、此兩者の間には、一定の上下關係に基く秩序あることを必要とするのである。言ひ換れば、企業に於いては之を組成する各人は平等たり得ない。少くとも、指導者、主宰者たる企業者と服從者、執行者たる勞働者との間には、或る差別が存せなければ、企業は成立し得ないのである。此差別が即ち所有の價値增進を根本基調とする社會に起る第一の而して最重要の差別であるのである。

トコロが、玆に、此第一の差別が生ずるや否や、直ちに第二の差別が必然的に起つて來るのである。企業は、一人の力によつて、運營せられ能はざるが如くに、又一人の爲めに、運營せられ得るものでもないのである。企業の營む生產は、廣き範圍、多數の人を對象として運營せられるものでなければならない。從つて、凡ての企業は、多くの他の企業と相併立して、相呼應し、相互に條件付け合つて始めて成立するのである。其の結果は、企業の成立は、同時に、單なる所有を變じて、流通經濟の一器官となすことになる。流通經濟に於て、所有は新しい資格、新しい性質を有つことゝなる。何故となれば、流通經濟に於ける所有は、絕へず活動して已まざる運動行程中に置かるゝものであつて、其の存在も其の擴張も、共に、流通生活の與ふる秩序に服從せなければならないものである。從つて、所有は、單に欲望充足

の手段でなくなつて仕舞ひ、餘剰獲得を目的とする企業の基本となるに至るのである。流通生活に於て、餘剰獲得を目的とする企業の基本、之を名づけて『資本』と云ふ。乃ち、欲望充足財は一變して、茲に資本となるのである。左樣すると、茲に、第二の大なる差別が勢ひ起らざるを得なくなる。何となれば、資本の大小は、單に程度の差違たるに止まらないで、性質の差違を有するもので、大なる資本は、小なる資本に對して、常に支配的實力を有するものであるから、大なる資本を擁する大資本家は小なる資本を擁する小企業家に對し、著しく差別的の地位に立つことを免れないのである。其差は、恰も資本主對勞働者のそれに於るが如く、大資本家對小資本家の截然たる差別を現出するのである。ソコデ、企業の生活には、（一）大資本企業家、（二）小資本企業家、（三）勞働者、の三階級の分立が必然的に、不可避的に、起り來るのである。

（三）

法律上の平等てふ原則の上に建てられた社會に於ては、所有は各個人が其社會に於て占む可き地位を定むる第一の而して最自然的の手段であるが故に、所有發展の程度は、同時に又各個人の人格的差別的妥當性の基調を成すものである。此の妥當性に對しては、法律上の平等は、他の一切の平等、他の一切の差別に對して、各人格を防衛しつゝ、唯だ獲得所有の差別のみを妥當せしむるのである。他の詞を以つて云へば、法律上の平等原則は、差別的獲得所有社會の前提條件たるに過ぎないものであつて、決して其の統制原理たるものではないのである。而して、獲得所有の差別を妥當せしむる狀態なるものは、又決して、ルイ・ブランの云ふが如き、個人主義化の狀態ではないのみならず、却つて、其反對に、新興三階級の協動、相互繫屬を高度に於いて必須とする共同生活狀態であるのである。其の狀態の下に於いては、

各人の社會的地位は、所有獲得の運動と分布によつてのみ支配せられるものであるから、所有は其面目を全く新たにせざるを得ないこととなり、此の新社會に於いては所有は、各個人の地位を定むる基本となるのである。斯く獲得所有が其の基本となる社會は、單純なる法律關係が其の基本たる社會とは、其の面目を全く異にするものである。私は、此の新社會を名づけて『自由獲得社會』と云はんと欲する。其故は、此社會は法律上の差別を一切徹去し、從つて、法律關係によつて、上下差別の社會を基礎付けることを全く罷め、之に代るに、所有の自由なる獲得に於ける差別、不平等を以つて基礎付けられた社會であるから。

（四）

法律上の不平等に基く一切の特權、獨占、門閥、業閥は撤去せられ、此く解放せられた法律關係の下に於て、企業は活躍し始めた。併し乍ら、速斷してはならぬ、法律上の差別撤廢は、一切の差別の撤廢を意味するものではない。古き差別は撤廢せられた。併し其れと同時に、其れに代つて、新しい差別が起つた、否、起らざるを得ないのである。企業の社會は、法律上の平等を其の必須の前提條件とする。故に法律上に差別を恢復せんとする一切の企てに對しては、其れは極力反抗する。政治の力が其企を爲す時、企業は其の死敵となる。之れに反して、政治の力が、法律上の平等の原則を固守する限り、企業の社會は、政治の力とは殆んど沒交渉、風馬牛である。田を耕して食ひ、井を掘つて呑む、帝王、我に於いて何かあらんとは、自由獲得の社會か、法律平等原則の上に立つ政治に對して持つ所の心事である。從つて憲法の形式の如きは、其の全く措いて問はざる所であるのである。アダム・スミスを資本主義の學者なりとし、又彼に何の國家理論無しと考ふる淺薄な見解の流布するは、此一面のみに就て速斷した結果である。（附言、『商學研究』掲載拙稿

『原生哲學の闘士としてのアダム・スミス』は此の點を論證しやうとしたものであるが、震災後多忙の際であつた爲め講演、速記文を何等加筆することなくして、其儘に出したものであるから、所論粗雜、論述不精確、殆んど見るに堪へざるものである。私は其の文の追尾に斷つて置いた通り、他日十分推敲した改稿を以つて、右文に代へたいと思つて居る。然る間、右文は一應撤去したものと看做して預きたいと念ずる次第である。近來右文に對し、杉村、谷口兩氏其れ其れ長文の批評を公けにせられたが、私は稍遠き將來に於て改稿文を以つて御答に代へる積であるから、其等批評文の細目に對しては別に御答をせずに置くことを諒とせられたい。唯だ谷口氏に對して、一言申上げて置かなければならぬ事は、氏は、資本主義學說の定義を河上博士から援引して居られるが、河上博士の定義なるものを私に於いて承せねばならぬ理由は、寸毫も存して居ないことであつて、私の此文は、河上博士其他の資本主義定義論の根底に立入つて考へんとするものであること是れである）

ナポレオンは、斯く與へられた社會に起つて來たのである。彼は此の社會に手を觸るゝ事を爲さなかつた。否、爲し得ざりしのである。彼の爲したことは、此社會を前提とする上に於ける一切の他の事であつた。彼の絕大な權力も、此の社會の定めた限界を打破ることは出來なかつたのである。其處に彼の弱點もあれば、又同時に强みも存在するのである。併し乍ら、ナポレオンは、此社會の成立してから未だ間もない時代に出で來つたのである。彼の權勢は、幼稚の域にある自由獲得社會に對向したのである。此時代に於いては、社會の三大階級の差別は、未だ十分に成熟したものでなく、勞働者の企業者となり、企業者の大資本家となることは、必ずしも不可能な事でなく、三者の區別未だ混淆裡にあるを免れなかつたのである。而して、ナポレオンの布いた大陸封鎖は、企業の勃興に非常な刺戟を與へた。殊に綿毛の紡績業、製糖業に於いて大企業は促進せられた。ナポレオンは極力大企業の成立を保護し奨勵した。彼は、一方に於い

て、舊貴族の復權に勉めると共に、他方貴族と其の特權とを永久に根絶す可き要素たる企業の促成に勉めると云ふ矛盾極つた政策を取つたのである。譬へて云へば、殿様内閣に三井の番頭を魚交りにさせたり、三菱内閣に公卿華族を割り込ませようとする様なものである。ナポレオンは、此の企業のことを、traraux d' utite' publidue.（公益事業）と名けた。着想巧妙驚く可しと云はねばなるまい。

（五）

ナポレオンは、單に『公益事業』の獎勵保護によつて、此の社會の成長を助けたのみでない。彼が屢々企てた對外戰も亦間接に此の勢を促進したのである。佛蘭西に於いて短日月の間に、自由獲得社會が長足の進歩を爲したのは、連續する外征の賜であることを忘れてはならない。其の然る所以は極めて簡單明瞭である。新社會に取つての危險は、外部から起り來るものでない。政治から來るものでもない。法律上に存するものでは元よりない。唯一つ其社會の内部に存する。即ち其の社會成立の要素たる各階級間の衝突、殊に勞働者對企業者の鬪爭から生ずるものである。幾度かの對外戰は、此の衝突を著しく緩和した。戰爭は多くの無産者を軍役に收容し、此れに其生存を確保して、有産者と當面に衝突する機會を取り去つた。否、無産者も軍功によつて、一躍高位高官に昇り得る機會が與へられる、殊に無産者は、供給需要に超過すること多からざる爲めに、相當の賃錢を支拂はれる。彼等は、其賃銀所得を積みて所有獲得者たる機會を未だ全く奪はるゝに至つて居ないのである。斯くして、新社會に取つての唯一の脅威たる階級衝突は、對外軍役のために著しく緩和せられたのである。在内的の脅威を有たざる新社會は、後顧の憂なくして發展し、擴張した。かくて、大革命に幕を切つて落した社會革命は、自由獲得社會の完成を以つて、一段落を告ぐることになつたのである。

（六）

佛蘭西大革命は、封建社會の行詰りを解決した。封建社會は倒れた、而して、其れと同時に、全社會は、二つの大きな部屬に分割せられた。兩者は其の全力を擧げて、國家形態の改造、憲法の變革に努めた。此の運動の行程に於いて、舊社會の基本たりし不動產所有の分布に變化が起り、其の新しき分布に應じて、法律平等の原則が確立せられたナポレオンは、此狀態を在るが儘に受取つて此原則の上に打建てられた强大な政體を實現す可く勉めた。斯くて、社會の發展は暫時休息の域に入つた。何故ぜとなれば、法律平等の原則は、舊社會の基本たる差別性を撤回し之れに代つて起つた新差別性の負擔者は、新しい政治上の權力に對して、平等の權利を主張するに止る社會原子としての所有たるに過ぎなかつたから。玆に於いて、社會は其の發展を休止せざる爲めに、一の新しい要素を求めなければならないことになつたのである。而して、其れは、自由獲得の社會に於ける『企業』に於いて與へられたのである。

玆に於いて、重大な問題が起つて來る。曰く、此の企業の社會、此の自由獲得の社會から起り來る可き政治形態は何であるかと、ナポレオンは、此問を解決し得たものでは、決してない。彼は、此社會が漸く產れ出た斗りの時に出て來た。此一事丈けでも、彼は十分の解決を與ふ可き可能性を有ち得なかつたことを察せしめるに十分である。故に、語を矯めて、之を云へば、ナポレオンを仆したものは、ウエリントンやネルソンではない。普魯西の軍隊でもない、國內に於ける一切の政敵でもない、新たに產れ出でた新社會其ものである。更らに、詳しく云へば、新社會に對して、それに妥當なる政治形態を與ふることの不可能此一事であつたと云ひ得るのである。

私は、『階級鬪爭と社會政策』に於て、次の樣に言つて置いた。『國家は今日までの人間共同生活に於いては、人格性、

非人格性兩者の鬪爭の一切を盛り盡くした一の容器であつた。此容器は、國家の法律と云ふ堅牢なる外圍を有して居る。大抵な激甚な鬪爭は、此の堅牢な外圍を打破つて、其容器以外に脫出することなかりしものである。然る限り、我々は、『社會』を發見するに至らなかつた。然るに人間共同生活に於ける人格性、非人格性の鬪爭衝突の勢が激烈となると、此の容器は、之れを容れ盡くすことが出來なくなる。其の最も激烈なるは、此外圍の非人格的拘制の爲めに、最も重き壓迫を感ずるのである。其れは即ち勞働である。』(一四五・一四六頁)『國民經濟てふ經濟組織は、右の外圍を限界とする國家てふ容器の包擁する限度に於いて、財產對勞働の鬪爭を容れて居つた』(中略)『人間生活に於ける人格性對人格性の鬪爭は、決して國家てふ容器以外國家の範圍以外に於てのみ行はれるのでなく、國家に盛り上げられた部分、國家てふ容器の中にある共同生活に於ても行はれる者である』(中略)『必竟、國家てふ容器は、段々增大して行く社會の運動に對しては、其彈力性が不足するもので、其外圍を外面的に著しく擴大したには相違ないけれども、到底一切を容れ切れないものである』(中略)『國家の外圍をして彈力性に富むものたらしめ、出來得る丈け十分に、共同生活の鬪爭を廣汎に其內に包擁するをせしむること、是れ社會政策第一の本領である(一五〇——一六〇頁)と。私が今茲に論じつゝあるのは、此の國家範圍擴張の一過程である。ナポレオンの帝國も其の一幕として云ふを見る可しと言ふのである。ナポレオンが成し遂げ得ざりしとて、其は問題の全部行き詰りを意味するものではない。否、新しき社會としての自由獲得の社會、初期企業の社會は、必ず之れに妥當す可き國家範圍の擴張、其擴張を事實とす可き國家形態即ち憲法を見出さなければならなかつたのである。新興の社會は、斷じて長期に亘つて、國家範圍以外に彷徨するに甘んずることは出來ない。善きにせよ、惡しきにせよ、完全なるにせよ、完全ならざるにせよ、之れに相應ずる所の新政治形態を現出せずしては已むものではない。言ひ換れば、憲法と行政とに於いて、自由獲得社會は其容器たるにふさはしい新しい或ものを產み出さなけれ

ばならなかつたのである。之れは佛蘭西維新（レストーラション）時代の憲法と行政とに於いて與へられた。若し此時代に恰好な名稱を與ふ可しとならば、私は其れを『ブルヂオア』政體と呼ばんと欲するのである。ブルヂオア時代は、自由獲得の社會が、ナポレオン政體に打克つた時代である。而して私は、七月革命は其社會全盛の時代と見るも不可ないと思ふものである。

（七）

『レストーラション』時代の特色は、普く知られて居つて、之を誤解せられる恐れは、甚だ尠い。何故となれば、それは、『ブルヂオア』が、フエー・タコムプリ、fait accompli（既成の事實）たる時代であつて、何人も之を見ること容易であるからである。其の社會相は顯著にして、見誤られる恐れの尠いものである。自由獲得の社會は、企業による所有の自由獲得てふ一事が喚び起す所の人間の力の組織が、其等の力に一定の地位と秩序を與ふるは勿論、其の力の主體たる人格相互の關係に一定の地位と秩序とを與ふるによつて完成せられたのである。更らに詳しく云へば、各人の財獲得の活動、財獲得の運動に於ける各人の分擔が—其れは企業主宰の活動であつても、又た單に筋力を勞する勞働であつても—單に一時的の所作たる地位を脫出して、各人の全生存を包攝し、全活動を條件付ける所の一生の業たる實を具備することによつて、自由獲得の社會は、既定不動の一事實となつたのである。

此の自由獲得社會は、財の自由獲得を一生の業とする人々から成る社會である。從つて其の根本的の要件は、自由獲得の確保是れである。自由獲得確保には二つの前提を要する。（一）各人私權の安固（二）獲得活動の無碍的自由是れである。然るに、各人は、此の條件を確取するためには、各自己利益の擁護に勉めなければならぬ。各人の利益は、其

本質に於いて、決して圓滿に調和併行するものではない、否、互に相扞格し相衝突せざるを得ざるものである。自由獲得の社會は、かくて、一面に於いて、利益衝突の社會である。Harmonies économiques の社會ではない、Con ra-dictions économiques の社會である。新社會に妥當す可き國家形態決定の第一原理はかくして定められる。曰く、其の政治は、先づ以つて、此の利益衝突の狀態に相應するものでなければならないと。

企業には普遍的なる一の前提がある。所有即ち之れである。從つて、企業の社會は、又た同時に、各人の社會的地位を定むる絶對的條件として、所有を認めざるを得ないのである。かくて、所有なき無產者は、其の社會的地位を確保す可き條件を有たないこととなる外はない。從つて、彼れは、單に所有から疎外せられたものであると云ふ意識のみからでも、有產者と其の利益を共通に有すと考ふることを許せないのである。況んや、實際の營生活動の上に於いて、絕へず有產者の爲めに、其の全人格を支配せられなければならないことを見出すに於いてをや。だから、自由獲得の社會は、其構成の二大要部が、單に其れ自らに於いて對立するに止まるときは、所有を中心とする激しき利益衝突の鬪爭を喚起することを免れ能はないのである。此の鬪爭は、言ふ迄もなく、新社會の本質たる獲得行程に取つて、大なる障碍となり、之れを其儘に捨て置くときは、自由獲得社會其ものゝ崩壞を將來たすかも知れないのである。有產者が全勝して、無產者の利益を全く蹂躪し去るに任せて置けば、自由獲得の前提たる人格の自由は全く滅ぼされるであらうし、反對に、無產者が全勝して所有を支配するに放任すれば、自由獲得社會の基本たる所有は廢絶に歸するであらう。此矛盾は決して打捨て置かれてはならぬ。ソコで、此矛盾を解くと云ふことが、新社會に妥當す可き政治憲法の第一任務たらざるを得ないことになるは、誠に當然至極と云ふ可きである。是れが、新社會の國家容器に對して、先づ第一に要求する收容條件であり、新國家憲法に課せられたる第一原則であつたのである。

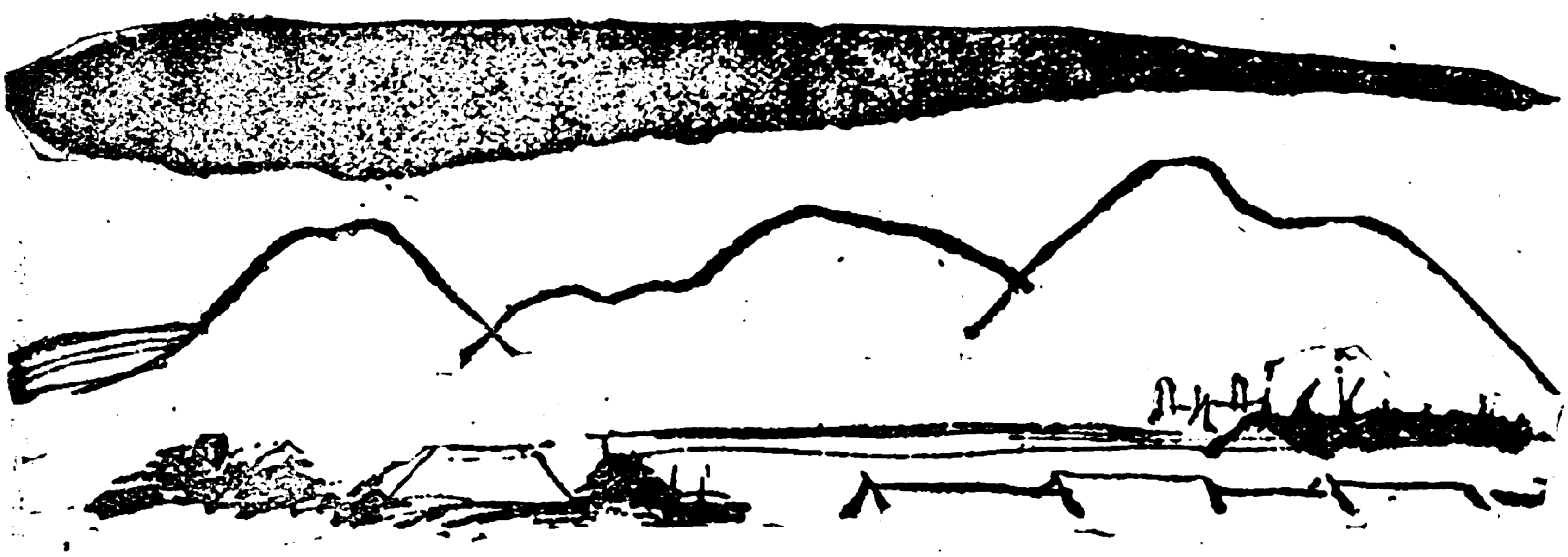
（八）

第二の衝突は、企業と企業との間に生ずる。各企業は、自己の任務を以て最高のものとすることは勿論である。各自が其最高と認むる企業目的を遂行するに任せて、之れに何等の拘束を加へざるときは、各企業は、互に、利益を侵犯し合ふこととならざるを得ない。之を好辭を以て言顯はしたのが、laissez faire, laissez passer, laissez aller である、更らに、其れを約めたのが libre concurrence である。laissez と云ひ libre と云ふ、言葉は甚だ美しいが、其後には、醜い而して危險な現象が潜んで居るのである。併し乍ら、自由獲得を本質とする新社會其ものの中には、此の危險を避く可き力は存在しない。其力は、之れを外から持來らなければならない。其外とは、新社會の容器たる國家を措いて外にはない。法律平等を確認した新國家は又た茲に到つて、一切の利益から平等に超越したものとしての任務を盡さなければならぬ。此任務を盡す爲めに、新國家に第二の原則が與へられる。

國家は企業者でない——公企業は公企業であつて、私企業とは截然と區別せられなければならないことは、私は今から七八年計り前、他の多くの事に於いて、私は殆んど師事せなければならぬ美濃部博士の『公企業（實は企業でないものを博士は其の『日本行政法』第三卷に於て此く汎稱せられて居る）の概念に就いて力說したことがある。私は、決して、枝葉の言葉爭ひをしたつもりでない。國家は、如何なる意味にても、私企業者たるものでない。又た然る可きものでないと確信する爲めに、特に抗議を博士に提出したのである。ワグナー其他の財政學者が Privatwirtschaftlicher Erwerb des Staates などと云ふ事を云ふのは、私は甚だ無理解にして不詮索な考方として、斷然反對するものである。詳しくは、拙著『經濟學論攷』八九頁以下『公營造物管見』を見られたし——又た勞働者でもない。而して又た社會

を構成する諸人格中、有産者階級にも、無産者階級にも屬せず、從つて何れか一方の利益のみを代表する者でない、人格は、獨り國家人格あるのみである。——但し此れは、國家人格に就て云ふので、現實の國家形態其ものに就いて云ふのでないことは呉々も注意して置かねばならぬが——少くとも、利害相衝突する各人格の上に超越する一人格である。或は、其れであらねばならぬ——オッペンハイマー教授は、聲に應じて云ふであらう、汝空想論者よ!と。之れに對する私の答は、簡單ながら、拙著『社會政策と階級鬪爭』一一九、一二七、一三一、一四九頁等に載せてある——從つて、國家は、企業と企業との間に於ける、各種特殊利益の衝突を取除き、若くは、緩和し得る資格を有たうと思へば有ち得る唯一者であるのである。國家が、如何なる形態に於て、此の二つの任務を盡し、此の二つの原則を實現するか、其れは、國家自らの選ぶ可き所である。自由獲得の社會は、此點に於ては、必ずしも大なる注文は持つては居ない。英國の樣な君主體でも、米國の樣な共和體でも、獨逸のやうな聯邦體でも、又更らに趣を異にした瑞西の樣なフェデレーションでも、若くは又た伊太利の樣でも、和蘭の樣でも、敢て問ふ所ではない。其何れに於いても、自由獲得の社會は、以上二つの原則をさへ認める國家なれば、其れを容器として、進歩し擴張し發達し來つたのである。否、少くとも、其の初期に於いては、自由獲得社會は、ナポレオンの帝政をさへ甘受して居たのである。自由獲得の社會が、國家に向つて第一に、求める所は、其の不偏性である。其の超越性である。平たく云へば、相鬪ひ相爭ふ利益と階級との何れにも同ぜず、即せず、而して、一切の鬪爭、一切の衝突を悉く網羅する容器たると云ふこと是れである。初期の其れが、ナポレオンの帝政をさへ甘受したと云ふのは、必竟するに、彼が、此の不偏不即の容器を與へんと努めたからに外ならないのである。併し乍ら、此れは第一の要求ではあるけれども、決して唯一の要求ではないのである。社會の國家に求める所は、更らに他にも存して居るのである。ナポレオンは、第一の要求を充たした。乍去、彼は、其他の要求を充たさなかつた。是れ、彼れが早晩仆れざるを得ざりし所以である。

(以下嗣出)



都市と田園

ラビンドラナートル・タゴール

この度びの二度目の日本訪問に際して、こゝに御招待を受けたことは、私の大いに名譽とするところである。實は、二度び日本に來たり、私の友と會ひ、諸君の若々しい姿に接し得やうなどとは、想ひもかけぬことであつた。私がいま、日本の國民にたいして、心からの大きな愛を持つてゐると言つても、決してそれを、一片の御世辭ととつていただきたくない。日本に訪れない以前に既に、私の心がいかに諸君の方へ索かれていたか、それを私は明らかにしたいと思ふ。

私が、まだ割に若かつた時、寛い心と大きな獨創性をもつた一人の日本の理想家が、偶然のことで、私共の國を訪れて來られた。その人は印度に在つた間、たいてい私の家に居た。その人はベンガルの若き人々の心に、大きな感銘を與へた。諸君がみんなその人のことをお存じかどうか知らないが、その人が印度に殘して行つた名は、印度の永久

に忘れることの出來ぬ名である。その人の名は岡倉と言つた。私共の間に日本に對する愛を始めて呼び起したのは彼であつた。そればかりではない。我々印度の青年の心に、印度の過去と、その未來と、全人類にたいする責任感を、深く感銘せしめたのも彼であつた。

彼の後に日本の客がひきつゞき印度を訪れた。たいていの人はカルカツタに在る私の家の客となり、私だちは家族の一員としてその人々を迎へた。諸君の大部分は、日本現代の偉大なる畫家、横山大觀氏を御存じであらうと思ふ。彼も亦、他の二人の畫伯と共に、私の家に客となつた。この人々と私どもとの接觸は、アバニインドラナース・タゴールの指導の下に、外國模倣の深き霧のなかゝら、印度自身の藝術的理想を導き來らんがために苦しんでゐたベンガルの新藝術運動を、大いに力强いものとした。

さう云ふ譯で、日本と私との關係は、私が日本を訪れない前に既に、始つたのであつた。それ以來、私は、日本の國民と歡びを共にし、悲しみを分つて來た。更に私は、日本の歷史の遠い昔に於ける、印度との精神的血縁の關係を通じて、一層深い親和を感じてゐる。

その上なほ、私が最も深く感じてゐることがある。私は常々、東洋の理想を信じて居り、それの實現されんことを願つてゐる。諸君日本の國民及び亞細亞の凡ての國々の國民は、今日、十分にそれを自覺して居り、且つ、日本の國民生活の統一されてゐることによつて、我々亞細亞の國民はいづれも、日本國民に大いなる期待を抱いてゐる。それは決して、日本が今後富めるものとなり、强きものとなるであらうとの期待ではない。日本を通じて、東洋は自らの聲を發す

るであらうとの期待である。亞細亞の凡ての國々は、その聲を聞かんことを待ち設けてゐる。

何等かの災害が外部から日本に來たとき、何等かの國民的不幸が諸君の上に墜ちかゝつたとき、私はしばしば心を痛める。しかし、私が更に更に心を痛めるのは、內部から出て來た或る道德的不正が、日本の立派な名譽を穢した時である。それと言ふのはいまも諸君に言つた如く、私が、東洋の理想にたいして、心からの愛と尊敬とを持つてゐるがためである。その理想とは何であるか？　歷史の一切の有爲變轉を貫いて、吾々東洋人の心はいまなほ、道德的精神的完成の信念を失はず、單なる外面的の成功で滿足するものでないと私は信じてゐる。それが事實であるかどうかは保證することは出來ないが、私の意味するところを說明するために、諸君に一つの物語を紹介しやう。それはまことに、印度にみなぎれる感情を代表してゐるものであり、それ故に歷史的眞實性を持つものであると信ずる

若い頃私は、印度に於けるスポイ（歐式に訓練された印度人兵）叛亂の時の話を聞いたのを記憶してゐる。その叛亂の間、つけねらはれた人々の或者だちは、放浪の行者に姿をかへて、叛徒のために間諜の役目をつとめた。叛亂の鎭定にさいしては、英國兵士はこれらの行者たちや、またまるで無關係な行者だちにさへも、何等假借するところがなかつた。あるとき、さうした行者の一人が、路傍の樹蔭に跪坐して、深き瞑想にひたつてゐた。そこへ一人の英國兵士が現れて、いきなりその行者に劍をつき刺した。行者はたゞ兩眼をみひらいて、わづかに首を屈め、靜かな微笑をうかべて、その兵士に向ひ、「あゝ、汝は遂に來た」と言つて、瞑目した。彼は、自らの運命にめぐり會つたと感じたのである。そしてその兵士は彼にとつては、運命の車輪に過ぎなかつた。彼は、西歐の國々で考へられてゐるとは異つた仕方

で、生の事實を觀念してゐたのである。彼はこの事實を超越し、己れを殺す者に面して微笑し、その人を赦すことが出來たのであつた。これは決して單なるあきらめではなかつた。否、むしろ澄み切つた歡びであつた。我々東洋人は、生の事實を超越し、外面の成功をもつてその目標とせず、理想の實現をもつて終極の目的とする或るものに、信仰を持つ可きことを敎へられてゐる。これが、我々の肉體的生命や物質的所得を犧牲としても、我々の内なる聖らかなもの、無限なるものに表現を與へんとする、眞の生活である。

偉大なる豫言者イエス・クリストが、亞細亞の大地から生れ出でたことは、大いなる表徴がふくまれてゐないであらうか？　外面的な見地からすれば、彼の生活は、失敗の表象に過ぎなかつた。彼は死後に、一群の村人と漁人の隨追者を殘したに過ぎず、泥棒と一しよに十字架にかけられ、侮辱を加へられた。それは犬死に終つた、無益な、下らぬ生活であつた。羅馬帝國の僧侶と官吏とは、赫々たる光榮の頂點に立つた。この二つのものは對象をなしてゐる。一方に於て、そのアジア人は友だちからさへ見捨てられ、貧しい者の心に記憶をとどめたに過ぎなかつた。然るに羅馬は、大いなる成功を斂め、大帝國を建設し、心高ぶり、力強きものとなり、その富と勢力とは、眞に永久の固き基礎を持つてゐるやうに觀えた。とは言へ、それらは遂に夢であつた。こゝに二つの表象があり、文明の二つの方面がある……西方の文明と、東方の文明と。而して私は、その東方の文明を信じてゐる。されば、私は諸君の中に、何らか貪欲な、偏愛國的な、利己的な精神の發現を認める時、それを同じ東洋の大陸に屬するものとしての、私自身の屈辱だと考へる。

私は諸君にもう一つ實見談をしやう。それはつまらぬことのやうに執られるかも知れないが、西歐人と東洋人とかいかに根本的に異つたものであるかを示す、意味深きものである。嘗て私か米國を訪ねた時、二組の寫眞班か、寫眞を撮

らせてくれと言つて訪ねて來た。その一人は、紐育でも名の響いた寫眞師であつた。私はタキシを雇つて、その寫眞師の撮影所に赴き、寫眞をとらせた。二三日後、彼は私に若干の寫見本（プルーフ）を送つてよこした。その見本には一一孔を穿つてあつて、無作法にも、彼が私を信ずることの出來ぬことが示されてあつた。つまり私は彼の道具に過ぎなかつたので、彼はその後私に、一枚の寫眞も送つて寄さなかつた。多分彼は、私の自家廣告を手傳つたのだから、私から感謝される權利があると思つたのであらう。その自家廣告たるや、彼等が市場に於て安賣りする、不滅なるものの野卑なる愚弄に外ならない。成功を欲するものは、その價値を知つてゐる。然しながら、全く別の環境に育てられた私は、深くこの侮辱を感じた。

數日後他の寫眞班が私の旅館を訪ねて來た。……それは日本人の寫眞師で、その生れながらの禮節は、職業の習性によつて傷けられてゐなかつた。私は忙がしかつたけれど、彼のために時間の都合をつけた。彼は私の部屋へ寫眞機を運んで來て、マグネツシユムの準備をととのへ、布（スクリーン）をもつて私の部屋を撮影所にしつらへた。彼は寫見本（プルーフ）を送つて寄したが、それには孔を穿つてなかつた。彼は、友達に贈つたり、自身でとつて置いたりするために、私の欲しいだけのコピーを送ると言つて寄こした。そして彼はその言葉に反かなかつた。彼は商賈人ではあるけれども、名譽と禮節の信條を持つてゐた。若し彼の商賈が、人間らしい感情の發露に、何等の餘地を與へないならば、それは彼の自尊心を傷けるであらう。かくて、全くそれのない他のものとの競爭に於ては、彼は理想を持つてゐるだけ不利益であつた。

彼は、ひたすら成功をおさめるに適した心性を持つて居なかつた。これは東洋について私の感じてゐるものを、諸君

に明らかにせんがために擧げた一つの實例である。私は、世界の私だちの部分から現はれたこの寛容の精神に接して、歡びを禁ずることか出來なかつた。これは、我々が東洋に於て、諸々の仕方で有つてゐるところの精神であり、我々東洋人は、神聖なものとして抱くこの名譽の信條を傷けんよりは、寧ろ死を選ぶであらう。

この精神、この理想主義、私は亞細亞の名において、それを諸君に要求する。――それによつて、一切の諸君の行動は、審判されるであらう。若し諸君が、西方から借りもの丶感情を反撥するに過ぎないならば、それは決して觀ばしいことではない。我々はお互に、生の現相にとらへられず、それを超越し、利益を擲ち、死を賭しても、東洋の威嚴を保持し、心靈の尊嚴を保たうではないか。

ベンガルのサンチニケタンに私の學校を設立するについて、私は三つの理想を持つてゐる。第一は、學童だちがそこで飽まで自由に教育を授けられる學校を建てることである。第二には、一切の異れる亞細亞のカルチユアを調整して、亞細亞の偉大なる心を知るよすがと爲さんがためである。現在印度に於ては、いろんなカルチユアが余りに撒布されてゐる。欧羅巴に於ては、諸のカルチユアが集中されて居て、いかなる國に於ても、それらは一つの大いなる知識と理想の蓄積を齎らし、それに依つて、一つの大いなる知力と開明とを齎らして居る。我々は、ある施設に於て、世界に亘る人類のカルチユアの代表者を集めなければならぬ。私の資力は非常に微弱ではあるけれども、この目的を以つて、私は、東洋及び西洋の傑出せる若干の人々を、私の學校に迎へやうと努めてゐる。

その外に私はもう一つの理想を持つてゐる。私は、今日、全世界は自殺の過程を執つて居り、我々の氣のつかぬ間に

それが進んでゐると考へてゐる。現在の文明は、都市に不自然な生命の充滿を齎らし、そこでは人々の生命は凋れて、蒼ざめた汚點となつて居り、一方他方は貧化してゐる。今日の權力と富の組織は、國の眞の富と生命とを增すものでなく、反つて全人民の大多數から眞の富と生命を減じてゐる。かくて不斷の自殺の過程が踏み出された。そのために犧牲を必要とする巨大なる諸組織の出現の可能となつたのは、ほんの一二世紀前のことであつた。それらの諸組織は、國內の富を、集中された富の機關の犧牲とし、その結果は、到る處に明らかとなつて居る。諸君の大都市の背後に在る村落が、どうなつてゐるか私は知らないが、しかし私は、推察することが出來る。諸君の文明は、その基礎を農業に持つて居るが、諸君の生命、諸君の文化、諸君の幸福のこの大いなる基礎は今や、除き去られて居る。而してこの生命の廢墟から、諸君は、それもほんの若干の選ばれた地點に、富と權力の塔を築いて居る。

私はそのことについて深く想ひめぐらし、私の學校と結びつけて、田園再建研究所を設けた。我々は、かの殺風景で不健康な、不振で陰氣な、無味な大地の間隙を、幸福な生活の生々した流れをもつて滿したい。我々は、我々の田園の藝術、文學、戲曲、詩、その他我々の村落生活をして歡ばしく力に滿ちたものにする一切のものを、再び持ちたいと希ふ。そのために私は研究所の仕事を始めたのである。支那及び日本の人々は、願くは我々を助けて、國民をして再び生活を取り還へさせ、彼等をしてあらゆる歡びの手段を持たせることに努めて戴き度い。都市に於ける人口の集中の結果我々は我々の富源を涸らしてしまひ、凡てのものの眞の幸福と歡びでなく、我々自身の浪費と愉樂とを築き上げた。このことのために、道德的の不健康が生じて居り、都市に於ては、もろもろの頹廢の徵候が顯はれてゐる。私は私の友エルムハースト君を日本によこして、現在私のやつてゐる仕事の詳細を說明させたいと思ふ。どうぞ諸君は彼を招いて、

諸君の田園村落を研究せしめ、彼の農民だちを諸君の田園に生活せしめて栽き度い。それと同時に、諸君もまた日本の農民を印度に送つて印度の農民と生活を共にせしめて戴き度い。私は日本、印度、支那の學者や學生を交換するばかりでなく、たゞ農民も相互に交換したいと思ふ。我々は相互の國を知らなければならない。そして、愛し合ひ、理解し合ひ、共働し合ふことを知らなければならぬ。私はこの事を可能ならしめ、この私の夢を實現し、印度をして日本は印度と一つなりと感ぜしめたいと望んでゐる。そして若し我々が、それを實現することが出來れば、私は滿足して瞑目するであらう。（一九二四・六・九）

process of suicide which is going on without our knowing it. Present day civilization has given rise to an unnatural congestion of life in cities where the life of the people is drained into one lurid spot whilst the rest of the country is impoverished. Organisation of power and wealth today is not adding to the real wealth and life of the country but is depleting from the vast bulk of the resources of the whole people. A continuous process of suicide has begun its career. Only a century or two ago it became possible to give rise to big organisations which needed victims for their sacrifice. They have brought the wealth of homes for a sacrifice to the machine of concentrated wealth, and the effect is everywhere becoming evident. I do not know what is going on in the villages behind your great cities but I can guess. Your civilization has had its basis in agriculture and now this great foundation of your life, our culture and your happiness is being sapped. Out of this wreckage of life you have been building towers of wealth and power, but only on chosen sports.

About that I have given a great deal of thought, and in connection with my institution we have started an Institute of Rural Reconstruction. We want a living stream of happy life to flood the chasm of that dry bed cheerless and unhealthy, dull and dismal. We want once again our rural art, our literature, drama and song, all that went to make our village heart glad and active, and for that I have started my work and I want you in China and Japan to help us to make the people live once again, to have their full measure of joy. By the concentration of individuals in cities we have drained our resources and we have built for our own dissipation and pleasure, not for the real happiness and joy of all. This has been causing moral ill health and in the cities every sign of decadence. My friend Mr. Elmhirst will I hope be able to explain in detail the work which we are doing. I hope you will invite him to come and study in your own villages and to bring some of his workers from India to live their life in your villages, as you will also send some to share their life with ours in India. I do not want only an exchange of scholars and students, but also of the simple peasants of Japan, of India and China. We must know each other's countries, and learn to love, to sympathise and to cooperate. I hope to make this possible and to realise this dream of mine, to let India feel that Japan is one with her and if we can realise that I shall die happy.

By Rabindranath Tagore.

photo. One was the most renowned photographer in New York. I hired a taxi, went to his studio and had my photo taken. After a few days he sent me the proofs. They were perforated, rudely showing that he could not trust me. I was merely his instrument and he never sent me a single copy. Possibly he thought that he had the right to my gratitude in helping me to attain publicity, the vulgar mockery of immortality which they sell cheap in their market. Those who want success they understand its value. But having been brought up in a different atmosphere I felt this insult deeply.

Within a few days the other party came to my hotel...... a Japanese photographer who had his natural courteousness which business habits had failed to smother I was busy, but I succeeded in making time for him. He brought his own apparatus to my room and arranged his own artificial light; he made my room into his studio with the help of screens and he sent me proofs which were not perforated. He volunteered to send me as many copies as I would wish for my friends and for myself; and he was true to his work. Though he was a professional man and he had his code of honour and civility, It would hurt his sense of dignity if his profit-making would not allow any margin for human sentiment. In this he was handicapped by his ideal in a competition with others who were utterly free.

He had not the mentality that makes for unmitigated success. This is an illustration to let you know what I feel about the East. I was glad at this spirit of generosity coming from my own part of the world. This is a spirit which we possess in various ways in the East, where men will rather die than violate their code of honour which they hold as sacred.

This same spirit, this idealism, I claim of you, in the name of Asia. ...by it all your conduct will be judged. If you merely echo sentiments that are borrowed from the West, that is no cause for rejoicing. Let us expect from each other not to be grasping but to rise up above the circumstances of life, to hold up the dignity of the East, the dignity of the soul, even at the cost of profit, even to the point of death.

In building up my institution at Santiniketan in Bangal I have had three ideas in mind. The first was to found a school where boys would be given the fullest freedom in education. Secondly to coordinate all the different Asiatic cultures in order to allow us to know the great of Asia At present the different cultures in India are too scattered. In Europe they are all concentrated, for all the countries there have contributed to one great store of knowledge and ideas and through it to a great intellectual strength and illumination. We must try in some institution to bring together representatives of the world cultures of humanity. With this object in view, I have tried, although my resources are very small, to bring some of the best minds of East and West together in my institution.

Another idea I have had. I feel to-day that the whole world is suffering from a

through all the vicissitudes of history our mind has still kept its faith in moral and spiritual perfection and not merely in external success. I will give you one story to illustrate my meaning though I cannot vouch for its accuracy from the point of fact. I believe it to be true in that it represents a sentiment prevailing in India and therefore it has historical truth.

When I was young I remember hearing from our people a story of the sepoy mutiny in India. During that rebellion some of those who were being pursued disguised themselves as Sannyasis, as wandering ascetics and acted on behalf of the mutineers as spies. When the mutiny was quelled the British soldiers had little mercy on these ascetics, even upon those who were innocent. It so happened that one of these ascetics was sitting deep in meditation under the shade of some wayside tree when a soldier came and, without consideration, thrust his bayonet through the man as he sat. The man simply opened his eyes and with a bow and a quiet smile said to the soldier: "Ah, thou hast come at last." and died. He felt that he had met his destiny, that the soldier was merely a vehicle. The fact of life he took in a different way from what is known in Western countries. He rose above this fact and was able to smile at his murderer and to forgive him. This was not merely resignation, but almost a serene joy. It has been enjoined on us in the East that we should have our faith in something which transcends the facts of life, which does not take external success for its goal, but the fulfilment of an ideal. That is the true life, the giving of expression to the divine, the infinite within us, even at the cost of our physical life and material gain.

Is there not a great symbolism in that Great prophet sprung from the soil of Asia, Jesus Christ. His life was the very emblem of failure from the external point of view. He left behind him as his followers a mere handful of villagers, fisher folk; He was crucified with thieves; He was humiliated. It was an obscure life of futility ending in an ignominious death. The prelates and the officials of the Roman Empire were in the zenith of their glory. These two lay in juxtaposition, the one to the other; on the one side, the Asiatic man deserted even by His friends, leaving behind his memory in the hearts of those who were insignificant. Rome did achieve a great success and a great empire; she became proud and powerful; her wealth and strength had, in all appearance, a solid basis of substantial permanence, but they have proved themselves as a dream. Here are two pictures, two aspects of civilization... ...the one of the West, the other of the East. I believe in that of the East. Therefore when I find among you any outbreak of the spirit of greed, of chauvinism, of grasping selfishness, I accept the humiliation upon myself as belonging to the Continent of the East.

I shall give you one more story which sounds trifling, but which is significant, showing how we differ from one another fundamentally. When I was in the United States, there were two parties who came in to ask if they might take my

June 9, 1924

CITY AND VILLAGE

I am greatly honoured at this invitation accorded to me on this second visit of mine to Japan. I never thought it possible that I should come once again and meet my friend and look at your glad young faces. Please never think that this is merely a formal way of expressing my feelings when I say that I have a very great love for your people. I would like to explain how my heart had been drawn towards you even before I ever visited your country.

By some chance one of your idealists who had a large heart and great originality of mind came to visit us from Japan when I was comparatively young. Most of the time he was in India he lived in our house. He created a great impression amongst the young minds of Bengal. I do not know if you all know of him in Japan, but he has left behind him a name in our country that is not to be forgotten. His name was Okakura. He was the first to arouse in us a love for Japan and not only that, he inspired our youths with a sense of their responsibility to their past, to their future and to all humanity. From him we first came to learn that there was such a thing as an Asiatic mind.

A succession of Japanese visitors came after him. Most of these lived in our own house in Calcutta as guests and were accepted as members of our own family. I am sure that most of you will know of your own great modern painter, Yokoyama Taikwan. He also lived with us along with two other artists. And their association with us greatly strengthened the new art movement of Bengal which was struggling under the leadership of Abanindranath Tagore to help the art ideals of our country to emerge from the thick mist of foreign imitation.

So my connection with Japan commenced even before I came to your country. Since then, I have shared your joys and your sorrows. I have even felt a deeper sympathy through that relation of spiritual kinship with India which Japan had in those distant days of history.

Again there is another thing which I feel very deeply. I have faith in the ideals of the East and I want to see these realized. You, of all countries in Asia, are fully awake to-day, and through the concentration of your national life we all entertain a great expectation from your people, not that you will grow wealthy and powerful, but that through you the East will find its own voice. All the countries of Asia are waiting to hear it.

I have often felt hurt when any disaster has happened to you from outside, when some national calamity has befallen you; but more so when some moral wrong from within has blackened your own fair reputation. It is because, as I say to you, I have your own fair reputation. It is because, as I say to you, I have genuine love and respect for the ideals of the East. What is this ideal? I believe that

加藤內閣と護憲三派の前途

新內閣の國民的眞價

杉森孝次郎

新內閣が、それの成立の形式に於いて、以前のどの內閣にもまさつた、進化したものであることはあきらかだ。それが反政府黨出身だといふ點に於いて、それが衆議院の最大多數を材料とする點に於いて、それが比較的に漠然たる大衆の、あるひは民論の一結晶として浮かび上がつたといふ點に於いて。要するにそれが比較的に天降り式生產でなく、地昇り式生產であるといふ點に於いてだ。ここで比較的にといふたのは、以前の內閣との比較に於いてといふことだ。

新內閣の三大政綱として發表された普選即行、綱紀肅正、行、財政整理緊縮について考へるに、その三つとも、單なる聲明でなく、實行を意味する聲明ならば、新內閣の政務目錄內に書き示される價値は勿論ある。

普選は、行きがかりから察しても、大勢から察しても、誤魔化しやうなき新立法を意味するといふ點から察しても、新內閣によつてそれが實現されることを國民は期待しうる。行、財政の整理緊縮も、多少の行きがゝりをも持ち、また豫算その他の數字面に多少證據立てられねば無責任を自證する性質の聲明だから、或る程度まではそれに對するまじめな努力が新內閣によつて拂はれるだらう。

しかし、綱紀肅正に至つては、もしもそれが多少の地方長官その他の大臣從屬系の役人の更迭くらゐを意味するだけのものなら、大した事柄ではない。それは國民的、國家的大事ではない。けれどもそれ以外または以上に綱紀肅正の責任範圍を明確に限定し、認識することは困難だ。したがつてそれは政綱とし

て發表者をも、國民をも、大して安心させる本質價なきものだ。綱紀肅正は、實に、道德の根本命令にしたがひ、政治の眞理想にもとづいて、政治組織の根本的反省、批判、改正をも意味するでなくては、それ自身、甚だ無自覺であり、自己批判に缺けたもの、淺薄なものだ。

現存の貴族院制が多少意味する不合理質の如きものも、根本的、徹底的、全關係的に改正される道德的、國民理想的眞必要は無論絕深、絕烈、絕大だとさへもいへるほどだが、これは新內閣に期待すべき事業ではない。考へて見るまでもなく、それは新內閣にとつて絕望的に勝ちすぎた荷だ。たとへば現代日本に於ける附の政治理想的、國民道德的意義、價値を意識しえないらしい人が、新內閣の重要位置にも見えるらしいではないか。

まあ、普選が物になれば、ぼつ〳〵とは、諸般の制度改善にも大勢がいくらかづつは進んで行くだらう。實に、ぼつ〳〵として、そして、いくらかづつは。さらにそして、永久に淺層づたひのものでそれはあるかも知れん。しかし、淺層づたひの改正、「實用新案」式改正がつゞきうる限度は、國際日本の位置を考へるならば、きはめて近い。

外交上の抱負を政綱のうちに明記することは、今日の日本の實情としては、あぶない藝であるにはきまつてゐる。われらは、かならずしもそれの聲明をば希望しない。しかし、意志だけは明確であつてほしい。たとへば對支、對露、對米、對英策をどう意識してゐるか、これは、新內閣にとつて最大責任事の一でなくてはならん。

選擧法改正も、一般外政問題のためには、選擧區を全國一區にする、すなはち絕大區にする位の考案と意志は、新內閣にあつてほしいとは無論思ふが、いふまでもなく絕望だ。外務出身の加藤氏としては、實は、それ位の考へはあつても決して驚くべき事柄ではないのだが、構想力すなはち創造的想像力、雄略、深い理想主義、これらは氏の人格財ではないやうだ。

時艱にして英雄を思ふとかいふことばがあるやうだが、そしてこれは現代に於いても決して時代錯誤の思想でも、表現でもないが、さらにそして、現代の日本は艱時中の艱時にあるのだと正當にいへるが、先づ新首相について考察するに、かれも原則的識力の人であるよりも規則的知識の人ではないか。

新首相に希望するが、出來るならば、氏が曾つて發表したやうな對露意見をば持ちなほして貰ひたい。大本を忘れて枝葉を爭ふ識力も、動機も、なんぞ現代日本が眞に必要とする政治家たるにふさはんやだ。對支二十一個條事件も、要するにケチな、

こせついたものではなかつたか。あれは時の外相自身の意志ではなかつたかも知れない。しかし、それならばそれで、なぜ爭ふべき限りを爭うて辭職し、日本の政治組織の根本的改善に集中的努力を獻げなかつたか。

新内閣に對する國民の一員としてのわたくしの僞はらざる感想は、それの飽き足らない側面だけについていふならば、やはり、深徹、遠達、大爲を缺くにある。深徹を第一に缺くがゆゑに、遠達をも、大爲をも、それは必然缺く。

ミツビシ・エムパイヤ

室伏高信

加藤高明の大願成就して宰相の位ひについた。めでたしめでたし。下町の町人諸君は國旗を揭げて宜しくこの日を祝すべきである。星移り物變り、下に居ろ！下に居ろ！といはれてきた天下の町人諸君が、今や白馬に跨つて長鞭に大道を行く。下に居ろ！下に居ろ！といふ聲がまたしても聞えて來た。平民の上に平民が居る。われ／＼下層平民はまたしても土下座をきらなくてはならないのだ。下層平民は、まかり間違つて大家の婿養子とならざる限り、永久にこの運命から逃れることはできないのだ。婿なる哉、婿なる哉。昔は粉糠三合婿には行かぬといふたが、痩我慢は武士のことである。町人の時代は婿時代である。婿なる哉、町人なる哉。

一つの特權内閣ができた。清浦特權内閣が去つて加藤特權内閣ができた。

人々は清浦内閣を特權内閣だといふた。その内閣はしかし影が薄かつた。内閣の影が薄く、從つて特權の影が薄かつた。は滅亡したる華族閥の殘務整理者であるにしか過ぎなかつたのだ。

今日は町人の時代である。世界都市時代は下町時代である。下町階級は今日は時代の權力である。下町の金權を代表した加藤高明が内閣を組織した。金權と政權の一致である。金權政治である。底力ある特權内閣である。最も露骨な特權内閣である。

然り最も露骨である。首相は三菱の女婿である。外相は三菱の女婿である。鐵相は三菱の番頭であり兼ねて憲政會の金穴である。三菱內閣である。三菱王國の秘藏息子が日本帝國の秘藏息子である。三菱王國の政治的代辯人が立つて日本帝國の政治的代辯人となつた。日本は日本ではない。ミツビシ・エムパイヤである。三菱萬歲である。

それはしかし三井が去つて三菱が代つたといふの意味ではない。三菱の立つことは三井も起つことである。共同の敵は外にある。農民とプロレタリヤがそれなのだ。兄弟かきにせめがず。共同の敵を前にして呉越舟を同じくす。それが聯立なのだ。聯立內閣はかくしてできた。階級聯立である。階級征服のためなる階級聯立である。征服階級の勢揃ひである。上は加藤高明から下は犬養毅に至るまで征服階級が勢揃ひをしたのだ。

人々は高橋是清を人格高潔の政治家だといふ。人格高潔なるものが富み、農民が田園に飢ゆ。人格高潔なる哉。

人々はまた、犬養毅を國士だといふ。生涯を政治的陰謀に費しつゝ出でゝは護憲の神となり、入りてはライト式建築のうちに妻妾とともにある。國士なる哉。米國は排斥せよ。帝國ホテルで劍舞を舞へ。今日は國士のあまりにも夥しい哉。

人格高潔か、國士か。高橋是清は政治家としては高潔か阿呆か。加藤內閣における高橋是清の犬のごとき屈從者振りを見よ。百餘名の代議士と多年の歷史とを有する大政黨を代表しながら一切を加藤高明のいふに任せて農商務司法の二つの椅子に甘んず。この膝一度屈してまた伸びず。最初からの屈服は最後までの屈服である。高橋是清は高潔か阿呆か。高橋是清が人格高潔にしてカトウ、ミツビシが榮えるのだ。凡ての他人は人格高潔であれ。人々よ犬のごとく屈從せよ。これ英雄の秘訣なのだ。

加藤高明は英雄なのだ。英雄とは時代の兒である。町人時代には町人英雄がある。女婿英雄がありうるのだ。岩崎彌太郎がなすべくしてなさざりしことを加藤高明が仕とげたのだ。權力よ、政治的並に經濟的權力よ、擧げてわが掌中に來れ。高橋是清よ、足下は人格高潔の士である！

內務大藏外務以下重要な椅子はみな加藤高明の掌中にある。名は聯立である。加藤內閣はしかし加藤內閣である。加藤高明の獨裁政治なのだ。護憲運動は加藤高明を日本の獨裁官に仕上げた。狡兎死して良狗煮らる。護憲の神尾崎行雄は輕井澤に歸つて炭を燒け。犬養毅は萬年遞信大臣に任んず。葉書を改惡して三錢切手から護謨糊を剝ぎとるべし。高橋是清よ、三度いふ、足下は飽くまで人格高潔であれ。

高橋是清が阿呆であると高潔であるとはわれこれを知らず。痩せても枯れても彼は大政黨の首領なのだ。彼の背後には幾多の大臣病患者が控えてゐる。加藤内閣が成立した時に、言葉をもつと適切にいへば閣員の顔觸れが決定した瞬間に。これ等の大臣病患者の心理は電光の如くに加藤内閣に背いて動く。加藤内閣の成立した瞬間は、政友會が加藤内閣に背くの瞬間なのだ。二人の閣員を殘して政友會の大半が駈足で反逆精神を動かしてゐるのだ。

今日は護憲運動の獲物分配の時である。獲物は分配された。分配の按分比例は定まつた。護憲運動は終りを告げた。政友會分裂の悲哀もしみ〴〵と身に沁み渡る。來るべきものは護憲三派の間に於ける内部的勢力闘爭である。。この時である。犬養護憲の神が狐の智惠を縦横に働らかせるのは。

聯合内閣における犬養の任務はたゞ三銭切手から護謨糊を剥ぎとることではないのだ。高橋是清を煽動することが彼の與へられた役割である。護憲の神犬養毅がこゝに聯立破壊の神である。破壊、煽動、陰謀、それがシヤアラタント犬養木堂先生の獨壇場であるのだ。加藤内閣はかくして聯立によつて立ち聯立によつて仆れるのだ。

一つの護憲運動がこゝに幕を閉ぢる。護憲運動そのものはしかし幕を閉ぢるのではない。一つの護憲運動は仆るゝも他の護憲運動はつゞくのである。

憲政擁護とは何ぞ、金權擁護なのだ。自由の擁護ではない。不自由の確立である。そは都會のブルジョアとともに起り、都會のブルジョアとともに終るのだ。行商人の示威運動、下町權力の確立なのだ。

自由人は宣言する。おゝクリトンをしてこの穢れたる憲政擁護者等を逃れ去らしめよ。おゝ猶太内閣、ゲツトウキヤビネツト、汝の内閣こそ正味掛値なしの特權階級の内閣なのだ。

階級闘爭がこれからその本舞臺へ進むであらう。プロレタリヤと農民とは、ブルジョア階級のこの傍若無人なる挑戰の前に彼等自身を意識するの機をえたのだ。支配階級はもの〳〵しい勢揃ひのもとにその政治的幷に經濟的壓迫の魔の手を伸ばすべく立つてゐる。プロレタリヤと農民、然り國民の大多數に對する一大壓迫の政治はこゝにその幕を切つて下ろした。これが憲政擁護である。憲政擁護によつて國民の大多數は、政治的に且つ經濟的に、一大鐵槌を喰はんとしてゐるのだ。

國民よこの鐵槌を喰はんか。憲政擁護は國民の大多數に對するナイトシエドである。人もし穀物を食べなば生き、ナイトシエドを食べなば死なん。國民死なんか。三菱死なんか。このナイトシエドを三菱の手に返せ。

正義に基く政治

美濃部達吉

清浦内閣がやめて加藤内閣が之に代つたのは、長い間の梅雨がやう〳〵晴れて、かすかながらも日光を望むを得たのと、同じやうな快い感じがする。數年前に寺内内閣が倒れて、原内閣が代つたときと同じやうな感じだ。殊に今度の内閣に於て高橋政友會總裁及び、犬養氏が相携へて己れと空しうして無條件に入閣したことは、國民に大なる快感を與へた。唯それだけでも、前の内閣の閣僚が殿樣内閣といふ世評に對して、大名華族は唯前田子爵一人であると曰つたり、貴族院内閣と曰へば加藤友内閣もさうであつたと云つたり、研究會として運動したのでなく唯個人として運動したのであると曰つたりするやうな、牽强附附會の强辯と以て無理に自己の非を掩はんとした態度と比較して雲泥の相違と言はねばならぬ。閣員の顔觸れから言つても前内閣とは比較ならぬ程に國民の信賴を維ぐに足りる。願はくは少くとも今後三四年の間は堅く三派の協調を維持して、大に政界の刷新を斷行して貰ひたい。若し此の内閣にして失敗するやうなことが有れば、今後我が國の政治は當分の間は暗黑時代に陷いるの外は無い。

新内閣に希望する事柄はいろ〳〵あるが、私に爰に唯一つを擧げたい。それは『正義を重んぢ罪惡を排せよ』といふことである。

是れは言ふに易くして行ふに難いことは、吾々も承認する所であるが、今日迄の日本の政治上の經驗は、國民をして殆ど「政治は罪惡なり」との感覺を抱かしむるに至つた。裏面に隱くれた罪惡は暫く論じないとして、單に表面に現はれたことのみをて見ても、政治家の間には道德感情や正義思想は全く麻痺してしまつたかと疑はれる程である。公器を私し、私曲を營み公金を濫費し、權力を濫用し、責任を回避し、虛僞の言を弄すが如き、此等の總ての罪惡が、政黨政治家に依つても又は官僚政治家に依つても、殆んど尋常茶飯事として平然實行せられて來て居る。今度の總選擧に於ても清浦内閣は選擧の公正なる執行を

其の最大の使命として標榜したにも拘らず、選擧干渉は可なり露骨に行れた。それは清浦内閣が地方官殊に地方警察官に命じて各地に於ける選擧の結果を豫言し、屢々之を報告せしめたに依つても明瞭である。無記名投票の精神から言つても、選擧は選擧人の自由意思に依つて行はれねばならぬことから言つても、選擧前に選擧の結果を豫測するが如きは全然不可能であるべき筈で、況んや官權を利用して之を豫測せしむる如きは甚しき曲事であり、明白なる選擧干渉である。しかも清浦内閣は前の多くの内閣と同じく平然之を實行して憚らなかつたのである。公正なる選擧の執行などと言つても誰れが之と眞とするものが有らうぞ。併ながらそれよりも一層憤慨すべきことは清浦内閣の下に於て殊に司法權の獨立が疑はるるに至つたことである。是れ迄も、司法權の獨立は頗る危ぶばれて居り、政府の權力に依つて司法權を左右するの弊が暫次著しきを加へて居つたが、清浦内閣に至つて此の弊が益々歴然たるに至つた。

加藤新内閣は綱紀肅正を以て其の政綱の一として標榜して居るのは詢に人意を强うするものが有る。新内閣に對する吾々の最も切なる希望は、事大小となく政治界に於ける總ての罪惡を一掃して、「政治は正義なり」との觀念を國民の間に透徹せしめんことに在る。

護憲内閣

山川均

『憲政布かれて三十年、幾多の政變中、今回ほど政權移動が公正圓滑に行はれた例がない。ある新聞には斯う書いてあつた。なる程その通りである。今迄で政變のあるごとに、政權は一體どこに落着くのか、一般の國民にはてんで見當がつかなかつた。新聞はよい加減の臆測や宣傳の記事で持ち切つた。すつたもんだの揚句のはてが、意外のところから鳶が舞ひ下りて油揚をさらえて往つて、國民をあつと云はせる。この間の五日乃至は一週間の新聞は隨分面白かつた。政權の推移が一般國民の意

志とも判斷とも、全然沒交渉である間は、國民は毎度の政變を、たゞ『面白く』見物する外なかつたのである。

今度の政變は、この點に於てたしかに物色があつた。今度の政變には、一般の國民は、ほゞ政權の歸着するところを豫想することが出來た。そして豫想通りになつた。政變は極めて單調であつた。いつものすつた揉んだもなく、いつもの茶番や狂言や餘興もなく、それだけに『見物人』に取つては面白味の少ない政變であつた。けれどもそれだけに今度の政變は、一般國民に、單なる『見物人』でないといふ多少の印象を與へたに相違ない。

政權の推移を單純明白にした——言葉を換へて云へば、選擧有權者の投票と政權の歸着點との間に、直接明白な關係のあることが分つた——といふ點だけでも、護憲内閣』の成立には充分の意義がある。

□

けれどもそれ故に、日本の政治の上には、最早や斯ような政權推移の方法が確立せられたかと云へば、必ずしもそうでない。之はこの次の政變を豫想して見れば直ぐ分る。この次の政變が順當に行はれるものとすれば、それは今日の在野黨たる本黨が多數黨となつた時に起るべきものである。ところがこの次の總選擧で(普通選擧制による第一回の總選擧で)本黨が多數黨になることは覺束ない。その次の總選擧までで、聯立内閣が持ちこたへることは尚更ら覺束ない。して見ればこの次の政變は、多かれ少かれ變則的な理由によつて誘發され、從つて其の結果は、多かれ少かれ變則的な政權の推移に終るべき充分の可能性があると云つてよい。

これは何故であらうか。日本に封建的特權と封建的心理の遺物が尚ほ勢力を張つてゐること、これが第一の理由である。政黨が一定の政綱によつて分かれて居らぬこと、これが第二の理由である。護憲内閣が單獨内閣でなくて、聯立内閣たることは固より弱味であるが、その聯立は、謂ゆる『護憲』を中心とした聯立であつて、政綱と政策とを中心とした聯立でないことは一層の弱味である。加藤首相が三大政綱を提示して兩黨首の入閣を求めたのは、日本の政治に一新生面を開いたものだと云ふ説がある。しかし加藤首相の提示した三大政綱の如きは、(新聞の傳へる範圍では)どの政黨が看板に上げても差障りのないものであつて、清浦内閣と政友本黨すらもこれを政綱とすることを躊躇せぬ。斯ような概念的な政綱を中心として、政治勢力の離合が行はれる間は、變則的な政權の移動が起るべき充分の餘地がある。

政友會の謂ゆる積極政策と憲政會の消極政策とは、固より相容れぬ。高橋總裁が『護憲』の大義のために、目を瞑つて聯立内閣に這入つたのは、日本に於ける政治史上の美談として讃めそやされてゐる。なるほど其の通りである。けれども高橋總裁の行動が『美談』となるのは、その反面に於ては、日本の政治の幼稚を物語つてゐる。積極政策を唱へて來た政友會が、一切の情實を水に流して消極政策の内閣に參加することの出來るのは、政黨が拔き差しのならぬ一定の政策の上に立つて居らぬ證據であつて、既成政黨に取つては、政綱や政策もまた『情實』の一つである。この點では政友會も憲政會も、政友本黨も同じことである。政友本黨が在朝黨として立つ必要のためには、今後或は、憲政會や革新クラブ以上に進步的となるかも知らぬ。少くとも、それは決して有り得ぬことではない。

政黨が拔き差しのならぬ一定の政綱政策を代表して居らぬといふことは、一定の利害を代表して居らぬと云ふことであり、ブルジョアジーのうちの一定の階級を代表して居らぬと云ふことである。即ち政黨が多かれ少かれ議員團に過ぎないものであつて、ブルジョアジーの大衆的組織であることを證據立てゝゐる。

『護憲』の大義のために――言葉を換へて云へば、封建的特權を一掃してブルジョアジーの政權を確立するために――既成政黨が一切に情實と行懸りに目を瞑つて手を握り合ふことが、護憲』の第一步であつた。ブルジョアジーの色々の要素の階級的利害に基づいて、既成政黨が新しい離合をすること、これが『護憲』の第二步である。

□

次の政變が何を動機として、どんな形で起るかは、容易に豫測ができぬ。けれども次の政變が、既成政黨の新しい離合に伴ふて起るか、それとも既成政黨の新しい離合を伴ふて起るかは、恐らく間違でない。

加藤內閣と其將來

三宅雪嶺

加藤內閣の成立は、憲政會總裁加藤子が勝ち、政友會總裁高橋子、革新俱樂部代表者犬養氏が敗れたものと云へぬでない。尤も二人は敗れたのではなく、憲政擁護の爲に忍耐し謙讓の德を表したものにせよ、單に勝敗より云へば、加藤が勝つたとせねばなるまい。何にしても首相として內相及び藏相の位置を憲政會に取り、他の二黨首をして世の所謂伴食大臣たらしめてをる。

二黨首は之を意に介せず、憲政擁護の爲に何事も忍ばうといひ、又夫程の襟度がある。幾度も轉んだり起きたりした經驗があり、忍ぶべき所に忍ぶに苦しまぬであらう。

たゞ二三年前斯ることを想像し得たか如何か。加藤が遂に勝つたといふのが普通である。然し實は、加藤が勝つたよりも高橋が負けたのである。

加藤は特に何事をなしたといふでなく、舊政友會の分裂したものよりも憲政會が多數であるといふに過ぎぬ。百名が百五十名になつたので成功であるとし、それさへ舊政友會の二派が相爭ひ、憲政會が漁夫の利を得たものとせねばならぬ。自分は坐つてをつて利を得たのであり、云はゞ棚の牡丹餅が地震で口に轉げおちたのである。

併しそれで加藤を僥倖者のみとすることは出來ぬ、何にでも幾分か運不運が手傳ひ、運の向き來つたとき其處に最善を盡すのを有能とする。

勝利は最後の十五分にあるといふのも、我慢して待つて居る間に、敵側に異變が起るをも意味してをる。憲政會の小數黨で待つて居る間に、絕對多數黨が自ら分裂をした如く、待つてをるのが戰術の宜しきを得たと云へぬでない。常人ならば少數黨で永く居れず、どうにかなつた所を、此所が辛抱のし時として我慢し、遂によく成功したのである。加藤もたゞの人間でなく、少くも其の忍耐し來つた所を賞せねばならぬ。

然し政友會の力を借る計りでなく、革新派の力をさへ借らね

ばならぬ。一旦高橋氏が駄々をこねれば、衆議院で多數を得ることが出來なくなる。犬養氏が駄々をこねても、卅人で何の影響ないやうなもの〻、同病相憐れみ政友會と與にするの恐があり、猥りに輕んじてはならぬ。

加藤子が此兩黨首を取纏めたのは、機運もあるけれど、多年の經驗で人相手上手になつたのを賞する。

內閣組織の手際は確に鮮であつて、疑問は將來にかゝるが、現在のまゝに聯立內閣とし、他のことを考へずにおくか、聯立は止むを得ぬのであつて、後日更に單獨にすべきであり、憲政は憲政で一黨を以て多數を制しやうとし、政友は政友でもつて多數を制しやうとするか。一黨が多數を制するのは、他黨を排斥するに異ならぬ。即ち聯立內閣を存續するのは、一黨が多數を制するまでのことにて、多數を制すると同時に改造又は破裂の避くべからざる所とする。

政友會が政友本黨と提携しても內閣を危くするに足る。今は政友二黨の幹部が互に相容れず、合同は勿論、聯合も出來難いが、何時迄も分離して經過するか、又はナニか模樣變へして合同するか、試驗物となつてをる。それよりもいつそのこと、護憲三派が解體し大政黨を形づくるを得ないか。これとて全く出來ぬ話でなく、今朝企て今夕結果を見るべきものでないといふに止まる。

革新派は政黨でなく、政黨改造を以て任ずるものであつて、護憲三派を一大政黨とせば、其處に革新派の成功があり、犬養氏の成功がある。

加藤內閣には左樣いふ問題がブラ下つてをる。護憲三派で內閣を組織したからとて、內閣は護憲三派の聯合したものでなく三派の聯合は手段であり、三派が如何あらうと國務をあげねばならぬ。如何に國務をあげるか、憲政會の三大政綱を標榜してをり、兎も角も其實行に着手せねばならぬ。差當つて政友會が稍躊躇しさうであつても、旣に本黨と毒素の塗り合ひがあり、衝突する所を本黨側のことゝしてよからう。普選問題で明に反對演說したものもあるが、眼をつぶつて我慢し、彼も一時是も一時としてよからう。當年の責任者原氏が最早居らず、憲政會で思ひ切つて斷行して貰ひたいとするのも面白からう。

大隈內閣が案外不手際であつて、それより推せば加藤內閣に多くの希望を嘱し得ないが、時代も變はり今は大浦氏が中心となつたのと違ひ、何か見るべきものがあらう。

何處迄綱紀を肅正するか、何處迄行政財政を整理するか、前に高橋氏と濱口氏と幾回も論じ合つたが、今は高橋が濱口に一任し、たまく口を開けば之を援助する意に於てするまで虛心

坦懷にいけると思ふが如何か。それでは高橋が餘りに屈服することになり、濱口も手加減したがよからうとなるが、それでは財政整理のしやうがないではないか。高橋氏も既に我慢の上に我慢したのであり、其處等で我慢の出來ぬこともなからう。行政整理と財政整理と、若槻濱口二氏にやれるだけやらす方がよからう。

今は實に、戯談を云ふべき日でなく、實業同志會の如きも、國家の破産を呼び、三億圓天引を唱へてをり、相應の理由がある。

隨分不便もあり、世間の景氣にも障らうが、今は人のなすを憚るところを敢てするの勇氣を要する。

內を整へねば外に向ふことが出來ず、金と云へば米國に依賴し、それで如何にして對米策を建て得るか、米國に侮られ、踏まれたり蹴られたりして、對支政策の建てやうがない。今は加藤首相獨特の堅實味を發揮するの必要があり、此所で發揮せねば堅實味も何もない。剛堂と稱するも名前倒れである。

前山本內閣が勇往邁進しやうとした程であり、今の加藤內閣で左顧右眄してをるべきでない。

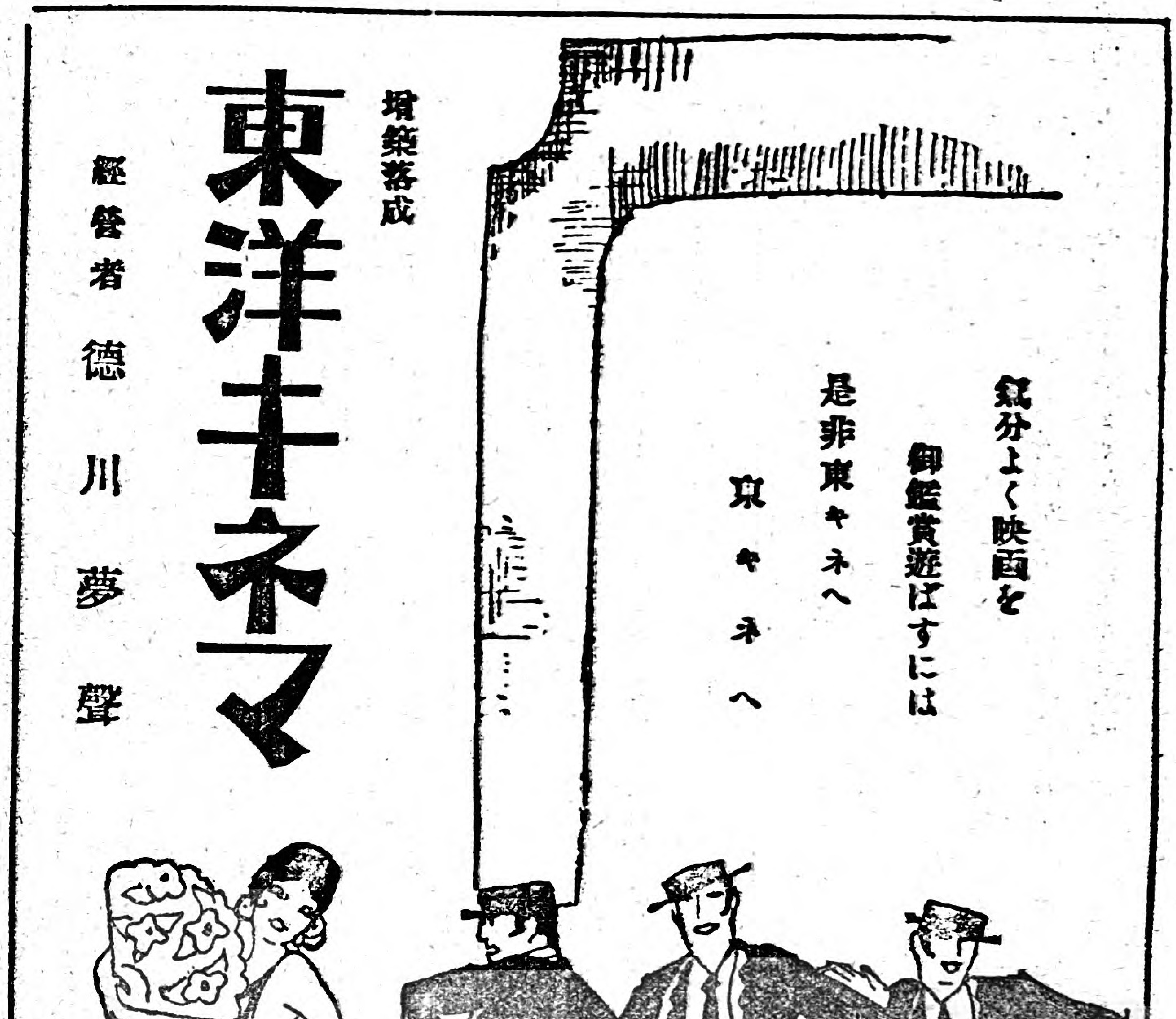
貴族院も分らぬやうで分つてをり、內閣が爲すべきを爲してをれば援助するを惜まぬ。幾年も懸案になつてをつた普選問題をいよ／＼着手するに定まり、貴族院で餘り異議を挾みさうになく、異議を挾まれんか內閣の幸ひ此上もなく、或は三派を一大政黨にするの機運になるかも知れぬ。一大政黨になつたとて、舊政友會の如く分裂するも計られぬけれど、幾度か斯る經驗を積む間に大政黨らしい大政黨を造るに至る。

それでよいことをせねば、反對が何處から起るかも知れぬよいことをせぬ政府及び政黨は攪亂するとて致方なく、攪亂してよりよいことをなすの政府及び政黨の起るに如くはない。

加藤內閣が位置を占めたのみで、從來の內閣以上のことをなし得ねば政友本黨が勢を得るのみでなく、貴族院が勢ひを得、再び貴族院內閣を造るに至らう、特權內閣が起らぬ樣にするには、從來の特權內閣の敢て着手し得なかつたよいことを爲さねばならぬ。

三大政綱の實行のみにては分らぬけれども、それで一應政黨內閣の有益なるを示すに足る。內地に人氣を得ても國外に何の爲し得る所ないとせらる。

東に對米、西に對支問題を控へてをり、其處に目鼻をつければ政黨內閣萬々歲といふに至る。人力に限りあり、百里を行くものは九十里に半ばすといふが、精々働らいて貰はねばならぬ。



気分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
東キネへ
増築落成
東洋キネマ
経営者
徳川夢聲

戀愛價値論

石原純

この一篇において、私は最も嚴肅なるこころをもつて戀愛を價値づけやうと思ふ。

一

戀愛は人間にとつてまことにふしぎな一つの事實です。人間がそのふだんの生活において食養を攝取し睡眠をなすことは誰しも凡常の事實としてあやしむものはないのです。勿論あまりに過食をなし、または惰眠を貪ることは咎められないではありませんが、しかもその罪過は極めてかろいものに屬します。之に反し戀愛の根抵に横はつてゐると思はれる性慾はその恣まゝなる發露に際して、或る峻嚴なる道德的制抑をくはへられなければならないのです。人間の種々の本能的欲求のなかに、なにゆゑにひとり性慾のみが、屢々獸慾と呼ばれる程に、卑しめられなければならないのでせうか。

私たちは生れて母胎を離れると共に、既に食と眠とを取らなくては、その生存を續けることが出來なかつたのでした。併しながら私たちの性慾衝動は、肉體が或る程度までの成熟を完了し、從つて私たちに十分なる理性が發達し得たときに、始めてあらはれるものです。私たちは生れて既に十數年を經過した間の經驗からは全く未知な一つの衝動に接して、

いかに神秘的な驚異を感ずることでせうか。その衝動を遂行すべき行爲としての肉交が、どんな感覺的愉悅を呈するかは、或る憧がれをもつて幻想しやうとする一つのユートピアであるのです。しかも之が何故に卑しめられ斥けられなければならないかは、私たちに取つてまことに不可解なことでなければなりません。尙ほさらに、この性慾衝動が單なる肉體的愉悅の追求に終らないで、私たちの理性によつて高められた戀愛行爲としてあらはれるとき、それをしも尙ほ卑しむべきことゝして論議せられる場合のあるに至りては、私たちはこゝに深い疑問を起さずにはゐられないのです。

この深い疑問の關門を通過することは、戀愛の實行にとつて絕對的に必要であることを私は疑はないものであります。私たちの理性の或る成熟に伴つて始めて性慾衝動の將來するといふ事實は、人間創造に際して神の極めて意味ぶかく用意せるものに外ならないと私は思ひます。かやうにして始めて人生に戀愛價値が存するのでなければなりません。眞に戀愛することは、卽ち戀愛價値を究竟的に體驗することは、人生の一つの理想であつて、從つて安易に求めらるべきものではありますまい。世の謂はゆる戀愛行爲は眞の意味において之にかなふものゝ幾ばくもないこと、特に指摘するまでもないのです。

性慾衝動を口にすることがいつも憚られなければならないと等しく、戀愛についての自他の體驗を言づからあらはにすることを避けるのをもつて、人格の一つの床ましさと信ずる私は、このやうな論議をこゝにしるすことに對しても亦躊躇されないでもありませんが、併し私は人間として一般に考察しなければならない一つの事實として、最も嚴肅なるこゝろをもつて戀愛を論ずることを、必ずしも私たちのために無用なるものではないと信じます。

二

戀愛に關する考察は近時屢々私たちのまへに展げられました。私は讀者の便宜のために、それらのうちの著しいものを批判しながら自己の意見を披瀝された土田杏村氏の「最近諸家の戀愛觀を論ず」（婦人公論三月及び四月號）をこゝに擧げませう。それによつて讀者は近時の論議の大體に通ずることが出來るでもあらうと思ふからです。

土田氏はその論文の標題の傍に「エロティイクの爲めの一スケッチ」と註し、戀愛を一つの哲學的考察の對象として取り扱ふことの可能性を認め、氏自身の批判的論評をもこの方向への一貢献として自任せられてゐるやうにも見えます。實際に私もこの問題を人生に對する一つの重要なるものと思惟し、その學として體系的知識をもつことが私たちに取つて現實の戀愛行爲に對する正當な批判のためにも必要であることを信ずるものです。なぜなれば、現時の世のおほくの人たちは戀愛に對して極めて淺薄卑俗な思慮をもつに過ぎないのであつて、土田氏も云はれたやうな「今わたくしがわたくし達の性的生活を反省してエロテイイク（戀愛哲學）と呼ぶやうな一つの新らしい學的考察を爲すとすれば、それに對し不審の眼を瞠るものは、今日全然絶無であると言へるであらうか」といふ疑問は最も明らかに否定的な返答を豫期されなければならないと思はれるからです。

エロティイクを直ちに一つの學的體系として立てることは、恐らくさう容易なものではありますまい。之がためには深い哲學的思慮を必要としたでもありませうが、私たちに於てそれは容易く求めて得らるべきものではありません。況して哲學史の一部をも學んだことのない非哲學的學徒であるものに取つては、それは余りに自らをはからざる仕事であることは確かです。私はさやうな學的知識に資するつもりでのみこの文を草しやうとは思ひません。たゞ一人の人間として出來得る限りに於て、その生命の作用を反省し、よつて戀愛なる事實のなかに理想價値を求め見出さうとするばかりです。しかもそれが何等かの意味で哲學的思索に與かり、若くは實践的省慮に資するならば、私の望外の幸とすると

ころでなければならないのです。

只私はエロティイクが一つの學として成り立つとしても、その根據を形而上學におかうとすることは亦誤つた道であると思ふことをこゝに附言しておきます。土田氏が上に引用せる論文のなかに、私の以前に發表した種々の人生考察に對して形而上學的要素を指摘せられたことは、私に取つては寧ろ見當ちがひのものであり、そしてその事がらは、恐らく私の甚だ周到ならざる說明から結果し、併せて土田氏が私の眞意をそれによつて捉へることの出來得られなかつたに依るのであると思ひます。私は土田氏に對して、私が哲學の慣習的用語に通ずることのより少なく、從つてその說明の十分でなかつたことについて許容を乞ひ、そしてもう一度こゝに述べる處によつて私の思惟する本質的內容を酌まれんことを希はずにゐられません。

三

戀愛が性慾衝動と密接に關連するものであることは誰しも認める處であります。私は戀愛を論ずる第一歩として、それ故に私たち人間の本能的衝動なるものについて考察しなければなりません。

私は先づ衝動が何ゆゑに起るかを尋ねてみませう。衝動は恐らく何等かの本能的慾求に應じておのづから起るものであつて、それ故にその衝動の起るところを反省するならば、そこに或る本能のはたらきを見出すのであります。かやうな本能的慾求はもとより私たちの思慮から結果するものではありませんが、私たちに取つて最も自然的なる慾求である限りに於て、この本能的衝動の遂行せられた結果は、肉體的な若くは精神的な或る滿足愉悦を伴ふものであります。もとより或る場合には衝動が或る程度を超えることによつて、却つて本能的に慾求せるところのもの以外の結果を伴ひ、

之がために肉體的又は精神的愉悦を直ちに消失することがないとは限りません。けれどもその本來に於ては一般に或る滿足を結果するものでありますから、之を既に經驗した場合には私たち人間は更にその愉悦を目的として、眞に本能的ではなく、却つて意識的に同樣な衝動を呼び起すことがあります。睡眠慾の如きは睡眠中における意識作用の休止のために睡眠せることの愉悦を積極的に感ずることがなく、僅かに睡眠後の覺醒瞬時に於ける爽快の感を經驗するのと、睡眠せざることの疲勞を感ずるのとに止まるものですから、殆ど本能的に之を繰返すに過ぎませんが、最も強度に積極的愉悦を經驗し得る食慾並びに性慾にありては、私たちが屢々自然的本能を超えて、却つて意識的に之を刺戟するやうになります。かやうな事情なもとにはそれらは既に純粹衝動ではなくなつて、半ば意識的行爲に變じなければなりません。人間の食慾や性慾をどこまでもその原始的な形における純粹衝動として論ずることは、それ故に最初の出發點に於て誤まつたものであると私は思ひます。

食慾が自己の肉體保存のために、また性慾が種族保存のために必要であることは勿論でありますが、之等が私たちに於て本能的衝動として起る限りに於ては、個體若くは種族保存なる目的はまだ存在しないこと勿論です。私たちは恐らく最初は單に食したいために食し、肉交したいために肉交するのであつて、その外に何の意圖をもつてゐないのでせう。けれども私たち人間は既に食養や性交の結果が何を齎らすかを理性的に知り、之等の衝動の人間に存在する所以を考察した上では、もはや單に原始的に無意識的に之を遂行しやうとすることは、特殊の場合を除いて存在しない筈です。若しさうであるならば、私たちが之等の衝動に對して反省を費した上では食慾は單に肉體保存の目的をもつて、また性慾は單に種族保存の目的をもつてのみ起ると速斷することは、亦人間を除りに原始的生物として見做すことに陷りはしないでせうか。私は今少しく私たち人間たるものゝ衝動を人間に即して思考しなければならないことを思ふもので

す。

ともかくも人間の衝動なるものは、他の生物に於けるやうに純粋な本能的衝動ではありません。そこには人間の極めて複雜な意志作用が伴ふことは否定することの出來ない事實です。この意志作用の正當なるあらはれを期待する處にのみ、衝動がまた人間の行爲としての價値を生ずることが出來るのであると私は思ひます。

それ故に私は生物的な純粋衝動からのみ、衝動それ自身の合理的、理想的發展を演繹しやうとする論者の說を肯定することに遽かに傾くわけにはゆきません。なぜなれば、之がためには人間のすべての意志作用がその根本に於て純粋衝動に由來すべきことが、實驗的に具體的に證明せられなければならなかつたからです。私は今日に於ける私たちの如何なる研究もまだこのやうな事實證明には甚だ遠いものであつて、之を斷定することが文化價値論の一つの論據とせられるには尙ほ余りに薄弱であることを、土田氏と共に强調しやうと思ふのです。

四

以上說く處によつて、私は私たちの性慾が一般的としては決して純粋衝動としてのみあらはれるものではなく、却つて人間の複雜な意志作用と相伴つてあらはれるものであることを明らかにしました。性慾と關聯する戀愛を論ずるためには、私は性慾の實際的發動に對する之れだけの理解が特に豫め必要であると思ふのです。單に進化論的觀察に基づいて性慾を常に生物的本能と見做すことは不當であると思ひます。

私が之によつて云はうとする處のものは、即ち人間に於て常住に具現せられる、また具現せられなければならないところの、衝動と人格との絕えざる交涉であります。私はこの點に於て全く土田氏の所說と一致するものです。

「人間が生物としてみづからの生活を繼續することは、それだけでは何等最高の生活意味になつてはゐない。隨つて衝動自身も亦生活を意味づけ得るものではない。却つて反對にそれらのものはすべて自體に何等の生活意味を持たず、此れに生活意味を與へるものは、人格の品位である。」

まことに人格的意識を伴はない衝動は、生物的本能に所屬するものであつて、人間的なものではありますまい。人格と相交渉するところに衝動も亦人間生活の一事實としての意味が依存するのです。

たとへば、食慾に關しても營養あるもの、美味なるもの、有害ならざるものを意識的に選擇調理し、更に進んでは趣味高きもの、美しく飾られたるものなどを好んで求めるに至るものは、單に肉體の愉悦又は健康のためばかりでなく、種々の精神的滿足をも、之によつて遂行しやうとするからです。たゞ食慾の如きは主として自分一個に對する効果を思慮すればよいのであつて、特殊の場合の外は他人に影響することのないものでありますから、その思慮のなかには、特に人格價値に關する重要な問題を含まないのに反し、性慾に於ては、之が遂行に際して異性の肉體を必要とすることを常態とするものですから、人格對立による極めて重大なる思慮を費さなくてはならないのです。自他の人格に對する少しの思慮もなしに性慾を行ふことは、人間にとりて余りに不相應なことであるのはこの故に外ならないのでありませう。

種々の本能的衝動はそれ自身に何の目的もないものでありますから、時にそれらの個々のものが結果に於て矛盾衝突することもあり得るのです。この意味に於て純粹衝動は盲目的であり、不合理的であります。この事實からして屢々人間に於ける衝動は合理化せられなければならないことが說かれます。けれども衝動の合理化は、衝動自身から生れるものでなくして、衝動に對する人格的反應に待たなければならないことは云ふまでもありません。私はそれ故に斯う言ひ

ませう。衝動の合理化とは、衝動を人格によつて反省し、依つて之を人格價値の成立にかなふやうにのみ發舒し若くは制抑することであると。人格價値の完成は無限に究竟的にのみ求めらるべきものです。土田氏の謂はゆる、「少しも現狀に滿足せず、絕えず動的に無限に生活のイデエを追求する」ところのそれは即ちこの人格價値完成の理想でなければなりません。

五

私は衝動としての性慾を論じた後に、こゝにそれを戀愛との關係に考及しなければならないのです。この關係はまことに戀愛論の根抵となるべき最も重要な且つ最も困難な論題であると私は思ふのですけれども、しかも多くの論者に於て之が明晰な解答を經過せずに、極めて曖昧模糊のうちに終つてゐるのを見ます。私は之に對してより精緻なる考察を要求せずにゐられないのです。

私は先づ之がためにそれらの人達によつて用ひられた說明の言葉の意味を追求しなくてはなりません。厨川白村氏は「性慾を淨化して眞に人間らしき性的結合をなすものは、性慾の人格化であらねばならぬ。そこに貴き戀愛關係が成る」

と云はれてゐますが、性慾を淨化するとは何の意味であるか、また性慾の人格化とはいかなることを意味するかを尋ねて見たいのです。

「靈肉二元の生活の不調和に惱む人間が性的本能（即ち性慾）と性的理想（即ち戀愛）との間に合一點を見出し、兩者の矛盾衝突なきを得しむる」

とは果してどんな事實に相當するのでせうか。

倉田百三氏は

「自分の今の考へでは戀愛は性慾から分化したものである。性慾の中に可能性の形に於て始より含蓄されてゐたものである。」故に戀愛は性慾と質を異にせるものでなく、より高き形に於ける性慾である」

と云ひ、土田氏はこの言葉に添へて

「性慾は生活の資料であり、戀愛はそれを純化するための價値であり、イデエである」

と云ひ、田中王堂氏は性慾と戀愛とを本質的に同一のものであるとなして、

「性慾とは孤立してはたらく戀愛であり、戀愛は組織されてはたらく性慾であると言へないことはない」

と述べてゐます。私は之等の言葉について、更に多くの立ち入つた解釋なしには、遂にその正當であるかどうかを判ずるに苦しむものであります。

戀愛が性慾を進化し、純化し、淨化したものから成ると云ふことは、私たちの最も屢々聞くところの言葉です。けれども私には進化、純化、淨化なる作用が性慾のどんな具體的變化であることを知るために尙ほ十分ではないことが思はれます。私が若し言葉の揚足取りをするやうな氣持ちを自分にゆるすとするならば、純化し淨化せらるべき性慾はどこにその不純さ、不淨さを具へてゐるかを先づ問はなければなりません。之等の點が曖昧に附されてゐる限り、戀愛論は最も明晰な學的立場を取ることが出來なかつたでもありませう。

生物が自然的に所有する純粹衝動には、私はその不純さや不淨さを歸する要素を求めることは出來ないと思ひます。それは衝動として既に純粹なものであつて、若しその進化を言ふことが出來るならば、それは衝動の強弱の程度に關す

るものだけであるでせう。私はそれ故に性慾が生物的本能的衝動であるために卑しめられる所以を見出すことは絶對に出來ないのです。性慾をこの故に獸慾であると呼ぶ人があつたならば、彼は同時に食慾をも一つの獸慾であるとしなければならなかつたでせう。本能的衝動慾は神が生物に許容せる自然的作用であつて、そこには善惡是非もなく、高下尊卑もなく、從つてまた純不純、淨不淨も差別されないのであると私は思ひます。

併しながら、それにも拘らず人間の性慾が卑しむべきものとして存在し得る可能性のある所以は、私たちが人格對立とりの人間がその人格をみづから無視し、併せて彼と對立する他の人格をも考慮しない行爲をなすときに、それは最も人格的なひを無視して之を行ふことが不當であるのを知りながら、しかも之を敢てしやうとする場合があるからです。人格的なひとりの人間がその人格をみづから無視し、併せて彼と對立する他の人格をも考慮しない行爲をなすときに、それは最も卑しむべきものとして排斥せられなければならないでありませう。强姦のやうな場合に之を獸慾として責めるのは、單にそれが生物的行爲であると云ふ理由によるのではなく、强ひて人格を無視し若くは之に反抗する故であります。それは生物が純粹に本能的衝動によるものとは、少くともその純粹な無邪氣さと否とによつて遙かに異つてゐます。私は娼婦に對し若くはその他の人間の間に行はれる肉交に於ても、多少の程度に於て同樣な事情が存することは免かれないと思ひます。

倉田氏は之を「他の人格に對する呪ひ」であるとなし、「肉交を不純にし、汚濁し、呪ふべきものとなすものは實はこの性慾以外の他の動機であるとして、第一征服慾、第二飜弄の意識、第三相手を手段とする意識、即ち相手を人格とせずして物として取扱ふ意識、第四肉交そのものをそれ自身の爲でなく他の目的の手段となす事、即ち賣淫又は夫婦間の奉仕の氣持をもつてするなど、第五豫め快樂を豫想して肉交をなす事をその動機の主なるものとして敎へられました。之等に闘しては私は尙ほ詳論する必要があるかも知れません。第一乃至第三は通常男性の側のみに關するものですが、

ともかくも相手の人格無視又は毀傷の事例として見ることが出來るでせう。第四は女性にも通ずるものですが、それは尙ほ一般に自己の人格侮蔑としてあらはされるでせう。第五に至りては、快樂を豫想することは全然無邪氣なるものとは云はれますまいが、併し男女相互の間に共に愉悅を感じ無何有の鄕に入ることが出來るとするならば、「男女二人にて佳肴を樂しみ喰ふが如きものであつて」、私はそこに少しも自他の人格を傷けるものを含んではゐないと思ふのです。倉田氏が之をしも「自己の尊嚴を傷つけてゐる」とせられるのは、恐らく性慾そのものを卑下する習俗的、因襲的觀念が既に氏の人格內容の一部を形作つてゐる故にのみ感ぜられる處のものでありませう。若し全然性慾に對するかやうな觀念を取り去つてしまつたならば、男女相互の肉體的接觸は、少くともその性質上に於ては、それが握手、抱擁又は接吻にあらはれると等しく、或る親密さを頒つものに過ぎないのであつて、只その愉悅の程度を異にし、又接觸機官そのものを異にし、從つて特殊の効果を結實するといふことだけをもつて、人格的尊嚴を傷つけるとすることはその理由をもち得ないと私は思ひます。固より或る宗敎的境涯にある人がその宗敎觀念の上から、肉交をその天的生活にふさはしからぬものとして之を避ける場合の如きは、別に論じなければなりますまい。一般の地上に於ける生活に於てはそれは寧ろ生物一般に神から惠まれた一つの快樂であり、兼ねてまた神から委ねられた生命創造の尊とい仕事を果す手段でもあるのです。何が故にその愉悅を享樂し、若くはその享樂を豫想することに人格損傷があるかを私は理解するわけにゆきません。

ともかくも、倉田氏も云はれるやうに、性慾はそれ自身に於ては不純不淨なるものではないのであつて、性慾衝動以外に他の意識を伴ふことによつて或る場合に卑しめらるべきものとなるのでなければなりません。若し然うであるならば、それ自身不純不淨ならざる性慾を純化し、淨化して戀愛が生ずるとは何の謂ひでありませうか。嚴密なる哲學的

な科學的の述言としては私たちはかやうな言葉を許容するわけにはゆきません。

汚水を淨化すると云ふ言葉は、不純物を含んだ全體を尙ほ水と名づくることが許される場合にのみ意味があるのです。性慾に伴ふ汚濁意識はどこまでも性慾以外の知識であつて性慾の一部ではありません。勿論、そのうちの或る意識は性慾衝動を增し强めるやうな作用をなすものもあるでせう。その場合にでもこの意識は性慾の外に立つてゐるのであつて、その內に所屬するものではないのです。それ故に私は性慾の純化とか淨化とか云ふ言葉は學的に意味をなさないものであると思ひます。またたとへ强ひて一步を讓つて、之が性慾に隨伴する汚濁意識を取り除くといふ意味であると見做したところで、しかもかやうに純化又は淨化された結果は、純粹な性慾衝動のみがそこに殘るのであつて、それは決して戀愛それ自身ではないこと明らかです。性慾が純化されて戀愛になるといふ云ひ表しは、私には全く無意味な自己僞瞞としか見えないのです。

性慾と戀愛との關係に對するその他の種々の云ひ表はし方は、私は一々それに就いて論ずることをこゝに省きますが、たとへ常識的に若くは藝術的にそれらが何ものかを意味し得るとは云へ、最も嚴密なる哲學的表現としては、遂に不十分であり又は不當であることを免かれません。私は別にこの關係に對して私の理解する限りを次のやうに云ひ表はしたいと思ひます。

六

私の思推する處では、戀愛は性慾そのものの進化でも純化でも淨化でもなく、從つて本質的には性慾と差別せらるべきものであります。性慾は一つの本能的衝動として起るべきものである慾情であるに反し、戀愛は決して慾情と呼ばる

べき種類の感情ではありません。即ち戀愛は性慾を基礎としてその上に立てられた或るものではなくて、それは只性慾を機縁として喚び起された特殊の愛であると私は思ひます。

愛は人格者間に於てあらはれる一つの相對行爲です。それはもとより相互の人格を尊重して之を理想的に完成せしめるやうにはたらきかけるものでなければなりません。しかして戀愛も亦かやうなものに外ならないのです。只戀愛の特質とする處はこの相對行爲たる愛が性慾を機縁として一人の男と一人の女との間に發生するのにあります。私はかつて戀愛を論じて斯う述べました。

「人間相愛が男女兩性の間にあらはれ、そしてそれが特殊の強度に於て對象者の全人格を必然的に包容する場合に之を戀愛と名づけたいと私は思ひます」

と。特殊の強度に於てと云ふことは、即ち戀愛が性慾を機縁として生れるからであつて、性慾衝動によつて結びつけられるところの相互の親近さは、通常遙かに他の機縁による一般の愛よりもまさつてゐることが認められるでありませう。

私はそれ故に戀愛が常に何等かの性慾衝動を機縁として發生すべきものであることを思ふものでありますが、それが必ずしも肉交に到達することを必要とは考へません。けれども肉交を行ふことによつて、相愛の男女はその相互の肉體の最奥を知悉すると共に特殊な愉悦を享樂し、依つて相互の親近さを最も強く體驗し且つ愛することが出來るのです。そこに戀愛に對する肉交の特殊的關係が存在するのであると私は思ひます。

私は既に肉交がそれ自身に於て卑しめらるべきものではないことを說きました。併し肉交はその生理的効果以外に文化價値をもつものではありません。性慾もまた一つの衝動としてそれ自身に價値を現するものでないこと勿論です。之

に反し戀愛は愛の特殊のあらはれとしてその獨自の價値をもつてゐます。それは相愛の男女が相互にその人格を完成するやうにはたらきかけることをもつて最終の理想とせられなければならないからです。

性慾に伴ふ汚濁意識のすべてが戀愛に於ては取り去られなくてはならないのは謂ふまでもないことです。それらはいづれも自他の人格を何等かの點に於て傷つけるものであつたからです。純粹なる戀愛が何ものをも對象者に欲求することなく、却つて自己のすべてを之に捧げることによつて對象者と人格的に融合し、且つ之を向上せしめやうとするのは人間生活に於ける何といふ美くしさではありますまいか。私たちが性慾を機縁としてのみ之を行ひ得るといふことは、また何といふ意味ぶかいことではありますまいか。私たちはこの點について更に思慮を深めなければなりません。

對象者の全人格を必然的に包容するといふことは、言葉を換へて云へば一つの人格的融合であるのです。單に對象者の人格を自らのなかに包容することは恐らくは一般の愛に於ても必要であつたのでせうけれども、併しそれは最も強度に結合し得る相愛の男女間に於て最も完全に行はれ得るものであり、また之を實現することが戀愛の一要素であることは、多言を要しないであらうと思ひます。

私は更にこゝに、戀愛によつて人間が相互に最も强度に人格的に結合し得る事實に注意を向けませう。その他種々の愛のうちで親子の愛はかなり强いものであることを私たちは經驗してゐます。或る場合には戀愛がやゝもすれば危機に陷り易いのに反し、親子の愛は殆ど一生を通じて渝らないとも云ふことが出來るでせう。之れ前者がたとへ性慾を機緣として成り立つとは云へ、抑も性慾なるものは凡その男性と凡その女性との誰れに對しても起り得る可能性をもつてゐるものであり、特に戀愛が成立すべく、特定の男女が結びつくためには、他の意識、即ち容貌及び個性選擇乃至人格的融合を遂行しやうとする意識がはたらくことを必要とするに反し、後者に於てはその結合が必然なる生物的關係によつ

て運命づけられてゐるからです。けれども之と同時に親子愛は生物的必然に由來するだけ、人格的相對行爲としての愛が原始的本能に近いものであり、親は子の人格を向上完成せしめやうと努めても尙ほ或る場合には時代的の隔たりをもつために、從つてまた異つた生活をなすがために妨げられ、子は親に對して受動的に限られることなどによつて、十分なる相對行爲となり得ないのに反し、戀愛にありては上に述べた選擇意識がはたらくことのために、尙ほまた結婚による共同生活が望まれ得るために、一層の强度に於ける愛としてあらはれ得る可能性を十分にもつのです。友情愛等の他の愛に比べても亦その通りであるのは云ふまでもないのでせう

戀愛の獨自的價値は實に之等の特質に存するのであつて、しかしてまた一方にはそれだけに眞の戀愛價値を具現することは極めて困難な仕事でもあるのです。世の戀愛し得たと思ふ人たちは最も周到に深くこの戀愛價値について考へる處がなくてはなりません。誰が眞に戀愛を價値づけ得る生活をなしたでありませうか。人生の最も眞摯なる心に於て之を省りみることが必要です。

七

私は戀愛を愛の特殊の狀態であるとしました。私は最初に引用した土田氏の論文に於て「戀愛は愛の一種だとは言へない。それは道德や藝術やが愛の一種ではないと同じい根據に立つてである」とせられるのを見て寧ろこの言葉を怪しむものです。恐らくはそれが氏の如き哲學の聰明さによる一つの詭辯であり若くは一つのパラドックスではないかをさへ疑はずにはゐられないのです。若し私が哲學に暗いためにこの感を抱くのであるとするならば、幸に私の非禮を咎めることなくして更により多く敎へられんことを希はずにはゐられません。

土田氏は最初に私が以前の小論において、人間相愛なる理想の根據を理想的に人間共存の事實に求めやうとしたのを見て、「人間相愛がわたくし達の理想の一つであるとすれば、それは經驗的のわたくし達に命令し、『人間相愛を爲す可し』といふ事の出來るものであらうか」

と設問し、およそ理想は私たちに命令するものであつて、それ故に理想の活動を當爲と呼ぶのであると說明されました。尙ほまた私が人間相愛を理想とする以上、「之と矛盾するやうに見える自我の主張はこの理想に順應するやうに制限せられなくてはならない」と云うたのに對して、之を當爲の意味の理想であると判ぜられました。

私が自分一箇で解釋する處によれば、理想は「かくありたし」と憧憬し希求するところのものであります。それは必ずしも「かくあるべし」と命令する當爲ではありません。藝術が美を理想とするといふ本質的な意味は、それが美であることを憧憬し又希求するのであると思ひます。この希求が單なる要望に終らないで、强く私たちの人格を支配して之に向はしめる處に、それが私たちの理想となるのではないかと私は思ひます。從つて希求はこの程度に於ては、それと矛盾する障碍を斥け且つ消滅せしめることをも要求します。之が私たちに當爲の如くにあらはれることもありませう。けれどもこの故に理想への活動が本質的に當爲であると見るわけには私は出來ません。私たち人間が相互に愛したいと云ふ强い念慮に燃えるとき、私たちは命令的にではなく、自發的に然うせずにはゐられないのです。若し私たちの理性が一たび相愛の希求を正しい理想としてゆるすならば、之に反する自我を制抑しなければならないことも當然でありませう。それにも拘らず私は私たちの理性がその理想內容を求め見出さうとする場合に、いつも私たちの最も自然的な眞の希求に立ち戾つて、尋ね聽かなくてはならないことを信ずるのです。「抑も美とはいかなるものであるか」と、また「抑も愛するとはどんな行爲をいふのであるか」と。私は人間相愛を理想であると云ひましたけれども、それ

は實は一つの理想に名づけた空名であつて、その實際的行爲内容が何であるかを指し示したのではありませんでした。從つてそこには「かくすべし」と命ずる判然たる準據はないのです。たとへ私が「汝愛すべし」と云はうとも、愛なる行爲の本體を指定しない限り、それは無意味なものに陷るでせう。「たとへ私が相愛の理想をこゝに立てたと云つても、私たちの行ひのどんな事がらが本當に相愛に協ふものであるかは豫め斷ずることは出來ないのです」とも私は云つたのでした。

私はかやうな意味で、すべての場合に眞正の當爲なるものの存在を疑ひたいのです。仰も何ものが私たちに當爲命令し得るのでせうか。之が私たちの理性であると答へるならば、現實の誰が誤らざる理性をもつてゐるのでせうか。すべては私たちが究竟的にのみ到達し得るに過ぎないのであつて、それまでは絶對の當爲なるものは在り得ないのではないかと思ひます。私には哲學者が理性又は理想の概念のみを取り扱つて、その眞實の内容に及ばないかの觀があります。理想に美と名づけ眞と名づけても、それは差別の便宜であつて、實際に何を意味するかは最後までは判らない筈のものです。道徳のやうな内容型式の稍々固定し得るものに於ては當爲をつくることが出來たかも知れません。しかも私はその當爲としての道徳的善が、やはり私たち人間の眞の憧憬希求に協ふところのものでなくては、本當の意味の善ではなく、從つて道徳型式の絶對的固定は誤つたものであるとさへ信じます。土田氏の如きも、形而上學の危險を說きながら、この點でみづからその罠に陷つてゐられるやうに私には見えるのです。

愛は私たちに本能的に生れてくることは、性慾や戀愛のさうであり、その他のすべての感情の然うであるのと等しいのです。併し私たちは之等のすべてに自らの理性的反省を與へて、之等に少くとも出來るならばより高く導く方向を附さなければなりません。之れ私たちがその人格價値を發現するゆゑんであります。かやうにして人間の相對行爲として

の相愛はまた私たちの人格を相互に向上完成せしめると云ふことに高められ、依つて私たちの理想としての内容をもつことが出來るのであると私は思ひます。けれども人格の向上完成にはどんな行爲が相應してゐるかは、やはり私たちが取つて最初からは豫定せられてはゐないのであつて、私たちが經驗して之を探し求めなくてはならないものなのです。土田氏が「内容的に見た愛はわたくし達の道德的當爲以外の何物でもない。またそれ以外のものであつてはならない」とせられるのは、その主旨に於て私のこゝに云ふ處と一致しますけれども、正しい愛とか善とかの具體的内容を最初から概念的に豫想して、當爲を持ち來られる點に於て、私の意見と異なつてゐるやうです。

道德及び道德的善に關しては、私は別に尙ほ論ずる必要を感じますが、之が同樣に人格の向上完成に努める行爲たることに於て愛と一致すべきことは上に說いた處から明らかです。只愛の内容は理想として常に究竟的に自らを發展せしむべきものであるに反し、道德の内容型式が固定せられ、從つて道德的行爲が當爲して私たちに命令せらるべきものであるといふ意味に於て相異點に立つてゐます。併し私は私たちの人間生活を全然本質的に思惟しゆくとき、抑も道德的當爲なるものの絕對的價値を疑ふものであつて、それは常に愛の内容に準據しなければならないのであると思ふのです。道德は理性の十分に發達しない人間に對し、より高き理性が命令する軌範に過ぎないのであつて、各の個人が或る人格的内容を具へるとするならば、それは既に不要なものであり、また誰びとの理性がより高いかが遽かに判定せられない限りに於ては、それは屢々不當なる束縛としてさへあらはれるのです。純粹に愛によつて導かれる世界は、かやうな道德を超越する本當の自由人格的な人間生活であります。

私のその他の論に對する土田氏の批難も畢竟同樣な見方の相異に基づく誤解から起るものであつて、私は更に他の機會に之を明らかにしたいと思つてゐます。只私が決して形而上學に捉はれるものではなく、たとへ便宜上に形而上學的

概念に於けると等しき名に於て私たちの概念を云ひあらはすにしても、それらは實に私たちの未成概念なのであつて、却つてその一切の具體的內容を私たちの現實の體驗と思索とによつて求め見出してゆかうとするものであることをこゝに明らかにしておきたいと思ひます。

八

私は以上に於て戀愛の本質を論じその價値を明らかにしました。併し戀愛に關する問題はなほ廣く殘されてゐることを感じます。それが藝術及び宗敎と關聯する點に於てもその關係を明らかにしなくてはなりますまい。更にそれが社會的道德に對する關係については、私たちの最も重要なる考察を必要とするでせう。戀愛に關する實際の論議は殆ど之に盡されるとしてもよいからです。私はなほ漸次の機會に於てそこに觸れてゆきたいと思ひます。

日本版畫に關して

黒田源次

浮世繪と浮世繪版畫

浮世繪は世間からやかましく言はれてゐるほど、一般に理解せられてゐるとは思へない。といふのは、浮世繪の意味――浮世繪の見方といつたやうなものが瞭然しないからであると思ふ。浮世繪と一口に言ふが實はそう單純なものでは無い。浮世繪といふ概念の中には種々の獨立な要素が含まれてゐる。中にも二つの因素が浮世繪と呼ばるゝものゝ根帶に橫はつてゐると斷言し得る。第一は德川時代に勃興した繪畫史上の一流派としての浮世繪である。第二は木版畫としての浮世繪である。是等の二つはもとより多くの場合に渾一體として顯はれはするが、然し浮世繪の概念的內容としては全く切り離して考ふ可きものである。然るに一般には此二つの因素が混同せられて論議せらるるが爲に、其因素の特徵の何れもが顯はれないといふ傾向がある。私は浮世繪の見方には此二つの因素を峻別し、その各々の特徵に就て理會するといふことが何より必要であるといふ事を注意したいと思ふ。

○

然らば先づ繪畫史上の一流派としての浮世繪といふのは如何なるものであるか。

それには浮世繪といふ名稱の起りから考へてみねばならぬが成書の上から言ふと、此名稱は石川流宣の江戸圖鑑綱目（元祿二年板）に浮世繪師といふ項目があつて菱川師宣、同師房、古山師重、石川俊之（流宣）杉村正高、菱川師永などの人々が列記せられてゐるのが最も古いやうである。それから菱川師房(?)の繪本に浮世繪畫といふのがあり、又奥村政信の細繪などにも浮世繪一流根元などの文字が見へてゐる。また師宣より古いと推定せらるる風俗畫に浮世正歲といふ落欵のあるものがあ

り、又一說に由れば浮世又平治といふ署名の作品もあるそうであるから元祿に前から使ひ出した文字には相違ない。

然らば其浮世繪の語義はどうかといふに、浮世といふ語の記原は言ふまでもなく、夢幻の憂き世といふことから來てゐる。それが轉じて當世風であるとか今樣であるとかいふ意味を有つて居つたことは山東京傳の骨董集の浮世袋再考の條にある通り「昔はすべて當世風をさして浮世といひしなるべし、これも古き事にや、能の狂言のきんじ聟といふに舅のいへる言に「やい冠者、婿どのは浮世人じやによつて云々」といふことあり、これ當世人といふが如し、岩佐氏を浮世又兵衛といひしも當世樣の人物を畫きたるゆゑならん云々」といふので分る。即ち浮世繪と言へば當世風俗繪のことを意味したのである。

斯くいへば何の時代でも畫家が生存する當時の社會風俗を寫したものでありさへすれば、浮世繪の範圍に入れなければならぬやうであるが、理屈は正にそうであるとしても、實際吾々は此語の作爲せられた寛文前後から始まつて、引續き其後の各時代に於ける好商の變遷に從ひ其風俗を寫したものに限つて居る。それは浮世繪といふ語の用ゐられた意味が其等一派の畫家の生活した當時の社會風俗を寫したものを、從前の種々な畫風の作品から區別するために稱へ出されたものであるからである。そうして其描寫の精神や樣式やらが逐次繼承せられ又擴充せられて遂に德川中期以後に見るやうな幾多巨匠の輩出となり澎湃たる一大畫系となるに至つた經過から顧みて、今日我々が言ふやうな浮世繪なるものゝ輪廓を容易に且つ明瞭に描き得るのである。

然るに又一方から考へると浮世繪の開祖と言ひ習はされた岩佐又兵衛の如きは土佐光信末流と自署して居り、師宣の諸家は多く大和繪師又は日本畫工又は大和筆品畫司などと自ら名乘つてゐる。してみると「大和繪師」を以て自ら任ずるといふことが、浮世繪派を貫通する一大精神的特徵であると見ねばならぬのでは無からうか。言ひ換へると世上で浮世繪師と呼ばれた彼等の繪畫製作上の信念は大和繪といふことにあると言はねばならぬ。元來大和繪といへば唐繪に對立するものであつて、古くは平安朝に興つた巨勢、宅磨、土佐の諸流をも包括する。即ち浮世繪師は精神に於て此畫統を繼承し復興したものといふ自信を懷いて居たのである。菱川といひ古山といひ鳥居といひ懷月堂といひ乃至は西村奥村の徒が自ら傲然と姓名の上に「大和畫工」の文字を冠した理由は玆にある。有名な西川祐信の繪本倭比事（寛保二年板）第十卷の「上古の繪多く唐繪を師とし學びぬれば、唐流に着して本朝の人物は稀なり、偶々神像なとを畫

くと雖、皆唐流を用ゐ、宛然唐土天竺の人倫の如し、筆法又唐に着して和人に應ぜず、故にたま〳〵和人形を畫けるも、唐めきて精神こもらず是偏なるにあらずや、此故に其得たる所に本付いて和流を卑しめ、圖形をなすにも唐山水、唐耕作、唐兒遊びなど皆唐に歸して本朝を捨つ、是遠く他の國を信じて近き我國を卑むるの心ならずや、此國にして此國の風俗を見識せば豈樂しからざらんや、嘆息せずんばあるべからず、予專ら和畫に心を入れて畫くも此意にして、强て偏るにはあらず、」斯の如き文字は決して祐信の一家言と目すべきではなくて、師宣以後の浮世繪師諸先達に代つて磊塊を吐出したものと思はれるのである。

然らば此新流派——此新運動は何時から創まつたものであらうか。言ふまでもなく、それは元龜天正の社會的大變革の後に一時に開華した桃山時代の『文藝復興』に刺戟せられて起つたものである。因襲的桎梏の頹廢と珍奇なる外國文物の輸入とは時代精神の鼓舞者であつた。新たなる感覺とそうして新たなる感情を我々は狩野秀賴の高尾觀楓圖、同長信の花下遊宴圖、同一翁の豐國大明神臨時祭圖の如き筆者明白なる作品や、彥根屛風以下の祭禮圖、歌舞伎圖、遊宴圖、交易圖などの筆者不詳にして從來漫然と又兵衞筆と傳へられたるもの丶中に發見する。是等德川初期の作品は實に浮世繪の源流に外ならぬ。然しながら是等の作者たる狩野土佐の畫人は時代精神に支配され動かされただけで自ら時代風俗畫の寫實的精神を高邁なる理想として築き上ぐるまでには至らなかつた。彼等の傳統的精神は容易に斯の如き自覺を許さなかつたのである。新理想の自由精神が確立するには——日本畫工なる高邁なる自覺が擔任せらるるに至るまでには百年の歲月を要したのである。そうして菱川師宣が此自覺せる浮世繪師の第一人者として出現したのである。

以上述べた所を要約するに、浮世繪なる名稱は當時流行の世相を寫す寫實主義の一派の畫風を意味し、德川時代に於ける反正統派的潮流を指示してゐる。此一派の畫風精神を問へば「大和繪」であると見ねばならぬ。而して浮世繪二百年の歷史を通觀するならば、吾々は浮世繪派の畫家が如何に熱心に如何に忠實に當代文化生活の諸相に沈潛し、それを表現するに努力せるかに感嘆を禁じ得ないのである。彼等のリアリスチツクな精神は菱川、鳥居、奧村と一刻も滯止しないで、遂に春信、淸長、春章、歌麿、寫樂、北齋、豐國、廣重を生んだ、そうして德川幕府の歿落とともに終を告げたことは世界の美術史にも稀れな光輝ある歷史であると思ふ。試みに同時代に於ける狩野土佐の正統的畫系と對照せよ、或は支那畫院の系統を祖述せる一派や

光悦光琳の一派乃至は圓山四條の畫系と對比せよ、何人も浮世繪畫家のリアリスチツクな强烈な衝動の勝利を承認せざるを得まいと思ふ。之を認容しなければ浮世繪の價値は零である。この精神この努力を理解しなければ其浮世繪は蜃氣樓である。西洋人が讃めるから善いと思つてゐる人もあるかも知れないが、かういふ人は低能兒か下等の商人である。そういふ人達の價値は眞の價値ではない。吾々は單純な正直な眼を以て浮世繪の作品を凝視したいと思ふ。そこには必ず發見する所の端的な精神がある。そうして一たび眼を轉じて現代作家の作品殊に風俗畫の系統を踏むでゐる人々の作品を視るならば、その微温なるリアリズムに頗る不滿を禁じ得ないものがあるだらうと思ふ。

○

次に版畫としての浮世繪を如何に見るべきかについて一言しやうと思ふ。

版畫としての浮世繪に對する見方が德川時代の一畫流としての浮世繪を見るのと全く違つたものでなければならぬと言ふ事は上に述べた通りであるが、流派としての浮世繪は傳統に附着した貴族的なオーソドキシカルな畫風に對する民衆的なリアリスチツクは繪畫史上の一運動である。故にその意義は專ら我國の近世繪畫史上に於ける立場に於て諒解せられなければならぬ。然るに版畫としての浮世繪はもう少し自由な一般性の上に觀察せられ得るものであらうと思はれる。

元來版畫——玆では自然木版畫に限るわけであるが、——は日本特有のものでは勿論ない。支那は本よりのこと、西洋に於ても其歷史は隨分古いものである。支那では隋唐の頃に既に顯著なる發達を示して居る。敦煌出土の咸通九年の年號がある般若經の巻首に見ゆる佛畫の如きは年代の明瞭なるものとしては此種の最古い標本である。宋代になると既に風俗畫ができ黑水發見の將軍像や官人生活を寫したやうなものが存在してゐる。元明に至つては一層廣く行はれたと思はれる。萬曆以後の明板あたりの書籍には挿繪が隨分多い。清朝に入つては色摺版畫が發達し藍や黄土や猩紅などが巧妙に用ゐられてゐる。芥子園畫傳や十竹齋畫譜などは我國に於ける色摺の手本であらうとさへ推定せられて居る。

西洋は如何かといふと、木版畫の起原は隨分古く、文藝復興期以後甚見るべき發達を示してゐる。殊に第十七八世紀にはデユーラーであるとかハルナツヘであるとかホルバインであるとか不朽の作家が輩出してゐる。色摺に於てもアルトドルフアは千五百二十年頃に既に試みてゐる。

翻て支那や歐羅巴に於ける木版畫の歷史に對して我國の木版

畫の發達を考へると、平安朝の初期に既に其端を發してゐる。下野國志に由ると日光大權現本地佛、馬頭觀音木版、本宮別所藏、承知十一年甲子正月日の記事がある。下つて平安末期から鎌倉時代にかけては「山槐記」治承四年三月廿一日の條に摺寫塔の記事があり、「殿曆」承久元年二月六日の條には五大力圖譜及び皮堂十一面形木摺の記事があり、又「玉葉」承安五年九月五日の條には愛染王像每日三百體摺寫のことが見えるのみならず、四天王寺の扇面古寫經の如き、法隆寺藏の十一面觀音像の如き、稍遲れては應保二年の加筆ある松本文三郎博士所藏の毘沙門天像のごときが現存してゐる。室町から足利にかけては、慈恩大師像や亂レ版來迎圖や春日版の大方廣圓覺修多羅了經義略疏卷首の佛畫や、應水版の融通念佛緣記の如き、五山版の十牛圖等がある。江戸時代になると慶長天和以後著書刊刻は著しく隆盛となり、挿繪本としては嵯峨本を始めとし、多くの丹綠本、假名草子が著はされてゐる。然し此時代迄の版畫は丹綠本、假名草子など幾らか平民化したとは言へ、一般には貴族階級の讀書人を相手にしたものである。それが寛文以後菱川師宣の出現するに及んで一枚摺又は挿畫本等の木版印刷が急速なる隆興を來たし 民衆藝術としての特色を明らかにするやうになつたのである。前に引照した江戸圖鑑目錄に浮世繪印として菱川派の諸家が列記され 次で板下繪師といふ項目が見ゆることなどは、元祿の盛時に於て浮世繪と木版印刷術とが相互に溫い握手を交はしたことを暗示するものである。同時に其二つの文化が一般民衆の鑑賞力に基礎を置くやうになつたと見ねばならぬ。此版畫を民衆化することに特に効勞があつたのは鳥居派の役者繪である。江戸に於ける平民的娛樂の中心である歌舞伎の發達と木版畫の流行とはこれより以後分離して考ふることができないほど密接な結合を形づくつたのである。

其後の版畫の歷史については今彼是叙述しやうとは思はない。唯版畫の種類といふ點から見て、墨摺の古いことは言ふまでもないか、筆彩の丹繪は元祿以前から行はれ(或は曰ふ天和に創ると)、次で漆繪か享保に興り艶麗を極めたが、まだ筆彩の域を脫せず、延享寛延に至つて紅繪と稱する色彩版畫が案出され、數種の色彩が巧みに配合せられたが、明和安永以後に至つて錦繪や摺物と稱せらるる何十度摺の絢爛目を奪ふやうな色彩版畫が製作せらるるに至つたのである。斯くして春信の如き春章の如き清長の如き歌磨の如き豐國のごとき北齋廣重の如き諸大家の輩出とともに色彩版畫の手法は完全の域に達し、錦繪の黃金時代を現出したのである。

以上述べた通り 木版藝術は決して我國民の私すべきもので

はない。支那に於ても西歐に於ても版畫は古い歷史を有つてゐる。唯茲に注意しなくてはならぬことで、しかも興味深い事實は其等の版畫が其手法に於て作風に於て國民的差別を超越した類似を有してゐることである。そうして此類似、此一般性といふものが、我國の版畫をして世界的たらしむる所以であり、又此一般性が版畫としての浮世繪を近世繪畫史上の一流派としての浮世繪から切り離して論議せしめ得る所以である。浮世繪の畫風に南畫の樣式と直ちと比較しやうとするならば無意味である。浮世繪も南畫も其歷史的發達を離れて其意味を解し難いからである。同樣に油繪と浮世繪も全然獨立な範疇の上に其存在の意義を有つてゐる。同じ浮世繪にしても版畫と肉筆とを比較して　其優劣を判ぜんとするものも其愚に於て同一である。之に反して我國の木版畫と支那や西洋に於けるものとを比較することは決して不可能でない。不可能でないのみならず、斯くの如き比較を試みてこそ始めて我國の版畫が世界的に深甚なる價値を帶びて來る所以である。而して歐米人が我國の版畫に傾倒するに至つた重大なる理由も亦茲に存する。我國の浮世繪研究家と稱するもるの內には、西洋人が版畫に比較して肉筆を珍重せぬことを不可解な謬見であるかのやうに公言するものもあるが、それこそ一知半解の近視眼的議論と言はねばならぬ。要するに我國の德川時代に發達した木版畫殊に色摺版畫は世界木版畫史の中核を占むるものである。苟も木版藝術の價値を知るもの支那及び歐洲に於ける其發達の歷史を知るものは、我國民の偉大なる誇として色摺版畫を珍重するであらう。

更らに一言を附記したい。上述のことからでも分る通り此版畫藝術は浮世繪とともに過去のものではない。過去の光榮ある歷史は歷史として、其本體は現在に生命を有するものである。我々は將來更らに一大發展を見るべきものであると信じてゐる。第十九世紀後半以後我國の木版畫の手法は新たなる興味を以て歐洲人に研究せられてゐる。そうして墨摺及び色摺の或物に至つては實に驚歎すべき作品を生んでゐる。此時代に於て此貴重なる技術を働かして新たなる版畫製作に從事することは我國の畫家にとつて此上なき快心の事業でなければならぬと私は信ずる。然も此事を自覺する畫家の寡いのは洵かに慨歎に堪えぬのである。繰返して言ふ、版畫は浮世繪畫家の獨占物ではない。否日本畫家の獨占物でもない。唯我國現今の彫師摺師等の技術乃至は用紙材料等の條件は——これは德川時代からの長い間のものである。我國の畫家には此特典が與へられてゐる。然るに漫然と手を拱いてかゝる技能の亡びゆくに任せるか、又は飜譯的な自畫自刻といふやうな僻見に捕はれて歐米人の餘技に

追從するを以て滿足するか。此解答を我國の日本畫家洋畫家の諸賢に質してみたのである。

版畫創作に對する誤解

我が國の新しき時代に於ける版畫創作に就て考ふるに創作版畫そのものに對して二つの間違つた考が行はれてゐることを痛感する。此二つの謬見は殆ど正反對の主脚地に立つものであるが、將來の版畫藝術の發達に尠からぬ障碍を與ふるものと信じるのである。

私の目して第一の謬見といふのは現代の新しい創作版畫を白眼視して優秀なる作品を盡く德川時代の浮世繪師の手に成つたものに限るやうに言ふことである。是等の人々は稍もすれば浮世繪版畫と浮世繪とを同一視せんとし、浮世繪版畫を過去現在未來に亙つて我國民の有する唯一の版畫藝術であるかの如く獨斷する傾向がある。第二の謬見は我國在來の版畫を繪師彫師摺師三者の協力に由る一個の協同作品——言はゞ藝術創作上の不純なる混血兒——であるかの如く見ることである。かういふ立場の人々には版畫創作の純眞なる藝術的意義を擁護するが爲に自畫自刻自摺を重んずべきことを高調する。

第一の謬見については前文に述べておいたから、玆には極簡單な言及に止めやう。浮世繪畫家が我國の版畫製作の上に一大功績を擧げ得たことに就ては何人も首肯せざるを得ない處である。從て版畫即ち浮世繪であるかの如き見解を生ずるやうにもなつたのであるが、然し兩者の間に必然的關係を强ゆることは斷じて妥當であると言ふことはできない。前文にも述べた通り浮世繪といふのは本來當世の風俗世態を寫した畫といふ意味のものであるから、風俗畫芝居繪等が其中心で無ければならぬ。浮世繪の歷史に於て、其初期の作品は明らかに之を示してゐる。風景畫の如きは準風俗畫の場合もあるが全くさういふ意味の無いものも尠くは無い。從て彼等の作品を浮世繪のうちに入れるのは、彼等が浮世繪派から出たといふ理由に本く單なる便宜上の稱呼に過ぎない。故に風景版畫は正當に言へば浮世繪から派生して來た所の、しかも浮世繪とは獨立な——日本繪畫史上特殊の地位を占むる——一系統であると言はなければならぬ。しかも江戸末期に於ける版畫製作の最も光輝ある運動は彼等風景畫家の作品では無いか。否敢て江戸末期と限ることは當らない。明治に於ても小林清親の如き偉大なる作家——私は彼を明治時代の最大なる畫家であると信じてゐる——を生み、大正の現今に及んでも多くの版畫家は風景畫に專ら力を注いでゐる。之等は浮世繪といふ概念を餘ほど朧朦たるものとしない限り包

揮し得るものでは無い。要するに斯の如き謬見を懷く輩は主として骨董的觀賞家であつて啻に藝術的興味に心醉するの人ではない。右風景版畫の事のみならず、西洋木版畫に見る如きホワイト・ブラック――墨摺――の如きは浮世繪初期の墨摺が筆に毛筆畫の復製に止まるが如きものと違つて、光線の明暗を對象とする微妙なる木版畫の境地を開拓してゐる。之等は日本の木版畫に見ることのできない西洋木版畫の重要なる一要素であると言はなければならぬ。我國の新らしい創作版畫家は將來必らずや此方面にも其技能を發輝するであらう。而してそれが所謂「浮世繪以外のものたることは言ふまでもない。

次に第二の謬見と收するものは然らばどうであらうか。此考は現今の少壯なる版畫家の間に勢力ある見解である。現在我國創作版畫家の中心團體と目せらるる日本創作版畫協會の宣言の中にも創作版畫の要件として自刻自摺といふことを擧げてあつたやうに記憶する。此考は一見道理ある意見のやうにも見へる。何となれば我國在來の版畫が畫家に待つ所は單簡なる輪廓に近い下繪を作ることに過ぎない、その後の製作過程は全然彫師と摺師の意志技能とに委られておるかの如く見らるるのである。從つて出來上つた作品が畫家一己人の獨創たることを疑ふのは當然のやうである然しながら一歩立入つて省察してみると此考の全然皮相の見解に過ぎないことを容易に理解することができる。理屈は暫らく措く。若し此見解にして妥當なるものとするならば我國の浮世畫の諸大家はどうなるであらう。春信や清長や歌麿や北齋や廣重やは極めて自我の燃燒に乏しい工人の群に數へられねばならぬであらうか。それは餘りに沒義道な話であらう。それは餘りに無理解の甚しいものである。版下畫は言はば建築家の設計圖(プラン)である。そうして版畫製作に於ける畫家と彫師摺師との關係は建築家と工事請負人との關係に似てゐる。建築家のプランは工事に從事する土木工に對して絕對の權威を有せねばならぬ。しかもそれは工事が大規模であればあるほどさうである。何人も建築師に殿堂の基礎から尖塔までの土工石工木工たるを兼ぬることを要求するものは無いであらう。版畫藝術に於ける畫家の立場も同樣である。版畫の下畫は畫家が彫師摺師に與へたプランである。校合摺の色ざしも同じ意味を有つてゐる。版下は設計圖と同じくそれに由つて作者が工人を支配し驅使して行くので無ければ決して十分なる實現を見無いのである。事實斯くの如くして春信や歌麿や寫樂や北齋の多くの傑作が出現し得たのである。果して然らば新らしき時代の我國の創作版畫家が彼等浮世繪の諸先輩の先蹤を追はないことを以て誇りとするだけの理由と自信とを何處に有するであらう

か。

○

然らば進んでかういふ間違つた考の起る根源は果して何であらうか。私の見る所では此謬見の二つとも歐米の版畫製作家觀賞家の態度に影響せられたものであると思ふ。

まづ第一の謬見は歐米の觀賞家の意見に惑溺したに過ぎない。歐米の觀賞家は浮世繪なるものを日本繪畫史上に於ける意味に於いて考ふるよりも色摺木版畫一般の發達を眼中に於て考へる。從て世界に比類なき色摺版畫の成功を以て浮世繪師の功績に歸し、其後の發展については殆んど考慮を拂はない。彼等の眼中には過去あるのみである。故に彼等の觀察は時に深刻であるが偏狹を免れない。歐米人に由つて價値を發見せられた浮世繪。――浮世繪版畫の價値を始めて歐米人に敎へられた日本の觀賞家は最後まで歐米人の意見に追從する。その追從の態度は實に豫想外である。反古の裡から天上にまで昂められた浮世繪版畫の價値が正當に理會せられ玩味せらるゝことは歐米人の批判にのみ信頼する浮世繪蒐集家――多くは骨董趣味の――の手には覺束ない次第である。彼等は過現未に亘る文化發展の歷史的背景に對する考察を缺いてをる。吾人は此點から此謬見を自覺なき歐化的趣味の産物であると考へざるを得ないのである。

第二の謬見する所は如何、これもやはり西洋の版畫藝術は木版でも銅版でも乃至は石版でもモノカラアといふ特徴を有つてゐる。畫家は版下を作るよりも直接に板上に描く。鐵筆を以てか或は鑿を以てか。こゝに西洋木版畫の面白味があり、又銅版畫の發達した所以でもある。此點に於て日本版畫の特徴が(colour)に存するといふことは意味深きものである。日本版畫――殊に浮世繪版畫――の有する優婉なる情緒は一に其色彩に存するといふことは浮世繪愛好者の異口同音に唱道する所である。之に反して墨摺は肉筆の復製でないまでもそれに近いものである――よし素描的の興味があり蒼古稚拙の趣味があるにしても。

色摺版畫の發達――之は實に我國の版畫藝術に彫師の分業的發達を生ずるやうになつた第一の理由であると信ずる。何となれば版畫創作が分業的技能を必要とするやうになつたのは藝術としての幅員と奧行とを增大するに至つた根本の理由でもあり結果でもあるからである。此點に於て日本の版畫と西洋の版畫とは大いにその立場を異にするものと言はなければならぬ。少くとも西洋の色摺版畫が自刻自摺を固執する限りそうである。然し彼等も其藝術的生活の主張から自刻自摺に固執するとばか

りは言ひ難い。西洋の色摺版畫は十九世紀の後年に於て殊に我國の影響を受けてゐる。しかも彼等が自刻自摺に滞うつてゐるのは專ら專門の彫師や摺師のゐないといふ社會的條件に限定せられて居るからでもある。故に日本の創作版畫家が徳川中期からの傳統的な手法を捨てゝ西洋の技工に習熟しやうとするのは、彼の美點——自刻自摺にもとより獨特の美くしさはあるから——攝取せんとする試としては無論意義あることではあるが、單に己を捨てゝ彼の顰に習はうとするに過ぎないとすれば我等大いに黨せざる所である。

如上の主なる理由から——或は幾分他の條件も働らいてゐるであらうが——遂に吾國の版畫藝術に專門的な彫工摺工の分業的發達を認むるやうになつたのは世界に誇るに足る我が日本版畫の優越であると思ふ。實に我國の彫工摺工は世界に比類のない優秀なる技術家である。從てもし西洋版畫家の自刻自摺といふことに幾多の美點があらうとも——それは我國の版畫藝術に比すれば甚狹溢なるものに相違ない——徒らに彼の模倣に腐心するといふことは大牢を棄て、腐食に就くに等しいことではあるまいか、一部の版畫製作家の考ふるごとく、傳統的な手法を借りて新らしい創作を試みるといふことは其畫家の個性を聊かも傷くるものではない。否寧ろ有爲なる畫家であるならば是非この優秀なる彫工摺工を指導して世界に類無き色彩版畫の創作を試むべき一大野心を懷抱すべきである。げにや版畫藝術は「文化の殿堂たる印刷術」の苑に開いた四時の美花である。過去のものでもなければ、現在に限るものでもない。もとより浮世繪師の獨占でもなければ一部畫家の私有でもなく。斯う考へてくると現在世界に比類のない版畫の技工を有するといふことは我日本のアンビシヤスな藝術家にとつては、此上もない有利なハンディキヤツプではないか。歌麿北齋寫樂廣重等が世界一流の版畫藝術家であると同じ意味で、現今の創作版畫家も世界的に一流の域を横行活歩し得るではないか。徳川時代精練せられた趣味と鑑識とに由つて高められた此技術を自滅の淵に放棄するかどうか。我國の創作版畫家は大なる特長を有すると同時に大なる責任を帶ぶることを自覺する必要があるであらう。

（大正甲子初夏三樹水西莊にて）

朝霧

近松秋江

　暫く鼾を立てながら、昏睡してゐたお歌は、やがてひよつくり枕から頭を擡げて、憑き物でもしたやうに、きよろ〳〵そこらを見まはしながら、
「もう何時々分でせう。」と、蚊帳の中に並んで寝てる岡部に訊ねた。
　岡部は昨夕あれから殆ど、とろりともしなかつた。お歌がもし、夜中に寝込みに何か危険なことでもしはせぬかといふ不安があつたといふよりも、さすがに彼は、出し抜けにお歌が訪ねて來たことによつて神經が昂奮してゐるのであつた
　そして、一と時切り眠つてゐたお歌が眼を覺まして、さういつたのに答へて、
「さあ、もう四時は過ぎてゐるだらうな。」彼は先程家の外で何處かの時計がたしかに四時を打つたのを聞いたやうにおもふ。
「さうですか。あゝ、知らぬ間にちよつと眠つた。」
　お歌は、さういひながら、今度は、昨夕、帶を解いたゞけの轉寢（ごろね）の身體を、腰から上むつくり起き上つた。
　岡部はそれとなく心に油斷せぬやうに、じつと彼女の爲ることを見守りながら、
「まあ、も少しの間寝たらいゝぢやないか。まだ起きるには早い。」
「えゝ、でも、もう歸りませう。」
といつて、お歌は氣の落着かぬやうに、こそこそ寝床の上で、寝亂れた着物の前など掻き合はせてゐた。縮緬の長襦袢もお召の單衣もくた〳〵になつてゐた。失望と疲勞とに喪然（がつかり）とした彼女はまるで魂の拔けたやうに呆然としながら、やがて蚊帳の裾を捲つて外に這ひ出した。そして、昨夜遲く座敷の隅に解いて置いた帶だの、それに附屬した腰のまわりの物などを取つて着物を着直ほした。

初夏の短夜は、もう外は大分明るくなつたと思はれて、戸の隙間から射込む薄明りに電燈は消えてゐても室の中は明かつた。彼女は單衣のうへに絽縮緬の黑の紋付の羽織を引掛けて、衣紋を繕ひながら、胸は千々に亂れてゐても、女の嗜みだけは忘れず、次の四疊半の間の隅に置いてある鏡臺の前にいつて膝を突きながら、懷中の櫛を取り出して、丸髷の前髮や鬢の崩れたのを直した。

岡部は、先刻から、

「まあ、もつと休んでいつたらいゝぢやないか。」

と、二度も三度も留めるやうにいつたが、お歌は、

「えゝ、でも、もう往きませう。」何處かに魂を置き忘れたやうな返事をしてゐた。

實際、昨夜からの、お歌の取亂した樣子では、これから出て往つて、眞直に自分の居る處に歸つて往かずに、何處かへ往つて、どんなことをするか分らぬとも氣遣はれぬでもなかつたが、岡部はもう、そんなことなど小膽に氣遣ふほど初心ではなかつた。

「歸るんなら、そこまで送つていつて上げよう。」岡部はさういつて、自分で入口の戸を開けて、一緒に外に出た。外はもう白々と明け放れてゐた。六月半ばであるが、好い鹽梅な天氣がつゞいて、今日もどうやら好晴と思はれ、蒼白く晴れた曉の空には一面に白い朝霧が罩めてゐた。停車場に近い郊外の家つゞきには、もう早い家では起きて、しつとり露に濕つた表の往來を掃いてゐる處などもあつた。

そこから電車のステーションまでは、四五町くらゐしかなかつた。

お歌は、極度の失望に、たど／＼しい足を運ばせながら、

「あなた、どうぞ、私の氣の濟むやうに、本當のことを遠慮なく云つて下さい。あなた本當に私を棄てないんですか。」

彼女は口では、もうすつかり覺悟を定めてゐるやうに立派なことをいつてゐても、やつぱり、男から、棄てられるのだと宣告されのは死ねといはれるよりも、もつと辛かつた。

すると岡部は、どこまでも、はつきりした口調で、

「棄てはしないよ、大丈夫だよ。」

「ほんとうに？」お歌はさういつて、ちよつと横を向いて男の方を見た。

「本當だとも。」

「それに違ひありませんか。」お歌は何處までも念を押すやうに重ねていつた。

「ちがひないよ。」

岡部は口の先に力を籠めて、この場合なるべくお歌を失望させぬやうにいつた。勿論、岡部は、お歌を全く棄てゝしまふ氣はなかつたのである。これまでも彼は、お歌と逢ふたびに、彼女が屢々これから先きのことをいひ出す時によくいつてゐた。

「僕はかうして、何時までも一人でゐるやうだけれど、その内に相當な對手があつたら、一人でなくなる時があるかも知れないが、それは、それとして君とは一生親しい間柄で居らうぢやないか。」

と、さういつてゐた。岡部のその氣持ちには少しの詐りはなかつたのである。

「本當にさうして下されば、わたし嬉しいけれど、……何時か、あなたに棄てられる時が來るでせう。」

お歌は、寢床のうへに腹這ひに起き直つて、卷煙草に火を附けながらいふのであつた。

「そんなことはないよ。併し今から正直にいつて置くが、僕は君と晴れて同棲することは好まない。僕には、君よりもつと適當な女が見附かるかも知れない。或は一生見附からないかも知れない。もし見附かつて、その女と同棲する時が來ても、君の方がそれを諦めてさへゐれば、僕は一層君を氣の毒に思つて、妻君は妻君として置いて、君は君で必ず可愛がるよ。男にとつては、世間晴れて一緒になつてゐる女よりも、秘密に逢つてゐる女の方がどんなに樂みか知れないものだ。君とは、その隱れて樂む方をしたいのだ。」

「それは私も覺悟してゐます。」

「そんなら、私の方でも一生君との關係をつゞける。」

岡部は必ずしも、女に氣が多いといふのでもなかつたが、一度親しい關係を結んだ女と耐忍の出來ないほど厭な事情の生じない限り、互に緣を切つてそのまゝ終生の他人となつてしまふことに、何ともいひやうのない寂しさを感じた。

お歌の場合でも、彼女は實際岡部に對しては忠實でもあり、岡部の方からは、それほどでなくつても、お歌の方からは、岡部に見替える男は、廣い世界中に他にないほど、眞底惚れてゐるのであつた。岡部にはお歌のその氣持ちは十分に解つてゐた。それゆゑ彼は、お歌を妻にする氣などは初から少しもなかつたが、たゞ情婦としてならば、一生涯彼女との樂みを繼續してもいゝと思つてゐたのであつた。

お歌ももう三十代を半ば通り越した、いゝ年をしてゐるのであるから、時々話のある緣口をどれか定めて、生涯の落着き場處を今のうちにこしらへて置く方が好さゝうに思はれるのであつたが、もう二度も三度も緣運の惡かつたうへに、亭主持ちの氣

苦勞と樂しさの味をどん底まで嘗め知つた彼女にしては、これから又人妻になつて、氣心の知れぬ男の氣嫌氣褄をとつたり、世帶の事にかまけて、焦けた一生を送るのが、いつそ厭で堪らなかつた。三つ四つあつた緣談の中には、小金のある老人の後妻といふ口もあつたが、それは後妻といひながら體のいゝ妾であつた。勿論お歌は妾であることは、さほど厭とも思はなかつた。どうせ若い時から夫運の好くなかつた自分が、もう今の年になつて、妾は厭だとも思つてゐなかつた。それどころではない、妻と定つて一家の責任を持つよりも、妾で氣樂な月日を過すのが、どんなに好いか知れないと思つてゐた。妾は厭ではないが、老人の妾になるのが厭であつた。それからいふと、岡部は、たとひ自分を妻にはしてくれないにしても、又とても、自分の一生を引受けて養つてくれる見込みはなくつても、年からいつても何からいつても、お歌には不足はなかつた。

「わたし、あなたにそんなに御迷惑をかけるつもりはありませんよ。女一人くらゐ仕立物をしたつて食べてゆけます。早く家だけ持たして下さい。小さい家でいゝんですから。」

　岡部はそれに對して、いつも唯、

「うむ、そのうち僕の都合が附いたら、何とかしてもいゝ。」

と、要領を得ない返事をして置いた。

　お歌が今後の一生、もう人の妻は厭だ、妾になら、なつてもいゝといふ心持ちと同じやうに、岡部も一生、定つた女房を持つことは、何だか自分の身體や境遇を束縛するやうで、あんまり氣が進まなかつた。それよりも妾で濟ます方がどんなに身輕だか知れないと思つた。第一ちよつと考へただけでも、妻帶してゐるといへば、何處かぢゝむさくつて、野暮らしく思はれるに反し、妻子は持たぬが、妾を置いて濟ましてゐるといへば、洒落てゐるやうに思はれた。

　いつそ、お歌が、顏を見るたびに、あんなにいつてせがむのだから、早く何處かへ小さい家でも持たさうかと思つたが、さうすると又、自分に惚れぬいてゐるお歌のことだから、一層好い氣になつて、今までよりもゝつと絡はつて來さうなのが、うるさく考へられた。岡部の方では、お歌をそれほどまでにしなければならぬ大事な女とも思はなかつた。たゞ彼女が何處までも身を顧みて、謙遜な態度でゐれば、岡部の方でも何處までもお歌に對する關係を絕つ必要はなかつたのである。これまで屢屢そんな情事に經驗のある彼は、昔からいふとほりの甚だ平凡な言葉であるが、「細く長く」といふ眞理をよく辨へてゐた。

　すると、お歌との、そんなやうな關係が二三年續いた時分になつて、岡部は偶然又ほかの女をこしらへた。その女との關係

は、ばた〳〵に進行した。そして、お歌が何時もいひつゞけてゐた、小さい家を一軒借りて持たすことをその女にしてやつた。その女も、岡部にとつては、理想どほりの女ではなかつたが、お歌との優劣や好惡を格別比較するまでもなく、何となしに、お歌には、向うから屢々口說かれてゐても、心の進まなかつたことを、その女には進んでしてやる氣になつたゞけでも、少くともお歌よりはその女の方が何處か彼の氣に入つてゐたのであつた。

お歌は、はじめは少しも氣が附かなかつたが、この一二ケ月何處となく岡部の、自分に對する素振りに、何か知ら袖にするところがあるのが變に思はれてゐた。そのうち岡部はこれまで長くゐた居處に居なくなつてしまつた。主人を持つて、奉公をしてゐる身であつてみれば、お歌はさう〳〵身體の自由がなかつた。彼女は、岡部が自分の眼界から姿を消してしまふと、まるで狂氣のやうになつて、彼の後を探ねて廻はつた。無論岡部の方では彼女を放棄する考など少しもなかつたのであるが、ほかに女の出來たことだけは話さなかつた。それをいふ必要もないと考へたからである。けれどもお歌の方では、それでは濟まされなかつた。それからといふものは、彼女は、主人の仕事も何も打遣つておいて、恥も見えも構はず心當りといふ心當りを岡部の居處を探ねて歩いた。そして、いろ〳〵彼女の智慧を絞つた揚句たうとう昨日の晩になつて岡部の居る處が分つたのであつた。

それから、地理に暗い郊外の住宅地を探ね〳〵、やつとの思ひで岡部の家を探しあてゝ來た時には、もう夜も十時を過ぎてゐた。そして、寢てゐる岡部を叩き起した。お歌が、それでもと、萬一の望みを繫いでゐた賴みの綱は切れて、何も斯もが、みんな、お歌が、惡い方へ、いろ〳〵と想像してゐたとほりであつた。自分があれほどに遠うから岡部に、さうして欲しいと賴んでゐた筋書のまゝに、それが、自分ならぬ他の女の爲に實現されてゐるのを面(まのあた)りに見た時には、彼女は失心の餘り、殆どそこへ氣絕して倒れさうであつた。

お歌はそこで、岡部を前に置いて、いろ〳〵怨みをいつた。

けれども岡部は、お歌が自分達の秘密を何處までも秘密とせず、他の女の前に、それを彼女自分から曝露したことが、ひどく不快であつた。勿論さういふ男女の情事の入譯に關しては深い經驗のある岡部は、そんな場合、お歌の行動は萬々止むを得ないことであることは察してゐたが、それにしても、十七八の小娘とちがつて、相應に思慮分別の長(た)けてゐるべき筈のお歌が、さうした愼みの足りない行動に出たことが、岡部にとつて

は、お歌に對する同情と興味とを殆ど滅退さしてしまつたのである。

　しかし、今の場合、餘りに強い絶望を抱かしめるのは、此の事を圓滑に收めるに不利であると思つたので、なるべくお歌の心を慰めるやうなことをいつてゐた。本當は、お歌が、岡部が彼女に知らしてゐない處へ押掛けて來たといふ一事が既にお歌の運命に致命的であつたのである。お歌さへ何處までも愼みを守つて、溫順にさへしてゐれば、岡部は何時までもお歌の樂みとなつてゐられるのであつたが、もう今となつては、何も斯もお歌の行動によつて打壞されたのである。岡部はたとひ、片方の女に對する義理や遠慮はなかつたにしても、お歌のそんな端ない、年効もなく取り亂した行動が彼の趣味に合はなかつた。それゆゑお歌に對して、實はお前はもう厭になつたと、明らさまに口に出していつても十分な道理は立つのであつたが、今絶望の底に沈んでゐる彼女を、この上苦める必要もなかつた。

「あんた、そんなことをしては好くないよ。第一今まで一度も他泊したことのないものが、理由もいはずに勝手に他泊したりなどして、主人に申譯がないぢやないか。又私にしても、もし、こんな事が君の方の主人に知れることは甚だ好まない。」

岡部は凛とした調子でいつた。

「わたしもう、彼處の家を出たのです。」

　お歌は丸髷の頭をがつくり俯向けて道の方を見ながらいつた。

「戯談いふものぢやないよ。彼處の家を出てどうするんだ。あんな、君にとつて結構な主人はないぢやないか。」

「いくら好くつても、そんなことは私にとつては何でもありません。」

　お歌は實際岡部に戀し、主人の眼を忍んで偶に岡部との逢ふ瀨を、この二三年間、生命として生きて來たのであつた。

「それは、君が私をそんなに思つてゐてくれるのは誠に難有いと思ふが、しかし、その爲にお互に、もう餘り取り亂した、見つともないことをしたくないんだ。あんたが、私の爲に、大事な主人の方をしくじるといふことは可くないことだ。」

「わたし、今そんなことは考へてゐないんです。」

「いや、それが可くないんだ。お互にもう、こんなことは第二の問題であつて、それよりも生活の方が大事だよ。」

　實際岡部は岡部で、丁度お歌とは反對に、もう今となつては、戀だの、惚れたの腫れたのといふことが、思つてみるだけでも厭で〳〵堪らないのであつた。

「えゝんです。わたしは、貴方に棄てられたら、これから何處かへ行つて死ぬつもりです。」

岡部はそれを聽いて、わざと仰山に笑つた、

「はゝゝゝ、そのくらゐのことで死んぢや詰らんぢやないか。……だから僕は君を棄てないといつてゐるぢやないか。まあ、そんな十七八の小娘のいふやうなことをいはずに、これから素直に主人の方へ歸つて、おとなしくしてゐる方が好いんですよ。」

「ぢや何時逢つてくれるんです。わたし、もつとよく貴方に訊ねてみたいんです。」

「うむ、それは何時だつて逢つてもいゝ。けれどもそんな取り亂しては可けない」

「それは當然ぢやありませんか。あなたが、あゝいふ人と一緒にゐるなら、ゐても、それを私が何ともいふことが出來ないんですけれど、それなら、それで一と言わたしにさういつて置いてさうして下すつたら、なにも私はいはないんです。」

「いや、それは、一應君に明かした方がよかつたかも知れないが、しかし別段君にお斷はりしてしなければならぬことでもないんだもの。何をしたつてお互に差支へない。」

「それはさうですけれど…………」

お歌は何といつても、みんな岡部からいひ被されてしまつた。しかし、今の場合、それは道理や言葉で彼女の胸の苦痛は少しも治らなかつた。岡部に、自分のほかに增す花が出來て、それと一緒に住んでゐるところを、まざ／＼見せられたのが、彼女には、もう何ともすることの出來ぬ絶望の思ひであつた。それゆゑ此の際、彼女の湧き立つ胸を鎭める方法はほかにはなかつた。たゞ、岡部にとつて、彼女と彼女の競爭者の、どちらが優勝者であるかといふことが分りさへすればよいのであつた。お歌は何とかして、それを岡部から訊いて滿足しようと思つた。彼女の考では、男といふ者は氣の多い者であるから、今一時の浮氣から、あんな女と一緒に住んでゐるけれど、自分とは昨日今日の關係ではないのだ。今に岡部の目が覺めたら、やつぱりもとの自分の方に心の撚りが戻つて來るにちがひない、あんな女に生命よりも大事な男を取られては堪らないといふ腹があつた。けれどもそれはお歌の敢果ないうぬぼれであつた。

お歌は、なるたけ足を前に出さないやうに歩いてゐたが、それでも四五町の道は盡きて、やがて省線のステーションまで來た。

電車はもう直に四時何分かの初發が來る時分と思はれて、驛員が眠さうな氣のない顏をして改札口に立つてゐた。まだ乘客

も來てゐなかつた。

お歌はすぐ乘車劵を買つてプラットフォームに出ようとせずに道を反對の方に横に曲つて、

「あなた、それで私のことを何うして下さるんです。」と岡部に絡はるやうにいつた。

岡部は心の中で、それを持てあましながら、そんな顏も見せず、

「どうしてくれるつて、私はあんたの一身を引受けてゐる譯ぢやないんだもの。そんなことをいはれたつて、どうも出來ない。お互に獨立して、それそれ都合の好い生活をしながら、そのうへでお互に樂まうといふのが、私のそも／＼からいつて來たことなんだ。」

岡部はそれ以上は口に出さなかつたが、お歌が、何處までも因縁を附けて凭れ掛らうとすれば、するほど彼は、刻々にもお歌に厭氣が差してくるのが、丁度水でも退いてゆく後を見てゐるやうに分つた。勿論お歌が、昨夜からいつてゐるやうに、鎌倉へ行つて死なうとも、銚子へ行つて海に入らうとも、それは彼自身の關係したことではないと思つてゐた。實際さう思つてゐた。何となれば、たとひお歌が、口でいふとほりに死ぬとしても、それは、岡部に棄てられて死んだとはいはれないのである。岡部は決してお歌を棄てる氣は昨日までなかつたのである。ほかに新しい女が出來ても、お歌はお歌で、さうツとして置いて樂むつもりであつたのだが、お歌が自分で、ぢたばたしたゝめに、俄に岡部の心に厭氣が差したまでである。

「さあ、もう、何時までもそんなことをいつてゐないで、少しも早く日本橋の主人の方へ歸つた方がいゝんだよ。」

岡部はあまりくどくはいはなかつたが、お歌が、彼のいふとほりに素直にしてゐれば、やつぱりお歌に時々逢つてやつてもいゝと思つた。

「わたし、これから何處へ往くか分りません。もうこれきりお目にかゝらないかも知れません。」

お歌はまだ心が中ぶらに迷つてゐるらしく云ふのであつた。

「それは何處へ往つたつて、君の御都合次第ぢやないか。わたしが、どんな事をしようとも、何處へ往かうとも君にことはる必要のないとほりに、君も勝手な行動を取ることを、私は決して何ともいはない。」それでも言葉だけは優しくいつた。

「わたし、これから鎌倉へ往かうと思ひます。」半分獨言のやうにいつた。

「それは何處へでも。」

そのうちに最初の電車が來た。一人二人工廠へでも行くらしい男が乘つたきり、お歌はそれには乘らなかつた。少しして二度目の電車が來る前になつてやつと彼女は、切符を買つて改札口に進んだ。だん／＼東の方が明るくなつて、太陽がまだすつかり眼の覺めぬやうな顏をして朝曇りの中から淡い輪郭だけを見せて來た。乘客も三人五人づゝふえて來た。

馬場辰猪自傳

馬　場　孤　蝶

明治十三四年から同じく十八年に渉る憲政期成運動勃興の時代に於て、民間の志士として、その操持に於て、その學殖に於て、その雄辯に於て、一頭地を挺んでて居るものとして、前途に多大の望を屬されて居た馬場辰猪は、十九年の初夏米國に遊び、二十一年十一月に、フイラデルフイアで三十九歳で客死したのであるが、僕の手元には、彼が十八年十月箱根で書いた英文の自傳が遺つてゐる。確に自傳ではあるのだが、三人稱で書いてある。記述に自由を得たいが爲めに、さういふ形式を執つたものであると思ふ。今まで公にしようと思はないことはなかたのであるが、一部に餘まりに忌憚なき筆鋒が表はれてゐるので、それ等の點に關する考慮もあつて、今日までさし控へてゐたのである。而るに、大分年月も經過したのだから、もうそれ等の遠慮にも及ぶまいと思うので、『改造』の主幹山本實彦君の慫慂にまかせて、左に必要な註を加へて譯出する。

原文には章は分けてないのであるが、始めに、彼の祖先、彼の生れ、彼の教育、彼の歐洲への旅、彼の歸朝、彼の歐洲への第二の旅、彼の第二の歸朝、彼の共存同衆との關係、彼の演説と講演と國內漫遊、彼の政黨との關係、彼の著書、彼と同時代の人々、日本に於ける彼の業績、第三回の外遊、米國にての講演、彼の政治に關する著作といふ風に、目錄らしいものが附いてゐる。で、左の譯文には、此の目錄に從つて章を分けることにする。

所で、此の自傳は日本に於ける彼の業績といふところまでしきや書いてないのであつて、十九年初夏米國へ渡つてから、それまでのところを推敲して、タイプライタアで浄書した際に、その後をも直きに書き續ける積りで、目錄にだけは、後の三項を書いて置いたものであらう。

前置きは此れだけにして、本文に取りかゝろ。

馬場辰猪傳

祖先

若き者の心は、成人の心に取つては極めて瑣細であるべきやうな事柄の影響を受けたり、さういふ影響の爲めに、その將來の行路が左右さるゝに至り勝ちなものである。馬場辰猪の場合に於ても、さういふ影響が、善惡はとにかく、彼の若き心に強い效果を起したらしく思はれる。

勇士としてその事績を日本の歴史に載せられた祖先の功勳の物語に激勵されて、さういふ境遇の下にゐるのでなかつたならば、商業家とか科學者とかになつたかも知れなかつたその若者は、抵抗し難く政治の領域へと導かれて、自分の國の爲めに何事かをなしたいといふ志望を以つて心を滿たさるゝに至つたのだ。故に、玆には先づ彼の祖先と、彼の名の因つて來れる彼の家のことを語るのが宜しいことになる。

彼の家はげに多くの勇士が相競うて武名を擧げんとして、華々しき功名手柄を表はした元龜、天正時代に起つてゐる。

彼の姓が示す如く、彼の家は甲州から來つた。馬場美濃守がその主君たる名將武田信玄に仕へて顯著なる勳功のあつたのは、その甲斐の國に於てのことである。馬場氏房が幾々の戰場に於て表はした度々の勇武の事績をこゝに擧げるの要はない。武田信玄が死ぬると、その子の若き勝頼が繼いだのであるが、此人は勇氣は餘りあつたけれども、政廳に於ても、戰場に於ても、經驗を缺いてゐた。此の若き主君は　危機に臨んで忠節を失はず常に老練を以つて事に當るのであつた老將馬場氏房の度度の諫言を容れなかつたらしい。賢き父が愚なる子によつて繼がれることが屡あるのは、不幸にも事實である。此に於て、當時菊川の（註遠州）城守であつた馬場氏房は、直ちに自分の若い主君の運命を見てしまつて、自分等の共通の敵に對して、最後の血戰をしようと決心した。その機會は長篠の戰に於て來つたのだ。氏房はその戰場で奮鬪して斃れた。時に年六十四であつた。

氏房の若き主君勝頼の運命は史上に語られて居る。天目山の敗戰の結果は吾々の善く知るところである。

馬場氏房は一子氏勝を遺したが、氏勝は敵に追はれて、その生國から逃竄せざるを得なかつたらしく見える。氏勝は家鄕を出づるに當つて、有名な書家古法眼（註狩野元信）の名畫と綱丸といふ劍とを携さへ去つた　繪は、田景を後にして、牧童が草束を兩側に負つた牛の背に跨がつて、笛を吹いて居る圖である。此の繪も劍も共に現存してゐて、祖先のその他の貴重な

る遺物と共に、東京の馬場辰猪の家に大切に保存せられて居る。

註――斯うは書いてあるけれども、此の所謂る家寶は二つとも吾々の家には今はない。明治十一年に、僕の父母が僕と僕の姪（兄源八郎の女）をつれて、東京へ出て來る時に、父はもう一度生國の土佐へ引き返へす積りであつたものと見え、大切なものは、それ〴〵親戚へ預け、古法眼の繪なるものは、母の里方葛目氏に保管を托したのであつたが、間もなく伯父悦次郎が死ぬると共に、後は女ばかりであつたので、その繪も古道具屋へでもガラクタと共に賣られてしまつたものと見えて、幾ら探しても出て來ない。筕丸の劍の方は、同姓馬場信行といふ老人の高知の家に今も尙預けてある。これは傳來が怪しいものだ。その劍に添うて居る書類に據ると、多分文政頃ではなかつたらうかと思ふのだが、遠緣の者か何かゞ、江戸の日陰町の刀屋で、中ごに馬場美濃守所持と刻んである刀を見付けて、僕の祖父の爲めに買つて來てくれたものらしい。祖父はその刀が少しも名作でないのを見て、これは反つて面白いと云つて、筕丸と命名して、保存したものらしい。牧童の繪は見ぬことだから、何とも云へぬが、刀の方はさういふ風で、さう重ずべきものではないやうだ。辰猪は家の書類などは餘り見ずに、此の自傳を書いたので、少くとも筕丸には勿體をつけ過ぎてしまつたのだ。

僕の家には、右の外もう一つ面白い寶物がある。それは、馬場美濃守の鎧と稱するもので、これも前記の信行翁の家に預けてある。さういふ鎧が手に入つたのは、祖父の時代よりは前かも知れぬと思ふ。高知は町家（こうか）が家中町を挾んで東の部分と西の部分にあつて、西の方を上（かみ）町と云ひ、東を下（しも）町と云つてゐたのであるが、そのかみ町の町人が「わたしのうちの庫に古い鎧があるのだが、夜中になると庫が鳴り渡つて恐しくつて、堪まらぬ。鎧は馬場美濃守の鎧だと云ふことだから、貴家へさし上げ度い」と、僕の家へ云ひ込んで來た。それで、とにかく、貰ひ受けて、祖先の祭典の時には飾ることにしたといふのだ。一昨年の夏、歸省した時に、その鎧を見たが、作の式はなるほど桶皮胴で少くとも戰國時代のものらしく、草摺の附根の裏位の胴のところに、横に朱漆（うるし）で馬場氏と書いてある。けれども、その字體などが何うも餘り古いものらしくは考へられなかつた。祖父も父もさういふ家寶には餘り信を置いてゐなかつたらしいのだから、刀も鎧も信行翁に預けたまゝにしてあるのだ。

（二）

馬場氏勝は香宗我部親泰の家に投じた。親泰は當時土佐の國の豪族の一の首長であつた。氏勝は香宗我部家の軍師になつた。親泰は氏勝の献策を用ゐて敵に對して勝利を得たことが一再でなかつた。當時では、甲州の軍學が一番進んでゐたのであらう。故に、故人更になき遠國の客であるに拘らず、氏勝は親泰の旗下で重要な位地に就くを得たのであつた。氏勝の墓は今日も尚土佐の國に存してゐる。

長宗我部元親が土佐を一統するや、氏勝は元親の旗下に屬して勤仕した。けれども、我史上で善く知られて居る如く、長宗我部家は徳川の敵を助けたといふので、將軍家康から厳しく罰せられた。土佐全國は沒收されて山内家に與へられた。

註――前に云つた通り、祖先のことを書くに當つて、辰猪は家の記録を更に參照しなかつたらしい。尤も、吾々の家の記録と云つたところで、源右衛門氏信が享保年間に作つたものから始まるのであるから、それ以前のことは何の據るべきものもない譯であるのだが、それでも系圖及び家記を此に擧げる義務があらうと思ふ。

美濃守の名は史上では信房となつてゐるかと思ふのだが、その信の字は信玄から貰つた名であるので、家の方の名は氏房であらうとは思はるゝが、僕の家の記録では美濃守氏勝となつてゐる。辰猪は此の自傳のなかでは、氏勝を美濃守の子平兵衛の名だと記憶してゐるらしいのだけれども、吾々の家の記録では平兵衛信義となつてゐる。

平兵衛信義が香宗我部氏に投じたのは、その家が甲斐源氏であつたからだとも傳へられる。土佐には長宗我部元親が全國を一統するまでには、郡司若しくはその他の豪族が幾つもあつた。元親の家も元よりその一つであつた。宗我部家は二つあつて、長岡郡にある者を長宗我部と云つて、秦氏であり、香我美郡に在る者を香宗我部と云ひ、これが甲斐源氏(武田氏)であつたといふのだ。

後者の方は、元親の時代には、家衰へて、その家長爲景は元親の弟親泰を迎へて、家を繼がしめた。海軍機關中將武田秀雄氏の家は香宗我部氏の末だといふのだが、親泰以前の事歴は少しも傳はつてゐないといふことである。

源右衛門氏信自記の系圖には平兵衛のことを左の如く記してある。

『信義（前名源介 後平兵衛） 父氏勝討死、武田家滅絶之後、土州香我美郡香宗郷に牢落す。國士六十人の一となり、郡司香宗我部親泰及び其の子親氏に屬す。慶長五庚子、國主秦盛親國を襲うに至つて、土庶所を失ふ。平兵衛亦中之村に浪居す。同七年壬辰

病を以つて卒す。同郷土居村寶鏡寺香宗我部氏世々の墓側に葬る。二子、一男一女あり』(原文漢文)

此れよりして後、馬場辰猪の祖先は三代の間、處士即ち浪人で暮らしてゐたらしい。それで遂に貧困に陥つたらしい。そのうちの一人が晩食をしてゐた時に、その妻が家人を饑餓より救はんが爲めには、何等かの職を求めざるべからざることを告げた。その祖先の一人は、妻の言葉に感じて、食を終はらずして、直ちに立つて、土州侯の長宰山内下總の家へ行つて、その秘書の位地を得た。

註此れは平兵衛の孫信重のことであらうと思ふのだが、家記には平兵衛の後は左の如くなつてゐる。

『信直童名辰之介 後名源介、次右衛門 幼孩雙親を喪ひ又遺族無し。直ちに高知城下に來つて、父の故舊島崎某に寓す。某その氏族凡ならず、孤弱託するなきを憐れみ、撫育すること子の如し。常に己の子をしてこれに兄事せしむ。後別に舍館を營みて居る。終に仕へず。寛文七丁未年閏二月二十六日病卒。城南潮江山に葬むる。享年七十六也。市村氏の女を娶る。六子あり、三男三女』

『信勝童名次郎介 長名甚兵衛 元和七辛酉生る。亦仕へず。天和元年辛酉十二月二十一日病卒。年六十一。信直の墓の側に葬る。子あり。二』

信勝は信重の兄である。

『信重童名三平、山三郎、 後改小兵衛、傳兵衛、次右衛門 寛永二乙丑生る。明暦元乙未年出でて忠義公に仕へ、忠豐公、豐昌公、豐房公、四代の國君に歴仕す、凡五十二年。既に老て、外孫義介を以て、代り仕ふ。寶永二乙酉七月五日、天年を以て終はる。壽八十一。潮江山に葬むる。改名泰光院長譽源壽信士。井上氏の女を娶る。五子あり、四女一男』

信重は出でて國侯に仕へたのだが、元より正士ではなかつたので、その俸給は極めて少なかつた。氏信の遺した記録に依るに、二人扶知七石に過ぎなかつたといふ。尚他の記録よれば、浦奉行を勤めたとあるけれども、その浦奉行なる職は下士を以つて充つるものであつたらしい。氏信の手記によるに、氏信は父信重の命によつて、八歳より學問の師に就いたとあるのだから、信重は多少文字ある男であつたらしい。

信重には弟があつた。次の如くである。

『信辰童名五郎八 後名左近右衛門 寛永十癸酉生る。此れ又仕へず。年五十、天和二年壬戌三月十一日病卒。信直の墓の側に葬むる。子なし。』

(三)

けれども、その子の一人が、此の如き卑賤な位地にあるを憤ほり、その職を辭して書の術に達せんが爲めに京都へ赴いた。即ち彼は書家として名を擧げようと思たのであつた。東洋の國國では書の術は、畫の術と同等である。いや、それは書方が畫よりも重んぜられてゐるのだ。天稱天正の直ぐ後、時勢が漸く靜謐になつて來るに從つて、書法に熟達したる人士を得ることが必要になつた。しかのみならず、當時の公文書は、丁度歐洲の昔に於ける羅甸語の如く、特殊の筆法を以つて書かれるのであつた。辰猪の祖先の一人が此の術に熟達せんと決心し、而して、その男のその後の榮達が目覺ましかつたのは、疑ひもなく上に云へるが如き理由によるものと思ふ。

　此の男は若き時辰之介と呼ばれたが、書家として名をなすに至つて、雲山若くは一梯と號した。雲山は意志の强い、天分多き男であつて、書法の學得に全力を擧げたらしく思はるゝ。やがてその名聲は大に揚がり、その書は師持明院卿の推薦によつて當時の皇帝に捧げられた。その時代に於てはそれが非常な名譽とされたのであつた。雲山の名聲は諸州に廣がつて、遂に藝州侯から、五百石の年收を以つて、侍に召し抱へようといふ申し込みがあるに至つた。其所で、土佐の藩廳は始めて雲山の令名を知つたので、自分の國で生れたその名士を手放して他の國の侍とならしむることを好まならかつた。が、さればと云つて、自分の國で重く用ゐようともしなかつた。それで、一梯は土佐の國に於て三人扶持の下級の侍にされたのみであつた。けれども、此の一梯なる男は、理財の道に長けてゐたものと見え、種種の方法によつて、資産を增した。彼は、自分だけの企畫によつて得た二百石の年收を以つて、それに相當する侍にして呉れと、藩廳に請うた。此の請願は藩廳に取つては、何等の支出を要するものではないので、直ぐに聽許された。此の如くして、一梯は、二百石の年收と格式を有する土佐藩の侍となつたのである。

註辰猪自傳の此の條下は割り合ひに間違つてゐない。前に引用した吾々の家の系圖が、一梯の自筆になつたものであることは、上記の通りであるが、それは一梯自身及び子女のことにまで及んでゐる。一梯自身のは次の事如くである。

「氏信童名辰之介、彥市、彌之介後名源右衞門　萬治元戊戌二月十四日生る。

國君豐昌公御代召し出され、奉行所の簿となる、七年、然して、その學業未だ成らず、且つ士の列に非ずして、食祿するを憤る。茲に於て貞享二年乙丑、致仕して、諸生に教授す。

力學十五年。しば〳〵京師に到り、淺見重次郎絅齋先生に就て學び、且つ持明院前大納言基時卿に謁し、入木道の祕溢傳授及び基時卿御自毫の證書を得たり。元祿十三庚辰、髮を總髮に束ねて、一稱と改名すること十餘歳。正德元辛卯十二月二十二日、國君豐隆公の命を以つて再び召し出され、士の列となり、俸を賜ふ。同月二十八日豐隆公に拜謁。時に命に依り、總髮を止め、復た舊名源右衛門に改む』

一稱に關する記錄は、この外に、同人が晩年に子等に口授して筆記せしめたらしい自傳のやうなものが殘つてゐる。

『家君の御指圖にて、八歳より長泉寺山譽、九歳より芝田三友を師とし、小學、四書、其後五經、文選以下の講書の師、諸講釋の師數多、許し等其外、先生具さに記るすに暇あらず、又加ふるに、紙筆を好み、屋代太左衛門元久大軒先生を師とし、且暮苦しみ學びて、敢て一日も無益に日を費し、時刻を移さず、稀にも遊興の場所に到らず、近隣たりといへども故なくしては出でず、或は紙帳の中に四年の暑寒を送り、或は房事を停止すること三年。血判神文を以つて師に投じ、辛苦世人の識るところ也』

藩廳の會所へ召し出されて、勘定頭配下の書記を命ぜられたのは、延寶元年十一月十六日、二人扶持に七石の俸を得ることになつたとある。氏信十七歳の時である

『某儀內々の所存は、何分京都へ罷り登り、學文、筆學修行一任、精力を盡くしたく思ひ、その節先學の在京人のかたへ、一ヶ年在京の入り目尋ねに遣はし候らへば、銀六百匁程入る積りの由申す趣きにつき、爾來懇志の衆を始じめ、心安き方に相談を遂げ候らへば、いづれも一ヶ年分などは調のへ給はるべきの樣子につき、是非上京と存ずる時節、右の通りに、上(かみ)より召し出され候、此の時御斷りも遂げたき所存に候らへども、家君御俸祿二人扶持に七石を以つて、家門我等共に七人づゝ御養育、御渡世年々過分不足につき、御借り米御借り銀だん〳〵重なり、今暫くも此の分にて御座なされ候ては、御身上の行く末危き程の躰、若し左樣も候ふて、御身分の害にもならせられ候ては、我等何の學びし遂げ候ふても、なり立つべきやうこれなきにつき、止むを得ず御請け申し、七ヶ年に及び、御用人相勤むるなり』

『右の所存に候故、何分我等へ下さるゝ俸祿を以つて、家君の御借り銀米拂ひ取り、右の借り物務め切り次第に、兎角御斷りを遂げ、一度所願を達すべきと存じ入り、これに依つて總じて身の衣類諸道具を調のへず、表裏とも地紙子の着物に手織りの木綿袴、寒冬にも一日も足袋着けず、雪駄も着けたる

ことなく、鬢髪も手づから束ねて、御奉公出勤の後は、七ケ年一日の缺席せず、その間夜も寢ざる程に苦しみ學び、在江戸の節、元日年頭、御目見えに、上着木綿の袷にて相勤むるもの百餘人のうちに我等一人なれば、人々は底心は知らずして、きたなきもの、しわき者とのゝしる人も多く、人魂の人々は我等にその由告ぐる人もありけれど、心の底は語られず、聞きそらして、辛苦に堪忍し果して、右の御借り物七ケ年に本利とも速に皆濟を遂げ、これに依つて、貞享二乙丑年、御扶持切符指し上げ、御斷りを遂げ、浪人となる事』

『貞享元年甲子年、江戸御用へ仰せ付けられ、三月上旬御供達にて、東海道故なし。在江戸毎日御廣間へ出勤也。暇日には書物屋、唐書屋、古筆屋などへ行き、さまぐ＼唐書、倭書、古筆ども借り寄せ、晝夜これを寫す。深尾四郎右衛門、山崎半兵衛など、此の取り持ちに預かり、則今有る大觀帖三冊、聚賢堂三冊、六朝法書三冊、東武帖十卷等、皆此の在江戸中の夜分に自宅の寫也』

『幼年よりの所意、人生侍ならざる身の奉勤は甲斐なく卑下なる事を耻ぢ、即ち今上より召し出さるゝと雖も不快に存じ、且つ出勤暇なきによつて、勸學の餘力少きことを患ひ、家君信重公へ此の由を申し上げ、御同心について、願書を以つて、御斷りを遂げ、俸祿を辭し、致仕す。猶心に思ふは、一生のうち侍とならず、馬に腰掛る身とならずば、二たび仕へまじ、若し本意を遂げずば、浪人の身にて藝になりとも名を殘し、身を終はらんと思ひ極めり』

氏信の辭表は、學問修行の爲め京都へ出たいから、職を解いて貰らひ度いといふ意味であつたのであるが、支配頭の孕石小右衛門が、唯の辭職でも聽許は何うだかと思はれる位なんだから、まして京都へ遊學する爲めなどゝとあつては、なかなか聽許されないかも知れない。先づ辭職だけのことにして置き、浪人となつて、二三年もしたところで、町方の支配人へ云ひ込んで、京都へ出ることにするのが、策の最も得たるものであらうといふ意見であつたので、氏信は致仕してから直ぐに、家塾を開いた。

『隣所久萬屋左近衛門諫に依つて、某存じ候も、粉骨を盡し、學文、筆學修行精出し、幸ひを得、本意を達すとも、御國例の事に候らへば、能々大幸を得候ふとも、御扶持ならでは下されまじく、近年公儀御掟に、郷侍領知百石分限以上の面々は組入仰せ付けらるべきの由也、就ては、何分領地にても買ひ集め、某所意を達せずば、子どもなりとも郷侍にして、領知を以つてなりとも、一度侍に組入りも致させたく思ひ立つ

事』

氏信は、貞享二年から元祿十三年まで十六年間高知で、家塾を經營しながら、理財に力めたので、可なりの產を蓄へたらしく思はるゝ。いよ／＼京都へ遊學したのは元祿十三年、卽ち、年四十三の時であつた。

『元祿十三年庚辰年上京、淺見重次郎先生に謁し、門に入り、儒學弟子となる。在京中每日講習に出る也』

『持明院大納言基時卿へ謁見、御弟子となる。是又在京中每座出勤、筆學御指引を得、御秘術御傳法殘りなく御傳授、御自筆の御判物を添へて、之を頂戴す』

『同年下國。十一月惣髮になり、名を稱と改め、帶刀幷びに爾來敎授の弟子指引も止めて、市町に閑居す』

『辰猪自傳』には、一稱の再度の勤仕の時の俸が三人扶持であつたとあるけれども、これは五人扶持であつた。しかし、俸はその如く少なかつたけれども、最初の時とは違つて、準士ではなくして、とにかく格式だけは本當の士分待遇（留守居組）であつたらうと思ふ。二百石の侍になつたのは一稱の生時ではなかつた。一稱は享保十二年八月五日に死んだ。系圖には一稱は子のことを次のやうに書いてゐる。

『氏幹童名十太郎、理髮名重太郎 後公兒の諱を避けて丈太郎に改む　元祿八乙亥十月十八日生る。正德三癸巳總領として國君豐隆公に拜謁す』

『氏忠童名十次郎 後名重次郎、丈次郎　元祿十六癸未二月八日生』

『氏義　童名十三郎　寶永二乙酉十月十八日生一

『氏與　童名十四郎　享保三戊戌十月二十日生る』

所で、三男の十三郎は、早く死んだらしい。一稱は、長子氏幹に貳百石に相當する地面、次子氏忠に百石に相當する地面を遺し、氏忠の方はその遺產を以つて養子に行つても構はんといふであつたので、國澤森右衞門長幸の家を續いで、平內と改名した。

氏幹は、享保十二年九月二十八日父の家を繼いで、三人扶持を貰つた。翌十三年九日十四日に病死。

其所で、四男十四郎が家を繼いで、源右衞門と改名した。格式は父兄の時より一段下げられて留守居組末子列といふのであつたが、享保十八年に、所有の新田貳百石分（高岡郡窪川村大井野鄕であらう）を知行地に引直しの許可が與へられて、留守居組に進むことができ、こゝでやう／＼父一稱氏信以來の本士になる宿望が達せれられたのである。

氏信は晩年氏幹と氏忠をつれて、京師に出で、持明院中將基雄より二子に對して、入木道の允可を得た。氏與成人に及んで、氏忠から同じ允可を得た。氏與は綠山と號して、藩中に

於ては、書家として少しくは名があつたらしい。

氏忠は幕府の師範村松四兵衛に就て馬術の允可を得た。父氏信が勤檢身を持したに反し、極めて金使ひが荒かつたらしい。氏與が家を繼いだ時は極めて幼少であつたので、氏忠が後見したのであるが、氏忠は生家の財産まで費消してしまつて、馬場家には、前記の大井野郷の知行地、實收百二三十石位が殘つたのみになつた。

氏與は寛政九年十月六日に死んだ。

（四）

その後（氏信以後）の代に就ては、馬場源馬に至るまでは、別に此に云ふべき程の事はない。源馬は多能の男であつて、土佐の藩廳へは屢重要なる獻策をなした。彼は書に於ても、畫に於ても、優れた天賦を持つてゐた。彼の書も畫も東京の馬場家に保存されて居る。十七歳の時、藩廳の命によつて、軍事に關する意見書を重役等に提出した。さういふ風にして、源馬は土佐の藩政に關し口頭及び書面で論議し始めた。彼の建言は當時土佐藩の要路にあつた人々からは幾分嫌忌されたところもあつたらしい。三十五歳にして、始めて用ゐられて勘定奉行即ち藩廳の計算係長となつて、忠實にその職を勤めた。その後、米國の軍艦が浦賀に來るに至つて、土佐の藩廳は海防の用意の爲めに、砲を鑄造せざるを得ざることゝなつた。源馬は大砲鑄造の主任となつた。源馬の管理の下に鑄造された砲は近年まで遺つてゐた。彼は此の役に就た時は五十七歳であつた。六十三歳の時、彼は納戸役即ち藩公世子の傅となつて、江戸に來つた。一年の後、土佐へ歸つて、無役の士となつて暮した。六十五歳で、調べ役即ち檢査役、文武館即ち文學及び軍學の學校の小目付（幹事）となつた。源馬は六十七歳で死んだ。彼は優れたる弓術家であり、尚鐵製の甲冑を造ることに巧みであつた。此の技術は日本に於ては大なる藝能とされてゐたのである。源馬の作物の幾分が馬場家に保存されてゐる。

註——此れ等の記述によれば、辰猪は祖父源馬の人となりには太しく傾倒してゐたることは明らかであるが、僕からこれを見ても、祖父源馬の遺傳及び感化は可なり多く辰猪に及んで居ると思ふ。源馬は學者ではなかつたけれども、博く讀書してゐた。辰猪の博く學ばんと心がけてゐたのは、祖父からの感化とも云へるであらう。源馬は極めて多能な男であつた。彼にして、畫なり、書なり、金工なり、若し專門にその道を學んだのであつたら、必らずその道に於て名を成し得たであつたらうと思ふ。辰猪は父來八の如くは多能ではなかつたけ

れども、それでも可なり多趣味であつた。此の多趣味であつたことゝ、武器に對する嗜好の深かつた點とは、祖父源馬の感化だと云つて宜しからうと思ふ。源馬は、所謂る器用なる人の常例に反して、極めて雄辯であつたといふ。當時では藩中有數の侃諤の士であつたと傳へられてゐる。辰猪は恐らくは幼時より辯舌に雄なることを無益なことゝ思ふやうな雰圍氣のうちには育たなかつたであらう。

　源馬の人物に就て註することの必要があるのは論はないが、編者としては、源馬の金工の技術の由來するところをも、序に述べ度いと思ふ。上來記し來つた通り、書に關する傳統、學問に關する傳來が、馬場の家にあつたことは、讀者の首肯せられるところであらうが、金工に關する傳來は少しもなかりさうに思はれる。ところが家記に據ると、さういふ傳來も源馬の先代より始まつたものであることが知り得られるのだ。

　源馬は氏興の孫であるのだから、此所では氏興の子源助氏綱の事績を記さざるを得ない。

　氏綱の事は、源馬の記する處によれば、左の如くである。

『氏綱 前名民之助、後改源助 美濃右衛門 氏興の長子なり、寶暦十一年辛巳初めて君に謁す。寛政四年壬子仁井田窪川郷在役及び大野見郷作配役となる。同六年甲寅御船倉役となる。命に因つて、家族を仁井田の官舍に移す。（案するに前の仁井田が高岡郡であるとは勿論であるが、後の仁井田は長岡郡卽ち高知市外浦戸灣口の仁井田であらうと思ふ。）同九年丁巳父の格祿を給せらる。十年戊午御藏奉行及び代官頭となる。同十二年之を免ぜらる。享和元年乙酉當時仁井田、窪川大野見、米之川作配となる。同二年丙戌御屋從格に進められ、御作事奉行となる。文化三年丙寅江府上御邸造立、命に因つて江戸に至る。之より先、藤並宮（藩祖山内一豐を祭つた神社）御造營を以つて、功成つて、屢褒金を給せらる。同四年丁卯十月十八日病を以つて死す。潮江山に葬むる。谷氏の女を娶る。一男、二女あり』

之に依つて見るも、氏綱は江戸に於ける藩邸及藩社藤並宮の建築を監督するといふ風で、可なり器用な男であつたことは明であるが、今僕の家に殘つて居る書類によるに、氏綱は楷書を書くことを大に學んだやうである。淦水若くは馬綱大紀の署名で書いたものが少し遺つてゐる。

　何時頃からのことであるかは、何等の記錄もないので分らぬが、また何ういふ風にして學んだのだかも分らぬが、氏綱は銅印を鑄ることをやり出した。印譜及び文書によると、可なり諸方の人々の爲めに、印を鑄てやつたことが知れる。當時江戸での書道の大家であつた東江源鱗（澤田氏）や法眼であ

つた狩野洞春美信の印を鑄た。而かも後者のためには可なり澤山の印を鑄たやうである。美信の仲介で、阿部伊勢守の爲めに印を鑄たのだが、その時の美信の手簡左の如きものが僕の家に遺つてゐる。但し讀みよくする爲めに、捨て假名を加へる。

『正月二十三日御日附の貴書相屆き、忝く拜見仕候、先づ以つて其御地貴家御揃ひ彌御安泰御勤めなされ、目出度存候、此方野拙無事罷有候、先づ御禮の義申上候、奉願候銅印の義少々御勤役中の手透き御座候に付き、則御出來被下、貳箱御差越し慥に落手、御封の儘直ちに阿部伊勢守殿へ持參仕り、御直々御渡申候、御自身御開封にて拜見、扨々御宜敷御出來、唐物の通りにて、總體御出來殘る所無く、御眼を驚かせられ、御感心にて御座候、御嫡子備中守殿も拜見、殊の外御懇望の趣に御座候、殊の外御くは敷御細工故なか／＼早速出來難き旨申上候、御註文可申上候間、御序の節御細工下さるべく候、伊勢守殿御自畫は御素人業にこれなく、至つて御見事に御座候、何方にても人々能く存じ候所に候、御賴み申候御細工の御印多分御押成さるべく候、何にても御好みの御繪樣仰せ聞けらるべく候、早速出來候やう取り計らひ申すべく候、銅印御禮に何ぞ進ぜられ度き旨、野拙に取り計らひ呉れ候やうにとの御內意に御座候、何れ承り合はせ申すべくと御挨拶申置候、委細は又兵衞樣迄申上候間、御遠慮なく何にても仰せ聞けらるべく願ひ奉り候、野拙に於ては大慶仕候、且私へ下され候一箱貳つ、扨々見事なる義にて、阿部公へも御目に懸け申候、日々私宅へ參り候人々も拜見、感入申候、此方御釜師名越彌五郎金物細工の江戸一人にて御座候、先達つて申付け候らへども、細き文字は鑄物にては鑄切れ申候とて、彫上げに調へ候、御慰に此の如くに御座候（原文此邊に印影大小四つ程あり）。御細工の鑄立てのまゝは江戸表にては出來難く、眼を驚かし何れも感心申候、今一つ殘り居り候分も御細工下され候旨、重疊忝く奉存候、御序の節奉願候、何れも永寶に仕候、何ぞ御厚禮申上度く、後より差上申すべく候、

御尊父樣へ別書上げ申さず候、何分宜敷やう仰せられ下さるべく奉願候、兼て書畫御樂みなされ候旨承知仕候、書家人に心安きが御座候間、御註文下され候はば御調へ申すべく候、愚畫も何にても御入用候はば御遠慮なく仰せ聞けらるべく候待候、貴答申上度愚筆取り急ぎ亂書の段御高免下さるべく候、萬づ重便と申殘候、恐惶謹言

三月卅日　　狩野法眼

馬場源助殿

人々御中

猶々隨分御安全成さん、御自愛成さるべく候』此の手紙は何時頃のものだか分らぬが、氏綱の父氏興が生存中のことであるから、大凡寛政年間のことだと見て宜しからうと思ふ。美信の筆になる蘭亭曲水宴の繪卷が今も尚僕の家に遺つてゐる。澤田東江が印を賴んで來た書簡もあるが、これは略して置く。氏綱は『鑄物の法』といふ著を遺した。自筆で振り名まで附いてゐるのだから、開版する考へ位はあつたかと思はるゝ。

で、かふいふ風に、源助が、鑄物を熱心にやつたので、その感化がその子源馬氏高に及んで、氏高がさまざまの金屬細工をなすに至つたものと見て宜しからうと思ふ。

氏綱は手先きの器用な男であつたらしく、取り崩づしのできるやうになつた精巧な小細工の鳥籠なども家に遺したと、僕の母が話した。

氏高の手工に於ける所謂る器用は確にその父氏綱から傳はつたものであらう。

氏綱の閱歷に關しては、彼自ら左の如き記錄を遺してゐる。

『氏高（前名楠彌 後改源馬）氏綱の長子なり、享和元年辛酉初めて君に拜謁す。文化五年戊辰父の遺跡を給せられ、格式を御留守居組に反へさる。文政九年（丙戌）鄕士頭となる。同十二年（己丑）之を退けらる。天保十年（巳亥）勘定奉行及び御軍備御用兼帶となる。御扈從格に進めらる。同十三年（壬寅）之を免ぜられ、御留守組となる』

氏富が大砲鑄造の主任になつたのは、その後であり、藩校文武館の調役となり、小目付となり、世子山內豐範の傳となつたのは、その後であらうと思はるゝ。

氏高は極めて侃諤の士であつたと傳へられ、忌憚なき直言の建議の爲め、叱譴を蒙むること生涯のうち十七度であつたといふ。時々の勤役の年月の長からぬのも、思ふに直言正議の爲めに要路に忌まれた爲めであらうと思はるゝ。

或る時、山內容堂の納戶役が欠けた。或る者が、後任に『馬場源馬は如何で』と云ふと、容堂は笑つて、『イヤ、あの男は俺の納戶役には善過ぎるから、駄目だ』と答へたと傳へられる。

藩の要路は氏高の直言には可なり惱まされたらしく思はれるに拘らず、時々可なり重要な役に就かしたのを見ると、當時の要路決してその人に乏しくなかつたのであらうと考へられる。殊に、氏高の如き直言の士を擧げて、世子豐範の侍傳

たらしめたのは面白い事實だと思ふ。

氏高は、木製の手銃の如き形のもの丶筒口のところへ弓を取りつけ、引きがねへ弦を引て置き、弦を放つと共に玉の出るものを作り、これを弩弓となづけて、豐範に與へたが、豐範はそれで倉の屋根に居る鳩を擊つた。命中する毎に氏高は聲を擧げて豐範をほめた。それを見てゐた人々は、氏高のほめる樣子が如何にも親し氣で、まるで自分の孫でもほめるやうな風に見えるのを面白がつたと傳へられてゐる。

土方直行（佐平）翁は近頃まで生存してゐたのだが、翁は少年の時分氏高に逢つたことがあると云つてゐた。土佐の佐川は家老深尾氏の釆地であつて、その旗下の士は騎馬と云つて、本藩の士は幾分これを輕視してゐた。けれども氏高は佐川の士を輕視せず、全く對等の交際をした。『あなたのおぢいさんは眼中貴賤はなかつた』と、直行翁が話した。

氏高は晩年になつて、炬燵にあたりながら、家人にいろいろ時世の話などをしたが、『これからもう遠からぬうちさむらひなどといふものはなくなつてしまうであらう。しかし、百姓はなくなる氣遣ひはない。ところが、吾々一家は皆鍛治ができるのだから、みんなして鋤や鍬を打つて賣れば、食うだけのことはできる』と云つて、笑つて話したとは、僕の母の物語りであつたが、それは文久元年頃のことであつたのであらう。

氏高は武藝としては、弓術に秀で丶ゐた。師家ではなかつたけれども、藩中で斯道の大家をもつて遇されてゐた。晩年には馬術を好んで、よく馬を乘つた。江戸勤番中の日記などには、馬に乘ることを日課にしたやうに書いてある。僕の家には、現に馬に乘つた晩年の自畫像が遺つてゐる。

手工に於ては、氏高は驚くべく多能であつた。刀劍は鍛はなかつたが、鍔、緣、頭、こじりといふやうな刀劍附屬品の製作は、殆ど專門の名工の壘を摩するばかりに巧みであつたと傳へられる。僕の家には、氏高作の鍛ひがねの甲冑が遺つてゐるが、その胸板に打ち出した鬼の面の如きは、古雅遒勁如何にも武士の作品らしい趣が明である。傳によれば、さういふ胸板は掛け換へが四枚あるべきものだといふのだが、一枚は何うしたことだか誰かにやつてしまつたものと見えて、三枚だけ僕の叔父の嗣子馬場信次郎（神戸市外住）のもとに保存されてゐる。

氏高のその他の作品で、吾々の家に遺つてゐるものでは、僕の家に古雅な龍の形を鑄つた鍔、蝸牛を鑄つた頭、不動の目貫があり、前記馬場信次郎の家に、龍を象嵌した頭（此れ

は僕の父來八氏明作の虎を象嵌した縁と對をなしてゐるもの)、不動の名貫がある位なものであつて、作品の多くは他から頼まれて作つて與へたものであつたやうである。

土方直行翁も少年の時に、氏高に風の神が袋を絞つて風を出して居る形を象嵌した目貫か、頭か、それと今一點造つて貰つたが、何時の間にかなくしてしまつたと云つてゐた。

從兄虎市(信次郎の兄——神戸市外住)は嘗て氏高の作品のことに就て、次のやうな話をした。

佐川の騎馬に武藤といふ軍學者があつたが、氏高はその人から鍔か目貫かを造くることを頼まれてゐながら、なか〳〵拵らへずに、可なり長くそのまゝになつてゐた。ところが、或る日、武藤氏の息子の名で手紙が來た。それは、父が大病で何うも六づかしいやうだが、何うか先年お願ひしたお細工物を拜見したいとしきりにいふ、何うであらう、お拵えくださるのをひどく樂みにしてゐたことであるのだから、存生中に間に合ふやうにお作りは願へまいかといふ文面であつた。氏高は、それでは何うしても約束を果たさなければならぬと云つて、大急ぎで拵らへあげて、佐川へ送つてやつたところが、向ふからも、これでおやぢも安心して死ねますといふやうな丁寧な禮狀が來たので、氏高も滿足に思つてゐた。するうちに、或る日、或る心安い佐川の士が氏高のところへ尋ねて來て、話の序に『流石のあなたも武藤の軍學にはやられましたなア』と云つた。『それは、何ういふことなのだ』と氏高がきくと、その客は、武藤氏は氏高が容易に作をしないことを知つてゐて、少し待つてみてから、子息に自分が大病だといふ虚の手紙を書かせて、それで氏高を驚かして目的を達したのだと、話した。氏高も成る程それはまんまと一杯喰はされたと云つて、大に笑つた。

或る人は又次のやうな話を僕にしてくれた。來八氏明も幾分その父氏高の衣鉢を傳へて金工の細工をしたのだが、氏明が他から頼まれたものを拵らへてゐると、氏高が傍へ來て見てゐて、『イヤ、それはそんなことをしてゐては駄目だ、何れ俺によこせと云つて、氏高自身で手早く作りあげて、ソレ、かうすればいゝのだ』と、氏明に渡すことが度々であつた。それで、人々は、『源馬さんの作を得やうとするには、直ちに源馬さんの作を所望するより、來八さんの作を所望するのが、源馬さんの作を得るに近路だ』と云つてゐた。

氏高は豪膽嚴正な男であつたが、情に於ては深かつたらしく、若くして死んだ最初の妻の遺子氏明をひどく愛してゐたやうである。

氏高は書に於ても、畫に於ても、優に一家をなすに足る才能を持つてゐた。殊に書が見事であつた。今日でも、土佐では、源馬の書畫は聊かではあるが古物商間に市價を有してゐる。僕の家に、左の如き語の源馬の書の懸け物がある。語が自分の理想であつたのであらうと思ふのだが、表装まで自分でして、家に遺したものらしいのだ。

『大名不可久荷。大功不可久任。大權不可久執。大威不可久居』

大、不、可、久といふ幾度も繰返へされてゐる字をそれ〲一つ〱つちがつた形で書いてある。書としては、さういふところも得意の箇所であるのだらうと思ふ。

その外、氏高の畫稿が少し遺つてゐる。大抵孫源八郎や辰猪にかいて見せた歴史畫のやうなものであるが、いづれも筆力勁健なものである。

『田中青山伯傳』の巻首に武市瑞山の作と稱する武者繪が二枚寫眞版になつて載つてゐるのだが、その繪の説明になつて居る繪の上の書は、僕が見ると、何うしても氏高の書である。繪の方も何うも、氏高の作だと思ふ。瑞山の書畫よりはるかに老熟してゐる。あれは何うも所藏者の考へ違ひであるやうだ。

氏高は、砲の鑄造に於ても、自家の工夫を加へたと傳へられてゐる。土佐の考證家寺石正路氏著『土佐偉人傳』によるに、氏高は當時の砲の砲座が鐵であつたのを、その要なしとして木製にしてしまつたといふ

その砲座のことであらうと思ふのだが、僕の家に傳はるところによると、砲を推して行くのに便ずる爲めに、蜻蛉網の如き形のものを砲座へ取りつけた、蜻蛉網といふのは、短かい棒を二つ上の方を廣く底邊の方を狹くするやうな形にして、その底邊に近いところに二つ横木を入れて、その二本の棒を留め、その横木の各の中央へ穴をあけて、それへ長い柄をとほし、二本の棒のある間へ網を取りつけて、それで、蜻蛉を捉へるのである。つまりさういふ先が廣く開いた股になつてゐるやうなものを作つて、それで砲を推して行くやうにしたといふのだ。

時の人は左の如く唄つたといふのだ。

『馬源工夫の蜻蛉網、推しちよる
推しちよる』

辰猪が幼年の時分その唄を外で聞いて來て、『うちの唄を何うしてひとが唄うのだらうか』と云つて、母に問うた。幼年の辰猪には、自分の家の者のことを唄つた譯は、自分の家で

できたもので、從つて自分の家でのみ唄ふものだといふ風にしきや思はれなかつたのであらう。母はよく笑ひながらその話をした。

氏高は、文學的才能も可なりあつたらしく思はるゝ。晩年は、孫どもには昔話をして聞かした。種が盡きてしまふと、童話を創作して話したらしい。聞いた者どもの方は、創作とは知らずに居て、昔からある話だと思つて、他家へ行つて話して、始めて氏高の創作であつたことが分つたことが少くなかつたといふのだ。母の話では、僕の家には、お伽帳といふのがあつて、それに童話が可なり多く書き留めてあつたのだが、何時か紛失してしまつたといふ。若しそれが遺つてゐたのであつたら、そのなかから氏高作のお伽話を可なり多く發見することができただらうと思はれるのだ。

氏高は時々歌も作つた。歌としては決して優れたものではないことは明であるが、それでも、彼の氣魄なり、頓才の一端を窺うことができるのであつた。六十三歲の時、江戸への往返いづれかの場合に、美濃の赤坂を過ぎて、次のやうな、歌を詠じた。

『熊坂によはひは同じ我れは又た心赤坂德川の賊』

或る時藩士土居それがしの家で、人々が集つて酒を飲んでゐたが、夜が更け行くに從つて、大分醉ひ倒れる者ができて來た。そのうち、馬詰それがしの鼾がヒユー〳〵とまるで千鳥の鳴く聲のやうに聞るへと云ひ出した者があつた。すると氏高は直ぐ、

『馬詰の鼻は千鳥の鳴く聲に』

と云つた。それと同時に、磯部武右衛門といふのが、大欠伸か何かで眼をさました。氏高それを見るが否や、

『磯武寢覺めの土居の酒盛り』

と結んだので、一座こと〴〵く、その當意即妙に笑ひ崩づれた。

父高は、米艦浦賀入港後は、汽船の模型なども作つて、外國の機械に眼を向けてゐるらしかつた。土佐の古老間には、氏高は人間も何か機械によるならば、空中が飛べる筈だと云つて、鳥の翼の具合をしきりに調べてゐたといふことが、云ひ傳へられてゐた。

氏高は、攘夷說の盛な時分に『何うも西洋の方が諸種の點で進んでゐるらしいのだから、往昔唐へ人を遊學せしめたやうに、西洋へなるべく多く人をやつて、彼の學問技藝を學ばしたら、よろしいではないか』と、云つてゐたと、僕の父氏明が話したことがある。

要するに、源馬氏高は、多くの才を抱きながら、首都に遠き地に生れたが爲めに、且つ平和の時代に生涯を終はつてしまつたが爲めに、驥足を伸ぶるを得なかつた人々の一人であつたことは確である。辰猪が此翁の孫なることを誇りとしたのは至極道理だと思ふ。

氏高の歿年月は今一寸正確に云ひ得ないが、永久二年暮十月頃であつたらうと思ふ。

因みにいふ、土佐藩では、士分の階級を家老、中老、馬廻扈從格、留守居組、留守居組末子の五つ位に分け、その下に輕格と稱する準士があつたのである。

二　出生

此の傳記の主人公なる馬場辰猪は馬場源馬の第二孫である。彼は常に祖父が日本の歴史や往昔の勇士等の勇敢なる行爲を物語るのを非常に喜び聞いたといふやうな點で、祖父との接觸からは心に非常な感化を受けた。しかし、此の小童には、唯寡言沈默の性質であつたといふの外、何等著しき特徴はなかつた。

辰猪は、嘉永十三年五月十五日、多分氏興以來の居邸であつたと思はるゝ土佐の國高知中島町の西詰里俗金子橋の家に於て生れた。父は源馬氏高の長子來八氏明、母は荻田作太の長女とら子であつた。父は文政六年九月三十日生れ、母は天保元年十月九日の生れであつたので、辰猪は父二十八歳、母二十一歳の時の子であつた。辰猪の兄源八郎氏永は弘化四年に生れた。父氏明は弓、馬、劍を善くしたのみならず、書、畫、手工に於ても、可なりの才能を有し、藝能に於ては、源馬の子たるに恥ぢなかつたが、非常に寛大な性質であつたのと大酒との爲めに用ゐらるゝに至らなかつた。維新の時分には少時山内容堂の馬役を勤めたのみであつた。敢ていふ程の文字はなかつたが、昔の軍記、平家、盛衰記、三國誌、弓張月といふやうなものゝ面白い箇所を善く暗記してゐたところなどから考へると、雜書は可なり讀んでゐたやうである。思ふに、さういふところは、氏綱あたりからの馬場の家の家庭教育が、聊かではあらうが、當時の儒學的教育以外に、文學、美術の方面にまで及んでゐたことを吾々に示すものである。辰猪は當時の政客としては可なり多趣味であつた。英國留學の間に養はれたところもあるには相違なからうが、家庭に於ても、趣味教育の空氣の存在してゐたことは爭ひがたき事實である。

母とら子は思考の綿密な、言語の明哲な婦人であつた。氏

明も氏永も金錢のことは考慮を及ぼさない男どもであつたので、家計の遣り繰りはとら子がその任に當らなければならなかつた。逢川郷の知行地から來る米を町人に賣るのなどでも、多少の相場を見計らうことの必要はあつた。例へば、相場の上がる前には、町人がしきりに米を買ひたがつてやつて來るのだから、さういふ時は扣へてゐて、いよ〳〵上つたところで賣るやうな駈引の必要はあつた。とら子はさういふ處置にも何時の間にか熟してしまつた。

　男たちに知らせると、直ぐつかはれてしまうので、不時の用に備へるための金を貯へるのは、餘程苦心したといふ。安政の地震の時には、いゝ采配に、男たちに知られずに、數百金の貯蓄ができてゐたのであるが、家は潰れはしなかつたけれども、危險だといふので、家ぢう庭で野宿をしたので、何しろ二分金とか、一分銀とかいふやうな當時の硬貨での何百兩なんで、嵩張ること甚しいのを、男連に知られないやうにするのが一苦勞であつた。

　嫁――氏永の妻柳子(やなこ)――と二人で分けて持つことにしたのだが、二人はそれを固くまとめて風呂敷に包んで、枕にしてゐた。氏永は物事によく氣のつく男であつたので、母の枕に觸つてみると、それがいかにも固いので、石だと思つてしまつた。それで、柳子に聲を掛けて、『おツかさんがあんな固い石を枕にして寢ておいでのやうだから、お柳、お前行つて、枕を見つけて來てあげて、あの石は何處かへ捨てゝしまへ』といひつけた。その石の枕と見えたものは、大切な家の爲めの虎の子なんだから、それを捨てられてはたまらぬので、二人はいゝ加減なことを云つて胡廡かして、旨くその金の包を隱くしてしまつたといふやうな可笑しい話しもあつたといふのだ。

　維新に近い時代に於て、馬場家の財政を維持したのは、確にとら子の力であつた。辰猪等に學資を送り得たのは、とら子の堅實なる理財的手腕のお陰であつたと思つて宜からう。

　とら子は十五歳から馬場家に來つたといふ。生家も小身ではあつたが、教養ある家庭であつたらしい。その上、馬場家の趣味の空氣ちうに育つたので、可なりに多趣味であつた。

　とら子は、若い時は可なり氣嵩な強い婦人であつたやうである。氏明の實母吉田氏の女は早く死んで、氏高の後妻大高坂氏の女は極めて片意地な女であつたので、とら子は可なり苦しい境遇にゐたらしく思はるゝ。姑の無理なところが、舅の氏高に知れると、氏高は、憤然として、『嫁は下女とはちが

う、餘所の大事な娘を手をさげて貰つて來たので、これを虐過するのは以つての外だ。さういふ不法の行爲があるやうでは捨て置けん。お前を離縁する』と、姑に奴鳴りつけるのだ。姑が無理をいふのを堪らへるのが、一苦しみである上に、それを舅に知らさぬやうにするのが更に一苦勞であつた。

『嫁に來る時、父から、一端他家に嫁した以上、舅・姑かやかましいからと云つては、決して歸つて來るな、誠意と親切を以つてすれば、如何なる人の機嫌をも和らげ得るものだ。しかも、舅、姑は何うせ先きへ死ぬものだ、さういふ人々を本位にして、嫁した家に於ける自分の進退を決するのは理由のないことである。但し、亭主に見込みがないといふ見据へがついた場合には、それは早速歸つて來るが宜しい、と云はれた』

　とら子は晩年になつてよくさういふ話をした。

『亭主は妻よりは先きへ死ぬるのが先づ通例だ。それに子どもでも少し大きくなれば、間違つたことさへ云はなければ、皆自分の味方になつてくれる。要するに、女といふものは赤手空拳で他家へ入つて行つて、その家をば乘つ取つて結局自分のものにしてしまうのである。ちつとや、そつとの苦しみを辛抱する位は當前だ………おとつさんは妾を置きなすつたが、そんな者などは私に取つては、何でも無かつた。世間には妾のために追ひ出される奥様があるといふことも聞いたのだが、私は妾になど追ひ出されるやうな弱いことでしようがあるものかといふ決心でゐた。妾なんぞが無禮なことがあれば、手打ちにしてやらうと思つてゐた』

　とら子はそんな意味のことをも話した。

遺傳といふやうなものが確にあるといふのならば辰猪の人となりには、祖父の性格の外、この理智にたけて居ながら、可なりに熱情のあつた母の性格が少なからず遺傳してゐたとも云ひ得られるであらう。

　父來八（氏明）は明治三十五年十二月十五日午前（夜）享年八十で麴町區飯田町五丁目十二番地の僕の寓居で死に、母とら子は大正三年十二月十八日午前（夜）、享年八十四で牛込區市ケ谷田町二丁目一番地の僕の寓居で死んだ。

此處で云つて置くが當を得て居ると思ふことなんだが、日本及び支那の人々の傳記を見るといふと、その主人公が優れた人だとその人は何時も生れた時及び幼時に於て既に何等か常人に優れた著しいところがあるやうに記されて居るのであるが、わが此の傳記の主人公は、前記の概則に對しては除外例をなしゐ

るのだ。實際のところ、忌憚なく云へば、本傳記の筆者は、生れたばかりの孩兒とか、五六歳の幼兒とかに何等かの才能の微候が現はれるなどといふことは、信じないのだ。人が後には何れ程偉大になり得るにしても、幼兒の間は皆同樣に嬰弱なものに過ぎないのだ。のみならず、概言すれば、幼時に於いて餘り早く才能の徴候の表はれることは、成人の場合に才能の有るものになるといふ證據にはなり難いものであるばかりでなく、それとは全く反對の結果を見る證據であることが屢である。卽ち、心の早熟は天性の發達を止め、若くは妨ぐるものであるものだ。此の如く、吾々は、幼兒の時分には誰も彼も皆全く一樣なものであると思ふのである。

註―。成る程斯ういふ觀方は面白いには違いないが、しかし、小兒が五六歳位からは、少しく。特徴を表はす例も少くないやうである。けれども、それから後の境遇、教養等でいろ〳〵になつてしまふことは爭ひ難い。

母の語つたところによると、辰猪は非常に片意地な、親のいふことを聞かぬ兒であつたので、母は隨分強く折檻した。一自由にして置くと暴ばれ廻つてし方がないので、蒲團のなかへ卷き込んで呼吸のできるだけにして、はふり出して置いたことが度々であつた。辰猪が歐洲から歸つて來てからのことなんだから、もう三十位の時であつたと思ふのだが、母は或る日話の序に『お前はほんとうに危ないことをしてしかたがない兒だつたので、隨分私がひどひ目に合せたが、覺えてゐるかね』といふと、辰猪は苦笑しながら、『覺えてゐるとも、けれども、あれではまだいじめ方が足りない。もつといじめて吳れゝば、もう少し悧巧になるのであつたのだ』と答へた。

よく兄源八郎と言葉戰ひの喧嘩をした。年下の辰猪は何時も云ひ負けて口惜しがつたが、さういふ時は、直きに兄の玩具を破壞しにかゝるのであつた。『兄のからだへ手をかけることは許されないことなんだから、その代りに兄の玩具を壞すのだ』と辰猪は云つたといふのだ。

辰猪幼時のことに就ては、尙次の項の註でもう少し書く。

米國と戰ひがつてゐる人々を見て

武者小路實篤

いくら向ふ見ずの政治家でも米國と戰爭するやうなことはしまい。しかし米國と戰爭しろと云ふやうなことを云ふ人が段々ふへて來てゐる。そしてまさか起りもしまいと安心してゐることが平氣な顏して起つて來ることは四十になる自分ですら今迄いやになる程見聞きして來た。

今のまゝでゆけば米國と戰爭はさけられない處に進んでゆくからかも知れない。そんなことを心配するのは田舍にゐて想像からするかも知れないが、米國と戰爭することを奬勵するものさへ出だして來てゐる。それを政治的方面なら見のがしも出來るが、本當に戰爭する方がいゝと思つてゐるものがあればどうも人その間は悧巧には見えない。

米國と戰爭すれば、一時はドイツのやうに勝つかも知れない。軍人同志の戰ひでは勝つかも知れない。しかし何處で勝負をきめるつもりなのだ。どうしたつてやつけてしまうことも、やつけられることもあり得ない戰爭は長びくにちがひない。そして持久戰になつた時はどうするつもりだ。米國は日本と戰つても食ふに困ることもなく、いくら戰爭をつゞけたつて、後ろに歐洲をひかへてゐるから別に困ることはない。日本も支那や、ロシヤがあると思ふかも知れないが、之は日本が力がなくなることを利益としてゐる國々である。

そして日本を愛してゐないのは當然である。日本の方が今迄によくなかつたのだから、弱り目にひどい目にあはされても苦情は云へない。

どうしたつて今度戰爭すれば、日本は經濟的に破産し、革命が起つても、食ふ道がなくなるであらう。米騷動位ではすまなくなるであらう。

日本がいくら强さうな顏したつて、今の日本では米國と戰爭するのは馬鹿氣てゐるとしか思はれない。

それは米國人が日本へせめこめば、必ずやつけられるであらう。日本は今迄外國人に少しもせめ込まれた經驗はないし、米國人がさう多く上陸してくることは出來ないであらう。

しかしヒリツピンを獨立させ、ハワイを占領することが出來たとした處が、それを守るに骨が折れるばかりだ。又英國もアメリカと一緒に日本と戰ふやうになれば別だが、それで日本の生活費を低め、生活を安定するわけにはゆかない。米國の本國へ攻めこめないことはわかつてゐるのだから、もし戰爭したら經濟、殊に食糧問題だけの勝負になる。日本が戰ひを好まないのに米國から無理に戰ふやうにしむけてくれば別である。さうなれば各國の人は米國を憎惡し、日本に同情し、又米國內でも日本に同情するものが多く出るであらう。そして日本は亡ぼされない國であるから、米國は何の利益も得ず、內政上の破綻を起すにとゞまるであらう。

日本に戰爭をしかけるものは馬鹿である。日本に勝つた處でさう利益は得られず、この位いやつけるのに骨の折れる國はないであらう。ともかく戰爭は日本から買つて出ることは絕對によくない。

戰爭はその爲めに死ぬ、若い人々のことを思つたゞけでもするべきものではない。しかしそんなことを云つたつて、好戰人には馬の耳に念佛にすぎまい。だかそれ等の人にわかる言葉で云ふのだが、米國と戰ふ結果はどうなるかをはつ切り考へて見れば戰爭なぞは出來るものではない。しかし戰爭と云ふものは利害關係を冷靜に考へ得るものによつて始められるものではなく、のぼせ性のあとさきを考へることの面倒な人間によつて始められる。すぐ生命はいらない、國辱をしのぶわけにはゆかないと云ふ連中が、油をそゝぐことによつて行はれる。いつも戰爭は國民の一部に油をそゝぐことで行はれる。尤もドイツと戰ふ時などは國民より政府の方がのりきになつたらしいが、もつと國家にとつて存亡を賭するやうな戰爭は國民の血をのぼせさせるものによつて、向ふ見ずにされることによつて起される。米國にたいする日本人の氣持は、その方向に向ひつゝある。

之は惡魔のよろこぶことであり、第三者の野心家のよろこぶ處であり、日本が弱ると得をする人々の內心のぞんでゐる處である。恐ろしいことはついで起つて、おちつく處がわからなくなるであらう。自分は米國の軍隊を恐れない。米國の飛行機、バクダンは、その犧牲者のことを思ふとたまらないが、そんなものは日本人はやつける力が十分あると思ふ。もつと恐ろしいのは戰爭のながびくことで、國民の生長力が失なふことである。革命は當然行はれ、金持や將校達は外國人よりも內國人にやられ

ることは覺悟すべきである。しかしその前に主義者はなほ生命がないものと思はなければならない。

米が今の三倍位い高くなつたら、日本の津々浦々で爭動が起るであらう。食へなければ、食へない人間がかたまれば、未來のことを考へる餘地がないのは當然である。

日本は出鱈目になり、刺客はついであらはれ、日本が荒野と化することもあり得ないことゝは云へない。尤もそれは戰爭か七八年つゞいた時の話である。しかしそれまでに一方が折れると云ふことは考へられない。そして外國は必ず得するのだから高見の見物をするであらう。戰爭を始めて途中で喰いとめることは出來ない。坂をころげる石は途中でふみとゞまることは出來ない。

こんなことはあまりに別り切つてゐることゝ思ふが、こんなことさへわからない政治家が日本に多さうだから一言するのである。

どうせ一年か二年もたゝずにつぶれる內閣だからあとはどうなつてもいゝと云ふ人でない限り、すべて起り得る不幸を考へるだけ考へて一番不幸の起らないことをなすべきである。米國に抗議を申しこむのは決してわるくはない。しかし戰爭だけはしたくないものである。そんな心配をする方が可笑しい位いに恐ろしいことが目に見へてゐるので、安心と思ふが、この頃、新聞なぞでちよい／＼見る處によると、あんまり人々を買ひかぶつてゐるやうな氣がするので、之だけのことをかくことにした。

もつと具體的な想像は人々にまかせる。ともかく國辱も國辱だが、辱をしのぶ時は、忍ぶ方が立派である。米國の立場のよしあしは米國人の心あるものに自分は任せたい。

日本は今冷靜にして、遠き慮かりをして、國民の幸福、國民の生活の安定の方に力をつくして、そして米國許りをたよらずにもゆける路をかうじ、米國のとつた方針で不幸になつた人があつたら。戰爭の費用の何萬分の一でその人達の損害はおぎない、新らしい生活の道をつくるやうに骨折つて、世界中一番立派な國民性を發揮してほしい。少くも一番賢い道をとり、遠大の志をもつて一時の快に打ちかつてほしいものと思つてゐる。

（二四、五、三一）

武者小路實篤著

第二の隠者の運命

（定價壹圓九十錢 送料十七錢）

自序

武者小路氏曰く「この作は自分の作としては尤も自信を有てるものだ。そして一面自分が讀みたいと思ふ本をつくろうと思つてかいた、そして最も面白くよめ。又最もいろ〱のものをふくみ、又尤も深い所に入つている。ここに書かれた世界は現世ではない、過去の世界でも未來の世界でもない、そして運命と童貞との問題は作品に色つやをつけ、又人間の切斷面を見せるため、事件を發展させるため、利用された傾があるが、その場、その場に於ける人間の心理、心のつくられ方は正視されてゐると思ふ」眞に本書は氏の現在までの作中の第一の傑作で、人間はどう生活すれば安心が出來るか、又どう云ふ心のもち方をするのが本當かと云ふ所に異常な力瘤を入れられたものだ。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

現代白描その一

新住宅地生活

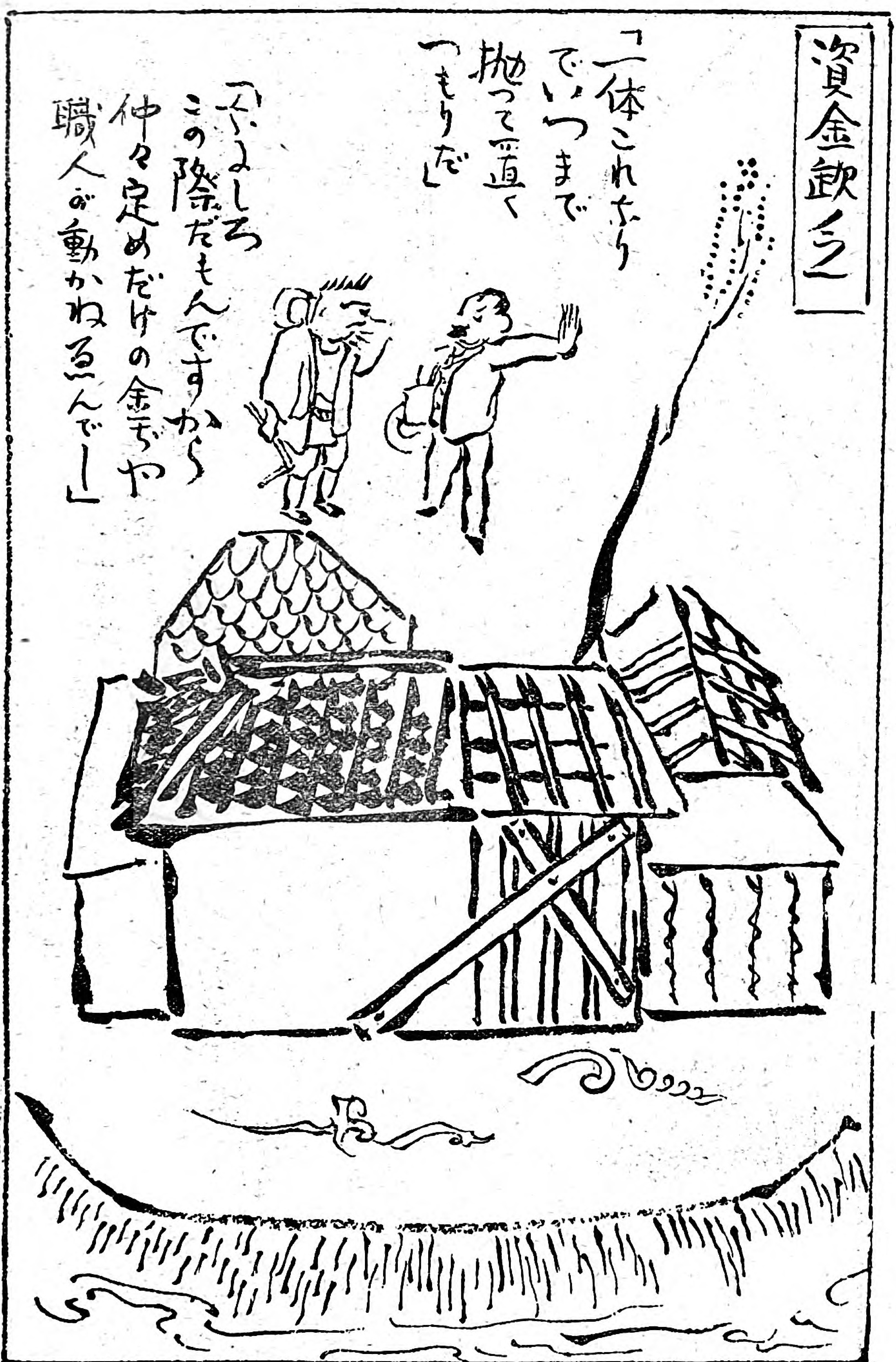
岡本一平筆



住宅低利資金借入れ
「組合へ入れ
ばよかつた」
「入る家
を建て
るよう
ではも
う芽は
とまつた」
「そりや
ゑらい」
「本当か」
「ははご苦労」
「諸君悦び給へ。貸下ゲ
たこの役所の組合が一つ滅
した」



土地選定
「臭いとておめへ等がとこの業だ、この辺も高價くておめへ等には借り切れねゑ」
「その去話をするといふ地所もまだか、肥車と一しよに歩るかせられても臭くてかなはぬ」


資金欽乏
「一体これなりでいつまで拋つて置くつもりだ」
「なにしろこの際だもんですから仲々定めだけの金ぢや職人が動かねゑんでし」


わが家
「これが育つと立派な防風林だ」
「おかあさままんままだけへ」
「おやゝ田舎っ子と遊んでもう田舎言葉覺えましたね いけませんよ」


新宅自慢
「二十箇年目ですっかり自分のものにならふといふのだね」
「はははそうだよ」
「あたしにもアイスクリームね」
「眺めもゑゝし」
「仲々いゝ木だ」
「お客呼びもいゝ加減にやめて貰はないと困るのはわたし許りです」


共用タンク落成
ソレ人生ニ欠クベカラザルハ水也 然ルニ当住宅地ニ於テハ
エヘン

總選擧と投票の分布

X Y 生

今度の總選擧は、競爭の激烈といふ點でも、未曾有と云はれて居り、小さいながらも實業同志會のような新勢力が競爭に加はつたといふ點ででも興味を惹くものがあつた。一千名に近い候補者が少くとも一千萬圓の選擧費用を振り撒いて三百萬の投票を取り合つた結果はどうだらう。この投票の分布の有様を見ることは、いろ〱の意味で興味がある。殊に旣成政黨が著しく不安定な狀態にあることは、最近に於ける著しい事實であつて、何づれの政黨も、內部に崩解の要素を含んでゐる。この作用は今後あらゆる機會に、何等かの形で現はれ、そして旣成政黨を漸次に、新しい社會關係に基づいて再組織するに違ひない。この點からも、總選擧に於ける投票の分布によつて、現在に政黨の勢力分布の有様を見ることは頗る興味がある。尤もこれだけの數字では、大して決定的な結論に達することは出來ぬが、政治問題の硏究者に取つては、いろ〱の暗示を與へるに足るものである。

投票數の計算は、東京朝日、東京日日、大阪朝日、大阪毎日の四新聞の報導を基礎とし、上記の四新聞に得られなかつたものは名古屋新聞その他二三の地方新聞の報導によつた。これ等の報導のうちには、投票數の一致せぬものもあつた。從つて投票數は絕對に正確とは云はれぬが、百分率の上に相違を來たすほどの間違ひはないことゝ思ふ。尙ほこの計算は開票延期となつた北海道第九區(定員二名)の開票前に作つたものであつて、右の投票數は除外されてゐる。

先づ第一に立候補の數に對する當選者の割合を見ると、當選率の最も高いのは憲政會の六二・三%で、最も低いのは實業同志會の三二・〇%、全體の平均は五二・二であるから、政友會は丁度この平均率に一致し、本黨は平均率よりも少しく下つてゐる。

(其一) 各派立候補と當選率

黨派別	立候補數	當選者數	百分率
本黨	二三三	一一八	五〇・六
政友	一九三	一〇一	五二・三
憲政	二四七	一五四	六二・三
革新	四九	三〇	六一・二
實業	二五	八	三二・〇
中立	一四二	五三	三七・三
計	八八九	四六四	五二・二

そこで現在の條件の下では、相當の選擧費用を使つて、立候補の半數以上の當選者を出せば普通の成績であつて、地盤の鞏固でない場合は三倍の候補者を立てなければならぬ。中立候補者の當選率の低いことも注意に値いする。

次に四百六十四人の當選者は、投票總數のどれだけを代表し、四百二

十五人の落選者がどれだけを代表してゐるかと云ふと、市部に於ては當選者は投票總數の六三・六六%を、落選者は三六・六四を代表し、郡部に於ては當選者は六四・八八を、落選者は三五・一二を代表してゐることになる。即ち次點以下の候補者の間に分散され、從つて代表上の效果を現はさなかつた投票數は、郡部よりも市部の方が、稍々割合が多い。これは郡部の方が、從來の傳統的な地盤關係が鞏固であり、從つて新しい勢力が割込んで競爭する餘地が少なく、市部の方が、幾分その餘地が多いことを意味してゐるのかも知れぬ。また市郡を通じて見れば、當選者は投票總數の六四・七一を代表する。即ち投票總數のざつと三分の二が議員に代表され、殘りの三分の一は無效となるのである。そこで現在の議會は全國民のうちの選擧有權者三百萬人を代表するに過ぎないとは能く聞くところであるが、實際は三百萬人をも代表するものではなくて、僅かに百八十萬人を代表してゐるに過ぎぬ。

（其二）當選者の代表程度

	投票總數	當選者の得票	%	落選者の得票	%
市部	三八五・八一一	二四五・六二一	六三・六六	一四〇・一九〇	三六・三四
郡部	二、四二三・〇二九	一、五七五・六三八	六四・八八	八四七・三九一	三五・一二
計	二、八〇八・八四〇	一、八二一・二五九	六四・七	九八七・五八一	三五・二九

備考——市部には獨立選擧區のみを含み、郡部と共に一選擧區をなす都合は、すべて郡部に算入した。以下此の通りである。

斯ように全體として見れば、當選者と落選者との代表程度は六四・七一%と三五・二九%であるが、之れを各派について見ると、非常の相違がある。即ち市部と郡部とについて、各黨派別にして示せば次の通りである。

（其三）同上政黨別

(1) 政友本黨

	得票總數	當選者の得票	%	落選者の得票	%
市部	五五・八五七	二七・四九三	四九・二二	二八・三六四	五〇・七八
郡部	六六六・五二四	四三六・六五二	六五・五一	二二九・八七二	三四・四九
計	七二二・三八一	四六四、一四五	六四・二五	二五八・二三六	三五・七五

(2) 政友會

	得票總數	當選者の得票	%	落選者の得票	%
市部	四四・二三六	三一・四四一	七一・〇八	一二・七九五	二八・九二
郡部	五八七・四三八	三四七・七六〇	五九・二	二三九・六七八	四〇・八
計	六三一・六七四	三七九・二〇一	六〇・〇三	二五二・四七三	三九・九七

(3) 憲政會

	得票總數	當選者の得票	%	落選者の得票	%
市部	一三七・九〇一	九六・〇九五	六九・六八	四一・八〇六	三〇・三二
郡部	六八八・一六八	五〇三・九四五	七三・二三	一八四・二二三	二六・七七
計	八二六・〇六九	六〇〇・〇四〇	七二・六四	二二六・〇二九	二七・三六

(4) 革新倶樂部

	得票總數	當選者の得票	%	落選者の得票	%
市部	四六・一〇三	三三・二〇五	七二・〇三	一二・八九八	二七・九八
郡部	一三二・八七五	九二・九八七	六八・九八	三九・八八八	三〇・〇
計	一七八・九七八	一二六・一九二	七〇・五一	五二・七八六	二九・四九

(5) 實業同志會

	得票總數	當選者の得票	%	落選者の得票	%
市部	四〇・五六四	二六・七八六	六六・〇三	一三・七五八	三三・九三
郡部	一二・五七三	—	—	一二・五七三	一〇〇・〇
計	五三・一二八	二六・七八六	五〇・四三	二六・三三一	四九・五七

(6) 中立

	得票總數	當選者の得票	%	落選者の得票	%
市部	六一・一七〇	三〇・六〇一	五〇・〇三	三〇・五六九	四九・九七
郡部	三二五・四五一	一八四・二八七	五六・六三	一四一・一一六	四三・三七
計	三八六・六二一	二一四・八八八	五五・五八	一七一・七三三	四四・四二

次に二百八十萬の投票は、市部と郡部との間に、如何なる比例で分布せられてゐるかといふと、投票總數の八六・二二%は郡部であつて、一三・七八%が市部である。然るに各政派について見ると、本黨と政友會とは殆んど郡部のみを代表し、市部の得票は、得票總數の僅かに一割に滿たぬ。憲政會になると市部の代表が稍々有力で、割七分になり、革新倶樂部になると更に増加して二割六分となる。然るに實業同志會の得票の七割六分は市部である。即ち次表の通りである。

（其四） 市部郡部に於ける各派の得票の割合

黨派別	得票總數	市部得票數	得票總數に對する%	郡部得票數	得票總數に對する%
本黨	七二二・三八一	五五・八五七	七・七三	六六六・五二四	九二・二七
政友	六三一・六七四	四四・二三六	七・〇〇	五八七・四三八	九三・〇〇
憲政	八二六・〇六九	一三七・九〇一	一六・六九	六八八・一六八	八三・三〇
革新	一七八・九七八	四六・一〇三	二五・八〇	一三二・八七五	七四・二四
實業	五三・一二七	四〇・五四四	七六・三〇	一二・五七三	二三・六七
中立	三八六・六二一	六一・一七〇	一五・八二	三二五・四五一	八四・一八
計	二、七九八・八四〇	五八五・八八一	一三・七八	二、二一三・〇九	八六・二二

斯ように舊政友會（本黨及び政友會）の地盤は郡部であつて、從來、地主黨をもつて目せられたのは その爲めである。政友會に比らべると、憲政會はより多く都市の一般商工階級を代表し、革新倶樂部は更により多く、都會の商工階級を代表する。そして都會の一般商工階級をより多く代表する程度に照應して、この三つの政派が順次に進歩的な性質をもつて居ることも注意に値ひする。

市部と郡部とに於ける各政黨の勢力の分布は、次表によつて一層明白になる。

（其五）市郡部に於ける各派勢力の分布

黨派別	投票總數に對する得票總數の%	市部投票總數に對する市部得票總數の%	郡部投票總數に對する郡部得票總數の%
本黨	二五・八一	一四・四八	二七・六二
政友	二二・五七	一一・四七	二四・三四
憲政	二九・五二	三五・七四	二八・五二
革新	六・三九	一一・九五	五・五一
實業	一・九〇	一〇・五一	〇・五一
中立	一三・八一	一五・八五	一三・四九
計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

即ち舊政友會（本黨及び政友會）は郡部投票總數の五一・九六%を占めて居るにも拘らず、市郡投票總數の二五・九五%を得たに過ぎぬ。然るに憲政會は、郡部に於ては全體の勢力二八・五二%を持つに過ぎないが、市部に於ては、全體の勢力の三五・七四を占め、本黨政友二派を合したよりも優勢である。けれどもそれにも拘らず、絶對的の得票數から云へば、本黨政友兩派ばかりでなく、憲政會や革新俱樂部の場合でも、市郡に比して郡部の得票は同じく壓倒的の多數である。之れが憲政會にしても革新俱樂部にしても、政友兩派と同じように、地主階級の離反を恐れる所以であつて、是等の政黨が、競ふて『農村振興』の題目を口にするのは其の爲めである。

（其六）議員の職業別

職業別	人數	百分率
實業家	一八〇	三九・〇
無職	八三	一八・〇
辯護士	六九	一四・九
農業	五三	一一・五
記者	三一	六・七
醫師	一四	三・〇
官公吏	一一	二・四
教育者	一〇	二・二
軍人	四	〇・九
其他	七	一・五
計	四六二	一〇〇・〇

備考——北海道第九區二名を除く。

（其七）新選及び再選

	人數	百分率
新選	二六七（内元代議士四九）	五七・八
再選	一九五	四二・二
計	四六二	一〇〇・〇

敗戰記錄

田子一民

候補者の心理

雫の盛岡、花の故郷に政戰まさに七十日を過ごし久しぶりで東京の自宅に歸り、今更ながら予等に關する選擧戰の以外に世評の中心となつて居るのに氣がついた。予は今數日にして歐洲行きの船に搭じ、戰後各國の社會施設や、政治狀態や、教育狀況を視察すべく、準備をなしつゝあるので、敗戰の後を追つて彼是云爲する心理狀態になつて居ないが、實戰者の一人たる予として、この場合實際に感ずる所を披瀝することも無用であるまいと信ずるのである。

高橋氏と予との政戰は正に公平な社會の裁判に待つべきものが多く、その點に於ては予も被告人たるが如く、高橋氏も被告人である。其の立候補の心理についても、政戰の實際についても、同樣に政治的裁判を受くべきものであつて、予一人の言ふ所のみを聞くは決して事の正鵠を得る所以ではない。しかし、予は始めより政戰の巷に身を投じ一歩もこの地境を轉ぜず眞に實戰に從つた爲め、立候補を聲明して政戰場裡を屢々ぬけ殼にされた高橋氏よりは選擧場裡の眞相をよくつかんで居るものと確信するのである。

先づ兩候補者がいかなる心理狀態に於て立つにいたつたかを觀察する。予の立候補は極めて單純である。一言にして盡せば予の出生地たる盛岡市の輿望に應へ政界に新らしい空氣を注入せんとしたことにある。そしてその事は予自身の決意であつて世上噂する如く政府當路者の勸誘でもなく、政黨の期待でもなく、又清浦内閣を特別に援助せんとした義務心からでもない。單純に鄕黨の間接直接のすゝめを動因として予自ら決心したのである。即ち予の立候補は予の最も興味を惹いて居た内務省直接の行政殊に社會行政を離れたときすでに立候補に關して、幾

分の動機を與へられて居たのである。今少し遡れば故原總裁の薨去せられた事實は予をして立候補せしめる遠き動機を與へたのである。此等の遠き原因が大正十三年の正月十日以前に於て已に官職を辭して議員たるの決意をなさしめたのである。この決意は政友會分裂前であつて本黨の出現の如き夢にも知らなかつた時代である。水野内相に辭意を洩らし内諾を得たのも政友會分裂前であつて立候補の意思も辭職の意思も予の自發的に出たことで、斷じて政府や政友本黨の勸說に基いたものではないのである。又予は知事の職と議員の地位とは兩立し難い場合が生ずるばかりでなく、苟も選擧界に立つ以上には、いついかなる競爭者が出現するとも測り知り難いものがあるから、知事が官服をぬがずに戰ふと云ふことは、卑怯であると信じて居るのである。予の立候補の決意は政友會分裂前であり、辭意も同時であつて高橋氏の立候補とは何等關係のない予自身丈けのものであつたのである。この事は世間に如實に現はれて來る形式及び時期が世をして政府及び政友本黨の勸說に基き而も辭職してまでも競爭する樣になつた如くに信ぜられるにいたつたことは事の眞想に觸れないものである。予としては少しも意に介しないが、競爭を眼中に置いて考へるときには予としては故鄕に立脚して居る點が多く、高橋氏は堂々たる立脚點を以て居る對照には究明する必要があるのである。

予の立法府に列せんとする決心の中に、最も多量に含まれて居るのは、予等青年の力によつて、立法府を今一層深刻に國民生活に觸れたものにして見たい、社會政策にふれた立法府にして見たい、帝國議會をして國民の生活自由にふれたものにしたいと願ふ點に存するが、その以外のことについては、寧ろ故鄕の同學知友の望みに應じた點が多いのである。予の衷心の祈願は、現在の帝國議會の如く徒に反對黨に反對し、いかなる豫算も、いかなる法律案も、自黨のものにあらざれば之に讃意を表さないと云ふが如き狀態にあることを遺憾とするものである。而も常に議事の形式などについてのみ相爭ひ、堂々たる主義政策については、無頓着であるが如きことを遺憾とするものであるし、又立法府が社會政策については餘りに冷淡であることを痛憤して居たのである。從つて社會局の一員として、社會政策の樹立に努力し得なくなつた予は、寧ろ議員としてこの方面に參加したいと考へるに至つた次第で是は予の立候補動機の僞らざる宣言である。

予のこの心事は幾多の事情によつて色どられた。第一は政友會の分裂である。予の決意以後政友會は分裂して、政友本黨は生れた。而して母體たる政友會は高橋氏によつて統理せられて

居た。予等局外者から觀れば政友會の分裂の如きは誠に意味のないものであつて、政友會も政友本黨も其の沿革より觀ても、政界の現狀から考へても、分裂までして淸浦內閣を排擊したり、之を援助したりする必要は毫末もないと思ふのである。寧ろ其の主義政策を觀て、倒すべくんば倒してよいのである。大政黨の力を示すのはいつでも出來るのである。何を苦んで輕擧妄動するのか予等には不可解至極である。目下の急務は內閣の姿の如何ではない、國民生活の不安をどうするかゞ問題なのである。政黨內閣の時に果して政友會がよく國民の要望に酬ゐ得たかどうか、人々顧みるがよいのである。兎にも角にも政友會の分裂は予の立候補には、意外の障害であつた。政友本黨には先輩友人も多く、何となく新らしい氣分は漂つて居る、故鄉の岩手縣には政友本黨入黨者がなく政友會全盛である。予としては、政友會も政友本黨も一視同仁であつて、何れも敵とせず、何れにも同情して好意的中立の立場に立ち、他日兩黨が合同するまで盛岡市だけを兩黨の爭を避けしめ、政界のエルサレムとして、政本兩黨の中立地帶とせんと願つたのである。この爲めには政友本黨にも政友會にも交涉したが、政友本黨は之を承認し、政友會は遂に應諾しなかつた。尤も予は選擧の事に慣れないから、その交涉は從來の慣習に適して居るのかどうか一向わからなかつたが、たゞ思ふ通りに話したのであつた、そしてそれは徒勞であつた。第二は予の立候補決意後予の豫見しない、政友會の分裂は予をして政府黨たるかの如き觀を呈せしめたことは意外であつた。予の中立は政府を援助せん爲めの中立でもなく、政本兩黨に同情し盛岡市を競爭の渦中から救ふと云ふ中立であつたが、政友會は已に候補者を立て、予に戰を挑む以上には予も亦どうしても政黨的立場に立たなければならなくなつた。果して然れば、予の經歷上憲政會や革新俱樂部に入黨する氣分になれないのは勿論で、結局政友本黨に入黨すると云ふ譯になつたのである。予の立候補を決意したとき以後、斯くの如き政界の變化は素人新參者たる予を聊か戶迷ひさせた傾きがある。そして始めの立候補の動機は議會に社會政策の意義を深からしめたいと云ふことゝ、同鄉の輿望に酬ゐると云ふ單純なものであつたが、政界の變化によつて、所謂護憲運動と非護憲運動の對立の姿となつた。政界多瀾、多年政界の事に慣れた人でも、蓋し思ひにまかせぬことがあらうと思ふが、官界育ちの予にとつては意外も意外の變化であつた。しかし少しも驚くこともあはてることもなかつた。客觀的に之を靜觀する餘裕をもつて居た。

斯くして高橋是淸氏、前內閣總理大臣、現政友會總裁は、三

月四日東京に於て、岩手縣第一選擧區盛岡市に衆議員候補者として立つの決意を發表し、次いで政友會は公認候補として發表するに至つた。予の立候補を郷黨に告げたのは一月初旬、世の噂の種となつた故原總裁への電報を發して、有權者に立候補を聲明したのは二月四日である。高橋氏の立候補は予の立候補聲明に遲るゝこと正に一ケ月である。而して高橋氏は、何故に予の如き弱輩が、立候補しつゝある盛岡市に立候補せられたかと云ふことは、予の容易に判斷に苦しむ所である。が、予の外觀より得たる材料によつて、その心理を解剖して見ようと思ふ。高橋氏を盛岡氏に輸入したのは形式的には岩手縣政友會ではないことになつて居る。即ち盛岡市民大會が高橋氏を輸入したことになつて居る。三月二日盛岡市内杜陵館に盛岡市民大會なるものが開會された、その會の司會者は政友會岩手支部の役員であつたが、會は政友會を離れた形式になつて居た。出席者は各方面の人々が集つたらしいが、市内の新聞の報告する所では、千五百名と記せるもあり千二百名と載せたものもあり、實際は八百名程度で、有權者は極めて僅少であつたやうである。當日は決議案を可決し、宣言を朗讀し有志者の演說があつた。宣言は高橋氏を輸入する精神を偲ばせるものであるから、之を摘記する。『我が東北の地特に僻陬なる南部の我郷黨は襲に維新の改革に際し所謂天下の大勢に暗く遂に順逆の道を誤りて薩長閥族の徒に賊名を負されて空しく時勢に枉屈すること玆に五十年此間孤忠苦難の志士なきに非ず彼の中島源藏目時隆之進の如き屠腹自ら壁間に鮮血を投ぜるが如き此の誠忠や誠に天地を貫くものにして功業成らずと雖も生きて徒に勳爵を貪りしものと何ぞ遜色あらんや』と云へるを冒頭として『…今春未曾有の非立憲内閣出現—又我黨一部の巧利派は名を穩健着實に藉りて此の憲政の大賊たる現内閣を認容し阿附し以て徒らに權勢利祿を貪らんとするは是れ正に憲政を破壞し國家を禍亂に導く亂臣の所爲にして國論の奮激する固より其の所なり憲政濟美の國民的大精神に基きて立黨せる我が立憲政友會は勿論自由黨以來四十餘年間一指と雖も他の侵入を許さずして後援し來れる我が盛岡市民は今將に憲政の危機に臨んで之が匡救の總選擧に當り、其の候補者の選定は徒らに情實緣故に狃みて昔年宿殊々の望に委するを得んや現政友會總裁高橋是清氏は名實共に故原總裁の衣鉢を襲へる正統の相續者なり！是正に天下に冠たる我大慈寺墓畔の衆議院議員候補者として絕好無比の適任者なりと確信す』と謂ひ故原總裁の正當相續者として、名實兼ねてそなはれるものとして推したのである。次いで上京委員が選ばれてこゝに高橋氏は決心されたものである。而して高橋氏を應援する人々は

平民總裁第二世と云ふことを最も强く唱へた。それを故原總裁の相續者であつと云ふことを强調する爲であつたか、眞に故原總裁の相續者として名實を具備して居ると信じたのか、推察し難いが、盛岡市に立候補する世間的意義はたしかにこゝに存したものと思はれる。之を一言にして盡せば、高橋氏の立候補は故原平民總裁の相續者であると云ふ點に存したので、予の立候補は新時代の新空氣を議會につぎ込まんとし、高橋氏は故原總裁の相續者なりとするに存し、一方は議會に新らしい意味を見出さんとし、一方は平民總裁をふりかざした。而して選擧運動を進める間の空氣としては高橋氏は護憲運動に立脚し、予は內閣の形式はこの場合しばらく忍ぶべく國民生活安定を第一義となしたから、一方は政戰上堂々たる觀を呈し、予は全國的輿論に逆らつた形になつて居る。人事忽忙、實に面白ろき立場となつたのでつた 而して予を立たしめたのは多く鄉里の友人であり、高橋氏を立たしめたのは政友會そのものであつたのである。

對戰の烽火

予を推し、予を勸めて立候補せしめたものは盛岡市の知友である。立候補を決意するに至つて、予の心事を吐露した方面は、政友會岩手支部長（分裂以前の）並に市內有志家等で、予の獨斷ではなかつた。しかしこれ等の行動は盡く政友會分裂前であり、又高橋氏立候補前であつた。政友會分裂した後には形勢が一變した。そして予に同情せる前政友會の有力者も予に同情し得ざる立場に立つた人もあり、又政黨に關係のない有力者でも、高橋氏個人に關係の深い人もあり又分裂の際の感情問題もあつて、對戰上の陣形は高橋派に對して全く問題にならない位になつた。昨大正十二年の秋頃から、予の學校友だちが我が盛岡市から若手を議會に送らんとして後援會なるものを組織し、その力によつて予の立候補を勸說すべく計畫したのであつた。然るに予が知事に轉じた際、社會政策に緣遠くはなつたが、直ちに政界に乘りだすとまでは決心して居なかつた樣子を見て、どうしても立候補を承諾さすべく、後援會の成立を急いだのである。後援會は先づ予をして立候補せしめる爲めの會であるが如き傾きを呈し、先づ專ら推薦者を物色するに努めた。それて推薦者も多くは無競爭を夢想した。政界の事に暗い予も、無競爭ならばと云ふ樣な氣分になり同時に友人達の心からなる期待に感激せずには居られなかつた。これは所謂世間見ずで世間を單純に見て居る予の短見であつて、不明の罪は免れない。世なれた人々からは多くの滑稽味を帶びて見えたものと思ふが、予自身は極めて眞面目である丈、それ丈け多くの世間には滑

稽なことであつたらうと今更ら愧かしく思ふ。後援會の人々と雖も、政友會の分裂を夢想しないし、又假令分裂しても予さへ政本兩黨に同情しさへすれば、他に候補者を立てないと信じて居た。事情に暗い予も亦、或は然らむことと考へたのである。又假令競爭者が表はれても、苟も立候補した以上は少しも驚くことがないと單純に考へ、後援者の同情を、何等の制限も、何等の疑もなく甘受して居たのである。後援會は予を立候補させる丈の陣形を整へたが、敵の表はれた場合の戰鬪の陣形には多く留意して居なかつたのである。

三月二日予は一年ぶりで郷の盛岡に歸つた。顧みれば政友會分裂當時、予は故郷岩手縣に官費で歸り、政友本黨の爲めに盡力して居るとの東京新聞紙上の記事を、三重縣知事官舍で笑ひながら讀んで居たのは一月中旬の事であつた。予はその當時は只管東宮殿下同妃殿下兩神宮御親謁の御警衞の事ばかりに心痛して居たときであつた。故郷盛岡に歸つたのは御警衞を無事濟してからの事である。幼年時代から仰いで修養に勵げんだ岩手山は、いつも變らぬ威嚴と雄大とを示し、たまらなくなつかしいものであつた。御警衞の爲め、どうしても歸郷の叶はなかつた予は、數日滯郷して政友會の人々にも、又有力者にも面會して立候補に關して、將來の事を懇談し、隔意ない諒解を遂げ、一應三重縣に引きかへし、愈々辭職し四月に入つて正式に歸郷しようと考へたのであつた。然るに意外にもこの日市民大會を開かれて高橋氏擁立に決した。予はこれよりさき三月一日を以て、政友會本部に岡崎氏をたづね、我が盛岡市に高橋氏を立たしめることは斷じて不可なる所以を說いた。我が盛岡市は總裁の誕生地であるが、總裁を輸入する地ではない、吾々青年は總裁を生むべく努力するが、總裁を迎ふべく何等の感激を感じないものである。二百八十餘名の政友會を百二十餘名に縮少した總裁當て閣臣としても黨員としても親しかつた政友を或は除名し或は復黨せしめて恬然たる總裁、子爵の榮典を身に餘る光榮となすべきに、今更ら之を息子に讓つて老後を壯にせんとする總裁、斯くの如き政界の奇人を無理に盛岡市に送り込まれることは、盛岡人たる予の贊成し難い所であつて、この場合高橋氏は政友會を分裂せしめた責を引いて、總裁の地位を辭し、之を橫田氏に讓り、力強くして且つ新しい氣分を以て、小黨分裂の新氣運を善用すべきであると切言したのであつたが、岡崎氏は政界の智者でありながら中々贊成しないし、予の前に述べた大慈寺墓畔無風地帶論にも耳をかされなかつたのは殘念である。予は高橋氏を以つて故原總裁の名實兼備の相續者とも何とも思つて居らない。高橋氏は政治家と云ふよりも財政

家、財政家と云ふよりも私經濟家の頭惱の人と思つて居り、又社會政策には無頓着な仁と思つて居るのである。この場合、高橋氏にとつての第一策は總裁辭職横田氏交代、第二策は競走者のまだ現はれぬ選擧區を選ばれて立候補なされるのが當然と思つて居たのであつた。この老總裁の爲め選擧區を明け渡すとは後輩の總裁に對する政治道德であるとか、美德であるとか云ふ心理狀態にはなれなかつた。斯く考へることが予の不德にして突猪の小勇でありとすればそれを甘受するが、予としての僞らざる心情はたしかに斯くなつて居たのであつた。然るに、高橋氏を盛岡市に立てゝもよいと考へて居る岡崎氏は、頻りに知事の地位の安樂にして幸福なことなどを洩らされたが、予は盛岡氏に高橋氏を輸入することは市の平和を害する横紙破であると切論するに至つて岡崎氏はやゝ昂奮して、政友會の天領に總裁を立てるに何が文句があるかと謂つた態度をとられた。青年として尠からず反感をもつた。こゝらは予らの純眞さであり、岡崎氏の老巧な所であらうが、斯く、予の政友會本部に說いたのも、政友會岩手支部に說くべく、歸鄕したのも時已に晩しと云ふ狀態になつて居たのである。而して當初政黨方面の心理を解せずして、純な書生論を以て進んだことは今日の政黨には容易に通じないもので、或は突飛、或は輕薄、或は不遜と見られるものであつた。ともかく斯くして對陣したのである。

對戰の實景

先づ敵の陣形を見んか。

高橋氏を迎ふる言論機關如何。盛岡市には有力な新聞三つ、有力な地方版二つ、何れも盛岡市に立派を勢力をもつて居る。平素は政黨政派に多く膠着して居らず、極めて穩健な記事を得意とてし居るものである。予の知友も亦記者となつて居り親しい人もある。記者と全然沒交涉な譯ではない。然るにこの度の選擧については盛岡市發行の新聞は、多く護憲論を中心として高橋派に同情し、進んでは高橋氏の當選の爲めには思ひ切つた筆を揮ひ、甚だしきは離間中傷の事實を掲げたことも一再でなかつたのである。是はむしろ護憲論そのものゝ中味よりも、選擧には有力であつた。殊に東京諸新聞への電報記事には隨分思ひ切つた誤傳があつた。其の發信人の誰人かも知らぬが、盛岡特電と稱するものゝ中には、虛構の事實が多かつた。予の收監說や、參謀の檢事局取調說の如き、予に同情する青年が消防隊と示し合はして高橋派の事務所に放火したと宣傳したとか云ふが如きことも、その一例である。

要するに新聞の二三は高橋氏の運動者の如くになつたのであ

る。予等は最も演說會に重きを置き、市內隈なく政見發表をなし、三月四日より殆んど毎日毎夜、演說戰に沒頭し餘力を以て戶別訪問を試みたのに、戶別訪問のみをやつて演說會を開かない樣に宣傳されたことなど、最も事實と違いものであつた。要するに演說そのものゝ價値はともかくとして、予等の對陣に新聞の同情を失して居たことは陣形上甚だ不利なものであつた。高橋氏は盛岡市發行の二三新聞に熱烈なる應援を得て居るのが非常な强味であつた。高橋氏の勝因の一大原因は金力と共にこゝに存することは見遁し難い點である。而して同時に予等の敗因の一つの大きな原因もこゝに存することを是認しなければならない。之と同時に東京新聞に揭げられた所論は、相當地方を動かして居ることも見逃してはならない。德富氏の盛岡市民に告げた文の如きは、正しく高橋氏の應援には力强いものであつた。

所謂選擧地盤は如何。選擧地盤と稱するものは極めて漠然たる觀念であるが、某候補者が立つとすればその候補者に對して多くの運動勸說を待たずして投票する人々多ければそれも一つの地盤である。又某運動者の關係上、投票するものとせば、これも一つの地盤である。又候補者運動者に關係なく、某政黨の擁立する候補者に對して、多くの運動を待たずして投票するのも一つの地盤である。候補者、運動者、政黨を中心とする地盤は、地盤として相當强いものであるが、その他にも、利害とか、緣故とか、情實とかで作られた地盤もある樣に思ふ。此等各種の意味では、高橋氏は極めて有利であつた。盛岡市內の政黨員は政友會員丈けで憲政會員は指を屈する位のもので、本黨の如きは予の立候補のときには、一名もなかつたのである。そして高橋氏は政友會總裁であると云ふことに隨喜するもの、前總理大臣として歡迎するもの、子爵を辭したと云ふ點に共鳴するもの、日本銀行關係、大藏省關係に於て從來の緣故によるもの、老齡なりとして同情するもの、高橋氏の立候補は今回限りであるとの宣傳に同情するもの等あるが、要するに高橋氏は全然盛岡市に無關係な人の如くにして、實は政友會の天領と稱し天領に政友會總裁を擁立するのが當然であるとの考へは、地盤としては新らしい意味に於て非常に强いものであつた。殊に老齡者を折角盛岡市に擁立した以上、今度限り當選させよと說いたのは尠からず有權者を動かした。今日盛岡市內で、甚だ失禮なことではあるが、高橋是淸氏を高橋是切氏と謂つたり、『是切候補』と言つたりするのは之が爲めである。之に反し予等には政黨的地盤は全然ない。選擧投票日に近づくに從つて政友本黨の入黨者も漸次增加して來たが、始めは地盤として數十年來鍛

え上げた政友會の地盤とは到底比較にも何にもならないのであつた。而して之を政黨を離れた人的關係丈けについて謂へば、政黨に拘束されない人、即ち篤志家と青年と丈けである。而も高橋派の人々は市民大會の決議に基き、上京委員を選定しその人の力によつて高橋氏を擁立した姿になつて居るから政友會員はもとより、上京委員なる人の面目にかけても、どうしても當選を期せなければならない立場になつたのである。地盤上の差にも、たしかに高橋氏に有利であつた。

　兩候補者に對する社會的空氣如何。予等は政黨的地盤と言論機關係には絕對的不利な陣形に立つたが、一般社會からの要望は極めて有利な立場にあつたのである。高橋氏に對する空氣は政黨的であり、政治的であつたに反し、予等に對する一般的空氣は社會的であつた點に强味をもつたのである。試みに之を地方的と全國的とに分けて記述しよう。

　地方的同情にも色々ある。政黨政派に拘束されず、又高橋氏との利害關係に立たない人々は、鄉土の青年を敎育し甄拔して大成させたいと云ふ思想をもつて居る。今その要領をつかむと、高橋氏は嘗ての總理大臣であり、現政友會の總裁であつても、それは他に適當の選擧區がある筈である。苟も投票は過去の功績を賞すべきものでなく、未來にかゝる希望を表現するものである以上、高橋氏はいかに過去に功勞ありたればとて、その人に投票する義務はない。寧ろ我が鄉の生める若者を育て上けて、國家憲政に貢獻せしめる方が適當である。加之、田子候補は已に早く決意を宣して居るのに、無理に政友會から立てる必要はない。政友會も政友本黨も間もなく合同すべきものであり、又合同さすべきものである、決して分離してその一は憲政會と手を引き合ふと云ふ樣なことは、故原總裁の遺志でないとするのが一般の空氣であつた。(今日では同合の考はなくなつた盛岡で生れ盛岡で育つた者が、政界一新故鄉報恩を念願して居るのに、無理に强者を以て壓倒するのは無情であり、無慈悲であるとする地方的感情、人情美は手づだつて居る。予を應援する友人の演說の中には、隨分手強いものもある。故原總裁のたによつて造り上げた政友會の絕對多數を、百二十餘名にし、議會に於ける絕對多數黨を第三黨の悲しい狀態にしたのは、誰れであるか高橋氏の無力にして統一し得ざりし結果である、高橋氏は政友會の破產總裁であるとして氏をカマドキヤアス(盛岡辯で破產者と云ふ意)と罵倒とするを例とした。政友會を思ひ故原總裁を追慕する盛岡としては、最も深刻に斯く信じて居るのである。我が盛岡市は、高橋氏の爲めには謝罪の場所であるが、立候補をなすべき場所ではない。何れの地に於てか當選し、

政友會を絶對多數黨の昔に返して始めて、大慈寺墓畔の大居士に對面し得べく、少數黨の總裁としては、たゞ御詫びに來るべきであるとするのである。高橋氏は平民總裁と稱するも、故總裁とは全然精神を異にして居る。故原總裁は爵位の榮典を拜受しなかつたばかりではなく、その住居、應接、交友すべてに平民主義に徹底したものであつたが、高橋氏は新平民と稱する丈け、七十餘歲まで子爵の榮典の光榮に十二分に浴し、餘命幾何もなくして、之を子に讓りたるに過ぎない。甚だしく露骨に謂へば、老後の一芝居を打つには、子爵の榮典を辭するのが、政界の事情として適當なりと信じた爲めとも察せられる。畢竟するに政界の事情は、子爵の古着をぬぐべく餘儀なくしたに過ぎない。東京の大震火災の際、被服廠跡の猛火に堪へない人が、衣服をすてたのと同じである。他人に捨てさせられたのか自ら捨たのかは別として、政界の事情は氏の子爵を捨てさせたのである。それも七十一歲まで拜用したものを、子供に讓つたのである。隱居することは子に襲爵せしめることである。冬羽織を夏羽織に換へた狂言を以て、大英斷の如く賞讚しなければならぬ立場に居る人こそ氣の毒である。之を美事と賞讚したりする人々こそ、內心どう感じて居るのかと直觀して居る者が多く、かゝる考から高橋氏と故原總裁の平民ぶりについて、政黨員內外の盛岡人はいたく反對反感を抱いて居るのだつた。それらの思想は或は盛岡人の地方感情と云ふより、識者共通の所感であつたかも知れない。その外總裁として、政友を除名し復黨せしめた事、貴族院に對する無頓着な聲明と取消、原總裁の遺業を輕じた事などは、いたく盛岡市民の感情を害した。氏を以て總裁としても、平民總裁としても、故原總裁の正當相續人なりとなすのは、たゞ形式の事で、實質は破產總裁茶番總裁と思つて居る人が多く、時々之は公開演說にも論ぜられて、之を同席して聽いていたる候補者として、ハラハラした事は幾たびもあつた。しかし、いかなる場合でも高橋氏に對しては、氏を憎んで居た人はなく、不明、無爲、輕卒と云ふ樣に考へるか、憫むべき人として考へないのは事實である。而して高橋氏を擁立した人の多くも、高橋氏は盛岡市より立候補するものと確信して居らなかつたし、世評も又誰一人として、高橋氏の立候補地に盛岡市を選ぶ理由を發見して居たものがなかつたのであつた。それ丈け、高橋氏と、盛岡市とは精神上の連絡がかけて居たのでし又現在でも同樣である。たゞ政友會とか政友會岩手支部とかの人々は、黨の面目上、市民大會の名をかりて無理押ししたに過ぎない。黨人盛岡市を賣り、黨人選擧界を獨占する爲めでありとする空氣は、極めて濃厚に瀰つて居つたのである。斯くの如

く、盛岡市民一般の高橋氏に對する空氣は、甚だしく惡いが、空氣人氣は惡くとも村野、龍野、堀切三氏の如き、策戰家が控へ、新聞の極端な同情を得、ある實力を用ゐれば戰ひは勝ち得ることは彼の人々も信じたものらしい。飜つて予等に對する感情を綜合するに、地方的には何等の反對もなく、高橋氏にたよつて居る人でも、知事さへも辭して來たから當選さしてやりたいが、政友本黨だから反對するといふもの、護憲運動に參加しないために、反對するものもあるが、大多數は高橋氏は老齢でもあり、又今回の選擧の實況を觀れば、どうしても將來は盛岡市より立候補する元氣が出まいから、今度限り選出すべきであるとするものが多かつた。その點では予は、高橋氏よりも三十歳近くも若年であるから、未來ありと思はれたのである。殊に予の盛岡市に於ける立場は、高橋派が予に對して惡評を加へ來れば來る程、弱者としての同情をましたが、戰終りに近くに從つて、横田氏來援し予等に對し惡口を言はざるのみならず、將來の事まで演說し、高橋氏の老齢にして決意せるを說くにいたつて、大分同情をました。この點では横田氏は應援者中の殊勳者であつて、却つてこゝに至れば、高橋氏の護憲運動の共鳴者は少なく、老齢である點で當選して居るとも謂へる。空氣としては老體といふ點はどうしても予の爭ひ難い空氣であつて、高橋氏の爲めに 强味の偉なるものであつた。最後に市民の爲に筆することを悲しむのであるが、事實は事實として記せざるを得ないことがある。それは高橋氏は金力の所持者であると云ふ點である。予等に應援する人々は自ら出金し、家業を廢して戰つて居るのであるから、予の金に緣の無いと云ふことは始めより之を認め、寧ろ之に同情して戰を進めつゝあるのであるが、こゝに選擧界の通幣の一つである專門選擧運動者、內實には相當の報酬を得て運動する人々は、金力の所在に集まつて來るのは事實である。所謂策士ブローカーと云ふ様に見られて居る人は、金力のある所に行くのである。理想選擧と稱するものは、此等の人々を度外視するのであるが、予等は是等人々を度外視する考は毛頭なかつたが、大勢は予等に與せなかつた。中央政界に於て、策士は多く政友會にあり、君子人が多く本黨にあるが如く、盛岡市でも予等は全然純な素人ばかりある。予等の戰は同情戰であり、高橋氏のは政治上の戰と稱しても、その政治上の戰を進める裏には、巨大な金力の潜むことは斷言して憚らない。予は必ずしも買收のみとは謂はない、同情を得た原動力は金力に存したと云ふのである。予等に對する空氣は、政治的でなく、鄕土的同情とするならば、高橋氏のは護憲の頭目として政治的であるが、其の戰の中核は金力に存した。金力への

情であると云ふことに、少しも憚らない。この點に強いて反對するものがあれば、幾多の例證をあげて說き得るのである。しかし高橋氏を擁立する人としても、選擧區民に、精神的に結台の乏しい候補者をして、投票させ樣とするには、單に護憲と云ふ樣な下層の人々に諒解し難い論をふり廻はした丈けでは、到底困難なのであつた。これに於て、戰略家の戰略、智謀と、高橋氏の金力が偉大な力を示すに至つたものである。予をして評せしめると、金力的空氣であると思ふのである。予等の觀察する處では、予等は盛岡市に生れ、盛岡市で育つて、而も年まだ若い爲めに、小僧視されて居る弱味と、高橋氏の經歷の堂々たることゝは、比較にも何にもならないが、しかしその半面に、高橋氏が無緣の盛岡に、政友會と政友會總裁としての强味よりも、この金力の方がどんなに强味であつたかは、明確に信じ得るのである。高橋氏を萬一にも護憲の頭目、總裁、前總理大臣として重きをなされたと思つて居られるならば、それは氏に阿附する人の言であつて、眞率の申分ではない。『予は高橋氏を輸入せるにあらず、彼の運動費を輸入せるなり』と放言した人さへあると云ふことである。又高橋氏を輸入して、田子と戰はせるのは盛岡繁榮策の一つであると傲語した不謹愼、不眞面目なそして醜怪な言葉を發した相當の地位に居るものさへある位である。いかに多くの運動費を高橋氏の手より出さしむべきかと云ふことは、始めより明瞭して居るのであつた。金力的空氣の點に於ては予等は絕對的に零であつた。その點を少しも遺憾とはしない、思ふ存分金力を擁し、予等の意見を公表し得る新聞紙をもち、堂々と論陣を張り得る樣にも望んだか、徒勞であつた。しかし金力空氣の乏しい丈け、全國各地より每日每日寄附があつた。在上海の未知の人よりの千圓を始めとして總計五千餘圓との事である。そして福田博士は、予を政黨員としては贊成するものでないが、社會政策について了解する者に對してとして、長文の手紙と金員とを投じて激勵された。知友の貧乏人程、多くの金員を投せられたのは、亦奇であつて、鄕里では小學校の同窓生や有志は巨額の資金を投せられたのであつた。從つて空氣としては自ら資金を投じても、當選させたいと云ふ人々は非常に多數であつたが、その人々は投票獲得にはなれない人々であつて、金力空氣に引きつけられて、運動專門家か高橋氏についたのは、確かに高橋氏の金力空氣の賜である。高橋氏の財政家たるより、公經濟家たるより、最も有力であつたのは、私經濟の優者であつた點に存するのである。

對戰の狀況

對陣の形勢はすでに斯くの如しとせば、政友會としては、理想的には既存の地盤を擁護し、新聞紙によつて高橋氏に對する空氣を良好ならしめ、予に對する空氣を惡くさへして置けば、立派に勝てる筈である　政友會岩手支部の人々の演說にもあつた如く、盛岡市は政友會の天領で、嘗つて他黨に一票たりとも奪はれたることなしとせられ、又岡崎政友會總務が岩手政友會支部で言つたやうに天下盡く政友本黨に走つても、大慈寺墓畔丈けは、斷して政友會を死守しなければならないと信じて居る人の多い地である。政友本黨としての黨員も少なく、又本黨に對する諒解も極めて薄く予等の辯明や說明丈けでは本黨の辯解と觀るに過ぎない。斯くの如き事情を以て進んで居る故に、予等は敵陣を一步一步切り崩して行かなければならない立場にある。一人一人同情を得、諒解を得て進まなければならない。それに故鄉を出てゝ廿年近くにもなり、每年墓參に一回歸鄉するを例として來たが、常に一二泊しかしない爲めに、未知未見の人が多いのである。此等の點を考へ來れば、高橋氏を擁する人は、政友會は即ち故原總裁、故原總裁は即ち政友會と單純に宣傳し、高橋氏は政友會の總裁であり、盛岡市より政友會の總裁を選出することは、最も意議が深いと單純な宣傳を試みれば足りるのである。政友會の天領に、政友會總裁を擁立した所以もこゝにあり强みも又こゝにある。予等はどこまでも、國民生活の安定、社會政策の樹立は、予等の如き青年でなければならないと云ふことゝ、盛岡市の選擧區には、盛岡市に最も諒解ある者が適當であるとする、極めて論鋒の弱いことを以て進んだのである。

予等は第一に言論戰を以て有權者と市民とに訴へる計畫を立てた。盛岡市發行の新聞の多くは高橋派（高橋氏を擁立し之を援助する人々を假りに高橋派と云ふ）であり、東京諸新聞も亦多く、高橋氏に同情するが如く見えたので、どうしても力を言論にそゝぐことを、最も緊急としはじめたのである。而して、言論も餘りに芝居じみた場當り的な、世界の大勢などを吹きまくる、所謂政談演說式―舊來の政談演說と云ふのは手前味噌をならべて獨りよがりとか大法螺を吹く底のものが多い――を全然避けて有權者市民の各人に、立候補の精神及び立法府に對して、抱懷して居る所を最も親切に赤裸々に露骨に話すと云ふ方法によつた。これは立派にして、有効な政談演說であり、政見發表演說會である。しかし舊式の政談演說會と稱することが、極めて粗野に、粗末に、輕薄な、響きをもつのである。殊に故鄉で先輩知人を劇場等に招いで大布呂敷をひろげる式の演說をなすのは、いかにも人を愚にする感があるから、參謀部では、

主催者を後援會とし『田子一民君應援懇談會』とし、殆んど各町毎に開催するの計畫を立てた。斯く計畫を立てたと云ふより寧ろかゝる計畫が自ら立つたと謂つてもよい位に各町に開かれた。從つて何町を何日と指定する譯ではないが、自然各町の有志者篤志家が主催して予を招待し、政見を聽取すると云ふことになつて來たのである。これは必ず將來各地方に行はれるものと思ふし、又現在行はれつゝあるものと思はれるが、その概要を記するのは、予等の戰法の中核を發表することになるから、敢て之を述べるのである。主催者には何等の制限はない、たゞ予に對し、諒解ある人が自ら進んで開會の準備、開會中の世話後片付けをするの勞をとるのである。開會の準備としては、予を招待して政見を聽取したいと云ふ趣旨の案內狀を、有權者始め有志者に發送し、當日はその紹介は、案內狀を受けた人の來場を望み、成る可く妨害者を入れない樣に注意するのである。主催者にはその町のことに通した人を配して、妨害者の入場を少くする計畫で進むが、事實上これが防禦は困難であつて、多くの場合泥醉者や、醉つた如く見せて、騷擾を惹起する爲めに來場するものもある。かゝることに慣れて居ない主催者であるからその苦心察すべきである。次には開會の場所は、多くは個人の宅、料理屋の大廣間、消防組の番屋、寺院の如きところである。

個人の宅でも、二百人も集まることもあり、漸次盛になつて來た。盛岡市の消防組には全國に多く類例を見ない立派な番屋がある。この番屋は非常に便利であつた。盛岡市の誇りとしてもよいものである。法律上はこの會は政談集會とみとむべきものであらうから、警察官の監督を受けて居るのは當然である。始めの程は、寧ろ輕く見られて居たが、段々この演說會で勢力をまし、敵の陣營をうち破るに都合がよいので、餘程之を厄介視したらしい。高橋派ではこの場所の提供を斷らせるとか、番屋を貸させないとか、隨分うるさく妨害したのに徴してもわかる。散會後は、有志の質問に應じて懇談するが極めて親しみのある正直な掛値も衒氣もなく、赤裸々に候補者の政見を了解せしめ、批判せしめるによいものである。かゝる會は毎夜(七十日間)開かれ、場合によつては、一夜二個所に開かれたこともあるが、これは寧ろ不徹底に終つた場合が多い。應援の演說會は全く友人達である。市內の大銀行の頭取の人もあり、有力な醫師の方もあり、遠方からは博士や學士の人なども來られた。外國に居る友人が、歸朝後家門を過ぎて來た人もあるし、鄉里出身の大學生諸君の如きは野外でさへ演說し、峯田一步君は飄然と盛岡に表はれ愛嬌ある演說をなし、田中館博士(愛橘)は遊廓町の懇談會に演說されたことさへある。この遊廓地帶は町

內結束と稱し甚だしく予等に反對した。町內結束とは高橋氏に贊成する人に丈けの申合せでなく、ある人々が主唱し、之を町內有志の意思とし之に反對するものは町の平和を破るものであるとして脅迫的に贊成せしめるのである。他人の權利を蹂躪する譯であるが、他方ではまだ〳〵こんなことで、專問運動者に貴尊な選擧權は左右されて居る狀態である。而してかゝる專門者を動かすには、ある種の力を要することは已に陳べた所である。この遊廓地帶の懇談會に、珍らしく高橋派の有力者が表はれた。大に雅量を示したものと噂して居ると、戶外で鐘をたゝいた、刹那本人自ら、「火事火事」と連呼して去つたものがあるが、誰れも之に應ずるものがなかつた。要するに政見發表を各町めがけて、とりに行つたことは、予等の計畫としては極めて適當であつたが、應援辯士と候補者の奔命につかれることも亦甚だ大である。こゝに滑稽な一事がある。予等のこの小政談集會を以て高橋派では、事甚だ婦女子に類し、隋處に人を會し泣き落し式に演說することは、醜態であると評して居たが、後には高橋氏も、この懇談會通りの會を市內隋所に開き高橋氏さへも話しをした位である。三月某日の川原町に於ける鰻飯事件と稱するものも、この懇談會での出來事である。予はいかなる事件であるか、之が眞相を知らないが當日高橋是淸氏より招待狀を出し有權者を集めたことは事實である。その會での會食であるとして、已に罪せられたものさへある。饗應を受けたものが罪せられて、招待した人は、何等の關係もなしとする、法律關係さへも明かになつて居ない樣である。この式の懇談會は高橋氏自ら招待者となるのであるが、予等の懇談會は有志者が主催し予は招待を受けて出席し、政見を吐露すると云ふ譯で、內容は同じであるが形式は全然異つて居る爲め、高橋氏の樣に、迷惑する場合を生ぜぬとも限らぬから、寧予等の採用した式を、全然模倣する方が安心であつたと思ふ。

懇談會に配するに所謂大演說會も開いた。この演說會は中央の名士を招待して開くのであるが、三月廿九日に開いたのは最も珍らしい現象を見せた。當日は演說會を二ケ所に開き、これを晝間と夜とに分け、晝間は有權者の招待會とし、夜間は一般公開演說會とした。晝間の有權者招待會には、中橋、松田、吉植、山村四氏の外、予は壇上の人となつたが、四時間に亙つて靜肅に謹聽し、水を打つたるが如き光景は、全く感激する外はなかつた。入場者一千二百人內有權者八百人と注せられた。然るに夜の公開演說會は、全然狂暴の一群の爲めに騷擾動亂の巷と化して了つた。晝の會は河北內丸座で開き、夜の會は河南八幡町裏盛岡劇場で開き、前者は午後一時後者は午後七時開會になつて居た

お、夜の會場の大部分は、午後二時頃已にこの夜の妨害團によつて占領されてゐた。此等の人々は多くは郡部より有料にて狩り出したる何事も知らぬ無知の人らしく、午後二時には已に早く會場に闖入し、先づ場内の椅子の如きものを破壞毀損し、甚だしきは演題の書き出しさへも悉くとり去つて仕舞つた。未だ演説會も開かぬのに、かくの如き暴狀を極めることは何の爲めにするものか、後にてこの狀況をきいた予等は、たゞ馬鹿々々しさに果然たるばかりであつた。予等は晝の有權者招待會の靜けさと、眞面目さにたゞ感激して、夜の會場に馳けつけた際は、騷擾團に占領されて居た會場の外には普通の聽衆は數百名潮の如く押しよせて居て、その中には投石さへするものがあつた。殆んど意味の解し難い暴狀であつた。高橋派の目的とした所は、予等の演説會を混亂に陷れて、解散の止むなきに至らしめれば可なりとするに過ぎなかつたらしく見えたのである。會場内には千七八百名無理押しに押しつめられて居るが、その中には數百名の醉漢、殊に何れよりか雇はれ來りしものと思はれる人々は、たゞワーワーと喧騷した演説者を妨害するのみである。開會の辭を述べた堀合法學士を始め、中村啓次郎氏の雄辯も、少しもきゝとれるものでなかつた。そして何ものかを投じ來り、予等の入場する前には、警察官の劍さへいためられたとの事であるが暴狀實に形容し難いものである。道塗傳ふる所によれば、高橋派に於ては、郡部より相當の日當を給與して妨害の爲めに招きよせたもので、劇場隣りの去る料理店を始め、市内各所で飲酒して闖入したとの事で、勿論政治上理解あるものでないとの事である。之が爲めに予等の同志たる青年諸も、切齒扼腕しつゝ壇上の予を護るの姿であつた。我慢に我慢した青年の心狀こそ察するに餘りある。演説が進むに從つて漸次騷擾する人々も疲勞し、且つ、醉はさめて來て、松田源治氏の演説の頃になつて、段々靜かになり、最後に予の登壇した際は、三十餘名の騷擾指揮者が、一時に退場した爲め、演説を進めるに左程困難でなくなつたのであつた。憲法政治は言論の政治なりと云ひながら、どこに言論を重んじた風があつたか。何人が之を企てたのか、當の責任者は高橋總裁を當選せしむる爲め、斯くまで卑劣な行爲に出たことに對しては、永くその責任を負ふべきである。ともかく演説會は十時頃閉會を告げ、而して、最後まで演説會を進行せしめたことに對し、予等に同情する人々は眞に男泣きに泣いて喜んだのであつた。にもかゝはらず、東京諸新聞は、田子派の演説會は、中途で解散したと傳へた。演説會としてはその後、和田彥次郎氏、澤柳政太郎氏の來援もあつたが、何れも靜粛になつた傾向であつた。

高橋派の主力は、演説會に注がれ、小川平吉、東武、堀切善兵衛、龍野周一郎、中島鵬六、永井柳太郎、横田千之助の七氏の如きその主たる應援者であつた。又盛岡在住の名士も、予等の懇談會同樣のものを試みた。此等の人々の演説は、多く予等に關する惡罵を試みたものは成功せず、横田氏の如く、高橋氏の老齢にしてなほ盡さんとする所を賞した者に、共鳴した者が多かつたらしい。思ふに、高橋派では、東京よりの來援演説ではたしかに優り、懇談會では五分三分であつたと思ふ。從つて、言論戰に於て高橋派は、優れて居たことは之を認めなければならないと思ふ。しかし候補者の言論に對する眞劍さと、その度數に於ては、予は高橋氏にまさる數十倍であることを確信するものであるが、高橋氏も懇談會に於て、前後數十回の演説をされたことは、實に之を多としなければならない。其の效果は、却つて票數を減少する丈けであつたことは、第二回の懇談會の來會者の、極めて僅少なりしに鑑みて明瞭に知り得るのである。演説の力は、たしかに横田氏に存したことは、敵味方とも之を認めるであらう。我が軍に於ては中橋、松田、吉植、中村四氏を始め和田氏澤柳氏の來援は、非常なる力であつたことは、附加するまでもないことである。

戸別訪問については東京の先輩で之を中止すべしと注意して來た人もある。しかし有權者は、まだ候補者の顔もしらないとか、宅にはまだ一度も來た事もないとか、近所の有力者（平素交際ある人をたづねても〳〵をたづね、私の家をたづねないのは、貧乏な爲めに、輕侮してゐるのだなどと、云ふ樣な戲言でも云はれると、運動上どうしても之を放任して置く譯に行かず、一軒をたづねれば、亦他にも及ぶと云ふことになつて、終には、各戸の訪問となるのである。予は戸別訪問する人の姿を、甚だ氣の毒に眺めたものであつたが、今自ら晝中の人となつて見れば、實に感に堪へないものもあるが、しかし政治上の道の爲めとあれば、止むを得ないし、又郷里の者が、郷里の人々をたづねることは、一種の親しさをますこともあり、必ずしも他から見る程の苦痛ではない。しかし高橋氏の市内の名士有力者訪問も、小規模の戸別訪問である。高橋氏の小規模の戸別訪問に於て、他人の門に立つた後ろ姿を見た人は、故原總裁選擧の際は、奉書に推擧連名をなし、之を上京委員が携帶して、承諾を願ふのであつたが、名實共に、故總裁の正當相續者と稱する高橋氏は、懇談會を試み戸別訪問をもなさゞるべからざるに至る窮狀、實に視るに忍びないものがあると言つてをつた。予は戰は正に眞劍であるべきとして信ずる以上、假令必ず勝つことを信じ乍らも、斯くする事が、高橋氏の勇氣あり、人言をよく用ゐ

る所の一端として、氏の心事に敬意を表した所であつたが、飜つて思へば、一黨の總裁をかく苦しめるのは、反對候補たる予の罪でなく、予等の立てる選擧區に、無理に押し立てた人々に責任あらざるなきかを思はざるを得なかつたのである。之を要するに、選擧法に於て、候補者の戸別訪問禁止を問題にしつゝあるが、將來普通選擧ともならば、とても戸別訪問は行はれ得ないものと思ふ。

予等をたすける人は、多く思想家であり、東京を始め市内各方面より、諸種の應援文章は公表された。中には高橋派の心膽を寒からしめるものもあつた。新聞をもたないものとしては、勢印刷物によらなければならなかつた爲め、非常に多くの印刷物は集まつた。後には、之を有權者に配布する時間さへなくなつた程である。それにポスターの寄贈は非常に數多く、中には學生達が熱心にあつめたものもあつた。文章應援とポスター宣傳とは予等の獨壇場で、高橋派では之に對して、策を施し得なかつたやうであつた。平民總裁第二世を强調すべく、子爵の大禮服を着用した高橋氏の寫眞の下に、第二世平民總裁高橋是清君と書き入れたポスターは、一時市中の噂に上つたが、後には故原氏の寫眞と、高橋氏の寫眞と對立さしてポスターに造りかへた。予等に同情する人々は『政戰ポスター展覽會』を三日間開催して、公衆に展覽したが、政治教育上にも亦予等の選擧上にも、相當の効果があつたと思はれた。その全國的應援のいかに熾烈であつたかは、想像されるであらう。高橋派の宣傳文章は、漢學流のもので、萬事は豪傑風であつて、下層の人々には理解は困難であつたらうと思ふ。この點では、全國的に應援を得た予等の强味であつた。

予等の應援者は、青年にしても有力者にしても、純眞な人々のみで、所謂運動者と稱すべく、餘りに勿體ない樣に思はれた。即ち世にありふれた運動員でなく、同情者應援者である。殊に有力者の中には從來選擧運動には一切從事したことがないと云ふ人が多く、その人々は家業を廢し、或は全家擧つて、或は夫婦共力し、或は親子相共に、或は兄弟相提携して運動し、爲めに親戚の間の往來を中絶し、或は友人の交際を絶つたものさへある。市内には親子意見を異にして別居したとか、婿は高橋派に屬して離縁になつたとか、何々組合は之が爲めに分散したとか、實に平和を破るが如き事實は、續々表はれて來る。又予に同情した者が高橋派の者より借金をして居つて、その期限到來で非常に苦しめられるとか、土地の借戻しを請求して來たとか、質入をとめられたとか、事容易ならぬ狀勢であつた。それ丈け戰が白熱化して來た。たゞ一片、若者に對する同情が斷

かる狀態をかもすに至つたことを思ふとき、名狀し難き感慨に耽らざるを得ないのである。新聞の横暴な筆ぶりと、政黨員等の獨斷とは、いたく青年達の反感を買ひ青年結束して予を援助し、高橋派大いに之に閉口して、青年を政治に利用するは不可なりとする論なども、相當な地位に居る人の口から出た位である。しかし全盛岡市青年聯盟は、内務文部兩大臣の訓令によるものでなく、社會的にも政治的にも、活動せんとする四十歳以下の人々の團結である。たゞ予等の最も痛心した事は、此等の人々は、高橋派に雇はれた人々により、喧嘩を賣られ、うつかり之を買ひ受けるとか、又は、高橋派の演説會に妨害を試みるとか云ふ、野蠻な行動を、絶對になからしめ樣とした點にある。新聞は常に暴力團などと惡罵し、以て市民の同情を失はしめんと試みたが、終に重大事件を生ずるに至らなかつたことは、青年聯盟の人々の自重心の賜であるが、單に通信や電報のみによつては、予等の青年達を、暴力團の如く誤解して居る者の多いことは甚だ遺憾とする所であつて、予の青年諸君に、餘りに溫柔を強いた事を、青年達は遺憾と感じて居る位である。恐るべきは筆であつて、この純眞無雜の青年を、暴力團の如く思はしめるに至つては、遺憾の極である。斯く青年を誤り見ることこそ、青年の思想を惡化せしめるものである。さて高橋派では護憲青年團と云ふものを造つた。予等の青年聯盟の永久的なるに反し、之は又選擧期間丈けのものであり、青年聯盟の自發的なるに反し、護憲青年團は選擧運動者の勸誘に基くものである。それ丈け勢も熱も乏しいものであつて、懇談會に模倣を試みた如く、青年團にも模倣を試みたのである。青年を政治上利用することは、不可なりと唱へた人々も、自ら政治的な名稱を附した青年團さへ造るに至つた。これも亦一奇と云ふべきである。

高橋派にして模倣し難い一事は、全國的の應援である。熱烈なる應援の表現として、毎日電報手紙等を以て運動者同情者後援者に慰問激勵し來るもの、平均三十通であつて、七十日間に三千餘通に達し、之が整理に時々洩れをさへ生ずると云ふ姿であつた。金品の寄附の如き、已に述べた通りで、更に全國各地の神社佛閣に祈願を籠めて、必勝御守、護身御守を贈られるには、感激に堪へ得ざるものがあつた。高橋氏に百圓の寄附ありたりとて、諸新聞之を揭げたが、予等には、五千圓以上もあると云ふ姿であつた。

對陣の狀況斯くの如き間に行はれるものは、所謂戰術である。此の點では、予等は全くの素人であるから、有權者が投票すると云へば投票するものと信じ、依賴を承諾したと云へば確實であると信じたのである。勿論予の同情者は、幾人も、多き

は十幾人も同一人に對して依賴はして居るが、その挨拶のみを信じたのである。斯く信ぜさせられた人々は、千百名以上も投票場の間を往復して居るのであるが、實際の投票は、八百十幾票に過ぎないのである。官吏生活をなし世に慣れない者は、たゞ他人の言を信ずるのである。又予等の同情者も全く他人を信用して居るのである。予等の頭腦には、ある返事も、ある强力な爆彈にかゝれば、それは忽ち、又は少くとも多くは、變化するものであることに氣がつかないのである。對陣中にも幾多の流言は行はれた。假令田子派が勝味があつても、前夜には、引つくり返して見せると云ふ如きで、この流言はまさかに高橋派の幹部の言ではあるまい、運動員の一二の人の言が、斯く擴大されて來るに違ひがないが、果して間ぎはになつて、或る强力な手が加へられた。五月十日の朝三時、高橋派に屬する旅館より出火したとの全然の虚報が傳はり、高橋派に同情して居る消防組が之にかけつけ、其の間に有權者の門戸はたゝかれて、所謂狩出しに遇ひ狩り出された人々は、投票所の隣りなる某料理店につれ行かれたのであつた。そして市内新聞の號外は、火事の報の至つた直後發行されて、之が田子派の行動であるかの如き虚僞の事實を流布したのであつた。而も警察が取調べても、かり出された人は投票し、失火を流傳した人は、單なる誤りであつたと云ふに至つては、大正の御代にもかくの如き暴狀が、公然と行はれ、選擧に勝ちさへすれば、後は野となれ山となれといふ態度は、如何に市民を毒し、青年の思想を惡化するに至つたか、衷心からなさけなく思ふのである。

之を要するに、予等は、素人として、眞面目に、誠實に、正直に進む陣形と戰法とを採用するものであるが、高橋派では、所謂戰術と爆彈との力によつて、戰つたのである。予はこの對戰より「理想選擧とは落選を目的とする選擧を謂ふ」と云ふ所感を得たのである。高橋派の戰法は、術數による戰法であつて、予等の戰法は、生ま生ましい素人兵法であつたのである。上品に見え、景氣よく見えるが、勝ち得た點丈けを、十日の聲に奪取せられるのを、平氣で居る生まやさしい戰法である。最後の五分間と云ふのは、愈々投票の終る時間まで、唯々狩り出しと投票場に送りこむ丈けの氣分を、濫醸する丈けの用意で、所謂最後の五分間に對する用意の、いかなるものであるかを知らなかつたのである。

對戰の終りに一言附加して置きたいことは、この度の選擧に、予等の戰は、婦人の味方に最も力を致されたことこれである。予は盛岡市の出身である理由を以て、鄉里の若者が、鄉里の爲めに、將又國家の爲めに、貢獻せんとすることを阻止し、

强いて他國より候補者を拉し來つて、鄕里の若者を踏みにぢらむとすることは、正しく我が子の教育にも障害となるのである。實子が眞面目に勉强しつゝあるのに、他から年老いた養子を迎へて、實子を廢嫡するのは、無慈悲であり、母の心に反すると云ふ樣な考と、若者を中央に送るは、新時代の要求であるとの二つの思想に基いて居る樣である。この理由の可否はしばらく別問題とするも、何れにしても非常な同情を以て應援された。而も皆家庭の主婦として、立派な人々であつて、男子よりも深刻にして周到な活動ぶりであつた。決して戶別訪問如きの、上すべりのものではなかつたのである。諸新聞に予の妻は、娘と共に戶別訪問をなした如く報ぜられたが、妻は戶別訪問をしなかつたばかりでなく、娘は歸鄕さへしなかつたのである。

對戰上の虛實

世上多く傳へた處では、高橋派の作戰は言論を張ること堂々、相撲で謂へば四つ相撲で、田子派の相撲は足とり相撲であるとせられた。これは多くの新聞紙に傳へられた報導で、その報導の基礎は多くは、高橋派の宣傳を基礎とするもので、實情とは全く異なつて居る。事實相違と云ふばかりではなく、殆んど揑造と云つてもよい記事ばかりである。予等の作戰上最も不利であつたことは、新聞に誤報の多く傳はつたことゝ高橋派では巧みに新聞を利用して、誤信を有權者に與へたことである。選擧上手とか、作戰上手とか云ふことの多くは、かゝることを言ふのかと思へば、立憲政治も自治行政も、岌々乎として危い哉と嗟歎せざるを得ない。今對戰の虛實の如きをこゝに述ぶるは、予として忍び得ざる處である。況んや對戰七十日間の實狀の如き、之を筆にするは冗煩に堪へざる處であるが、予等眞純な者に取りては、實に大なる教訓を與へられたものがある。故にその一二を附加したい。或る時、予等に同情を表して居る有識階級の多數に、端書が投ぜられた。又予等の運動者に對しても同一の端書が寄せられた。その文の趣旨は『我總裁高橋是淸氏に投票せざる者は暗夜にあるくな、鐵拳生』と云ふ樣なものである。予等の同情者は皆憤慨した。その發信人の何人であるかは知らないが高橋氏に同情する人が、田子に同情する人に對する脅迫狀である。斯くまでして投票せしめんとする心理は憎むべきであると予等同人は憤慨して居ると、この端書を寄せられた人の中には、高橋派では斯く脅迫するが紳士らしくない。かくせらるる以上は、益々田子に同情して必ず投票すべしと言明して來る人さへある。然るに一兩日後には、市内の大新聞には田子派離間中傷策と移して、之が發信人は田子派である

と宣傳し、獨りその罪を田子派に嫁するばかりでなく、田子を以つて暴狀を敢てするものと誤信せしめたのである。五月十日午前三時を期し、高橋派では、一齊にとり行ふべしとの説は九日の深夜に囀せられた。予等は必ず爆彈の投下であらうと信じた。然るに、十日午前三時に前述したやうな、高橋派に同情して居る事務所同樣の集合所からの出火の狂言の如き醜劣手段を以てした。而して、表面に言論政治、護憲運動と稱する看板を掲げその行動の眞意を疑ふものである。政友會總裁高橋是清氏心中果して淸き當選と信じ得るか。胸中果して、天皇陛下に對し奉り、攝政宮殿下の御前に立憲の大道を歩み來れる當選なりとの信念の下に進み得るか、予は衷心より氏に問はんとするものである。

市內隨所に行はれた買收の片片として檢擧せらつゝある丈にても數千名に達して居るのである。これは少しも新聞に報導せられないが、予の如きは、收監せられむなどゝ宣傳する盛岡電報がある位である。男を女とし女を男とする力は、新聞は有せずとも、男を女と思はしめ女を男と思はしめる力は、たしかにもつて居るのである。實に予等にとりては政治界選擧界の虛實について、憲政の前途を思はしめられた事が多いのである。その他有料雇入の護憲青年團員をして、全盛岡市青年聯盟員に喧嘩を押し賣りし、その後に某新聞社の寫眞隊が追尼して之を撮影し、田子派青年の暴狀とか、甚だしいのは暴力團とか誤信せしめるに至つたのである之が爲めに、青年達の憤慨その極に達して居た。開票後護憲派青年團員が、予が宿所に多數來つて、萬歲を連呼し、市內を練りあるいて、青年聯盟の人々に喧嘩を賣り、終に傷害に至らしめたことなど、實に殘念に堪へざる所である。世間は金で雇はれたと傳へられる暴力團を以て、護憲の道を歩む純眞の青年と信じ、正義と愛とに立脚して、心からなる同情の青年を以て暴力團と誤信する所に、思想の惡化があるのである。予は多年青年の事を考へて來たが、この度の選擧により、青年を毒するものは先輩の策士であり、青年惡化の責任は、この人々が負擔しなければならぬことを思つたものである。

選擧界には斯くの如き醜劣な行爲が行はれ、その強力な暴狀を執りて、投票者の心をつかみ得ることは、實に遺感なことである。選擧は、到底尋常一樣の通常手段では、進めるものでないことを、痛感せしめられた。間際の事、最後の五分間の努力とは何事を物語るか、買收、かり出しこのものを謂ふのである。高橋氏派に買收された人々の氏名の如き、之を公表する必要は無論ないが 檢擧された者丈けでさへ予等をして痛憤せし

めるのである。『理想選擧で進むものは落選し策略で進むものは當選す』とは大體に於て誤りなき共通點であらうと思ふ。

予の實驗と憲政の將來

予の選擧取締りに從つたのは、大正元年の衆議院議員の選擧で當時警察部長の職にあつた。取締を受けるものとしては始めてゞある。この取締るものとしての感想と、候補者としての感想とは、格段の差異がある。殊に高橋氏の參謀には、村野常右衛門堀切善兵衛龍野周一郎三氏の如き、選擧界の巨頭が多い丈け、その策戰も端倪すべからざるものがあつて、予等の如き無經驗の者には、迚も想像もつかないことが多いし、選擧權者も、斯る白熱的な大袈裟な選擧に逢着したことがあるまいと思ふから、これを基礎として選擧界の事を議するのは、失當の場合もあらうが、予としてはどうしても一言せざるを得ないのである。

勝敗、當落問題。選擧界では候補者の主張に共鳴するとか、同感するとか云ふことが、當選には大した關係はない。結局選擧權者の利害によつて決せられる姿である。先づ知らねばならぬことは、同情同感が投票となるまでには、幾多の條件が具備せられなければならないと云ふことである。從つて同情があるとか、空氣がよいとか云ふことは、それを以て直ちに投票が多くなると速斷してはならないのである。選擧界の空氣を釀成する素養としては、候補者の政見、應援演説者の演説内容、ポスター、宣傳文章の如きも大に力があるが、最も强大なる力を有するのは新聞である。新聞の言論よりも寧ろ、候補者、運動者、運動ぶり等に關する記事は候補者に對する空氣を造るものである。この事は、小なるが如くして大なる問題である。新聞記事の裏面を知らぬ人々は、新聞を以て教科書として居るのである。殊に選擧の場合などには、新聞記事を以て運動者の運動材料として居る爲めに、必ず力强いものである。候補者に對する空氣を作る機關として、新聞は最も有効である。しかし、この候補者に對する空氣も、識見ある人々に對しては多くの効力はなく、唯一般普通の人に對しては絶大の効力がある。

選擧權者には、候補者の運動も運動員の運動も、社會の輿論も、一切眼中に置かず、投票するものがある。例へば政黨員の如き、相當人物に理解ある人の如きこれである。又候補者の經歷とか、人格とかを標準として、決定するものもある。しかし候補者の、議員としての主張と云ふ様なことに、重きを置くものは少なく、却つて極めて輕微に見えることに共鳴する人もある。例へば高橋氏の護憲論よりも、老齢者で今回限りであると

說かれた場合に、之に同情するが如きこれである。今高橋氏と予との得票で謂へば、高橋氏八百五十九票、田子八百十票であるが、この中高橋氏の老齡を理由とした投票は、恐らく三分の一はあると思ふ。本稿を草しつゝある際も、頻々として檢擧の報がある。買收投票は基礎でなく最後の勝利點である。即ち基礎點は空氣によつて獲得するが、最後の決戰點數は、買收によつたのである。例へば、何れも八百點台は强固になつても、最後の七八十票のものは金力によつて動かされるが如きことがある。違反の事實、續々現はれるのを見れば、之を否認する譯に行かないのである。故に最後の爆彈を投下された場合は、如何とも致し難いのである。而して買收には平素から一つの系統があつて、何某と何某よりと略々分野は定まつて居り、決して急に思ひ立つて直ちに成効するものでない。之等の人々を決死隊と稱して居るが、いかなる人がこの任に當つて居るのか知らない。

地方問題を以て瞞着した事實は澤山あるが、何れも識者からは、滑稽視すべきもので總裁の運動員としては、實に噴飯に堪へないものがある。某停車場の位置を變更するには、高橋氏でなければならぬとか、高橋氏落選せば、盛岡市にある鐵道省の建設事務所は廢止されるとか、盛岡を起點とした山田線の建設は中止になるとか、鐵工業者に對しては東京の砲兵工廠を移轉するには、高橋氏の力によるべしとか云ふのである。甚だしいのになると、高橋氏は憲政會内閣に大藏大臣たるべし、落選せしめれば盛岡市は不幸になると云ふ樣に說いた政友會岩手支部の役員もあつたと謂ふ位である。地方民の數部にはまだ〱かゝる事に誤まられる人さへあるのである。

次には個人の利害關係では、銀行關係で貸金問題とか、家賃の催促とか、貸金の督促とかで責めたり、親戚緣故關係で說いたりする實例は澤山あるのである。

斯る事情によつて、當落は決せられるとせば憲政も容易に樂觀すべきでないと思はれる。さしもに、大戰の如く思はれ事實堂々たる大戰も始めは言論によつて戰はれ、後に利害關係により戰はれ、次いで親戚緣故に因り、最後に買收によつて勝敗が決せられるのである。利害緣故は言論よりも强く、金力は言論よりも强しとなれば、將來の選擧界の大勢も推し知らるべきである。それにしても、犬養氏、尾崎氏の如き金力を擁せずして、絕對多數で當選し、高橋氏は言論により、策略により、金力により、而して予等は單に言論と、說得とによつて、斯く戰ひ得たことを思へば、實に故鄕の先輩知友並に全國同憂の人々の同情に感激せざるを得ないものである。

將來の憲政を清くするの道は、成る可く多くの識者に、選擧權を附與するを最も適切と考ふるのである。普選の形式はいづれにしても、財產に重きを置かずして、識見に重きを置くを主眼とすべきであると思ふ。而して婦人に選擧權を附與することが、選擧界をして利害關係より引き離し得る道であると思ふ。今回の選擧戰には、婦人の參加した數も多かつたし、又人格の良い人々のみであつた爲めもあると思ふが、地方の利害とか、自己の利害とか云ふことは、全然之を度外視し、眞に自己の信ずる者に投票せしめんとする勇氣の、著大なのに驚嘆した事である。男子は動もすれば、自己の公的生活及び利的生活の利害を顧念すること切實になる傾きがあるが、婦人は多くかゝることを眼中に置かない。例へば、男子は縣會議員とか、市會議員とかの立場を顧慮したり、營業上の利害の如きを顧念したりするが、婦人は此等の點には無頓着で、或る場合には主人がその營業も放擲して居るのに、自らも少しも不平を抱かない様になることを、實驗したのである。婦人の利害に淡くして、情に濃かなることは、却つて利害を主とする選擧界を廓清する上に於ても、必ず大きな効果がありと思はせたのである。予は普選を實施し、婦人に選擧權を附與することの可なるを信ずるものである。

今回の選擧によつて、投票なるものは、最後の一秒間、即ち投票に記載する瞬間まで浮動するの事實をたしかめた。投票所に入るときの相前後する人の心の動きによつてさへ、浮動せしめられることを知つた。高橋是淸と書く所要時間と、田子一民と書く所要時間との長短は、明瞭であつて、何某は高橋氏に投じ、何某は田子に投じたかと云ふことは、よくわかるのであるから、高橋氏投票の二人の間に、高橋氏に投せんか、田子に投せんか、迷ひ始めた者が立ちはさまれゝば、高橋氏に投する心理狀態になるのである。最後の投票日に、よく之をかり出し、よく說得し、或る場合には、やゝ脅迫的に說けば必ず動かされるし殊に金錢でも與へれば必ず動かされるのである。予等は之を誠に遺憾なことに思ふが、無識無智殊に生活に多くの餘裕ない人にとつては、止むを得ないことでもあらうと思はれるが、かゝる場合でも中等程度の學力を有する人は、運動員の運動や金錢で動かされ難いのである。無產有識の人は、寧ろ堅實味をもつて居り、無識無產の人は動き、又有產有識の人は、動もすれば大きな利害によつて動かされ得るのである。予は有識者でも無產なるが故に、選擧權を附與しない現在の制限選擧法は、實情に適して居らぬものと思ふものである。

餘錄閑話

無競爭政友會に立候補すべく擁立せられた余は政友會の分裂によつて競爭も極めて熾烈にされた。世は豫想外と謂ひながらこれ程の意外なこともなかつた。そして予はかゝることの慣れない爲め意外の滑稽もあつた。

墓前電報事件は一時賑かであつたが、それは知事の職に在るときであつたから、一層笑はれたのである。余としては眞目面も眞目面大眞目面なものであつたが、世間は之を宣傳賣名と見たのであつた。予は故原總裁とは同郷の後輩としての關係をもつて居るので、之を追慕することも人一倍である。從つて彿故した人として崇拜するばかりでなく生ける人として常に談合を交へて居るのである。選擧界に立つについても始めは立候補の意思を動かさなかつたが、後に立候補すべく決意し其の後一ケ月を經て正式に親展書を故郷の有權者に出した。その親展書を出すとき千七百四十幾通の手紙を故原總裁の靈前に供へ、立候補して以て御報恩の一端としたいと陳べ妻と共に燒香したその刹那感懷無量なものがあつて、どうしても胸が定まらず、その感懷ありの儘を電報としてだしたのであつた。弔辭讀經を少しも無理と思つて居らぬ余は電報を靈前に供へることも少しも不思議としなかつたのである。後に新聞等にそれが問題になつて居るのを見て、ハハーと驚いたのであつた。全くのだだつ子であつた。

予は黨派感情、政黨の面目と云ふ樣なものを左程重要視して居なかつたのは世間識らずであつた。盛岡市は政本何れにも代議士を送らず、中立のものを立て無競爭の地とするのは適當であると思つたのは極めて政黨の事にうとい素人考へであつた。政友會は古い政黨であり餘りに盛岡市からは故原總裁を選出して居つたから今更政友會として候補者を立てないと云ふ譯に行かぬことは餘りに當然の事であつた。予は今日は政黨の臭ひを知つたが、社會問題を取扱つたりして來た予としてはそんな事はどうでもよいでないかと思つたのであつた。自由黨以來政黨の事にばかり沒頭して居る人から見ると、無禮な奴と思つたのは無理とは思はぬのである。しかし選擧の事を政黨員の手でどうにもなると思つて居るのも横暴であり、誤りである。何れにしても予は政界の事に暗かつたのであつた。

予の立候補二ケ月後になつても、高橋總裁の爲めに辭退するのが男らしいと云ふ人もあつた。そして高橋氏の面目を立てゝやれと云ふ人もあつた。高橋派では小童(コワッパ)と稱し壓倒的多數で高橋當選と豪語して居たが予らにも爭心が充分あつた。高橋氏は

小童を眼中に置かぬ所に誤りがあり、予のまけじ魂、爭氣に戰を進められたのである。若し高橋氏と予と會見して話して見たならばどうであつたものか、餘程興味のあつたものと今でも思つて居る。

高橋氏が盛岡市に來られても終に御面談の機もなかつたが、どう考へても他人の口車にのせられて態々盛岡市に來られて隨分な苦戰、幾たびも懇談會に臨み、戶別訪問までつゞけそれと違反が續出し、萬一落選でもせられたら果してどうなられたのか實にあぶない相撲をとられたもので予として衷心何とも謂ひ難い感懷がある。而して此の善良にして無邪氣な茶番氣の老總裁を傀儡する人はそも誰であらう。

刺客笑話として滑稽な一事がある。刺客が盛岡市に入り込んで予をつけねらうと云ふ笑話を隨所に噂されたが、或る演說會の席に會の散會する頃聽衆の中から演壇に飛び出し、「諸君諸君」と連呼し會衆に向つて田子氏を落選さしては、盛岡人の名折であるとの趣旨を述べ自分は東京より應援に來たものであると稱して居た。會散じて不思議にも奇特な人であると噂して居たが懷中には小刀をかくしもち田子先生（彼は先生と云ふ）落選するが如きことあれば、予は自刄せんのみと云ふことを口走るのであつた。予等はかゝる神經質な人の應援には閉口すると云つて再三東京に歸るを勸めても中々きゝ入れない。或る時は予等の選擧事務所に又他の選擧事務所に入つて宿泊し予の旅館には再三訪ねて來て頻りに護衞せんことを求めると云ふ有樣であつた。然るに開標後落選と決した予は直ちに故總裁原の基前に報告し青年聯盟の人々を舊城趾の野多に集合して貰ひ明日より熱心家業に勵み大に修養を積むべきことを說いた。かくてある事務所を訪ふと件の男は赤坂區の高橋是清氏にあて當選を報し御安心あれとの電報をしたため小刀を投函すべく馳け出し忘れて行つたのであると云ふので事務所では大騷ぎである。さては件の一刀は自刄の一刀でなく田子當選せば之を暗殺明殺するの一刀かと噂して居る。今の世に昔の樣な芝居じみた事のあらう筈はないが斯くまで熱が高まるものである。

予の同情者には鄕土と云ふことは餘程强く感ぜられて居たが、それと同時に他縣の人々は鄕土鄕土と云ふに反對をもつて居た。宮城縣人の如きは大多數高橋氏贊成者であつて予に同情して居た、宮城縣人は餘程苦しい立場に立つた位である。この宮城縣の人でも盛岡を盛岡人によつて代表させると云ふことは、狹い考へだと評して居た人もあつたが、この批評の根本をなすものは即ち宮城縣と云ふ鄕土感情であつた。他人の事がよく見えるが予等青年は多くの斯くの如きことをなして居たもの

と思ふのである。自ら愧じて居るのである。

宣傳誤報の中々力强いことも知つた。東京に出て友人に逢つて見ると戸別訪問には一々有權者の佛壇に禮拜してあるいた樣に思はれゐたが、それは小學校時代の友人北田彌藏と云ふ人の宅をたずねた際、親の年忌で僧侶も來て、佛事を營み居り、その佛間は客間への通り途になつてゐたので、佛教信者である予は、當然の事として禮拜したのであつて、各戸の佛壇を一々禮拜しまはつた樣な譯ではない。又新聞記者の會見を拒絕した樣に友人から言はれたが、宴會に招待されたのは事實であつたがその招待は事實でその夕の宴會をその日の午前に申込んで來て、その夜は二箇所に懇談會が開かれることになつてをり、その後も引續き懇談會が開かれる筈なので、當時の狀況は到底宴會などいふ場合ではなかつたのである。勿論來訪の記者には盡く會見してゐたのである。決して記者會見の拒絕でも何んでもなかつたので、平素の予としてはこの宣傳は全く正反對なのである。觀じ來れば、予等の選擧戰の眞想は、容易に世間に理解されて居らないことを遺憾とする。

終りに全國各方面よりの同情の手紙、電報、詩歌、俳句、繪畫、勝札を始め、金品の寄贈を賜つたことを深く感謝し、且つ故鄕の先輩、友人、青年及び婦人達が予が不德と不明と未熟とに同情せられることに感激し、今後自奮自勵、心身を修養し、積苦累德の體驗をして、必ず大方諸賢の御厚意に酬いたいと念願して止まぬ次第である。玆に不德不明未熟の罪を天下に謝すると同時に、高橋老總裁は、潔く若き橫田氏の如き人にその地位を讓り、新味ある政友會として、政界一新のために盡されんことを併せて希望するものである。

惟ふに今日の政情は、徒らに若き一青年を屠つて、快心の笑みを洩らして、晏如たる程、しかく泰平ではない筈である。眞に深く思を凝らして、國家永遠の計を樹立すべき秋に際會してゐるのである。(六月五日)

夏の情趣

珊瑚の城

成瀬無極

露臺の下を水が流れる。川下の『古い橋』のあたりには無數の小船が五彩の珠玉を撒いたやうに暗に輝いてゐる。眼の下にも數十艘輕舟が紅玉、碧玉、琥珀さまざまの色に燃える提燈を揭げて浮んでゐる。金髮碧眼の人が欄に凭つて若い男と談笑してゐる。斷髮を風に吹かせて櫂を操つる派手姿の美しい人は米國の少女であらうか。兩岸は車と人とで埋まつてゐる。

鬱蒼たる樹木を戴いた城山が悠然と立つてゐる。その下に眠る古い街、古い教會、由緒ある大學、圖書館、そして、それ等の上に聳える頹廢した城—星月夜である。

四人の日本人と二人の獨逸人とで廣い露臺を占領した。七月の暑い夜であつたが、山から川を渡つて吹いて來る風に此處は早くも秋の訪れを感じる。下の露臺にはこの街の「胡蝶夫人」を中心にして多數の若い男女が集まつてゐる。川上から獨逸の國歌が聞えて來る。何處とも無く樂の音が漂ふ。

獨逸の詩人がピヤノに向つた。獨逸の女優が起つて古い民謠を歌つた。

火でも炭でも
人知れず
秘めた戀ほど
熱くは燃えぬ。

薔薇や石竹、

それにもまして
美しいのは
心の花よ。

わしが心を
鏡にうつし
見せてやりたい
心中立て。

詩人と女優とは相顧みて微笑んだ。

やがて城が燃え出した。古い城が眞紅に燃え出した。珊瑚の城のやうに、赤熱した鐵城のやうに、闇の中に浮び上つた。萬人の眼がこの童話の國の光景に吸ひ寄せられた。星も恐らくその瞬きを止めたであらう。しばらくは大きな沈默が支配した。紅蓮の城は何かの精靈のやうに思はれた。——やがて歡呼と拍手の音が起つた。

火の城がふと闇に消える刹那、「古い橋」が内部から透明に紅く輝き出した。同時に花火が續け樣に闇を貫いて空高く打ち上げられた。橋が墨繪の姿に歸ると共に橋桁から幾條かの火の瀧が水面に降り灑いだ。

歌の聲とギタやフリュートの音が響き出した。星が新たに輝き、水は潺湲と流れて行く。凡ての「熱」は珊瑚の城と共に消え、火の瀧に融けて飛び散り、水面を亙る凉風と色ばかりの光りとが夜を領するやうであつた。誰の口からともなく「アルト・ハイデルベルグ」の歌がうたはれた——

古ハイテルベルグ、美はしき、
ネツカア、ラインに
比ひなき
譽れの都。

樂しき人の住みどころ、
知識と酒に豐かにて、
清き流れの波間には
碧き眼の水鏡。

氣和げる南の
國より春の通ひ來て
花より紡ぐ花衣、
汝れは輝く花嫁御。

我れにとりても花嫁御、

心の底に刻まれし
汝が名を聞けばなつかしや
わが初戀のおもひして。

浮世の荆棘に刺されては、
世の味氣無さ覺えては
駒に拍車の一走り、
わが行く先きはネツカアタアル。

かくて、歌と音樂とに更けた夜を人々はなほ名殘を惜みつゝ、今はもう人氣の稀な川岸に沿うて「新らしい」橋の方へと歩いた。詩人は印度の神話から得た題材で、人間の官能が身體から遊離しつゝ、口は言葉を、眼は諸々の姿を、耳は樣々の響きを、知識は凡ての思想を「氣息」に委托してゆく有樣を歌つた自作の詩を暗誦したりした。「氣息」こそ生命である。「自己」である、

私は頽廢した城の事を思つた。「溪間に懸る偉大な、運命を知る城」のことを考へた。「されど永遠の日輪は老いて行く巨像の上に更生の光りを灑ぎ、綠の蔦葛生々と這ひまつはり、美はしき森は城を蔽うて鳴り響きぬ」といふヘルデルリンの句を思ひ浮べた。一年に一度、二度、古い城は眞紅に燃える。太息が眼覺めるのではあるまいか。私はまたこの國のことを考へた。

(13―6)

天幕生活をおもふ

若山牧水

私は割合に夏の暑さが氣にならぬ性分である。といふよりいつそ夏らしくきり／＼と暑い方が氣持よい方である。その暑さ

も街いきれ人いきれ、またはむんむと蒸す様なのでなく、眞夏の天心地心に照り入つた清淨な暑さである。從つて夏のあそびとしてゞない本氣の避暑といふものなど考へたこともない。が夏でなくては行へないといふ様な旅行、或る限られた生活をして見たいといふ希望はある。

伊豆の國の天城山の頂上近い或る尾根のてつぺんに青篠の池とも八丁池とも呼ばれて、噴火口の跡だといふ小さな池がある。水はよく澄んであまり深くない殆んどまんまるの形で、その縁は一帶に滑らかな眞砂の狭い濱となり、濱を圍んでは一面の青篠、また一町から二三町の狭い幅で四方に茂つて居る。東に當る篠原は次第高の岡となつて其處に一部の尾根を作り、やがて急峻な傾斜となつて遥かに下に押し降つて居る。その麓は即ち伊豆の東海岸となるわけで、身丈を凌ぐ尾根の篠の中に立つと殆んど眞正面に大島の三原山の煙が手にとる様に見えて、他はもう見渡す限りの青海原である。西南北の三方は例の天城御料林の密林が涯もなく茂り渡り、北には天城連峯第一の高峯伴次郎嶽が同じく深い森の衣をつけて鋭く聳えて居る。

池は僅かに周圍八町ほどしかないとかで、噴火口のあとゝいふのが可笑しい様だが、位置が山の尾根に當つてゐて、四方の見晴しの利くのなどが、却つて可憐な物寂しい感をそゝるのである。渚の砂の美しいのも眼立つて、その上一面には數限りない獸の足の跡が亂れてゐる天城は廣大な御料林であると共に大きな御獵場でもあるのだ。その森に棲む獸たちの此處は恰好な遊び場であるらしい。昨夜にも出て來たらしい鮮かな足跡を自分の膝のあたりに眺めながら、これは鹿で、これは猪、これは一體何であらうと幼時故郷の獵師たちから聞いた記憶を辿りながら一つ〳〵見分けてゐると、氣味が惡いといふより却つて可懷しい心が湧くのであつた。

私の此處に登つたのは四月の中ころで、天城の北麓に在る湯ケ島溫泉から溫泉宿の若主人と村の青年との三人して、都合では附近の谷間に在る山葵澤（山葵を植えた谷）の小屋でも見附けて一晩野宿しようといふ考へで、飲食物等をも用意して行つたのだ。然し、流石に山のいたゞきで暖國の春とは云へ、思ひの外に寒かつた。この寒さではとても泊れぬと諦めて、餘分の酒などを嘗めながら、永い間その美しい砂の上に坐つてゐた。

『天幕でもあつたらなア……』

不圖私はさうふことを考へた。いつそのこと連はない方がいゝ。たつた獨りで、天幕と洋燈と飲食物（水は池のが飲まれた）と燐寸とノートとペンと一二冊の書籍とを持つて、二三日で

も、一週間でも此處で暮して見度い、長い夜もい丶だらうし、光り輝く明るい晝もいいであらう、眼の前の池、池を圍む森、上の空、見渡す海、どんなにか靜かな自分をその間に見ることが出來るであらう、と考へ出すともうじつとしては居られぬ氣持にすらなつたのであつた。夜はさぞ寂しいことだらう、野獸たちは大丈夫か知ら、寧ろ彼等の方で驚いて唯だ一つ點つて居るこちらの洋燈を他の向う側からでも眺むることになるであらう、それとも物珍しさに天幕の側まで寄つて來ることがないとも限らぬ、それは先づ猪ではなくて鹿であらう、それとも猿か兎か、夜の引き明けがたには嘸ぞかしまた珍しい深山の鳥が啼くであらう、晴ばかり續けばい丶が雨はどうか、風でも荒れたらどうであらう、夏は一體に雨風の少い季節だから大丈夫であらう。先づ第一にわれ自らその寂寥に耐へ得るかどうか、……

……

その時ばかりでなくさうした空想をば現在でも私は懷いてゐる。單に空想といふでなく現にその八丁池から歸つた時には友人の小さな天幕を借りて自分の庭に吊つて寢て見たこともあつたのだ。たゞその天幕があまりに小さく簡易に出來てゐて、ほんの身體を隱すにしか値しないのを見、も少し違つた物が欲しいと探して見ると、あるにはあつたが價格がひどく高かつた。それこれでまだ天幕をも手にすら入れず、山上夜營をもようせずに居るが、考へ出すと其處此處の野に山に隨分とさういふ風にして出かけて行き度い場所が多い。

富士の裾野の中心をなす一大廣野を土地では大野原といふ固有名詞で呼んで居る。五六里四方、或はもう少し廣いかも知れぬ。その大野原の東南部に當る半分ほどをば陸軍省で大砲實彈射撃の場所として使つてゐるので困るが、殘り西北部、富士の根から愛鷹山の東北の麓にかけての大原野は昔のまゝの野原として殘つてゐて氣持がいゝ。野と云つてもべた一面に平かでなく、大海の波浪に似て豐かなカーヴを持つた丘がそれからそれへとうねり渡つてゐるのである。夜の天幕を張るもよく、また一夜は水を求めて青薄の茂り込んだ谷間に張るもいゝであらう。またさうして毎日擔いで廻る樣な旅行ならば天幕も先に云つた友人所有のもので澤山であらう。またその目的で作られたものでもあるのだ。

甲州から信州に跨つた八ヶ嶽の裾野も自づとその一夜泊りし天幕旅行を空想させるに充分な廣さと美しさとを持つて居る。この山の裾野は東西南北ともに大差ない地勢を持つて居るので、幾日かかけてその麓を一週するも面白からう。然し、私は

さうして毎日々々所を變へて泊つて歩く樣な天幕旅行を餘り好んでゐない。同じくば或る一個所に相當の天幕を張り込んで、其處に幾つかの晝と夜とを過して居度い。

八ヶ嶽の裾野の中で若しその一個所を求むるならば信州地の野邊山が原であらう。此處は野原といふうちにも殆んど涯のないまでに打ちひろがつた落葉松の林であるが、なだらかな傾斜を帶びて末廣がりに廣がつた形はどうしても矢張り野原である。此處は佐久高原を挾んで遠く淺間の裾野と相對し、その裾野の中に輕井澤や沓掛があるのであるが、眺望から云つたら到底この野邊山が原に及ばない。また海拔も輕井澤より高いであらう。

其他其處此處と考へ出すとさうして行つて見度い所が隨分と多い。速く實行しないと、やがてさういふ事をする餘裕がなくなりはせぬかと氣になるが、今年の夏も出て行かれさうにない。

（完）

夏來り夏徂く日の自然

黑田重太郎

「自然は複雜で、不決定だ（アンデシイズ）」と私の畫の師匠が云つた「この複雜で不決定な自然から、單純で決定的な——つまり恒久的な表現を獲取することが藝術の第一義だと思ふ。」二年程前の夏の終りだつた。佛蘭西南部のドルドオニュ谿谷で、約そ一ヶ月ばかりの間教へを受けた後、いよいよ明日は袂を別たうと云ふ日の午後だつた。季節の變り目を知らせて、その頃降りみ降らずみの慌しい空模樣に、ホテルの露臺から見られる其あたりの景色は、卽ち黄金色の太陽を浴びて颯と輝くかと思ふと、暗く翳つて行つた。私はその後、師匠のこの言葉を思ひ起すたびに、必ずこの背景を思ひ浮べる。何か其處は切り離せない樣のある繫ぶりがある樣に思へてならない。

複雜で不決定な——云ひ換へれば暫くも停止する事なしに

さま〴〵なものゝ姿がさまざまに移り變つて行く自然の景象の中で、殊更ら移り變りの激しいのは、一つの季節から他の季節に入らうとする頃の天候や、またその天候の下に展開せられる景色である。夏と云ふことは念頭に置いて考へると、私のまのあたり一入強い色彩を帯びて髣髴せられるのは、眞夏の烈しい太陽に輝く自然でなく、寧ろ春を送り、または秋を迎へやうとする頃の、慌しく、變り易い景象である。――これは畫家としての私の徑程が、久しく印象派の領域を彷徨してゐたかも知れない。併しそればかりでもなささうである。

畫家としての私は、單純にして決定的な表現に到達するために、先づ形と彩色の緒口に依つて、自然の恒久的な姿に入らうとする。そのために天候の一定した、眞夏の自然は甚だ都合がよささうに考へられる。しかも事實は私に取つて正反對である。私のペルソナリテは眞夏の自然に對して、その特殊の美を見出すよりも前に、それ等變化（ヷリエテ）に乏しい形や色彩や、唯だ一樣の明るさしか有たないそれ等の面の、平板な連續に先づ倦怠を覺えさせられる事が多い。殊にその眞晝の景色に於て然るのを覺える。これに反して初夏や晩夏の自然は、季節の常として共處に起される變幻極りない天候の變化によつて、平常見馴れた景色にも思ひも寄らない效果を私に提示する。その時魂の底から覺醒された私は、屢々自然の眞實に接觸して喜悅に戰く事がある。變り易いものゝ中に示される常住の姿――私はそれを思ふ私の家の近くの、下鴨の森の馬場の周圍に植つてゐる櫻の梢から淺黃色の葉がせり出して、それが次第に重苦しい綠に變るまで、老木に圍まれた、小さな祠の立つてゐる古池の傍の藤が咲いて散るまで、河を渡つて東の野の、ずつと叡山の裾まで續いてゐる苗代田が靑くなりまさつて、陰鬱な梅雨の季節に入るまで、毎年きまつて私は健康を損じる。恐らく冬の間から春へかけて、何時も身體の調子のよいのに乘じて、過度の讀書や制作を續ける結果であらう。さう思つて、その度に私は旅を思ふ。けれども懶いので、大抵の場合實現した事がないのだ。私は何もしないで、机によりかゝつたまゝ、屢々曇り日の、または雨が降らうとし、霽れやうとする空の下の、海邊の斷崖の上にある熟れた麥畑の景色を思ひ浮べる。何年か前に、ブルターニュの海岸に旅した事のある、その時の景色が記憶に殘つてゐるのかも知れない。併しさうでもない樣だ。何故なら、その時の記憶は、晴れた空の下に金のやうに輝いてゐる麥畑で、その麥の間にまじつて咲く眞紅の美人草の色に繫がつてゐるが、私の想像する景色は、雲低く垂れた陰氣な空模樣と對して、わづかに明るい色彩を呈してゐる段々畑の麥の色だ。麥畑の盡きる向に

灰色の巖山が立つてゐる、巖山の裾に白壁の家が一二軒見える。一方麥畑が絶えた手前に、急に抉り取られたやうな崖が見える。崖の根元には白い泡を嚙んで波が寄せてゐる。——畫にすると、浪がしらの白と白壁とがいゝ均衡(エキベラン)を取つて、空の灰色のある部分と巖山と、そして空の明るい少しの部分と麥畑の黄とが同じくいゝ關係(ラツポール)に置かれる——それは何だか小豆嶋あたりの景色のやうにも思はれ、また其處へ行つてもそんな景色に打突かりさうにもなく思はれるが、兎に角こゝまで考へて來ると、實際そうした景色を見ずとも畫が描けさうな位、急に想像が生々として來る。

暑い、退屈な眞夏が過ぎて、もう大分澤々しさの拔けた、それでもまだ夏の重々しさを失はない森の梢から、思ひもかけず病葉が一つ二つ散り出して、次第に葉影の薄れて行く枝の間に、白い雲の湧き上る靑い、澄んだ空が見え出すまで、何度も〳〵降つては止む雨に森の東手に添つて流れる小川が、岸の高さとすれすれになるまで水を湛へる頃になると、急に私の氣持がはつきりして來る。畫を描いても書物を讀んでも、何をしても結着まで漕ぎつけられさうな自信が有てる樣になる。今だ今だと考へ乍ら、其頃になると、きまつて年中行事の秋の展覽會の準備や、それに連れて起つて來るいろんた用事に時間を取られて了つて、何時の間にか仕事をする興味を失ひ勝である。そして實際は冬になるまで何も出來ないのだ。

でも私は夏のはじまりと終りがすきだ。何もしないで閉ぢ籠つてゐる時でも、用事をかゝへて忙しくあちこちしてゐる時でも、その間私の眼に映じる景色の中の、家でも樹でも、山でも、晴れたり曇つたりする夜に、急に明るい光の中に浮き出したり暗い陰の中に沈んだりするのを無意識に眺め乍ら、思ひがけない自然の鋭い一角が、その瞬時のあらはれの中に單純で決定的にあらはれてゐるのに思ひ當るのである。(一九二四、五、三〇)

夏の樹草

森田恒友

○

どういふ譯か、少年時から私は他の季節の來るより夏の來るのが大へん嬉しかつた。長ずるに從つて趣味が複雜になり、四季それ〴〵の面白さ、とりわけ近年は季に從つてそれを樂しむ心が強くなつたが、今もやつぱり春が段々過ぎて夏に向ふ時の氣持は、他の季節以上に一番に心を捉へる氣持だ。近年冬の季節に向ふ時などは、又冬が來るのかなあーと嘆ずることさへある。冬の自然の樣々な面白さを感得して居りながら、私の體質が此の季節には不向で、ひどく寒ざりのせいもあり、何やら蕭條たる黃土色と褐色の自然季に入ることが氣分を引き立たせない。夏は全くこれに反對の自然季だものだから、何となし浮き〳〵した心で迎へることが多い。體は重ね着の重さから單衣の輕さになり、眼は生々たる綠葉の美しさを見る。そういふことが心を引きたゝせる季節だ。とりわけ吾々のやうに、眼から這入る感じが精神生活の中のかなりの分量を占める畫生活者には、どうも秋冬の自然の現ずる色感が心を滅入らせることが多く、從つて春夏の自然美の方により多く心をひかれることは止むを得ぬものかも知れぬ。

尤も私は初夏の季の自然を愛好するが、盛夏も其相當に私の好きな季節だ。兎も角萬物の活動季といふ有樣が、自然の凡てに現はれることが夏の趣味を豐かにし、夏の心を樂ませる。

○

初夏に咲く草花の種類は隨分と多くつて、到底私共の狹い智識では數へ切れない程だが、尤もそれは、園藝家のいふ春咲きといふ草花は、大てい私共が蒔けば多くは初夏に咲くからそれをも加へての話だが、私の趣味から言ふと、そういふ花壇ものゝ草花より、やつぱり野花の方を好く、庭前に咲かして夏らしい氣持の花として、私は日向葵、カンナ、葵、百合、百日草などを好くけれど、そういふ花は大てい手の掛からない花で、寧ろ手を入れずに雜草のように生びて咲くところに面白味がある花だ。私は庭の一隅にそれ等の種がこぼれて生へるに任せ、咲くに任せることにして居るが、結局手をかけねばならぬ花は亡びて、手をかけずともよい花のみが殘ることになる。つまりはわるい種類の花のみが根強く殘ることになるのだが、私はそれを豫期し、それが庭隅に亂れ咲くのを、寧ろ花壇よりも美しいと見て居るのだ。よく夏の場末町などに、僅かばかりの空地があつて、誰れか種を投げ棄てたものが生えたのでもあるかと思はれるように、日向葵が蒼空を背景として、廂より高く黃炎を聳えさして咲いて居るのなどを見るものだ。又そういふ屋後のごみ溜などに、自然に生へた南瓜が、其處等一面生ひ廣がつて、

黄色い花が勢よく咲いて居たり、何處からか吹きこぼれた鳳仙花が其傍に咲いて居たりするものだが、そんな様は、秋冬のむさくるしい場末の裏長屋を存外に美化し、何處やら彼等の生活に豐かな感じを現じて居るのは全く夏の賜だと言つてよい。

總體百日草やカンナや紅蜀葵などの飛び立つような紅や黄色が夏の光りと深緑とに調和した花の美しさであるのだが、カンナのような強い色の花が、もし外の季節に庭前に咲いたとしたら、嘸ぞ氣味の惡いものだらうと思ふ。自然といふものは、チヤンと何處かに調和があつて、あまり人工を加へたものは、庭や野で見ると存外美しくないものだ。カーネーションのようなもの、ダリヤのやうなものは、食卓の裝飾で見ると如何にも美しいが、あれが野に咲いたとしたら、あまりに突飛な美しさになる。草花を地上で見るのは、總じて花ばかりが誇りかに美しくても駄目なもので、莖と葉と合せ見て美しいものがよい。それが自然の勝を制する譯だ。

○

夏の樹花では、百日紅と、ざくろ、ねむなどを特に好きだ。盛夏に樹花の尠い中で百日紅やざくろは全く美しい樹花だと思ふ。此花等は何れも何か斯ふ暗示的の感じを持つ花だものだから、特に百日紅などは世間の俗家では植へることを嫌つて、お寺の庭のみあのよい花を稱されたのだが、あの木は如何にも木ぶりもよく花もよい、特に盛夏の眞晝に、あの樹花を見ると何だか涙ぐましい感じの湧く花だ。

昨年の眞夏、私は武藏野の村を一日ぶら〳〵歩いたことがあつたが、秋になれば落葉が徑をうづめるやうな村々だけあて、眞夏は櫟や楢の緑葉が空を被ふて、道はほんのり暗い、その暗い深緑の前に百日紅のあかい處が點ぜられて居るのを見てほんとに武藏野の眞夏の閑寂なよい景に感じたことだつた。

ざくろも百日紅のようにやつぱり夏の緑の中によく調和した樹花だ。唯百日紅といふ樹は何處かお寺臭い花だが、ざくろは茶室向の花だといふ相違がある。田舍の大家などに客となつて、便所へ行かふとして廊下へ出ると、ふと中庭にざくろの大木があつて、點々として無數の紅花が午後の日をうけて居る美しさは、何とも言へず趣味のある花だと思ふ。のみならず此の樹花は何となし可憐な花だ。細かい緑葉の間に點ぜられて咲く多數の花を見て居ると、可愛らしい感じの花だものだから、百日紅のようにお寺の庭へのみ追ひやられずに、俗家の中庭などに稱せられたものだろう。

夏に咲く花は、樹木でも草でも、春秋の花に比べると、何か斯ふ美しい中に感じのある無理に言ひ現せば永遠的の感じのあ

るものだが、ねむの花などもやつぱりさういふ感じの强い花だ。山越えをして疲れた脚をひきづりながら、麓近くなつた路傍にねむの花が咲いて居る。何といふことなしに、知らず〳〵其樹下に一と憩みして行きたいような氣持になる。何の理屈もなしにさういふ感じをもつ自然は不思議なものだと言はねばならぬ。

山路してさては家あり柿若葉

といふ蕪村の句は私の好きな句だが、ねむといふ花は差して山深い感じといふでもないが、柿若葉や柿紅葉が直ちに人を懷かしめる感じとも違ふ。寧ろ里近く咲きながら人遠き感じの花、それでありながら何處やら親しい花である。ねむといふ樹は、樹下に疲れた旅人を慰はしめて、うたゝねの夢に何處とも知れず幽寂な國へ誘ひ行く道樂氣の木かも知れぬ。此の花を里をはなれた谿に見るもよく、里近い小川の流れに被ひかぶさつて咲いたのもよい。夏毎に此の花は寂しいが親しい美花ではある。

○

滿月といふものを、私は少年の頃に夏の夕に深く心に沁み込ましてしまつたせいか、今でも夏の滿月が何だかとりわけ美しい樣に思はれてならぬ。私が生れて幼少年時を過した武藏野の西北端の村々は、夏の夕べになれば屋前屋後に銘々涼み臺を持ち出して、夜露に體がしめる頃まで涼まねば、暑苦しい蚊帳の中へ這入つて寢る氣にはならないで、其の涼み臺で上州の長脇差國定忠次の江戸送りの時の昔話しや、隣村の酒飲み老爺の話しや、さては近所の嫁の噂やを、椽臺の上に寢そべりながら聞いたものだ。其夕に、月は青田の上に圓々と上つて居るのだ。少年の私は、さういふ村人等の昔話や噂話しをうつら〳〵と聞きながら、青田の上の月の美しさに見とれて居た記憶が今も心に殘つて、月の美しさは昔しから秋のものだと相場がきめられて居るに係らず、私は夏の月の上るのを戀しい樣な心持で庭に宵を過すことがある。時には夏旅の宿に居て、今日は舊歷の何日頃だ、月が出る時分だと思つて、一度締めた雨戸を探つて空を眺めることもある。少年時に心に印されたものは不思議に人の生涯につきまとふものゝようだ。

兎も角私は夏の自然の種々相を好むものだ。

夏

中川一政

私は畫をかく仕事ですから夏はあまりすきではありません。

私のやうによい題材がない間は一里でも二里でも道具をぶら下げて景色を見てあるくやうな仕事の仕方をする者は、すぐ草臥れるから夏はあまり得意ではありません。

それでは靜物でも畫室でかけばよいのですが、夏は氣を落着かせてくれません。

以上私が脚氣をしてから五六年の經驗でありますが、年々脚氣が衰へるに從つて弱つても以前のやうな事はなくなり、もう十年もすれば皆と一緒に夏を讃美するやうになるかも知れません。

然し。。それもどうかわかりません。

私は夏のやうに壯んな男ではないのか知れません。私が夏の道をあるいてゐて此處を描いたらと思ふのは、どうも自分が描いたらよいといふ意味でなく他人が描いたらよいといふ意味らしいのです。

私は融通がきかないし、案外自分の手は正直者で他人の眞似が出來ません。他人が描いたら必度立派な作品になるやうな處でも必しも自分の作品のモチーフに出來ないのです。

それで夏は困るのです。

私は夏、冬眠をする人間かも知れません。若し神樣がさうきめてくれたら私は夏中ねむり、秋や冬の爲に英氣を養ひたいと思ひます。

然し實際は神樣がさう判然きめてくれたのではないから、いやだと思つてゐる夏も順應して何か仕事をしようと思つてゐます。そしてそれが出來るやうになつたら最初の然し。。は取消し致しませう。

以上は仕事が思ふやうにゆかないから夏はいやだと云ふので

すが、仕事を放擲してしまへば夏も亦面白いでせう。

三島の郊外で氷のやうに冷たい川の中に頭だけ出してゐたり、二町位しか泳げないのに人並に濱邊に甲良乾しをしてゐたり、又旅をして夕方村の宿にたどりついたり、さういふ事は又夏の一樂でありませう。

登高行

富田砕花

生命燃ゆ

――（夏の情趣）――

がつしりとした
缶の踏張り！
抜き差しならない萬象の存在！
すべてが單調の白一色ではあるが
くつきりと高嶺の頂にまで伸ばされ、伸ばされ
雪庇の鮮やかな線、
――その或る部分を掻き消して
濛々と奔騰する音の無い嵐、
白い嵐、
（――やがて或ひはおのれもその渦巻のなかに昏倒せしめられるかも知れない）それを仰ぎながら
聲をのんで讃嘆してゐる
此處、白雪に覆はれた草原帶に立つ自分！
やがて到りつかう彼處、天壇の頂に立つてみづからのたましひを炷き
その香煙の
さらに高きに冲るを想ふことの
いかによろこびのかぎりであることか、
人の世のよろこびは
その瞬間に燃え上るのだ

いのちを傾けて。

吹雪ののち

夜をこめての
吹雪から解き放された
積雪のなかの
裸木よ、
枝幹が擧つて天を指しながら
一向に捧げるのは何の祈禱か、
辛い、嚴い寒冷への赦罪をでも乞ふやうに、
それらが無言のうちに表現する
寛恕と、忍耐とは
寧かな人間の心を鞭つ。
ああ、
かがやく朝の光のなか、
そこに浮彫された
裸木の枝幹の黒と、
満目の積雪の白との
胸躍らせるその諧調！

氷樹の原を過ぎて

これは
虚しき境の生きもの、
白き風吹き荒ぶなかに
黙然と立ち並び
互ひに想ひを通はすこともなげに
おのれおのれのかたちに
生命を硬直せしめて。

夜となく、晝となく暴ぶ
吹雪のなかに歎くこともなく
時として氣まぐれの陽のおとづれに
よろこびもせず
ただ時劫のむなしきなかに
黙々として立ちつくす
白き生きものたち
――氷樹

雪白い高嶺つづきの彼方、

むなしく咲き匂ふ
曙の花を晨に打眺めながら、
（それも稀れに訪るる『幸福』の如く
脆くくづるる花瓣を想はしむるもの）
煙の如く
雪線を攀ぢのぼり、攀ぢのぼりつつ
たまたまそのかたちを運び來たれる
人の子を、今日しも、この境に迎へたり。

人の子は、
辛ふじて凍てつき殘されたる
一滴の血潮の溫みを
慈しみ抱くに忙しき間ながらも
大雪嶺の
前哨なる、白き生きもの
それらの犯し難き姿に
呼吸をのみつつ
讚嘆これを久しくせるなり。

かかるときこそ！

詩人の靈魂の目覺むべきなり、
身肉を嚙む寒冷は
直ちに薪木になりて
靈感を燃え上らしむべきなり、
大雪嶺の巖にありて
さしまねく桂の冠は
我が瞳深くすでに貫き彫られたり、
今ぞ！
生命の踴躍のまへに
一切の障碍は慴伏せり。

我が想ひは
かぎりなく謙遜をなすを忘れしにあらねど
抑へ難き衿持を覺ゆるなり、
而して、今は招かれざる客に非ずして
正しき席を占むるものの
心足ひを感じつつ
宇宙の饗宴に臨む我れなり。

おお、

瞬時ののちには
恐らくは渾沌として湧き泡立つ
吹雪の波濤に姿を掻き消すべき
彼所(かしこ)、白玉の王座にこそ
我が永遠の歩みは
停むべきなり。
――かく人の子はよろこびにうち慄きつつ
次ぐ一歩に跳躍の翼を感じたり

言葉

この白、鷺は
燃ゆる太陽に向ひて
大空のかぎり
翼を擴ぐ。

人は默々として
あるかぎりの惱みを
土を種蒔きつつ、收獲(とりいれ)つつ。

すべて終(をはり)なき營みは
さびしけれども
力に溢れ滿ちたり。

傳說の發端

季節のもので無いものを
見出でた驚異(おどろき)！
それは――
積雪の下に呼吸づく針葉樹林帶から
夜と白日との空間に
搖曳する薄明の架徑に
夢の如く咲き匂ふ高根薔薇(アルペン・ローズ)！
その一輪にも比へ得られやう
遠い雪嶺、
その全容にはすでに
空白な世界の何處からか
秘かに太湯の花蕋が
眄きを送つてゐるのだつた、
その色は現實のものとしては
あまり夢と幻につつまれ過ぎてゐる
まこと季節のもので無いものを

見出でた驚異と歡喜(よろこび)とに
人間の瞳はぴつたりと吸ひ寄せられてしまつたのだつた、
さて、これを發端として、薄明の世界に咲き出た高根薔薇(アルペン、ローズ)に就いての山の人の物語は出發する。

聖燭

仰げはいや高き蒼穹、
この日、我が生命の
如何ぞ渺たるをおもひ得む、
白妙の覆衣(かさぎぬ)を裝ふ
彼處、白玲瓏の天壇のうへ
凝りて燃ゆる想ひは
聖燭の如し
やがての日、
五彩の群落を織るべき
このもかのもの草原帶も
いまはその生(いき)のちからを全く潛め、
冷えた焔を湧き立たす氷雪の底に眠る。
ああ、
胸を衝き溢るる讃仰のまへに
人間の言葉の力乏しさよ、
祈禱は
風荒きかかる境にして
ただ火花を散らすのみ。

夏書

室生犀星

まだ町の中に間借りや下宿にゐたころは、夏もやや暑くなりかけると異體の知れない悲哀をかんじた。どの部屋にゐる學生

もみんな柳行李やバスケットを抱えて、あるひは朝早くか晩おそくかに國へ向けて出發して行つた。そんな光景を隔日くらゐに下宿の玄關先きで見たあとで、ひどく氣もちが屈積した。あながち自分に故里がないとか、またはおあしがないといふことではなく、一種の、さういふ光景がわたしの心に沈んで、永い間、はつきりと頭に何か考へごとをつゞかせてゐるからである。も一つはそのころのわたしに人生の目標がなかつたこと、とくに夏休みであるからと言ふ理由で歸省しなければならない事が無かつた事などが原因してゐた。詩なんぞ書いてゐるために東京にゐることが、自分でもそんなに大した勉強でないことが能く分つてゐたからである。わたしも一人前の費用を充分に貰つてゐたならば、夏休みといふものを心嬉しく或ひはいそいそとして迎えたであらうに、わたしは屈積した氣もちでかれらが發つてゆくのを、半ば羨ましく央ば己れに惹かされて心悲しく眺めた。こんな感情は東京で苦勞した人間の誰でもが持つ平凡な感情であつたらう。その有りふれた光景であるために、わたしは一としほ陰氣な氣もちになつたのである。

七月もなかば過ぎになると、全くわたしの外にほんの二三人くらゐしか殘らなくなつた下宿屋の、階下の帳簿で物憂い風のまにまに鳴る風鈴の音をききながら、ときどき悲い寐ざめのあとの八ツ手の埃ばんだ中庭の景色を見ながら、心暎じるやうな吐息をしたりしたものである。居殘つた二三人もみんな貧乏くさい學生とも勤め人とも分らぬ風來人、――樣子も汚ならしく下卑てゐる人々が多かつた。えんどう煮たてえなどと全で白い木綿を敷いたやうな道路の暑い中を賣り捌くこゑなど、よくわたしは耳に入れて、もう何年あの聲をきいたらいいのだらうと、わけの分らぬ年期を自分の將來に數えたりして暗膽とした。文學美術に身を立てやうとは考へないでゐたが、心の底ではせめて雜誌記者くらゐにはなれるだらうくらゐに思つてゐたのである。そのかたはら自分の好きな詩でもかいて行つて、それが一年に二三度くらゐでも印刷になつたら、それだけでも世間からも先輩からも認められるやうになるだらう。それだけで澤山ぢやないか？――もしさういふ暮しをつゞけてゐるうちに、自分も段々によく書けるやうになるだらうと半分は疑ひ半分は信じ、折よくば蝸牛石上にあらそふ氣もちをもつてゐたのだつた。いまどきの文學志願の人のやうな元氣なぞ少しもなく、身と心とにへり下つてゐたくらゐである。それゆえ一年二三度くらゐの印刷も仲々手にははいり兼ねた。いまのやうに雜誌がたくさん無かつたせいもある。ともあれさういふ低いが標準の不確かな氣もちで勉強してゐたものである。それゆゑが何

時も心は沈み切つて季節の推移などには、他人に言つても分らぬほど心が鋭どくはたらき、弱るときに全くの子供と同じい氣もちにまでずり落ち嘆いてゐたと言つた方がよい。

身卑賤であつたためもあらうが、そのころまだ今のやうにカフエなぞ少數かつたので、そこへ坐つて白い卓布や窓かけやエプロン姿の女などを見ても、王侯の心にでもなつたやうに傲つた氣になり、そして一切が事新しく珍らしく敏感な暮しにたいする喜びがあつた。それは一つにはカフエなぞに坐り込むといふことが、當時のわたしには貴族のやうなおごつた氣にならせたからである。物事を最極端にまでせり上げて考へることに少しも反省をもたなかつたわたしの、じつくりと心足らへたあまりの喜びであつたのであらう。わたしは煙草を飲み茶をすすり、さて、その窓かけの白く搖れてゐる朝日のさした木の姿なぞみると、すぐに詩の一篇の構圖ともいふべきものが、さわやかに心におとづれ落ちて來て、

「あれ一つ書いて見るかな。」

といふ氣になつたりした。何んでも見るものが一つ一つひびいて新しく思想に打合つて、そのまま抛つて置けないやうな情熱のありあまつた時代であつたらしい。そのころはわたしの耳なども猫のやうにぴりぴり動いて物事を事珍らしく聞いてゐたにちがひない。田舍で二十年もくらした當時のわたしにすつかり違つた心もちで、都會の木や草姿を見直させたやうに何事もわたしは生れかはつてゐたやうであつた。さういふ中にも矢張り倦怠は倦怠で一人前にあらはれ、れいの、えんどう煮立ての呼び聲を心悲しく聞いてゐたのである。

わたしは大概の夏を根津界隈で送つた。あかちやけたあの界隈の家屋を坂の上などから見渡すと、悄然たる或る二階家にゐるわたしの姿や、町中を逍ふてゐる朝暮のわたしを想起させる、――そして今は？――今はさういふ姿のわたしの輕々しさうな心にえも言はれぬ慕はしさを感じてゐる。路ばたの木のかげで休んでゐたわたしには、もう今ではそんな事をする必要がないためもあり又そんな踞んでゐたら却つて人から疑はれるくらゐである。あのころはどこにどう姿をさらさうと他人が、注意をしなかつたものである。いまはさうは行かない。いまはさういふときにも用事ありげなさまをよそほふて、さつさと歩かなければならぬ。用事がなくとも有りさうな歩行をしなければならぬ。心を心のままにあらはしてゐられないのだ。――さういふ事は決して悔ひないが、姿は大人びてゐても心はまだ半分しか大人になつてゐないわたしには、あのころのやうな馬鹿のやうにとぼけて路ばたの木の下に休みたいとさう思ふことはし

ばしばあるのである。

だが、一人前になりかけてゐる今のわたしにも依然として季節推移のあとを事珍らしく眺める眼にはかはりはないが、何故が、いまは唯ものしづかに夏にならうと秋にならうと特別な喜びも悲しみもない。暑さに面して涼しさを慕ふ情は年とともに加はつたが、べつにこれこれの季節がよいとは言へぬ。夏にも秋にも好きなところがあり、きらひなところがあつた。唯自分の健康に程よい晩春のころや初夏には、動いてゐても寒くないので都合がよいと思つた。却つて今は晩春の季節であつてもその日その日の心もちで、秋のやうな心もちで秋のやうな心もちを浮べることもあり、又、夏のやうな氣もちになることもあつた。一日のうちにも春夏秋冬のかはつた時間が獨りで二階にゐると感じ分けられるやうに、とくべつに夏だからと言つて飛び立つほどの事もない、――唯、何となく先刻の一日のうちに春夏秋冬をかんじるやうになつたのは、おそらく自分がもう人生のうちの日暦をだいぶ澤山めくつて行つたせいであらうと思へる。ひそかに二階から眺めた北海道の山脈のかなたに瞳をすえてゐると、季節の歩みくらはその日の晴れるか降るかおぼろげに分つてくるやうに、どうやら分つて來たやうに思へる。いろいろな西洋の傳說的な畫を寫眞版で見てゐるやうに、夏なら夏の季節が勢ぞろひして國境からやつてくる。そのうしろに又秋が早や白雲の中に冷え湧いてゐるとかう書いても、そんなに誇張ではない。夏と秋とはまるで一しよだから。……秋咲くものが夏にはいりかけると最うあちこちで實つてゐるし、實際にも咲いてゐる。夏と秋とは一枚の紙うらとおもてではない。一枚の紙の半分づつでそれが同じ綵いろくらゐである。夏はすこし濃いが、秋も同じい色合で少し褪めてゐるくらゐである。俳句の歲時記の中でも夏咲くものが秋にはいりかけてゐる。しかも八月は秋になつてゐるではないか?――秋のもつとも正しいのはやはり歲時記のやうに思へるから夏も秋も一枚の半分づつの紙だと言つた方がよいやうである。

先刻言つたが、田舍にゐるとその日の晴雨がいつの間にか分つてくるのが妙である。そんな學問はした覺えはないが、西が空いてゐると晴れると決つてゐるのさへ、わたしにふしぎに思はれた。西がくもると蚌聲一時に起るのもふしぎな氣がした。

村荘三趣

土岐善麿

窓

東と南と北と、窓を通して三方が三方夫々の風景と情趣の違ふことが樂みの一つになる。東の方は空地になつてゐる。そのさきは温室のある栄花園で、この空地は約千坪ほどある。窓から傾斜の木下路を隔てゝ、今は青々と雑草がよくもかう延び茂つたものだ。雑草といつても、よくみると芒がある。そのすく／＼と卒直な、單純な、青葉の靡きは快い。またよくよくみると萩も幾株かある。まる／＼と上品な懶葉の乳色を帶びた葉裏はいかにもゆかしい。その一面の『雑草』を圍んで、雑草が並んでゐるが、そのなかにも無造作に高くなつたポプラが、枝といふ枝を擧げて蒼空に讃美の祈りをしてゐるやうな姿は、何等の虚飾もなくて、叫びならば一緒に叫びたい氣がする。この草地に注ぐ朝の雨はわけてもすばらしい。それが間もなく、思ひ切りよく霽れて、しつとり濡れた太陽が眞正面にしと／＼と昇つてくる——モウその時は『昇つてくる』といふよりは相應に高く昇つてゐるのだ。恰度あのポプラの枝の左肩ぐらゐのところに。……しばらくは動かない、たゞくる／＼と露を振り落すやうに烈しく廻る。

蟬がなきはじめる。蛙の聲は耳について、つひ忘れてゐるのだ。氣がつくと、隨分さかんに水田の方でないてゐる

水田の方は東になつてゐる。そこは一帶が山林向の杜で、『亭々』と形容すべき老松を背景に、雜多な若葉青葉が重なり重つてゐるが、どれも名を知らない。隨分植物の名を知らないものだ。葱の芽のほそいのに驚いたり、豆をくはへたやうな苗の並んでゐるのをみてこやしをやる爺さんに聞いて、初めてそれがなたまめとおぼえるやうなあり様であるから、專門的に植えつけられた山林間の造林が僕等にとつて今はまだ懷しいエトラン

ぜであることを深く咎めずにくれたまへ。そのうちには植物大系とか植物圖譜とかいふやうなものを抱へて、僕もある杜の中を散歩してみようと思つてゐるのだ。

その杜と垂直に、垣沿ひの樫が數十本、高々と水田のふち迄並んでゐる。樫に就いては、『ルヂン』のなかのあの名高い文句を思ひ浮べる。いゝ文句ではないが、會話としては氣障過ぎる。そしてそこにまたルヂンの思情が現はれてゐるやうにも思つてゐたが、斯うして空地に樫の梢をあふいで、その古い葉が絕えずはら／＼と風にひるがへるなかに、もう威勢のいゝ若芽がすく／＼と萠えてゐるのをみると、あの文句も、かならずしもツルゲネフの『詩的な』會話とばかりは思へない、いかにも實感だといふ氣がする。讀んでは氣障な、誇張と思はれるものが、本統を知ると、すこしも然うでなくなることは、この樫の會話にも限らない。

北の窓からは青麥の丘がすぐ續いて、その先きの競馬場を限る楢林の、若芽の頃の白乳色のやはらかさは、これから生延びる每年、春を待つ心をどんなにつゝましく誘ふことであらうか。

燒いてしまつた油畫の額の幾枚、いまは最近に唯一枚エチ君から贈つた『四月』といふ郊外のスケツチをかけたばかりであるが、その三方の窓から見透す外光の風景は、恰度額緣をはめたやうに、每日、素敵な構圖をみせてくれる。そして窓へ近よれば近よつたやうに、窓から離れたやうに椅子を右へ、また左へ、いざればいざつたゞけ、不斷に無限の變化をみせてくれる。家財一切を失つた僕にとつて、『窓』は今『生きた額面』なのだ。

『あたしがあすこへいよ／＼建てると、すこしあなたの額面の邪魔になりますね。』——

僕の庭さきの、山林向の杜の方の空地へ近く新しい住宅を建てることになつてゐる隣りのエム君は、かう言つた。

『なあに、ちつとも構ひませんとも。この大きな自然のなかに、お互の小さな家なんかあまり問題になりませんよ』

僕は笑つて窓際に立つた。

『なるべく小さく、右寄りに建てます。そしてあなたの油畫の構圖をあまりわるくするやうな形は、できるだけ避けますから。』——

こんな謙遜さで、僕等は每日隣り同士、顏をあはせてゐる。

芝と雜草

庭へ芝をうゑたら雜草をよく除らなくてはいけませんよ、と

懇々近所の困難ずきのSさんから言はれたのであるが、實はこれほど迄手數がかゝるとは思つてゐなかつた。早く讀んでしまひたい書物や、斷りきれない頼まれ事に追はれて、つひ二三日その儘にしておいたら、眼に立つて雜草が生えた。

初めは子供達に區劃をきめて花壇のまはりは誰、ダリア畠の近くは誰、こゝからは誰、あすこは誰と受持をきめて競爭のやうに除らせるがいゝといふことであつたが、近頃の子供は學校がなかなか忙しい。女學校の二人は復習と豫習とに追はれてゐる、小學校の男の子は、歸つてくると、ランドセルを窓から投げ込んだまゝすぐ姿を消してしまふ。末のミナ子を對手に朝など除りはじめると、

『ザツソウはどうしてこんなに生えるのでせうね。あたしが寢てゐる間にもザツソウは寢ないで延びるのですものね。』

と六歳であるが、さすがに雜草の勢ひに驚いたらしい。

『こんなお約束ではありませんでしたぜ。』

と一渡り見わたしたSさんが片隅からしやがんで除りはじめたので、妻もぢつと裁縫ばかりもしてゐられないらしい、庭に下りたため、晩餐が八時になつてしまつた。

雜草を除りながら何か考へられると、それも適當に時間なのであるが、しやがんで摘みはじめと、全く無念無想になる。何か考へてゐると自分に氣がつくと、雜草はまるきり除つてゐない。顧みれば、こんな『無念無想』は今迄の都會生活にまるきり持たなかつた時間だ、それを尊く想ふやうにならなければ勿體ない、――諦めと感謝とで、朝五時半から、十時半まで、あひだに朝食を攝つただけで、五時間ぶつ通しに除つたら、ざつと雜草が眼につかなくなつた。それはついきのふのことなのであるが、けさ下りてみると、また雜草がそこゝこに眼につく。芝と雜草とは朝霞の色が違ふ。芝のは飽く迄青いが、雜草の葉にまつはつたのは、ポプラの葉裏のやうに、薄碧く光がこもつてゐる。すこし離れてみてもよくわかる。それを除るとき、いつのまにか指さきから掌が露と泥とにぬれて、摘んだ草がおのづと指からはなれなくなる感覺、それからまた、物をつかんだ時、首の方は根がはつてとれないが、雜草の方は根が淺く、小さなヒゲを頼りなげにあらはす、その氣もちなども心を遊ばせるにつけての一種の怡しさ快さである。雜草をとつて一生を終るなども、こんな社會の一人としてはいゝかも知れない。

『雜草はマア人生のやうなものですかね』と、新刊の詩集を持つて、いま訪ねてきた詩人のエヌ君は椅子に僕は眼につきはじめた雜草をつまみながら、ことば少なに話してゐると、ふとそん

なことを言つた。『除つても除つても果てしがないわけですね』。

「本統に除るとなると、芝も一緒に除つてしまふことになるね。い丶加減なところで、除れたことにしておくほかは無いな。』

『除れたことにか、除れまいことにか。——』

エヌ君は苺をたべて、『この道はい丶ですね』とステッキを振りながら歸つて行つた。

チヤボ

チヤボをくれたのも、その詩人のエヌ君だ。このあひだ細君を亡くなして、寂しさうに話しにきた時、

『チヤボを飼つてみませんか。』

といつた。飼つたことはないが、飼へるかねときくと、わけはない。實はうちに飼つておいたのだが、今では思出が寂しくていやだし、あなたが飼ふなら、鶏舍ごと皆持つてきませう、と云つてくれた。皆、といつても三羽であるが、『よく卵を產みますよ、』と云ふ。

鶏舍の引越しは夜の方がい丶といふので、エヌ君は日が暮れてから鶏舍を人力車にのせて、車夫にひかせて、自身はそのあとから歩いて持つてきてくれた。眞つ白な羽、赤いとさか、ことに牝の、ちつとからだを固めて、首をすゑた形はいかにも靜かでい丶。

網をはり廻はしたり、藁を敷いたり、……藁がちよつと手に入りかねたので、筵をこわして鶏舍のすまに敷いたりしてやつた。三日ばかりになると、卵をうみはじめた。一つ一つ。產むとはそれを順番に子供達にのませた。一日一つ產めば五日目に子供はもとの順番に返つて、その小さな、まだ溫みのある卵をのむのである。一日に二つ轉がつてゐたことがあつたので、そのとき僕も妻もチヤボの卵を一つのんだ。

自分からこ丶へ越してくるとき、その鶏舍は荷車の上のかなり重な部分になつた。引越するにしても、丸燒けになつては簡單なもので、鶏舍も時にとつての賑やかしになる。網を書齋の窓の下に張つて、そこに鶏舍をおいたが、そこは太陽が朝から午後、遲くまでずつと當るので、チヤボにとつても、いかにも健康地帶といふ感じがする。ふと三四日して氣のついたことであるが、初めエヌ君が持つてきてくれた當時雄のトキをつくる音聲のあとに、コケコツコウといふそれのあとに、變に咳拂ひをするやうなブンといふ響きを殘してゐた。それが氣になつてゐたのであるが、こちらへ引越してから、その變な咳拂ひがいつのまにか除れてしまつた。晩から朝へかけて、爽快に、底强

く、一生懸命に聲をはりあげてコケコッコウとなく。

『チヤボにもいゝのだね。こゝの空氣は。燒後の東京にゐたら、人間も咳拂ひばかりになつてしまふかも知れない。』

部屋一杯に這入つてくる若葉のにほひを浴びながら、僕等はこんなことをいつて家族と笑つた。

餌については、麥がいゝとか小米がいゝとか、ぬかにしろとか茶葉がいゝとか、砂を忘れるな、瀬戸ものをこまかくしてやれとか、訪ねて來る人が思ひ思ひの注意をしてくれる。それを一々その通りにしてゐては、世話がやけて堪らないので、いゝかげんにしてゐるが、それでも卵はよく産む。『こんなに産めばおもしろい。』と秘藏の獨り息子の弱いのを氣にしてゐるSさんが、三羽ばかり欲しいと云ふので、出入りの人造石屋に頼んでおいたところが、忘れたかと思ふ時分に持つて來た。小さなビール箱に入れて。

それをすぐ近くのSさんのうちへ持つていつて、庭においたところが、いきなりエムさんのうちのむく犬が一羽かみ殺してしまつた。意外な大事件で、エムさん夫婦は恐縮する、Sさんは氣に病む。結局『すみませんが、モウ飼ふのはいやになりましたから、お宅で貰つてくれませんか。』といふ交渉があつた。どうせ飼ふなら三羽も五羽も同じことである。それも網のなかへ入れることにしたが、雄の一羽は小さ過ぎて網の目から潜り出る。末の娘はチヤボがかわいくて堪らない、潜り出るのを樂しみにしては待ちかまへて抱きかゝへる。チヤボも觀念して、おとなしく抱きかゝへられてゐる。

鷄舍のにほひが此頃はムッとするやうな季節になつた。梅雨迄には、書齋の窓の下からどこか庭の片隅へまた新しい鷄舍をこしらへなければならない。

由井ケ濱の戰

高濱虚子

夏の由井ケ濱は、此頃は毎年報知新聞社の海濱博覽會などが催ほされて髮を長くした青年や白粉を厚く塗つた女などの跳梁して、可なり騷々しいが、昔の由井ケ濱は其程でなかつた。都の人も來るには來たが其でも脫衣場に着物を脫いで海にひたつて、大きな息をして、白浪とにらめつくらをする種類の人が多かつた。其頃の事である。由井ケ濱一面に赤潮が推し寄せて來た。赤潮が來ると魚は皆醉つたやうにぶか〱と浮いて、死んだものが澤山濱に打上げられる。一面の臭氣が漂ふて、其のたぶ〱と浪うつてゐるのも氣味が惡い。見渡す限り眞赤な潮だ。海岸には其東京あたりから避暑に來た人も鎌倉に住む人も皆其赤潮を見ようとして群集してゐた。子供達は喜んで其死んだ魚を拾つて歩いた。其中には漁師も一二人交つて罵しり騷いでゐた。

私も見に行つて其群集の中に交つてゐた。私の飼犬も喜んであとについて來て、あつちの人の足許を嗅いだりこつちの渚の藻を嗅いだりして喜び戲れてゐた。其時群集の中から二匹の逞しい犬が不意に現はれて私の飼犬を狹擊するやうにした。私の飼犬は勢海中に逃れるより外に道が無かつた。固より二匹の犬も豫期してゐる如く。私の犬を逐ふて沖の方へ出た。私の犬は尾をまき耳をつぼめて唯恐れに恐れてゐたが、忽ち二匹の犬は猛然と喰ひかゝつた。私の犬の姿は暫く海中に沒して見えなかつた。二匹の犬は執念深くも襲ひかゝつて、浪の上に頭を出さうとする我犬をはさみ討ちした。我犬は溺れながらも沖へ〱と逃れるより外なかつた。白狀すると我犬は女犬であつた。さうして極めて力の弱い犬であつた。其代り極めて善良な犬であつた。此犬に何の遺恨があつて斯くの如く狼藉を働くのかと思ふと私は憤怒の情が心の底から燃え立つた。「よし」と幸に握つてゐたステツキを握り固めて浴衣を着たまゝでざぶ〱と海中に這入つた。其が一種の臭氣のある赤潮であることも忘れてゐた。又犬がどれ程の深さにゐるかといふことも忘れてゐた。

沖なる犬を眼がけて唯急ぎに急いだ。二匹の猛犬は私の來るのを尻目にかけて一向頓着なしに猛襲をつゞけてゐた。私は乳の邊までを波にひたして漸く犬の所に追ついた。いきなりステツキをふり上げてはつしと打つた。其のステツキは水を打つた許りで犬には當たらなかつた。殘念と又振り上げて打つたが彼の犬は巧みによけてステツキは又空しく水を打つた。其度々にステツキは深く水中に沒して再び之を振り上ぐるのにかなりの勞力を要した。しかのみならず乳のあたり迄水中に沒してゐるので體の自由が利かなかつた。彼の二匹の猛犬は目を怒らして今は私に襲ひかゝらうとしてゐた。私の怒りは更に心頭に發し

て、今は盲滅法に打つた。私に近寄つた一匹の犬の顔の所を杖の尖で突いた。慥かに手答へがあつた。しめたと更にステツキを振り上げて二三度打つた。犬は漸く陸の方へ退却し始めた。一匹の犬が退却し始めると他の犬も其あとを追ふた。我犬は漸く逃げた。

十分に泳げない私には、實は必死の闘であつた。犬が退却して呉れたからよかつたが、若し二匹の犬が猛然として追撃して來たら勝敗は逆睹し難いものがあつた。私は輕うじて凱歌を奏して陸の方へ歸らうとした。

此時始めて氣がついたのであるが、濱邊にゐる群集の眼は一齊に私に集つてゐた。私の眼は其等群集の眼を見返さねばならぬことになつた。今更どうすることも出來なかつた。

正しく舞臺に登場したものは私と犬とであつた。さうして犬に危く追ひ詰められて、必死にステツキを振り上げて之と戰つた、餘り勇敢でない男が私であることに氣がついた。犬はさつさと切り上げて陸に退いたのであるが。私はとりのこされて乳のあたりを潮にひたつた浴衣がけのションボリした姿をよち〱と引上げねばならなかつた。

私が漸く陸に達すると今や汀に群集してゐた人々の間には動搖が始まつた。其は辻藝人を取圍んでゐた人が辻藝が濟んだので圍みを解いたのと同じ事であつた。

私の犬は二三度途中で潮を吐いたが、其でも私のうしろについて家に歸つた。

私は其後折りにふれて此赤潮當時の事を思ひ出す。さうして犬と戰つた餘り勇敢で無い姿を思ひ出して苦笑する。さうして其を見てゐた百人か二百人の群集を目の前に描き出す。併しながら決して悔ゐない。其は源平の軍勢が奈須の與市が扇の要を射拔いたのを喝采した如く、群集は私の戰ひぶりに感心したことゝ思ふ。

夏の聯想

辻　潤

情趣と云ふやうなものを私はいつのまにか忘却してしまつたのでせう。それに色々なところを歩るきつけると何處にゐてもいいと云ふ風な心持にもなるのです。

澤地のジメ〳〵した南武藏の一角、水はとても臭くつてそのままでは飮めやしません。線路に近いので、相變らず汽車や、電車の通る度に微震を感じるのです。まとまりのつかない田園中の新開地に毎日安つぽい貸家が立ちます、その間から下品な蓄音機と無邪氣なハモニカと蛙の聲がきこえてくるのです、强いアセチリン柴のアーク燈をかすめて時代遲れのホトトギスが啼くのですが、可笑しくも哀れです、でも日中河べりを散歩すると叢間から行々子のコーラスのきこえてくるのは一寸愉快です。もうすぐとその邊の河原には月見草やなでしこが一杯咲くことでせう。

今から二十五六年前の話ですが、私はその河まで泳ぎに行つたものです。水が蒼々と澄んで實に氣持がよかつたものです、ところが今は駄目です。そりや隅田河にくらべればお話にならぬ程まだ〳〵きれいですがその河べりに色々な工場が立つた爲めでもありませう、油などが澤山流れてきて潮滿のよほど具合のいい時でないと這入る氣にはなれません。

私は夏になるとたいてい泳ぎます。少年の時分から運動はあまり好きな方ではありませんでしたが、泳ぎだけは覺えたものですから今でも泳ぎます。夏は私が一番に健康を感じる季節です。一年中の不攝生を夏の一ケ月半で大抵とりかへすことにしてゐます、酒がまづくなるのであまり呑まなくなります、朝も比較的早く起きられます、それに海岸へでも出かければ裸體生活や水泳が出來ますから。

私はどちらかと云ふと海よりは山の方が好きなのですが、何處にゐても同じところでは倦きてきます。生活はなるべく變化のある方がいいと思ひます、心持の硬化することはなによりも恐ろしいことです。私にはまだ一つところに落ち付かうと云ふやうな考へは起つてきません。甚だ行きあたりバツタリで至るところに自分の生活と自然の美しさを見出したいと思ひます。

夏は自然の潑溂とした生氣を一番に感じる時です、この季節に都會の塵埃にまみれて働らかなければならないことは不幸です。さうしなければならない人達のことを考へるとあまり呑氣なことを云つてもゐられなくなります。私は自由勞働者ですから夏になると海へ出かけたり、山へ行つたりしたくなります、同じ都會に働らいてゐても郊外に瀟洒な家でもあつて一日の勞働をすませて歸へつてくるやうな生活なら先づ頼もしいと思ひます。家には美しい細君と可愛いい子供が一人か二人位あつて

みんなで樂しく庭へ打水でもして晩餐でも食べる幸福が味はれれば別段避暑に行くものはありますまい。それから山手線で牛込へ降りて神樂阪でもぶらついてビールかアイスクリームでも飲んでおみやげでも買つて歸へると云ふやうな生活。

勿論、都會には都會で夏の情趣は充分に存在してゐます、享樂の範圍も田舍よりは複雜ですが、結局やはり最後の問題は金なのですから、金がなければ徒に指を啣へて眺めてゐなければなりません。

銀座も先づ外形だけはどうやら整つてきたから元通り銀ブラも出來るでせう、夜店も出てゐるし、カフエーも中々ハイカラなのが增えてきたから夏の夜は中々賑やかで若い人達が家にヂツトしてゐられなくなるのは無理もありません。

私は昨年の夏、房州の根本と云ふところでしばらく暮らしましたが、かなり呑氣なところです、房州の突端で大島や三宅島やなにかの見えるところです。交通が不便なのと海水浴場に不適當なので所謂避暑客らしい連中は殆んど來ないと云つてもいい位で、村には一軒も旅屋と云ふものがないのですから、愉快です、そこで僕等の連中ら五六人程、村の人達の座敷を借りて、生活してゐたのですが、その村は女達が主として働らくところなので男はブラ〳〵遊んでゐる方が多いのです、元氣で有爲な男の連中はみんな他鄕へ出稼ぎに行つてゐるのです。

海女の生活はかなり原始的な感じを與へます、一日に三度位海へ入つて鮑やサザエやテングサなどをとるのですが、二時間以上も海へ浸かつてゐるのは慣れてゐると云ふものの樂な仕事だとは思へません、小さな浮き樽と獲物を入れる網袋をもつて出かけるのですが沖から波にゆられて呼吸のかはりに口笛を吹きながら歸へつて來るのは見てゐても氣持がよくなります、海女達はみんな口笛の名人です、友達を呼ぶのにも口へまるめた手をあてて「フユーツ」と鋭どい音を出して呼んだりします、海岸へ休憩の小屋をアチコチに立てて海からあがつて來ると先づ焚火にあたつて其處の日蔭でお辨當を食べたり、無駄話をしたりするのですが。それが彼女等のなによりもの樂しみなのださうです。黑びかりに光つた頑丈な身體をした連中が裸體で直射する强烈な炎天の下に群集してゐる圖はゴーガンでなくつても嬉しくなります。大洋の岸邊に打ちよせてくる波のリズマとかの女等の非常に抑揚のある滑めらかな言葉のメロディアスな音聲とを聽いてゐると立派な音樂だと云ふ氣がします。僕等は大きな聲でかの女等にひやかされても一向わからぬながら一緒に笑つてゐるより他に仕方がなく、とりたてのサザエなどを焚火で燒いて御馳走になつたりすると今しがた惡口を云はれたこ

となどは忘れてしまつてかの女等の壓迫をひそかに感じながら喜んでそれを御馳走になるのです。

無邪氣かどうかは批判の限りではありませんが少なくともかの女等は自由に健康に生活してゐます。生活に疲れたやうな顔をしてゐる人間は一人も見出されません、單調で素朴な生活をかの女等は充分に享樂してゐるやうにみえます、それにかの女等は少なくとも經濟的に獨立してゐるばかりか、男を養なつてさへゐる傾向があるのですからその點でも心持は畏縮するわけがないのです、かの女等は自立的な勞働者で資本家に使役されてゐるのではないのです。村の人達は大抵自分の土地と家とを所有して生活に困つてゐる人間などは一人もありません、同時にたいした金持もなく家の造りもみんな同じやうで共產的な考へ方で自づから無意識の中に訓練されてゐるやうです、その村では日中はたいてい海岸へ出て働らいてゐるか、畑へ出てゐるかして大方家をカラツポにして暮らしてゐますが、ドロボーなどが入つたことは恐らく一度もないのかも知れません、千葉縣下でも模範村の方なのださうです。

僕等のやうな都會人がこんな風な村に移住してながく住める氣づかいは毛頭ありませんが年に一度位ひつまり夏の季節にでもこんなところでしばらく暮らすことはいいことだと思ひます、別段贅澤でもなんでもなく都會にゐるよりは安價に暮らせて、野蠻趣味を味はふことが出來ます、私は近頃のメリケンかぶれの文化生活程片腹痛いものはないと考へてゐるのです、しかしアメリカにだつて僕の好きな人間は隨分とゐます、エマアスンやトロオやホイツトマンやポオやホオソンなどのことを考へると、更にエヂソンのことなどを考へるとアメリカが好きになつてくるのです、尤もさう云ふ連中になると何處の國の人間などと國境に支配されてはゐないので、つまりもつと廣い意味で人間の中のエツセンスなのだから仕方がありません、大統領は何人變はつたか知れないが僕の知つてゐるのはセイ〳〵ワシントンとかリンコルンとかルウズベルトとかアナアキストに殺されたマツキンレイ位が記憶に殘つてゐるだけです、その他では活動役者の名前位なものですかね、業腹序にメリケンの映畫を一切ボイコツトするなどは一寸痛快ですね、いくら帝國思ひのファンだつて今時そんな勇氣のある連中はゐないでせうね、なにしろ女優の御眞影を頂いて隨喜の涙にむせんでゐる若い連中が多いことだから。

つい聯想がよけいなことを云はしてしまひましたが時節柄いたし方ありません、僕は近頃恐ろしく反文明、反文化、野蠻の憧憬に凝つてゐるものですから、つまり金がないから畢竟素朴

簡易な原始的生活にあこがれるのでせうがね、夏の季節は最もその方面の趣味を滿足させることが出來ますね、僕のやうな文化人にとつては野蠻は一種の趣味として以外には到底味はふことは出來ません、なさけないことには！

江戸の風趣の殘存してゐる下町の夏の情調などを云々することは徒らに苦痛の種です、夏祭りも恐らく今年は御廢しでせう。バラツク生活ではなんとも仕方がありません、滅びてゆくものはきれいさつぱりと亡びた方がいいのです、そこへゆくと僕等は中々あきらめがいい方なのだから、打ち壞してから新規卷き直しにやり始めた方がいいと考へるのです、實に昔などを忍んだところでどうにもなりやしないからね、いつそ熱燗で牛鍋でも腹一杯食べたあとで汗をたらしながら素晴らしいワグネル、オペラなにかを徹夜で見物がしてみたいね、これこそほんとうに眞夏の夢とでも云ふ奴でせうね、貧弱な日比谷のオーケストラ位ぢや腹の虫が承知しないね。

聯想と云ふ奴は際限がなくやりだすといくらでも出てくるのですが紙數が制限されてゐるからそれでやめます、さつき文化生活の惡口を云つたが若いきれいな御孃さん達の中には中々洋服のよく似合ふ方もゐます、なにしろ今時の季節はいつもながら若い人達が美しく見える時です、せい／＼シヤレて銀座の通りでも歩いて下さい、だが僕はこれから一寸信州の高原の小さな町へ出かけやうと考へてゐるのですがね――、（六月二日）

加藤高明論

三宅雪嶺

加藤高明子は、特殊の容貌を備へる如く特殊の性格を以て生れたに相違なけれど、これに生涯消えない焼印を捺したものが三つある。一に名古屋風、二に三菱風、三に英國風である。

彼は名古屋に生れたのでないが、之に遠からぬ所で生れ名古屋に育つたのであつて、名古屋人たるを失はぬ。名古屋人も一様に云へぬとし、身の持ち方が巧みであり、得する所で得し損しても丸損にならぬやうにし得られる。京都とか大阪とか曾て戰亂に痛み付けられた所は幾らか其風があり、太平で興つた江戸で宵越しの金を使はぬといふのと違ふ。尾張も隨分戰亂を經、民衆が揉みに揉まれたのであつて後に世が治つたものゝ、何時でも身仕度して安全を計るの心掛がある。商業に從事するにも、家屋と土地と金とを分ち、何れか一つを失つても他を殘し、不幸にして二つを失つても必ず一つ丈取殘し丸潰れにならぬやうになつてをる。

大阪は商業の中心地であり、金作りに長じ金に目がないと云はれるが、他から入込む者も多く、一か八か、倒れて起上らぬのがいろ／＼ある。名古屋は商業範圍の限られてをるにも依らうが、丸潰れの例に乏しく、何んとかして店を維持し相應に恢復するに至る。

名古屋人と云へば、他の地方に住んでをつても金で損せぬ者となつてをる。面白味がないとか、金のある癖に出さぬとか、彼是云はれても、次第に貯蓄を増し、惡口を云ふ者も其金を借りたりする。

加藤子は町人肌でなけれど、何程か周圍の氣風を受け、彼も名古屋人だと云へば成程と頷かれる所がある。其惡い所を得て染垂れと見做されるよりも、其善い所を得て所帶上手とか堅實味があるとか云はれるやうになつてをる。名古屋風でも善い所は善く、之を受けるのは好い。

加藤子が東京大學で修業してをる間は、歳の割に大人びた出來のよい學生と見られ、名古屋の柔弱な風なくあれも名古屋人かと怪しまれる位であつたが、大富豪岩崎家との關係がつき、名古屋風を助長し三菱風の最も模範的とも云ふべきを贏ち得るに至つた。彼は相應に自負心があり、徒らに他に屈するを潔よしとしないが、何を云ふにも岩崎を中心にする三菱關係の機關が當るべからざる威力を張り、中にゐる者を悉く感化せねば止まぬ。我こそはと心得ても、大きなボイラーの中に煮えて仕舞ふ。加藤が意地あるとて、强ひて固意地を張る方でなく、自ら意識するかしないか、求めて三菱風になるの傾向がある。それも强ち惡いことでなく、三菱風と云へば大きな商取引に手を掛けつゝ勉めて手堅くし念に念を入れる所がある。長袖よく舞ひ多錢よく商ふ、金に餘裕あるので悠容迫らず最後の勝ちを得やうとする。大きなマンモンは次第に大きくなり、三井と兩横綱に立つてをる。或期間三井が政友會系と共にし機先を制したのに立遲れ利益を得べきに得なんだことあるが、本來餘力があり、いざと云へば經濟界を動かし引いて政界に及び、三菱の力を以てして何が出來ぬものかといふ底意地がある。

三井の派手なのに似ず金があつて澁味を帶びてをる。加藤子は生來金を得るの能があり、之を得て澁く立現はれる性質であつても、三菱に入り最も著るしく其性質を發揮するを得た。三菱に入らなんだならば、幾らか氣風を異にし、或は著しく違つて見えるかも知れぬ。

名古屋人は締り店であつても余り澁味なく或點でダラシなく加藤もさうなつたかも計られぬ。ダラシなくならず、多少の損失に屈せず或目的を指して進む所は、三菱關係で金の利益を得るよりも、より多くの利益を得てをらう。岩崎家に種々批難すべきことあるも、ダラシなくなるのを戒めより堅實にしやうする所を以て、尋常成金の企て及ばないのを察するに足る。彌太郎は豪放、彌之助は注意深いと知られたが、前者は豪放なるべきに豪放、注意すべき所に頗る注意深かつた。巨萬の金を湯水の如く使ひつゝ、十錢以上の金の出納に注意した。加藤の眼からでも海坊主の綽名ある彌太郎は眞に偉大なる人物、其感化を受けずに居らうと思ふても居られぬ。早く染込んで拔けなくなつたらう。斯様に彼は岩崎に關係が附いてから英國に往き、英國の氣風に合ふべき性質を以ていよ／＼其氣風に合ひ、其感化を受けた。

初めは留學の形であり、後は公使として赴任し、更に大使として赴任し、英國好きになつたのは、性分よりもし理智よりもしたらう。

人によつてフランス好きになつたりドイツ好きになつたりロシア好きになつたりするが、加藤は英國好きになるに當前と云へる。名古屋風は英國風と違ふけれど、三菱風は英國風に似てをる。加藤は英國風と違ふ名古屋風を英國風にし、英國の風三菱風を生粋の英國風にした。彼自らの性分に合つたらうが、英國のゼントルメンは如何にも見上げたのがあり、一般民衆も全世界を股にかけてると思はれるし、政治も法律も不規則のやうで自然に規則立つ所、感心とも何とも云ひやうがなく、太陽が領土内に沒しない大國民、彼の如くあるべしとつくぐ感心されたりする。留學時代に深く染込んだのが公使時代にいよく根深く染んだ。

英國人も加藤の公使になつて來たのを見、從來の公使に優るを覺えた。前には通り一遍の事しかなさず、碌に交際もしなかつたのに、加藤公使は相應に交際した。交際するだけの金があつたにも依る。

公使館に縮緬を敷詰めて客を迎へたが如きは、費用の割合に客の目を喜ばした。

英國人は澁いけれど、單に澁いのみでなく、金を使ふべきに使ひむしろ贅澤に流れやうとする。後にこそ米國人の贅澤に及ばぬが歐大陸に比べて金使ひが荒い。染垂れでは世に立つていかれぬ。ただ無駄使ひを好まず、益のない所に使はず益のある所に思ひ切つて使ふ。加藤は幾らか左樣いふことが出來たので、英人の受けがよく、受けがよいのでいよく英人好きになる。

英國の政治も幾變遷し、グラッドストン時代が過ぎ、チヤンバーレンが巾を利かしたことがあり、グレーが外交界で評判よかつたことがある。加藤が大使としてグレーの代辯になつたと云はれるのは、或程度迄意氣の投合した所があらう。幾らか性格の似た所もある。特にグレーの眞似するでなく、眞似するほど氣が弱くなけれど、先づあれ位にやれば相應なものだといふ位に見、自分も其位のことをなすに難くないと信じたらう。

第二大隈内閣に外相として早く聯合國側に加はつたのは、或は早きに過ぎた嫌あれど、聯合國側の勝利と見て取つたのは、陸軍側で獨墺の勝利を豫想したのに比べ、形勢に明であつたと云はねばならぬ。

どうして聯合國側の勝利を知つたかと云へば、矢張英國を信じたのに出でゝをる。英は外交に機敏を缺ぐやうで最後の利害を打算するに長じ、困難を經つゝどうかかうか勝利を得ることになつてをる。

戰役に英國が斷然加はつたとあつて、何處か勝利を見透した

所あるとしたのは、日本で早く聯合國に加はつた所以になつてをり、陸軍側に顏色ないと云へば云へぬでない。

大體に於て加藤子は、周圍の事情に應じ得べき所の尤もよい所を受け來つてをる。名古屋風でよい所を得、三菱風でよい所を得、英國風でよい所を得てをる。たゞ英國は流石に世界を相手に國民の氣風を鍛錬し、加藤の同化力を以て充分に其好い所を得るに至つてをらぬ。英國でも種々樣々ながら、過去及び現在に活躍する人物に中々なのがあり、加藤が今一層眞髓を得たらばと、惜しむべく憾むべきものがないでもない。

ウイリヤム・ピットの如き、加藤が望まぬかも知れず、望んでも柄が違つてをる。パーマーストンも望み得るかどうか。矢張グレー邊になるか。グレーが伯爵を授けられやうとし、辭退して子爵になつたやうな所があるかどうか。

加藤子は堅實味を帶び何處から見ても堅實な樣であつて、四度び外相となり乍ら、任期の甚だ短かつたのはどういふものか。斃れるまで在職するよりも退くべきに退く方が、二度び立つがために有利とする所あるか。常に責任を負ふのみにて他を考へぬとならば、それで立派な行動とするに足るも、それにしても鐵道國有問題で退いたが如き、疑ひを招くを免れぬ。其處は、政治界で第一位を爭ふ身分として、單純に行けず、種々の事情を斟酌し手加減せねばならぬとするか。剛毅とか剛膽とか云はれるけれど、讓るべきに讓るに於て、巧みを加へ來つてをる。大正五年首相とならうとして頓挫し、多數黨が少數黨となり、容易に政權へ近づき得ないと見えつゝ幾回も總選擧を經過して屈せぬ處、少からぬ彈力を備へてをるを示す。大抵にして止めるであらう、何處かの大使にでもなるかと思はれて敢て止めず、辛抱してさしもの絶對多數黨なる政友會が分裂し、憲政會の第一黨たるを見るに至つたと、勝利は待つことを知るものゝ手に歸するといふを經驗し得たと云へる。其手並でいよ〳〵首相職に當るか、新なる試驗に臨むべきことになつてをる。

加藤子が私淑すると稱せられたグレーは、『待つて見よ』(Wait and see) と云ひ、それが綽名の如く云ひ囃され、戰役の進行と共に『待つて見る』甲斐ないとして批難され、聲名赫々であつたのが頓に下火になつた。

加藤は待ちて見る甲斐があり、憲政會總裁として內閣組織の大命を拜し、他の二黨首を閣內に入れ、槍でも鐵砲でも何でも來いといふ勢ひである。『待ちて見よ』とて將來を見透すに於て、一段の眼識あるとしてよからうか。然し『待ちて見よ』とて九年の久しきを經、今尚解決せず、當年種子を蒔いた者が自ら收獲せねばならぬことになつてをるのがある。即ち日支條約の

廿一ヶ條であつて、ベルサイユ會議、ワシントン會議等でいろ／＼變改し乍ら、今や兩國の交際を妨げてをる。不便な事を後繼內閣で前內閣の責に歸するの常であり、彼の廿一ヶ條を從來の內閣で特別に手を附けず　ただ國際會議で變改を余義なくされた外、當らず障らず穩便に取計ひ來つたに過ぎぬ。議會で廿一ヶ條の問題となるや、時の當局者は責を前の加藤外相に歸し、加藤は之を無理として云ふ、もし不可とするならば、直ちに變改すれば足ると。それも尤もである。時の當局者は自ら進んで變改すればよい筈であつて、責を前任者に歸しつゝ自ら變改せやうとせぬのは、廿一ヶ條中相當の理由を見出すに依る。其殆んど半分は無效となつたものゝなほ有效にするの必要を感ずるのがある。之を感じて固執するに苦しむ所で問題になる。廢止するならば廢止するで片が附き、固執するならば固執するで新たに談判を開くべきことになる。延び／＼になつて今に及びいよ／＼加藤自ら手を下すべき次第になつてをる。

加藤子が黨首として窮境に陷り絕望と見えながら、物の見事に機を轉じ、天晴我天下とした如く、幾年か懸案になつたのを處置するに至るか怎うか。加藤は今日輿望を負ひ反對黨も沈默を余儀なくされてをる有樣なれど、隙があれば切つて出でやうとするのがをり、支那側より難問題を起させて逆襲しやうと待ち構えたりする。

他にこれぞといふ隙が見えず、先づ對支那政策よりしやうとする際、立派に對支那廿一ヶ條問題を解決すれば、自らの手腕を明にするのみでなく內閣の基礎を固めるに與つて力あらう。

加藤子は外交の手腕を以て推され乍ら、其手腕を明にしたことなく、英國がドイツに宣戰したので、聯合國側が勝つと察し青島に出兵したのを手際とし、其後に困難を生じたのを何とみるか。

支那は彼の如き狀態であり、英國との同盟は消滅し、米國が日本を侮蔑して到らぬ所がなく、これといふも獨墺露が余りに力を失つた結果であり、もし日本で今少しく加減したならば、アングロサクソンの力を逞しくするのを制し得たでないか。左樣いふことは日本の外交官に望み難いといふが、全く望み得ないでないと思はれるがどうか。

加藤子は寸を得れば寸を守り、尺を得れば尺を守り、少しく退いて多く進む方であるとて、外交にも其能力を顯すべきを望むのは間違つてをらず、間違つたならば、加藤の努力の足らぬのである。これも加藤に好意をもつて言ふに外ならぬ。勢の盛んなる時人が讃嘆して止まず、あばたをも靨とし、勢の衰へ時何んでも惡しざまに解し、靨をもあばたとする。

今は三菱内閣とか、資本閥内閣とか云ふことが全く人の耳に入らず、さういへは反對黨の廻し者としか思はれぬが、内閣がなすべきをなさぬと知れ亙つては、何邊から如何なる攻擊の矛が來るか豫め計り難い。攻擊の來るに先んじ、早く切りあげて退くか、或は我腕を見よ、これこの通りであるとて難問題を片端から片附けるか。加藤子が豫想よりも力があるか、豫想よりも力がないかは、いよ〳〵判斷すべき時機に達した。尾張から信長が出て秀吉が出でた、秀吉は已に敵對した家康をも部下にした。加藤子が高橋、犬養の二人を閣僚にしたのは、それに似てをるといふが、流石の秀吉も晩年内治外交に困難を感じた。

加藤は秀吉よりも長命してをり、能ふ限り努力せずに居れまい。

ドクトル・オブ・フィロソフィ 川邊喜三郎著

新刊

社會學原論

四六版五百頁
說明寫眞拾數枚
函入總布美裝

定價参圓
郵稅拾貳錢

從來傳統の社會哲學、歷史哲學或は敍述的社會學に過ぎざりし吾が社會學界に一新生面を開くべく現れし本書は、人間社會生活のあらゆる關係を通じて其根柢を爲す原理原則を研究し、最新社會科學の最も進步せる人生觀が、如何に深遠且つ明快適確なるかを傳へて餘蘊なし。而かも平明なる說述法と挿入せる多數の圖解とに依り、複雜せる社會現象は鳥瞰圖となつて書中に躍動す。渾沌たる社會學界引いては一般思想界に一新光明を與へずんば止まざらん。

東京牛込
振替東京一一二三
名古屋二三四五
大阪六八九〇〇

早稻田大學出版部

（賣捌）東京堂・至誠堂・北隆館
東海堂・盛文館・星野

文學博士 桑田芳藏著

ヴントの民族心理學

定價參圓五十錢
送料廿一錢

五版發賣

心理學の使命は、個人心理や、實驗心理に限定さるるものでなく、夫は實に社會及文化の心理解剖が尤も重要とさるべきだ。實驗心理の鼻祖にして又、其大成者たるヴントは遂に民族心理に到達したが、而も彼の民族心理學は、坊間の非科學的のものでなく、科學的心理學の體系に於て尤も重要なる一部門をなして居る。これ彼の該博無比なる哲學的、心理的智識の最後の總東であり、又結晶でもある。

著者は、ヴントに親しく師事した新鋭の心理學者である。彼が浩瀚なる十數卷は讀むに困難である、此一書を通讀して彼の蘊奥なる文化や社會の心理の科學的説明を聞け。

東京 改造社 振替東京八四〇二

山川均著「十一版」

◇定價壹圓五拾錢
◇送料金拾貳錢

レーニンとトロツキー

レニン傳及彼の人物評は澤山あるが、本書は類書中の尤も卓越した評傳だ。彼の不朽の事業、雄大な人格を知らんと欲するものは本書に如くはなし。震災後永く絶版となつていましたが今回增補訂正の上、再び出版を見るに至つた。

東京芝愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

勝部謙造著

ディルタイの哲學

定價壹圓八拾錢
送料十七錢

最新刊

彼は極めて平凡なる日常茶飯事を通じて、極めて深遠なる哲學を解き、趣味ある文辭にて精神科學、自然主義的世界觀、自由觀念論的世界觀、客觀觀念論的世界觀を明にした。此點に於て他の追隨の出來ぬ世界の一大天才だ。彼は哲學的思索の形骸を捨てて所謂概念の核心を捉へ得た哲人だ。本書の第五篇藝術論に於て美學、詩學、創作の心理を說いた所など現代人の琴線に強く麗しく響く。世界に特立したる此人の哲理を說くに、我哲學界の少壯勝部氏は第一の適任者である。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

改造社の重要新刊書

法學博士 河田嗣郎著（新刊）

農村問題と對策

定價壹圓八拾錢
送料十七錢

農村問題の喧しきは獨り我國のみのことではない。問題は先づ英國に於て發生し、獨逸其他の歐洲諸國に在つても殆んど之を見ざるはなく又その意義は漸次重大となりつゝある。北米合衆國や加奈陀の如き從來農業國といはれ農業の隆盛世界に冠たりし國々に於てさへ、今や同樣に農村問題なるものゝ發生を見つゝある。そして諸國に於ける農村問題は、一樣に皆農業の不振、農村の荒廢、農業と農村との内部に於ける利害衝突や階級的軋轢等を意味するものであつて、一面には經濟問題として一面には又社會問題として漸次緊要を加へ來れるものである。

斯くの如く現時諸國に於て農村問題の喧しきを致せるは、現時の思想及び文明一般の傾向と現時の經濟一般の狀況とに依て養はれたる時勢が當然に之を生めるものである。即ち個人主義的で發展主義的で又享樂主義的な現代思想一般の傾向と、都會中心の文明と、資本主義經濟とは、農村の荒廢と農業の疲弊とを將來せざらんとするも能はざるものと謂はねばならぬ。從て其間に生れたる農村問題の根本的解決は、一方にその母胎たる思想と文明と經濟との一般傾向を變轉せしむると同時に、他方又農村生活と農業經濟とを革新することに依て行はるゝ外なき次第なりとする。

私は此の根本的見地の下に、現今我國に於ける農村問題の重要なる諸相を解剖し批判し、進むでは又その解決策の據て立つべき所と嚮ふべき所とを明かにして見たいと思ふ。本書はこの企望の下に私が既往一年餘りの間にものした諸論文の集成である。（序文）

目次

勝部謙造著(新刊)

デイルタイの哲學

定價壹圓八拾錢
送料拾五錢

目次

(1) 形而上學
(2) 體驗と認識
(3) 全人的活動
(4) 自我と外界
(5) 科學と人生

第三 精神科學論

(1) 自然科學と精神科學
(2) 歷史哲學と社會學
(3) 精神科學の基礎としての心理學
(4) 精神生活の構造
(5) 個性の問題
(6) 精神科學の分化
(7) 文化體系の學及び社會の外的組織の學

第四 世界觀說

(1) 世界觀の成立
(2) 世界觀の種類
(3) 自然主義的世界觀
(4) 自由觀念論的世界觀
(5) 客觀觀念論的世界觀

第五 藝術論

(1) 希臘傳來の詩學と近代獨逸美學
(2) 詩學の性質
(3) 詩人的體驗の特徵
(4) 創作の心理
(5) 創作と了解

第六 結語

附錄

ディルタイ著作目錄
及びディルタイ研究參考文獻

高濱虚子著

朝の庭

（改造社隨筆叢書第三編）

朝の庭目次

吉田絃二郎作

（吉田氏の尤も自信ある作物のみを集めた傑作集）

定價壹圓八拾錢
送料十七錢

小説 ダビデと子たち

第十版

吉田氏の全人格の現れであり、且つ氏の藝術の眞の代表作である「ダビデ」と「欅」の二大長篇を收む、氏の宗教的感激は、而して氏の全的人生觀、宗教觀は本書によりてのみ知るを得。

東京市芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番



ベンガル語の詩

ラビンドラナート・タゴール

私の愛人よ、壯麗に溢れて來れ、
出現の突撃であたりの風を傷付けよ。
薄明（たそがれ）の不確かな微光のもとで最早や密會する用はない、
燃える炬火を振翳し亂れる笑を眞夜中に投げよ。
私の右の手を摑み、瞬間の價値なき有らゆる執着から、
又卷きつく遲鈍な夢から私を救へ、王樣よ、私の愛人よ。
さうして眠れるものどもをゆり起し、あなたの莊嚴な沈默に握られて

如何に私が助けなく、如何に喜ぶかを彼等に見せしめよ。

そよ吹く四月よ、漂泊ふ四月よ、
お前の音樂の律動で私をゆすぶれ。
甘い驚愕で私に觸れ、
お前の妖術で私の枝を慄かさせよ。
お前は路傍の眠から私を驚かし、
私を人生の夢から目覺させる、
奇異な氣儘なお前の氣分……
媚びる、からかふ、お前は移氣だ。

そよ吹く四月よ、漂泊ふ四月よ、
私は私の寂しい影と共に住み、
有らゆるお前の定めない空想…………
はつぱのやうな言葉、輕く飛ぶ足踏みを知つて居る、
お前の過ぎゆく呼吸と耳語に觸れて
私の枝のすべては花咲き、
お前に接吻されて私の木の葉のすべては降服の動搖に破れる。

夕が西方の水上にしのび込む時、

空氣は影無き影の翼に慄く、
空が星で寶玉付けた沈默の冠を戴き、
夢が眠の深さの上で踊る時、
百合が朝になつて信仰を失ひ、
周章てゝ自分の心弱い花瓣を閉ぢる時、
鳥は私かに巣を離れ、
路のない天空の路で歌を漁る。

一

世界が若かつた時、愛の神よ、あなたは塵を踏んで人間の間を歩いた、

あなたの羽搏く旗は信號を燿かし、青年は走り出てあなたを迎へた。
彼等の思想は薔薇のやうに赤く、空氣は酒のやうに香ばしかつた。

夕になると乙女はあなたの神龕へ來てあなたの飢えた燈火に油を注いだ、
詩人はあなたの殿堂の階段に立つて頌歌をうたひ、

麝香鹿は配偶を連れてあなたの手を嘗め、虎や牝虎はあなたの足元で座つた。

愛に臆病な娘共はあなたの同情を祈り、あなたは日星を付けて祝ふため額を上げた、

物好きな男は彼等の胸を射らうとしてあなたの矢壺から矢を偸んだ。

內氣な花嫁はあなたが森の蔭で眠つた時、あなたの側を一度過ぎ二度過ぎた、

彼女は偶然であるやうに帶の鈴を鳴らし、眼の隅からあなたを注視した。

もう一度地上へ來て下さい、愛の神よ、

椿は爭つてあなたの頭髮の中でみづからを解かんとし、花嫁の寢臺を照らす燈火はあなたの足音に耳を傾け、

男の心の空しい杯はあなたの惱ましい喜悅の酒を待つて居る。

二

禁慾の行者よ、あなたの忿怒は愛の神の體を燒きつくし、その魂を自由にして世界の上に撒き散らした。

彼の歎息は漠然と漂泊ふ夏の微風を惱まし、彼の形無い淚の霧は薄明を橫ざまにうろつく。

彼を悲む無言の哀哭は有らゆるものの胸に附著し、彼の無聲の聲は香ばしい四月の沈默に宿る夢と交はる。

夕の雲は暗黑に流れ寄る恍惚の世界が破壞されたるが如く、神秘の意味は太陽に胸を開く日向葵を見て想像せられ得る。

忘れられし日愛人の會所であつた草地には花が彼等の接吻を心に浮べて咲き出で、木の間の日光は去りし幻想の面紗が辷り落ちたる如く見ゆ。

禁慾の行者よ、あなたの忿怒は愛の神の體を燒きつくし、その幽魂を世界の心の中に不朽ならしめた。

印度の傳說に濕婆卽ち自在天が怒つて愛の神を燒いて灰にしたとある。

忍冬（すいかつら）は四月の『時』の湖に乘つて來て、
告別の微笑は已にその唇に仄（ほの）めく、
だが木の葉は彼女を取卷き、
『去つてはいけない』と囁き、
てんでに手を拍ち踊る。

天の星は忍冬に召喚の言葉を送る、
『おいで、終夜私共はお前を待つて居る！』
だが木の葉は彼女を取卷き、
『去つてはいけない』と囁き、
てんでに手を拍ち踊る。

微風は南方から來て忍冬をうろ付き廻り、
『私の愛人よ、時は暗い水の海岸を、叉柴の山の麓を過ぎゆく』と囁き、
『一緒においで、滿月が缺け夜が暗くならない前に』と叫ぶ
だが木の葉は彼女を取卷き、
『去つてはいけない』と囁き、
　てんでに手を拍ち踊る。

今日私の夕霧の彼方に立つてゐる彼女は嘗ては私の朝の星であつた、
彼女は夜の來らんとする時私に出會はん爲め群る『時』の日中を隱れ乍ら帆走つた。

朝になると彼女の歌は道路の誘惑をうたつて私の血をかき亂し、
夕になると彼女の沈默は私の知らないことを私に物語る。
だが彼女はいつも同じで面紗を變へては夜明に日沒に、
私から新しい愛の會釋を要求する。

私はあなたを知つてゐる、あなたは不思議な陸土の處女で海の側に住んで居る。
私はあなたを秋の朝に認める、
　私はあなたを夏の夜に認める、
　　私はあをたを夢の中心に認める、

あなたは不思議な陸土の處女だ。
私はあなたの空中の聲に耳を傾け、私の心はあなたを探しに出掛ける。
私はついにあなたの門に著するまで、
海岸へと漂泊ふ、
あなたは不思議な陸土の處女だ。

私は終日終夜あなたのことを考へるが、私の愛人よ、
あなたは手から溢れる餘剩の時間に於てのみ私を思つて下さい。
長い歳月のあき〳〵する私の人生を通じて私はあなたを待つてゐるが、
あなたは思ひだす瞬間にのみ私へ來て下さい。

私の夜はあなたの足音に耳を傾けて費やされるが
私の眼が『左樣なら』をいふにさへ疲れてゐる朝の間にあなたは私へ來て下さい。
あなたは『時』の凱旋行列と共に遣つて來る
私か偶然之れに出會つたなら、私に自分の心の色彩を添へさせて下さい。

沙漠は靜な微笑で正午の太陽を嘲弄した。
ちゝくりんで畸形の寂しい灌木は不親切た運命でけち臭くされた大地の悪心を立證して居つた。
私は葡萄の一房を籠に入れて私の眼から之れを遠ざけた、
絶對の必要が無い時に私を誘惑するかも知れないと恐れて。

太陽の輝は時の退潮につれて赤くなつた、
風は生命のない茨(いばら)の間で起りばち〳〵破れた、
私は時が到頭遣つて來たと思ひ、
私は籠を開けた、
私の果實のすべては熟さのため萎びて仕舞つて居つた。

私が物乞ひした時あなたはよく私を追返して下さつた。私はあなたの別れの一瞥に微笑があるのを見ました、それ以來私は一教訓を學びました「お前は決して物を惠まれてはいけない」といふあなたの悲しみ深い言葉を聞いたので、私は乞食の最後の鉢を破りました。

朝から群集があなたの門口に集つた。彼等の要求のすべてを滿して下さい。夕になつて彼等が散り、叫び聲が靜まり、星が産れない以前の時から響いて來る古い暗黑と新しく産れる光明との爭闘の史詩に耳を傾ける時、私はあなたの足元に尊敬を以て私の祈禱を捧げます、『主よ、あなたの手に私の琵琶を取つて調子を合はして下さい。』

曾て私共は一緒でした、春が私共の家へ遣つて來て、

『はいらして下さい』と叫びました。

彼女は秘密の喜の囁きと新しい木の葉の抒情詩とを持つて來ました。

私は私の空想に耽り、あなたは座つて紡いでゐました。

春は顧みられないので立去りました。

私共は彼の過ぎゆく影と薔薇の殘片とを見た時飛び上りました。

愛人よ今遠くあなたは去つて居る、春は私共の家へ還つて來て、

『はいらして下さい』と叫びます。

彼は定ない影の戰慄と鴉の元氣のないくう〳〵の聲を持つて來ました。

私は茫然と窓に座り、紡く幻影は私に悲い夢を紡いでゐる。

春が賜物として秘密の悲哀を持つて來た今となると、

有らゆる戸が彼に向つて開かれて居ります。

愛よ、お前は死の壯嚴で私の人生を偉大にし、私の思想と夢のすべてを輝く告別の閃光で着色した。涙で洗はれ

た透明な光は私共の人生が日沒する最後の間際に、極樂の暗示を洩らす、そこで星と輝く愛の天體から燃える接吻が降つて、地上の悲哀を燒き寂滅の恍惚裡にその最後を赫灼たらしめる。

愛よ、お前は人生と死とを私のために廣大な一つの驚異たらしめた

柔和な薄明が折り重なる暗い面紗の下に埃だらけな疲勞の一日の負傷と損失の印を隱すやうに、愛人よ、お前を失つた私の大きな悲哀をして、その完全な黄金色の沈默を私の上に擴げしめよ。切れ〳〵になつた斷骨と扭ぢくれ、散亂した無意味の斷片と破壞物、まち〳〵の廢墟のすべてを、愛人よ、お前の追憶で靜められ苦痛と平和の盡きない諧調で滿された黄昏の茫漠裡に消滅せしめよ。

——野口米次郎氏譯——

POEMS FROM THE BENGALEE

Rabindranath Tagore

Come my lover, in thy lavish splendour,
Hurt the wind with shock of thy arrival.
No more secret meetings in uncertain
Gleams of twilight; let thy burning torches
Fling through midnight their tumultuous laughter.
Grasp me by my right hand; rescue me, King,
From all trivial ties of clinging moments,
Coils of sluggish dreams; and let all sleepers
Wake and come, and see me glad and helpless
Held in might of thy majestic silence.

Breezy April, vagrant April,
    Rock me in your swing of music.
Thrill my branches with enchantment
    At your touch of sweet surprises.
In my life-dream by the wayside
    You come startling me from slumber;
Wilful in your mood fantastic—
    Courting, teasing, and inconstant.

Breezy April, vagrant April,
    —Living with my lonesome shadows,
I know all your fitful fancies,—
    Leafy language, flitting footsteps,
All my boughs break into blossom
    At your passing breath and whisper;
All my leaves break into tumult
    Of surrender at your kisses.

When the evening steals on western waters,
Thrills the air with wings of homeless shadows;
When the sky is crowned with star-gemmed silence
And the dreams dance on the deep of slumber;
When the lilies lose their faith in morning
And in panic close their hopeless petals,
There's a bird which leaves its nest in secret,
Seeks its song in trackless path of heaven.

I

When the world was young, Love God,
    you walked on the dust among mortals,
Your pennon fluttered its signal
    and youths ran out to greet thee.
Their thoughts flushed red like roses
    and the air grew fragrant like wine.

In the evening virgins came to your shrine
    to pour oil into your famished lamps;
Poets stood at your temple steps and sang your praise;
The musk deer came with its mate to lick your hand
    and the tiger and tigress to sit at your feet.

Girls, timid of love, prayed for your pity
    when you raised your bow to take aim;
Some, who were curious, stole arrows from your quiver
    to try them upon their hearts.

The shy bride passed and repassed by you
when you slept in the forest shade,
She let her girdle bells tinkle as if by chance,
and watched you from the corners of her eyes.

Come once again to the earth, Love God,
camelias clamour to loose themselves in your locks;
The lamp by the bridal bed listens for your steps,
the Empty cup of man's heart waits for your wine of anguished joy.

II

Thy anger, O Lord Ascetic,* has burnt away the body of Love God,
making his spirit free to spread over the world.
His sigh vaguely troubles the vagrant summer breeze,
the mist of his unformed tears hovers across the twilight.

A dumb lament for him clings to the bosom of all things;
his hushed voice mingles with dreams in the fragrance of April.
Evening clouds seem like a wrecked world of rapture drifting towards the dark,
a mystic meaning is guessed in a sunflower opening its bosom to the sun.

In the meadows where lovers met in forgotten years, flowers come out haunted by their kisses,
the moon-light between trees seems like the slipped veil of a vision that has fled.
Thy anger, Lord Ascetic, has burnt away the body of Love God,
only to make his ghost immortal in the world's heart.

* According to Indian Mythology God Shiva in his anger burnt the Love God to ashes.

Honeysuckle comes borne on the floodtide of April hours
with the smile of farewell already on her lips.
But the leaves press round her,
and whisper, "Do not go!"
They clap their hands and dance.

The stars from the sky send their call to her,
"Come to us, we watch for thee all night!"
But the leaves press round her,
and whisper, "Do not go!"
They clap their hands and dance.

The breeze from the south comes and hovers round her.
"My love," it whispers, "hours flit by on the shore of the dark water,
at the foot of the purple hill."
"Come with us," it cries, "before the full moon wanes
and nights grow dark."
But the leaves press round her,
and whisper "Do not go!"
They clap their hands and dance.

It seems that once she was my morning star
    who stands behind the mist of my evening today.
She sailed unseen across the day of crowded hours
    to meet me on the brink of night.

In the morning her songs stirred my blood
    with the lure of the road,
In the evening her silence speaks to me
    of what I do not know.

But she is the same as ever
    who with her change of veils
Claims from me new love greetings
    at the daybreak and in the nightfall.

I know thee, thou Maiden of the strange land
who dwellest by the sea!
I know thee in autumn mornings
I know thee in summer nights,
I know thee in the centre of my dreams,
thou Maiden of the strange land!

I listen to thy voice in the air
and my heart goes out to seek thee.
I roam from shore to shore
till I come at thy gate at last,
thou Maiden of the strange land!

Though all my days and nights are for thoughts of you, my love,
think of me only when you have time's surplus in your hands.

Throughout my life's wearisome length of years I wait for you,
come to me in moments when you happen to remember.

My nights are spent listening for your steps,
come to me in the morning when my eyes are tired
even if to say "Goodbye".

You are borne along by the procession of triumphant hours,
let me add my heart's colour to them when by chance I come into their way.

The desert mocked the mid-day sun with a silent laughter.
Some solitary shrubs, dwarfed and deformed,
stood witness as to the malice of a malignant earth
made miserly by an ungenerous fate.
I carried in my basket a bunch of grapes, hidden away from my own sight,
lest they tempted me when need was not extreme.

The sun's glare grew red with the ebbing hours of the day,
a wind rose and crackled among lifeless thorns.
At last, I thought that the time had come,
I opened the basket.
My fruits had all withered in the heat.

Thou didst well to turn me back when I came begging;
in thy parting glance I saw a smile and since then
I have learnt my lesson: I have broken my last
beggar's bowl, for thine own gracious words have reached me:
"Alms thou never shalt receive."

From the morning crowds have gathered at thy gateway.
Let their needs be all fulfilled. When, at the nightfall,
they disperse, and cries are hushed, when stars seem listening
to an epic, from the ages before their birthtime,
of some fight of new-born light with ancient darkness,
to thy feet I come with homage of my prayer:
"Take my lute in thine own hand and tune it, Master."

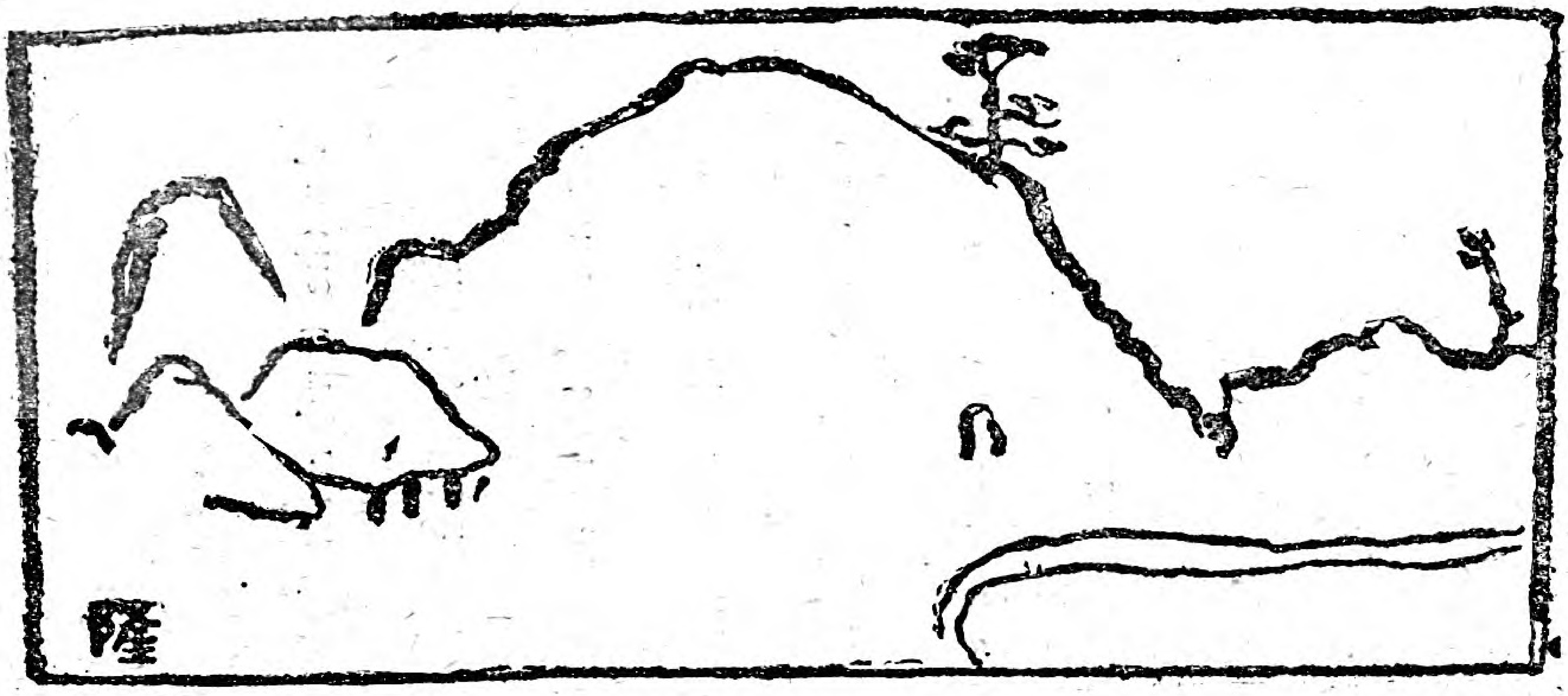
Once we were both together, Spring came to our cottage,
  "Let me in," he cried.
He had brought for us the whisperèd secrets of his gladness,
  Lyrics of new leaves.
I was busy with my fancies, you sat at your spinning,
  He went back unheeded.
Suddenly we started when we saw his parting shadow
  And his remnant roses.

Now you are away, Beloved, Spring comes to our cottage,
  "Let me in," he cries.
He has brought for me the fitful shiver of the shadows,
  Doves' despondent cooings.
I sit idle at the window and a phantom spinning
  Spins to me sad dreams.
Now that Spring has for his gift the gift of secret sorrow
  To him all doors are open.

Love, thou hast made great my life with death's magnificence,
and hast tinted all my thoughts and dreams with radiant hues
of thy farewell rays. The tear-washed limpid light reveals
at our life's last sunset point the hints of Paradise
where descent of flaming kiss from starry spheres of love
lights the sorrows of our earth to splendours of their end
in one blazing ecstasy of uttermost extinction.

Love, thou hast made one vast wonder Life and Death for me.

As the tender twilight hides beneath its fold of dusk-veil
marks of hurt and wastage from the dusty day's prostration,
even so let my great sorrow for thy loss, Beloved,
spread one perfect golden-tinted silence of its sadness
over me. Let all its jagged fractures and distortions
and unmeaning scattered scraps and wrecks and random ruins
merge in vastness of some evening stilled with thy remembrance,
filled with endless harmony of pain and peace united.



椎樹の若葉

葛西善藏

六月半、梅雨晴れの日の午前の光を浴びてゐる椎樹の若葉の趣をありがたくしみじみと眺めた。鎌倉行き、賣る、賣り物——三題話し見たやうなこの頃の生活ぶりの間に、ふと、下宿の二階の窓から、他家の御屋敷の庭の椎の木なんだが實に美しく生々した感じの、光りを求め、光を浴び、光に戯れてゐるやうな若葉のおもむきは、自分の身の、殊にこのごろの弱りかけ間違だらけの生き方と較べて何といふ相違だらう。人間といふものは、人間の生活といふものは、もつと美しくある道理なんだと自分は信じてゐるし、それには違ひないんだから、今更に、草木の美しさを羨むなんか、余程自分の生活に、自分の心持ちに不自然な醜さがあるのだと、此の朝つく〴〵と身に沁みて考へられた。

おせいの親父と義兄さんが見えて、おせいを引張つて歸つて行つたのは、たしか五月の三十日だと思ふ。その時も、大變なんでしたよ。僕にはもと〳〵掠奪の心は

ないんだ。人情としての不憫さはある心算なんだが、おせいを何うして見たところで僕の誇りとなる筈はない。それくらひのことは、自分も最早四十近い年だ、いくらか世の中の鹽をなめて來てゐる心算だから、其れ程間違つた考は持つてをらない心算だ。

本能といふものゝ前には、ひとたまりもないのだと云はれゝば、それまでのことなんだが、何うにかなりはしないものだらうか。本能が人間を間違はするものなら、また人間を救つてくれる筈だと思ふ。椎の若葉に光あれ、我が心にも光をあらしめよ。

十二日に鎌倉へ行つて來ました。十三日は父の命日、來月の十三日は三週忌、鎌倉行きのことが新聞に出たのは十三日なのです。十二日の晩たしか九時いくらの汽車で鎌倉驛を發つて來たらしいのですが、鎌倉署の部長さんだと思ふ、名刺には巡査飯田榮安氏とありますが、此の方に發車まで見送られ、何うしたか往復の切符の歸りをなくし、またお金もなくし、飯田さんに汽車賃を借りて乘つて來たやうな譯なんだが、本郷の下宿へ歸つたのは多分十二時過ぎになつてゐたらうと思ふ。すると、電話が掛つて來た。下宿の女中さんなどは無論寢てゐたんだが、電話に出て、讀賣からだと取次いでくれた。滅多に讀賣新聞社なんかゝら電話があることはないんだが、何うしたのかと思つて電話に出て見ると、僕が鎌倉のおせいの家で散々亂暴を働き、仲裁に入つた男の睾丸を蹴上げて氣絶さしたとか、云々の通信なんだがそれに間違はありませんか、一應御尋ねする次第です――と云つたやうな話を聞き、ひどく狼狽した譯です。かうなつては辯解したところで仕方がないのだ。何分穩便の御取計らひを願ひたい、かう云つて電話を切つたやうな譯でしたが、その翌朝十三日は親父の命日の日だ。兎に角余程親父には氣に入らないと見えて、とかく親父の日にお灸を据えられる。僕は何處までも小說のつもりで話してゐるのだから、いろ〳〵本當の名前を擧げては惡いのだが、僕は自己小說家だか

ら云ひますが、讀賣新聞社が共の晩に電話を掛けてくれて、翌朝の新聞に何行かの僕の釋明を載せてくれたことは非常にありがたく思ふ。何年か前、やはり鎌倉で、僕の總領の失策から、新聞に書かれたことがあつて弱つたことがあるが、あの時の鎌倉の署長さんは、たしか吉田さんと云つたと思ふが、僕としては勢一杯お詫びをした筈であり、子供は尋常六年生だつたが、もうあと半月そこ〳〵で卒業になる場合だから、鎌倉へ置いて悪いといふならば、あしたにも郷里へ歸す、何んな責任でも帶びるから、いろ〳〵な書類の手續だけは勘辨して下さいと、男泣きに泣いて涙を流して御願をした筈だつたのだが、何うも御役所といふものは、我々の考へてゐるやうなわけには行かないものらしく、何もわけの分らない十三才の男の子に、拇印を押させ――そんな子の拇印なぞが、それ程役所には大事なものか知ら。が、それは餘談だが、それで雜誌「改造」に「不良兒」といふ、それこそは事實の記錄なんです、それを書き、その上に神奈川縣の警察部長さんか、さう云つた方に對して新聞で公開狀を書き、縣の取締方針に就いて御伺したいと考へたのだつたが、それで何うしても誤解を得られないのなら自分等としての立場はない。現代の生活苦ばかしを救つてくれ、またその方針で保護されることは有難くもあり、我々が安んじて君國の人民であり…………それと同時に人間の本能として避けがたい親子夫婦、いろ〳〵な場合の人情苦に對しても、やはり親切な保護者でありたいと思ふのは、我々としての餘りに蟲の善すぎた注文だらうか。その後すぐ、吉田署長さんは、たしか縣の刑事部長か何かに榮轉なされたので、吉田さんに僕が公開狀を書く機會を逸して了つて、未だに殘念に思つてゐる。僕もその當時は逆上せましたから、吉田署長さんの返事次第では、自分も何とか自分の身を處決したいと思つたくらひだが、人に恨がある筈がない。皆、皆我が身の至らぬのに違ひないのだ。

十二日朝七時いくらの汽車で鎌倉行きの往復切符を買つて乘込んだ。前の晩實は、全然の責任を負つてくれて僕とお

せいの一族との中に這入つて行つてくれる中村氏を駒込に夜遅く訪ねたのだが、奥さんだけに御目にかゝり、それとなく事情の切迫してゐることを訴へ、その翌朝なんです。お金も八九圓しか無かつたことであり、何うしやうかと躊躇はしたんだが、だん／＼の事情が迫つては來る、一應おせいの言ひ分も確めたいと思ひ、震災以來行つた事もないんだから、一通りの様子を見て來たいと思つて行つた譯なんだが、それが飛んでもないことになつた。小説といふものにするんだとこんな程度のものでは面白くも可笑しくもないんだが、自傳小説の一節として僕は矢張り言ひたいんだ。

名刺を何うかして無くしてしまつたのは殘念だ。着なれたい洋服なんか着て行つたので、何處のポケットへ入れて無くしてしまつたのか、そんなことで歸りの切符もなくしたんだ。が、たしか新潟縣の方の小學校の先生だつたと思ふ、あちらさんも洋服を着て、いくらか舊式な書流の鞄をお持ちになつてゐたが、學術視察に御出になられたんだ相で、それで、鎌倉見物のことを車中で相談をかけられ、鎌倉驛を下りて、僕は僕の名刺の裏に、八幡宮、大塔宮、引返して驛前から電車で大佛観音、それだけで三時間位かゝるだらうと思ふから、江の島へ廻つては餘程急いでも夕方になるでせうと思ひますから、さう云ふ順序になされて御出になつては如何ですかと、簡單な地圖を書き、將軍道の並木の前の所で別れ、それから、おせいの家で震災後驛前に初めた飲食店をそれとなく見たいと思ひ、路地を曲つたところ、悪いことは出來ないもので、建長寺にをつた時分、酒を續けてゐてくれた内田屋の御大に會ひ、では、おせいのお袋さんに會ひたいと思つたんだ。實はね、鎌倉行は單純な鎌倉行ではなかつたんです。辻堂の中村さんをお訪ねして、本の方のことで御相談を得たいと思ひ、鎌倉驛で下りると同時に辻堂行の切符を買つた譯なんである。久し振りで本當に震災後初めて十ケ月振りで鎌倉の驛を見、あの松、あの將軍道の櫻並木を見て、實に愉快でもあり、矢張り都會の空氣とは違つた新らしさ、海からの風、六年間居馴染んだ空氣、風情の懐しさに、酒を飲まなくたつて醉つた様な氣分にならずにはゐられなかつ

た。何ともしやうがないことぢやないか、僕は喧嘩する心算はないんだし、また喧嘩をぶつかけられる程の弱味のない人間なんだから喧嘩がはじまる譯はないんだ。實はね、そのおせいのお袋さんや姉さんのおとめさんのやつてるバラック飲食店へ寄ることはなつたんだ。仲々よく出來てるバラックだ。僕の思つてゐたより立派なバラック飲食店で、硝子の戸を開けては入ると、カフエーらしく椅子、テーブルの土間もあり、坐敷には茶ブ臺も備はつてをり、居間といふか茶の間といふか、そちらには長火鉢も置いてあり、淺見と朱で書いた葛籠も備はつてゐるやうな譯で、いろ〳〵よく出來てゐると思つて感心したくらひなんだから、亂暴なぞ働かうなんかの心持ちはないんだ。お袋さんと話してをるうちに、おせいの家の本家の若旦那の喜平さんが見え、さうしてゐるうちに、向ふを代表して中へ這入つてゐてくれてゐる小池さん――「蠢く者」――の中に出て來てゐてくれてゐる人事相談の御方なんだ。僕には大事な人だ。だから、お袋さんと話し、喜平さんと一二杯お酒も飲み合ひ、喜平さんの仙臺二高時代の話なぞもきいた、それからなんだ。一通りの話がすんだもんだから、小池さんに一寸外へ出て貰つて、驛前の葦簾張りの下のベンチで、よく〳〵懇談をした筈だ。そこですんだもんだから、僕は朝飯も食つてないんだ、前の洋食屋へは入つて御飯を食べたいから、サイダーでも飲んで御つき合ひくださらんかと云つたところ、矢張りおせいのお母さんの家の方がいゝでせうと云はれたんで、それもさうかと思ひ、ものゝ話しがすみ、道理のわけが分りさへすれば曇りがゝりのあるお互ぢやないんだから、そこで僕もいくらか安心が出來たのです。

だが、まだ〳〵醉拂つてゐる時刻ではないのです。それから驛の何時も馴染の車屋さんの弟さんの車に乘つて建長寺の方へ出掛けたんだ。久し振りで八幡さんの横を通り、あの小袋坂を昇り、越え、下つた時の氣持ちは僕としては惡い氣持ではなかつた。勘當を受けた男がそれとなく內々で勘當を許され、久し振りで我家の門をは入るやうな氣持でもあ

つたんだ。矢張りあの邊の景色はいゝ、何時も變らぬ杉並木の風情も立派だ。震災で崩れなかつた山門を見たとき、これは崩れる山門ぢやない——そんな樣な氣さへされて、建長興國の思ひにとざゝれました。

僕が足掛六年もゐた寶珠院、震災時分命からがらで飛出した寶珠院も、本堂一つ殘つたきり、何もかも無くなつてゐる。崖の崩れ、埋れた池——何といふ詫びしさかな。本堂佛殿の前に立つて、禮拜をしたが、腹の底から瞼の熱くなる氣がした。天源院に渡邊さんを訪ねたところ、お互にやれ〳〵といつた氣持ちで、自分はお寺の妙高院に案内され、千住老僧のお寫眞を拜み、おばさんとも御會ひして、何と云ふ嬉しい日だつたでせう、さう云つて渡邊さんのバラツク妙高で大變愉快に御馳走になつてゐたところへ何う云つた拍子でおせいの親父がは入つて來たもんでせう、おせいの親父には借金も殘つてをるし、おせいの姉のおとめさんからも金を借りて、それがみんな證書になつてをる譯なんだが、さりとて、僕としてはそれ程弱く出なければならない理由もない樣に思つてゐるんだ。イロ〳〵と兩方に言ひ分もあり、事件といふものはこんがらつて來ると、結ぼれた糸を解すやうな根氣と誠實さがなければ駄目なんだ。彼等の言ひ分は重々尤もではあると思ふが、また我張善藏君としても、震災以來のナンについては矢張り遺憾に思つてゐるんだ。つまりおせい君はその間に挾まつて何う身動きも出來ない樣な狀態なんぢやないかな。僕はおせいを惡い性質のをなごだとは考へてゐない。しかし何分にも周圍が惡いといふ樣な氣がされて仕方がない。こんなことを云ふと、向ふの一族でも憤慨する人が澤山ありさうには思ふが、僕の感じだから仕方がないんだ。

おせいの親父さんと其處で何んなことを云ひ合つたのか、一寸僕にははつきりしたことは云へないのだが、渡邊さんが呼びに行つてくれたのかな、そんな筈がないと思ふんだが、それならばおせいのぢいさんが話を聞いて押掛けて來たのだらうと思ふ。僕には愉快な道理はない。その前に朝のうちにおせいの義兄の小池さんといふ人と會つて、一通りのこ

とは話を決めてゐたわけなのですから。大體おせいの親父紹壽軒淺見安太郎さんは、渡邊さんの千住老僧があの老年であの震災當時おばさんと一緒に潰され、幸に御怪我もなくて出て、僕もさうだつたんだが何處を頼ることもできず僕の厄介になつてをる紹壽軒だからと思つて、老僧御夫妻のことを御願したとき紹壽軒主人、またおばあさん――おせいのお母さんなぞもそれだけの義理を盡してくれたとは何うにも考へられない。さういふいろ〳〵の心持で紹壽軒のぢゞい、寶珠のばあさん、現住謙榮師――いろ〳〵な思ひで酒を飲んだのでは面白くない渡邊さんに對して隨分迷惑したと思つてそんなことまで考へると味氣ない氣がして來る。僕はお金も欲しくはなかつたのだが、そんないろ〳〵な氣分から渡邊さんに汽車賃十圓借してくれと云つて申込んで、たしかに一時自分の財布に入れたと思ふが、そんな法がある可きぢやないんだから矢張りお返ししたやうに思ふ。それからだ。可成り醉拂つて來たんだらうから、歸りにまたそのバラック飲食店に寄りたくなつたのか、寄るといふ馬鹿はないんだ。それ程信用してないものならば、信用しない人間のところへ寄るなんて云ふことは間違の元もあることで褒めた話ではない。そこをのんべといふ奴は仕方がないもんでして、醉つたと見えるんですな。僕は何の程度の亂暴をしたか、それは知らないんだが、大體としては私は、手を以て人を打ち、人の器物を破壞し、人の體に怪我をさせるといふことは大變好かない。如何なる場合に於てもそれは好かない。そんなことを云ふと隨分笑ふ人もあるだらうけれど、我輩の手は呪はれた手なんだ。「呪はれた手」といふ小品を書いたこともあるが、我輩の娘、いまは十四になるが、六七年前僕等がもつと貧乏な時代、郷里で親父どもの世話になつてをつた時分だつたものだから義理ある母の手前、不憫ではあつたが、娘の頬ぺたを打つた。打つて親父の家を出て、往來の白日の前に立つて見て、涙を止めることは出來なかつた。打つまじきものを打つた、この手に呪ひあれ、呪はれた手であるといふ心持から「呪はれた手」といふのを書いて二度三度これを繰返してはならない、さう思つて來てゐるわけなので

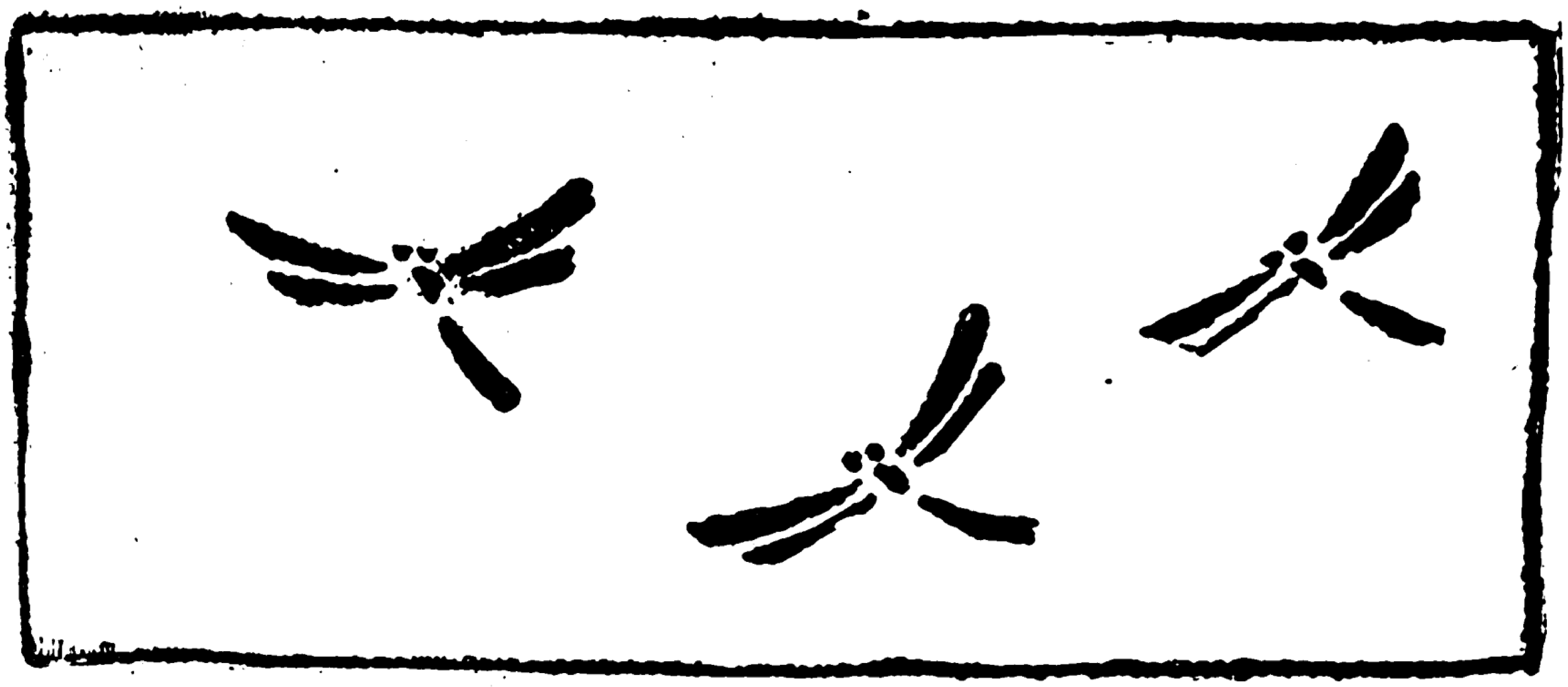
すが、何時も醉拂つては喧嘩ばかりしてをるといふことになつてをつて、それもこれも皆心の至らぬ故だ。

世間のことはいろ〳〵とむづかしく出來てゐるものらしく、僕達には分らないことが多い。自分を本當に信じてゐてくれるをなど、男なんて、この世間に幾人ゐるんだらうか。せい公も何れくらひまでに僕を信じてゐてくれて、僕のところに居りたいと云つてをるのか僕には何うにも分りかねる。をなどといふものゝ正體といふものが、僕には可成り分つてゐないらしい。それやこれやとは話しがとんちんかんになるやうで、ひどく氣が引けるんだが、いろ〳〵のことから、女房子供の所へ歸つて行く外道がないやうな狀態になつた。この下宿西城館の厚意といふものは大變なんだけれど、何時までもその厚意を受けてゐられないほど、わたしの與太は過ぎたらしい。われ〳〵は自分の過失について何の程度までに責任を背負つていゝか、人間の過失といふものは、矢張りむづかしい入組んだ事情から醸されて來てをることが多いんぢやないか。妻子緣類のこと、をなどのこと、思ひつめて行くと何うにもならないところに何時でも打突かつて行く。昔ならば坊主になつて、何にも彼にも三十八年間の罪業過失の懺悔をしたいところであるんだが。——此の間演伎座で中車の錨知盛を見たが、辨慶が出て來て知盛の首に珠數を投げつけたところ、知盛憤然として、四姓始つて以來、討てば討ち、討たるればまた討ち返す。これが源氏平家の家憲であつた。だから坊主になれなぞとは失敬な！といふやうな意味のことを云つて錨綱を體に卷いて海には入つたやうなところは、矢張り僕は日本人の傳習感情として、何うにもしやうがないものらしい。それと僕の心持ちなどは、較べてゐる樣なことは無論思ひはしないんだが、眞面目に考へたところで、何うしたらばいゝんだらう。總ては、人生は、生活は、かう云ふものだと思ひ諦めて、頭のよくなることを考へ、悧巧なることの工風をし、それで氣がすめば大變いゝことだとは思ふが、俺には何うにもまだ其處まで悟りが出來

ない。二三の友人は持つてをる心算だが、俺には矢張り何よりも女房は親密であり、また女房の方でも僕のことを心配してゐてくれるやうな氣もするんだが、それも矢張り世の中のうつけた考なのかも知れない。しかし、さう云つては女房は可愛相だな。おさんは不憫だとかいふ樣な文句を大阪の文樂座できいて何うにも涙が出て仕方がなかつたことがある。

ぼつねんと机の前に坐り、あれやこれやと考へて、思ひの塞ぐ時、自分を慰めてくれ、思ひを引立てゝくれるものは、ザラが顏見知合の人間よりか、窓の外の樹木——殊にこのごろの椎の木の日を浴び、光に戲れてゐるやうな若葉ほど、自分の胸に安らかさと力を與へてくれるものはない。鎌倉行き、賣る、賣り物、三題話のやうな各々の生活——土地を賣つた以上は鄉里の妻子のところに歸る外ない。人間墳墓の地を忘れてはならない。椎の若葉に光あれ、僕は何處に光と熱を求めてさまよふ可きなんだらうか。我輩の葉は最早朽ちかけてゐるのだが、親愛なる椎の若葉よ、君の光の幾部分かを僕に惠め。

——十三年六月十五日——



或る小說家の備忘錄より

里見弴

私の交友の一人が死んだ。なみの死に方ではなかつた。――彼も、私たちのやうに、また文筆を以て世に立つてゐるものだつた。平素述べ來つたところの人生、並に社會觀や、謹嚴な日常の起居から、人々は、妻を失つてから十年近い彼の獨身生活を、淸いもの、尊いものと考へ、現代稀に見る敬愛すべき作家として、歡び迎へてゐたが、突然の訃音は、他人の妻女との情死を報じて、各新聞、賑かに書き立てた。

悔みに行つて、偶然そこで、私は或る可なりの實業家の夫人と一緖になつた。それは、亡友の數多い愛讀者のなかでも、殊に熱心な一人として、生前ちよく〳〵話を聞きに來てゐた人だつたから、一二度彼の書齋で落合つて、私も面識はあつた。半夜だけの通夜をして、十二時近く立ちかけると、近くの席にゐたその夫人も腰を擡げて、家路が、かれこれ同じ見當だから、都合のいゝところまで自働車で送つて行かう、と申し出てくれた。前から私は、あまりこの女を好まなかつたが、然し悔

雨にぬかるんだ夜道を、一人こつ〳〵歸ることを思へば、たか〴〵二三十分の同車を拒むほどの理由にはならなかつた。それどころか、大に有難かつた。

自働車のなかで、急に夫人が亢奮して、ベラ〳〵と語り出したところによれば、彼の女は、かねてから、書いたものを通じて、私を信頼するに足るべき人間と思つてゐてくれたのださうだが、それ故、今こゝに一つの秘密を告げやう、とのことだつた。こつちは別に聞いてみたくもなかつたけれど、恐らく、彼の女の話したさは、並一通りのものではないのだらうと思はれたから、敢て制めもしなかつた。

簡單に云へば、亡友は、死を共にした女を得る少し前に、彼の女とも情交があつたと云ふのだ。それを、甚だ持つて廻つた云ひ方で、抳々と述べ、且さめ〴〵と泣くのだつた。自働車が、私をおろすべき町に近づくと、更に命じて、要もない夜更の街を大廻りに廻らせてまでも、いろ〳〵とその間の思ひ出を語り、仕舞には、餘り久しきに亘つた亡友の禁慾生活の結果か、あとにも先にも三度の媾曳が、三度ながら、たうとう全き〇〇が〇げられなかつた、などと、きはどい消息までも洩した。さうかと思ふと、死んで行つたものたちが羨しひ、あんな美しい死はない、と、身を悶えて咲いたりもするのだ。

話が一段落付いたところで、

「然し、なんと思つて貴方は、そんな大事を私に打ちあけるのです」

と云つて、私は、眞正面から女の瞳を見据えた。

夫人は、急に肚の底まで冷え亘つたやうな顔つきをしたが、さもつゝましげに目を伏せて了つた。

「もしまた貴方が……」

なほも私はその目を追ひかけ、言葉を續けた。「これから私と二人きりで、今やりかけて來た通夜の、殘り半分を完ふしに、どこかへ出かけやうと云ふ氣なら……」

そこまで聞くと、女は、貴婦人らしく眉を顰めて、

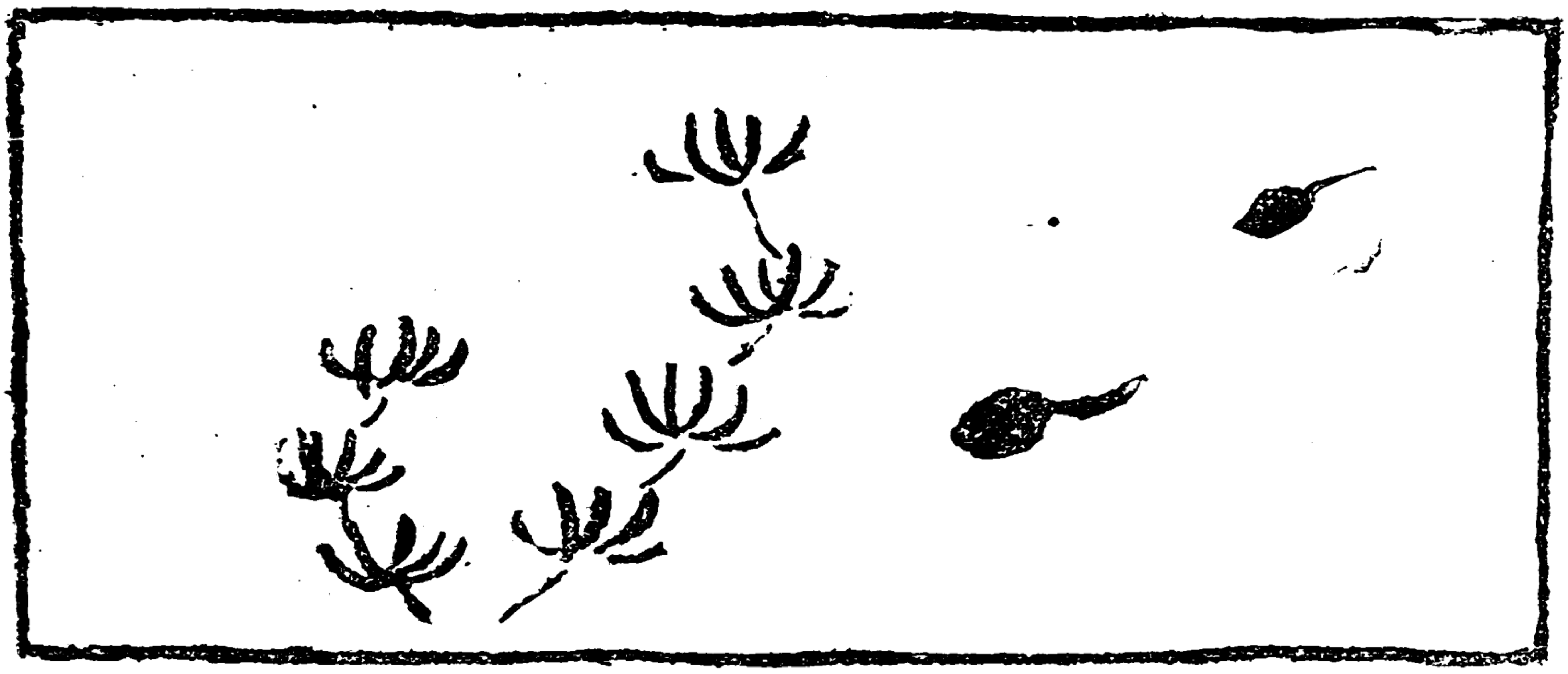
「どうぞ、貴方、今すぐこゝでおりてくださいまし！」

さう云ふから、私はすなほに、

「あゝ、さうですか。ぢアおりませう。どうも、遠方まで態々送つて頂いてすみませんでした。……ところで今のお話ですが、これは、亡友のためにも、あんまり人に御吹聽なさらない方がいゝでせう。私も決して他言はいたしません。然し、小說家であつてみれば、作品になつて表れないとは限りません。正面からそのまゝに書くか、出來るだけ事實と變へて書くか、それは今からではなんとも御約束いたしかねますが、どうも、いつか一度は筆にするやうな場合が起つて來さうです。然しそれは、私のやうなものを捉へて、うつかり口を滑らして了つた御自身の不肖と諦めて、どうか惡くお思ひなさらないやうに、今からお願ひ申して置きます。ぢア、これで……。どうも失禮……」

さう云つてから、運轉手に聲をかけ、停めさせておりた。

それツきりこの女とは、逢つたこともなければ、なんの噂も聞かない。大した材料でもないから、たゞ後日の備忘に、今はこんな風に書き流して置く……。



小さい自轉車

廣津和郎

一

自分が店に行くと、店のS君が、

『お手紙が……』さう云つて、四通の手紙を自分に渡した。

二通は或婦人雜誌と文藝雜誌とからの『△△についての御感想を問ふ』と云つたやうな、毎月一通か二通か必ず受取る種類の往復はがきの問合せ、もう一通は友人の轉居通知、それから今一通は五年前に別れた先妻からの封狀だつた。――この先妻からの封狀の來る度に、自分はいつも一寸重い氣がする。月々仕送りが遲れ勝になるので、それを始終催促して來るが、それ以外には手紙を寄越した事もなければ、又寄越す用事もない筈だ。そして、今月は、先月分が送つてないので、その日から少し前に、先月今月の二ケ月分を纏めて送つてあつた筈だつた。だから今頃何か云つて寄越すと云ふのは、一寸解せない。

いはゆる文字通りに『ひじきを並べたやうな』下手な文字は、自分にいつでも暗い、陰氣な感じを與へるのだつた。――過去の重荷、さう云つたものを、結晶させて自分の眼の前にさしつける力を、この折れ釘ともひじきとも形容すべき下手な文字が持つてゐるのだつた。――實際自分の現在の生活のほがらかさをかき亂し、自分の氣持の明るさを、ともすれば掻き曇らせてしまふ唯一のものは、この文字の書き手との交渉だと云つても、別段誇張ではない。

自分は一寸眉をひそめながら、併しその手紙の封を切つた。半紙に鉛筆で、例のやうに讀みにくい字で、ごちやごちやと書いてある。――二人の子供の無事な事を述べ、そして兄の進一が、自轉車を欲しがつてゐるから、どうか買つてやつて下さい、さういふ意味の事が書いてあつた。

『進一からのおねがひの手紙も此處に同封してあります』最後にさういふ事が附加へてあつた。

自分は封筒をさかさまに振つた。雜記帳の端を切つたやうな西洋紙の紙片が仕事卓の上にぱさりと落ちた。自分はそれを拾つて見た。

『オトウサマ、ボク、ホントウノデチイサイジテンシヤガホシイノデス、スグカツテクダサイ』

鉛筆で、一生懸命にやつと書いたと云ふやうな子供らしい字が、その紙片の上に並んでゐた。

自分は默つてその文字を暫く眺めてゐた。自分の胸にはこそばゆいやうな情緒が流れて來た。自分はおのづと微笑の浮ぶのを禁じ得なかつた。無論不愉快の分子は少しも混じてはゐない。だが、どこかに苦笑のひそんでゐる事は否定出來ないやうな微笑、そんなやうな複雜な氣持だつた。――そして一寸涙ぐましい感じさへした。

『ホントウノデチイサイジテンシヤ』――それは玩具のでない、本當の小さい自轉車と云ふ意味なのだが、子供らしい表現の中に、その意味がはつきり簡潔に示してある、と云ふやうな事を、自分はその複雜な情緒に胸がうづいてゐる間

に、一寸考へたりした。進一は遲生れだが、もう丸八年と何ヶ月かになつてゐた。この四月からもう尋常二年生だつた。そして母親の此前の手紙によると、何でも級長とかになつてゐるさうであつた……

自分はそのまま椅子にもたれて、ぼんやり考へ込んでしまつた。

二

進一の母親——つまり自分の先妻と自分との間の不和が、だんだん烈しくなつて、たうとう爆發したのは、今から數へると、丁度五年ほど前になる。その前、足掛五年の間、到底うまく行く筈がないと云ふ事が解つてゐながら、互に話し合つて別れると云ふやうな事が出來ないやうな狀態だつた。

『愛のない結婚は罪悪だ』と云つたやうな事を學んでゐるやうな近頃の女だつたら、非常に話は簡單についたのかも知れない。だが、自分よりも年上の彼女は、

『あなたの方で別れようとするなら、どこまでも追つてやるから』さう云つたやうに意地になる種類の女だつた、

『こんな生活を押して行つてどうなる？』

『どうなつたつて構はない』

『俺は愉快ではないのだ、一日だつて』

『あたしだつて愉快ではない』

『それなら、解つてゐるぢやないか』

『解つてゐたつて、どうしたつて構はない』

そこで自分は默つてしまふ。――彼女の言葉の中には、『そんな事を云つたつて、涙もろい、氣の弱いあなたに、ほんたうに自分を捨てる勇氣があるものか』と云ふやうな響が露骨に表れてゐる。子供さへ放さなければ、勝利はこつちのものだと云つたやうな自信が表れてゐる。

それが小面憎い感じがしないではない。併し、實際に、彼女の云ふ通り、いざと云ふと、自分は勇氣がなくなるのだつた。――自分は男と女とのいきさつの種々相をいろいろに考へて見た。どうも男と女とが別れ話を持ち出した場合、男が別れようと思つてもなかなか片がつかない。それに引換へて、女が別れようと考へると、直ぐ片がつく。自分にはさういふやうに思はれてならなかつた。無論例外はあるだらう。――だが、多くの場合に、自分には女の方がさういふ場合に、強いやうに思はれてならなかつた。いや、ほんたうは強いと云ふわけではない。つまり女がこの世で背負つてゐる責任が、男のそれよりも重くないからに違ひない。女はこの世では自分を主として考へる事もゆるされる。相手の男の別れた後の生活まで考へてやる責任はない。ところが、男はさう云ふわけには行かない。何故なら、男は今の世の中では、女よりも強者の位置を占めてゐるから。――そこで男は自分と別れた後の女の生活、あらゆる意味に於ける生活を、考慮に入れないわけには行かない。これは男の自惚かも知れない。だが、この自惚が男の心を弱くする。尠くとも、自分の場合には、さう云ふ事が云ひ得る、と自分は自分で思つてゐた。――自分は強者だ、だから、彼女の今後の生活について考へない限りは、どうする事も出來ないのだ、と思つてゐた。

自分と別れた場合の彼女を考へて見る。自分の愛し得ない彼女は、どんな男からも愛される資格を持つてゐないやうに自分には思はれる。第一に彼女は美貌の分子を藥にしたくも持つてゐない。そして年を取つてゐる。強情である。丑年生れの女は強情で、亭主でも何んでも追ひ出してしまふと云ふ事を誰だか云つてゐたが、星まはりなんていふものを

信じない自分でも、さう云はれればさういふものかも知れないと云ふ氣がして來る。一白水星の星は浮氣者の人情家の星まはりだと云はれて、その星に當つてゐる自分を考へると、なるほど『浮氣者の人情家』かも知れないと云ふ氣がして來る。——で、兎に角、自分と別れた彼女を考へて見て、若し彼女を拾ひ上げる者があつたら、場末の薪屋か、荒物屋か。四十位のさう云つた種類の男が適當してゐさうに思はれる。亭主が車を引いて用を聞きに歩いてゐる間に、彼女は店番をして、店の端に並んでゐる駄菓子を買ひに來る近所の子供がある度に、赤ん坊に乳を飲ませてゐた胸をはだけたまま立上つて、無精臭さうに、駄菓子の箱の硝子の蓋を開けながら、『どれだい？』と子供に云ふ……

結局さう云ふ風になつて行くより外に仕方があるまい。そしてさういふ風になつて行つても、着物を疊んだ事もなく、唯丸めて押入の隅に投げ込んで置いたり、ぐじやぐじやに濡れた赤ん坊のおしめを、三日でも四日でも縁側に投げ出して置いて、それがため縁側のあちこちに、地圖のやうなしみが出來ても平氣でゐるやうなあのおひきずりでは、好いかみさんにも、甲斐々々しい女房にもなれないに極つてゐる。おまけに丑年のあの强情さで、亭主を押へつけるやうなふてぶてしさを見せたら、たとひどんな好人物の小商人のところに嫁つたとしても、結局うまく折合つて行けるものではないだらう……

自分は二十五の末から二十九の年まで、そんな風な事を始終考へながら、不愉快な彼女との家庭生活を送つてゐた。自分はその不愉快さを今此處に詳しく書かうとは思はない。自分は今から四五年前に、それを題材に取つた一人稱小説をいくつか書いてゐる。それだから、改めて今更それについて繰返さうといふ氣がしないのである。——或論者に云はせると、一篇の獨立した創作では、その創作一つで、何も彼も解るやうになつてゐなければならないと云ふが、併し自分は必ずしもさうは思はない。この自分を主人公とした『私小說』の數々は、互にその間に關連があるものと見て貰ひ

たし、又他の作家のものでも、自分はさういふやうな見方をしてゐる。……

そこで、兎に角、自分は足掛五年の間、さういふ不愉快な生活に堪へ、そして以上述べたやうな、男が強者だから、だから女と別れるわけに行かないのだ、と云ふ感想で、自分自身を縛りつけてゐたと思つて貰ひたい。いかに不愉快でも、受難として堪へなければならないものと思つてゐたと思つて貰ひたい。

だが、強者であるとか、弱者であるとか云ふのは、たとへて見れば、テンビンの兩端のやうなものである。一方が上れば一方が下る。いや、この例は少し拙すぎる。——強者とか弱者とか云ふのは、楯の兩面のやうなもので、一方から見れば他方が裏で、他方から見れば一方が裏である。——この例の方がいくらか近い。自分は男が強者の位置にゐるから、女と別れるわけに行かないと云ふ『強者の自覺』によつて、自分を縛りつけて、そして自分を強者に無理にしてゐたが、その『強者の我慢』は、自分の心持に、却つて『人間の弱點』を露骨にあらはすやうな『無理』を與へてしまつたのである。

自分は毎日毎日不道徳になつて行つた。決して無道徳ではない。何故なら自分は原始人のやうな單純な感情で、無意識に道徳を無視してゐたわけではないからだ、自分で自分のさうなつて行くのが　不愉快で堪らなかつた癖に、それだのにさうなつて行つたのであるからだ。十分な常識を以て自分の行爲を非認しながら、而も自分はその非認した行爲の方へ、泥沼にはまり込んだ人間のやうに、はまり込んで行つたからだ。だから、自分は自分を不道徳だつたと云ふ事の辯解をするわけに行かない。自分は彼女との sexual な關係の不愉快さに較べれば、いかなる prostitute との交渉でも、ずつと明るくて　愉快であるやうに思はれて行つた。何故彼女との夫婦の關係が不愉快だつたのか、それは此處に語ることは許されてゐない。bed-room に於いて女性が男性に與へる不愉快さ、趣味の缺除、さういふものが、男性の心にどんな

嫌惡の念を起させるかと云ふ事は、その當事者である男性にしか解るものではない。

それはその男性に取つては、實際に地獄である。どぶ泥である。――近代になるに從つて、性慾を人々は神聖視する思想がまさつて來た。そして實際、性慾が人間生活に於ける役目や意味から云へば、昔の人の敎へたやうに、それは唯面を背けたり、蔑視したりすべきものではなく、もつと重大視すべきもの、尊重すべきものであると云ふ思想は、認められない事はない。併しさういふ思想を是認しても、性慾的な慾情そのもの、その慾情の形、あらはれは、何と云つても決して美ではない。尠くとも慾情のあらはれそれ自體は、決して淸潔なものではない。――その美でないもの、淸潔でないものを、露骨に醜くくも、不潔にも感じさせないやうにするものは、兩性のデリケエトな心づかひであり、感情の動きであり、神經のうごきである。

『お前は無神經だね。え、ほんたうに。』

自分はデリカシイの缺除を責めるのに、面をそむけながら、よくこんな風な言葉を使つた。けれども、

『さう？』さう云つて、別段何も感じないらしく、にやにや笑つてゐるやうな彼女だつた。

食慾そのものも、それが人間生活に於ける重大な役目と意味とは解つてゐるが、それ自體は決して美ではない。若し豚のやうに、食慾に何の趣味性をも發揮しないものがあつたら、それは我々に嫌惡を與へるに極つてゐる。

『豚……性慾上の豚……』

自分は眼をねむつて、豚の檻の中に豚と雜居してゐる自分を、憫まないわけに行かなかつた。――おお、かう云ふ言葉の百萬遍の繰返しも、當事者である自分以外には、彼女が自分に與へた不愉快を了解させるわけには行かないだらう。自分は總てのデリカシイと羞恥とを捨てて、思ひ切つてその一端を語らなければならない。――若し我々が最も細

かい趣味性によつて、醜を蔽ひ、美のよそほひをしなければゐられないあの bed-room に於いて・・・・を常に用意する事を知らない女があつたとしたら、諸君は彼女を何とお思ひになります？……

そして多産な血統を引いた彼女は、三年の間に、二人の母親だつた。

三

自分はさうした嫌惡の情に惱まされてゐる彼女との生活の間、始終轉々として居を移した。――自分は最初に彼女と片瀬に家を持つた。それから鎌倉に。そして鎌倉も厭になつて、東京の彼女の實家に寄寓した。それから再び鎌倉に行き、更に再び東京の彼女の實家に舞ひ戻つた。

それは地形の上から云つて、東京の中心になつてはゐるが、併し商業地でないために、大都市の繁華から取り殘されたやうな場所だつた。高台で樹木が多く、大きな屋敷が並んでゐるので、夜十時を過ぎると、人通りもない。そんなやうな寂しい高台の屋敷町に周圍を取りかこまれた間に、一つの小さな盆地が出來てゐて、そこに丁度場末の田舍町のやうな小店がいくつか並んでゐる。二十年前に東京の他の場所からは消えてしまつたやうな、小さな、舊式な風呂屋が一軒、軒が傾きかかつてゐて、飴ん棒のやうな白と赤とにだんだらに彩つた棒が、看板の横に出てゐて、助手もゐなければ小僧もゐない、主人みづからが小さな風呂桶で、客の頭を洗ふ湯を沸かしてゐるやうな、三等理髮店が一軒、それから八百屋が一軒、駄菓子屋が一軒、荒物屋と云ふよりは田舍に見かける萬屋が一軒、それからパン屋、たばこ屋、酒屋……さうした小店で、佗しい一廓を形作つてゐた。今のやうに電車が發達しては、特にその近所に用事のある人しかそこを通りはしないが、若し偶然に、何かのきつかけで、初めてそこに足を踏み入れた人があつたら、この東京の眞ん

中に、こんな古風な町が未だにひそんでゐたかと、屹度吃驚するに違ひない。

そんなやうなところだつた。さうして彼女の實家と云ふのは、さうした中にある小さな一軒の下宿屋だつた。自分は子供の時分、今のやうに電車のなかつた頃、その頃住んでゐた麻布から、九段の招魂社の祭に出かけて行くのに、よくこの忙しい町を通つたことを覺えてゐる。その頃から、この下宿の建物はあつて、そしてその頃でも、この建物は隨分古かつた。その後、今此處に物語つてゐる時代まで、約十五年位經つてゐる。だから、この下宿の建物は、恐らく二十五年か三十年か或はもつと前に建てられたものに違ひない。ネダがゆるんでゐるので、緣側を通つても、家ぢゆうがギシギシ搖れるやうな感じがする。――客室はやつと九間か十間で、約十人ばかりの下宿人が住んでゐた。

自分はそこの二階の客室の一つを自分のために借りた。自分一人の寢室、自分一人の書齋として、自分はそこに自分自身の心をしづめるべき場所を形作らうとしたのであつた。人は妻の實家の、而も下宿屋などの一室で、どうして心を休める事が出來ようと訝かるかも知れない。そして實際、自分にしても、さう云ふやうに、心をそこで休める事が決して出來なかつたと云ふ事を、白狀しないわけには行かないだらう。けれども、それでも彼女との獨立した家庭を持つよりも、その方が自分に取つてどんなに暢氣であり、氣樂であつたか知れないのである。何故なら、彼女は子供と共に、家の者達と一諸に階下にゐて吳れたから。そして自分の部屋の平靜をみだす事を、自分は彼女に禁ずる事が出來たから。

その二階は日當りが好かつた。右手の方に山王台から引きつづいた樹木の多い丘陵があつて、その樹立の間に、Mと云ふ富豪の赤い西洋館が、感じよく透いて見えた。それは建築家の間に評判の好い建物と聞いてゐたが、さう云はれて見ると、その形に或趣があつて、その美しい形と色彩とが、綠色の木の葉と對照して、自分に快い感じを與へた。自分

の部屋の前の庭近くに、一本の柿の木が立つてゐて、それの明るい若葉や、白い花や、秋になつて赤くなる實や、それから又冬のおとづれを逸早く傳へる丸い黄ろい枯葉のカラカラ鳴るのなどが、四季こもごも、自分の眼に或慰めを與へて呉れた。

だが、大體として自分の心は、決しておちついてゐられるものではなかつた。

『又お出かけ？』

『ああ』

自分は午後二時か三時頃にならなければ、眼が覺めない。そして眼が覺めると、こそこそと顔を洗つて、そして直ぐに家を飛び出してしまふのである。――何處と云つてアテがあるわけではない。自分は何よりも彼女の顔が見たくない。彼女の家の者達の顔が見たくない。

『進ちやんのお父さんは、もうお出かけだつてさ。毎日一體何處にそんなに用があるんでせうね』

自分が家の者達と顔を合はせないやうにしながら、玄關口で下駄を突つかけてゐると、進一を抱いた彼女が、自分にこれ見よがしに、子供に頬ずりしながら、自分の後から浴びせかけるやうにこんな事を云ふ。

『…………』

自分は振向きもしないで、どんどん出て行つてしまふのである。

この時分の事を、自分は『やもり』と云ふ短篇の中に、こまかに書いた事がある。今自分はそれを繰返さうと云ふ氣がしない。

たゞ、自分はそこから、赤坂の溜池に出、それから歩いて新橋に出、新橋から銀座通のカツフエを、片つぱしから

歴訪して歩いてゐるのだつた。酒の飲めない自分は、珈琲、紅茶を日に何杯飲まなければならないか解らない。一軒の店で腹をふくらませてしまふわけには行かないので、なるだけ腹にたまらない輕いものを撰んでは、それを少しづつ少しづつ食べて歩く。それにしても、よく次々と輕いものでも食べられるものと思ふが、併しその間の時間が長いので、好い鹽梅に、どうかかうか食べられるやうにはなるものである。――銀座の表通りのカッフェエは、夜の十一時頃になると、一齊に店を閉ぢてしまふが、裏通りには、十二時になつても、一時になつても、店を開いてゐるカッフェエが何軒かある。自分はいつの間にか、さうしたカッフェエの店をしまふ時間をすつかり覺えてしまつた。實際、さうしたカッフェエの時間表が自分の心に出來上つてしまつたと云つても、誇張ではない。

自分は一軒のカッフェエが閉めかゝると、他の店に行き、そのカッフェエが閉めかゝると、又他の店に行く。さうして歩いてゐると、午前一時半か二時頃までは、何とか腰をかけてゐられる店があるものである。――腰かけて、ぼんやりしてゐると、方々のテエブルの上の電燈がだん〳〵に消えて行く。ウェエトレスがそこらを片づけ始めて、テエブルの上に椅子をさかさに載せ始める。そして總てのテエブルの上に椅子がさかさに載り、自分の腰かけてゐるところの上以外の總ての電燈が消えてしまつた時分になつて、やつと立上る。

『最後の客』と自分は自分自身に向つて呟く。――こんな事でも、物事の繰返しは、人に一種の趣味を覺えさせるものである。自分は『最後の客』として、その店の閉るどんづまりまで、さうして腰かけてゐる自分の、この世の中に何の用もない、いかにも sukefluour men らしい樣子に、自分で一個の哀感を感ずるのが、何とも云はれない味があるもののやうに思はれ始めたのである。

『未だいゝだらう』

『えゝ、どうぞ』ウェエトレスは、眠さうな片頬に習慣性の愛想笑ひを浮べて、こんな風に答へるが、併しその眼は、酒場の上の柱時計の方を迷惑さうに見上げてゐる……

そこで、自分は微笑しながら立上るのである。どんづまりまでゐたと云ふ輕い滿足を覺えて。

併し夜が更けて、さうした店々も閉つてしまつた頃からが、自分のたつた一人の『世界』だと云ふ氣が自分はして來るのであつた。自分は日比谷公園の角から、濠端づたひに、三宅坂の方へ、電車の通らなくなつたレエルの石だゝみの上を歩いて行く。ぼうツと云ふ聲笛を鳴らしながら、自動車が時たま通つて行く外には、自分の空想を妨げるものは何もない。――眞暗な濠の向うに、松の木の生えた堤や石垣がぼんやりと見える。

自分はこの數年間の自分の生活を考へると、晝間それを考へる時とは違つて、現實そのものが不思議にスヰイトな、何かの衣を蔽ふたやうに考へられて來る。――自分の父が病氣になつて、母と共に急に名古屋の方へ行つてしまはなかつたなら、自分は下宿生活などをしなかつたゞらう。さうすれば從つて、自分は彼女と會はずに濟んだであらう。自分が兩親の手をはなれて、そして生れて始めてひとりで下宿をした家が、つまり彼女の實家なのであつた。……

併し今更それは何と云つても仕方がない。若し彼女と會つたところで、今のやうなこんな狀態にならないで濟む法がなかつたわけではない。……だが、これとても今更何と云つても仕方がない。

進一が生れてから、自分は本郷の友人の家に寄寓して、そしてそこで、自分が彼女と結婚した方が本當かどうかを考へてゐた。出鱈目な、好い加減な感じでかう云ふやうになつて行つて、若しこの上結婚したら、一體どんな結果になるか。――自分はどう考へて見ても、彼女を愛する氣がみじんも起つて來ない。併し愛する氣が起つて來ないと云つても、併しかう云ふ關係になつてしまつた以上は、結婚すべきものではないか、それとも無理に結婚したなら、今より以上の

不愉快と不幸とを醸し出しはすまいか。
そんな風な事を毎日繰返しつゞけて考へても、結局好い解釋がつかないので、時の進みにまかせようと考へてゐた。
そこに突然、名古屋から兄が上京して來たのである。兄が行つてゐた會社で不都合な事をして、それの穴埋めに。――その時分、父は名古屋の直ぐ側の海岸に病氣の保養に行つてゐた。一度名古屋の兄のところにおちついて、それから父が母と一緒にその海岸に移つてから、やつと一ケ月か二ケ月になるかならないのに、兄のこの不始末が出來したのであつた。
その兄の不始末は病氣の父がそのために、熱があるのに上京し、それから名古屋で兄のつとめてゐた會社の支店長を尋づねるために更に名古屋に行き、そして總ての話をつけた上で、辨償して濟んだ。――イヤな思をして、親戚で金を借りて。
その事件が濟んで、父が又その海岸に歸つて行つてしまつたから、兄は自分と一緒に本鄕の自分の友人の家にゐる事になつた。
すると、彼女の實家では、今度は自分の兄に向つて
『どうか私の方に來てゐて下さい。部屋も開いてゐますし、實費で賄も致しますから』と云ふ事を盛んに勸め始めた。
これは彼女の實家の方から云はせれば、無理のない事には違ひない。自分は彼女との交渉が、自分が決心がつかないままに、そのままになつてゐる、自分にその實家に來るようにと如何に勸めても、自分はもう少し考へさせて呉れと云つて、どうしてもその家へ行かない。そこで、自分に最も親しい兄をとりことする事によつて、彼女側ではなるたけ自分との關係を密接にして置きたい。――さう思ふ理窟は無理はない。

『こゝの家も狭いから、自分は向うに移りたいと思ふんだがね』兄はだんだんその勸誘に乘りさうな氣持を示して來た。

『いや、どうか待つて下さい。僕はいろいろ考へてゐるのですから。――僕があの女と結婚しようと云ふ決心のつくまでは、兄さんもそんな風な事は考へないで下さい。こゝで我慢してゐて下さい』と自分は賴むやうに兄に云つた『そしてあの家に遊びに行くこともどうか遠慮して下さい。――交渉が深くなればどうしても駄目です。始終見てゐると、僕は子供が可愛くなるのですから。――それが今の僕には苦手なのです』

『よし』

兄は自分の氣持がよく解ると云ふやうにうなづいた。――それは進一が十二月に生れて、その翌年の四月の事だつた。

自分は丁度豫備召集に取られた。その召集に行く前、自分はその事を繰返し兄に賴んだ。

『僕が兵隊から歸つて來る間、どうか本郷にゐて下さい。どんな事があつても、彼女(あれ)の家の方には行かないやうにして下さい』

『よく解つてゐる。よく解つてゐる』兄はさう云つてうなづいた。

だが、併し兄はたうとう自分のその言葉を用ひなかつたのだつた。自分が除隊の間際になつて、本郷の兄に手紙を出しても、何とも返事が來なかつた。除隊の日には、兄は著物や下駄や帽子を持つて來て吳れる筈だつたのに。

だが、その日まで、自分は筆不精な兄だから、何とも返事を寄越さないものだと思つてゐた。何と云つても、自分は除隊を知つてゐるのだから、朝になつたら迎へに來て吳れるだらうと思つてゐた。

營庭で點呼をつけて、それから他の除隊兵と一緒に列を作つて、營門の方へ歩いて行くと、その營門の前には、除隊

の者の家族達が、おのおの着物や下駄や帽子などの風呂敷包を抱へて待つてゐる。――自分はその群の中を眼で兄を探した。併し兄の姿は見えなかつた。その瞬間、身長(せい)の低い、身體(からだ)のずんぐりした彼女が、にこにこしながら、自分に手で合圖してゐるのを見た。――自分はその時『失敗つた』かう腹の中で呟いた。自分は胸いつぱいに暗い憂欝が渦卷いて來るのを覺えた。

自分は彼女の側に近づいて行つて、

『ありがたう』と云つた。實際は何とも云ひたくなかつたのだ。けれども、さういふのが、彼女に對する禮儀には違ひなかつた。

『兄さんは？』とつづいて自分は訊いた。

『兄さんなら、仕方のない人なんですよ。一昨日から歸つて來ません。ですから、あたしが迎へに來ましたの』

『歸つて來ないつて、それでは本郷から君の方へ引つ越したのかい？』

『ええ、十日程前に越していらしつたんですよ。――そして毎晩々々歸つて來ないんですよ。あなたの著物なんか、何處に持つて行かれるのか、一枚もないんですよ。だから、今日あたしは他からこれを借りて來ましたの』

自分は彼女がさし出した著物を見た。瓦斯の縞の粗末な袷だつた。

『ありがたう』と自分は云つた。

『それからこの下駄は母が買つて呉れましたの』彼女は粗末な、併し新しい薩摩下駄を出した。

『ありがたう』

『それから、このシャツはあたしが買ひましたの』

『ありがたう』

『それから足袋は……』

『ありがたう』

自分は兄の事が惜しくなるよりは、何か堪らなく恥しかつた。――何と云ふ兄だらう。弟が除隊する日が前から解つてゐるのに、その日弟が營門から著て出なければならない著物一枚をも、手許へ殘さないやうに、何處かに持つて行つてしまふとは。そして弟があの位たのんで置いたにも拘らず移轉してしまつて、そして弟が一番恐れてゐるその家の者達から、「こんな風な恩惠（？）の負擔を弟の心に與へさせて平氣でゐるとは。……それも長い間の事ではなかつたのだ。たつた三週間に過ぎなかつたのだのに……

『イゴチスト…』自分は吐きぼいやうな心持になつて、兄の事をこんな風に呟いた。

併し兄が自分に與へた影響は、單にそれだけの事では止らなくなつて行つたのである。自分は世田ケ谷の聯隊から、彼女と一緒に並んで歸りかけた。並んで往來を歩き、一緒に電車にも乘つた。自分はその後の彼女との生活の間にも、彼女と並んで往來を歩いたことなどは一度もなかつた。だから、恐らくその時が、最初でそして最終であつたに違ひない。――自分は彼女が親しげに、いそいそとして自分に話しかけるのを、腹の中では苦り切つてゐながら、表面だけではなるたけ平靜な顏付を示してゐなければならないやうな氣持になつてゐた。三週前の入營の時とは、まるで違つた氣持にならされてゐた。自分は到底のがれるわけには行かない、と云つたやうな氣が、彼女の身長（せい）の低い、首の短い、ずんぐりした身體を見ながら、起り始めたのである。――兄の態度が出鱈目であり、それが彼女の一家の者にかなりの迷惑をかけてゐるらしい事が解るに從つて、自分は自分の心の自由を狹まれて行くやうな氣がし始めたのである。

『こないだなどは、あたしに著物を貸せつて被仰るんですよ。どうしてもその日に入る金があるからつて。で、たうとう母が二圓貸して上げたんですよ』

『………』

『それからね、未だこんなこともKちやんに云つたんですつて。Kちやんと結婚しよう。そして進一を自分達の子供として育てよう、つて。――Kちやんは、誰があんな人と結婚するもんですか、つて云つてゐましたよ。それでね、あなつの事を、未だ弟は父親になるのは早過ぎるから、代りに自分がなつてやるんだ、と云つてゐたんですつて』

『………』

Kちやんと云ふのは、彼女の直ぐ次の妹であつた。自分は何のつもりで兄がそんな事を云ふのか解らなかつたが、唯何とも云はれない苦笑と、それが何とも云はれない恥かしさとが、さう云ふ事を聞いてゐる中に浮んで來た。

東京に著くと、自分は直ぐ本郷の友人のとこに行つた。友人は留守だつたが、友人の母は、兄がいきなり轉居して行てしまつたことを、快く思つてゐなかつた。――自分は自分の荷物を調べて見ると、何も彼も一切そこにはなかつた。それは兄が彼女の實家へ移轉して行つた時、みんな持つて行つてしまつたと云ふ事だつた。

『………』自分は友人の母に向つても、濟まい氣がした。

そしてその結果がどうなつたか？　自分は彼女の實家にその日行かなければならなかつた。一つはその朝のお禮のため、一つは兄の消息を知るために、一つは自分の荷物を調べるため。――そして自分は子供を見た。兄がその一家にかけてゐる迷惑のかずかずを聞かされた。自分の弱い心は、自分が長い間警戒してゐたとりこに、たうとうならずにゐられなくなつた。

ああ、若しあの時、兄が自分の云ふ通りに、移轉して呉れなかつたら、移轉しても、自分の除隊を兄自身が迎へてくれたら、兄自身が來てくれなくても、自分の著物と自分の下駄とを、誰かに兄がとどけさせるだけの事をして呉れたら……さうしたら、一切の事が、今と違つてゐたかも知れなかつたのだ。もう少し自分は考へる餘地を持つてゐたのだ。ところが、何を考へてゐるのか、何をしてゐるのか解らない兄は、彼の氣紛れなイゴチズムによつて、自分に最も惡い運命をおつかぶせやうな事をしてしまつたのだ……

だが、かう一途に云へば、かうも云へない事はないものの、これだとて今更どうする事も出來ない事には違ひない。自分が偶然彼女の實家に最初下宿したと云ふ事が、今から考へて仕方がない事に違ひないと同時に、自分の不幸を、その時の兄の責任に歸せさせさうとするのは、何と云つても、蟲が好過ぎるに違ひない。……

自分はそんな事を考へながら、夜更けの濠端を、ぶらぶらと急ぐでもなく、歩いて行くのである。夜の靜寂と暗黑とが、自分の心と頭に異常なおちつきを與へる。——自分は十分な餘裕を以て、そんな事を考へて見るのである。現實の苦しみは、深更の不思議な神秘の霧を通して、自分の心に或微笑と或悲しみとを、一つの調和した形で感じさせる。

兄は前に述べた出來事の後、何處かへ姿を隱してしまつた。そしてもう二年近くの間、行方不明である。時々人に金を借りると見えて、その貸主が、自分のところにその金を要求したりして來る。そんな時にちよいちよい兄の消息を耳にするが、自分は別段兄を搜さうと云ふ氣も、兄に會ひたいと云ふ氣も今はしなくなつて來てゐる。

それから名古屋近くの海岸に行つてゐた父も、今は鎌倉まで引つ返して來て、そこで健康になつて、母と共に平和に暮してゐる。

そして自分は、彼女との不愉快な生活のために、轉々としてゐるが、併しその間に、自分の負うてゐる此世的な責任

のために、自分は何かをして働いてゐる。鎌倉の兩親に不自由勝ではあるが、併しその日その日を送らせて行かなければならないと云ふ責任が、自分を絶望から救ふ一つの原因となつてゐると云ふ事は、面白いことでなければならない。自分は外國小說の飜譯をしたり、文藝評論を書いたりして、さうした資を得てゐたが、それではやり切れないので、最近になつて小說を書き始めた。……そしてその小說は現在の自分と彼女との生活に材を取つたものが多い。自分と彼女との生活を描いて、それで生活費が取れて行くと云ふ事は、何と云ふ不思議なことであらう。

自分はそれを突きつめて考へる時には、さうした自分の創作生活を、こんな風に考へる。一人の腹の空つた人間が、その饑餓の苦しみに堪へ兼ねて、腕や腓の肉を切り取り、それによつて胃腑の一時の要求を充させる、と。……そんな風に考へる時は、自分の心身が現實の渦卷の中にのたうちまはつてゐる時である。息もつけない程、この世の有らゆるものが呪はしくなつてゐる時である。

だが、ありがたい事には、我々人間の心には、どんな事をでも客觀出來る不思議な心的作用が與へられてゐる。渦卷の中にのたうち廻つてゐる次の瞬間には、自分のその姿をじつと見つめられる餘裕が心に生じて來る。そしてその餘裕が心に生じて來た時こそは、我々はどんな風な空想に耽らうが、それは我々の自由なのだ。自分は自分を童話の王子にだつて譬へられるのだ。恐ろしい現實に取つつかまりながら、その苦しみを歌つてゐる童話の王子にだつて……

おお、この人間の心の働きに祝福あれ！

そこで、自分に取つて、この夜更けのそゞろ歩きが、自分の自由な世界であり、自分の心の息を拔く世界になるわけなのである。

レールの石だたみの上に、自分の歩いて行く下駄の音がこつこつとリヅミカルに鳴る。そのリヅムにつれて、自分の心には人間生活のいろいろな事が、適當な距離を保つて、心の前に浮んで來る。自分の苦しみのやうな苦しみを、長い間、いろいろな人間が、繰返し繰返し感じて來たのだと云ふ事が、考へ出されると云ふよりは、寧ろ、いきなり氣分的に了解されて來る。少年のシエエクスピアが、二十七八の女を姙娠させて、橋の袂で、その女のお腹の始末に困つてしゆくしゆく泣いてゐたと云ふ姿も、そしてシエエクスピアよりも年上だつた女が、しゆくしゆく泣いてゐるシエエクスピアの肩に手をかけて、『泣くんではない、泣くんではない』と慰めた姿も。それから世界的な文豪の名を謳はれた晩年のツルゲエネフが、ピアルドオ夫人にプラトニツクな戀をして、その家に寄寓してゐる姿も、併しこの稀代のプラトニツク、ラヴの體驗者が、若い時には猶太人の女に子供を生ませてゐたと云ふ形も、そして老年になつてからその子供を手許に呼び寄せたと云ふ形も……さうした人間痴情の歴史が、總て微笑と人間生活の或味とを、自分に感じさせて來る。

けれども、妻の實家の方へ足が向くに從つて、自分のかうした空想は、だんだん姿を消して來て、その代りに『現實』が意地悪い顔付で自分をおびやかして來るのであつた。

自分は玄關の戸をそつと音のしないやうに開けて、――戸は自分の歸りの遲いために、始終鍵がかけてなかつた――それから敵地に忍び込むやうな恰好で、忍び足に軋む廊下を通り、梯子を上つて、自分の部屋に這入り、そこでほつと吐息をすると、そこの机の上には、原稿用紙が儼然と自分を待つてゐるのであつた。そして今や自分の濠端の空想はみだれて、自分は自分を童話の王子になぞらへられるやうな心の餘裕を持ち得ない。自分の心にはあの餓えたる男、胃腑の恐ろしい要求を一時的に糊塗するために、みづからの腕や腓の筋肉を切り刻んで口に入れなければならないあの餓え

たる男の心持が、浮んで來るのであつた。

四

そんな風な生活が毎日だつた。春も夏も秋も冬も、四季によつて氣候にこそ變化はあれ、自分の生活、心持には何の變化も來なかつた。自分は相變らず、午後の二時か三時頃寢床から起き出て、直ぐに外に飛び出し、溜池から銀座へ出、相變らずカッフェエからカッフェエへとうろついて、そして夜更けてから、そつと自分の部屋に忍び込む、雨が降つても、雪が降つても、たまには例外がない事はないが、大體は毎日この日課を變へなかつた。そして夜明けまでは筆の勞働である。いや、王子の恐しい歌だつたかも知れない。……それがそんな風に繰返されて行くうちに、不思議な事に、自分も一人前の小說家であるやうに世間から待遇されて來た。そしてさう云ふやうな待遇を受けて行く事が、或時には嬉しいやうな氣の起る事もあり、或時には又苦笑ひの種ともなるのであつた。

さうしてゐる中に、自分のこの單調な生活に一つの變化が來た。――若しかすると、それは變化とは云へないかも知れない。自分のそれまでの生活が更にどんづまりに行つたものと解釋する方が、ほんたうかも知れない。

或夜更け、それは晩夏か初秋の頃だつた。自分は例の單調な散步から歸つて來て、忍び込むやうに自分の部屋に這入り込んで、机の前に坐つて、さて仕事に取りかからうとしてゐると、ミシリミシリと誰かが梯子を上つて來る足音が聞えて來た。――自分は彼女かと思つて眉をひそめた。眼が覺めると直ぐ外に飛び出してしまひ、夜が更けなければ歸つて來ない自分をつかまへるためには、彼女はそれまで眼を覺まして待つてゐなければならなかつた。そして彼女は自分に何か云ひたい事があれば、その上で云はなければならなかつた。だが、彼女との爭ひの種ももう盡きてゐた。盡きて

ゐたと云ふよりは、餘りに解り過ぎてゐて、今更それを云々する事も面倒なくらゐに、問題そのものに自分達は疲れてゐた。

『愛があるかないか』――云はばその一言に盡きるのだ。自分の心に愛のないと云ふ事が明瞭であり、而も同時に現狀を打破する力のない事も明瞭である自分は、もうその問題に觸れたくなかつた。自分はただ露骨に嫌惡の表情を以て、さういふ場合に自分の沈默を守つてゐなければならなかつた。

足音が軋む廊下を忍びやかに歩いて來て、自分の部屋の前で停つた時、自分はいつものやうに嫌惡の表情で自分を武裝して、きつとなつて障子を見上げた。

その障子はしづかに開けられて、意外にもそこにS子のにこにこした顏が現れた。

『おや、Sちやんだつたの？今頃どうして、何か用？』

自分は吃驚して訊いた。

S子と云ふのは彼女の末の妹であつた。前に一寸名の出たKが彼女の直ぐの妹で、その下かこのSなのであつた。その時S子は十七だつた。

『ええ、一寸兄さんにお話したい事があるんですの。お邪魔ぢやなくつて？』

『いや、別に、まあ這入り給へ』

S子は部屋の中に這入つて來た。寢間著の浴衣を著た彼女は、姉と較べると、瘦せて、身長も高く、すらりとしてゐた。

『どうしてこんなに遲く？』――

『だつて晝間はいらつしやらないんですもの……』

『それで話つて何なの？』

S子はじつと自分の顏をみつめてゐたが、

『あたし兄さんに同情してゐるのよ』さう云つて次のやうな事を語り出した。『阿母さんとEちやん（これは姉で、つまり自分の彼女である）とKちやんとで、こなひだからひそひそ相談してゐるんですよ。どうせ今に兄さんとEちやんとの間は破れるに極つてゐるから、さうしたら進ちやんをどんな事があつても、兄さんに渡さないつて。それでいざとなつたら、吉村のお叔父さんのところに行つて、養子離緣の手續きをして貰はうつて、さう相談してゐるんですよ』

『……』自分は默つて聞いてゐた。

『阿母さんの云ふには、うちには男の子がゐないから、進ちやんを家の子として育てたいんですつて……』

『…………』

『だから吉村のお叔父さんに、その事を今から頼んで置かうつて、みんなで相談してゐたんですよ。――あたし兄さんがお氣の毒で堪らなくなつたのよ。それでその事が一寸お話ししたかつたの』

『ありがたう』自分はさう云つて、うなづいた。

　その事は一寸說明しなければ解らないが、進一は庶子として屆ける事も、私生兒として屆ける事もいやだつたので、よくあるやうに彼女の家の親しい知人の子としてとどけ、それから彼女と自分との結婚の屆のすんだ後に、そこから自分の養子として貰ひ受けた事にしてあるのである。吉村の叔父さんと云ふのはつまり戶籍面で進一の實父になり、自分は養子になつてゐるわけである。

S子が階下に戻つて行つてしまふと、自分はその問題について考へた。若しかの場合に、進一を奪はれる事は堪らない。自分は戸籍上の事は未だ調べてゐないから、よくは知らないが、戸籍面がさうなつてゐるといふ理由から、法律的に奪はれてしまはなければならないんだとしたら堪らない。——ひそひそと自分に隠れてそんな相談をしてゐる彼女達が腹立たしかつた。

併し又、冷靜に考へて見れば、さういふやうな相談をする彼女等にも、無理はないといへば云へない事はない。現に自分だつて、毎日一度や二度は必ず考へる彼女と別れた場合の想像の上で、いつでも子供を彼女から奪ふ計畫をしてゐる。自分は媒介の兩親ともそんな相談をした事がある。兩親たちも自分と彼女との夫婦生活がうまく行くものでない事を知つて、その結末の早晩來る事をいつも豫想してゐる。そしてさう云ふ豫想の浮ぶ時、「進一はどうしても引取るやうにしなければいけないよ」と云ふのがその口癖だつた。

それだから、これはどつちもどつちの話である。自分達が進一を引取らうとするのが人情なら、彼女達が進一を自分から奪はうとするのも人情である。だから、結局困るのである。——だが、かう云ふ事はこの時になつて初めて解つて來た問題ではない。彼女と別れようと思ふ場合に、自分が男でそして强者だからと云ふ例の痩我慢の感想の外に、もう一つ自分の決心を鈍らせるのはいつもこの問題であつた。自分が進一を愛してゐる心持を尊重しなければならない如くに、彼女が進一を愛してゐる氣持を尊重しなければならない。それだから彼女から進一を奪ふわけに行かない。と云つて、それだから自分が進一を手から放すと云ふ事は尚考へられない。

いくら考へても解決のつかない繰返し、永遠にどうもならない繰返し……自分はかう云ふ事を考へた揚句には、結局疲れて、へと〳〵になつて、仰向けに轉がつて、默つて天井を見つめる外仕方がなくなるのであつた。

『なるやうになるだらう。――それよりも書かうとしてゐるものゝ事でも考へよう』

だが、愉快な生活を持たずして、書く事のみが愉快であり得る筈はない。――自分はペンを持つ氣にもならずに、夜の明けるまで、ぼんやりと唯眼を開けながら、煙草を喫つて暮してしまふ。――S子が來た晩も、さうしてたうとう空しく夜明かしをしてしまつた。

S子はそれからと云ふもの、よく自分の部屋にやつて來た。午後二時頃、自分が眼を覺ますと、『兄さん、お眼覺め？』そんな事を云ひながら、自分の部屋に這入つて來た。それからその後も、自分が夜更けて歸つて來るのを待つて、忍ぶやうに、又彼女達のひそ〳〵話を告げに來た事もあつた。

『あたしは兄さんが大好きなのよ。だからお氣の毒で仕方がないのよ』

そんな事をS子は無邪氣な顏をして云つてゐた。無邪氣？――自分はさう云ひ切つてしまふわけには行かないかも知れない。何故かと云ふと、その後、S子は最も有邪氣な氣持を抱いてゐる時間にも、巧みに無邪氣な假面をかぶる事の巧みな女である事を、示すやうになつたから。――だが、その時分に、自分がS子を唯單純に無邪氣と思つた事には、少しも僞りもない。

それればかりではない。自分はS子をほんたうの妹のやうな氣のする事もあつた。自分が初めて彼女を知つた時、彼女は十五だつた。その十五の時から、彼女は自分に親しみと厚意とを見せてゐた。『兄さん』と彼女が云ふ時、女のきようだいを持つてゐない自分が、初めて妹と云ふものゝ優しみを想像し、その想像を示したやうな氣持になつたとしても、それは少しも無理ではないだらう。

ところが、或日の午後二時頃、丁度自分が眼を覺ました時であつた。

『兄さん、お眼覺め?』

さういつものやうにS子が云つて、障子を開けた。自分はいつものやうに笑顏を以てそれを迎へた。その時、こつちを向いてにこ〳〵笑つてゐるS子の顏が、丁度後から射す光線のためか、今まで見た事のない、違つたもののやうに見えた。『おや』と自分は思つた。S子の頰の具合が、自分に『女になつたな』と云ふやうな事を直覺的に感じさせたのであつた。――それは成熟したと云ふ意味ではない。もつと明らさまに云へば、『この女は處女ではないな』さう云つた氣持を感じさせたのであつた。

さう思つて見ると、それは頰ばかりではなかつた。瘦せぎすなその腰つきのなよやかさにも、肩揚をしてゐる背中のあたりにも、年に似合はない複雜な表情が感じられた。――或性慾學者の說によると、凡そ性慾的な女には、肥り肉のずんぐりした姿態のものと、瘦せぎすなすんなりした姿態のものとの二種類があるさうである。そしてそのいづれにしても、他の女とは比較にならない『肉體の表情』を持つてゐるものださうである。若しその說が正しいならば、S子の身體にあるその複雜な表情は、その第二の例に該當するものに相違ない。――だが、自分は突然S子のさう云ふ變化に氣がついたと云ふものの直覺的に感じたやうな事を、頭で信じようとはしてゐなかつた。そして又彼女が『處女でない』と云ふ事を、信じてしまふ證據も別段あつたわけではなかつた。

だが、それから四五日した或日、自分はその日もいつもの時間位に眼を覺まして、扨て顏を洗はうなどと考へながら、洗面器をもつて、障子を開けた時、向うの二階の梯子段を上つて行くS子の姿を見て、『おや』と思つた。――小さな中庭を間に挾んで、この下宿屋の建物は二棟になつてゐた。自分の部屋の前の廊下から、右を見ると、向うの建物の二階が丸見えになると云ふやうな形になつてゐた。そして向うの二階と、自分のゐる二階との間には、大きな柿の木が枝を

ひろげてゐて、それが向うと此方との間の互に丸見えになる事の露骨さを防ぐ簾のやうな役目をしてゐた。

その二階の梯子をS子が上つて行つたのだ。だが、上りながら、後をちら〳〵と振向いて、何か忍び足のやうな、隱れようとしてゐるやうな、おちつかない足取りのやうに自分には思はれた。自分は障子を半開きにしたまゝ立止つた。S子はこつちの二階を氣にしてはゐなかつた。階下のうちの者達の方を氣にしてゐるらしかつた。それに自分が障子を半開きにして立つてゐる前には、前に述べた柿が枝を擴げてゐる。（柿の實が色づき始めた時分だつた）その枝のために、注意して見ればこつちが見えない事はないが、併し氣にしなければ氣がつかない程度に、こつちが隱されてゐる。——自分の方では注意してゐるので、その柿の枝の間から向うが見えてゐるわけなのである。

S子の上つて行つた梯子の上のとつゝきに一つの部屋がある。その部屋の障子は開け放されてゐた。S子はその開け放された障子の前をちよこ〳〵と過ぎて、そして開け放されてない側の障子——その部屋は二面が障子になつてゐた——をかすかに開けて、その部屋に忍ぶやうに這入つて行つた。S子が開けたその障子の前には戸袋がある。その戸袋のために、こつちの棟の階下から見れば、その障子は見えなくなつてゐるが、併し自分のゐる二階から見れば、それがよく見える。

そこまで見た自分は洗面器をぶら下げながら、階下に下りて行つた。そして顏を洗ひながら、今見た光景を考へてゐた。——S子が忍び込むやうにして這入つて行つた部屋には、△△高等商業出だと云ふ男が住んでゐた。色の淺黑い、鼻の高い、ハイカラな美男子だつた。

『或は——』と自分は考へた。そしてそれ以外にあんな樣子を女がするものでない樣子を、S子がしてゐたと云ふ自分の觀察が、自分では間違つてゐないとしか思はれなかつた。自分はS子の頰や身體にあらはれた變化をそれと結びつけ

て考へた。どうしても符合する。

五

併しS子のさういふ事を詳しく書かうと云ふのが、この物語の本筋ではない。さういふ事實が、それまでS子について感じてゐた自分の感じに、多少の變化を與へたに違ひないといふ事の說明になれば、それでいいわけなのである。

S子の自分に對する態度は、併し前と同じ樣であつた。

『兄さん、お眼覺め？』

さう云つた調子で、例の子供らしい無邪氣な表情で笑ひながら、午後二時頃になると、自分に聲をかけた。

『ああ』自分はやつぱりこの家の誰に對しても感じないやうな蟠りのない氣持になつて、S子にだけは對する事が出來た。

さうしてゐる中に、その向の二階の△△高等商業出の男が、いきなりどこかへ轉宿して行つた。自分は相變らず宿にゐる事が尠いので、いつその男が轉宿して行つたものかは知らなかつたが、或日起きて見ると、その部屋にいつも見えてゐた本箱も机も掛物も見えなくなつて、部屋全體ががらんとしてゐた。

食事の膳をはこんで來たS子に自分はそれを訊いた。

『向うの二階の人は何處かに越したの？』

『ええ、一昨日大阪にお歸りになつたんですの』

『大阪に？　そいつは遠いな』さう云つてゐる中に、一寸冗談を云ふ氣になつて、『Sちやんはあの人を好きだつたんだ

らう?』

『あら、イヤな兄さん……』さう云つたが、S子は笑はずに、怒つたやうな表情をした。『あんな嘘吐き大嫌ひ。――大阪者なんて口先きばかりうまいんですもの……』

自分は自分の云ひかけた冗談を後悔した。今のS子の口振で見ても、自分が直覺的に感じてゐた事は事實だつたのだ。自分はさう思つた上で、男から逃げられたS子に同情したが、併し巧みにどんどんかう云ふ問題を、面倒にもつれさせない中に逃げて行く術を知つてゐる男が、自分に驚嘆を與へた。――いや、或は所謂淺薄なタイプの男だつたのかも知れない。自分はどんな人間だつたか、顏を見ただけで、話した事がないからよくは解らないが、併しその普通の意味での美貌らしい美貌の持主であるところから見ると、かう云ふ素人娘などを巧みに操縱する事には馴れ切つてゐたのかも知れない。だが、それにしても、逃げて行けると云ふ事は器用な話だ。

そんな風な感想も、それ自體は正當なものではない。併し其の時分の自分の、さういふ事についての融通の利かなさから考へて、そんな風な男のやり方と云ふものが、非常に不思議にも、驚嘆に値するもののやうにも、そして又輕快にも見えたのである。

無論『妹』を弄されたと云ふやうな不愉快をも感じない事はなかつた。だが、さう思ふ時に、自分は或恥しさを感じた。何故なら、機會があつたら、どう云ふ女に對して浮氣心を起すか解らない氣持は、自分にだつてあるからだ。いや、現に自分はさういふ一寸した氣紛れな心の動きから、こんなにのつぴきならない『結婚地獄』に陷つてしまつてゐるのではないか。浮氣者で、人情家で、氣紛れで不器用な自分は。

S子は併しそれ程の打擊をその男の逃亡から受けてゐるらしくは見えなかつた。二三日經てば歌も歌ふ……さう云つ

た程度であるらしかつた。

『兄さん、お眼覺め？』

三日も經つと、いつものやうに快活な調子で、自分の部屋の障子を開けて、にこにこした顏を見せるやうになつてゐた。

或日、それは十月の末だつた。その年は二百十日時分の天候險惡な時節は嵐もなくて濟んだが、十月の末になつてから、へんに天氣の惡い日が多かつた。――そしてその日自分が起きて見ると、空がすつかり曇つて、雲が低く、時々ざあつと雨が來ては止み、來ては止みして、何となく空氣が重く、身體が壓迫されるやうな氣持がした。自分は緣側に停んで、その空を見ながら、嵐が來るかも知れないな、と考へた。自分は身體の具合のためであるが、子供の時から妙に嵐の來るのが豫知出來るやうな氣がする。

さあつと雨が來る度に、右手の方の丘陵の上にあるM家の西洋館がその烈しい雨の中に薄ぼやけて煙つて見え、又雨が止みかけると、その建物が次第にはつきりして來て、そして赤い煉瓦の色彩が、妙に生々して美しく見える。――そんな事が幾度も繰返される。自分は嵐を豫知出來る癖に、嵐が嫌ひではない。自分はさう云ふやうな天候の變化を、それも度を越えると厭だが、或程度までは興味を以て迎へる癖が、やはり子供の自分からついてゐる。

自分は顏を洗つて來ると、又緣側に停んで、さうした空を眺めてゐた。今日は一寸散步にも出られさうもないから、一つ勇氣を出して、晝間の中から、ペンを握つて見ようと云ふやうな事を、ぼんやり考へてゐた。

そこに彼女が梯子を上つて來た。『やあ、どつこい、やあ、どつこい…』そんな事を云ひながら、進一の背中を後から押すやうにして上つて來た。相變らず短い薄い髮を束ね髮にして、ぐつぐつに著物を著て、帶の後の方がとけかかつ

て、緣側に引きずりかかつてゐる。

『おい、帶が引きずつてゐるよ』自分はさう云ひながら顏をしかめた。

『……』彼女は別段締め直さうとしはしないで、無造作にその垂れ下つた帶の尻尾を、手を後にまはして握つて、それを横に引つぱるやうにして、脇の下の帶の胴のところに挾んだ。

『だらしがない奴だな。もう少し何とか形をつけたらいいぢやないか』自分は進一を抱き上げながら、やはり顏をしかめて云つた。

『だつて、子供があつちや、さうなりふりに構つちやゐられないんですもの』

『なりふりに構へと云ふんぢやない。身だしなみに氣をつけろと云ふんだ！』

自分は空を見つめてゐた時のあの暢氣さはすつかり心に失くなつてゐた。進一を下に下ろして、それから自分の部屋に這入つた。

彼女は緣側と疊との兩方にかかるやうな位置に横ずわりに坐つて、

『あたし、あなたが書きかけていらつしやる小說を讀みましたよ』

『……』

『あれで見ると、あなたは隨分ひどい人ですね。あたしを少しも愛してゐないと云ふ事を、あんな風にして書いてどうなさるのです？』

『……』

自分は『ああ、又イヤな時間が始まつた』そんなことを考へながら、仰向けに疊の上に轉がつた。こんなやうな爭は

始終の事だつた。こんな風な爭を避けるために、自分は始終起きると直ぐに外に飛び出してしまふわけなのだが、その日は天氣のために、外に出て行かれないものだから、たうとう彼女と顏を合はせてしまつたのである。――もつとも、こんな爭が起るのは、決して彼女が惡いわけではない。と云つて、自分ばかりが惡いわけではないだらう。彼女との同棲生活は、必然的にこんな爭の繰返しにならないわけには行かないのである。

『どんな氣持であんな小説が書けますの？』

『無論愉快な氣持ぢやないな』自分は苦り切つた心の中から、ふととぼけたやうな言葉づかひが脣に上つて來たのを心で眺めてゐた。『愉快ぢやないけれど、併し俺の生活全體があんな風に皮肉なものに出來上つてゐるんだらうな。腹がひもじくつて堪らない奴が、食ふものがなくて、自分の皮を切り取つて食ふやうなものなんだらうな。痛くつたつて、苦しくたつて、胃腑の方で空つぽになつてゐる事を我慢して吳れないから仕方がないんだらうな』

『王子の歌か！』自分は心の中で苦笑しながら、つぶやいた。だが、呟くと同時に、へんにをかしくなつて來た。云ふまでもなく、通常のをかしみではない。ヒステリイ性のをかしみである。自分は大聲に笑ひ出してしまつた。

『あなたは人を莫迦にしていらつしやるのね。あたしの事なんか何とも思つてゐないんですね』

『何とも思つてゐない事があるものか。何とも思つてゐなければ俺も樂なんだが、何とか思はずにゐられないものだから、厄介なんだよ』

『ほんたうに莫迦にし切つてゐるんだわ』

そこで二人とも暫く默り込んでしまつた。自分は仰向けに天井を見つめたまゝ、側に坐つてゐる彼女に、腹の底から嫌惡を感じてゐた。

『小說に書いたやうな氣持だもんだから、始終家にいらつしやらないんですわ。あたしちやんと知つてゐますよ。時々泊つていらつしやる時なんか、お友達のところに泊つたやうな顏をしていらつしやるけれど、何處かでたのしい事でもしていらつしやるんですわ。あたしちやんと知つてゐますよ』

『…………』

その言葉は自分を頬笑ました。彼女の云ふ通り、自分は時々外泊して來る事がある。そして彼女の云ふ通り、それは友人のところに泊つて來るのではなく、戀を賣る女の處にである。……それは別段心の上で愉快な事ではない。家庭がいやで堪らない場合に、さういふところに行くのは、寧ろなかなか不愉快なものでさへある。けれども、彼女とのsexual intercourse と較べて、どうしてそれがより以上の不道德と云へよう。

『お前なんかよりは、もう少し「趣味」と「美」意識を持つてゐるからな。萬人の慾望を充たす器械だとしたところで、表面の形式だけでも、もう少しデリカシイを持つてゐるからな……』だが、それを自分は口に出しては云はなかつた。腹の中で彼女に向つて呟いてゐるだけだつた。

『兎に角、そんな話をするなら、進一を階下にやらないか』と自分は云つた。

『Sちやん…』彼女はへんに緊張した聲で云つて、S子を呼び、進一を階下に連れて行つて貰ふと、急に涙を流し始めた。

自分は相變らず天井を見つめてゐた。

彼女は涙を流しながら、自分を責め始めた。自分の小說に書いてある氣持を、操返し操返し責め始めた。――あなたのやうな冷淡な人はない、あなたのやうな愛のない良人はない、あなたの小說をよむと、心の底までが解る。とそんな

事を……』

自分はそれを默つて聞いてゐた。だが、やがて、もう少し前のとぼけた氣持がなくなつて、苦り切つた氣持だけが殘つて來た。

『併し、それなら、お前には最初ほんたうの愛があつたと云ふのか？　俺に對する心からの愛があつたと云ふのか？』さう云つた時には、自分の聲が苦痛と怒――彼女にも自分にも對する怒――とに震へてゐるのを感じた。『お前が眞に俺を愛してゐたと云へるか？』

自分は自分達二人の關係の抑々初めを、意地惡い氣持で心に描いた。それを口に出して、彼女の頭から浴びせかけるのは、彼女のためばかりではなく、自分のためにも恥しかつた。それだから、そのまま口を噤んで、ぢつと彼女を睨みつけたが、その自分の意地の惡い口吻と怒に充ちた眼付とは、その當時の事を言葉に出して云ふのと、同じ功果を、彼女に與へたに相違なかつた。……自分は全然の浮氣と氣紛れのとりことなつたのだと云ふ事を否定するわけに行かないと同時に、彼女だつてやつぱりそれと同じ氣持で自分に近づいて來たのだと云ふ事をよく知つてゐる。その時分或新聞社につとめてゐた自分を、毎朝彼女は起しに來た。障子の外から聲をかけるやうな起し方ではなく、彼女は自分の部屋に這入つて、障子を締めて、それから自分の枕許にぺたりと坐つて、そして自分のからだに手をかけて搖り起したのだ。自分はよくそれを知つてゐる。自分が寢惚けた眼を開く時、彼女の顏は直ぐ近くで微笑してゐるのが毎朝だつた。

……自分はその時二十五だつた。彼女は二十七だつた。二十七まで彼女は家庭の都合か、それとも他に何か都合があつたのか、獨身だつたのである。そして肉體的に健康でもあり、成熟し切つてもゐた。……

『阿母さんに知れなけれや、構やしないわ』そんな事を云ふやうな彼女だつた。

だが、その點では自分は今まで彼女を責めたこともなければ、又今でも責めようとは思はない。それでそのむら氣を自分に責めた。實際自分を責める以外に誰を責めるわけにも行くものではない。けれども、いくら責めても、いくら責めても、その結果に光を見る望が殆んどないと云ふ事が解ると、自分は自分をさうして責めてばかりゐる必要はないのだと云ふやうな氣がし始めて來た。そしてさう云ふ氣がし始めると、一體それならどうしたらいいのかと云ふ得體の知れない、今にも爆發しさうな瓦斯のやうなものが、むくむくと胸に湧き起つて來るのであつた。

『よく考へて見ろ。勿論その罪がお前にばかりあるんだと云ふんぢやない。と同時に、又俺ばかりにあると云ふ事も出來ないのだ。俺達の關係は最初から呪はれてゐたのだ！』と自分は投げつけるやうに叫んだ。自分は仰向けになつてゐた身體を、何か興奮のやり場がなくなつて來て、起き上らせた。

『………』彼女はぴつたり黙つてしまつて、しくり、しくり、しくり啜り上げながら、俯向いてゐた。

『お前だつて自分の事を考へて見るがいい。進一の生れた後だつて、始終さうだつたぢやないか。』と自分は云ひつづけた。進一さへ手放さなければ、あなたになんぞ別れたつていい、と二言目にはお前は憎さげに俺に云つたぢやないか。俺ばかりにではない、俺が本郷のU（友人の姓）の家にゐた時分、お前はUの阿母さんに向つても、さう云つたさうぢやないか。……俺がどうしても、自分が責任を負はなければならないと思つて、結婚の決心をした後でも、やつぱりややともすると、さういふ事を口にしてゐたぢやないか。……お前は自分の心を反省する事を少しも知らないんだ。始終人ばかり責めようと思つてゐる。その根本の心根の下等さが、俺にはいつも不愉快なのだ。……俺が俺を責めるやうに、お前も自分を責めて見るがいい』

『………』

『進一をつれてあなたと別れると、お前が云ふ度に、それがお前の俺に對する示威運動だと云ふことが解つてゐながら、俺は狂氣のやうになつて進一をお前と奪ひ合つたのだ。お前は進一さへ掴んでゐれば、俺を支配出來るものだと思つてゐる。……併し近頃の俺は我慢がならなくなつてゐる。お前のその手にはもう乘らなくなつてゐる。そんなことでは怯えなくなつてゐる。……それが今更お前には恐くもあるのだ。ほんたうに俺が別れるかも知れないと云ふ氣がしてゐるのだ。お前だつて、その準備をしてゐるだらう。進一を俺に渡すまいと云ふ準備をほんたうにしてゐるだらう。その癖さう思ふと同時に、お前は俺に對する執著を感じて來たのだ。お前の淺薄な心は俺にはよく解つてゐる。……一般の女性はどう云ふものか知らないが、お前のやうな女の「愛」はまるで掛引見たやうなものだ。俺にはそれが苦々しくて堪らないのだ。……ところが、男の「愛」はさう都合よく、自分のその時の立場によつて、手輕に伸びたり縮んだりは出來ないやうに出來てゐるんだ！』

『あなた見たやうな氣むづかしい人とは、どんな女だつて、我慢して一緒にゐられるものですか』と彼女は顏を上げて、呟くやうに云つて、そして直ぐ又俯向いた。

『そしてお前のやうな女と一緒に我慢してゐられる男は、尙尠いだらう！』と自分は云つたが、彼女が自分の言葉の意味が少しも解らなさうなのが、氣の毒のやうな感じもして來た。『お前は莫迦だな。そして氣の毒な奴だな。……お前には人間の心などと云ふのがよく解らないのだからな。……併しよく考へて見るがいゝ。お前はさうして、俺の書きかけてゐるこの小說の中の俺の心持がどうだとかゝうだとか云つて、俺に向つて食つてかゝつて來たが、お前が少しでも物の解る女だつたら、この小說を見て、今後二人がどうしなければならないかと云ふ問題について、俺に相談に來るのが當然なのだ。この小說の中で、俺はお前をかなり素直な人間として取扱つてゐる。なるたけ事實をそのまゝに書かうと

した小説だが、俺は俺の缺點ばかりを多く書いて、何故に俺がお前を愛せない、何故にお前が俺に愛されないか、そのお前の缺點は態と少しも書いてないんだ。……お前は俺に向つて食つてかゝるよりは、寧ろお前の缺點がどこにあるかを、俺に訊きに來るのがほんたうなのだ。そして今後二人はどういふやうに生活しなければならないかと云ふことについて、俺に相談に來るのがほんたうなのだ。……俺はお前をこの小說に書いてゐる通りに愛してゐない。併しそんな事について、お前がいくら俺に何を云つて來たつて、俺は仕方がないと思つてゐるから、お前の前に頭など下げやしない。……お前が、我々の狀態が、この小說に書いてある通りなら、さうしたらどうしたらいゝだらう、我々の未來について、謙遜になつて考へるやうになつた時は、いつでもお前の相談に乘つてやる。……お前は俺を責めればそれでいゝと思つてゐるだけで、俺達の生活が、今どんなに恐ろしい闇黑の中にあるかと云ふ事については、恐ろしさも感じてゐないんだ。その恐ろしさが理解出來ないんだ！』

併しさういふと同時に、自分で云つた言葉の內容が、自分の心に重くかぶさつて來た。若し彼女が謙遜になつて、今後の我々の生活をいかにしたらいゝかと云ふことを相談しに來たとした場合、自分は果してさういふ謙遜な心持になつて、我々の未來について考へることが出來るであらうか？――換言すれば、彼女がさうしてほんたうに謙遜になるとした場合、自分が果して彼女を愛せるやうになれると斷言し得るであらうか？　自分はいつの間にか、自分が彼女を愛せないのは、彼女に缺點があるからだと云ふ結論に達したかの如き口吻を洩らしてゐるが、併しそれがほんたうだと云へるであらうか？　彼女がその缺點を全部改めるとして、そんな事で彼女を愛せるやうになるだらうか？　自分は此物語の最初の方に、彼女に嫌惡を感ずる事の一例として、bed-paper について語つたが、若し彼女があゝしたデリカシイの缺除を、一切改めて、そして彼女の精いつぱいの努力でもつて、彼女の趣味、彼女の心掛を改善する事が出來たとして、

果して自分が彼女を愛せるやうになるものだらうか？――愛と云ふ始末の惡いあの感情が、そんな風に都合よく豫定出來るものだらうか？

自分は默つて、後腦を柱に凭せかけながら、考へ始めた。……若しそんな風に豫定づけられるものならば、解決の希望はたしかに有り得る。けれども、そんなに單純なものだらうか？……若し彼女が假りに謙遜になつたとして、今後の我々の生活をどうしませうと今云ひ出したとして、自分が果して愛を以てその相談に對する事が出來るとは斷言出來ない。寧ろ愛を以て對せないと云ふ感じの方が餘計にする事を、白狀しなければならない。

そして一方から考へて見ると、彼女がそんな風に無智であつたり、强情であつたりして、女らしい、しとやかさを持つてゐないといふ事は、寧ろ自分の心持を、今以上に苦しめることから救つてゐるやうにさへ思はれる。若し彼女が今の彼女と反對であつたとした場合、尙彼女に愛が持てなかつたら、その時自分の苦痛と自責とはより以上に强くならなければならないからだ。……自分ばかりではなく、彼女はその親からも他のきやうだいのやうには愛されてゐないらしい。昨年ひと頃、自分の兩親と一緒に暮してゐた事があるが、その時も折合が少しもつかなかつた。そして我々の二人の子供である進一も、始終家にゐない自分の方が、餘計に馴づくやうな風に見える。かう考へて來ると、まことに哀れな氣の毒な女だと云はなければならない。だが、又さうして彼女が人から餘り愛されない女であると云ふ事が、氣の毒であると同時に、自分に取つては、自分の彼女に對する氣持についての或辯解の口實を與へてくれるやうな氣がしてゐるのである。

『だか、いづれにしても、どうもかうも仕方がない！』自分は彼女のうつむいて、しくりしくりと、それもしほらしいと云ふよりも、いつまでも自分を責めようとするやうな强情さが泣いてゐる姿を見ながら、さう考へた。二三寸位の毛

がぼやぼやと、束ね髮の兩側に亂れて出てゐる、醜い、だらしのない頭の恰好を見てゐると、云ひやうのない苦しさと厭はしさとが胸に込み上げて來た。——こんな生活がいつまで續く事か？……一生！……一生……さう思ふと、もうとても救へないと云ふ氣がする。自分ばかりを責めてゐたつてキリがないと云つたところで、それだとて、どうしたらいいか？

自分は腦の半面が痛んで來た。その時分自分は、少し頭を使ひ過ぎたり、昂奮したりすると、いつでもこの偏頭痛を覺えるのであつた。自分は顏を横にして、熱してゐる頰からこめかみにかけて、壁の柱の冷たい面に當てた。そして手で輕く、とんとんと、頭の痛い部分を叩いてゐた。自分は創作の事を考へた。もう『王子の苦しい歌』などとぼけてゐる餘裕は頭になかつた。かうしてゐる間にも物を書いて行かなければならないと云ふ事が、自分の心を眞向から責め苛んだ。——こんな生活をつゞけて行くために、創作をやつてゐなければならないとは。——創作以外の事で自分に出來る事は何もないやうな氣がする。だから、それでやつぱりやつて行かなければならない。それで送らなければならない。子供の今後のことも考へて置かなければならない。それをみんな創作で。……あの行方不明になつてゐる兄が、もう少し賴りになれる男だつたら。そして兩親の方をどうかしてくれたら。さうすれば、後は子供のことだけだ。子供だけのことなら、何をしてでもやつて行けさうだか……

『あゝ、何も彼も厭だ。俺はもうつくづく生活が厭なのだ！』と突然自分は叫んだ。不意に口から逆るやうに、その言葉が飛び出たのだ。そしてその言葉が口から飛び出すと同時に、胸の中が沸き返るやうな氣がして來た。

『あたしだつて、面白いことがない！　あなたなんか外にいらつしやつて、何でも好き勝手なことが出來るけれど、あたしなんか何もない！』自分の眼の前の、醜い髮の毛の下から、自分の言葉の反響（こだま）でもあるやうに、さう云ふ聲が出

て來た。

『莫迦な！　お前にはほんとうの事が解らないんだ！　ほんとうの意味が解らないんだ！』と自分は思つたが、もうそれを口に出して、彼女にかかり合つてゐる氣はなかつた。

自分は一瞬間、頭の中がうつろになつたやうな氣がした。そして、つづいて、今までの考とはまるで違つた考が浮んで來た。——自分の或友人の弟が、南洋に行つてゴムの栽培をしてゐたが、それがマラリヤ熱にかかつて、その病毒が頭にこり固まつて、たうとう發狂した。自分の友人がその弟を南洋まで迎へに行つて、つれて歸つて來たのは、極最近のことだつた。その友人の話によると、患者はスキさへあると、寢台の角だの、柱の角だのに、その頭をどしんと打つつけて碎かうとする。それだから、始終警戒してゐなければならなかつたさうだ。……自分はその時、ふとその話を思ひ出したのだ。すると、妙にそれが自分に或暗示を與へた。寢台の角や柱の角にその頭をぶつつけようとするその狂人の心持が、直ぐ自分の近くにあるやうな氣がした。そして自分の顏の右の半面を當ててゐる壁の柱が、自分のへんてこなその時の氣持を誘惑しさうに思はれた。

『これはいけない…』

自分はぎつとしたので、急いでそこを逃げるやうに離れて、壁と遠ざかつた疊の上まで、膝でにじり寄つて行つた。けれども、そのへんてこな發作の餘波がたうとう自分の兩手の拳を、固く握らせた。

自分は自分の頭を兩手でぽかぽか撲り始めたのだ。

『誇張だ、誇張だ、莫迦な！』と自分は思つた。が、丁度靜座をやつてゐる時、身體の動搖を止めようとすると、あべこべに益々はげしく搖れるやうに、拳骨の動きを止めようと思ふと、それが一層反動がついて、どしんどしんと強く頭

にあたるのであつた。——自分は恐しい氣もしたが、妙に痛快な氣もした。そして何とも云はれず快かつた。

『あなた』と彼女が云つて、自分の手にすがりついて、ひいッと泣聲を揚げ始めた。『どうなすつたんです、あなた、どうなすつたんです？』

彼女は自分を發狂したとでも思つてゐるのだらう、そんな事を考へながら、自分はへんに意地惡くなつて、しばらくの間、さうして自分の頭を撲つてゐた。——が、それが堪らなく恥しくもあつた。それでやつとの事で、自分はその反動のついた拳骨の動きを止めた。頭ががあんと鳴つてゐた。自分に對しても、彼女に對しても恥しい氣がしたので、そのまま眼をつぶつて、再び先刻のやうに仰向けに寢ころんで、兩手を後惱にかゝつて、身動きもしないでゐた。手の指は打撃のために熱くほてつてゐた。

『あなた、どうなすつたんです？あたしが惡うございました、あたしが惡うございました』と彼女は泣きながら云つた。

『お前は階下においで！』

『あなた、あたしが惡うございました』

『いいから階下にお出で。大丈夫俺は氣が狂つたぢやないよ。……さあ、階下に行つて吳れ！』

『……』

『何もお前があやまる事はない。そして又お前にあやまられたつて、俺がそれをどう許すと云ふわけのものでもない。許すと云つたところで仕方のない話だし、何を許していいのか俺には解らない。——兎に角階下に行つて吳れ…』

『……』それでも彼女はもじもじしてゐた。

『階下に行けと云つたら。俺はひとりつきりになりたいんだ！』と自分はいらいらして叫んだ。

彼女は立上つて、そのまま默つて、自分の部屋から出て行つた。

彼女の足音が、廊下を通つて、自分の部屋から二室ばかり先の梯子段を下りて行つたのを聞くと、自分は大きく溜息をした。――自分は今の自分の行爲を考へた。何と云ふ莫迦げた事をしたものだらうと思つた。――自分の頭はかなりに不純になり、濁つてゐると思つた。何とも云はれない不愉快を感じた。……自分が兵隊に行つてゐる時、或軍曹からこんな話を聞いたことがある。戰爭に行つて、崖などをよぢ昇つた時、自分の身體の重みをささへつつ昇つて行く手の痛さに堪へ兼ねて、放せば深い谷の中に落ちて死んでしまふと云ふ事が解つてゐながらも、意氣地のない男になると、死んでもいいと思つて、手を放してしまふさうである。自分はうつかりすると、手の痛さのために、身體全體が滅びてもいい、さう思ひ兼ねない種類の人間だと云ふ氣がして來た。――自分は烈しい自己嫌惡を感じた。

自分は疲れて、へとへとになつて、默つて仰向けになつてゐた。考へる氣力もなくなつて來た。――氣がつくと、又ざあつと烈しい雨の音がして、風さへ少し加はつて來た。柿の實が、自分の部屋の前の廊下の右に突き出てゐる物干台の柱に、風に搖られて當る音らしい音が聞えてゐる。

疲勞の恍惚――さう云つたやうな心持に自分はぼんやり浸つてゐた。時間の流れるのも知らなかつた。

恐らくそれ程時間が經つてからの事ではないだらうと思ふが、併しそれがよく解らなかつた。何だか障子がかすかに開く音に、自分は眼を開けた。

S子が立つて自分を覗いてゐた。いつものやうにゝこ〳〵しないで、生眞面目な、心配さうな顔付をしてゐた。

『……』自分は何も云ふ氣力がないので、默つて、再び眼を閉ぢた。

『兄さん、氣分がお惡いの』

『うん、少し……』

『いけませんわね』彼女はさう云ひながら部屋の中に這入つて來た。『頭が痛いの？』

『いや、それ程でもないんだ』

『もんで上げませうか？』

『ありがたう。併しそれには及ばないよ』

『困るわねえ』ひとり言のやうにさう云つて、少し默つてゐたが、『うちの姉さんて、ほんたうにわからずやだからいけないのよ。我儘者で、強情で、ほんたうにいけないのよ。あたし大嫌ひ。……いつでも兄さんを苦しめるので、あたしほんたうに憎らしくなるのよ』

『いや、さうばかりは云へないんだよ』自分はどつちも善くも惡くもないんだ、と云ふ事を云はうと思つたが、この小娘にそんな事を云つても始まらないと思つたのと、それから臆劫なのとで、そのまゝ默つてしまつた。

『さつきも、階下へ下りて來ると、ぷり〳〵してゐるのよ。――何て云つたつて、子供を放すもんか、さう云つて怒鳴つてゐるのよ』

『…………』

『兄さん、兄さんはお厭でせうね？』

『……』

『兄さん、兄さんは姉さんと別れてしまふおつもり？』

『いや、そんな事はないよ』さう云ひながら自分は眼を開けて、S子の顔を見た。『どうしてそんな事を訊くの？』
『………』S子が今度は默つて、うつむいて、疊の上を指で撫でてゐた。なよなよしたその肩のあたりに、姉のそれとは似てもつかない、へんに艶つぽい軟かみがあつた。
『兄さん、あたしね、兄さんが怒つて出て行つておしまひになりやしないかと思つて心配してゐるのよ。……そんな事しちや厭よ。ね、屹度よ』
『ああ、……』
『ねえ、兄さん、あたし兄さんがゐなくなつたら、どうしようと思ふのよ』さう云つた時、S子は顔を上げて自分の顔を見た。自分はS子の表情に吃驚した。そこにあるものは姉の良人に對する單なる妹の厚意ではなかつた。
『………』
『あたし兄さんが大好きなのよ。誰よりも好きなのよ。昔から好きなのよ。だから、出て行つては厭。出て行つては厭。お願ひですから出て行つては厭』さう云つたかと思ふと、いきなり自分の胸に、S子の顔が倒れるやうにかぶさつて來た。そして身體ぢゆうを顫はしながら、『屹度よ、屹度よ、屹度よ、……』と呟きつづけてゐた。

…………………………………………………………
…………………………………………………………

『結局俺も小野哲哉かな！』と自分は苦笑しながら腹の中で思つた。
二葉亭四迷の『其面影』の主人公の小野哲哉が自分の頭に浮んで來た。あの性格の弱い男が、物質的な俗物な妻との生活に虐げられた揚句に、その妻の妹の小夜子の方へ次第に心が動いて行くその心理、それが自分の頭に浮んで來た。

妻と較べて、この世に詩を見つけようと悶へ、正しい事に熱情を持つてゐる小夜子の方へ。そして二葉亭の筆はその心理の自然を十分に示してゐた。――だが、S子が果して小夜子のやうな女だらうか。あんなに純な、そして理想主義者の女だらうか？

さう思ふと、自分は腹の底からの嘲笑を自分の上に浴びせかけないではゐられなかつた。

『辯解したいんだな、やつぱり』自分はその嘲笑の間に、自分自身のみじめな哀れな心を見守つた。『何とかして自分を辯解しようとして足掻いてゐるんだな。――だが、二葉亭の小說の主人公を持つて來たところで、そんな事で辯解がつくと思つてゐるのか？』

自分はS子が尙もその疊の上に坐つてゐるのが、苦しくつて堪らなくなつた。何と云ふ平然とした顏をしてゐるのだらう。――現在の姉の良人を奪つた瞬間の小娘としては、何と云ふ明るい、蟠りのない顏をしてゐるのだらう。そして十七の小娘が何と云ふ大膽さを持つてゐるのだらう。

『どうしたの？』

再び仰向けに倒れて兩手で顏を蔽うてゐる自分を見守りながら、S子はかう云つた。

『………』

『どうしたの？』

『………』

『よう、どうしたの？』

『いや、別段どうもしない』

自分は腹の中で泣いてゐたのだ。無論涙は眼に出るやうなことはなかつた。乾いたから泣き、涙の出ないから泣き、もしさういふ言葉が許せるならば、自分はその言葉の外のどんな言葉でも表せないやうなすゝり泣きを腹の中に聞いてゐたのだ。

『あたし心配だわ。ねえ、どうしたのよ』

『………』

だがその途端に、S子の母親が下からS子を呼んだ。

『何處にゐるの、Sちやん。——雨がひどいから、雨戸をみんな閉めておしまひ』

それがその場の自分の返事を救つて呉れた。

『はあい』S子は大きな聲を出してさう返事して、それから自分の方へ向ひ、

『ねえ、忘れちや厭よ、ね、どんな事があつても忘れちや厭よ』さう云つたかと思ふと、立上つてばた〱と廊下を小走りに走つて行つてしまつた。やがて、雨戸をがら〱と閉める音が聞えて來た。

雨は實際にひどくなつて來た。風もひどくなつて來た。ぴゆツと音を立てるその吠え聲と同時に、何處かでガラ〱と板か何かゞ吹き倒される音が聞えた。

『何と云つても辯解がつかない』と自分は再び考へた。——自分が若し道徳的反省のない野人だつたら、この事實は無道徳であつても、不道徳にはならないかも知れない。そして無道徳と云ふものは、或意味で許せる。そこには不純の分子がないから。自然だから。無邪氣だから。——けれども、何も彼も知つてゐて、自分のほんとうの心が囁く事に從はずに、それの反對の方へ引き込まれて行く形は醜い。知つてゐてさうなつて行く形が醜い。

自分は自分の不道徳を辯解すべき言葉がない。いや、併し不道徳を辯解すべき言葉がないと書く事は既に一つの辯解なのだ。——自分は何と云つたらいいだらう。——自分は自暴自棄だつた。毒を食へば皿までと云ふ氣がしてゐた。さう書いても、結局今から見て、そこに何かの辯解をしようとしてゐる氣持の匂ひがある。そこにさうなつて行く事に一種の自然さを讀む人に感じて貰はうとする辯解の匂ひがある。——いや、併し『一人稱小說』ではどうしてもさういふ事になつて行くのかも知れない。何も彼もさらけ出して、人々の讀むままに委せようと云ふ氣持で書かうとしても、どうしても人間が生きてゐる以上、そこに辯解の色がついて來るのかも知れない。何故なら、書いてゐるその人の生活が、書かうとしてゐる事實で終つてしまつてゐるわけではないから。その人の生活は未だ續きがあるのだから。そして續いて生きてゐるといふ必然の理由として、その人は何等かの形で、自分の存在を是認して行かなければならないのだから。

それだから自分はどう書いていいか解らない。——唯なるたけ自分の辯解の氣持の這入らないやうに努めながら、事實そのままを書かうとするより仕方がないだらう。

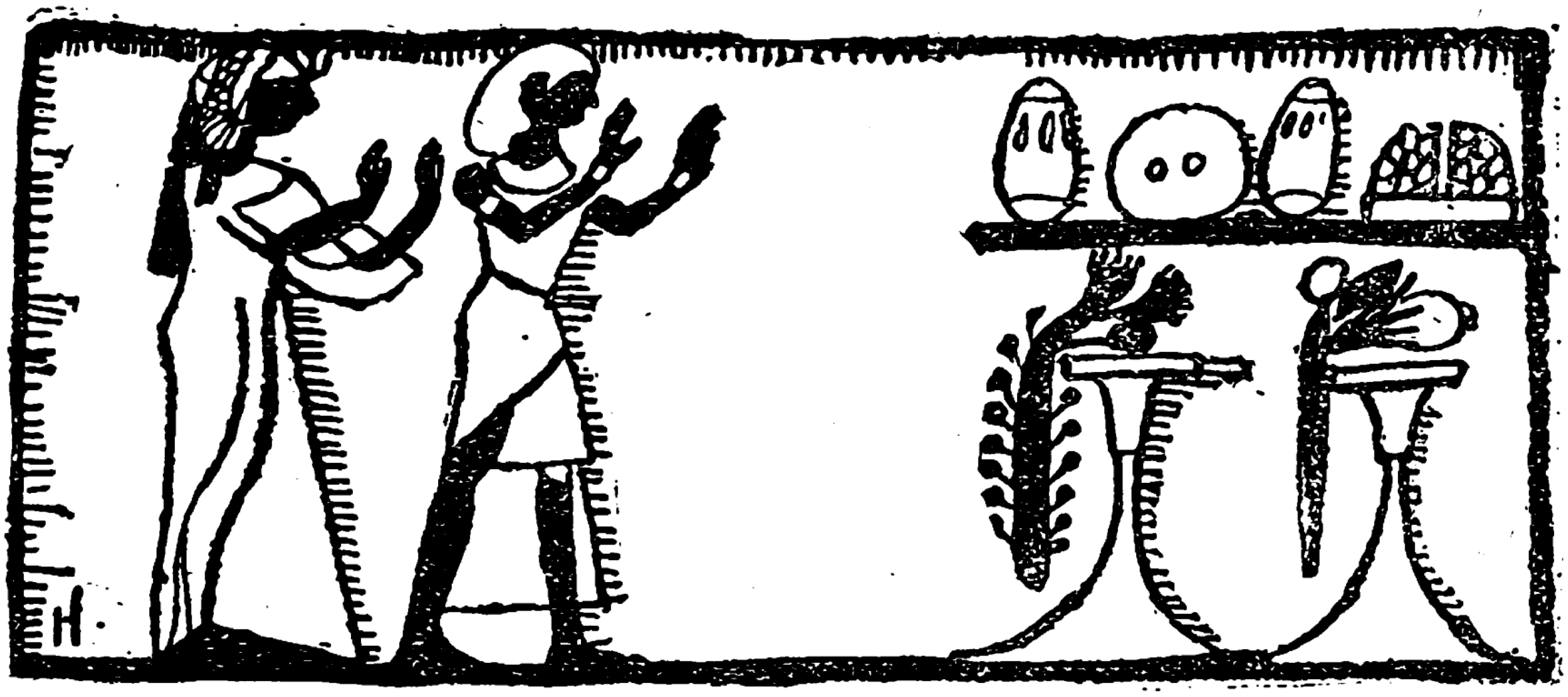
自分はかねがねS子を嫌ひでない事は事實だつた。妹としてかしづいて吳れる彼女に慰められてゐた事も事實だつた。併し又あの△△高商出の男の出來事があつてから、S子の肉體の總てが、自分に今まで感じなかつたものを感じさせて來た事も事實だつた。いや、それが一番力强い事實だつたかも知れない。……そしてS子の唇の近づくのを見た時、自分の反省の總てを物の美事に蹴散らしてしまふ烈しい情慾の嵐が自分を驅り立てた事も事實だつた。いや、さういふ言ひ方は辯解臭い。自分の反省は情慾の嵐を未然にふせぐには、餘りに薄弱過ぎたと云ふ方が、未だしも辯解の匂ひを避ける表現かも知れない。

『浮氣者の人情家』の性格には、反省は先に來る事を躊躇して、後からのさばり出るのがその本質なのかも知れない。

――おお、かういふ性格が常に自分の行爲の復讐に責め苛まれると云ふ事は、何と云ふ合理的な必然であらう。

自分は頭をかきむしり、もだえ、苦しみ、自己嫌惡の絶頂に達し、生存が厭になり、そして暗闇の中に心をのたうちまはらした末に、たうとう夜具をひきずり出して、それを頭からひつ被つた。だが、煩悶の絶頂の次には忘却が來、心の疲勞の次には眠りが來る。――『忘却』と『眠り』が人生の一時的の救ひなのだ。これあるがために人間は『明日の日』に向ふ準備が出來る。だが、結局『一時的』の救ひには違ひない。何故なら『明日の日』には又何が待つてゐるか解らないから。

自分は荒れ狂ふ風雨の音を聞いてゐる中に、いつの間にか、ぐつすり眠つてしまつた。



戯曲

人猿（一幕五場）

岡田三郎

醫學博士
女詩人
ゴリラ
死刑囚
教誨師
看守
眞實の犯人
若き女
諸々の精（女、少女、少年、數人）

場所、いづこなるを問はず。人物、また、何國人たるをえらばず。

第一場

女詩人。（星月夜のやうな薄明の舞臺、中央に、甚だ高きアーチ形の鐵扉あり。その扉に女詩人もたれてゐる。ほの蒼白き立姿。………やがて、女詩人、小聲にて歌をうたふ。舞臺裏にて絃樂を奏すれば猶可。）

女詩人の歌につれて、舞臺左右の小暗き木立の間より、樹、草、花、小鳥、月、星、愛、等、それぞれの精を裝へる數人の女、少女、少年、つぎつぎに、靜かなリヅムにて舞ひつつ現れる。

女詩人。（彼女のうたふ歌の中からぬけ出せし諸々の精が、幻のごとく彼女の前に群り舞ふをうつとりと眺めつつ、なほもうたひつづける。）

女詩人のうたふ歌、をはりに近づくに從ひ、諸々の精の舞踊ゆるやかになり、歌まつたく終らんとする時、舞臺上におのおの適當の位置をもとめて靜かに停止す。暗くなる。

醫學博士。（中央の扉、左右に開き、暗黑の中より長身の博士出で來る。扉、以前のごとく鎖さる。）

女詩人。（博士の姿を認め、夢より醒めたるごとき樣子にて、不審の眼をみはりつつ、）どこのお方ですの、あなたは？ど

こからおいでになつたの？

醫學博士。（女詩人に對して、へだたりのない、親しい樣子を示し、叮嚀に會釋して、）折角おたのしみのところへ、不意に、わたしのやうなものが現れて、さぞお驚きになつたでせう。お許しください。

女詩人。（生來の無邪氣ゆゑに、いささかも臆するところなく、愛嬌よく、）いいえ、わたし、驚いたりなんぞ、ちつとも、………。（少しの間）今しがた、わたし、ひとりで歌をうたつてゐたのよ、ここへもたれて。さうすると、御覽なさい！あれ、あんなにいろんな精が、………花の精や小鳥の精や、………すべて、わたしのうたふ歌の中から、さうしたいろんな精が幻のやうに現はれて、わたしが歌をうたふあひだぢゆう、みんなここで踊つたのよ。………さうさう、もう一度、わたし、うたひませうね！あなたもおうたひにならない？

醫學博士。（急に不機嫌な表情にかはり、冷かに）歌なんか、うたひません。

女詩人。（博士の不機嫌には委細かまはず、片手にて博士を扉の方へ押しやりつつ）さあ、それぢや、あなたは、少しひつこんで默つて見てらつしやい。（獨語のやうに、やや咏嘆的に、）歌もうたへない人が、この世の中に一人でも生きてゐようなどとは、わたしは思ひもしなかつた！美しい詩、………美しい藝術の世界に遊ぶより外に、この世の中には生き甲斐のあることがないのに！………（諸諸の精を見まはして、手をさしのべ）それぢや、みんな、もう一度踊つて頂戴な！……——ああ、あなたは、まあ、月の精！なんて美しいんでせう！（月の精に近より、手をとりあふ）若しもわたしが、あなたのやうになれたら、………いいえ、なれないことはない！わたしは、わたしの詩の中で、清らかな輝かしい月にもなれれば、香ゆたかな美しい花にもなれる。（月の精より離れ、自ら感動にたへざるもののごとく、暫時兩手にて顔を蔽うて沈默。やがて、弱弱しいが、やや狂はしき顫聲にてうたひだす。）

女詩人の歌につれて、諸諸の精、ふたたび靜かに舞ひはじむ。

醫學博士。(歌なかばに、女詩人の肩に手をかけて搖ぶる。)

女詩人。(最初は、博士に搖ぶられても知らぬもののごとく歌ひつづけてゐたが、やがて氣づき、急に歌をやめ、博士をおしのけつつ、烈しき權幕にて、)何をなさるの!

醫學博士。(微笑しつつ、大樣に、)わたしは、ただ、あなたに歌をやめて欲しいと云ふだけです。

女詩人。わたしの歌をききたくないつてんですね!なら、こんなところへ出てらつしやらなければいいのに。わたしに歌をやめさすよりも、あなたの方でおひつこみなさい!歌も詩も解らないやうな俗人は、ここには用がないのよ!

醫學博士。(女詩人が激すると反對に、博士はますます穩かに、相變らず微笑しながら、前へ進んで女詩人の手をとり、)あなたの詩をきかせていただいたお禮に、今度は、わたしの詩を、……あなたに云はせれば、詩ではないかも知れませんが、……とにかく、わたしのをお目にかけませう。

女詩人。(急に嬉しさうに)あら、あなたもやつぱり詩人だつたの?さうならさうと、はなつからおつしやればいいのに。……ね、それぢや、あなたの詩を早く見せて頂戴な!

醫學博士。(それには答へず、女詩人を鐵扉の方へ向きかへらす。)

扉、ゆるやかに、左右に滑り開くや、その高き扉の隙間より、蒼白い光洩れ來る。扉開くに從ひ、その光は漸次

幅廣く、かつ、末ひろがりに舞臺上にさしこむ。ややあつて、光が白さの度を增して次第に强烈になり、三尺程開かれた扉の間より、その背後に三四段の階段の中途に立つゴリラの姿が、はつきり見えるやうになる。

諸諸の精。(怖れをなし、舞臺の左右に退き、かたまる。)

女詩人。(扉の隙間より光さしはじめる頃より、博士に縋りて、共に一二歩あとすさり、ゴリラを見るに及び、博士の胸に一旦顏を伏せたが、またおづおづ顏をあげて見る。ゴリラ、眼を輝かし、口を開いて笑ふ。やがて徐徐に、扉は左右より鎖され、まつたく鎖され終れば、舞臺は以前の星月夜のごとき明るさにかへる。女詩人、吐息を洩らしつつ博士より離れ、暫時呆然、博士の顏を見守りたる後、漸く平靜の氣持にたちかへり、)あなたは、一體なんなの?哲學者?

醫學博士。(嚴格に)哲學者ではありません。科學者です。

女詩人。(訝かしさうに)科學者?……ああ、あの、科學者なの?(輕蔑の語調にて)なんだつて、また、そんな科學者なんて、變なものになつたんでせうね!

醫學博士。(やや、鼻であしらふやうに)あなたは、しかし、科學つて、なんだか知つてゐますか?

女詩人。知つてますとも!　そら、林檎の實が枝から落ちるでせう、すると、それが地球の引力だなんて、……おお、なんて殺風景なことでせう!引力だなんて云ふよりも、神のゆるしなくては、一顆の實も地に落ちることなし、と云つた方が、どんなに意味深いか知れないのに!(ややいらいらしく)わたし、科學者なんて大嫌ひ!地球はまるいものだなどと、よけいなことを考へだして、あの、空想的な懷しい大地の涯を、……憧れの無限の涯を、わたし達から奪ひとつたぢやないの!

醫學博士。（穩かに）おなじ科學者でも、わたしは、それとはちがひますよ。わたしは、醫學博士です。

女詩人。（一足とびすさり、大仰に）醫學博士ですつて？ ……おお、いやなこと！ 人間のたましひを無視し、樹や、魚や、石塊と一緒にして、洗つたり、接いだり、切り刻んだり、縫ひあはせたり、ただやたらに藥をつぎこんだり、……（間）……さつきゴリラを見せたのだつて、きつと、人間はゴリラから生れたんだと云ふやうなことを、わたし達に知らせようためだつたにちがひないわ。そしてあなたは、わたし達を嘲笑しようつてのよ、きつと。

醫學博士。（快活に笑ひ、しかしすぐに、思ひもよらない程重苦しい憂欝な語調で）あなたを嘲笑しようなどと、誰が思ふものですか。それとは反對に、嘲笑されるかも知れないのは、かへつてわたし自身です。なぜなら、わたしは、あなたにとつては全く知る必要のないことを、いつもいつも知りたがつてゐる。眞理、眞實、眞相、……わたしの知りたいのはこれです。美でもない、善でもない。わたしにとつては、眞實の外に、美しいものも、善いものもないのです。……

女詩人。絕對に？

醫學博士。絕對に。……だから、わたしは、眞實を擁護するためには、なんとでも戰ひます。……だから、わたしは、眞實をくらますものを、憎み、呪ひ、……

女詩人。ぢや、わたしをも？

醫學博士。（やや穩かに）さう、あるひは、あなたをも憎み呪ふ。なぜなら、あなたは、積極的に眞實をくらまさないまでも、常に、神話を愛し、夢を描き、空想を樂み、虛僞をも美化して享樂するでせうから。

女詩人。（不興げに）さうよ、あなたのおつしやるとほり、眞實なんてものは、わたしには用がないのよ。誰にも解る眞實なんてものより、選ばれた僅かな人達にのみ許された詩の世界の方が、わたしには有難いんです。……（博士より

去りかけ、諸諸の精をさしまねきつつ）さあ、みんな、あつちへ行きませう。こんな、わたし達に用のない人のそばになんかゐるのをやめて、あつちでまた歌つたり踊つたりしませう！

諸諸の精。（左右の木立の間に、靜かにしりぞく。）

女詩人。（踵をかへして立ちさりながら、博士にふりむきて輕く會釋し）さよなら！（間）またあつちへ來て、わたし達の邪魔をなさらないやうにね！さよなら！

醫學博士。（何等の動作もせず、無言にて、女詩人を見送る。）

この時、正面の鐵扉、また左右に開く。ただし、その奥は暗黑なり。

女詩人。（扉の開くを認めた女詩人は、歩みをとどめ、扉の奥を凝視す。扉はますます廣く開き、それ自身の幅以上に、靜かに滑り開きつづける。奥は依然として暗黑なり。女詩人、不審の眼を博士にむけ、）また、何か見せようとおつしやるの？

醫學博士。（無言）

舞臺暗黑となる。

第二場

舞臺やや明るくなる。左右の木立の間に、諸諸の精、憩へる姿ほの見ゆ。左手の立樹に、博士と女詩人凭れ立つてゐるが、樹の蔭になつて、よく見えず。

まつたく閉かれた扉の内側にて、黑幕靜かにあがる。監房の場面。夜。正面奥、壁上高きところに一箇の窓あり、夜空見ゆ。向つて左の隅近く、死刑囚うづくまりをる。

教誨師。（右手の戸より、燈火を先立てて、年老いたる教誨師、黑服をまとひ、屈みながら入り來る。燈火を下におき、囚人よりやや離れてたたずむ。）

死刑囚。（兩膝を立て、その上に顏を伏せてはゐたが、先程より、教誨師の入り來れるを知れるものの如く、徐々に顏を起し、怖しき形相に嘲笑をうかべて、教誨師を見あげる。やがて、低くはあるが、底力のある嗄れ聲にて、）またやつて來やがつた！坊主め！また、神樣に祈れつて云ふんだらう。懺悔しろつて云ふんだらう。（嘲笑ふ）人が無實の罪で、今、死刑に處せられようつて時に、神樣に何を祈る必要があるんだい！（嘲笑ふ）おれを無實の罪におとしいれた惡人共を、神よ憐れみたまへ！彼等にさいはひあらしめたまへ！………（嘲笑ふ）………馬鹿！誰が、そんな祈りを云ふもんか！（嘲笑ふ。しかし、いつのまにか泣笑ひにかはつてゐる。以前のやうに兩膝の上に顏を伏せ、片

手を前にのべ、教誨師を押しやる如くしながら、悲しい、哀れな、ほそぼそしい聲にて、)どうか行つてくれ！出て行つてくれ！　おれは、も誰うにも會ひたくないんだ。明日の朝、やられるまで、……（兩膝に顏を伏せたるまま、急に兩手にて頭をかかえ、呻く。やうやう聞きとれるほどの、かすかな聲にて、何か呟き、また呟き、悶える。)

教誨師。(やや暫く默然と、囚人の悶え惱むさまを見てゐた後、優しい聲にて、)用がないと云ふのなら、わしはすぐにも出て行かう。だが、若し、いつ何時でもわしに用があつたら、わしの名を呼んでほしい。お前さんの眼は、このわしの姿を見たくないと云ふ、だが、若しその時、お前さんの右の手が、このわしの右の手をほしいと云ふのであつたら、眼をつぶつて、ただ、お前さんの右手をわしの前にさしのべなさい。わしは、お前さんのその手をとつて、救主の前へつれて行かう。……また、お前さんの足が、このわしを足蹴にしたくおもひ、お前さんの齒か、このわしの咽喉に嚙みつきたくおもつてゐる時でも、若し、お前さんのたましひだけが、このわしに何かを懺悔したいと云ふのであつたら、わしを足蹴にし、わしの咽喉に嚙みつきながらでもいいから、心の中に懺悔して、たましひの救ひだけをなしとげなさい。若しまた、……

死刑囚。(いきなり顏をあげ、荒荒しい聲にて、)うるさい！坊主！賣僧！それほど人に懺悔させたかつたら、あの男と女をつかまへて來て、思ふ存分懺悔させるがいい！あいつらこそ、人殺しの張本人ぢやないか！

教誨師。お前さんは、まだそんなことを云つてゐる！人を呪ふことをやめなさい。ただ、お前さんの罪業をだけ悔いればいいんです。わしは、なにも、お前さんをさばかうとするのではない。お前さんが、ほんたうに人殺しの罪人であるか、あるひは、お前さんの云ふ、その男と女が眞の殺人罪を犯した張本人であつて、お前さんは、ただ、いろいろな證據によつて無實の罪に服せなければならなくなつたのか、それを、わしはさばかうとするのではない。誰がそれ

を眞にさばくことが出來よう！神樣のほかには、誰も、……。だから、わしの云ふのは、……

死刑囚。ちや、なんだつて、おれは、明日の朝殺されなけやならないんだ！赤兒を騙すやうなことは、云はないでくれ！おれは、この世を呪ひながら、立派に死んで見せるから、……心配はいらないよ。(寂しく嘲笑ふ)

教誨師。肉體の死滅を、なにも怖れる要はないんだ。怖るべきは、たましひの死だ。・・(死刑囚の方へかがみかかり、聲をひそめ、おごそかに、責めるもののごとく、)その殺人行爲を、たとへ、お前さんが否定しをほせたとしても、女を得ようために、その女を愛してゐたあの老人を殺さうとお前さんが決心した、……短刀をもつて、庭先に忍びよつた、と云ふこと、そのことだけは、よもやお前さんにも否定は出來まい？

死刑囚。(凄い形相にて教誨師をあふぎ見つつ、無言)

教誨師。それが、そもそも罪のはじまりだ。お前さんのたましひは、その時すでに罪を犯したのだ。他人の女に想ひをかけたと云ふことが、第一の罪、・・・そしてその女をわがものとするために、人を殺さうと決心したことが、第二の罪、……世の中には、これより大きな罪はない。その大きな罪でけがされたたましひが、綺麗に洗ひ清められると云ふなら、あらゆるものを捨てても惜しからう筈はないではないか。肉體を殺して、たましひを救ふ、……

死刑囚。(教誨師の言葉なかばに、ますます怖しい形相で、身をふるはせてゐたが、つひに、教誨師にむかひ、兩手でつかみかからんばかりに、)おれは、殺しやしなかつたんだ！殺すまぎはで、怖しくなつて、逃げ歸つたんだ！それでも、罪があるつてえのか？やい！乞食坊主！いま、ひとこと、云つて見ろ！その咽喉首を、……(壁によりかゝつたまゝ、徐々に立ちあがり、兩手を鍵のごとくに曲げ、教誨師に掴みかからうとする姿勢にて、)出て行け！出て行け！

教誨師。（胸に手を組み、うなだれかがみ、默禱禮拜するごとく、やがて燈火をとりあげ、囚人に面したまま、あとずざりして戸口より去る。）

死刑囚。（教誨師の去りたるあとを、さつきと同じ姿勢で凝視してゐたが、次第に力ぬけ、絶望的に、兩手にて顏を蔽ひ、壁に背をすりつつ、崩れ坐す。）

監房内暗黑となる。やがて夢幻的な光ほのかにただよひはじめる。監房正面の壁に、男女二人（「眞實の犯人」と「若き女」）の姿うかび出る。死刑囚は、ゆかに、うつぶせに倒れてゐる。

死刑囚。（監房内が、蒼白い光であかるくなりかける頃より、徐々に顏を上げて、壁上にあらはれる二人の姿を凝視してゐたが、それが、「あの男と女」だと解るや、猛然たちあがり、とびかゝる。が、その時すでに幻影は消え、彼は壁につきかへされて、ゆかに倒れる。呻く。）

壁のなかあたりより、男と女の嘲笑ふ聲がきこえ、ふたたび二個の幻影があらはれる。

死刑囚。（起きあがる氣力もなく、倒れ伏したまゝ、顏をもたげて二人を見据ゑ、無念さうに息をはづませてゐる。）

眞實の犯人。（死刑囚を見くだして、侮蔑の笑ひを發し、）まだ、おれ達を恨みに思つてゐるんだね！　往生ぎはの悪い男だ。

若き女。でも、どんなにわたし達を恨まうたつて、あともう四五時間しかないんだわ。思ふ存分、恨んで頂戴。

死刑囚。(もう一度起きあがらうと身悶えするが、その氣力なく、ぐつたり頭を落して、ゆかに伏す。)

眞實の犯人。おれも悪人ではあるが、君だつて同じ悪人だ。君はこの女のさしがねで、あの老人を殺さうとしたじやないか。ところが、君は、間際で殺すことが出來なくなり、逃げ歸つた。そのあとで、おれは、あの老人を刺し殺したおれは、君の最初の意志を、君にかはつてはたしただけだ。

若き女。ほんたうは、あの、だにのやうにわたしに食ひついてゐた年寄を、あなたに殺させようとしたのは、わたしぢやないのよ。これ、ここにゐる、この人なんです。

眞實の犯人。(笑ふ)君は悪黨だが、まだ若いよ。あの年寄をなきものにしさへすれば、この女が、君のものになると思ひこまされるなんて、あまり考がなさすぎる。その君の若いところを利用して、おれが、この女のうしろで絲をあやつつたのさ。かわいさうに!

若き女。(しをらしく)えゝ、ほんたうにかわいさうよ!　かんにんして頂戴ね!　わたし、一生、あなたの冥福を祈つてよ。

眞實の犯人。(女に笑ひかけて、)しをらしさうなことを云ふな!　それよりも、「あなたのおかげで、この人と樂しい暮をすることが出來るやうになりました。一生涯恩にきます、お禮申します、」と云つた方が、正直でいゝよ。

若き女。(男を見あげ、あまえるやうに、)でも、あなた、……

眞實の犯人。なにが、でも、あなただ!　……さては、まだ、あの男に未練があつたな!

若き女。あら、あんなことを!(はでに笑ひながら、男の頸に腕をまきつけ、媚びるがごとく、顏をすりよせる。)

死刑囚。(うめくやうに何事か口走り、上體をもたげんとしつゝ悶える。)

眞實の犯人。(片手で女を抱き、勝ち誇れるごとく、哄笑し、)おれ達二人を呪ふだけでは、まだ足らない。人の心の中を知りつくすことが出來ないのに、さも出來るやうな顔付をし、ただ證據だけで人をさばいて平然としてゐる人間共をも、呪ふがいゝ。それとまた、責苦に堪へられなくて、やけをおこし、自分が殺しもしなかつたのに殺したと白狀し、自分で自分を賣つた君自身をも呪ふがいゝ。(笑ふ)……ところで、おれはおれで、一生惡人になりをほせ、世の中の人間を嗤つて暮らさう。どうせ、この世の中には、眞實のことなんかあらう筈はないんだから。(哄笑)

死刑囚。(最後の勇氣を奮ひおこして、やにはに立ちあがり、呻きつゝ兩人に飛びかゝる。「眞實の犯人」の哄笑裡に、監房内次第に暗くなり、死刑囚が飛びかゝつた時には、すでに男女の姿は消え、彼は壁につきあたつて倒れる。暫時。)

右手の戸より、燈火を先立てて、看守はいつて來る。教誨師、そのあとに從ふ。

看守。(ゆかに倒れ伏したまゝ身動きもしない死刑囚の肩を、輕くおさえ、)おい、起きるんだよ。

死刑囚。(低くうなりながら顔をあげ、訝しさうに眼の前の人影を凝視する。)

教誨師。(死刑囚のそばに佇み、おだやかに)何か云ひのこしたいことがあつたら、云ひなさい。

死刑囚。(上體を起し、教誨師と看守を交互に見あげてゐたが、急におびえ、兩手を前へさしだし、坐つたまゝで尻ごみし、壁にぴつたり背をくつつけてうづくまり、絶望的に、)もう時間が來たんですか！(云ひをはつて、兩手にて顔を

衒ふ。)

この時、以前扉のありし場所、その内側に、黑幕靜かにおりる。

第三場

舞臺前面は常に薄明。

黑幕靜かにあがる。醫學博士の研究室の内部。夜。正面向つて右寄に、大きな檻あり、中に寢臺設けられ、頭を繃帶されたゴリラ、寢臺に腰かけ、兩手にて檻の鐵棒をつかみ、あちこち見まはしてゐる。

天井に電燈ともる。

正面向つて左寄に、窓あり、窓懸が垂れてゐる。

右手左手、兩方共に戸あり。

醫學博士。(左手の戸を開きて現れる。檻の前にすすみ、)どうです、氣分は?

ゴリラ。(鐵棒をつかみしまま、博士を見て變に笑ふ。)

醫學博士。僕の云ふことが解るね?

ゴリラ。(うなづく。)

醫學博士。だが、いつのまにか、君がゴリラの姿に變つてゐるのを、不思議に思つたでせうね？

ゴリラ。（自分の手、腕、脚等を見まはす。）

醫學博士。まあ、おひおひ、その理由は解らせてあげるから、今夜は、寢たまへ。なにせ、大手術をしたんだからね。君の腦髓を、僕が、かねがね養つておいたゴリラの頭へ入れたわけです。

ゴリラ。（繃帶でまかれた頭へ、手をあげる。）

醫學博士。（上機嫌にて）、それが、まつたく成功したんだから、僕自身にとつても、また、世界の學術界にとつても、これほど喜ばしいことはない。なぜと云つて、君、考へて見たまへ。この大手術に成功した以上は、人間の腦髓を、ゴリラの頭にではなく、他の人間の頭に入れ換へることも、確實に、容易に、出來ることが立證されたわけだ。つまり、人間の腦髓を人間の力で不死のものにすることが出來るんだ。（ますます雄辯になり）、今までは、凡ての智識は書物となつて殘されるだけであつた。それが、今度は、頭のまゝで永久に生かされる。しかも、その智識は、一旦死んだ筈のその人の頭そのものによつて、ますます成長させることが出來る。

ゴリラ。（熱心に博士を凝視して、きいてゐたが、しまひに俯き、眼を伏せる。）

醫學博士。その實驗に、君を提供してもらつたんだが、こんな結果になつたことを、あるひは、君は悲んでゐるかも知れない。それは、しかし、學術のために忍んで呉れたまへ。君の死體は、（右手の戸を指さし）、あちらの部屋にまだおいてあるが、近く、世界の學界にはかり、學術上の世界葬として、立派に葬るつもりです。

ゴリラ。（あちらに死體ありとききき、眼をむいて、隣室への戸を凝視す。）

醫學博士。さあ、今夜は寢たまへ。明日になつたら、またいろいろ面白い話もし、面白いこともやつて見せよう。

ゴリラ。（おとなしく、寢臺に横たはり、毛布をかけて、寢る。）

醫學博士。ぢや、おやすみ。電燈を消しますよ。（左手の戸の傍のスヰツチをひねる。電燈消える。博士去る。）

ややあつて、ゴリラ起きあがる。あたりを窺ひ、耳をすました後、檻の鐵棒をつかみ、力をこめてゆがめる檻から脱け出で、ゆかにおりる。忍び足にて右手の戸をあけ、隣室に入る。

間もなく、隣室にともされた電燈の光、あけはなたれた戸口より斜めにさしこむ。

暫くして、その光域に影がうごめき、電燈消え、戸口より、ゴリラ、白布に包まれた死體を抱きて現はれ、戸をしめ、正面に進み出る。やがて、窓際に歩みより、窓懸をよけて、音のしないやうに靜かに窓をあけ、氣配をうかがひつつ、死體を抱けるまま、窓外に逃れ去る。

黑幕靜かにおりる。

第四場

黑幕靜かにあがる。

庭園の場。夜。

植込、木立等。

ゴリラ。(左手の木立の間より、死體を抱きしまま、現れる。死體を適當の樹蔭にかくし、右手の木立へと去る。)

やや暫く、舞臺空虚。

ゴリラ。(右手の木立の間より、兩脇に男女(「眞實の犯人」と「若き女」)をかかえ、現れる。中央に進み出で、兩人を投げるやうに地におろす。)

眞實の犯人。(寢卷はあちこち裂け、血痕にじみ、手足、顏面、數ケ所に負傷し、出血し、起きあがる氣力もなく、地に伏して動かず。)

若き女。(ふりみだした寢卷姿しどけなく、地に投げ出されたまま身動きせず、痛痛しい悲鳴を、かすかにたててゐる。)

ゴリラ。(先程かくしておいた死體を樹蔭よりかかえ來り、男と女をそばにひきよせて、兩人の眼を開かせ、死體の顏を見せてやる。)

眞實の犯人。(辛うじて死體の顏をみとめ、怖れをなし、はひずつて、のがれ去らうとする。)

ゴリラ。(左手にて、逃れ去らうとする男の頸筋を握りしめる。)

眞實の犯人。(斷末魔の苦みにて、息絕ゆ。)

若き女。(男の最後を見、悲鳴をあげて、地に伏す。)

ゴリラ。（右手に女の髮をつかみ、無理に顏をあげさせ、死體の顏に近づける。）

若き女。（やうやく上體を起し、兩手を地について、喘ぎ喘ぎ、眼をみはり、死體の顏を凝視してゐたが、男とおなじく、怖れをなして身をひかんとしたが、ゴリラに髮をつかまれてゐるため、その場にたふれる。）

ゴリラ。（膝にのせてゐた死體を下におろし、かはりに女を抱きあげ、兩手に頸をつかんで、まともに女の顏を見、物凄く笑つて、やにはに女の口に嚙みつく。）

若き女。（畢生の力をふりしぼり、兩手にてゴリラに抵抗すれども及ばず、やがて、ゴリラに抱きしめられたまま、傍の叢蔭に連れ去られる。）

やゝあつて、叢蔭にて、絕え入るごとき女の悲鳴。

ゴリラ。（叢蔭より出で來り、死刑囚の死體を抱きあげ、木立を縫うて去る。）

ゴリラが死體を抱きあげる頃より、左右の扉、徐徐に鎖され、その姿、木立の間にかくれ終るや、暫くして扉まつたく鎖される。

第五場

第一場とおなじ。正面に高き鐵扉とざされあり、星月夜のごとき薄明。

女詩人。(夢を追ふごとき惱ましき足どりにて、左手の樹蔭より出で來る。扉の前に行き、兩手をひろげて、扉に顏を伏せ、思ひ惱めるさま。やがて、むきをかへ、扉にもたれかかる。)

醫學博士。(おなじく左手の樹蔭より出で來る。)

女詩人。(博士を認め、彼女も二三歩博士の方へ進みより、)なんだつて、あなたは、あんなものをわたしに見せたの？

醫學博士。(無言にて、女詩人の前に立つ。)

女詩人。なんだつて、あんなものを見せて、わたしを苦しめようとなさるの？

醫學博士。なにも、あなたを苦しめようとして、見せたんぢやありません。

女詩人。ぢや、なんで？

醫學博士。わたしの研究室から、たまたま暴露された現實の、ありのままの姿を見せただけです。

女詩人。(奇異の眼をみはつて、博士を見あげ、)あれが、現實なの？(ふりかへりて、扉の方を眺め、また博士にむきなほり、)あの、扉の奥の、怖しい出來事が、……あれが、現實なんですの？

醫學博士。あなたにはさう見えないかも知れない。けれども、わたし達の學問は、それを偽りのない現實となし得るところまで達してゐるのです。(聲をおとし、優しく、)ああ云ふ世界を、あなたは、見たく思はないんですね？

女詩人。(うなだれ、兩手にて顏を蔽ひ、博士の胸にもたれかかる。)

醫學博士。見たくは思はないんですね？

女詩人。（博士の胸にもたれ、顔を蔽うたまま、ただ、首を横に振るのみ。）
醫學博士。ぢや、見たいんですね？
女詩人。（やはり、首を横に振るのみ。）

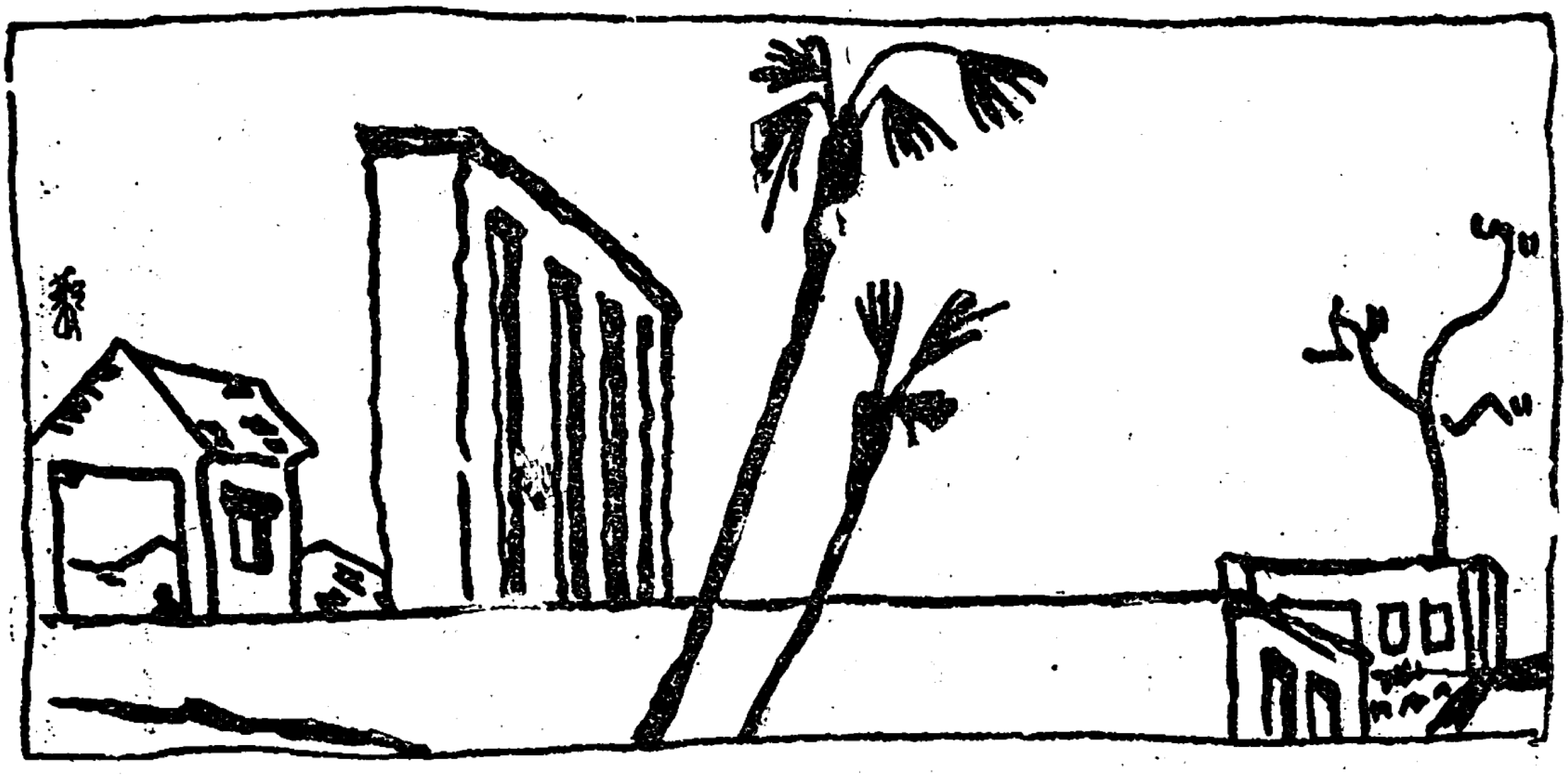
この時、正面の扉、靜かに開きかける。强烈なる光線、高き扉の隙間よりさし出る。やや開くや、數段の階段の中途に、ゴリラ、死刑囚の死體を抱いて立つてゐるのが、くつきり浮びあがる。

女詩人。（光に眼を射られ、博士の胸より顔をあげ、扉の奥の光景を見、博士に縋りたるまま、左手に數步しりぞく。眼はゴリラよりはなたず。）
醫學博士。（おなじく扉の奥を見つつ、女詩人と共に數步しりぞく。）

扉開きはじめる頃より、諸諸の精、左右のほの暗き木立より靜かにたち現れ、漸次、舞臺中央にすすみよる。
扉は、およそ一間ほど開きて、それ以上は開かず。

女詩人。（ためらひながらも、扉の方へ思はず步みより、またためらひ、最後に、階段上のゴリラの足許に倒れ伏す。）
醫學博士。（默然、佇立せるまま、女詩人を見まもる。）

（幕）



賣笑婦マリ

佐藤春夫

その一

高木がマリに三百圓出してやらうと言つたのは全くただの氣まぐれだつた。高木といふ人物を知つてゐるならば、このことは誰にもすぐわかる。

マリが高木のところへ相談に來たのも、高木のそんな氣質を三浦から聞いてゐたものだから、ひよつとしたらといふ心頼みと、それにマリにとつてはこの場合、たどひ駄目にしたところで高木にでも泣きついてみるより法がつかなかつたのである。

マリは思ひがけなく捉(つか)まへられたのだ。期日ではあつた。しかしほんの一度手紙があつて、その手紙に對しては、ちやんと日まできつてこちらから逢ひに行くと、マリのつもりでは正直な返事をして置いた

のに、不意に來られてしまつた。

はじめ手紙があつた時にもずいぶんびつくりした。今だに、相手がどうしてマリの居どころをつきとめたものやらわからない。それがマリには一さう怖ろしかつた。どこへ隱れたつて駄目だと思つた。その矢さきへ思ひがけなく人が來たのだ。

使ひになつてマリを捉まへたのは向島の口入屋で、上總やのおやぢであつた。マリの全く知らない男だ。そのせゐもある、この男のやり口は手きびしいものであつた。初め、客のやうな顏をして店へ這入つて來た。ビールを一杯注文すると、ぢろりとマリを見た。こいつに違ひないと見てとると、上總やは支配人に面會して、マリの身の上を何もかもあばいてしまつた。三浦とぐるになつて逃げたほどだから、三浦の犯罪だつてぐるでないとは限らない、どうもさうに違ひないと思へるふしもあるといふやうなことまで匂はした。

支配人はびつくりしてマリを呼び出した。相手が面倒だと見てとつて、支配人はマリを上總やへ渡してしまつた。支配人の出かた一つでマリは今夜すぐつれ出されなくともよかつたのだ。だが、支配人は今までに二度までマリを口說いたことがあつた。マリは應じなかつた。それが支配人には今さらごうはらだつた。高がチヤブ屋の淫賣のくせに、口を拭つてしほらしい顏つきをして、しかも自分をふつたと思ふと支配人はいま〱しさが一時に發したと見える。もう一つには、マリは、この店にまだ二月ばかりしかゐなかつたので、前借も何もしてゐなかつた。

上總やは是が非でもマリを、今夜のうちに港ホテルへつれて行かなければならないと言ひ張つた。相談する人があるからせめて明日までと言つたのに、上總やはそれさへどうしても聞かない。

今も高木の門前へ、上總やは張り番をして待つてゐるとマリは言つた。三浦とぐるだといふ證據は握つてゐるのだか

ら、このうえ逃げてくれるやうなら、金などはもうどうでもいゝ意地になつて密告してやるとおどかした。マリはまた港ホテルの主人の性質を高木に說明して、歸ればどんなひどい目に逢ふかわからないと言つて蒼ざめた。どうかして歸らないですむ工夫はあるまいかとマリはそればかり言つた。――こんな時に、せめて、あんな薄情な男だけれど、三浦でもゐてくれたら何とかまた方法もあるだらうのに、と言つてマリはたうとうしく〱と泣き出した。

三浦にそんな智慧や才覺があると思つてゐるマリの口ぶりが三浦を見拔いてゐる高木にはをかしかつた。

マリが最後に高木に賴んだのは、ともかくも門前に待つてゐる上總やに逢つて、マリは引受けてこの事件に就ての適當な所置は俺が考へる。それまで待てと高木の口から上總やに言つて欲しいといふのである。さうすれば今夜、港へ行かなくともすむだらう、――とマリはただもう港ホテルの主人といふのを一途にこわがつてゐる。

マリのその賴みを高木は承諾しなかつた。そんな一時のがれのことを言つても、第一、上總やは承知しないだらうし、もしまた承知でもしやうならそれこそ、この次には借金を耳をそろへて返した上でなけや解決しないだらう。で、いざ借金を返さなけやならないとなればマリの手で出來るわけがないのだから、うつかり言つた一ことの爲めに高木が最後までひつかかりにならなけやなるまい。そんな借金ならマリが自分で交涉して踏み倒さないといふ型ばかりに、値切り倒したらよささうなものだ。ともかくも一度は、しかたがない、港へかへつて自分で主人と談合するより手はない。高木はそんなことをマリに言つた。

マリは默つて途方にくれてゐた。それを見て高木は借金の額を聞いてみた。マリは泣きやんだ赤い目で高木を見上げて、七百圓になつてゐると言つた。そのうちの半分まではみんな三浦のために使つたのだと言ふ。三浦がこの前、未決監にゐた間にした差入れやら、三浦が病氣になつた時の醫者への支拂ひ、それに辯護士への支拂ひ、そんなものが三百

圓足らずと、そのあとは多分、ジョオジの里扶持が積つたのだと思ふけれども、それにしてもそんなどつさりになる筈はない。さうは思つたけれども、何しろ事情が事情であつたから、先方の云ふなりに七百圓といふ證文を入れて來た。三浦も知つてゐる、だから三浦がどうにかしてくれるものと信じてゐたのが間違ひだつた、とマリは言つた。——屋敷がある話や、伯父さんの噂や、マリも三浦の出任かせの言葉を眞にうけたのだ。

三浦の出鱈目には一時はみんなだまされる。根も葉もないことでは無い上に、それを口に出す瞬間には、その嘘をまづ三浦自身が本當だと思ひ込むらしいのだ。高木も今までにずい分度々三浦にはだまされてゐる。現にマリの事だつてもさうだ。思ひ出すと笑ひたくなるのだが、三浦は或る時高木に女中を世話しようと言つた。女といふのは合の子でいゝ女だが、子供がひとりある。ウヰトコスキイといふ店にゐたレババといふ男の妾をしてゐたので、レババの子供を産んだのだ。レババはおれの友達だが惡い奴だ、と三浦は言ふ、そいつは店の金を持つて上海へ逃げた。置いてけ堀を食つて女は子供をかかへてその日のことに困つてゐる。可哀さうで見兼ねるから女中に使へといふ話であつた。高木はふと眞にうけてみたが、子供がゐてそいつまで連れ込まれたのぢやうるさいと思つたし、よく注意してみると三浦の口うらにやはりへんなところがあるので取合はなかつたが、それがマリの事だつた。三浦はマリを港からつれ出してはみたが置くところがなくて高木のところへでも一時置かうと思つてそんなことを言つたものらしい。その後のことであつたが、三浦は或る晩、或るところですばらしい女を見つけて來たのだが、そいつは宿さへあればうまく買へるのだから行かうと言つて高木を誘ひ出した。それはひとりしか居ないのだが、高木が氣に入れば高木が買ふがよし、でなけや三浦自身で買つてもいゝといふ。そこで三浦は高木をつれ出した。三浦のいふすばらしい女といふのが、その時初めて見たのだがマリのことであつた。高木は氣に入らなかつたし、それに三浦とマリとの様子がどうもをかしかつたので買ふ氣

などはなかつたからよかつたものの、高木が氣に入りさへすれば三浦は自分の情婦を高木に買はせるつもりだつたかも知れない。もうマリが飽きて來て、高木に押しつけて置いて逃げるつもりだつたのか。――しかし三浦はそのころまだマリにのぼせてゐたのだら一層わからない。つまりは單に、そのころ堅氣のうちにゐて思ふやうに逢へないマリと逢引する待合とその費用とを高木に算段させるために、うまいことを言ひ出して高木をひつぱり出したのだ。……若し高木がマリに氣があつて、それを買ふと言ひ出したら……などといふそんな考などのありさうもない三浦である。直ぐ見え透くやうなその場かぎりの嘘を並べたり、あとの始末のつけやうもないやうなことを平氣で――といふよりは無思慮に仕出かしたりするのが三浦だ。さうしてたうたう泥棒までした。さうかと思ふと、一種精神的なところがある。ふとしたはづみにしよんぼり沈み込んで、こんなことをしてゐて俺は一たいどうするのだらうなどとしみじみ言ひ出す。青年だからまたうぶなところもあるからだらうが、或る時に氣が違つたかと思つたほど激しくむせび泣きして、その理由を尋ねても決して言はないことがあつた時には、高木は三浦を面白い奴だと思つた。馬鹿かと思ふと、Rickard Miller といふ獨乙流の名を三浦梨花と當字したり、活動のオケストラに仕事を見つけ出して來て、どこで習つたといふこともないヴアイオリンを相當にごまかしてのけたりも出來る。混血兒にはよくある奴ださうだが、三浦はてもなく變質者だ。それを面白がつて高木は物好きに三浦などとつき合つてゐた。萬々承知の上でもついうつかりだまされる。それほどだからマリが三浦にだまされたと言つて高木は笑ひも出來ない

　知りつゝ三浦などとつき合つてゐたおかげで、高木はかう泣いてゐるのを見るとマリに何とか言つてやらなければやならなくなつた。高木はマリに逢ふのはたつた三度か四度で、今まではろくに口も利いたこともない。義理や因緣を言つて、高木はマリに錢の五錢もやるわけはなかつた。それを高木は、ふと思ひついた事があつたし、それにこの人物に特

有なへんな氣まぐれで、三日經つたら三百圓やると言つた。そんな借金なら三百圓で型がつきさうなものだ。型がつかなくともそれ以上の事は出來ないが、その時には何とか自分で考へるがいい。さうして今度はともかくも港ホテルへ歸らなけやなるまい。さうして主人に會つて談じて見ることだ。怖がることは何もない。たとひどんな手荒な奴だつてまさかいきなり殺しはしない。それどころか金にしようと思つてゐる玉ぢやないか。――高木はマリにさう言つた。

高木の言葉に力を得たのかマリは、ではともかくも港へ行かうと言つた。歸りぎわにマリはくれぐれも高木に賴んだ。

三浦に捨てられてこんな抜殼のやうになつた心持で、どうして、今更、あんなつとめが出來るものか。――マリはさうも言つた。

今から決心をした時に足を洗はなけや、いまにジョオジが大きくなつて、もう二三年もうかうかして居ようものなら、ジョオジは自分のしてゐることがわかるやうになる。それが何よりも怖ろしい。ジョオジは今五つだが、智恵の早いませた子だから。――マリは、さうも言つた。

三浦から聞いた話だと、マリは二十三かそこらださうだから、早く子供を持つたものと見える。

あまりジョオジを可愛がるのが三浦には面白くなかつたらしい――とマリは言ふが、さうではなからう、飽きつぽい三浦がただ飽きたといふだけのことだらう……

上總やが待ちあぐんでゐるぜ。

さう言つて高木はマリを立たせた。

――うまい工合に處決した。

高木はマリを歸してからさう思つた。高木のいふのはマリの事ではない。例の始末に迷つてゐた惡錢の事だつた。というのは、一口にいふと高木は或る金持をだまし贋作をつかましたのだ。高木はその事自體を決して惡い事だとは思つては居ない。それどころか愉快にさへ思つた程である。美術の保護者面をして、買はうといふから見せれば、生わかりの講釋をした。高木は相手の喜ばないらしい二三の近作をしまひ込みながら、その時ふと目についたのは、或る無名の畫學生が見てもらひたいと言つて留守に置いて行つた或る作品だつた。それがそつくり高木の以前の作品の淺ましいほど不器用な模倣だつた。相手をからかつてやらふといふいたづら半分に、高木はそいつを持ち出して見せたのだ。買ひ手はすつかり乘り氣になつた。高木は興に乘じて言つた――舊作のうちで氣に入つたのを一枚だけ保存してあつたのだから手放したくはないのだがと。そこで高木は三百圓で賣らうと言つた。約束が出來て高木は痛快な氣持だつた。即座に、ほんとうの作者が遠慮がちにつつましく鉛筆で書いた署名の上へ、あくどいヴアミリオンで高木は以前書いたことのある氣取つたサインを書き込んだ。ニスを引いてからとどけるとは言つたが、いざ持たせてやるといふ段になるとさすがに躊躇された。相手に渡すのを日一日と延してゐた。わかりもしない奴のコレクションに自分の贋作があつたつて當りまへのことだ。集めた奴の恥にはなつても罪は高木にはない。そんなことぐらゐ高木には何ともなかつた。さまを見ろだ。高木はそんな氣持のある男だつた。――ただその受取つた金を自分で使ふとなると、高木は自ら咎める。

その三百圓をマリにやつてしまふのだ。

金の使ひ道がついて、それが高木には何よりうれしかつた。哄笑したかつた。

手紙を書いて高木はそれを書生の伊那に渡しながら、すつぽり新聞にくるんでしまつてゐる例の畫をその富豪の家へとどけて、金を受取つてくるやうに命ずると、アトリエを出て、直ぐ二三町離れたところにある住居の方へ歸つて行つ

た。

情夫に捨てられつづけの賣笑婦で、しかも合の子で、子持で、それが借金で苦しめられて、相談相手もない。當のマリを見た時には別に何ともなかつたのに、いま抽象的に考へるとそれが可哀さうになる。具體的な現象としては何ともなかつた。それが抽象になつて、始めて俺に訴へる――どういふわけだらう。つまり或る距離に立たなけや繪の具ばかり見えて繪の効果がはつきり受け取れないやうなものかな、高木はぼんやりそんなことを思ひながら、その序に、その可哀さうな女が、俺の人をごまかした金でほつと息をつくのだと考へる。高木は恩を賣るといふやうな氣持ではなく、もつと以上の不思議な、滿足に似た氣持だつた。

その二

伊那が受取つて來た金を手にすると高木は、さてそれをマリのところへどうとどけてやつたものか、ちよつと迷つた。うつかりしてゐて尻のつまないことには、その受渡しのことに就てマリとははつきり打合せては置かなかつたのだ。マリのところへ持つて行つてやればいいのだが、わざわざ横濱までそれだけの親切もない。地震から後、横濱はどうなつてゐるのか、それを見がてらに行つて見てもいいと、ちよつとそんな考へも浮んだが、直ぐ氣がついた。それは今までまるで氣がつかなかつた事だつたが、もし高木がマリのところへ訪ねて行つたとすると、港では高木をマリの新しい旦那だと思はないとも限らない。さうして高木の身なりでも踏んでみてこれや三百圓よりもつと出さうな奴だと見てとつたら、それはマリの爲めに、さうして高木自身の爲めにも厄介なことになる。面倒な、ほつて置かう。マリが工夫をして取りに來るだらう。さういふはらで高木はうつちやらかして置いた。

約束の三日は過ぎて、四日目の朝になつた。「横濱にて、マリ」の手紙が來た。――いろ〳〵御心配をかけ御禮の申しやうもありません。不意にあんなことを申上げたのを御許し下さい。外に仕方がなかつたのです。ここへかへつて三百圓で許してくれと申しましたが、主人はどうしてもきゝ入れず、そんなはした金をとるくらゐなら訴へてやると申します。身に覺えないことですが、その上主人に打たれたり蹴られたりします。くやしい事ばかりです。仕方がないから皆でも拂つて早くここから出てしまひたいと思ひます。どうぞお話の三百圓を御用意下さいまし。あとは私の方でどうにか都合をします。あなた様のところへ私あてでお金がとどきますから御うけ取り置き下さいまし。この手紙はくらがりで書いたのです。どうぞお許し下さい。三百圓はどうぞ御願いたします。――レタペーパアへ鉛筆の走り書きだつた。マリの手紙は三浦が一度見せたことがあつたが、相當には書いてあつた。この走り書でも割にうまい。ただ後半があまり簡單すぎるが、誰かマリの爲めに高木のところへ金をとどける人はあることはわかる。いづれその使でもくれば、それからあとをどうするかもわかるのだらう。

三時ごろになつて伊那は客をとり次いだ。人相のよくない四十男で、名前は言はない。お目にかからなけやわからない。と言つたさうだ。高木は何の用事だと聞かせた。横濱のマリさんのことで、といふ答だつた。では金でも持つて來たのか、それとも人相のよくない男といふからには、港ホテルからでも來たのぢやないかと高木は思つた。マリの使などと言つて來たつて金は渡せないぞと考へた。ともかくも高木はその男を畫室へとほした。その男は伊那のいふとほりで人相のよくない、體のでつぷりした、そのくせ顏だけは引きしまつた遊人めいた面つきだつた。縞のめいせんのそろひだが、羽織まで垢襟が光つてゐる。大へん慇懃な調子で、初對面の言葉を述べて、高木のことを先生といふ。スーと齒の間から息をひいて、實はですね、先生。とこの男は妙に一段と聲を低くした。港のマリ

さんの件なのですが――と、この男はマリのことをさんづけにして呼ぶ――マリさんの言ひ分だと、マリさんは先生から三百圓お立替へを願ふのだそうですが、それは本當でせうか。その金子はもう御とどけになりましたらうか、と言ふ。

この男が何者で何故そんなことを聞くのか高木にはわからなかつた。この男の言ひ方では、高木がマリに金を出すのがこの男に不服らしいやうな口調でもあつた。

僕はマリに三百圓出さうと言ひましたがね。それは本當だ。金はまだ渡さないが……。――一たい、君はその件でどういふ用事ですか。高木はありのまゝにさう言つた。

この男といふのは、この男のいふところに依ると、港の兄弟分で、港にたのまれて、この事件の一切の所理を引受けた者だといふ。それぢや向島の上總やさんかね、と高木が言ふと、さうです、實は先夜もマリさんの御供をして御宅の門まで參りましたと答へて、男は懐中をさぐると天鵞絨の大きな財布のなかから名刺を出しながら、序に港ホテルの主人からの委任狀といふのをも出した――高木は別に見むきもしなかつたが。

上總やが言ふには、――何しろ、この事件に就ちや、私は出來るだけ穩便にすませたいと思つてゐるのですがね。港は一切私に任して置きながら、今になつてひどく一克なことを言ひ出したので、間に挾つて私や全く困り抜いてゐるのです。港はいふのです。七百圓といふ證文のところをきつぱり五百とでもいふ事か、三百圓とは半分にも足りない。あまり見縊つた言ひ分だ。それや時と場合とによつちや七百圓がよしんば千圓でも、きれいに證文を卷いてかへしてやつてもいい。だがわけが違ふ。と港がいふのです。全く港はあんな家業こそはしてゐるものの血もあり涙もある男なのです。で港のいふのを更によく聞いてみると港の言ひ分にも一理はあるんですね。マリさんが今まで居所も知らせねえでゐたのが第一氣に入らない。もとはおとなしい女だつたから、そのつもりで拔つて置いたところが、いつの間にか足拔

きをして、それや證文は入れては行つたのだが、そのままでゐどころも知らせないぢや足拔きも同然だ。ただ體のいいことをしただけが小面憎いぐらゐなものだ。あんな女ぢやなかつたのだから、うちを出てからてつきり後楯が出來て尻押しをしてゐるに違ひあるまいつて、港はさうかんぐつてゐる始末で……

上總やは、袂をさぐつて今度は何を出すのかと思つたら、ただエーヤシップの箱だつた。それから一本拔き出して火をつけながら雄辯につづけた。

港の方では、ぐづ／＼言ふならもう金などはどうでもいいといつてゐるのです。全く、港では金は欲しがつてはゐないので。いや欲しくないことはありますまいが、それよりは地震のあげから商買が馬鹿にいそがしいので女の方がほしいらしいのです。だが、かうなつちやもう意地づくだ、慾も得もない訴へてやると息卷いてゐるのでさ――マリさんはあれで先生。

上總やはちよつと言葉をくぎつてから、意味ありげに聲の調子を下げて、

竊盗の罪があるらしいのですね。そいつを港がにぎつてゐるのですよ。

へえ！　そんな惡い女かね。

高木はいかにも驚いた者のやうに言つた。高木はやつと上總やの腹が見えて來たので苦笑を禁じ得ないところを、我慢をしながらこのうちへ上總やが何を言ひ出すかそいつを聞きたさに、とぼけてゐたのだ。

――港の話を聞いて私や、おどろきましたね。冗談だらうといふと、港は詳しく話してきかせましたがね。港は三百兩やそこいらの事なら金はいらないと腹を据ゑた樣子だから、私や考へがあるからちよつと待つてくれと言ひ置いて、かうしてお宅へ伺つたやうなわけです……

上總やは高木の顏をつくづくと見入つた。それが下手に芝居じみてゐたのが高木にはをかしかつた。上總やは言ひつづけた。

私や先夜、お宅からの歸りがけにマリさんから先生の御身分を伺ひましてね。これやうつかりすると先生のお名前が出るかも知れん。そんなことなら一言その時話があればと、先生があとでおつしやりはしないかと思つたものですから、かうしてお伺ひしたのですがな。

名前だつて？僕の名前だつて？高木は我慢が出來なくなつて吐き出すやうに言つた。

ええ、これやどうしてもお名前が出ますね、このままぢや。

上總やは高木がうろたへたものと誤解してゐる。高木は言つた——

ふん。僕の名が出るかな。面白いな、僕はそんなところへ名前の出るのは好きだぜ。

高木が言ひ放つた奇嬌な言葉は、上總やにはどう解いていいかわからなかつた。上總やはしばらくぼんやりしてゐたやうだつたが、重ねてさぐりを入れ出した——

それにしてもマリさんが可哀さうでさね。

何が！高木は言つた。何が、可哀さうなものか。構ふものか。泥棒などする女だといふぢやないか。上總やさん、それや訴へて貰ひたいものだね。さうすれや僕も三百圓助かるわけだ。僕は泣きつかれて可哀さうだから、それもあの女が商賈にも似ずしほらしい女だと聞いたればこそ、可哀さうだからたとひ足りなくとも三百圓出さうと言つたまでです。そんな圖太い女だと知つたら、君、僕は只の三百文も出すのはいやだね。あとで因縁が出來ちやたまらないものね。然うか。そんな惡い奴だつたかね——まだ金を渡さなくつていいことをした。

上總やは默つてしまつた。

上總やさん。高木は笑ひ聲で言つた。失敬だが君は、本職の周旋屋さんですか。

私ですかい。上總やはむつとしたやうに言つた。疑ふならお目にかけまさ。私やこれでも鑑札持ちです。立派なものです。もう十二年もこの商買はしてゐますが、一度だつて後暗ことをしたことのない證據です。御覽になつていただきませう。

馬鹿正直に、上總やは例の財布のなかから鑑札を搜し出した。高木は笑つて言つた。

いや、上總やさん。さうむきになつてはいかんがね。君のやうな商買だといふからには少しは人を見るのに目が利いてもよささうなものだと言ひたかつただけのものですよ。君は、もしやかんちがひして僕をマリの色男だとでも思つてゐるのぢやないか。飛んでもないね。大笑ひだ。早合點をしちやいけないよ。――僕は三浦といふ者、いづれは港でも聞いたらうが、マリを港からつれ出したその三浦といふ合の子の不良少年の知り合ひなのだ。たゞそれだけだ。僕は三浦の顏つきが氣に入つて、以前から時々その顏を使つて畫を描いたものだから、それで三浦を知つてゐるのだ。そいつがつまらない奴で、コソ〳〵泥棒をしやがつて今はつかまつてゐるのだが……

なるほど、そんなことはちよつと港の兄貴も話しちやゐましたつけな。聞いたことがありますよ。で、何ですかね。

え、今はやつぱり入つてゐますかね。

上總やは三浦の話に案外興味を覺えた口調であつた。それとも今のさつきあんなにてれてゐた折からいいとつつきが出來たと思つたのかも知れない。三浦の事を話すやうに高木を促した。

……根はさう惡い奴でもないくせに、何しろ馬鹿だから、調子の乘つちや駄法螺を吹く。だものだから、人におだて

られる。たうとう同じやうな合の子仲間で、それこそもつと腹の据つた奴の手さきになつたのだ。女にのろい。そのくせ飽きつぽい。今も言ふとほり男がいいものだから女の方で手を出すらしい。で、女道樂は子供の時から覺えたのだ。そんな奴のいふ事だからあてにはならないが、街など一緒に歩いてゐると立派なお屋敷の門の前で、ここの奥方は古馴染だなんて言ふが、逗子に家があつて鎌倉あたりを根城にしてゐたのだから、それに十六七の時には見かけはきつと上品な坊ちやんらしい上に、毛色が變つてゐるところを面白がつてからかつた令夫人などでもあるのかも知れない。何しろ、氣の弱いうぶなところもないことはない。どこかが一本拔けてゐる。そこが反つて可愛いかも知れない。マリもつひそいつにぼうとしたらしい。買つたり買はれたりしてゐるだけぢや氣がすまなくなつたものと見えて、男もすぐのぼせるたちなものだから、マリと世帶みたやうなものをほんの二月三月だつたが、持つた――知つてるだらうが。それが一昨年の冬ごろだが、それより前に三浦は仲間と一緒に初めはパークぐらゐだつたのが段々嵩じて空巣覗ひか何かしたのがつかまつたのだ。氣の小さい奴がびつくりして未決でひどい熱を出すといふ騒ぎに、マリは病監へお百度を踏んださうだが、マリのその時の心づかひがあまりに行き屆いていぢらしかつたといふので警察の連中がひどく感心して、そこを出る時三浦に、あの女を女房に持つてやれ、お互に身の爲めだからと勸めたものださうだ。――これや、つひこの間になつてから僕も警察の人から聞いたのだがね。

ちや、先生。三浦つてえのは今度で二犯なのですねえ。

それがさ。年も若いし、大した事ではなかつたし、前のは執行猶豫になつてゐたのだ。そいつを三浦が、猶豫中にまたやつたのだ。女の爲めだ。マリに飽きたのがいけなかつた。今度の女といふのは、やはり濟にゐて前からの顔馴染で、三浦はずつと惚れてゐたのださうだが、向ふは旦那持ちで、金のある支那人の妾をしてゐた。旦那をしくぢるまい

といふので三浦を相手にしなかつたらしい。をかしい事には、三浦は前の時に、その女のところへ忍び込んだことがあつたさうだ——いや、泥棒にさ。

へえ！ 寢顏でも見たかつたてえんですかねえ。

成程、さうかも知れない。ところでその女の旦那といふ支那人が、例の地震でつぶされて燒け死んだ。三浦は今度こそといふので、やんやとくどいたものだ。たうとうその頃からマリを邪魔にし出した。妾をしてゐたといふその女も、どうやら一とほりの者ぢやないと見えて、何でもその旦那の一萬圓ばかりの保險金を横取しようといふので三浦を使つたらしい。それが駄目だつた。三浦に金はなし、今度の女は贅澤に慣れてゐる。たうとう女はもう一ぺん金のある旦那を見つけやうといふ考になつた。三浦はその女を思ひ込んでゐる最中なものだから、女が金を好きだと見ると、地震のあとのどさくさをいい事に、また何か働いたらしいのだ。捉まる時にね、ひよつくりここへとまり込んでゐた。ちやうどいま君のゐるところへ坐つてゐたが、僕は前のことをもう一度調べに來たのかと思つた。當人は覺えがあるからだらう名刺を見ると蒼くなつた。それが横濱の山手署の人だつたが、前から知つてゐると見えて、三浦に言つてゐた——今でもマリと一緒にゐるのか。あの女だけは見捨ちや惡からうつて。その刑事が後でまた僕に逢ひに來た時に聞いたのさ、マリを女房にするやうにつて署長がすすめたといふ事はね。上總やさん、君は僕の名前の出るのを心配してくれるやうだが、何、僕は三浦の時にだつて引合ひに出てゐるのだ。慣れてゐるよ。……で、この間の晩に、マリに聞くと、君の方の借金といふのは大部分は、前の時三浦の爲めの金だといふぢやないか。つまり、三浦がここに居さへすれや、出來ないまでも三浦が何とかしないでは置けない金だ。だが今の話で、三浦はゐない。仕方がないから一時、僕がどうにかして置かうといふまでだ。——それもね、上總やさん、マリがしほらしい女だと聞いてゐたからさ。ところへ持つ

て來て、そのマリがだね、いま君から聞くやうなそんな太い女なら、僕はいやだ。金をなんぞ眞平だ。外にかかわりがあるわけぢやなし、金さへ出さなけや、名前の出つこもなし、尤も名前だけならいつどこへ出るのも構はない。

いや！成程ね。やつぱりさうでしたか。いやどうもね、腑に落ちないところがあつたのだが、只今の先生のお話でやつと嚥み込めましたよ。成程々々……

何を嚥み込んだのだか上總やはしきりにひとりうなづいてゐる。高木をマリの色男だと見込んでゆすりに來た上總やは、案に相違して戸迷ひしたのをごまかしてゐるのだ。

上總やさん。いかに相手がマリだつて港の方でも根も葉もないことはまさか言ふまい。人を傷けることだ。事實マリに疑はしいところがあるのなら、突き出した方がいい。僕も贊成だ。

高木は相手の面食つてゐるところへ突き入るやうにさう言つた。

先生。いや、それがですよ。——上總やはしどろもどろになつたのを見せまいとしながら言つた。——先生のお話ですつかり合點がいきましたがね。やつぱりどうも港のかん違らしいなあ。あいつはどうも氣が早くつていけねえ。實はね、先生。私やどうもあの女が、つまりマリさんがね、そんな惡い女だたあ受取れないでゐたんだ。先夜お宅からのかへりなどにもいろいろ話す様子では、全くおぼつこいところがあるんだ……

上總やは、半ばひとり言めかして、急にうまくマリの評價を改めたのである。上總やは三浦のことなどはもとより聞きたくもない。承知してゐる。たゞ高木の話に嘘がないかどうかを聞きながら、どう扱つたらいゝものか高木といふ人物を驗してみてゐたのである。高木は見かけよりは手のやける奴だと上總やは思つた。上總屋には、高木といふ男はちよつと義俠的な人物のやうにも見えたし、でもやつぱりいくらかマリに氣があるのぢやあるまいかとも思へた。マリは

全く上總やの目には、毛色の變つただけに珍らしくもありちよつとした女に違ひなかつた。上總やは、そこで高木は義侠的で同時にマリに氣があるものと見做した。上總やはまた高木があまのじやくなことにも氣がついた。そこで出なほした――

マリさんもね、先生、すこし贅澤でさね。何も新らしく泥水へ這入るわけじやなし、今までの稼業だ。ほんのしばらく目をつぶつてゐさへすれや、六百や七百の金なら、今の景氣ぢや――先生、まつたくあの方面は、地震で氣が荒くなつたせいか、珍らしい景氣なんですからね、今の借金なざあ、心がけ一つで半年の仕事でさ。たとひまあ、あそこを出て見たにしたところで、外にや女の細腕一つで六百の七百のといふ金が、いつ出來るものですか。それに先生、港に聞けばあの人にや、執心らしい客があるらしいのです。その今の、何とかいつたな――それそれ、三浦と一緒にあそこを出てしまつてから、當座、毎日のやうにあのひとの居どころを搜しに來た男がゐたさうですがね。それが地震からのちまた度々どこにゐるか搜せといつて來るらしいのですよ。私あ、考へるのにそんなこともあるので港はあんなにマリさんをいぢめるに違ひない。實はさつきもかうなんです。私の出がけにね。私やちつと東京まで行つてくるといふと、港はそれぢや序に、マリが子供をあづけてゐるといふさきを見とどけて來てくれといふので、マリさんにそこの處番地をたづねたのです。ところがマリさんが泣き出してね、あなた方あジヨオジの里まで行つて私の身の上を明してやらうといふのでせう、何もそんなことまでしてくれなくともよささうなものだと言つて、どうしても場所を教へないのです。港はまだどうしても聞かうてんで、打つたたくといふ騷ぎに、女はヒステリーをおこしてヒイ〳〵わめき立てるものだから外の女まで慄へてゐるのでさ。なんぼ何でも私も見かねたから止めると、港は、こいつは今にもう一ぺん逃げ出してくれやうと思つてゐるに違ひない。逃げた時にがきの居どころさへ知つてゐれば面倒でないと思つて聞くんだ。とい

ふから、そんなことならそんなに折檻しなくともこの間のやうにどこへどう逃げたつて直ぐめつけるぢやないかと言つてね――全くですよ。逃げるの遁れるのと言つたつて、一たい港にや、身内が濱と東京と、どこにだつて大勢ゐるのですからね。私にしたつてかうは見えたつて三百やそこいらの手下がありまさあね。身内から身内へ人相書でもまはしてごらんなさい。どこに何をして匿れてゐようとすぐ足がつきますよ。それにあゝいふ變つた玉だからなほの事だ。この間だつてもさうだ。私の身内のものがあそこのバアでひよつくり見つけて來て、これこれの女でないかといふので、私が押へて來たやうなわけなんだ――それや逃げやうの逃がさうのと言つたつても根つから駄目なことなのだ。唯、めつけるのにちよたあ日數もかかりますがな。

上總やは自分の言葉が、相手にどんな効果を與へたかをみようとちらと高木の顏を覗き上げて默つた。

高木はまるで話を聞いてゐないやうな顏つきで煙草を吹かしてゐた。

高木は上總やの話を、どこからどこまでが本當で、どこまでが出鱈目だかわからないが、しかし、マリがヂョオジの居どころを知らせないで、あなた方はあれの里まで行つて私の身の上を明さうといふのだらうと言つたといふのは本當に違ひないと思つた。全く上總やは嘘でも本當でも自分で氣がつかずに口から出放題に述べてゐたのである。――それが商賣だから。凄味に並べてみたマリを捉へたことなどは全くの法螺で、事實はただ港の主人が、現に再び未決にゐる三浦を見舞のやうな顏をして訪問しながら、當の三浦の口から確めたのであつた。三浦はマリの居どころを港に敎へたくはなかつたけれども、前の時にうまく包んである罪を港につかまれてゐるので、それが怖ろしさにマリのゐたレストラン、ヴヰナスを敎へてしまつたのだ。

上總やは再び語り出した――

私がさう言つてなだめても港は意地になつてやめないものだから、マリさんはたうとう鼻血を出してしまつて、それでも港はまだやめないのです。外の女への見せしめがありますからね。私やたうとうたまりかねて、今度はマリさんをすかしてね、決しておまへさんの事は打明けないから、どうぞ場所をおそへてくれ、でないと港はあのとほりだから、お前さんをどんな目に逢はせないとも限らないから、と言つて賴んで、やつと明させましたがね。大崎のしか〴〵のところだと言ふから、お宅への道ついででもあり、今のさつきちよいと寄つてみたのですがね、居ましたよ。いいあんばいに里では馬鹿に可愛がつてゐまさ。十五圓の里扶持だといふが、しやれた洋服かなんか着せてね、全く可愛いいや、—すつかりあつちの種ですぜ。目の青い。まる〳〵太つてね。かみさんといふのもいい人らしいや。金錢づくで置くのぢやないつて、自分の子のやうにしてまさ。あまり可愛いので頭をなでてやりましたがね、子供といふものあ、いいもんだ。おふくろがどんな目に合はされてゐるのも知らないでさ、すつかり私になついてしまひましてね、思はず小一時間も遊んで來ちやひましたよ、あまりいとしのいで。

上總やはどうやら心からその子が氣に入つたらしい樣子だつた。それが高木には不思議に思へた——

上總やさん、君は見かけによらず——と言つちや失敬だが、ひどく子供がすきらしいね。

それがですよ、私やつひこの間たつたひとりの奴を失くしたので。

上總やは似げなくしんみりとなつた。それから今までの雄辯とはひきかへて、ぽつり〳〵と述べたところによると、やはり六つとかになるのを、あの地震の當日、母親は——上總やの妻が、淺草へ遊びにつれて行つたところだつた。活動の小屋にゐたのがやつとの思ひで出て、あづま橋の人ごみを渡つて歸つて見ると、どうしたのだか死んだ兒を背負つてゐた。ものに打たれたのだか、人ごみに押されたのだかわからない……上總やは手短かに話して暗然とした。自分の

身にふりかかる不幸を語る時には上總やも亦一個の眞實な人間だつた。假面のとれた上總やは高木の心に接近した。

それが思ひがけなく用談をはかどらせた。一たんは金を出さないと言はせてしまつた高木をして、上總やは、三百圓なら明日にでも當人が來さへすれや、或はまた確な證據さへあれば使ひにでも渡さない事はないと、約束させることが出來た。上總やはまた上總やで、三百圓ではどうもおぼつかないかも知れないが、何とか港にこの事情をよく相談して、あまり因劫を言はせないやうに計らはう。大ていは自分の一存どほりになりさうなのだから、と言つた。互に相手をさぐらうさぐらうとしてゐたこの二人は、三十分以上も無駄をして最後の五分で　ふとしたはづみに話がわかつた。

上總やは、四月末のこの陽氣にどういふ領見だか、毛皮の襟のある厚いインバネスを羽織つてゐた。手には寫眞機のかばんをさげてゐる。

――お、さうだ。マリさんから先生へふみをことづかつてゐたつけ。ぼや〱してすつかり忘れてゐた。

上總やは笑ひながらさう言つて、外套のポケツトから手紙をとり出した。

なるべく早く型をつけなけや、先生もよろしくお願ひいたしますよ。女の泣いたり喚いたりするのを見るなあ、私だつて全くあんまり好きではないんです。や、ごめん下さいまし。

上總やは下駄をはきながらさう言つて、揉み手をして出て行つた。

マリからの手紙といふのは、一昨晩上げた手紙はもう着いたか。どうぞあの手紙のとほりたのむとだけで何でもなかつたが、それの封筒は開けてみた形跡があり〱とあつた。上總やは何かの手がかりにもならうかと開いて見て、下手にあけてしまつたので、高木にはわざと歸りしなにそそくさと渡したのであつた。

マリからはそのとほり二つも手紙が來たけれども肝腎のマリの使はたうとう見えない。夜の十時まで心待ちに待つて、

高木はたうとう何だか少し不安になつた。——上總やがもしやマリの手紙にいふその使だつたのではないだらうか。さう言へば、上總やは來ると早々マリさんから手紙があつた筈ですがねと言つたつけが、あの時はどうしたはづみだつたか本當が言ひたくなくつて、いゝやと答へてやつたが、それを幸に上總やが何か細工をするのぢやあるまいか。否、さうでもあるまい。上總やはたゞあのことづけの手紙を偸み見たものだからあんな事を尋ねたのだらう……

その三

杉田とし子といふ婦人が今夜先生を訪ねて來はしなかつたか、といふから來ないと答へると、ちよつと先生にお目にかゝりたい——とさう言つて來た人がある。こちらを敎へようと思つたけれども、口では敎へにくかつたから、家へは錠を下して先へその人を待たせて來た。さう言つて伊那が、高木を住居の方へむかへに來た。

夜はもう十一時に近かつた。

杉田とし子といふのは高木には全く聞いた覺えのない名だつた。が一瞬の後に、直ぐそれはマリの事ぢやないかと氣がついた。高木は、さういふ境界の女としてのマリといふ名だけは知つてゐたが、その本名は姓も名もまだ一度も聞いたことさへない程だつた。どんな男かといふと先生と同じぐらゐなまだ年とらない洋服の紳士だとのみで、口下手な伊那は要領を得なかつた。直ぐ近所に同じ姓があつて、そちらは醫者で同じやうに先生でよく間違ふのだが、はつきり高木喜久男といふのだから、やつぱりマリからの使に違ないと、高木は寢間着の上へ羽織をひつかけて出かけた。

家の表に、なるほど洋服姿の紳士が物案じげに立つてゐたが、高木たちの足音にふりかへつた。帽子から靴まで黑づくめで、手に薄手の雨外套を用意した紳士であつた。高木を見とめて一禮すると彼は、杉田とし子といふ婦人が今夜…

……、といきなり性急に尋ねた。杉田といふのは、やつぱりマリのことだつた。

高木は伊那の手から家の鍵をとつて自分で開けつゝ、ともかくもと言ふので家に招じようとしたが、彼はもう遲いからと言ひながら、胸の時計をちらと覗いて、家に這入らうとはしなかつた。その癖すぐには用談を言ひ出しもしない。見てとつて、高木は鍵を伊那に渡しながら、開いた扉を指して伊那に這入るやうに命じた。高木とふたりになつた時、この見知らない紳士はやつと口を開いた。この人の言葉のとほりだと、杉田とし子――マリは今夜の八時か九時ごろまでのうちには、高木のところまで來てゐなければならない筈だつた。上總やが港でマリが折檻されてゐると言つたのは或る程度までは本當であつたと見える。堪えかねてマリはもう一度そこから拔け出すことになつてゐた。一昨日の晩、偶然マリに逢つたこの人は、――マリはどうやら早くももう稼業に出されてゐてこの人にあつたらしいのである――目を泣き腫らして沈みきつてゐたマリを見て、事情を聞き知つて相談相手になつてやつたのださうだが、その時の打合せでは、マリは今日の夕方にそこを自動車で神奈川まで逃げ出して、そこから電車で高木のうちまで來るわけであつた。港へはすぐ高木のところへ來いと書き置きをして出る。どうしてもゝう一度つとめをする意志のマリにないことをかうしてはつきり知らせて置いて、その上で高木から港へ相談して貰はう。逃げ出しでもしなけや、たとひ金を渡しても、なかく素直にはマリの身を解放しさうもない。うつかり金を渡せば無駄に金だけとられてしまひさうな氣さへする。よほどの惡い奴にかゝつたらしい。それにしてもどうして未だこゝへ來ないだらう。拔け出しそこねてまづい事になつたのぢやなければよいが……。――さう話してこの紳士は案じ込んでゐた。

植込みのなかゝら洩れる門燈に照し出されたこの人の横顏は、身なりばかりではない、品位のあるものであつた。その憂ひに沈んだ表情と言ひ相手を怖れてゐる樣子と言ひ、上總や以來用心をしてゐる高木にも眞に受取れた。彼は高木

に、マリから手紙か使かゞあつたかどうかを尋ねて、高木が今朝の手紙や、上總やといふ男の事、しかしマリのその手紙にあつた使はまだ見えないと言ふまでは、彼は自身がその使だといふことは名告らなかつた。彼がその當の使者で三百圓といふ金をマリのために用意して來てゐることを知つた時高木は、この紳士が一體何者で、マリとはどんな關係だらうといふ好奇心を動した。上總やが自分のことをマリの情夫乃至、熱心なお客だと思ふのも當然だと思つた。いま高木にも目の前のその紳士がそんな者に見えないことはない。さうして、その紳士がまた高木をそんなふうに思つてゐる。一瞬間二人の人間は妙にちぐはぐだつた。

高木は自分がさう思はれてゐると見ると、それが厭だといふ氣持と、相手が氣を揉むのぢやないかといふ察しとから、三浦とマリとの以前の關係、三浦の今の狀態、三浦と高木自身との交際を手短かに語つて、自分がマリに立替へるのはやがて三浦に對してゞあることをあつさり說明した。相手は別にそれを聞きたがりもしなかつた。但、紳士は高木に、お志はあの女も本當に忝く思つてゐる、とそればかり繰返しながら、さて上衣の內ポケットから紙幣入れをとり出した。そのなかゝら百圓が二枚と十圓が五枚、外に十圓がもう一枚と五圓だの一圓の紙幣まで雜つてともかくもすつかりで三百圓。二百五十圓の外の五十圓は明によせ集めた金だつた。その身なりと人がらとに比べては三百圓は三百圓でも苦しさうな、けちくさい金に見える。高木はふと、この人はこの時間までかゝつてこの金をつくるのに無理をしてゐたのぢやないかと空想した。

高木はそれを委ねられるまゝに受取りながら、上總やとの會見の模樣をよく述べて、そんなわけだから、金は案外用意ほども入用ではないだらうと言つた。それで濟めば何よりだが、しかし寧ろきつぱりと出すだけは出してあとに何のひつかゝりも殘らないほうがいゝといふのが紳士の意見だつた。彼はかういふ點では高木よりもずつと經驗家らしく、

その金を港に渡す時でも、マリの入れたその書附なるものを一應當人にしらべさせて、それに相違ない事を確めた上で、その同じ書附のうら或は一隅へ受取をさせ、尚、この事件一切は解決の旨を明記せるやうに、如才もあるまいが、別紙の受取書を受取つても、當人の書附が無い以上、また當人の書附があつてもそれに先方の記入が無い以上、再びどんなことをたくらまれ無いとは限らない。惡い奴はいろ〳〵の智惠があるものだから。さうくどいほどいふ言葉つきが、どうやら辯護士などのやうな句調だつた。さうだ、ほんとうにそんな職業の男かも知れない。もしや三浦の辯護士が、マリの客になつたのではあるまいかと高木は思つた。

高木は金を持つてエトリエのなかへ這入つた。それの預り證を書いてから、初めて氣がついてペンを持つたまゝ再び外へ出て來て、その紙ぎれの宛名に書き込むために、紳士に向つて名をたづねたけれども、彼は言はなかつた。そんなものはいらないと言ひながら、名宛のないその預り證を無雜作にポケツトのなかへ押込みながら、彼は言つた——

かうしてゐるうちにもこゝへ逃げて來ないとは限りません。それを追つかけて何れは港からも人が來ませう。御迷惑でせうが、これも何かの因緣だとお思ひになつて、いゝやうに計らつてやつて下さいまし。どうかしてあなたの御盡力で、あの女に二度とあんな社會などへ入らせたくはないものです。……それには警察なり救世軍なりその外の社會事業的の團體もあるにはあるでせうけれども……。

高木は伊那を呼んで、もしもマリが夜中にでも來たなら、アトリエへでも通して勝手に寢させるやうに言ひ置いて、高木は、歸らうとしてゐるその紳士と一緒に門を出た。ふたりは同じ方角へ歩きながら、紳士は默り込んでゐた。ぽつんと思ひ出したやうに、いゝ陽氣になりましたと今更間の拔けた挨拶を一言言つたが、町角まで來ると彼は停車場の方へ消えて行つた。

この名を告げない紳士は突然來て、このとほり慌しく消えた。

四

マリが高木のアトリヱへ入つて來たのは、次の日ももう夕ぐれ時ごろであつた。心配のせゐか、光のせゐか、蒼ざめて、しかしむくんだやう顔で、

お金を持つたんが來てくれましたか。

來た、ゆうべおそく。君がまだ來ないかと言つて心配してゐたよ。

…………。マリは答もせず、突立つてゐる。

腰をかけたらどうだね。――港をいま出て來たのかね。

…………。マリは問ひには答へないで、言つた――上總やが今來ます。わたし一緒にそこまで來たのです。

表まで來てゐるの？

一緒に入るのはいやだらう、一足あとから行くと言つて、町角のところで立つてゐました。――五百圓渡すことにしました。

五百圓？――君が交渉したのか。もつと少くともよかつたんだが。

…………。

マリがまだ返事しないうちに、表のベルが鳴つた。

――あゝ來たのですわ。さう言ひながらマリは玄關まで出て行つた。直ぐ上總やだけ現れて、マリは廊下にでもゐる

らしい。

テイピカルな長つたらしさうな上總やの挨拶を打ち切るために、高木は言つた――。で、一たい、どういふ話になりましたかね。

まだお聞きになりませんか……

今、その話になりかかつてゐるところへ君が來たのだ。五百圓だつて？

それが何です。上總やは答へた。マリさんは言ひますまいが、實はあの人がゆうべ逃げ出しそこねましてね。それを私がつかまへて、港の手前はうまく言つて置きましたがな。そんなわけで港は一さうやかましい。きつぱり五百圓、その下なら手もさわるなつて權幕だもの困りましたね。ところが、幸、聞けば、マリさんは先生に拜借出來るほかに、二百圓ぐらゐなら自分の分でも何とか都合がつくやうな樣子で、マリさんがさういふことに承知をしたのですがね。ですから、先生からは結局、昨日のお話のとほりに願へればいいので、

ふむ。

高木は、上總やの口前にかゝつてマリが正直に何もかも喋つてしまつたらしい、下手をしてしまつた、が仕方がないと思つた。

ふむ。當人がさういふなら、何とか方法があるんだね。それで、君はマリが入れたその書き附けといふのは持つて來てあるでせうね。

言ひながら高木は立つて扉のところへ行つてみた。直ぐ戸口のうしろに、マリはきき耳を立てるやうにしんとして立つてゐた。

朝から袂のなかへ入れてあつた重い紙幣入れを取り出すと高木は、例のさまざまな取合せの三百圓を自分で一度數へてみて、――さあ、これがゆうべの人から預つたものと言ひながら、さうして別に眞新の二十圓紙幣を十五枚、これは數へずに何も言はずに渡した。上總やからは見えない戶のかげでである。マリはその金を手にとると、ぼんやり、別に數へるでもなく禮を言ふでもなく、ただ眺めてゐるのであつた。

ぢや、それを渡してやつたらいいだらう。

高木がさう注意すると、マリは最初そのうちから百圓紙幣を一枚拔き出した。が、何を思ひ直したのかそれをやめて今度は二十圓を五枚數へて拔き出した――

これだけは多すぎるのでせう。

さう言つてマリは、それを高木に返さうとした。ともかくもみんな持つてゐるがいい。それよりは上總やに早くやり給へ。高木が言つたので、マリはその百圓を、二つに折ると假りに帶の間深く押し込んだ。さうして座にかへる高木のあとからついて來た。

君、上總やさん。それぢや何だ――その、ちよつと女の入れてある書附といふのを見せて下さい。

上總やはさつきから取出してゐたらしく、それを三人で圍んでゐる卓の上へひろげて置きながら。ごらん下さい、間違なくマリさんの手形です。といふのは半紙二つ切りの小さな紙ぎれ、それはしかし、成程、金七百圓也の證で杉印とし子といふ署名に、朱肉で爪印がしてある。

これだらうね、間違ひはないね。

マリはそれをとり上げて見て、念を押す高木にむかつて頷いた。それからぞんざいな手つきで、さつきから手に握つ

てゐた金をそこに置いた。くしや〳〵と無雜作にちらばつて置かれた紙幣を、上總やは大きさの順に重ね上げてしまふと押し頂く眞似をしてから、數へ出した。

確に々々、

言ひつつ上總やは三度その金を繰つて見た。

それぢや、上總やさん、一つこの書附のどこかへ一筆、君の受取を貰つて置かうかね。

書きませう——言ふなり上總やは立ち上つた。あまり威勢がよかつたので、高木はへんに少し不安だつた。しかし上總やは、金は卓上に置いたままで入口の帽子かけのところまで行つたのだ。例の嚴寒用の厚外套と一緒にそこに掛けてあつた寫眞機入れの黑革袋をとりに行つたのだ。寫眞機と思つたのは手提鞄の代用だつたと見える。そのなかからとり出した萬年筆の鞘を拔くと、上總やはインキのこぼれてゐるのをマリに出させた鼻紙で拭いた。上總やはふと猥褻なことを思ひ浮べたので嚴肅な顏をした。

マリの書附の片隅の一番空いてゐたところへ、上總やは一金五百圓也と書きつづけながら言つた——

ええと……、何と書いたものですかな、——右にて皆濟と、——皆濟もをかしいかな、ね、先生、何と書きませう。

然うだね、事件解決候也はどうだね。

それです〳〵——しよつちゆう書いてゐるくせに忘れてゐやがる。

受取を高木が滿足してマリに渡したのを見て、上總やはもう一度金を繰り改めてから懷中へ收めながら、エーヤシツプへマッチでつけると喋り出した。

マリさん。それであんたもひと安心だ。よツく先生にお禮を言ひなさいよ。私からもお禮を申し上げます。餘計なこ

とだが、マリさん、今のその心掛を忘れないで、二度とあんなところへ身を落すんぢやありませんぜ、先生に死に金を使はせたと思はせまいとおもへばね。

マリは何とも言はなかつた。それぱかりか妙につんとしてゐた。その態度は、高木の目にさへ、ただ口さきだけにしろともかくもそんな言葉を言ふ上總やに對して、少し氣の毒と思へる程に、てんで上總やなどにとり合はない顔つきであつた。唯その目には涙がぽろ／＼と溢れ出してゐた。

ね、先生。無理もありませんや。うれし涙で言葉も出ませんや。先生、お世話だが、何かマリさんに一つ食べさせてやつて下さいましよ。ゆうべも今日も今だに何一つ口に入れない始末でさ。全く心配で飯ものどを通りますまいよ。

君。――と高木はマリを顧みた。――お腹が空いてゐるなら、伊那に賴んで何でも食べたがいゝだらう。

いゝえ。欲しかありません。

さう言つてマリは首をふつた。それから涙を拭ふた。

先生、――上總やがいふ。先生。私や全く今までに、おかげで今日ほどきまりの惡い思ひをしたことありません。このお金を頂いて歸るのは情ないやうでさ。――かうしてさほどの緣もゆかりもない先生が義俠的に出して下さる。それをおめ／＼私がかうして頂いて歸るのだ。先生にくらべれば港は、ともかくもマリさんとはかれこれ二年も一つ釜のおまんまを分けてたべた間柄だ。借金と言つても時と場合ぢや受け取れない義理もある。私やたゞの使ひながらも考へると面目ない氣がしてなりませんや。尤もね、先生。あれぐらゐででもなけや金は出來ますまいよ。何、港はね、今でこそ小金もこしらへて一とほりにや親分顏も出來てはゐますがね、三つ子の魂でさ、あれやもとは辻車を曳いた者でさ、根が悧巧者だから外人を相手にしてゐるうちには、ガイドのやうなことを覺えてね――まだ免狀なんてものゝいら

なかつた頃のことでさ——毛唐の土産物の上まへをはねたり、淫賣宿を目つけてやつたり、さうかと思ふとその淫賣宿へはあとから自分で出かけて行つちや座り込む。何でも二度ぐらゐはへえて來てゐる筈です。不法なことばかりしちや小金をためた奴だから、今だにやつぱり汚いものでさ。——兄貴分と立てゝゐる人間の惡口を言ふやうだが全く。金力だけのことだ、誰ひとり心からなつてゐる者あゝりやしない。一たい、あれは私の前の兄貴の朋輩で——これや港なんぞとは根つから違ふ、きれいな人間だつた。それが亡くなつたにつけちや、私やかゝりあひで港を兄貴と呼んではゐますがな。私あかういふしがない稼業こそはしてゐるが、これでもだ性根までは腐つちやゐないつもりだ。……こんな身の上になつてそんなことを言へや身の恥を曝して歩くも同然だが、先生も御存知でせう、××××つて——ね、木はよくなかつたが、一ころは名を知られた繪師だ。あやれ、全くは私の伯父に當るのです。息子がやつぱりやつてゐますがね、先生と同じだ。西洋畫だ。親父ほどにやいゝないと見えるが、それでもやつぱりちやんとした男でさ。私の血すじぢやちやんとした者ばかりだ。ちやんとしないのはお恥しい話だが私ぐらゐなものでせうよ。十三の時から家を飛び出してしまつて、大坂にもゐた、廣島にもゐた、博多にもゐた。だが有難い事にや、まだ戸籍にやしみはありませんや。——身を持ち崩して、私あ廓で育つて來た者で、その揚句がこの稼業です。廓ぢや隨分さまざきな義理も人情も見た。だから先生などの氣ごころにしたつて私にや見とほせると思ふ。失禮ながらさすがに世間で名を謳はれるほどの方は違つたものだ。血もあり涙もあるといふのは先生のやうな方のことだ——全くさ。ごまをするやうで恐れ入りますがね。

高木はへんにをかしくなつた。をかしくなりながらも上總やの言葉がさう不愉快でない自分を見出した時、高木はどうやら始めて不愉快になつて來た。自分で廓に育つたといふが、いかにもさう聞けば上總やのその口吻は、爭はれないもので、そつくりそのまゝ牛太郎だつた。きのふは港が血もあり涙もある男だつた。けふは高木が血もあり涙もある男

で、その代り港は朦朧車夫あがりの無頼漢になつてしまつた。上總やはまだ何だか喋りつゞけてゐる。なか〳〵歸りさうにもない。

伊那！　伊那！

高木は突然、大聲で吐鳴つた。

居ないのか、聞えないのか、返事がない。

マリは立つて呼びに行かうとする。

いいよ。――用ぢやない。

高木は自分で立つた。上總やのお喋りを搔き消すために蓄音機をかけたのだ。だが上總やはそんなことには氣のつかないふりをして、ちらと一隅に鳴り立ててゐる箱の方をふりかへつて、

やあ、舶來ものですな。

さう言つて置いて、神妙に聞くふりをした。

時に――と上總やは少し小聲でマリに話しかけた――あんたは、あのこの間のヴヰナスといふうちへ荷物を置いてあるでせう。何があるか知らないがあれをとつて來たらどうですね。何れや手まわりのいるものだ。尤もあのうちでは私がうつかり港の言つたことを眞にうけて、あんたに申譯のない濡衣をきせてしまつたから、あんたが自分では行きにくからう。なに、私が寄つて上げる。序にあんたのこともよく言つて取り消して來よう。どうだね、表で待つてゐれや、私がなかへ入る。――私なら顏馴染だ。荷物も渡すだらう。一緒に行きますかね。どうですね。

いつまで言つてもマリは返事をしなかつた。上總やがくどく言つた時マリが答へた。

よござんすよ。荷物なんざ入らないのですから。

荷物が置いてあるつて？——高木が蓄音器の蓋をしながら遠くから口を挾んだ。——何だか知らないが、それや取つて來た方がいいぜ。惜しいぢやないか。

いいえ。いらないのです。きたない寢間着やら髮の道具だけです。

それだつて捨てて來れや惜しいぢやないか

いりません。私、欲しけれや自分一人でだつて取りに行けます。

マリは高木に對してまでとげ／＼しい口調であつた。いつもなら、どちらかと言へば氣取つて上品ぶつてゆつくりしかしよく話す女だのに、今日は一たいが無口で、口を利けばこれだ。ヒステリイを起してゐるな、と高木は見た。

ハ、ハ、ハハハ。上總やはマリの言葉に意味もなく笑つて置いてから高木に呼びかけた。ねえ、先生。私が一つお願があるんだが、はてな、これや私から先生のやうな方にぢやあまり失禮にあたるかな………

上總やはちらと高木を見た。マリは突然注意深く睨み入るやうに上總やを見つめた。

上總やさん。何だね、一たい

外でもありませんがね、先生、お近づきのしるしにもう時刻でもあり、そこいらで一杯差上げたいものですがね。こんな野郎ですが、私からですよ、これほど淸いお金をいただかせて下さるのだ。お禮ごころでさ。

上總やさん。淸いお金どころかそいつあ惡錢だ、かたりの金だぜ。

へ、へへ。御冗談。ともかくも申し上げたことだ。御つき合ひ下さらねえでは、私や氣が惡くつていけませんや。

こいつ一杯飮ませろと言ふのだな——高木は腹のなかでさう氣がついた。そこで手もとにあつた五十錢さつを四五枚

ほど紙にくるんで、卓の上にのせた。

上總やさん、少しだ。勝手に飮んでくれ給へ。

へ？　旦那、いや先生。それや情ない。私やそんなつもりで申し上げたのぢや、決して無い。ぢや、先生からさせて下さい。これや私が忝く頂く、その代りにや私が一杯差上げるといふのを先生どうぞ一つおつき合ひ下さい。實はね、先生、失禮な話だが何だ、私やすつかり先生の氣前に惚れてゐるんだ――きのふ伺つた時からね。是非ともこんな野郎の酒だが一つ飮んでやつて下さいまし。

上總やの言葉はひどく熱心だつた。一たい上總やといふ人間がどんな男なのかマリに親切なところなど高木には妙にわからない。うるさく言ふのを斷るより一つ一緒に飮んで見てやらうといふ氣になつた。これが高木の例の氣まぐれと物好きとである。

おい君。高木はマリに言ひかけた――君もお腹が空いてゐるだらう。いやでなけ一緒についておいで。

私。――さう言つてマリはうつ向いてゐたが、え！　とだけで、どうするのだか判らなかつた。しかし上總やと高木が外へ出る時に、マリもやつぱりその後から出た。マリは晩春の夜のなかをしよんぼりと、二人の男の後から歩いて行つた。食べたいなどとはちつとも思はなかつた。けれどももし自分がいつて行かなかつたら、上總やが何を高木にしやべりだすやら只それがひどく心がかりだつた。それと親切な高木の言葉にあまり逆ひたくもなかつた。

高木のアトリヱに近い省線の停車場附近の、ちやちな藝者屋町のなかの或るしやもやへ彼等三人がとほつた時には、上總やと高木との見かけの對照、それによそ目にも萎れかへつてゐる若い合の子の女。それが店の人たちには事實以上に仔細ありげに見えた。

その五

上總やは鋪台をへだてゝ自分の前にゐるマリを一目見た。それから高木を見た。忌々しいものに思つた。再びマリを見た。せめてもう一晩、この女をどこかへ引つぱり出さないでは措かないと上總やは考へつゞけた。ヴヰナスへ荷物をとりに行つてやらうと言つて誘ひ出した言葉はまんまと失敗した。上總やはもうひとりで高木の家を歸らなけやならないと思つた時、マリをここに殘して去つてしまふことがいかにも心のこりであつた。高木をひつぱり出して醉ひつぶさせて置いて、自分だけこつそり高木の書齋へ忍び込まうと考へついて、高木を誘うたのに、そのマリまでがついて來てしまつた。――マリが今夜どこで泊るのだかマリ自身も知らず、高木はもとより知らないものを、上總やはひとりでマリが高木の書齋に當分ゐることと見當をつけてゐたのである。それはマリに氣のあるものと錯覺してしまつた上ひとりぎめだつた。上總やは、せめてもう一晩だけでいい。マリを高木に渡してしまひ度くないと思ひつめた。上總やはマリに對して思ひがけのないほどのパッションを持つてゐる自分に氣がついた。きのふ一晩のマリが上總やにはどうも忘れてしまへなかつた。あんな樂しみの多い女を――と上總やは舌なめずりをした――それを惜しげもなく捨てたといふ三浦が、ふと不思議にさへ思へたほどだつた。

それにしても罠に掛つたマリをうまく利用した點にかけては、上總やはホク〱ものだつた。高木に會つてもう三百圓よりは出ないものと見きはめをつけ港にもあきらめさせて置いたところを、マリが逃げ出すたくらみをしてゐるらしいといふのを仲間の女の口からで察したのは上總やの智慧だつた。上總やはマリをわざと逃がして置いてつかまへたのだ。港へつれ歸つたならば、半殺しの目に逢ふだらうとおどかした上で、七百圓をきつかり五百圓までには計らはうと

親切げに言つた。もともと參百圓にあきらめてゐるのを五百圓までに糶り上げたうへに、相談に事よせてつれ込んだところで女を一晩儲けたわけであつた。それをもう一夜。ふとしたはずみが上總やの今夜のパッションになつたのである。

上總やは例の辯舌で、ジョオヂの可愛いいことを描寫した。三浦の無情を、港の刻薄を罵つた。どうかしてマリの心に取り入らうと企てながら、片一方では杯をしきりに勸めながら高木を讃め上げた。上總やはどうかして高木を醉はせようと思つてゐた。高木が醉つて寢てしまひでもすれば、それは何とでも方法がある。たとへばここの部屋でだつても方法はあるだらう、時々にはそんなことにも使はれるらしい小座敷を見まはして、酒が進んで來るに從つて上總やの慾情は燃え立つた。

けれども今夜は、上總やは全然失敗だつた。杯を二三杯ですぐ、高木はあかくなつたくせに、それは妙な酒だと見えて、高木は醉ひつぶれるどころかただ眞赤になつただけで、しかも上總やがすすめるだけはいつでもガブ〳〵と飲んでのける。高木が上總やをわからない人物と思ふ以上に、上總やには高木といふ男がます〳〵見なれないたちの男と感ぜられた。

――全く、先生。私や先生を甘えものに思つてゐた。見そこなつたのだ。この靑二才めがと高をくつて置いたのが、先生、昨日は全く私の敗けでしたよ。

さう言つた時には、上總やはしんからさう思つたのだ。さうして今夜だつてもこんな酒の飲口ぢや、やつぱり敗けだと思つた。マリはまたマリで、上總やがどんな同情を表示してみても、木で鼻を括つたやうな態度だつた。上總やの問ひかける事に對してさへも、必要なら高木に答へるやうな始末だつた。高木が便所へ行くとマリもついて行つた。マリ

は上總やの樣子をけどつてそれほど用心してゐたのだ。

飾台の上のや下に並び立つ容德利を目で數へながら上總やは、懷にふくれかへつてゐる財布をちよつと觸つてみてから、先生、恐々しい酒を飲んだと思つた。

君も飲んだのかい。

高木がマリに話しかけた。

いいえ。わたしいただきませんわ。なぜです。

でも、顏が赤いぢやないか。

頰がほてつてゐるのでせう、ただ。それともお化粧のせいかしら、出がけに頰紅をして來たのですよ——あんまり蒼かつたものですからね。

先生！マリが高木に話してゐるのを見て上總やは、ほんとうに腹立しくなつた。上總やはやけになつて手を拍いた這入つて來た女中に向つても、勘定とだけぶつ切ら捧に言つた。再び女中が來た時に、高木は勘定書を取つて自分で支拂つた。

それやいけねえ。先生、約束が違ふ。

とは言つたものの、上總やは決して自分の金入れを出さうとはしなかつた。

立ち上つた高木は一足よろめいた。

あら。

と言つてマリは高木を抱き支へた。高木は立つて見るとふら〳〵としていくらか醉つてゐたのだ。

何、大丈夫。

高木はしかし、いつものとほりの口調だつた。尻目にかけながら上總やは、喧嘩を吹くかけたい氣持をぢつと堪へて階段を下りた。

道に出た時に上總やは默りこくつてしまつて物を言はなかつた。上總やが言はなけや、この三人はつまり沈默だつた。停車場の方へ出るべき上總やは右に、さうして高木の家へは左に折れるべき町角へ來た時に、始めてマリが言つた。

先生。わたし今晩、行かうと思つたところがあつたのですけれど、あまり晩くなつたやうですから一晩だけお宅でお世話になりたうございますわ。

あゝ、いいよ。——高木は無心で答へた。しかし上總やは無心では聞かなかつた。

マリは事實ジョオヂの里へ行つてとまらうかと考へてゐたのだ。しかし今から行つても、きつと十一時を過ぎるだらう。それに上總やがあとをつけて來て何をするかは知れてゐる。今日だつても上總やは夕方まではどうしてもマリを離さうとはしなかつたのだ。高木のうちと言へばまさか上總やもそこまではついては來られまい。その外の場所ならどこへだつて來るだらう。マリは上總やをまいたのだ。

それぢや、私はこれから港まで行つて來よう。

上總やは恐ろしい目つきでマリの目のなかに窺ひ入りながら言ひつづけた。せいぜいまあ先生のお世話になるがいいね。ところで、今の言葉の樣子ぢやどこか落ちつくところがあるさうだが、落ちついたら一つ港へも所を敎へて置くがいいね。あんな男だ——惡い奴だけに、あまり急に知らん顏をすると、何かにつけてよくないぜ。

をはりの方はてもなく自分のことを指したおどかし文句だつた。マリは何も言はないで高木の歩いて行く方へすた

すたとついて行つた。上總やは、それでもやつぱり殘り惜しかつたと見える。マリと高木との後姿をしばらく見送つてゐたが、たうとう見えかくれにあとを追うた。

靜かな、木の多い郊外の横町だつた。曇り空ではあつたが、うす雲は月で白かつた。突然、高木は途徹もない大きな見かけによらない朗らかな聲を上げて、何だか知らないが外國の唄を歌ひ出した。いづれは蓄音器か何かで覺えたのである。ふとマリは横濱での生活や、三浦との事などを思ひ出した。――三浦はよくこんな風に唄つたものだ。高木は立小便をし出した。それから心持よろ〱と歩いてゐる。ただそれだけの事である。マリはその少しうしろから遠慮がちに、うなだれたままでついて行く。今に男と女とが何か、手をつなぐとかもたれかかるとかそんなことでもあるだらうかと思設けてゐた上總には、飽つけないやうでもあり、吻とするやうでもあつた。二丁ばかり追うたけれども上總やはつまらなくなつて停車場の方へ引返してしまつた。ふと氣がついて上總やは懷の財布へ手をやつて見た。大丈夫落しも何もしてゐなかつた。安心した上總やはまた考へつづけた。――本當に、高木の奴のところでは今夜一晩だけか知ら。――それから後はどこへ行くつもりだ。――いや、あんな事を言つたつてわかるものぢやない。――どこへでも行くがいいや。マリの居どころが知りたけれやジョヂの里へ行けやすぐ知れる筈ぢやないか。本當に高木のところにゐるのぢやなくよそへ行くのだとしたら、………。上總やは思ひ耽つた。

高木とマリとが來た時に、アトリヱでは伊那はもう眠つたらしかつた。玄關わきの窓には灯が消えてゐた。足音がした筈だのに灯がともらなかつた。高木はたたき起さうとしたが、畫室の窓に一ヶ所、壞れたところがあつて、そこから工夫すればわけなく飛び込めさうなことを思ひ出した。うらへ廻つてそこから室內へ跳り込んだ。高木は歩いてゐるうちにいつの間にか加速度的に醉が發してゐたので、そんな飛躍的な運動がして見たくなつてゐたのだ。伊那を起さかつ

たのはこの外に何の意味もない。だから内へ這入ると、高木は手荒にがた〳〵と表口をあけた。それからアトリヱの一隅口にあつた寢椅子を指して高木はマリにそこへでも寢ろと言つた。それから、毛布を持つて來て椅子の上へ投げた。彼は廊下へ出ると水道の栓へ口をあてがぶ〳〵飮んだ。さつき自分が跳り込んだ窓のことを急に思ひ出して、手ごろの蕾枠をたたき壞すと、そこへしんばり棒をしながら、あすから伊那に言ひつけて毎日からやらせなけや。高木は自分で自分に言ひきかすやうに呟いた。

さあ、寢るんだぞ。

マリに言ひかけた時に高木は全く醉漢の言葉だつた。

おやすみあそばせ。

着物を脫がうとしつつ、ふりかへつてさう言つたマリを見ながら、高木は扉の外へ出た。戸外へ出かかつてやつと氣がついたので、再び扉のところへ來て、高木は扉の外から呼んだ——

おい、君。杉田マリ子さん。

マリは返事をしなかつた。

おい、君。おれは住居の方へ、マダム高木の方へ行つて寢るんだから、おれが出たあと、表を、君一つしめて置いてくれ給へよ。

高木は言ひながら、扉を開けて何氣なく覗き込んだ——ペテイコート一つになつたマリが長椅子の前へ突立つてゐた。彼女は戸の外から呼ばれた時に、起きて出ようとしてためらつて立つたところだつた。

ペテコートのレエスのある裾の方から高木の視線はマリの體の上を這つた。高木は手を延ばすと扉の脇にあつたスイ

ッチを突然ひねつた。電燈が一時に消えた。高木は半分間ほどぢつと突立つてゐたが、窓を透し入る空の明りで、白く浮き上つて幻のやうに突立つたマリの方へ亡靈を見た舞台のハムレットのやうに高木は進んで行つた……

その六

マリはいつまでも眠らなかつた。ヴヰナスを追はれて上總やの手につかまつてから殆んど一週間といふものは、をちをちと目蓋の合つたことさへないのに、ヒステリカルになつたマリはどうしても眠れなかつた。

マリはこみ上げて來て咽び泣いた。それからしく〳〵と泣きつゞけた。泣きながら考へた。來し方も、けふも、あすも、この夜のマリの心には眞暗であつた。

世の中のあぢきなさ。心細さ。、怖ろしさ。きたなさ。男といふものは今更に、どうしてからも淺ましいのだらう。自分を人間らしく取扱つてくれた男は今までに誰があるだらう。マリにはすぐにこの三日間の三人の男が先づ思ひ浮んだ。さん〴〵に折檻した上で眞裸にして、港の主人が絞め殺すやうな勢でマリにした事は何であつたか。上總やが事件の解決を親切さうに相談して最後にマリに要求した事は何であつたか。あんな奴らはどうでもいゝ。この人ばかりは自分にも心といふものがあることを知つてゐてくれるものと賴みにして、それならばこそ何もかも打明けて末まで相談をしてもらへると思ひ込んでゐた高木までが、男氣どころか、やつぱりあんな下心があつたかと思ふと、世の中全てがマリにはデイスイリユジヨンであつた。さう言へば、もうひとり自分のところへあのやうに不意に救の神さまのやうに現はれたあの黑い服裝の紳士は何だらう。港の女たちは、あの人を以前から不思議な客に思つてゐるらしかつた。あんな家へ踏み入つてもたゞビールを一二杯のむきりで、女を買ふでなく、たゞさま〴〵な彼女たちの生涯のことをも聞いては歸る。きつと小說家か、それでなけや社會主義者で、社會のさういふ裏面を見て步く人だらうと噂をしてゐたものだ

が、あの男だつてもどうせ何だか知れた者ではない。それにしても自分をあんなに慰め勇氣づけ、いろ〳〵の智惠をつけてくれてそのうへには金まで出してくれたのだが、それをさへ安心して有難いと思つていゝのだか、怖ろしいのだかわからない。あんな社會にゐればこそ男たちは自分を牝の獸のやうに思つて、さう取扱ふのだとはつきり氣がついたればこそ、拔け出さうとして、さてのがれるために自分のされたことを思へば、やつぱり自分は、かうして寢てゐる今夜でさへも淫賣婦ではないか。ジヨオヂを手もとに樂しく育てゝ、淸らかな世を暮さうなどとそれはやつぱり夢か。かうしていつまで生きる自分かは知らないが、これからの永い月日を、一たい、第一に、自分はさて何によつて生計を立てたらいゝのだ。レババのこと、三浦のこと、男にはもう懲々した。しかも女ひとり。この世のなかに突き出されて憂き世の浪がことごとく自分を目じるしにして打ち寄せてくるやうな氣がする。思へば、今までに見て來た澤山の女たちと同じやうに捨鉢になり切れない自分が一そう腹立しい………

昂奮し切つて、あれからこれ、それからこれと思ひつづけてゐたマリの考へは、いづれは女ごろの大した深い道理はなかつたけれども、そのやうな境涯に身を曝されながらなまなか人なみの心を持つてゐる爲めに切實であつた。マリは一種の情慾のやうに自分の兩手をしつかりと組み合せた。ふと、人が祈るといふのはこんな氣待だらうと思つた。さうして何か聲を出して言つてみやうかとさへ思つたのに、何だかそれも馬鹿げてゐるやうな氣持になつた。

マリはふと、どこかで水の雫が、ひつきりなしにポタリ、ポタリと落ちてゐるのを聞きつけた。耳ではそれをどこから來る何だらうと怪しみつづけながら、それと別に何の關聯があるでもなく自分の內臟の工合が突然目の底に映じられるやうな氣がして、しかもそれは今までのあらゆる男によつて穢れ汚されて自分でそんな者を自分の體內へ納めてゐることが我慢出來ないやうな氣がしたりして、こんな氣持が嵩じた時人は自分で死んでしまはうと思ふのぢやないか、などと

マリには思へた。……これこそ野獸のうめくやうな高聲が手のとゞきさうなところに聞える。男がどこにどうして横はつてゐるのか、マリはそれを見てみやうとも思はなかつた。彼の女はたゞ自分の腕のなかに自分の顏を埋めて、今はもう靜かに泣いてゐた。……あの不斷のポタリ、ポタリ。水のしたたりだが、雨だれでもない。家の内にこもつてひびく。何だらう闇そのもののなかに沁み入るやうにポタリ、ポタリ。そのテンポの早い水滴を耳ざはりにして怪しんでゐるうちに、マリはいつの間にか泣き寢入りに眠り墜ちて行つた。

……寒けがして高木は目が覺めた。ザラザラする手ざはりに氣がついてみると、高木は床の絨氈のうへに打倒れてゐる自分を見た。長椅子の脚に近い床の上にのさばつてゐる自分を、高木ははつきり知つた——あの長椅子のすぐ下だ。高木はむつくり起き直つた。今まで倒れてゐた暗紅色の土耳古絨氈のうへへがつくり座つたまま、大きな窓にしらじらと明けつつあるがらんとした自分の書室を高木は見まはした。

一たいおれはどれぐらい醉つてゐたらう。高木はそれを考へてゐた。おぼろげではあるが高木はすべてを順序立てて思ひ出すことが出來た。たゞ知らないのは絨氈の下へ寢てしまつたことだけである。——今、あんなにひどく暈してゐるのは、あの時水道の口から水を呑んだあとをふしだらに栓をして置いたからである。その程度には醉つてゐたのである。いや、その程度にしか醉つてはゐなかつたのである。毛布を出して來てやつたからこそマリは毛布をかけてゐる。住居の方に歸るにつけて、その出た後を閉めるやうにマリに言ひつけやうとして部屋へ再び這入つたことも知つてゐる。その時に見たマリの姿。それを見てひよつくり思ひ浮べたしやも屋に居た時のマリの座りざま。むつちりとはじけたやうにだらしなく膝をあけて、それは肉體的にデケイした女にだけ特有な崩れた形。厭はしいものだつた。その厭はしいと見たものが、醉つた時には、しかも思ひ出して、高木には不思議と却つて誘惑的であつた。いや、誘惑といふほ

どのものではない。ただ目の前に居る女を輕んずる――物の數とも思はないだけの氣持だつた。醉つた高木の眼にはマリはてもなく一個の賣笑婦だつた。

高木はいきなり突立つと、すぐ目の下にマリの寢姿が見えた。毛布を引きかついで、マリはしかしつつましく寢てゐた。

おい。起きないか。もう夜が明けてゐるんだ。おい。起きろ。

高木は毛布の上からマリの肩のあたりを大きな手でつかんだ、

起きないか。

荒々しい聲であつた。

ぱつちりと目を睜いてマリはすぐ情なく感じた。マリは高木の要求することを誤解したのだ。高木が夜明けにまた再び昨夜のやうなことを望むのだと思ひ込んでゐた。

しかし高木は叫んだ。

こら。起きないか。夜が明けてゐるんだ。起きて出て行つて貰はう。

高木は自分の聲があんまり大きいのに氣がついた。

――貴樣、目がさめてゐるんだらう。出て行け。………その前に言つて置くが、おれはゆうべ醉つぱらつてゐた。少しばかり酔ぱらつてゐた。俺は何もかも知つてゐるんだ。貴樣はなぜ、おれに手むかひをしなかつたのだ。淺ましい男だ。金をくれたかと思つて女を手ごめにするつもりかとなぜ、お前はさうは言はないのだ。おれは今も言ふとほり少しばかりしか醉つちやゐなかつたのだ。何とか言ひさへすれや、いかに酒の上とは言へ、おれは自分を反省することぐらゐは知つてゐるつもりだ。――自惚れちやいかんぜ。お前に惚れてゐて、おれが君に金をやつたと思つてゐるのか。おれ

は欲くもない金を持つてゐただけだ。捨ててしまふ代りにくれたやつたのだ。冗談に人をだまして取つた金だから、せめてはお前は使つたらその金も淸まるだらうと思ひついただけだ。――お前を口說くつもりなら、三百圓は高いんだ。お前が高が十五圓で賣つてゐた女ぢやないか。――おれに金を出させる時、お前は一たい何と言つた。三浦に捨てられてこんな拔殼のやうになつた心持で、どうして今更あんなつとめが出來るものかと言つたのは嘘か。金を貰へば身を任せるものときめてゐるな。淫賣根性だ。――初めからおれをそんなけちな男だと見てゐたのだな。ふむ。さう思つておれをひつかけたのだな……

無意識に大きな絨氈の外枠の模樣に沿うてぐる〳〵と步きながら、高木はそれだけの事を言つたが、頭がしびれたやうに鈍つてゐて、言葉がもつれて、思つてゐることは充分に言へないもどかしさだつた。それでも言つてしまふと氣がすんだ。高木は言ひ足した――

ともかくもおれはもう君とはつき合はない。直ぐ出て行つて貰ひたい。――もう夜は明けてゐるんだ。

宣告すると高木は、扉をあけてどこかへ出て行つてしまつた。

一つはまだ寢呆けてゐたのと、一つにはあまりに思ひ設けない言葉とに、マリはただぼんやりと聞いて居るうちに、高木の言はんとする意味がマリにははつきりと判つた。罵られながらマリは、不思議に限りない快さを覺えた。妙に光明的な氣持でさへあつた。高木の言つてゐることは正しくマリがゆうべあんなに思ひ歎いた心そのものの別の現れだといふことをマリは直覺したからである。罵られるのはただ自分が誤解されてゐるからだけだ。誤解はいつか解くことも出來るだらう。今は高木の氣持に逆はないやうにこの家を出て行かう。そう考へると、マリは寧ろいそ〳〵と起きて着物を着初めた。

畫室を出てしまつた高木は、水道の栓をしつかり閉め直しながら——いつも仕事をして手を洗ふ時にするやうに、水道栓の前にある小さな窓を通してまだ明け切らない空を意味もなく凝視してゐた。靜にひびく足音にふり返つて見ると、マリが出て行くところだつた。誰か閉めたのだか知らないが鎖ざされてある表入口の扉の金具を、マリはカチヤ〳〵音させながら開けた。それからふりかへつて、高木の方へ丁寧に頭をさげると、出て行つた。

さまざまなけはひで目のさめた伊那は、カーテンを隙けて、出て行つた人を見た。庭へ出るとそこでしばらく立つてゐたマリを、伊那は怪しみながら注意ぶかく見た。充分に明け放れない朝の樹の下で、マリの顏はただ白く着物はただ黑い。カソリツクの尼僧を伊那は聯想した。靜かで單純な構圖になつて、伊那はふとシヤバンスの繪を思つた。

高木が再び畫室へ這入つた時、所在なさと沈欝とで部屋のなかを片づけようとしてゐると、蓄音器の蓋の上に白く置かれたものがあるのに氣づいた。取り上げてみると、いつの間にそんなことをしたのであらう、高木がきのふ渡したうちの二十圓紙幣が五枚、それをくるんだ紙にはマリの手で、

先生ありがたうございます。これは餘分ですから御かへしいたします。先生は私を誤解してゐらつしやるのです。とさう鉛筆で書いてあつた。

高木は金を再びその紙ぎれのなかへくるむと、レコードの箱のなかへ投り込んだ。マリの手紙が高木に、自分がさつきどんなことを言つたかを思ひ返させた。高木は彼の心持に間違ひのなかつたことは確めたがどんなことを言つたか、言葉がおぼつかなかつたやうな氣がした。もし自分が素直な性格でさへあつたならばきつと、マリに詫びを述べたらうことを高木は知つてゐた。しかし高木は淫賣婦根性などと一口に言つた表現の非に就ては、別に氣づかなかつた。

身は種類の人々のさまざまな慾望のために生贄になつて、しかも人間が形づくつてゐるこの世の中ではやつぱり無

しでは濟まされないやうな一つの是非もない機關であつて、それに從事しながら、身を知つて自ら限りなく卑下してゐる。賣笑婦、これこそ我々の社會に現存するところの唯一の眞のクリストの徒ではないか――もし高木が思索するくせがあつてそれだけの事を考へるとか、或はさういふ考へ方を人から學んだとしたら、高木はあの時きつと「浮賣婦根性」などといふ言葉は使はなかつたらう。何故かといふのに、前述のやうな思想こそはただもし氣がつきさへすれば、高木のやうな性格の人物にはまさしくすぐに同感されていい考だからである。高木は一般の美術家氣質をうけて、小うるさくものを考へたりするやうな男ではなかつた上に、資産のある人に生れて貧乏といふものに就ては知らなかつた。さうしてただ大ざつぱに淫賣婦根性などと罵つたものの、高木があの時言ひたかつた氣持はどちらかと言へばそんな言葉では通じなかつた。ただあの一時に氣がついた時高木は自ら淺ましいと思ひ、マリをも淺ましいと思ひ、しかし氣の毒に思つた。それらの氣持がこんがらがつて、高木をへんに腹立しくしたのだ。さうしてそんな出まかせな言葉で、マリを惡罵させたものは、寧ろ高木の同情心であつた。

その七

マリを追放したその朝から一週間ほど過ぎた。

或る午后。訪問者をとりついだ伊那は、いつかの夜更けに杉田とし子に就て訪ねたことのある人を案内した。いつかの夜のとほりに黑い洋服を着てゐた。あの名告らなかつた紳士である。

彼は高木にむかつて、あの節拜借した三百圓をお返しするために來たのだと告げた。高木は自分自身に對して苦い心を抱きながら、その金はあの時からあの女にやつたつもりだから受取らないと言つた。その紳士は、しかし、高木にど

うしてもそれを受取つて貰はなければ、困ると言ひ張つた。彼等は同じ事を三四度も言ひ合つたあとで、高木はたうとう言つた。

あれや借したのでもなければ與へたのでもない。つまりあの金で、私はあの女を買つたやうなものだ――それも三百圓は入らなかつたやうです。あの女は百圓だけは殘して行つてありましたからね。

え？　何とおつしやるのです。

訪問者には高木の言葉の意味は通じないらしかつた。

高木はマリを追ひ出してしまつた一夜の一部始終をごく簡單にではあつたが、全くあけすけに話して聞かせた。――この男の情を自分はあんなにして犯したのであつたかも知れないと思ひながら。

高木のいふのを聞いて、相手はしばらく沈默してゐたが、重い唇を開いた。

それでは、杉田とし子はもうお宅にはゐないとおつしやるのですか。

さうです。行つた先も知らないのです。――僕はまた僕で、あなたがさうお尋ねにならなければあの女は、あなたのところへでもたよつて行つたものと思ふくらゐです。――失禮ですが、あなたはあの人の何なのです？

相手は容易に答へようとしなかつた。高木はそこで重ねて言つた。この前の晩に、この人が三浦のことを言つた時にも別だん注意をしなかつた事などを思ひ合したからである。

もしやあなたは三浦梨花のことに關係をなすつた辯護士の方で、それ以來あの女とは御知り合ひではないのですか。

三浦梨花？　と申しますと？　……なるほど杉田が一ころ一緒にゐたとかいふ男のことですか。いいえ。私はそんな人は存じません。

さう言つたきり彼はまた永いこと押し默つてしまつた。高木は彼が自分に對してそれほど惱つてゐるのだと思つたそれをこの溫和な男が何も言へないでゐるのではないだらうか。

しかし高木のその考へを裏切るやうに彼は言つた。――

ともかくも、三百圓、――ではない、二百圓だと仰言るなら二百圓、それだけでもどうぞお受取り下さいますまいか。私はそのつもりですつかり用意をして參つたのですから。あの節にいたしましても私は、六百圓なり七百圓なり、全部の金高を私の手からととのへる筈だつたのでございますから。都合でそれが出來ないばかりに、あなたにはそんなお金の御心配の外に、今伺へばそんなお氣持のお惡いやうなことまでおさせしてしまつたやうなわけで……

高木は思はず苦笑して言つた――氣持の惡い事をしたのは私自身のせいですよ。あなたにそれまであやまられたのぢや僕は挨拶に困つて了ふ。

相手の磊落な調子にこの妙な紳士も引き入れられながら、――ともかくもお金だけは是非ともお受取り下されなけや。

いや、いけません。その金だつても私はわざ〳〵あの女のために用意したのではないのです。高木はきつぱりと斷りながら、その三百圓なるものが美術半可通の支拂つた當然の税金で、しかし高木もその外の誰も受取るに相當した人はない金だといふことを相手にありのままに明してから、高木は言つた――さういふわけです。私としては、何一つあなたからそのお金を受取る理由を發見することは出來ないのです。それよりもですね、私はあの女の爲めにそのお金を、にそんなに受取らせたがつてゐるあなたが、あの女の何なのだか、あなたが金を受取れとおつしやればおつしやるど、それが知りたくなるのですよ。尤も、私のただの好奇心からですかね。また事情によつては或はお受取りする

本當かも知れない……

全く高木はこの相手の人物に對してひどく好奇的になつて來てゐた。

高木の氣輕るな調子に對しても、不可解な人物は永いこと沈默を固守した。高木は自分の面前にゐるその人の廣い色の白い額の上には汗がにじみ出て來たのを見た。この前の夜會つた時にはこの間からのうすら明のなかの立ばなしで顏も何もよくは見えなかつたが今つくぐ\と眺めるとこの人は一たいに柔かな女性的な男で、その話ぶりもまた不明瞭ではないがくどかつた。年とてもまだ三十一二にしかなるまい。高木がそんな觀察をしてゐた時であつた。彼はやつと顏を上げて、一應、高木の顏を驗すやうに見てから口をひらいた ─

あなたは何もかもそのままに打明けてお話し下さる。だから私も申し上げることに致しますが、これは私の一身上の秘密に屬しますことで、……さういふ前置きをして彼が高木に話し出したといふのは、まづかうなのである。──あれは、杉田とし子は、あれは實は私の妹なので、御察しのとほり父の違ふ妹なので、飾りなく申し述べますが、私の母は私を生むと間もなく私の父からそむいて私を遺したままで出て行つたのです。その後になつて私の生みの母から生れたのがとし子だといふことです。この事は今から五年前に母が臨終の時に、母の口から私が聞かされたので、母が申しますには、とし子はその當時伊太利公使館の書記をしてゐた人との間に生まれたのださうです。その書記は、或る時、本國政府から呼ばれたといふので、半年ほどすればかへると言つて出立したまま、その後二週間ほどすると留守をしてゐた母の手へ公使館から書きものが來て人に見て貰ふとそれはとし子の父の轉任辭令のうつしだ。──そんなものがあるかどうかは知りませんが、母はさう言ひました。母はつまりだまされたのです。それから後の母の生涯のことはどうぞ詳しくお聞き下さいますな。いや、私も知らないのです。私のそののちのことは知らないでくれと、母も私にさう申し

ただけでした。とし子を母はよその家へやつてしまつて、その家では年ごろになつたとし子を望まれるまゝに外人の妾にした樣子です。母が無くなつたのは、丁度そのころの事でした。母はとし子のことを言ひ出して、どうやらあの子はこの生みの母の身の上を、この世のなかでもう一度繰返すやうな氣がして仕方がない――さう言ひながら、母はとし子の行末を、兄としての私に托して死んで行つたのでした。私はその後かげながらとし子のとを見守つてゐたつもりです。あれが最初の男に捨てられて、それからどういふ事情であつたものかたうとう賣笑婦にまで身をおとしたと知つた時、それも前の男との間に子供まで持つてゐると聞いて、私は母の言つた言葉が一々實現されてくるやうな氣がしたのです。その時、あれを自分のそばに引取つて、歳もまだ若いし何とでも出來ると思つたのに、その時私はまだ部屋住みで、しかも父は母のことに就いてはどうやら終生消えないほどの不滿があるらしく、私が母の臨終に會つた時にさへ父にかくれて行つた程でしたから、その母のそんな子供などを、父は到底意地にも引き取らうなどとは言ふまいと思つて、私は方法もなしに二年を過したのです。とし子が新らしく夫のやうなものを持つてその社會から出たと聞いて、稍安心をしたのも、ほんの一ときでした。その男が竊盜罪の判決まで受けてゐると判つて、一さう心配をしたものです。その時には父はもう亡くなつてゐました。私の思ふとほりにしてよかつたのです。それが、私が或る良家から妻を迎えた丁度その當座で、私は自分の新らしい妻に、自分の本當の母の生涯やそんな妹があることを言ふのはまだ早いやうな氣がしたのです。そのうちにいい機がきつとあると思ひながら、さてそれを自分が引取つてどうすることが出來やうかなどと案じたりしてゐるうちに日が經つて、そこへあの地震でした。私はやはり横濱にゐたのです。家族も少かつたし、みんな無事であるにつけても、怖ろしい目に逢つて肉親の愛が一層强く感じられる最中に、とし子の行方も生き死も一時は全くわからなくなつてしまつてゐたものです。もし、とし子が死んでゐたならば、私は自分の名譽と幸福とを護る爲め

に妹一人の生涯を見殺にしたといふ氣持が、その時、初めて私に湧いたのです。……

港ホテルへマリを捜しに來る客があると上總やの言つたのは、出まかせかと思つたが形のない事ではなかつたのか。マリの行方をそんなに尋ねたといふのは、この紳士――マリの兄であつたのか――高木は、本でだけ見るものと思つてゐた小說が、身邊三尺のところにあることを感じた。

――さういふわけで私は、この間あなたにお目にかかつた時、妹を一時この方に預けて置きさへすれば大丈夫と安心してゐたのでございました。

お氣の毒でした。一向安心のならないところへお預けになつてゐたのですね。ハ、ハ、ハ。高木の言葉は犬儒主義（シニシズム）と情愛とが綯ひまぜになつてひびいた。高木は更に、愁然としてゐる杉田とし子の兄に言つた。――さうして、あの女とし子さんは上總やとの事件が解決したことに就てはあなたに何かたよりがないのですか。それよりも、あなたはとし子さんとあなたとの間柄をもうとし子さんにお話になつた事があるのですか。

いやそれはまだ何にも言はないのです。事件解決の事に就てはその翌々日の朝、ただこれだけの便りがあつたのです。

彼等が洋服のポケツトから取出して見せたのはただ一筆、お世話さまでした。有難う。といふ文句と同封してあの上總やが受取をして返して行つたマリの借用證とがあつた。高木は封筒のうらをかへして見た。それを見ながらあの紳士は氣拔けしたように言つた――

ところは何も書いてないのです。――その手紙が妻の目に入つて、それがきつかけに私はたうとうとし子のことを妻に打明けたのです。妻は泣いて、なぜ一日も早くその事を私に言つてはくれなかつたかと私を咎めてくれたのです。今

こそと思つて、こちらへとし子を迎へに上つたのでした。あれの居どころはもうちよつとわからないのですえね。

わけはありませんよ、それは、ジョオヂ——といふのは御存知でせうとし子さんの子供だが、その里へ行けば直ぐ知れるでせう。たしか目黒とは言つたが私は知らない。だが、上總やは知つてゐる。

マリ——杉田とし子の兄は、向島へ今から行くと言つて喜んで出た。

その翌日、高木宛の速達があつて、向島には上總やといふ周旋屋はあつても、事件解決候也のあとに記入したやうな所番地もなく、また主人の名も違ふ。やつと搜し當てたその上總やは全然この事件には何の心當りもないらしいとある。——高木はその落膽と絶望とを訴へたつもりらしい手紙を見て、しかし失望しない。三浦がたしかジョオヂの里を知つてゐる筈だ。速達の手紙を卷きながら高木は、在獄中の三浦に明日にで面會出來るかしらと考へた。

高木の驚いたのは寧ろ、名刺まで用意し、鑑札まで示したあの上總やが、跡かたもないもぐりであつたといふその事實である。

——終——

編輯だより

□期待された護憲内閣は期待以上の顔觸れで堂々と成立した。昔の二頭立時代のそれらしい大臣の貫祿もあり、そしてブルジョアの代表者として篏り役だ。しかし無産階級の味方になつてくれるには人品があまりにお上品だ。何處から見てもそれは有産階級らしい裕福た恰好だ。

□外相は外交文書にかけての第一人者との事だ。そんな末技の所有者が光榮ある我帝國の外相であることは大なる恥辱であらねばならぬ。

□雅量農相は自給自足、一朝有事を標語とす。井伊時代ぢやあるまいし、鎖國的、軍國的、思想の再燃は著しく榮えない。モウすこし本職に雅量が出て平和思想、世界思想を諒解せねば駄目だ。平和思想が基幹をなす經濟政策でなければ政友會は永久に憲政會の屬領たることは請合だ。まして政友會の政策が國際的に重きをなすことに於ておや。

□今回の政變が國民に齎らした一番の幸福は研究會の道樂小僧どもが、台閣から追拂はれたことだ。彼等を永久に我帝國の政治勢力から葬り去ることは我國の政治を正順に引戻すものだ。

□一番氣の毒なのは安達謙藏が酬ゐられずあることだ。彼は或意味から云へば加藤高明と比肩すべき憲政會の功臣だ。彼高明は官僚一點張りの偏狹な性格で、官僚出身者のみを偏愛するのは癪だが、何事も黨のため、國家の爲と云ふ名の下に忍ばねばなるまい。

□政友本黨も憲政會に準じて苦節十年と云ふ覺悟が必要だ。しかし彼等が十年間辛抱が出來るか否かは疑問であらう。とにかく「足輕黨」なぞと口穢く罵倒されて居るのは何が原因するのだろふ。此點を深省一番して立派な在野黨と成長して行くことを祈る。

□「足輕」などと毒づく政友會は、或は山本内閣を擁護し、加藤友内閣を擁護した。そして犬養などは山本超然内閣の閣僚であり、憲政會は桂内閣の御用であつたのだから、自分の事を考へたらそうも云へた義理ぢやあるまい。

□合衆國から劣等國視せらるれば死を以て爭ひたくなる。それが眞の人間の情であらう。だから支那人にチヤンコロ鮮人にヨボなぞと蔑視して云ふものぢやない。斷じて口外するものぢやない。階級的觀念を胸に抱くものぢやない。人類は凡てが平等である。富豪と貧乏人――大臣と小使――胸裏に流るる人情――それから人間性のどこに變りがあらう。正しき血、純なる情を有する人が世に一番尊いことは忘れてはならない。そして何人に對しても寛大であることは尤も美しいことだ。

□七月號の「改造」は近來にない名作揃だ。論文では、福田長谷川櫛田が堂々の筆陣を張り創作欄では珍しく佐藤、廣津兩氏の百枚以上の長篇力作が載る。全く兩氏とも近來にない破天荒のことだ。廣津氏のは後篇が尚百枚餘もある。

□慕はしき農村の疲弊は玆に現實となつて痛ましい曝露を遂げた。愛知縣では地主が土地を持ち切れぬといつて政府へ献上したいといつてくるし、福島縣の如きは村役場に一錢の貯へなく、村税は不納、小學校に對し三四ケ月俸給不拂とんな悲慘なる現狀を呈するに至つた。卽ち。△河沼郡新鄕千里組合村(四五兩月)東白川郡高野、豊里、常豐、笹原(三四五三箇月)△田村郡瀬川、小泉、澤石、都路△西白河郡小野田(以上四五兩月)△相馬郡山上、[illegible]野組合、飯曾、石橋組合(五月)安達郡和木澤、旭、白岩、仁井田(四五兩月)といふ哀しい話だが、未報告の分を併すれば隨分多數に上るだろうし、それに鼻のつまる慘話が多いだろうと察せられる。

□本誌は思ふ所ありて「農民部」

を新設します。そして山本が主任として現下農村の行詰まれる切實の問題を緊急調査して何等かの計畫に出でたいと思ひます。以上の如き具體的事實乃至は農村に關する研究材料がありましたらどうか調査部まで知らして下さい。本社はその報告を社會へ訴す微衷の基礎といたしたい。

□我國も外は對米問題で行き詰り、内は農村の疲弊問題で全國的に、全民衆的に異常の憂慮を惹起させました。これから先きの責任は我々國民全體が負擔せなくてはなりませぬ。我々は此の大憂患に當面して聰明であり、勇斷であり、永遠の計畫に就かねばなりませぬ。すべての問題を後廻はしにしても積極的に農村の緊急對策のために巨額の負擔を辭せない覺悟が必要です。資本黨であり、商工黨である加藤内閣も、平常の主張を茲に轉換すべく警告する。

□日本では二度目の來朝者を驩迎せぬ風があるが、しかし詩人タゴールの來朝ではそうでもなかつた。富豪より學生に至るまで全階級總出動で赤熱の如く、白熱の如く歡呼した。しかしあまりに有產階級と老階級に持てすぎたやうでもあつた。今度來るときは澁澤さんと、日印協會とに無關係で、そして青年の爲めに來朝するとつく／＼述懷して歸國した。何を諷する詩人の一針ぞ。

□そして最後に彼は農村の美はしき人情、原始的なる自然を賞讃した。そこにのみ麗はしい精神文明が殘され、東洋精神が殘つてゐると喝破した。——自然に還れ——この一句はいつ聞いても懷しい。そしてタゴール氏は一日一詩といふ隨梅に十四詩を日本で作つた。それが本誌に寄稿されたのだ。

□アインスタイン全集と共に本社が多大の犧牲を拂つて努力中であつた大正大震火災誌は此程配本濟みになりました。未だ配達を受けられぬお方は直接本社發送部まで御申出で下さい。尙ほ殘部が少々ありますから希望者は會費を納めて戴けば分本してもよろしいです。終りに遲引しましたことを御詫します。

□穗積重遠氏の「離婚問題の研究」の如き長年月の努力を籠められた權威ある書を本社から出版して下さつた厚意を著者に謝すると共に、法曹家といはず何人の書架にも缺くべからざる必要書として推薦いたしましす。

□文人、畫家等によつてクローデル大使を記念すべき快著「ゆかり」も近々本社から美裝を凝らして出版されます。そして谷崎潤一郎著「痴人の愛」「潤一郎傑作選集」菊池寛著「信康母子」も近々出版されます。厨川白村全集は警醒社との共同出版として本年九月出版される。

□「改革されたる「女性改造」の評判が馬鹿にいいのは嬉しい。群馬縣なぞでは女教員達が全縣一致して購讀してくれる。智識階級唯一の高級雜誌として七月號なぞは發行早々賣切の盛況を呈した。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共 郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓卄錢	增大號共 郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾參年六月卄日　印刷納本
大正拾參年七月壹日　發行

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯發行兼印刷人　平田貫一郎

東京牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一
印刷所　秀英舍

（定價壹圓）

發行所　東京芝區愛宕下一ノ一
改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

大杉榮著

（コロタイプ寫眞版一葉及寫眞版六頁挿入）

定價一圓　送料十七錢

自叙傳

廿八版

一代の風雲兒大杉君の一生は、殊にその最後は劇的のものであつた。氏が尤も意を籠めたと稱さるゝ本書が、君の代表的作物であるばかりでなく、本書によりてのみ、氏の人格的全相を知り得べく、そして氏の生立がいかに革命家的雰圍氣に滿ち、そしてその作物が一個の創作としても恥しからぬ價値を有するは具眼者の均しく認識する所である。大正大震災の半面を劇的に強く彩つた大杉君、その大杉君の風貌は本書によりて躍如たるものがある。

本書には、氏の少年時代父母に圍まれたる寫眞を首めとして、中學時代その他なつかしい思ひ出の寫眞七葉を挿入しました。そして氏が上半身は裸體となりながら一生懸命に「勞働運動」の終刊號の論文をかきつゝある場面を望月桂氏がスケッチしたものを卷頭にコロタイプで出しました。

東京　改造社　振…八

法學博士 末弘嚴太郎著

嘘の効用

定價貳圓六拾錢 送料十九錢 四六判上製

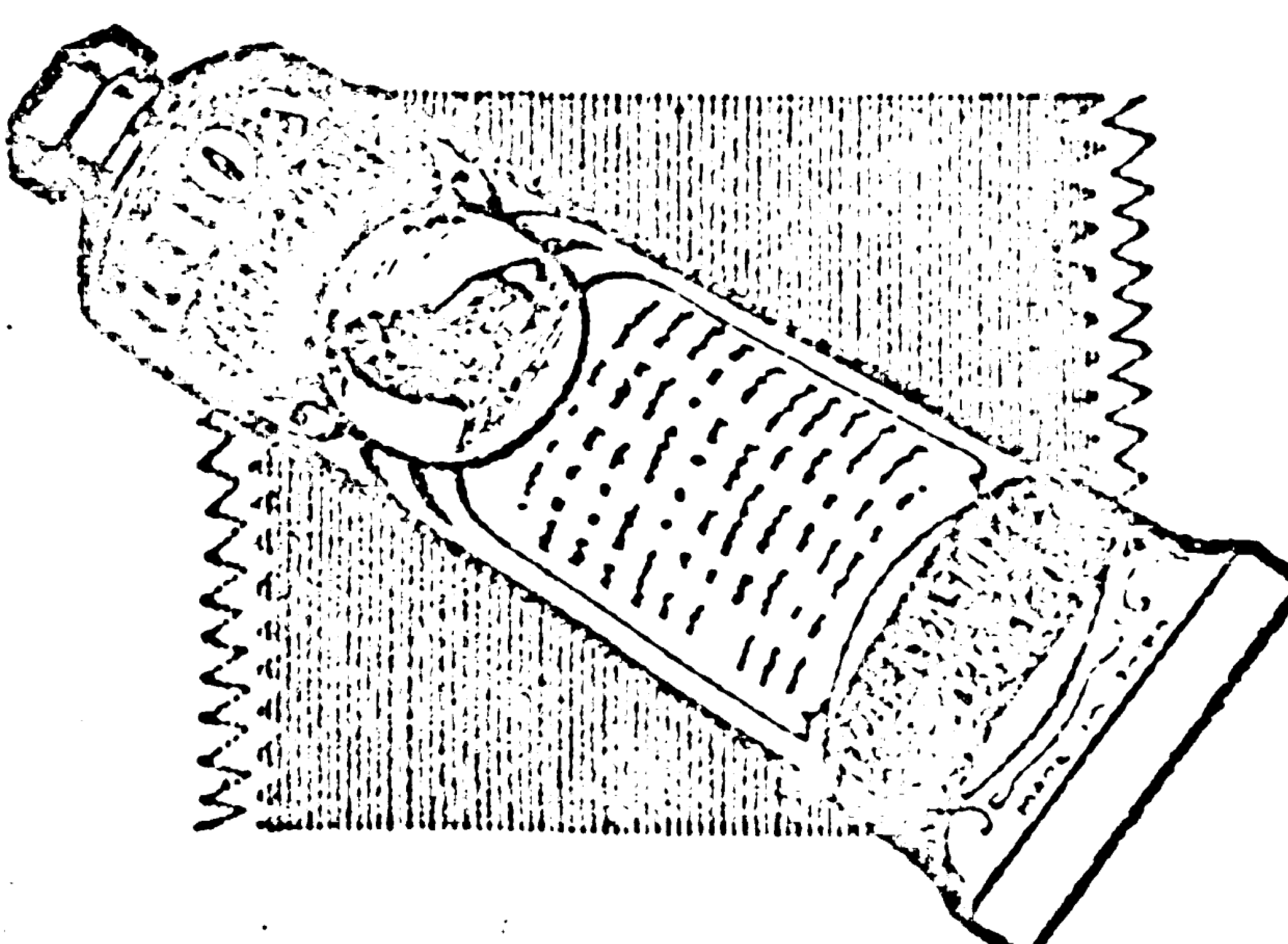
卅五版

私どもは本書は總ての階級、總ての國民によつて必讀さるべき「國民讀本」だと思ひます。國内の保守的分子が優勢な爲めに、法令が移りゆく社會人心の傾向を充分に追隨出來ず共處に「法令」と「社會」との間に溝渠が出來た場合、「法令」と「社會」とを調和せしむるものは唯一「嘘」あるのみです。そうした深い寓意と使命とを以つて生れた本書は、道徳の許した嘘、法律で保護した嘘、社會で許した嘘、親子の情をつなぐ嘘、大岡裁判に於る嘘の地位鬼子の裁判に於る嘘が社會生活に有効であるのを説いて現代人の反省を促し尚ほ「役人の頭」では法治國と官僚主義との關係を明かにし、その他過激法案、工場法、住宅問題、世界恒久平和の理想、陪審制度、婚姻と法律等を新しい法の立場から書かれた近來稀に見る有益な著書です、新しき法治國民の何人も再讀、三讀すべきものだと確く信じてゐます。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

ライオン
煉歯磨

―歯の衛生は子供の時から―



使つた時の
気持も、
使つた後の
気持も、
ほんたうにさわやかに
なつかしい
ライオン煉歯磨
チューブ入!
朝も晩も、きつと
之をお使ひ遊ばせ。

YEAR
... SHITBA, TOKIO

474 13

法學
博士

式株東